南紀徳川史

第五冊

南紀徳川史第五册總目錄

南紀徳川史卷之四十

名臣傳第一目次

南紀德川史卷之四十一

名臣傳第二目次

波之部

登之部

南紀德川史卷之四十二

名臣傳第三目次

遠之部

南紀德川史卷之四十三

名臣傳第四目次

遠之部（下）

和之部

南紀德川史卷之四十四

名臣傳第五目次

加之部

與之部

南紀德川史卷之四十五

名臣傳第六目次

曾之部

津之部

奈之部

南紀德川史卷之四十六

名臣傳第七目次

武之部

宇之部

乃之部

南紀德川史卷之四十八

名臣傳第九目次

也之部

末之部上

南紀德川史卷之四十九

名臣傳第十目次

南紀徳川史巻之四十

名臣傳

緒言

按ニ我藩臣ハ慶長八年十一月　龍祖始メテ水戸二十萬石御賜封ノ時　神祖三浦長門守為春ヲシテ代テ水戸ヲ鎮撫セシメラル時ニ水戸ノ諸士即チ元武田萬千代君ニ附属ノ臣ハ其儘　龍祖ヘ附従ヲ命セラレ翌慶長九年正月皆江戸ニ来テ　公ヘ正賀ス然レ𪜈記ニ曰ク其年十一月萬千代様ノ年寄共同御家中侍共御拂被成候云々トアレハ蓋シ此時御附属ヲ離レタルモノカ詳ナルハ得テ知リ難シ慶長十二年水野對馬守ヲ附ケサセラレ同人水戸ヘ赴任ノ際願ニヨリ其番下ノ士水野傳兵衛初十二人與力ト為テ水戸ヘ在勤トアリ又貞享年中ノ調書ニ神祖ヨリ初萬千代様ヘ御附其後　南龍院様ヘ御附ト見エ候分尾寄平左衛門初十七人トシテ其姓名ヲ記セリ慶長十五年駿遠三五十萬石ニ御移封ノ時ノ假名御譜略ニ曰ク尾州ハ下野守主（忠吉卿也）御遺跡ニテ諸臣迄モ其儘ニテ義直卿ニ従フ公ヘハ御隠居所ヲ譲給ヒテ諸臣ヲ直ニ御附被成云々トアリ彼此考察スレハ水戸御領知中ハ御幼年御入國ナク僅ニ事務官等被遣御左右ハ近侍ノ士員ニ止リシヲ爰ニ至テ安藤帯刀久野丹波守初　神祖幕下ノ將帥士卒百司ヲ御分附始メテ大藩ノ軍役整置セシメラレシナラン是即チ駿河御附人也而シテ　龍祖御自カラ徴辟シ給フ處ノ臣亦多シ是等皆共ニ従テ紀州ニ相移ル者ヲ通シテ駿河越筋目ト稱シ世々特典ノ優遇ヲ賜リ他後進ノ士ト大ニ異ル所アリシ也其全員ノ數ハ判然シ難シト雖モ駿河ヨリ御附

属御役々姓名録ニハ六百四十二人（御家老以下諸士小役人迄也同心坊主ハ此外トス又元和五年御切米帳ニヨレハ御家老初士分ノ数七百二十一人トス共ニ御家中職禄人名記ニ詳ナリ）ト記セリ後寛政十一年幕命ニヨリ御附人幷舊家ノ家譜幕府ヘ提出ノ時ハ二百六十七名トス（舜恭公同年ノ記ニ詳ナリ）恐ラク歴年ノ久シキ往々廢絶退藩等アツテ如此減數シタルカ其故今知ルヘカラス兎ニ角駿河越家ナル者ハ　兩祖特旨ノアル所且天下ノ俊傑或ハ忠死偉勳ノ子孫等ナレハ圖藩ノ名臣タルハ論ヲ待タスサレハ歴世其家名保護ノ點最モ厚ク將タ其家譜舊記ノ監査遺物傳器ノ保存サヘ時々戒飭ヲ加ヘラレ剰ヘ　將軍ノ臺聽ヲ辱ウス抑歴世ノ　君旨如此名臣ノ事蹟千載湮滅セシム可ラカサルニ在ル明ニシテ所謂三河武士ノ精神以テ我紀藩ノ國光ヲ輝シタル者亦夫レ此ノ輩上ニ在リ故ニ名臣傳ヲ編スル專ラ該幕府ヘ提出ノ者ニ基キ假令小吏徒卒ノ輕輩モ又強テ事歴ナク唯奉仕死沒ノ年月ニ止ル如キモ勉メテ蒐羅編述ス中尚漏ルヽ者アルハ其家譜記録全ク傳ハラサルカ故也

一御附人駿河越家ノ事ヲ記シタル舊記數種アリ互ニ異同ヲ免レス且父子名稱等混同シ加之内新宮與力高天神衆横須賀黨田邊與力ノ如キ自ツカラ黨流分レテ甲乙紛雜簡易之ヲ辨シ得ヘカラス祿制職制ノ部別ニ記スル所アリ以テ參照セハ此傳ノ記事見得テ明ナルヘシ

一龍祖ノ士ヲ愛セラルヽ食色ヨリ甚シ故ニ紀州御移封後モ世ノ英雄豪傑ヲ徵集セラルヽ擧テ數ヘカタク　清溪公以下世々新進ノ名士亦尠カラス其子孫兄弟分家新立本支世々相續シ宗族門流次第ニ繁殖故ニ近世ニ至テハ上下ノ士數ハ國初ノ幾數倍ニ至レリ（安政六年ノ比ニハ上下ノ士分三千二百六十九人維新後明治二年六月ノ調査ハ三千五百八十七人也共ニ禄制ノ部ニ詳也）是等ノ士傳悉ク編セシ事ハ到底及ヘキニ非ルノミナラス昌平ノ世功蹟ノ顯スヘキナク平易無事唯員ニ備フルモノ多ク隨テ記事傳聞ナシ故ニ紀州御就封以降ノ分ニ於テハ古今新舊ヲ論セス

苟モ其言行逸事ノ記錄存シ名聲相聞ユル者ニ止メ寸箋敗紙ノ筆記モ洩サス蒐集シ家譜アル者ハ總校照訂以テ傳記ヲ編ス詳略所由自ツカラ一ナラサル也

一藩臣父祖ニ續キ家名承繼ノ時々又ハ新進ノ徒ハ必ス其家譜ヲ（系譜ト通稱ス寛政以前ハ先祖由緒書トテフ）執政府へ提出スルノ制規ニシテ祖先ノ來歷本人ノ事蹟ヲ記スル最正確也故ニ編纂專ラ之ニ準據ス其體裁ハ總シテ本藩へ奉仕ノ者ヲ主トシ其父祖等神祖ニ奉仕乃至他方ニ在テノ事歷ハ一字低行ニ記入シ客位タラシム又主人ノ子孫其者ノ成行連綿繼承ノ始末モ同シク低行ニ略編シ一家斷續ノ概略ヲ判然見易カラシム

一該子孫成行ヲ記スル寛政度前後ニ止ルアリ又ハ近ク明治ニ至ルモアリ是維新紛擾ノ際執政府保存ノ家譜轉傳散逸ノモノアルト其前後代替ノ輩新家譜ヲ提出ニ不及シテ既ニ廢藩ニ至リタルトニテ今存在ノモノ新古一定セサルカ故也

一名臣傳ハ總シテ氏姓ノ和假名字ニ因テ類集區別ス（即チいろは分ナリ）是元和五年御切米帳元和御切米終身錄ノ體ニ從フ又各自點檢查索ニ至便ナルカ爲也

一傳記ノ項次ハ概ネ徵辟新進ノ年次乃至其人ノ卒年ノ前後ニ依ル又類ヲ以テ相從フモノアリ父子比倫門流相屬スル如キハ自ツカラ前後超等ノ者アリ或ハ新進卒年等考知シカタキモノハ此例ニ非サルアリ

一家譜中職名ヲ記スル舊稱アリ新名アリ譬へハ奉行ヲ御勘定奉行御藥込頭ヲ御廣敷御用人物頭ヲ御先手物頭足輕ヲ同心トスル如シ（職名改稱ノ事ハ職制ノ部ニ詳也）是寛政四年以降多ク幕府ノ職名ニ擬シ改正セラレシ

ヲ以テ爾後提出ノ家譜ハ舊稱ノモノ特ニ新稱ニ訂正セシムルノ制トナリシ故也儘舊稱ノモノアルハ寛政度前後ニ提出シタル分ニ據リタル也共ニ暫ク本書ノマヽヲ掲ケテ改訂セス

一本史第一卷緒言ニ既記ノ如ク故上田章ハ曩ニ漢文ノ名臣傳四卷ヲ撰ス今之ヲ各傳ノ首ニ冠ラシメ歷世記ト其體ヲ殊フス然レ圧章カ撰スル處通計百六十四人ニ止リ遺漏ナキ能ハス依テ之ヲ増補編修左ノ如ク通計千〇二十三人(一本九百七十八人)ノ傳記ヲ編修シ合計三十卷(一本十七卷)トナス

名臣傳	四百三十人	文學傳	百十二人(一本五十七人)
武術傳	百〇二人	方伎傳	百十六人
俊傑傳	二十三人(一本二十五人)	孝子傳	百八十一人
烈女傳	十六人	高僧傳	四十三人

一學術技藝ノ士傳上田章ハ之ヲ名臣傳ニ入ル今特ニ文武ノ二傳ニ區分スルハ從來ノ制此輩多クハ其道藝ヲ世襲シ所謂家業ト稱シ師範家トス故ニ道藝ニ依テ類別ヲ當トシ點査通覽亦便ナルカ爲也傳次ハ概ネ卒年ノ前後ニ從フ

一方伎名人俊傑孝子烈婦高僧ノ輩出ハ德化ノ產物國華ノ開發也故ニ此類元和御入國以後ニ係ルノ傳記ヲ編シ末ニ揭クル莫クハ以テ我德川史ニ完備ヲ欲スル也唯歷年ノ久ト見聞ノ狹隘遺漏亦多カランヲ懼ル

明治三十一年十二月　　堀内信誌

南紀徳川史卷之四十

名臣傳第一

今村康家 市兵衛

今村康家、系出於陸奥家純、其先曰今村掃部頭家光、爲三河今村城主、領五萬石、因以氏焉、曾祖曰掃部家方、祖父曰彦兵衛家持、皆仕東照公、康家爲近侍被寵、嘗賜名康家、且附歌一首曰、忠登孝、不多津乃道波家曾加志我名乘於波、加閉志津久閉志 又嘗奉使於京師、 帝召見曰、關東武士亦能咏歌乎、康家立庭上直咏曰、武士乃忠登孝登於心加計歌與無人波以左山城乃京 帝深賞之、賜檜扇因以爲徽章、後屬公、子喜左衞門家知、襲家爲安藤直次部下移住田邊 今村系譜

家譜

今村市兵衛康家 今村市兵衛次家惣領 生國三河

曾祖父今村掃部家方ハ三州今村城主今村掃部頭家光長男掃部頭家春惣領ニテ　權現樣ヘ奉仕

一祖父彦兵衛家持　權現樣ヘ被　召出知行五百石被下置被　召出候節於御座之間菊一文字ノ御刀拜領仕候右御刀如何仕候哉只今ニテハ所持不仕候年月日不知

臺德院樣御附被　仰付候永祿六癸酉年月日不知參州於上和田　權現樣急々　御出馬之節御供之兵士出合不申宇都與五郎只一人御馬ニ奉付續テ奉追付候ハ本多平八郎彦兵衛其外ニモ三拾六騎都合三拾九騎御供仕一揆之者共安々御攻取被爲遊候病死年月日年齢共相知不申候

一父市兵衛次家　權現樣へ奉仕知行五百石被下置小牧御合戰之節一類諸共討死仕候年月日年齢共不詳

一家持二男次郎兵衛家實次家弟年月日不知濱松御陣之節味方原馬籠河ニテ討死仕候

一同三男次郎四郎家秋次家弟　權現樣へ被召出知行三百五拾石被下置小牧御合戰ニ鑓先之高名仕候右子孫今村角大夫ト申候由ニ候得共當時誰家トノ儀相知不申候

市兵衛康家儀

幼少ニテ甲州へ被捕追テ大須賀五郎左衛門康高ニ屬シ小田原陣之節相勤久留利へ國替被致候時横須賀ニ居殘關ヶ原御陣後大須賀出羽守忠吉横須賀へ初テ知入之節坂部三十郎渥美源五郎右兩人市兵衛宅へ被遣父子共被召出候被召出御役祿並年月日不詳

一年月日不知　權現樣駿河へ被爲遊御入候節御近習ニ被　召出相勤申候其節御名乘被下置候

御　歌

忠と孝ふたつの道は家そこのし我名乘をはこのへし付へし

右御歌被下置候故乍恐康家ト相改申候

一年月日不知　權現樣ヨリ御使ニ　內裏へ參上仕候節東之武士モ歌讀候哉ト被　仰候故康家庭上ニ罷在

武士の忠と孝とを心このあ歌よむ人はれさと山城の京

ト詠申候得ハ　帝御褒美檜扇ヲ被下置候夫ヨリ代々家之紋ト仕候

一年月日不知大須賀出羽守忠吉組付被　仰付息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊

原爲相續上州舘林へ被潰候節　權現樣思召ヲ以橫須賀黨過半御留置被爲遊此者共ハ度々骨折候
故御秘藏ニ被爲思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二丙辰年月日不知　南龍院樣へ被爲附安藤
帶刀直次相備被爲　仰付居成ニ遠州橫須賀ニ住居仕駿河御城番相勤申候
一元和五己未年八月十八日紀州へ御入國之節御供仕罷越相勤申候
一寛永二乙丑年六月十六日病死仕候　年齡不詳

喜左衞門家知　市兵衞康家惣領 生國三河

權現樣へ父市兵衞諸共被　召出知行百石被下置父同樣相勤申候
一元和五己未年八月十八日紀州へ御入國之御供仕知行御加增被成下二百石ニ被　仰付候
一同年月日不知　御意被爲遊候由ニテ安藤帶刀直次橫須賀組一統へ申聞候ハ御國ノ内田邊ハ大事之要地ニテ候間橫須賀ヨリ參候諸士之内小身者ヲ遣置候樣ニトノ御事ニ候然共御人差ハ無之間圖取ニテ相究可然候彼地ハ草深所故馬ヲ飼ヒ候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ氣儘ニ致シ活計候樣ニトノ儀ニ付則圖取仕相當候付田邊へ罷越同所ニ住居仕相勤申候
一承應元壬辰年十一月二十六日病死仕候　年齡不詳

以下代々二百石無相違田邊與力相續之處十二代喜左衞門家隆ニ至リ安政三辰年九月安藤家ヨリ田邊與力一同ノ身分ヲ改革臣節ヲ取ラシメントシタルヲ不當トシ服セズ遂ニ田邊ヲ立退浪人致候處文久三亥年四月廿三日歸參御切米四十石小十人小普請被仰付松坂御城番トナリ元治元子年四月廿日病死養子兵三郎家成へ跡目無相違被下以下役之上末座松坂御城番被　仰付タリ

一康家二男今村新之丞次家元和三巳年九月廿九日駿河ニテ被　召出同五未年八月十八日紀州ヘ御供知行二百石被下代々別家ニテ相續慶應三年ノ比權之丞家雅ト言フ

市川甚右衛門清長

七 市川系譜

市川清長 甚右衛門○按駿河分限帳、在御目付衆之列、祿六百五十石、

市川清長、其先出於甲斐秋山氏、父曰內膳亮清成、爲武田氏近習衆、天正中、東照公召而祿之、慶長六年歿、清長襲家、後屬公、賜祿六百五十石、嶋原之役、清長與長尾一在等、屬松平伊豆守戶田左門而赴焉、戰鬪有功、後屢轉職、增祿至千三百石、後伊豆守左門、皆思嶋原功、歲時書問不絕、寬文四年歿、年七十

家譜

市川甚右衛門清長 市川內膳亮惣領 生國甲斐

父內膳亮ハ實名不知 遠祖秋山太郎光朝子孫市川越前二男ニテ越前ハ武田信玄譜代之者ニテ太郎光朝以來秋山ヲ名乘候處甲州市川庄ニ住居仕家號市川ト相改申候右越前長男同苗大隅實名不知儀武田勝賴之供仕參州長篠合戰之節天正三亥年三月廿一日討死仕候

天正十壬午年八月日不知於甲州　權現樣ヘ被召出御役儀不知同年八月十七日同十一癸未年閏正月十四日本領之內ニテ都合二百六十二貫文此外ニ錢貳拾壹貫三百文被下置御朱印頂戴仕于今所持仕候

右御朱印寫兩通

甲州大賀分七拾貫文平塚分七貫文二條分十八貫文青沼分三十五貫文等ノ事右本領之由言上之間所宛行不可有相違者守此旨可抽戰忠之狀如件

天正十年八月十七日　御判

安信善丸奉之

市川内膳殿

甲州大賀分七拾貫文平塚分七貫文二條分貳拾貫文青沼之内三拾五貫文此外夫錢廿壹貫三百文之事

右爲本領之間如前之不可有相違候狀如件

天正十一年閏正月十四日　御朱印

市川内膳亮殿

慶長六辛丑年十二月八日病死仕候　年齡不詳

一慶長七壬寅年月日不知父内膳亮爲跡目知行五百石無相違被下置御役儀不知其後年月日不知南龍院様へ御附被遊候

一元和五己未年八月御入國之節御供ニテ罷越申候

一同六庚申年月日不知知行六百五十石被下置候

一寛永十五戊寅年九州嶋原一揆之節松平伊豆守殿戸田左門殿差添嶋原表へ罷越二月廿七日本丸水之手須戸口へ二之丸ヨリ引取候敵二三十騎モ有之所へ着候テ敵貳人鑓付其後左股鐡炮ニテ打拔レ倒候處石ニテ殊之外打レ甚右衞門者共續候テ引退少岸有之所へ引込罷在候右働之場所細川越中守殿

內野田喜三郎飯田次郎右衛門ト申者證人ニテ御座候嶋原平治後モ伊豆守殿左門殿懇切ニ音信仕候

右兩所ヨリ之書狀等モ于今所持仕候

一寬永十七庚辰年月日不知御加增被成下千石被下置候 御役不知

一明曆元乙未年月日不知御加增被成下千三百石被下置御城代相勤申候御役替之年月相知不申候

一寬文四甲辰年八月四日病死仕候 于時七十七歲

清長嫡子甚五左衛門後甚右衛門清元父之跡目千三百石無相違被下已下代々相續重職奉仕七代甚右衛門清寅七百石大御番頭格御用人ニテ文化十一戌年七月病死嫡子甚之助清績跡目被　仰付

一淸長二男甚之助又甚五左衛門淸親　南龍院樣ヘ被召出御小姓被仰付後累進千石　長福樣御傅役之處正德六申年四月　有德院樣御供ニテ公儀ヘ罷越諸大夫被仰付伊賀守ト稱シ子孫相續文化十一戌年之比市川肥後守淸素家タリ

市川門左衛門

市川門左衛門

同　門大夫

家　譜

市川門左衛門 實名不知 門左衛門惣領初名不知生國三河

曾祖父門八郎 實名不知 廣忠樣ヘ奉仕武功有之門八郎之名ヲ被下置後 年月日不知 病死

祖父門八郎 實名不知 權現樣ヘ奉仕知行御役儀共不知

父　門左衛門　　權現樣ヘ奉仕家督年月知行御役儀共不知　後大須賀五郎左衛門康高ヘ御預ケ被遊年月日不知

父家督被　仰付候

年月日御役儀共不知　　權現樣ヘ奉仕年月日不知

南龍院樣ヘ御附被遊知行貳百五拾石被下置

元和五未年八月紀州ヘ御供相勤御役不知寛文四甲辰年八月二日病死年齡不詳

惣領門左衛門實名不知寛文四甲辰年月日不知父爲跡目知行貳百五拾石無相違被下大番被　仰付後大番組頭被　仰付元祿七甲戌年六月廿三日病死以下代々相續四代ハ門八郎五代ハ安左衛門ト稱シ餘ハ代々門左衛門ト稱ス七代門左衛門文化十五戊寅年正月廿日五拾石大御番ニテ隱居養子主馬忠武家督無相違相續ス

別　家

市川門大夫實名不知　初代門左衛門弟

南龍院樣ヘ新規被　召出橫須賀黨ニテ御供番大御番與頭御目付等ニ歷仕ト雖モ家譜傳ハラス元和御切米帳終身錄等ニモ記スル處ナク年歷死歿等之事得テ知ルベカラス唯武術談ニ依テ其爲人ヲ詳ニスヘシ

市川門大夫按駿河分限帳、有市川門左衛門者、在大番衆之列祿貳百石、即門大夫兄也、門大夫則開家祿三百石

芝田正武稱四郎兵衛、按駿河分限帳、在大小姓衆之列、祿貳百五十石、按家譜祿四百石　嘗祗役江戶而歸、一日訪市川氏、延入坐定、未叙寒暄、門大夫即問曰、江戶謂君公何、正武曰、嘖々有美聲、於三親藩最稱公、門大夫喜見於色、曰幸甚矣、談始及他　正武

服其純篤、時有一士人會座者、後以之語其子曰、當日予聞其對話、不察門大夫爲何心、今而思之、知其愛君之眞情也、爲人臣者、豈不當如是邪、因潸然涙下云、龍之稜威以下皆同

門大夫之爲供番也、其直所、有作誹謗書者、而莫知其主名、公聞而惡之、命三浦爲時糺問之、於是同僚、如三浦氏作誓文以爲證、門大夫亦往、爲時使之作誓文、門大夫曰、予心既明白、何須誓文、爲時曰、公命也、子欲違命乎、門大夫曰、既無作誓文之理、不能枉意爲之、抑同僚之爲之、予所不解、顧必苟免者耳、謂之瀆神、予不從苟免者以瀆神、若以予爲作誹謗書乎、宜以法處之、若夫作誓文雖重得罪、不忍爲之、辭色甚決、爲時不能强、乃具以白、公深然之、終不復問、其不受非理屈、大抵如是、

門大夫常謂人曰、予生仕明君、三有得焉、人問其說曰、使某仕暗君乎、其可屠腹者凡三焉、以仕明君之故皆免其罪、是予一世之大幸也、公亦愛其士氣、屢登用之、

按門大夫、劍槍弓銃諸技、皆極其奥旨、雖一時以其技鳴者、往々出其下云、而其平生持論、苟不自屈、蓋其爲人剛直有守、古之眞武士者矣、其技之精熟、詳載於小出理兵衛所錄武術談、長澤伴雄、載於其所編龍之稜威

武術談

一市川門大夫は横須賀黨の內也幼少の比より鎗合太刀打の術を好みて西鄉市郞左衞門を師として劍術を學はる其比西鄉氏最負の弟子あり此人年來稽古すといへとも市川氏に及はさりしか西鄉氏彼仁へは格別に懸意の樣子にて市川氏之勝利を歡はす稽古場の傍に澁紙を張置市川氏と彼仁仕合の時は每度彼仁斗澁紙の內へ招き密に格別の指南と見えたる由夫故市川氏不快に被存或時西鄉氏へ對し眞實執心にて日夜勵み稽古致候に如是隔心在ては面白無之由殊之外不足を被申稽古場へ不參之よし

一西郷氏市川氏仕合之事は西郷氏といまた師弟の契約無之以前市川氏は西郷氏之稽古場へ見物に被參打合抔被致候市川氏は勝れて拍子能器用なる事を西郷兼々稱美せられしか或とき市川氏へ對し吾等弟子に被成候はゝ名人に可被成候指南被請よし被申市川氏のいはく貴樣の指南受候に不及仕合ひ仕候とも負申間敷候只今仕合致し負候はゝ弟子に成可申とてしなひを取て立上り被申候故西郷氏もしなひ取て立向ひ被申候處に市川氏は西郷氏を八疊敷之隅の方へ追込み臥して裾々拂ひ被申候西郷氏はいつの間にかうしろの戸さしを踏まへ市川氏の上を飛越て後より抱き被申候夫より師弟の契約被致つるよし

市川氏其時西郷氏を追込被申候拍子臥して拂ひ被申候太刀の早さ又西郷氏戸さしをふまへ飛越られたる早わさ双方人間業とは見えさりし由高岡彌五右衛門直に見物之由談也

私に曰右彌五右衛門法身の後無境と申七拾九歳にて死去病苦ありつれとも臨終に及ひても弱氣を見せられさりしと西郷氏は後子細ありて浪人し井伊掃部殿へ奉公せられたる由

一市川門大夫は西郷氏と義絶の後木村彦左衛門か門弟に連りて日夜共に稽古の由その頃同門弟丹羽七郎兵衛高岡彌五右衛門鈴木九郎左衛門何れも懇望にて眞實心掛ての稽古の由或時丹羽十郎兵衛木村か宅へ來られ大に不興なる顏色にて市川氏へは如何なる大事を相傳候哉近頃は太刀の廻り早く相弟子の內中々及ひ申者無之候定て各別の御傳授故にて候半とせせきにせかれし體にて不足被申候其時木村氏各彼仁に及ひがたきと被申候事尤にて候我等頃日仕合致し候處如是候とて肩を脫き見せられしに肩先二の腕に當りししなひの跡に元黑く成て有つるを見てさしもの丹羽氏興をさま

されし由其座にて木村氏語られけるは兎角市川はたゞ者には無之候頃日仕合之後西郷氏傳授の大事を心懸色々工夫をいたし相手に成て見候得共中々勝べき術法無之候夫に付西郷氏より受取候卷物を市川氏へ渡し我等却て指南に預り候と申されつる由

一市川氏は年月過るに隨ひ鍛錬の功彌增にて其太刀早成拍子ならひなし每度卷わら射候かたはらにしなひを携へ射る矢卷藁に射付さる內に立たる拾本に六七本は必打落し被申つる由又相手に立たるときかりそめにちよと打出し申さるゝしなひ餘人強く打候よりは格別強く骨にこたへ暫時はしひれ候てしなひ取候事も難成何れも難儀之由

一渥美源五郎殿も西郷氏の門弟なりしが懇望の有樣西郷氏涙人以後奥儀を免るさる渥美氏生得勇猛にて氣かさ成る人なれは市川氏と仕合して勝負を試みんと兼て望まれけるか或時市川氏と參會の刻頻りに仕合を望まる市川氏のいはく貴體鬼神を相手に被成候ともとても吾等勝可申候左候へは只今迄鬼にても御勝候半と丈夫に御樂候持領の疵に成可申候必仕合被成候事は御無用也と被申渥美殿は是非々々勝負を可決とて立合被申候處に何之事なく三本迄續けて勝被申さしもの渥美殿詮方なく世には替りたる生物あり迚にが笑にて被歸たる由

一寺嶋武右衛門と申仁市川の門弟にて劔術の心かけ油斷なく此仁生得强力に候故並々之打物はやうぢ成迚長三尺餘にして重も厚く作り立候樣にと文珠重國に被申付候に好候通りに打立申候試被致候と拵出來候へとも餘り丈夫にて常體の人の差料には難成程の重き刀にて候寺嶋氏は庭へ出右の刀を拔放振廻さるゝにひう／＼と鳴候程太刀先さへ叉風に木の葉も動きし樣に見え江戸住居の節

劔術の指南被致仕合は望次第との事に候へ共終に望み來る者なかりし由此仁第一力量を賴み我慢深く氣かさ成る生付ゆゑ仕合口も手ひとく鬼也とも相手にして見度と常々廣言也或時市川氏宅へ寺嶋氏被參稽古の砌市川の曰く貴殿稽古の心得未前方にて候證據を見せ可申迚小しなひを取て立申され寺嶋氏打掛候太刀をひしと請留鍔せめにして押付られしに寺嶋氏動き申事ならず其上にて心得指南被致候由

私曰 其頃市川氏病氣にて身體共に不自由に候故立合ひ被申候時は側にて被召仕ける者後より抱へ夫を力に立上らし程の事に候得共寺嶋氏太刀をひしと合候ては抱候にも不及よし

一市川氏は榎原文五左衞門を師としてかぎ鎗を稽古有りしが鍛錬の儀は勝れて自得を得らるその頃戸塚五左衞門と申仁大嶋伴六門弟にて心掛深く懇望に依て卒に一流の奥儀を極め門弟中も多く近年戸塚流と稱す或時戸塚氏は市川氏と參會之刻藝術の議論有しが戸塚氏は直鎗市川氏はかぎ鎗にて仕合せられけれとも戸塚氏の鎗市川氏の鎗にからまれ卒に當る事なかりし由亦戸塚氏鎗の入身の工夫にて太刀にてかぶり込候事を鍛錬せられ市川氏と仕合をせられしか共始終かぶり込被申候事ならざりし由餘人は打出す所にてかぶり込まれ候市川氏は被りこまんとせらるゝ間を打て勝被申つる由委細は書記しがたき事也直に見て興の覺たる事何れも我を折被申事隱なし

一丹羽久左衞門は田宮三之助が門弟にて執心深く稽古懈怠なく候故田宮氏奇特に被存餘人よりは懇々指南せられしかは門弟の內にては勝れて見えられたるよし夫故少し自慢心にて市川氏へ參會の刻藝術の物語有り市川氏の曰御自分いかに稽古候迚も我等所にてはぬかせ申間敷と申され丹羽氏は兎角拔候半と被申市川氏其儀ならは拔候て見られよとて丹羽氏の前につくはひ被居けるか丹羽

氏刀に手を懸扱候半と被致候へ共則手にて柄を押へ又御免とて足を出し踏留られ抔して一度も扱放し申事成申さす候抜群の早業と申も愚成事と渥美源五郎殿にて會談の刻丹羽氏物語を聞て一座の衆我折被申候渥美殿左なき樣にて可有之候前方市川氏と仕合不致前は鬼神にても勝可申と楽みに思ひけるに扨々むごき目に逢たりと雜談被成候由

一市川氏曰兵器を選み候は武道の爲には如何也藝術に闇き故也子細は道具は長くても短くても重くても輕くてもその外如何樣の道具にても有合道具を取合利を得ずしては藝術の甲斐なし

一市川氏は心利て身の輕き事は餘人にすぐれたとへば田宮流一ッ目の如く扱放し候手の内へ自由に飛込申候尤初のほどは腰膝抔に刀當り候へ共鍛錬の後は輕我に當り候事もなかりつる由身輕くして拍子能候故木鎗木長刀にて横拂ひして懸り候をは間を知て飛違へられしに身に當る事なかりし由又は三間程の堀溝などは手鎗をつゝはりはね越るゝ事殊に得られ候尤自由に見え申候また塀抔越さるゝを見候に何の苦もなき仕合餘人は中々及ひもなき事にて候その頃鹽濱へ出面々走りくら飛くらはやり申候市川氏は走り飛に三間半程は毎度飛被申候餘人は大かた二間半二間四尺程飛越られたるも多は見不申候又塀或は立家の壁の根四五寸通よけて水溜り有之處一間半二間斗の間を走り被申候に足をぬらされし事無之候世上にては壁の根迄水溜り有之處を壁を横にふまへて走られ候樣に物語被致候衆も有之候或とき客有之五六人前の膳をならへ置き申候其折ふし雜犬に追はれ殊之外鳴騷き申候その時市川氏は並へ候膳の脇に居られけるが其儘膳の上を安々と飛越めん棒にて犬を打殺し被申つる由かりそめの事も拍子きゝ候事如斯

一吉田金平談に曰　若き時水練を好みて後には餘人之難成きと申所作も苦にならず心易いたし候市川氏我等か水練を好み候を聞かれいた飛ひと申事もなり候哉と申さるゝよし及承市川氏へ參りいた飛とは如何樣成事と尋候へば市川氏返答にいた飛とは廻しの結ひ見え候程に水をはなれ飛候事の由被申候を承り其後稽古仕大方に飛習ひ候よし市川氏川へ被出候時分迄は左樣に自由成事を被致候衆曾て無之と相聞え候いた飛を初められしも市川氏之作意と存る由これも吉田氏之談也

木村氏談に曰　吉田氏殊の外の水練にて立をよきなとは座敷の上を餘人歩き候位にゆるやかに見えたるよし

一市川氏或とき渥美源五郎殿へ見舞折節堺の鐵炮張り參り合候市川氏鐵炮張りに向ひて鐵炮目當は何の爲に付候哉と被申鐵炮張返答に見當は鐵炮の眼にて候見當なく候ては中り申物にては無之候と申市川氏手前さへ極め候はゝ見當はいらぬもの也と被申鐵炮張は見當なくては用に立不申候若見當なしに御中候はゝ此鐵炮を進上可仕候と申はり、せり合申候市川氏然らは證據を見すへきとて見當にかゝはり不申目當を打被申候にはづれ候事なく平人の見當ためにて打候も難及所作ゆゑ鐵炮張もあきれ果最前過言の段御免し候樣にと手をもみて詫ける由

一市川氏鐵炮を修練の後は姫瓜に星を付糸にて釣り糸によりをかけ放ち候へは廻り候内に十放の内六ツ七ツは星を打申され候事度々也何れも能存候事にて候又一尺の角に九曜日を書立置候て初は廻りの八ツを打仕廻に中の星を物の見事に打拔被申候是又かくれなき事にて候古き衆の物語に其比野々山七左衞門小笠原作左衞門は鐵炮の上手也其時分玉かけの鐵炮せり合流行申候市川氏野々山氏小笠原氏言合せて被參候へは每度大勝にて玉をかますに入荷はせて被歸候事度々の由近年まて大かた聞傳へて物語也

一市川氏は射術をも鍛錬被致後中風を煩ひ被申總體不自由に候得共五寸の的ははづれ不申候由又馬

藝をも鍛錬有て餘人の難及所作共有之つるよし古き人々之噂也

一市川氏野々山七左衞門丹羽金十郎同道にて有馬へ湯治被致候折節身の長六尺餘りに其太さ間中口を通り候にはゞかり候程に見えたる男是も入湯の體に見え候故亭主を呼て何者ぞと尋られけるに西國の關取明石團兵衞と申者入湯の爲に參り候と云三人の衆逗留の内徒然たるへきと案したるに幸の儀也とて淋しき時は明石を呼に遣し國々の相撲の物語を聞て慰れけるか或時明石參りたる時丹羽氏明石に向ひ市川氏を指しあの仁と一番所望との事也明石はせゝら笑ひ各樣相撲御好被成候ても御慰にて候家業に致候拙者共とは如何と更に請合不申候時市川氏さらは一番相手に可成迚裸體に成被出候故明石もはたかに成て我等に何迚御こたへ可被成やと申なから手合いたし立向ひ候所に市川氏得ものゝ越後ひねりと申す手にてひねられしに二重に成市川氏が立て被居し足元へ倒れ起さまに市川氏の顏をつく〳〵と見て横手を打御自分さまは人間にては有間敷候西國方に修行致し關取致し候者をヶ樣に御勝候事は是非を申に不及とて驚入り申候市川氏一番相撲にては勝負知れ不申候今一番取候へと有し時御自分樣御身拍子萬人に勝れ申候へは中々叶ひ申間敷候へ共御相手に被成下候へと又立合申候所にまた同し手にて勝被申候初は明石廣言いたし候處に手にも附す勝被申候故兩人の衆心能く被存候由

但し明石力業の事は野々山氏丹羽氏の直談を聞て爰に記す扨て兩人の衆明石に方業所望被致候へは旅宿の表にて米六俵を三俵づゝ分候て俵口を棒にて突通し荷ひ候樣にいたし置候を居なから肩を入立上り棒を一方の手へ乘せ差上候事五六度に及ひ候其外餘人の及ひも無之力業色々致

し亦四斗俵を一方の手へのせ一間半二間程つゝ手先にて例上け玉に取候事平人の手鞠をこなすが如く見えたるよし名擧なる事を見よとて諸國より參りたる入湯の者共表に集り立圍て見物致しとよみを作り人間業にては無之悉皆鬼の仕業と肝を潰し候由市川氏相撲ヶ鍛錬いたされたる故明石にも何の事なく勝被申候又他國より參候關の玉虫などゝ申者勝れたる上手に候へ共奇妙に勝申されたる由古き衆の物語也

一戸田彌大夫と申仁は若かりし時生得相撲好きにて嗜候に相撲稽古の衆中又は輕き者共之中にも相撲を好み候者とは戸田氏每々立合被申候へ共勝候者無之殊に關口八郎左衞門は別て相撲上手にて某は家傳なれは申に不及相撲は押出し自慢なりと申されたる程の事に候へ共戸田氏には中々得勝被申さりし由年月過て戸田氏物語に市川氏は名譽奇拔なる人と存候其時分は彼仁中年過られたる頃なれども勝候者無之と聞及我等は年盛にて努々負申間敷とおもひ所望して相手に成たるに慥に勝たるとおもひたる相撲に續けて屓申候には我慢を止め稽古の爲とおもひ度々相手に成工夫して見候に正敷勝候と思ひ候時負くるは市川氏は土俵きはまて體を殺されしか今少しと思ふ間に體俄に生かへりし樣に覺えて中々勝候事成り不申候其外奇妙奇代なる手組言葉にも述かたく候或は四ッ手抔に成り〆付られ身のはたらきを失ひ候樣になり候心悉皆藤かつら抔にからまれしめつけられ候心もちといふへきなり色々と思案して見候ほと勝て見へきと存る心當のなき人々の物語也

一市川氏四手押被致候に相手になりこたへ候事成り不申いつれも押負候よしその頃柴田四郎兵衞身力有之別て强く殊に關口柔心門弟にて勵被申候付稽古場へ無懈怠出られ候或とき稽古場へ被參相

弟子中と參會の處に面々物語に市川氏四ッ手押强く相手に成こたへ候事ならす候誰彼も押負候由を芝田氏被聞我等行て押付可來とて其座より直に市川氏へゆかる暫くして被戻候に付面々勝負如何にと口々に尋らる芝田氏の曰あのをやち苦もなく押付候半とおもひ押合候て見候處存候とは格別にて中々及ひも無之事とて我を折被申つる其時分市川氏は年增にて衰へ見え芝田氏は年盛の由

私曰市川氏は廿三歲かさなり

一市川氏諸藝好まるゝを知て關口柔心の藝術名譽成身有て凡人の業にあらす指南を請られよと勸めらる市川氏返答に柔心の業には體を動かさすして勝に術有之哉と尋らる彼仁左にあらず體を動してての勝利なりしといはる市川氏體を動かしては我等も負間敷候左候へは弟子に成り候に不及候と被申つるよし關口氏の立派はやわらと申候市川氏の工夫の身は子はみと名付られつる由

但し何れの藝に達し候人にても外へ向ふてはいまたならすと申さる關口氏は今名人々々と申人世に多しその名人とち仕合させ候はゝ一人に成るへしと申さる其壹人とは自身指て押出しての廣言也と云々

一渥美源五郎殿福岡太郎八殿を招請其節市川門太夫丹羽金十郎野々山七左衛門金澤彌右衛門なと被參夕飯過候て後渥美氏福岡氏之中小姓步行の者抔しなひ打仕候を何も見物にて候其頃八百屋嘉兵衛と申者町人ながら氣かさものにて劔術柔抔心掛申候福岡氏渥美氏など別て氣に入り其日も勝手に居たりしか表にしなひ打有之を聞付堪へ兼て罷出私も可仕迚中小姓徒の者共の相手になりたゝき合申候元來むてつはち成生付がい成者故大方叩き付候由時に一座の衆市川氏を指してあの人と

しなひ打いたし勝候はゝ褒美可遣と被申嘉兵衞元よりがまん者なれは長きしなひさへ御渡し候はゝ成程勝候て懸御目可申と受合市川氏は聞れぬ樣子にてにこ〳〵と笑ひ居られけるか列座の衆へ只今以前の古川氏が眞似いたし見せ可申とて嘉兵衞を呼て何にても望み成物を持候へと被申けれは二尺七八寸も有之長しなひを取り庭へ出申候市川氏さらは虫こなし可致とて一尺斗の小しなひの鍔の所を持こし眞中を握り其しなひ我等に少しにてもさへ候はゝ金壹歩褒美に取らせ可申候隨分精を出せとて立合被申候嘉兵衞長しなひを振廻しなぎ打にめつたむしやうに掛り候へ共市川氏は平生の顏色にて當りそうなは精出々とて件の小しなひにて嘉兵衞が太刀の變化に應してちよつちよとかこひ被申候あやまちにもかすり太刀一度も當り不申候嘉兵衞申候は金子ほしく存し何卒當り候て貰ひ可申と大汗に成樣にと仕候得共當りそふにも無御座候勿體なし〳〵とてしなひを捨て汗を拭ひ逃入候故何れも興に入り大笑ひ被致古人の古川氏劔術の奇妙は聞傳へのみ也併貴樣の太刀先には古川氏も及ひ申され間敷とて市川氏劔術の自由成事を稱美せられたるよし嘉兵衞市川氏へ立合申たる時誓言を以少しも用捨仕間敷ならは褒美を可遣と被申たる由市川氏小しなひ之眞中を握り居られしか上段の太刀は大かた柄にて留られ候亦下段の拂ひ太刀抔は飛越被申候此間大かた小半時斗のよし談也市川氏嘉兵衞か太刀をあしらひなから間合に依り嘉兵衞か鼻をつまみ又は耳を引抔せられ候時嘉兵衞かせき申たる顏付おかしかりつる由列座の衆いつれも物語り也と後年金澤彌右衞門直談也

一市川氏は身の輕き事は抜群にて大番所御椽の下御白洲より外の敷居を飛越て落椽之上成ぬめ敷居

へ飛上られし事隠なし又御番所の向石垣へ上られ候事目に見えさりし由そのころは重き衆中も左樣の座興被成候哉水野對馬守殿も市川氏の飛はれし所の御白洲より外の敷居の上へ飛上られ候にそつくりと音いたし候までにて殊之外輕く見へられ候よし渥美源五郎殿御申候由

一市川氏は慮外いたし候若黨なと行違ひにとらへて投け被申候に大かた息ははつみ候ほとに見えたる事度々の由戸田彌太夫談に若き時關口へ通ひ精出候節大勢の相弟子有之候へ共市川氏の如く無造作に嚴しく投たる仁は終に見不申との事にて候如是手際成事いか成拍子にて候哉思案不及儀と戸田氏度々稱美せられ物語也

一市川氏力量も勝れられしと申候へ共持下けの力業は餘り見及ひ不申候或は組合押合亦は引合なとの類は力の出られ樣格別に見え申候藝術の勝身と自から用ひられての勝身と別々に仕分けて見せられ候餘人は生得の力を十分に用ふる事ならす市川氏は藝術鍛錬の餘慶にて自力を十分に用ひられし故一人強く覺えたる由古き衆の物語也

私曰 市川氏舍兄門左衛門ハ無隱强力ニテ小キ網船ハ艫先ヘ肩ニ入カツキテ歩カレシ由

一市川氏は武術無比類鍛錬せられけれ共一流の掟を守らるゝ心有て藝にほこり仕合抔好まるゝ事はなかりし由元來嗜に諸藝を心掛け被申候處生れ付ての拍子きゝ故餘人の日數を重ね自得仕事をも不日功成て他に異なりしと其比の古き衆中後々迄物語也名譽成事は假初の遊藝抔も精出し稽古はなく候へ共打込て稽古被致候衆程には似せられ一夜切抔の音色は好み稽古致され候衆も不被及由不思議の人と申候

一芝田四郎兵衞江戸勤番明き和歌山へ到着之砌市川氏へ見廻る市川氏則座敷にて對面有しか芝田氏いまた一言も無之内に何と於江戸殿樣御沙汰は如何と尋らる芝田氏返答に御氣遣被成間敷候御三家樣方の御中にては殊に殿樣を重んし奉譽候のみ也と返答を被聞市川氏以ての外快然の氣色面に顯れ扨は安堵仕りたり迚世上の雜談に被及し由後に芝田氏稱美せられ候

或人若き時市川氏の座敷の次にて芝田氏市川氏の挨拶を聞たりその時分は何の辨もなく心も付かさりしか數年を經て後市川氏の胸中を察して忠心之心底一言に明白なる事を思ひて子息達へ落涙して物語有しと也

一市川氏御供番相勤られし時分在江戸の刻仲間小笠原三郎右衞門具足兜を着し常に秘藏せられし波平の刀を拔亂心の體にて二階に取籠られし事日來市川氏懇志たる故小笠原氏の若黨市川氏の御長屋へ來り主人亂心たる由告る折節市川氏寢所に休み被居けるか彼使を枕元へ呼胸首をとらへて自分の家來を呼て此者を我等歸る迄預け置候間面々番をいたし候へと被申付扨小笠原氏の御長屋へ行れしに最前告來り候趣に替らず家來なとは手に汗を握りたる體なり市川氏此分にして時刻延てはすまぬ事なりと少しも危ぶまれし氣色なくその儘二階へ上らる市川氏言葉を掛三郎右衞門是は何と召さるゝと言樣太刀下へ飛込みひしととられたる所へ家來抔もをひ〳〵駈付候市川氏被參さる前には相番衆の内駈付られしもの有之候へ共彼是と遲滯之處に市川氏は何の事なく事を捌き被申たる由此段も御耳に達し御譽被遊つる由

私曰　小笠原家來リシ時自分ノ家來ヘ預ケラレシ事意味深キヨシ

犬塚甚左衞門 按駿河分限帳在大小姓衆之列祿三百石

犬塚甚左衞門父曰又內初稱甚三郞姉川之役奮戰有功東照公深賞其功賜名又內又內邦讀復無也謂無復有此殊功也後又屢有功甚左衞門襲家屬公 犬塚系譜

家　譜

犬塚甚左衞門 實名不知　犬塚又內惣領實二男生國三河

犬塚之苗字家之紋桐ニ鳳凰ハ先祖從　白河法皇被下候旨申傳候

一祖父犬塚甚左衞門 初甚七郞後法近 ハ三州江原ニ居住　權現樣へ奉仕 被召出年月御役儀爲不知 永祿二己未年尾州大高城ニテ鎗合働有之同三庚申年織田信長之御先手被遊今川義元ト御一戰ノ時供奉仕尾州丸根城御責且三州熊子ニテ吉良義照ト御合戰ノ節モ供奉仕相勤又同年義照居城三州東條御責被遊候時相働敵壹人討取申候同七甲子於三州糟塚吉田方之兵トセリ合有之節敵貳人射倒申候 內壹人大登藤五郎ト申者ノヨシ 又 年月日不知 三州ヲウラト申所ノ堤ニテ石川久藏ト申物見武者ニ出合鑓ニテ突倒首取申候其後 年月日不詳 三州コマンバト申所ニテ岡崎三郞樣御小人鶴若ト申者ヲ切殺三郞樣御不興ニ付遠州大野鄕へ引込罷在三郞樣御逝去之後三州へ歸參仕候 卒年月日年齡共不詳

甚左衞門惣領犬塚八郞相州小田原ニテ大久保相模守殿ニ相勤子孫之儀相分不申候

甚左衞門二男犬塚甚七郞身分之儀相知不申候

甚左衞門四男犬塚吉平何レノ手ニ罷在候トノ儀不知遠州味方原ニテ討死仕候由申傳候

一父又內 名實不知　甚左衞門三男始甚三郞

權現樣へ奉仕 御役儀高不知 江州姉川御合戰之節供奉仕鎗付敵壹人討取申候其節手柄又内ト御呼被下御馬上ヨリ御手自瓜壹ツ被下置手負候間給候儀無用可仕旨蒙　上意御歸陣之後御加增 高知レス 被下置候遠州アマガクニ於テ城中ヨリ出候物見之者ヲ討取三拾貫之御加增被下置候遠州イロウ崎ニテ敵致武者楯候時鳥居彦右衛門ト兩人乘込貳人ツヽ切伏申候右之節ヨリ彦右衛門ニ御預被遊候小田原御合戰之節北條氏直成田方足輕大將スナマ惣左衛門ト申者ヲ討取關東岩付ノ城ニテ壹番乘高名夫ヨリ隱居曲輪ニテ岡野平兵衛ト鎗合仕候上州八方ニテ敵カマリノ時篠本八藏ト申者ト貳人敵ヲ討取相州ツヽ井城ニテ足輕大將野崎牛之助ト申者ヲ討取申候其外所々御陣之節ニ首尾能相働候 知行之御證文等如何仕候哉當時所持不仕候卒年月日年齢共不詳

又内長男犬塚作内　　權現樣へ奉仕部屋住ニテ病死仕候 御役儀並病死年月日不知

又内三男犬塚又左衛門身分之儀相知不申候

又内四男犬塚才兵衛松平隱岐守殿ニ相勤申候子孫之儀難相分候

權現樣へ奉仕 御役儀高不知 其後　　南龍院樣へ御附被遊 役儀不知 高三百石被下元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕慶安二己丑年十一月五日病死仕候 年齢不詳

甚左衛門惣領某 後甚左衛門 家督三百石無相違被下以下代々相續ノ内減祿寛政十午年幕府へ系譜提出之時ハ十代甚七郎昌辰廿五石御留守居番タリ十三代又内孚昌文政十三寅年十一月廿三日不埒之品有之御城下ヨリ拾里ノ外へ改易被仰付

一犬塚又内之先祖ハ甚左衛門ト言永祿三年ノ秋　　權現樣三州東條之城主吉良義照ヲ御攻被成候時

武功有リ亦同七年同國糟塚ニテ吉田ト御セリ合之折大登藤五郎ヲ討取リタリ其子七歳孫作内亦斥候之御役殊ニ勝レタリトノ御稱ニテ作内ヲ又内ト御改被遊候由其軍押ノ樣ヲ御自筆ニ御認メ被遊又内ヘ御渡被遊候其御筆亦左文字之太刀ヲ拜領シテ今ニ家藏セリ高祖ハ　後白河院ノ北面ナリ家ノ紋ハ院ヨリ賜フ所ナリ迚桐ニ鳳凰之丸ヲ附タリ　以上家譜採要

長澤伴雄云犬塚又内ハ予カ叔母聟ナリシカ叔母沒シテ後身上不埒之事アリテ改易被仰付タリ件ノ味方ケ原陣押之御筆ハ予カ本姓叔父吉岡形右衛門ヘ御預ケニ相成テ同家ニ傳タリ左文字ノ太刀ハ既ニ紛失セリ迚傳ハラス格別ノ名家ノ斷絶セルハイトモ遺憾ナル事ナリ此御筆ノタソモカシコク而フセナリヤイカテ又内ガ子孫召シ返サレテ此御筆ノ家ニ歸ヘル期チト明暮祈ラレテナン

伊藤吉重　又兵衛

伊藤吉重、初稱三太郎、父曰久兵衛某死於某役、吉重幼孤、公召爲近侍、年甫十二、賜祿貳百石、大坂役從焉、後爲大番頭大普請奉行、增祿至千石、寶永三年歿、伊藤系譜

家　　譜

伊藤又兵衛吉重　久兵衛惣領　初三太郎　　生國駿河

祖父惣左衛門ハ越前黄門卿ニ仕ヘ父久兵衛ハ　　權現樣ニ奉仕慶長五子年關ケ原御陣ニ御供討死仕

又兵衛三歳之時父久兵衛討死仕候ニ付御扶持方被下置六歳之時ヨリ

大御所樣南龍院樣御側ニテ御召仕被遊十三歳之時知行三百石被下置候披モ右御朱印頂戴仕所持候

處先年火災之節燒失仕候

一大坂御陣之節御小姓相勤罷在駿府ニ御殘シ置被遊候處御跡ヨリ罷越遠州見附ニテ御目見仕御借馬ニテ御供被仰付御懇之　上意有之大坂ヘ御着被遊候上爲御褒美御金十兩拜領仕候曁俣川御越被遊候節御供御人數多渡船難成候付大小之儘鑓ヲ持川ヲ越御供仕候ニ付　大御所樣南龍院樣ヨリ御挾箱之御小袖二ツ宛爲御褒美拜領仕御陣之節ハ　南龍院樣御側ニ罷在候年月日不知　御同所樣ヘ御附被遊元和五己未年紀州ヘ御入國之節知行五百石被下置御小姓ニテ御供仕罷越候

一萬治三庚未年七月十八日大番頭被仰付御加增三百石被下置候

一寛文四甲辰年八月十五日大普請奉行被仰付御加增被下置都合千石ニ被成下候其後奉願番外ニテ罷在候

一延寶三己卯年八月四日病死仕候　年齡不詳

吉重長男三大夫重堅部屋住ニテ病死ニ付嫡孫承祖傳十郞淸久ニ名跡被仰付知行五百石被下以後代々相續吉重ヨリ六代又兵衛郡命ハ三百石御先手物頭ニテ天保二卯年九月病死惣領三郞左衛門

……ス

岩手九左衛門信政

岩手信政　九左衛門

岩手信政、初稱助九郞、系出於新羅三郞源義光、世領甲斐山梨郡岩手鄕、因以氏焉、父曰能登守信盛、仕武田氏、爲藏奉行、（拔武德編年集成爲武田氏親族衆）武田氏亡、東照公召而祿之、信政初仕織田二七、及東照公入甲斐、亦召而祿之、屬水野重仲部下、及重仲屬公代撫水戶、請其部下十二人自從、信政在其中、從如水戶、及公移封

駿遠、以重仲治濱松城、從而移焉、公移封紀伊、命重仲治新宮城、遂亦從之、賜祿五百五十石、使世襲之、所謂新宮與力之一也　岩手系譜

家　譜

岩手九左衛門信政　岩手能登守信盛三男 初助九郎 生國甲斐

新羅三郎源義光ヨリ十八代武田刑部大輔信昌三男繩美四郎信安始テ岩手ト號ス嫡子能登守信盛事ハ武田家ニ所縁モ有之代々奉公仕甲州ノ内山梨郡岩手郷一圓ニ所領仕旗奉行相勤候武田家沒落後天正十年年　權現樣へ被召出本領二百貫被下置御朱印只今ニ所持仕候信盛嫡子岩手右衛門尉信景ハ甲州ニテ若死仕候故　御當家へ御奉公不仕候

信政十八之歲甲州沒落仕候ニ付浪人仕勢州織田三七ニ壹年餘奉公仕候然ル處　權現樣甲州へ御入國被爲成候刻信玄家來之者樣子ニヨリ可被　召出旨及承候ニ付織田家暇ヲ取甲州へ罷歸戸田三郎右衛門ヲ賴入御訴訟申上候處被爲聞召分本知半分被下置候御朱印只今ニ所持仕候後　權現樣御直之以　上意名九左衛門ト改申候

一慶長初之頃ハ水野對馬守番下ニテ駿州並城州伏見之御番等相勤申候然ル處慶長八卯年　南龍院樣へ常州水戸被爲進候處御幼少故暫ク御入國無御座其後同十二未年御人分有之

南龍院樣へ對馬守被遊御附後爲

御名代對馬守水戸へ被遣候節番下之內召連レ度旨依願

貳千石　水野傳兵衛　六百石　平岩助右衛門

五百五十石　岩手九左衛門
九百五十石　酒井掃部
三百石　油比甚太郎
三百石　宮川金八
貳百石　夏目彌十郎

三百石　夏見彌右衛門
四百石　鈴木七左衛門
貳百石　水野甚三郎
貳百石　粂吉十郎
貳百五十石　太田外記

右拾貳人對馬守與力相勤候樣被　仰付水戸へ罷越其後慶長十四酉年　南龍院樣へ駿州遠州東三河被爲進御國替之節對馬守一所ニ遠州濱松へ罷越元和五未年御入國之節出雲守ニ屬シ新宮へ罷越高五百五拾石被下同十子年正月廿八日病死 子時六拾歲

以下代々五百五拾石ヲ領シ新宮與力相續同所ニ在勤寛政十午年　幕府へ系譜提出之節ハ九代九左衛門信任ト云

九左衛門信政儀

秀康卿ヨリ御書ヲ以御羽織壹ツツヽ兩度被下右御書貳通子孫所持之由

井上甚右衛門

家　譜

井上甚右衛門貞重 河内守源賴信末流 井上作之右衛門重信惣領　生國三河

貞重儀ハ河内守源賴信三男乙葉三郎賴季男井上三郎滿實ヨリ數代經テ井上作之右衛門ニ東若年ヨ

リ爲武者修行信州ヨリ三州ヘ罷越長親公ニ仕其後櫻井家松平内膳正殿ニ仕度々軍功ヲ顯シ申候嫡子作之右衛門重信モ櫻井家ニ仕度々之戰忠有之祖甚右衛門貞重父重信共ニ櫻井家ニ仕家老職相勤陣中度々之走廻有之就中天正三、五月廿一日三州長篠ニテ　權現樣ト武田勝頼御對陣之節武田家ノ人數鳶巣山ニ差置候ニ付酒井左衛門尉忠次爲組頭被差遣候節櫻井家共ニ鳶巣山ニ於テ夜合戰有之候其節甚左衛門儀十九歳ニテ甲首壹ツ討取申候天正十二四月九日　權現樣長久手原小牧ニ於テ御合戰之節甲首壹ツ討取奉備　上覽候處合戰勝負無之以前早速敵之首致來之事御吉例之旨奉預御感重テ御褒美可被下置由難有　上意有之候同日森庄藏家老猪野治兵衛ト申者ヲ討取則太刀小手等分捕仕候右之場所ハ永井左近大夫池田勝入軒信輝ヲ討取被申候場ヘカケ付候テノ事ニ御座候

右太刀手今所持仕候

一櫻井家松平左馬允殿代不慮ニ被相果候其砌　權現樣ヨリ櫻井家老分ノ者共ハ別テ由緒有之者共ニテ候間壹人モ分散仕間敷旨　上意ニ付五ヶ年間御合刀被下置遠州濱松ニ罷在其後以　上意南龍院樣ヘ奉附則水野對馬守與力相勤候樣被　仰付知行三百石被下置候其後元和五己未年御入國ニ付新宮ヘ罷越申候

一年號月日不知奉願隱居惣領甚右衛門正重ヘ家督勤方共無相違被　仰付定心ト改ム

一寛永八辛未年十一月十日病死七拾九歳

以下代々新宮與力ニテ相續之處六代甚右衛門享保十五戌年十二月子細有テ家斷絶同十六年四月六日水野大炊頭取成ヲ以四代甚右衛門重純三男庄藏富章斷絶跡相續知行勤方共無相違被　仰付

享和元酉年比ハ九代庄藏辰一ト云

井上佐大夫

井上佐大夫良高　生國紀伊

家　譜

先祖ハ加藤肥後守清正之浪人之内ニテ苗字加藤名乘候處井上ト改ム本國攝津ニ住居仕候由申傳候

年月日不知於駿河　南龍院樣へ被　召出知行五百石被　下置御普請奉行被　仰付元和五年御入國之節紀州へ御供仕寛永八未年八月廿二日病死 七拾三歲

惣領仁右衛門良愛跡目五百石無相違被下大御番以下代々相續七代仁右衛門良直御切米六拾石御留居番ニテ天保十一子年十一月病死惣領千之助良知跡目相續ス

池端彌左近

池端彌左近演重 始彌作

家　譜

今川義元ノ旗下ニテ駿州益津郡田中之城ニ居住之處同家沒落之後浪人ニテ罷在候處駿河ニ於テ

權現樣へ被　召出　南龍院樣へ御附被遊高三百石被下元和五己未年紀州へ御供仕寛永十二乙

亥年五月廿一日病死

演重總領彌左近良重以來代々相續一時六百石ニ進ミ七代小助喜辰ハ三百石御徒頭ニテ文政七申年五月病死養子藤之助芳辰相續ス

稻生加兵衞

家　譜

稻生加兵衞重次　尾州知多郡龜崎村居住稻生七郎左衞門五男新七郎惣領

父新七郎　權現樣へ被　召出御切米百石被下相州見崎御船役相勤關ヶ原御陣之節ハ尾州師崎ニ被差置慶長十三申年二月十日病死

一慶長十三申年父新七郎家督被　仰付元和二辰年於駿府　南龍院樣へ御附被遊貳百石被下大番組相勤御入國之節紀州へ御供御船役被　仰付年月日不知寛永二乙丑年十一月四日病死

重次總領加兵衞次俊父家督貳百石無相違被下御船役後大御番　宰相樣御目付又ハ御供番相勤承應三甲午年御徒頭御加增三百石ニ成後勢州御船奉行被　仰付以下代々相續九代嘉兵衞良有ハ三十五石中奧御番格ニテ文化十癸酉年十月十五日病死二男嘉平良度相續ス

右三代嘉兵衞次俊勢州御船奉行勤之節寬文延寶年中每々御用金被　仰付金高合三千百五兩御用立候由ニテ京金奉行ヨリノ手形四通並ニ水野小右衞門印形之手形壹通前々ヨリ持傳ヘ候處九代嘉兵衞良有ニ至リ文化九年九月十日右手形差上御内々ニテ銀五枚被下

井出彌惣 八郎左衛門附

井出兵作

井出彌惣 實名不知 井出駿河守義眞男 井出甚十郎惣領

家　譜

權現樣へ奉仕 御役儀高不知 所々御陣之供奉仕候其後 年月不知 養珠院殿へ御附被遊御知行貳百石被下置於駿河相勤申候 知行之御判物無御座候卒年不知 彌惣父甚十郎儀永祿三庚申年三月十五日於江州高宮之里知行三百貫之倫旨頂戴仕于今所持仕候右寫

於江州高宮之里三百貫令 此處ニ二重輪ノ御朱印アリ 知行處也不寄何時奉公次第可令爲取者也依テ如件

永祿三年　　脇坂越中守

義詮書判

三月十五日

井出甚十郎

彌惣總領ヲ八郎左衛門ト云父家督等之儀不詳　權現樣へ奉仕 御役儀高不知 遠州味方ヶ原尾州小牧濃州關ヶ原其外所々御陣之御供相勤仕年老衰ニ付御役儀御免被遊候處年來之御厚恩爲報　御萬歲之後ハ御供可仕間酒井藤九郎ニ介錯致呉候樣兼々相賴ミ御他界之節存念之趣一家共へ委申置元和二丙辰年四月十九日右藤九郎同道仕久能山へ參御供可仕由申候處本多上野介殿松平右衛門佐殿其外御同列方殊之外御叱番人ヲ御附候付下山仕候處何方ニテ御供仕候モ同事ト存於御山之麓小脇差ヲ拔腹ヲ突裹ヲ返シ藤九郎ヲ尋候得共不相見 名字留缺 九郎左衛門罷在候付此體ニ候間早ク賴

候由中同人介錯仕候年齢不詳則其處へ従　公儀石塔御建被成下關藏院ト申御寺へ御預ニ相成候由申傳候

信按スルニ　近時發刊ノ久能山小誌ニ左ノ記アリ事頗ル符合スレハ參照ニ掲ク

殉死の碑

照久寺より尙西に距ること半町許にして石藏院といへる曹洞宗の寺あり此寺の門前路傍に古碑ありこれを殉死の碑となす今其概略を說かんに

東照公の御厩舍人（或は御草履取共御槍持共傳ふ）に井出八郎右衛門と云者ありける年少の比より毎に處々の戰場に從ひ奉り片時も御馬の口を離れしことなければ　公の御寵愛も亦一方ならさりし然るに數十年の後世も太平となり身も老衰に及ひければ退隱して安き年月を送りしかとも常に人にいへらく若し我　公百歲の後は必す殉死して冥土迄も御供し平生の御恩澤に報答する存念なりとされば元和二年四月十七日　公の薨去の時に當り酒井藤九郎といへる者を訪ひ自己の赤心を吐露し介錯を頼み其月十九日即ち御送葬の日藤九郎と共に久能山に詣り既に自殺せんとするを見て本多上野介松平右衛門大夫等は堅く其死を止め其志を稱し懇々と諭しければ一旦は其厚意に對し下山しけれ共生を捨て義を取るの鐵石心は自ら消滅する能はす遂に石藏院の門前に至り東向再拜し割腹して失てけり後遺骸を其所に埋め碑面を久能山に向け建設し中央に

空　風　火　水　地

右側に爲悅叟道○○（二字剝落）居士井出八郎右衛門尉

左側に元和二龍集丙辰曆四月十九日殉

と刻す此八郎右衛門の玄孫彌八郎は紀州侯又新藏は水戸侯に召出され其家今に絕えさるなるへしと云々

井出彌八郎

井出彌八郎　實名不知　八郎左衛門惣領　始彌八　生國駿河

父八郎左衛門殉死之儀御老中方御聞有之御法度相背候段心得違候トノ儀ニテ彌八ニ此時三歲番人ヲ御

附置候處三日過番人引取此節御扶持方五人扶持被下置駿河ニ罷在成長之後年月不知祖父彌惣儀養珠院殿ヘ勤之品モ有之ニ付從　台德院樣南龍院樣ヘ御附被遊紀州ヘ罷越現米十七石五人扶持被下役儀不知其後段々役替加增被申付現米三十石被下御廣敷番相勤貞享元甲子年三月十日依願隱居被申付爲家督總領彌二郎ニ現米十七石三人扶持被下殘拾三石貳人扶持爲隱居料彌八郎ニ被下元祿四辛未年閏八月廿五日病死仕候 于時七拾八歲

彌八郎總領善之右衛門始彌三郎父家督十七石三人扶持浦方奉行勤之處元祿五申年十月二日病死嗣子無之同姓半之右衛門則正二男七郎右衛門尙治名跡被　仰付拾五石三人扶持御馬預御加增拾七石ニ相成ル江戶ニ在勤之砌　御城ヘ被爲召　有德院樣ヘ御目見此節先祖甚十郎頂戴之知行之倫旨可奉入　上覽旨被仰出則差上候處追テ御下ケ相成以後代々御馬預御廐支配知行貳百石被下八代七郎右衛門厚之知行百七十五石御馬預ニテ文久元酉年七月八日病死養子已之助之重跡目相續ス

別　家

井出兵作實名不知　元祖彌惣二男

幼少ヨリ會津ヘ罷越伊達ニ勤仕之處大坂夏御陣之刻父彌惣儀　養珠院樣ヘ相願御聲掛ヲ以呼出シ南龍院樣御出陣之御供仕其後新規被　召出代々別家ニテ相續ス　兵作儀於駿河　權現樣御鷹野御供仕御野先ニテ白鞘御刀一腰拜領兵作子孫所持仕ル

一兵作總領半之右衛門正則馬術ヲ以被　召出別ニ家ヲ起ス則常隱也武術傳ニ記ス

石野忠左衛門

石野忠左衛門廣英　石野河內守廣成二男 新左衛門廣光四男

家　譜

河內守廣成嫡女大庭儀　台德院樣御抱守相勤久々相勤候付依
權現樣思召、忠左衛門儀大庭養子ニ被　仰付、御奉公相勤其後　南龍院樣へ御附被遊、御國替之
節紀州へ御供、御留守居物頭高貳百五拾石被下、寛永二十癸未年十月十九日病死　六十七歲
六代新藏享保六丑年五月四日出奔本家斷絕

分　家

一忠左衛門廣英六男石野平六重祐正保二乙酉年三月五日　南龍院樣へ新規被　召出亡父廣英祿
之內高五十石分知被下御小姓被　仰付以下代々相續
八代吉次郎廣信四拾石大御番ニテ慶應二寅年八月病死養子篤次郎廣宣跡目相續ス
一忠左衛門廣英五男石野七郎大夫廣重モ　南龍院樣へ新規被　召出貳拾五石新番被　仰付別家
ニテ代々相續五代目忠左衛門廣當寛政十年貳百石高大御番組頭勤ル

石和權兵衛　後苗字木梨ト改

石和權兵衛信重　石和伊豆守信光末孫 石和修理信定末男　生國甲斐

家　譜

父修理信定ハ武田勝頼ニ仕甲州石和郷之内領知仕候處勝頼滅亡之後石和郷ニ蟄居仕候年月日不知　權現樣へ被　召出相勤其後　南龍院樣へ始テ御人分之節御附被遊高百廿五石被下大坂兩御陣之御供仕右御陣之刻本多出雲守討死被致物之具等敵方へ分捕仕候處權兵衞馳合兜之表指ヲ取返申候右表指私家ニ所持仕候元和五未年御國替之節紀州へ御供仕寛文三卯年十二月五日病死仕候

總領權兵衞信倹父之跡目無相違被下以下代々相續之處四代權兵衞信武高百五拾石寄合ニテ延享元子年七月出奔嫡家斷絕ス

一權兵衞信倹二男半五郎洪隆壯年ヨリ醫術ヲ志シ木梨玄宅直保弟子ニ成修行師家ヨリ木梨ノ名字ヲ授ケ爾來木梨ヲ名乘享保十九寅年九月新規被　召出表御醫師被　仰付以來醫業ニテ代々分家ニテ相續ス

井關又助

井關又助輝定

家　譜

勢州小代之者ニテ太閤秀吉公ニ仕罷在候處關ヶ原御陣之後年月日不知　權現樣へ被　召出御切米五拾石五人扶持被下置御鷹方相勤其後年月日不知　南龍院樣へ被爲附元和年中御國替之節紀州へ御供仕其後加增現米六拾石被申付候　病死年月日年齡共不詳

井關又助
輝定

輝定總領文左衛門輝秀父又助跡目六拾石五人扶持無相違被下以下代々相續寛政十年年　幕府へ系譜提出之時ハ六代又助輝儀高三百石御手筒頭タリ七代又助輝運ハ小十人頭格貳百七十五石ニテ慶應四辰年隱居總領熊楠（後岸右衛門）相續ス

輝定次男武兵衛　水戸　賴房卿へ被召出

同三男六助

同四男彥三郎

右兩人及弟孫四郎共ニ寛永十四丁丑年九州嶋原一揆之節父又助へ壹封ヲ殘置彼地へ罷越松倉長門守手ニ罷在相働遂ニ兩人討死ス

同五男孫四郎勝澄

兩人ノ兄同樣嶋原へ罷越松倉長門守手ニ屬シ相働首尾能歸國之處軍功有之ヲ以正保二酉年正月廿四日新規被　召出御切米五拾石夜居番被　仰付後貳百石ニ進ミ以下代々別家ニテ相續三代彌五助勝村ハ大御番頭千石ニ累進四代孫四郎政眞安永四未年御城代千貳百石ニテ隱居養子織勝家督無相違相續ス

石黒藤兵衛光增

石黒光增　藤兵衛　按駿河分限帳在御旗奉行兼御使番衆之列祿五百石

石黒光增、其先曰太郎光弘、領越中石黒、因氏焉、光增屬牧野成里（初傳藏後稱伊豫守）朝鮮之役、有殊功、關ヶ原役、以白麻爲背、幟奮戰有功、東照公見之稱曰、藤兵衛武勇、惱殺人矣、於是白麻背幟之名大顯、大坂役、屬

池田利隆有功、板倉重宗、水野重仲、將薦之麾下、公聞其名、渴望不已、强請祿之五百石、寛永四年歿、公命其子孫、毎歳端午佳辰、建白旆旗於其門、曰顯其功於後世也、世以榮之、石黒系譜

家　譜

石黒藤兵衛光增　石黒太郎光弘子孫　石黒十郎兵衛光正惣領　生國尾張

遠祖石黒太郎光弘者利仁將軍之末孫ニテ越中國石黒ヲ領知仕候節ヨリ石黒ヲ氏ト仕壽永年中木曾義仲ニ仕加州安宅ノ渡越中礪波山寺之合戰ニ武功有之義仲沒落後右大將頼朝ニ仕

初牧野伊豫守ニ屬文祿年中高麗陣二年之間七度之武功有之慶長五庚子年九月十四日於濃州大柿杭瀬川白シナヘ之指物ニテ相働中村一學人數ヲ追崩引取候節有馬玄蕃頭豐氏人數川ヲ越掛リ來リ候ニ付取テ返シ突懸リ候得ハ敵川ヲ越引退候付川端迄馳候得共不返合候故相引ニ相成右兩度之働

權現様上覽被爲遊只今白シナヘ指タル者難返場ヲ兩度迄返シ合憎程之致働候旨再三御感被遊候由翌十五日於關ヶ原モ武功有之其後池田武藏守利隆ニ屬元和元己卯年大坂夏御陣之節於大坂天滿武功有之同二丙辰年板倉周防守重宗水野出雲守重仲吹擧ヲ以　公儀へ可被　召出候處　南龍院様達テ被相望候付　公儀御同様之儀ニ候間知行之望等不申立罷出候様周防守被申聞候付任差圖候處同四戊午年於駿州　南龍院様へ被召出其節池田武藏守ニテ知行高何程取候哉トノ儀故五百石取候由申候左候ハヽ五百石可給トノ儀ニテ高五百石被下翌己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越候

公儀へ書上寫

藤兵衛武功之證狀牧野伊豫守家老森作兵衛辻茂左衛門ヨリ差越候寫

一筆令啓上候先以其地彌御無事之由目出度奉存候此方相替儀無御座候傳藏殿最上山形首尾好御歸候私共無何事供仕候間可御心安候松樹院モ一段達者ニテ御座候間是又御氣遣被成間敷候隨テ貴樣御勝手不罷成付來年時分ハ御訴訟被成御供有之間敷樣ニ承笑止ニ奉存候併今程浮世ニ跡々少首尾ニ合申者モ左樣之儀申立身上有付又ハ御加增ヲモ取申儀共世上多御座候貴樣之儀伊豫殿所ニテ御稼之樣子重々御座候間其許御家老衆御耳ニ立申樣ニ被成可然奉存候我等共連々見聞申通有增書付越申候何卒御訴訟之種ニモ可罷成ト存候

一先年石田治部少亂之刻九月十四日ニ大垣ニテ御貴殿白シナヘ之指物ニテ御稼之樣子ニ存知仕候伊豫殿存生ノ内常々被　仰出候内田兵左衛門中井甚右衛門ナト能可被存候委細之儀ハ紙面ニ不載候

一同十五日ニ關ケ原ニテ敵ト出合鑓組其敵ヲ追拂其後伊豫殿是非討死ニ相極處ニ池田三左衛門殿御人數ノ内ヘ御ハヘリ被成候砌御貴殿走廻ノ樣伊豫殿常々感被申候事

一高麗陣ノ刻フサンカイ大子峠ニテ御貴殿御稼ヲ以シツハライ被成雜兵御討セ不被成由伊豫殿御物語度々承候

一生駒雅樂殿居城ヘ敵多勢出味方被討申處御貴殿幷内田兵左衛門稼ヲ以テ敵ヲ追拂ヒ高名被成御手柄之由承候事

一チヤワン峠ニテ合戰之砌貴樣壹人忍ヒ先ヘ御出候テ落シ穴ハネアケ敵壹人討取高名被成由御手柄之樣子承及候事

一モクソ城責之時牧野清兵衛殿ト御貴殿石垣ヘ早ク御上リナサレ其後伊豫殿嶋四郎左殿宮新太郎殿

ナト同事ニ踏ミコタヘ後迄御セリ合ヒ御骨折ノ樣子伊豫物語具ニ承候

一チヤワン岩山口ニテセリ合候砌御貴殿ト兵左衞門幷與左衞門ト事之外御骨折被成敵壹人討取被成候事

一チヤワン城ノ堀ヘ敵參候由之處誰モ堀ヘハイリ申モノ無之候ニ貴樣壹番ニ飛入リ其後兵左衞門三八郎孫四郎參其レニテ貴殿高名被成由承候

一小チヤワン城敵數多出申由ニ付玉井彥助道家彌八郎兩人ヲ物見ニ御出候處引返シ敵四五千程モ可有之由申由ニ付藤五郎殿御人數可被出之旨被仰候處御貴殿幷久田與左衞門兩人跡ヨリ御越候テ即右ノ敵ト御シクミ被成候內三和勝內乘懸ケ被參各稼ヲ以右之敵ヲ古城ヘ追込被成古城ノ內ヘ貴樣與左衞門兩人シコミ敵三十騎計モ可有之ト然ト見定其旨藤五郎殿ヘ被仰上候其以後諸手ヨリ右之段申來付テ貴樣幷與左衞門勝內ヲ藤五郎殿御譽被成由承候事右之外所々ニテ貴樣御カセギ之由伊豫殿御物語被成候度々及承候先存當リタル通リ書付進之候

一大坂御陣五月七日將監殿宇佐衞門殿半右衞門殿傳七殿幷貴殿天滿入口ニテ先手ノ內ヨリ早ク城ヘ乘込壹人討取被成由承候右ノ外被仰立ニハ不成ト申ナガラ伊豫殿ニテ打物又ハカラメ者ナド被成候事ドモ爲存通書付進候

一關白殿壽洛御退候時鷺坂加右衞門ヲ御成敗ノ時富田四郎右衞門殿御取クミ被成候處ヘ貴殿言ヲ能御ツカヒ被成加右衞門ヲ突殺被成候事

一佐和山カヽリヲノ丸ニテ尾崎喜平次御成敗ノ砌其身サカシ者ニテ候得共何ノ手モナク御討候事

一田原御鹿狩之時福池半平女子ヲ連退申處ヲ追掛御討候事

一佐治嘉兵衛仕合之砌モ刀ヲ抜切懸ケ申處ニ飛入ダキトメ被成候事右之外少充御骨折ノ段ハ紙面ニ不載候早ヤ久々之儀ニ御座候へバ前後相違仕タル儀モ可有御座候得共拙者爲存通有增申上候貴樣餘結構スグ被成被仰立ニモ不被成候ト相聞申候連々御家老衆へモ被仰上可然奉存候右御不審之儀御座候ハヽ傳藏殿織部殿ナドモ伊豫殿御存命之時分御物語ヲ被爲聞候間何時ニテモ寄合可申候恐惶謹言

十一月七日　　辻茂左衛門

森作兵衛

石黒藤兵衛樣　人々御中

一其後江戸表へ罷越候處勝手不如意ニ罷在候付御暇之儀可奉願ト申居候内病氣ニ付其段被聞召戸田金左衛門承リニテ病氣藥ニ成候トノ儀ニテ御鷹野之鶉拜領仕隨分病氣養生仕候樣トノ御懇之　御意難有仕合奉存候付先十ヶ年ハ御暇不奉願旨申居候由其後江戸西御丸へ　南龍院樣水戸樣御登城被遊候節松平右衛門大夫殿高力攝津守牧野織部へ關ヶ原之御咄御座候上ニテ藤兵衛大帰表ニテ白シナヘ指物ニテ兩度之働於天下無隱儀諸人存知之事ニ候高麗其外場數之武功其外ニモ能事共度々有之ヨシ右藤兵衛御召抱被遊御自慢ニ被爲思召候トノ御意ニテ織部へノ藤兵衛無事居候可有安心由　御意ニ付難有旨直ニ御禮申上其後安藤次右衛門御心易被爲思召候ニ付是ヲ相賴尚又御禮ヲ申上候トノ儀委細織部ヨリ申越候書附則入　御覽申候右之趣藤兵衛承扱々冥加至極成事ト及落涙

以後御暇之儀ハ申出間敷中居候其以後モ久野外記承ニテ病氣御尋被成下隨分養生仕候樣トノ御懇之業　御意其後（月日不知）芦川甚五兵衛ヲ以一倍之御加增都合千石被成下御旗奉行可被　仰付旨ニ付少ニテモ病氣今一度本復仕厚御禮ヲ申上度ト養生仕候得共相勝不申海野彌五助ヲ御附置被遊候處終ニハ養生不相叶寛永十六己卯年二月五日江戶ニテ病死仕候（年齡不詳）

石黑藤兵衛正信（藤兵衛光煕惣領 實二男喜太郎）生國美濃

寛永三寅年部屋住ニテ　南龍院樣へ被　召出御切米貳拾五石被下同八未年御加增八拾石被　仰付

一同十六卯年父跡目知行五百石被下寄合被　仰付其後段々結構被　仰付延寶七己未八月廿八日御旗奉行被　仰付御加增貳百石被下

一同日父藤兵衛武功顯候爲端午ニ總領へハ廂無地白幟爲建候樣ニト御意ヲ蒙候

一年月日不知父藤兵衛儀大柿ニテ之働ヲ　權現樣度々被遊御覽御稱美被下候御儀慥成儀ニテ候處後々迄世上ニテ右羨之餘リ尾張樣ニ有之候稻葉兵部ト申仁指物其節白シナヘニテ候カト申仁モ有之候其外四五人モ似寄ノ指物之取沙汰有之候ヲ藤兵衛承リ候テ何トモ心外成儀故右之段　南龍院樣へ入御耳候處最成ル儀ニ被爲思召　尾張樣へモ被　仰進アナタニテモ御吟味被遊彼是御吟味殊ノ外御骨折ラセラレ候處藤兵衛少モ無相違候間已後左樣相心得候樣ニトノ儀ニテ御前ニモ御滿足被爲思召候トノ御懇之　御意ヲ蒙リ候其以後右之段伊豫守承リ候由ニテ先藤兵衛高麗ニテ七ヶ度之武功幷大柿ニテ之武功其外三度之討者之儀佐次加兵衛亂心之節組伏

セ候事迄一ッ書ニ認メ熊野之牛玉ニ血判致シ證文此御方御用役芦川甚五兵衛海野兵左衛門兩名宛ニ致伊豫守家老辻茂左衛門森作兵衛方ヨリ參候付　南龍院樣ヘ入御覽候處御機嫌之旨此時モ難有御意被成下候

一貞享二巳年八月廿九日奉願隱居被　仰付養子喜太郎ヘ爲家督知行七百石之内五百石被下殘ル貳百石爲隱居料被下置同三寅年八月廿八日病死仕候

右以下代々相續之處代替之節々追々減祿七代藤兵衛（始楠之丞）知行百石御足米五石御留守居番ニテ文化十酉年六月病死二男左藏章敦跡目相續ス

池田敎國（讃岐按駿河分限帳在寄合衆之列祿五百石）

池田敎國、祖父曰池田十郎敎正、楠正行遺腹子也、父曰宗六郎敎家、天正中、敎國仕越智玄蕃、又仕本田因幡守、文祿中、仕加藤清正、從朝鮮役有功、後從豊臣秀秋、再赴朝鮮役、又仕浮田秀家、大久保長安、長安給祿三千石、大坂役、屬前田利長、役竣退去大和、於是公召之、賜祿貳百石、後爲根來頭、寬永十五年歿、（池田系譜）

家　譜

池田讃岐敎國（池田十郎敎正二男源八郎男宗六郎敎家惣領　生國大和）

十郎敎正母者攝州野瀨庄内内藤右兵衛滿行娘ニテ楠正行ヘ嫁男子多門丸ヲ出生仕正行戰死之後故乍姬池田九郎敎依ニ再嫁十郎敎正出生仕實正行之子成故楠姓ヲ名乘申候讃岐敎國儀天正中若

年ニテ越智玄蕃ニ仕玄蕃沒後本田因幡守ニ仕退テ文祿年中加藤肥後守ニ仕五百石ヲ領シ朝鮮軍事相勤歸陣之後肥後守ヲ去筑前中納言手ニ付再朝鮮軍事相勤其後浮田中納言ニ仕有故去大久保石見守ニ屬シ三千石ヲ領ス石見守滅亡之後退和州茅原村ニ住其後大坂冬御陣之節加賀中納言利長ニ屬シ軍事相勤御和睦之後和州茅原村ニ住居候最モ文祿年中朝鮮征伐之節加藤肥後守ニ仕候節岩崎喜右衛門ト號候何故暫名字相改候哉其儀不詳候

南龍院樣御代

一年月日不知被　召出知行貳百石被下置候 御役儀不知

一元和九癸亥年 月日不知 寄合組被　仰付知行五百石被下置候

一年月日不知根來頭被　仰付候

一寬永十五戊寅年五月廿五日病死仕候 于時八十一歲

敎國惣領 實二男 喜右衛門敎政跡目五百石無相違被下御普請奉行ニテ慶安二丑年六月病死以下代々相續四代喜右衛門則行ハ御用役大御番頭御城代ヲ經千五百石ニ至リ七代喜右衛行技ハ弘化四未年千四百石新御番頭持格ニテ隱居二男八右衛門行貞千貳百石ヲ相續ス

敎國三男宗左衛門ハ慶安五年三月病死四男左大夫ハ新規被　召出嗣子無ク斷絕五男猪左衛門是亦新規被　召出別家ニテ相續ノ處三代紋左衛門ニ至リ延享元子年兼テ不覺士ニ不似合ニテ改易家斷絕ス

飯田惣左衛門吉重

飯田甚三郎吉利

飯田惣左衛門

家　譜

飯田惣左衛門吉重　飯田藤兵衛宗利二男　生國相模

父藤兵衛儀討死仕幼少ニテ　權現樣へ被　召出御奉公相勤年月日不知於駿河　南龍院樣へ御附被遊御役不知御切米貳拾壹石被下置元和五未年八月御入國之節御供ニテ罷越寛永十九午年三月八日病死　于時七十歲

同甚三郎吉利　惣左衛門吉重惣領　初武之助

一慶長十五庚戌年月日不知十三歲之時於駿河　權現樣へ被　召出御側ニテ御奉公申上大奥ニテ之御進物持習候樣ニトノ　上意ニテ相勤同十六辛亥月日不知備前長船師景之御腰物拜領仕御手自武之助腰へ御差被下置自今甚三郎ト相改候樣ニト　上意ニテ御座候其節　御前ニ御三人樣被爲成御座候駿河御在城之時冬ノ內御夜居座敷へ被爲成候節御手ヲ引甚三郎儀御供仕罷出候砌御切米百俵被下置被　召出候年ヨリ年々ヲ重百俵宛之積リ壹度ニ拜領仕候大坂冬御陣之節二條御城ニ於テ甚三郎十六歲ノ時御具足御冑幷頰當壹通松平右衛門大夫殿奉リニテ御召被爲遊候右御陣御肌着御血ノ附タルヲ拜領仕右御品々于今所持仕候大坂冬御陣之節　權現樣住吉へ被爲成天王寺口へ爲御見積御忍ニテ被爲成候節總御供ハ茶臼山ニ御殘安藤帶刀成瀨隼人騎馬ニテ一丁程御先へ參二丁程御跡ヲ伏見彥大夫久松三十郎飯田甚三郎三人少シツヽ間ヲ置步行ニテ御供仕候此節御供之品能候トノ上意御座候於駿河　權現樣御不例ノ內晝夜御次ニ相詰罷在切々御前へ被召出御咄申上候

權現樣駿河ニ被爲成御座候內御直筆壹通御手自之御品數度拜領仕候　御他界被遊候廿日程前能相勤候トノ　上意ニテ黃金拜領仕候右御病中甚三郎儀御形見ト　思召候樣ニトノ上意ニテ南龍院樣ヘ御附被遊御切米三拾五石被下置元和五己未年御國替之節紀州ヘ罷越其後有故立退申候處被　召返現米百石被下置候

一年月日不知甚三郎儀男子無御座候ニ付養子奉願候樣ニト被仰付候處心當リ無御座候ニ付何レニテモ養子被　仰付被成下候樣奉願候處赤尾次郎八ヲ聟養子被爲仰付其後甚三郎儀病氣爲養生知行所有田郡藤並奧村竹內半四郎ト申者方ヘ罷越居候內同所ニテ男子出生仕此段　南龍院樣達御耳甚三郎ニ男子致出生候儀幸ニ被爲　思召次郎八ヘ御切米八拾石被下置御小姓ニ被爲　仰付甚三郎ニ實子出生ニ付右悴ヘ跡繼セ候樣ニト被　仰付候次郎八［虫喰］一所ニ罷在候居屋敷次郎八ヘ相讓町宅ヘ罷出申候右屋敷ハ惣左衞門拜領仕候屋敷ニテ御座候其後屋敷無御座候ニ付何方ニテモ屋敷地奉願候樣ニトノ御儀ニ付新吹上之內ヲ奉願候處同所ニテ屋敷地被下置普請ニ好ミモ有之事ニ候間宜敷建候ヘトノ御意ニテ御金拜領仕候其後屋敷出來仕候段申上候處　南龍院樣和歌御社參之節被爲成御覽被爲遊候

一寬文七丁未年四月廿三日病死　于時七十歲

按スルニ　元和御切米帳ニ飯田甚三郎寬永十九午年惣左衞門跡切米貳拾壹石被下都合五拾六石ニ成ル正保三戌年七拾六石ニ成ル同四亥年知行貳百石ニ成ル明曆三酉年三百石ニ成ル寬文七未年四月病死跡目無相違同苗竹之助ニ被下トアリ家譜記載ナキハ全ク舊記遺失ナルヘル

同甚三郎吉房 甚三郎吉利惣領 始竹之助

一寛文七丁未年六月十一日父甚三郎爲跡目知行三百石無相違被下置大番組被 仰付候

一寛文九己酉年和歌山江參仕候節 大殿樣 御社參被爲遊鳥居前ニテ御目見仕候處其節御供被 仰付色々難有 御意御座候先年父甚三郎 權現樣ヨリ拜領之御腰物只今ニ所持仕候哉ト御尋被爲遊候ニ付只今ニ所持仕候段申上候

右之御番御竿御小刀柄ハ赤尾次郎八ヘ遣御座候

一延寶五丁巳年十二月九日御供番被 仰付

一貞享三丙寅年九月四日病死仕候 于時三十四歲

吉房病死惣領竹之助信房後甚三郎ハ三歲之處筋目有之ヲ以貳拾人扶持被下後御使役三拾石ニ成リ享保七寅年八月不行跡ニテ改易其後歸參以下代々相續七代藤兵衛後甚三郎利香貳拾五石大御番ニテ弘化四未年九月十四日病死惣領竹之助房照相續ス

飯田茂左衛門

飯田茂左衛門

家　譜

飯田茂左衛門 實名不知 生國甲斐

元來甲州之者ニテ甲州ニテ搆飼罷在候處 權現樣江戸御在城之節御鶏搆出シ江戸表ヘ居罷越候樣ニト被 仰付則江戸御城ヘ召出右御鶏女中ヘ相渡其節御酒被下御袴拜領甲州ヘ罷歸其後慶長十

九寅年大坂冬御陣之節大坂へ罷越　權現樣へ御鷂之書付差上翌年夏御陣之節モ大坂へ罷越御鷂之書付可差上ト存候處最早大坂落城ニテ　權現樣ニハ伏見へ被爲成候付同所へ罷越右書付差上申其後甲州之御鷹江戶へ引ヶ候付其節御奉公之儀奉願候處尾州へ成リ共紀州へナリ共罷越相勤候樣被　仰出候付兼テ紀州へ罷越相勤度存念罷在候故紀州へ罷越奉願候處寛永十酉年 月日不知　南龍院樣へ被　召出御切米六石貳人扶持被下置御鷹飼同心被　召抱候 年月日不知 粉河へ被爲成候節御目通へ罷出候樣ニト　御意被遊候由ニテ御鷹飼同心五人之內一人罷出御目見エ仕候

一元祿四辛未年八月十八日病死

　總領茂左衞門御鷹匠同心被　召抱後筋目之者ニ付御鷹匠被　仰付三代茂左衞門正勝モ御鷹匠後御留守居番拜命以下代々相續五代彌兵衞保道四拾石御天守當番ニテ文政八酉年六月隱居達御彌一郎保義家督三十石獨禮小普請トナル

井田三太郎

井田三太郎

　家　譜

父三吉ハ左中將信意ニ仕三太郎文祿二巳年於駿河　權現樣へ被　召出御切米貳拾五石五人扶持被下慶長十一午年　南龍院樣へ御附御鷹匠役後御入國之節紀州へ御供寛永十六卯年五月八日六十九歳ニテ病死

總領忠左衛門家督無相違以下代々御鷹匠勤八代ニ左衛門始留之丞智喬三十五石大御番ニテ文久二戊年十月廿九日隱居總領友十郎智次家督無相違被下

稲垣長右衛門

稲垣長右衛門正重

家　譜

正重三河國櫻井内堀内村ニ住居於駿河　權現樣御代同心相勤大坂御陣之節御供其後　南龍院樣ヘ被爲附御入國之節紀州ヘ御供根來者相勤寛永十六卯年八月病死

以下代々相續四代ニ之右衛門正義ニ至リ御目見以上ニ昇進七代安十郎正員四拾石高新御番組頭ニテ天保十五辰年病死養子久五郎正賡相續ス

今井六郎兵衛

今井六郎兵衛道福　今井一郎左衛門兼道次男　生國駿河

家　譜

應長十八丑年正月　權現樣駿州田中邊ヘ御鷹野之節於御城先不圖晴成働仕候處其砌リ被召出輕キ御奉公相勤元和元卯年大坂御陣之節　南龍院樣ヘ御附被遊夏御陣御供仕御入國之節御供萬治元戊年十二月十八日病死

稲垣長左衛門正重

今井六郎兵衛道福

以下代々相續實曆四戌年六月　大慧公御口中御痛之節御針薬等差上御快愈被遊以來御擧［用］被
仰付代々醫業ニテ相續六代隨庵士廉文政二年五月廿四日御匙醫五拾石高ニテ病死總領五郎次良
恭相續後隨庵ト改ム

岩根師成

岩根師成、稱辨左衞門、曾祖曰長門守某、爲近江岩根城主、仕東照公、爲甲賀隊五拾二騎之一、公又援其尤精銳貳拾壹騎、長門守居其一、關ヶ原役處鳥居元忠、守伏見城死之、祖喜右衞門、父茂左衞門、皆隱而不仕、淸溪公思其名家、召師成爲世子、

家　譜

岩根辨左衞門師成　岩根茂左衞門男　始ハ大夫　生國紀伊

舊記斷絕仕始祖其外不詳候辨左衞門師成曾祖父長門守實名不知儀ハ年月日不知　權現樣へ奉仕甲賀五拾三騎之内別テ廿一騎之内ニテ度々御用相勤所々御陣之御供相勤慶長五庚子年八月朔日伏見於御城鳥井彥右衞門元忠手ニテ討死仕候其子喜右衞門實名不知其子茂左衞門實名不知二代ハ浪人ニテ罷在候

淸溪院樣御代

一元祿九丙子年正月廿八日被　召出　長七樣御小姓被　仰付同年二月三日御切米廿石之積御金被下後大番組貳拾五石被成下享保四年九月　左京大夫樣へ被進知行百石ニ御加增御足米貳拾石被下享保九辰年六月四日病死

右以下代々相續七代儀左衛門常明三拾石御廣敷番ニテ文久三亥年十二月病死總領鹿之助常重相續ス

伊　藤　外　記

紀士雜談ニ曰　伊藤外記ハ奥州之士也大坂働モ有之由也紀州ヘ被　召出候テ貳百石被下候悴猪之助ニ戰場之事抔話ケルニナンデモ今日ハ一働スベシト思ヒ定出候テモ其場ニ至リ今日計ノ事ニデモナシ首尾次第高名スベキト思ヒ定メテモ二ツ足出來候又重テモ同シ心ナリ是ニテハナラジト必死ニ極候テ働候人ハ知ズ我等ハ如此也

井田龜之助矩中

姓井田、名敬之、一名矩中、稱龜之助、仕于東都、嘗爲勢州松坂令、寛政中歿、甞與山東籬、池衙岳等相善、紀伊人物誌

一井田龜之助伊勢松坂御代官ヲ勤ム宮川ガ滿水之節藤堂ト御領分境ニテ藤堂方ヘ堤切レ候ヘバ莫大之損亡トナリ御領分ヘ切ル時ハ損亡少ト云フ何レヘカ切ラント評議一決セザリシ節龜之助曰ク隣國親交之禮ヲ以テ曰く隣國ヲ壑トスルニ忍ヒスマシテ彼國ニ損亡多キヲヤトテ御領分ヘ切ル民家ソクバク流レ民大ニ怨ム藤堂ニテハ生祠ヲ立テマツリシト云フ

井田龜之助同シ御代官タリ星ヲ見テ出星ヲ戴イテ歸ル所々ヲ巡見シ廢地ヲ興サントス一日矢野ト語ル矢野盡ク巡見ヲセザレドモ廢地新田地等委敷知レリ共ニ才能之士ナリ　乞言私記

家譜ヲ按スルニ　龜之助ハ井田作次郎世美ノ二男ニテ寶曆十三未年十一月　唯之進樣御伽被　仰付明和八卯年十一月新規

被　召出御抱守格貳拾石三人扶持被下天明八申年正月十一日江戸常詰御作事奉行御足米三十石被下寛政三亥年三月廿一日片山八郎左衞門跡松坂郡奉行被　仰付御役中御切米八拾石之高ニ御足米被下同六寅年八月廿七日由奥御番被　仰付同七卯年正月廿三日病死（于時四十二歳）ナリ江戸常府ニテ地方職被命候ハ近世矢野庄左衞門ト此龜之助アルノミニテ頗ル才幹アリシトテフ

總領良藏清之跡目貳拾石大御番格小普請ニ被　仰付候處享和三亥年六月十七歳以下ニテ病死

家斷絶ス

池永米太郎義雄

池永米太郎義雄

池永米太郎大嶋流鎗術田宮流劒術澁川流之柔術ヲヨクス齋藤大次郎榊原權之助平山行藏樺島勇七ナド數輩懇意ニテ共ニ書物ヲ會讀セリ或時吉原ニ遊ヒ或名妓ヲ五十兩ニテ受出シ妾トナシケルニヤガテイトハシク思ヒケレバ毎曉七ツ時ヨリ起出妾ノ枕邊ニテ大刀モテ居合ヲ拔書ヲ讀ケリ妓コハ氣狂ヒシニヤ今ニモ切リ捨ラルヽ哉ト恐レ中々ニタマリ得ズ一兩日過キ窺カニ逃去タリ米太郎ハ殊ニ大刀ヲ腰ニシ吉原ニ到リ樓主ヲトラヘ汝申含メタルト見エ逃去タリ只今速ニ出スベシ吾等傍輩ノ手前モアリ武士道立チ難シ若シ出サズバ汝等ヲナデ切ニシ切腹ノ外ナシ壹人モ多方切リ業アリ吉原中觸廻リ何百人ニテモ連レ來レヨ皆集マデ待ツベシトテ長劔ヲ横ヘ煙草ヲ吹テ睨ミ居タリ其勢ニ恐レケン樓主ハ低頭平身深ク詫ヒ入レ金五十兩ヲ出シ剰ヘ種々馳走ヲ出シテ謝シタリトナリ

米太郎石川五郎次ト澁川伴五郎門人ニテ同格之業ナリケル五郎次稽古仕舞タルフリシテ衣服ヲ着ケレハ米太郎モ同ク衣服ヲ着ス五郎次竊カニ衣服ヲ着替ヘ稽古場ヘ出レハ米太郎モ又着カヘ稽古ス互

ニ何モカクシテ厭ケルトゾ同人伜五郎稽古場ニテ角力取仕合ニ來リ孰モ負タル時米太郎一ト當テアテ丶取ヒシギシト云フ同人病死之節權之助男七見舞タルニ大之男ノ手足キカネハ介抱ニ皆困リタルト權之助咄セリ　以上乞言私記

家譜ヲ按スルニ　米太郎ハ江戸常府池永立德（桂香院樣御附醫師）惣領ニテ寶曆八寅年八月部屋住ニテ被　召出中將樣小姓被　仰付後御書院番ニナリ明和八卯年十一月父跡目四拾石被下安永六酉年四月十七日勤方不宜ニ付當役被　召放天明三卯年六月二十日御數大御番格被　仰付同六午年五月五日病死（于時三十八歲）養子斧三郎邦房名跡貳拾石獨禮小普請末席被仰付タリ

一一說ニ米太郎不覊磊落爲ニ刑小普請トナリ右刑中ニ柔術熟得セシ由アレ𪜈家ニ刑小普請ノ事ナシ蓋シ御役被召放ノ謬傳ナルベシ

一按スルニ　斧三郎邦房頗ル卑劣之士ト雖モ又一能アル一奇人ナリ雅樂ニ堪能ナルヲ以テ　舜恭公ノ寵遇ヲ得種々ノ樂器ヲ搜索シ來テ高直之御買上ケニ利ヲ博シ或ハ金ノ烟管ヲ製シテ時々是ヲ携ヘ他ニ同一ノ形狀裝飾之贋管ヲ製シ置該金管ヲ抵當トシ金ヲ借ルニイツカ贋管ト引替ヘ其期ニ至レハ程能ク延期ヲ請ヒ督促ノ嚴敷ニ至テ不得止抵當流ニ仕ナス是等公然人ニ語テ憚カラズ又常ニ美服ヲ着シ外見イカメシキ金銀造リ之兩刀ヲ帶ヒ雅樂之事ヲ以テ大小ノ諸侯ニ出入因テ結ヒ久敷御取次役勤務ナレハ入來大名之美々敷懷下印籠煙管筒等ヲ見レバ虛實無心シ得テ是ヲ人ニ自負ス信ガ父亦風樂混淆ノ交リアリ嘗テ年賀ヲ祝シテ其家ニ到ルニ例ノ如ク美々敷見セ菓子ヲ出セリ父思フニ渠イツモ如此シイザ其膽ヲ奪ヒクレント烟管ニテ大ノ有平糖ヲ一打ニ碎キ喰ヒ盡シ歸リタレバ堀内ハ氣違ヒナリトアキレ驚キ抱腹ニ堪ヘサリシ事ナリシト語ラレタリサレバ人皆濊シトハセザレドモ終身無事ニテ長壽ヲ保チ　舜恭公ヨリ拜領ノ紅裏衣ヲ着シ皚裁造リテノサマ信等亦幼時是ヲ見受ケタリ

南紀徳川史卷之四十一

名臣傳第二

橋本正明 六郎左衛門

橋本正明、父曰彦兵衛正利、仕北條氏、屢有戰功、東照公嘗聞其名、及北條氏亡、召祿之、賜貳百石、正明襲家廩公、寛永十八年歿、 橋本家系

家譜

橋本六郎左衛門正明

橋本八大夫

橋本彦兵衛

橋本六郎左衛門 世長田次郎政氏末葉 彦兵衛正利惣領 生國相模

父彦兵衛正利ハ北條氏直ニ仕ヘ同家沒落後浪人氏直ニ仕ヘ候内所々於陣中無比類働有之感狀數多所持候段 權現樣達 御聞慶長十七壬子年月日不知於江戸善德寺 御尋ニ付翌十八癸丑年正月日不知 駿府ヘ 着御之刻彦坂九兵衛ヲ以右感狀入 御覽候處御懇之御意之上彦兵衛其外一類共迄不殘外ニ御差置被遊間敷トノ 御諚ニテ則被 召出於遠州豐田郡知行貳百石被下後隱居元和三丁巳年月日不知病死

一慶長十八癸丑年月日不知父彦兵衛被 召出候後續テ 權現樣ヘ被 召出新地貳百石被下置候御役儀不知

一年月日不知　南龍院様へ御附被遊元和五己未年月日不知御入國之節紀州へ御供仕候北條家ヨリ之感状等持傳候處大水之節流失仕候

一寛永十八辛巳年四月廿四日病死仕候

正明惣領六左衛門正國始市助又角左衛門父跡目貳百石大番組ニテ延寶六年病死以下代々相續八代六左衛門始直吉弟悟百五拾石大御番ニテ文政三辰年十一月病死養子又三郎意昌聟名跡相續

一初代六左衛門正明ヨリ三代六左衛門正肥之長男覺左衛門忠良部屋住ニテ被　召出御切米貳十五石御近所番勤之處　有德院様御供ニ被　召連　公儀へ被　召出タリ

橋本八大夫

橋本八大夫　彦兵衛正利次男始權太郎

父彦兵衛正利慶長十八年　權現様へ被　召出之節一類共迄不殘外ニ御差置被遊間敷トノ　御諚ニテ權太郎儀モ續テ被　召出於遠州濱松横須賀村新地百五拾石被下置其後年月日不知　南龍院様へ御附被遊元和五年御國替之節紀州へ御供罷越寛永十七辰年十二月三日病死

惣領彌五兵衛始靱負宣房父跡目百五拾石無相違被下以下代々相續六代八郎右衛門光信寛政十午年拾三石小十人小普請タリ

橋本彦兵衛

橋本彦兵衛　彦兵衛正利三男

元和三巳年父彦兵衛正利病死後　權現様へ被　召出父ノ隱居知被下後　南龍院様へ御附被遊別家ニテ相續之處四代彦兵衛英房　有德院様御供ニ被　召連　公儀へ被　召出

橋本源兵衛

橋本源兵衛

橋本源兵衛 實名不知　生國尾張

家　譜

尾州内海中野郷ニ罷在候處同所ヲ出テ野々村伊豫ヘ參知行貳百石給同人死後仙石兵部殿ヘ參知行三百石給大坂御陣ヘモ罷出其後蜂須賀阿波守殿ヘ參知行三百石給相勤罷在

一元和二丙辰年月日不知於駿河　常陸介樣ヘ被　召出知行二百石被下置御役不知同五未年　御入國之節御供仕罷越候其後大御番熊野御代官御供番日高郡奉行ニ歴任寛永三寅年六月十九日病死 年齡不詳

惣領源兵衛父跡目三百石無相違大番組勢州郡奉行御先乘勤務後隱居以下代々相續七代源兵衛元辰貳百石小十人頭格ニテ文久二戌年正月病死惣領孫太郎元忠嗣ク

橋本又十郎元春 元祖源兵衛次男

寛永七午年新規被　召出四拾石被下代々別家ニテ相續追々昇進世々六郎左衛門ト稱シ大夫トナリ近時六郎左衛門後總雄之家是ナリ

原田權之助

原田權之助 實名不知 初苗字相原

家　譜

初苗字相原ト唱ヘ金吾中納言秀秋ニ仕ヘ千石所務此節ヨリ原田ト改メ其後浪人元和二辰年於駿府

權現樣ヘ被　召出知行四百石被下後　南龍院樣ヘ御附被遊御入國之節紀州ヘ御供寛永四卯

原田權六乘春

長谷川藤兵衛

林平之丞

年七月廿七日病死

實子權之助家督無相違被下間モ無ク病死養子被　仰付候得共家督無之内病死家斷絶ス

分　家

原田權六乘春ハ嫡祖權之助二男ニテ　南龍院樣へ新規被　召出高三百五拾石被下御先手物頭相勤嫡家斷絶ニ付以來代々分家ニテ相續五代權之助政少ハ寛政十午年高貳百石御小姓組タリ

長谷川藤兵衛

長谷川藤兵衛（實名不知）

家　譜

權現樣へ被　召出知行貳百石被下御代官相勤御差物（三社之託宣）御團扇（金御紋付）拜領後　南龍院樣へ御附ヶ被遊元和五年御入國之御供貳百石御代官相勤

四代迄　南龍院樣へ御奉公七代文內貳十五石大小姓之處不埒ニ付御役被召放九代藤兵衛（始ハ齒）貳拾石大御番ニテ嘉永五子年正月病死養子鹿之助奉律嗣ク

林　平之丞（按駿河分限帳、在寄合衆之列、祿三千石、）

林平之丞、初仕織田信長及堀秀政、屢有戰功、平之丞常冠蝶羽兜鍪、蝶羽兜鍪之名大顯、蝶羽兜鍪、信長之所賜、而日根野織部、獻信長者也、後公召而祿之三千石、子所左衛門、爲大番賜祿千石、（紀士雜談）

林平之丞家冑之事

一林平之丞蝶之羽ノ兜是ハ平之丞儀信長公秀吉公ヘ奉仕無隱覺ノ兵ニテ御座候殊ニ越前ノ七技ニテ杉形之鉾ヲ仕候其時此蝶之羽ノ冑ヲ着シ目ニ立チ申候由其後　御家ヘ三千石ニテ被　召出蝶ノ羽ノ甲冑頭形ニ舉羽之蝶ノ羽立申候處ニテ中々見事ナル事ニ御座候日根野織部ヨリ信長公ヘ上リ信長公ヨリ平之丞ニ被下置候由

南龍院樣ニモ此冑ハ御覽被遊平之丞孫所左衛門子無之遺跡斷絶仕候右冑後家尼所持仕候ヲ拙者肝煎取次候テ水野志摩守重孟ヘ調サセ申候　宇佐美竹隱由緒ノ內ノ記

元和御切米帳ヲ按スルニ　平之丞三千石之內千石ヲ寛永十酉年ヨリ所左衛門ニ被下所左衛門寛永十六卯年病死跡目惣領ヘ四百石被下直ニ親ノ名ニ改メ所左衛門ト書有之トアリ其後圖子無之斷絶ナルヘシ系譜無之委細分リガタシ

花房內藏丞政眞

花房內藏丞政眞

家　譜

宇喜多家ニ仕同家ニテハ本名松原久右衛門幸政ト稱シ家老職勤宇喜多家滅亡以後年月日不知於駿河被召出知行五百石被下元和五未年八月御入國御供寛永四卯年病死

二男庄兵衛政久家督無相違被下七代庄兵衛徂本三百石大目付文化三寅年四月病死惣領楠太郎直道家ヲ襲ク

服部仁左衞門正道

家　譜

駿河ニテ　南龍院樣ヘ被　召出御入國之御供ニテ紀州ヘ罷越安藤忠兵衞組御先手同心相勤以下代々相續昇進江戸常府タリ七代市兵衞正在文化十三子年五月田宮流劔術稽古場頭取トナリ文政四巳年五月　中將樣御劔術御相手被命文政六未年十二月四拾五石大御番格小普請ニテ隱居子市左衞門某相續ス然ルニ市兵衞元來行爲放蕩ナルヲ以テ文政十三寅年九月廿四日不埒之品有之旨ニテ紀州ヘ被遣永ク揚座敷入被　仰付タリ

一市兵衞正在之事信古老ニ聞得タルニ勞力人ニ勝レ田宮流劔術ニ達シ兼テ關口流柔術ニ妙ヲ得豪傑之聞エ高シ然トモ磊落不羈博變大酒ヲ好ミ能ク人ト喧嘩ヲナシ或ハ喧嘩ノ中裁ニ立入赤坂定火消ノ我意(ガエン)日本橋魚市ノ無賴者杯多衆ヲ一人ニテ相手トシテ負傷セシム因ヨリ懸空一物ナク時トシテハ裸體ニ赤合羽ヲ着シテ郭外ヲ横行若シ其怨ニ觸ルヽアレバ手鞠ノ如ク蹴テ擲ツ之レニ依テ赤坂四ツ谷青山邊ノ者紀州ノ服部來ルトイヘバ皆恐レ蔵ルヽノ爲體ナリ嘗テ通行ノ時芝浦ノ魚夫初松魚〻〻ト走リ歩行ヲ呼留メ魚價ヲ問フニ其體ノ見苦敷ヲ侮リケン何條貴樣如キ之輩ニ賣ツヘキヤト罵リケレバ己トイヒサマ盤臺ノ一尾ヲ攫ミ取テ頭ヨリ丸喰ニナシ是レニテモ賣カ賣ヌカト怒リケレバ漁夫ハ吃驚シテホウ〻〻逃ケ去リタリト市兵衞酒ヲ飲ムニ常ニ澤庵漬一本ヲ丸カヂリシテ二三升ヲ傾ク其罪ヲ受ケシハ兼テノ放蕩　幕府ヨリモ逮捕セントノ聞エアリテ江戸ニ差置キ難

キ場合ヨリ紀州ヘ被遣シトナリ刑事召喚狀ヲ發スル時ハ逃亡且手向等ヲ慮リ同僚ノ士數輩ヲ其家ヘ派遣御小人目付御徒目付其周圍ヲ警戒スルノ例ナレバ此時派遣ノ各士ハ覺エアル市兵衛ノ事如何ナル彌事モアランカト皆々色ヲ失ヒ出向タルニ市兵衛ハ泰然麻上下ヲ着シ共ニ御勘定所ヘ連レラレ行キ尋常ニ辭令ヲ奉シ同僚夫々ヘ慰勞之挨拶等殊勝ニモ振舞ヒケレバ何レモ初テ安堵之思ヲ爲シサスガ市兵衛ナリト感シ合ルトナリ

一池端善作（關口流柔術大伴頭也）モ右市兵衛召喚同道人ノ選ミニ當リ命ヲ傳フ市兵衛異儀ナク應シテ曰ク暫時使用達シ度トニヨリ雪隱ヘ同行ス市兵衛戸ヲ閉ントスル故今日ハ公命ニヨリ目ヲ放チガタシ其儘使用セヨ是ニテ見張リ居ルベシト云ニ市兵衛モ辭ナク終ニ無事ニ連レ行キシト也紀州ニテ揚屋入トナリシカ𪜈一旦御師範タリシヲ以テ御内々黑天鵞絨ノ布團ヲ賜リ敷キ居タリシトイフ

又一話市兵衛赤坂見付門ヲ通行ノ時揚丁ノ打水足ヘカヽリケレバ咎メタルニ却テ惡口セシニゾ怒テ共者ヲ直チ投ケ旺傷過キ行ケルニ歸途ヲ待受多人數打テカヽラントス市兵衛ハ松平萬三郎邸前ノ駒寄木ヲ引拔キカザシ該邸門ヲ後ロ楯トシイザ來レトイヒサマカヽリ來ル者ヲ一人毎十八人迄打据タルニゾ皆々辟易シタレバ無甲斐奴原メ我ハ紀州ノ服部市兵衛也何時ニテモ來ルヘシ相手ニナルヘシト座打拂ヒユフ〳〵ト立歸ヘリシニハ人皆舌ヲ卷キタリト幕府ノ捕吏モ每々市兵衛ヲ逮捕セントセシニイツモ辛キ目ニ出逢テ懲果タリトイフ

服部角左衛門

服部角左衛門ハ江戸常府ニテ近世千石ニテ大御番頭格奉仕シタル長兵衛（後角左衛門ト改ム）ガ家ナリ亦寶譜傳ハラス詳カナラズト雖モ兼テ勞力非凡之聞エアリ乞言私記載スル所左ノ如シ長兵衛男永三郎實ヲ聞ク

一服部角左衛門四ツ谷古物見世ニテ鐘ヲ見タリ手ニ取リ熟覽シ是ハナマニテハナキカ引カバ延ヒハ

セヌカト言ヘハ試ニ御ノハシアルヘシト言、サラハトテ、タカカシラヲ取、柳ヒハヲ押セハ一引ニテ鐙ノヒタリト言フ

一服部角左衛門ハ强力ナリ朝鮮人來リシ時　公儀ヘ御ヤトヒニテ參ルフリ袖前髮ニテ鐵ノ煙草盆ヲ目八分ニサヽゲ朝鮮人ノ前ヘ少シ遠ク置キ退ク朝鮮人キセルニテ引トモ引ケズ片手ニテ引トモ、ヒケズ兩手ヲ掛ケテモ引ケサリケレハ童子ニシテ怪力ナルヲ驚キシトイフ

右乞言私記ニ記シ竹内辨五郎先祖ノ事トシテ一説ニ服部角左衛門ノ事トモイヘルヨシ疑ヲ存セリ按スルニ辨五郎先祖ハ九右衛門廣元トイヒ淸溪公ノ天和四未年二月御隨人ニ被召出後御臺所頭トナリ享保廿年八拾二歳ニテ病死家譜ニ　公儀ヘ御雇等ノ事ナシ後代ニモ見エズ角左衛門强力ナリシ事ハ口碑ニ存ズル處トイヘトモ辨五郎先祖ナトニハ絶エテ聞サル所ナレハ今一説ヲ取リ角左衛門トハナシヌ辨五郎ハ九郎右衛門ヨリ四代目ニテ小十人小普請末席拾五石ヨリ四百石御用人ニ至リシ人也

原　與三兵衛勝凞

原與三兵衛勝凞　始勝左衛門　又與兵衛

家　譜

父ハ與三兵衛勝之ト稱シ久世大和守家臣加藤忠左衛門正滿三男ニシテ元祿十三辰年二月　深覺公中小姓ニ被　召出與三兵衛勝凞ハ　大慧公之時小十人ニ被　召出以來追々昇進寶曆四戌年ヨリ明和二酉年マテ十二ケ年間御廣敷御用人勤務御加增三百石ヲ賜リ　觀自在公御附ヲモ勤メタリ

一公ニハ御氣色常ニアラ〳〵敷御意ニ逆フ時ハ御手打ニ被遊事共往々不少サレハ女中共御機嫌ヲ損

スル事モ儘アリテ困シ果ルニイツモ與三兵衛諫メ奉リテヨキニ取ナシタリ或日既ニ出勤セント構ヲナシ居タル處ヘ早々ノ御召ナレバ疾々出局アルベシト殿中ヨリ申來ル扨ハ彌御手打ナルヨト覺悟シ家内ト永訣之水盃ヲ汲ミ（此時ニ不限出勤之時ハ毎モ水盃チナセシト云）出勤スルニ御待兼ノ由畏リテ直チニ　御前ヘ伺公スルニ近ク寄レトノ御意ナリ時ニ與三兵衛總身戰栗顏色土ノ如ク變ズ　公ハ侍臣ニ命シテ　御側ニアリシ紫ノ御フクサ掛ケタル大廣蓋ヲ與三兵衛前ニ居サセ給ヒ其方ハ兼々予ニ諫言ヲ申奇特ナレバ褒美トシテ是ヲ遣スナリト與三兵衛無言絶倒シ死シタル如シ　公ニハイタク御驚キソラ助ケヨト御イラチアレバ侍臣驚キ立チ騷キ御次ヘ扶持シテ御醫師ヨ藥ヨト種々ニ介保シテケリ是レ御フクサノ内ニハ多クノ蛇ヲ盛ラセ給ヒシニテ與三兵衛ハ甚タ蛇ヲ忌ミ嫌フノ性ナルヨリ御一ト間ノ内ニ入ル哉否眞形ヲ不見モ性既ニ感通顏色變シタルナリ扨テ與三兵衛暫ク養生ヲナシヤガテ元ニ復シケレハ再ヒ御前ヘ伺公何事ヲカ申上ケントス皆々コハ如何ナル珍事ニモ至ランヤト堅クオシ止ムレ共聞カズ近ク進ミ出テ　公ニハ臣ガ兼々言上之事共奇特トノ御賞詞アリ然ルニ極メテ嫌忌ノモノトシロシ召シナガラソヲ御賞賜ニ賜ルトハ何事ニ候哉恐レナガラ人君ノ御所作ニアラズト極諫シ奉ルニサスガニ　公モ氣ノ毒ニ被　思召予カ重々アシキ也ト　御意被遊候ト云信カ家ハ原家ニ縁故アリテ幼キ時老父常ニ語リ聞セ信モ亦親シク其家ニ就キ聞得タル儘ヲ記ス與三兵衛ノ如キ眞ニ人臣ノ龜鑑ト云フベキカ

一與三兵衛兼テ天文數學ニ通ス明和二酉年隱居シテ流憩ト號シ安永五申年七月十三日八十七歲ニテ歿ス流憩家ニ遺ス所之家訓ト云フアリ左ニ附記ス

皆人はやうしやかんにん第一に心をなほにしひ心をもて
じひ用捨堪忍つよき其人は行末までもたのもしきかな
我よりも年まさ人のいふ事は何事なりともうけておほへよ
われこの身を人になしきといてべきは親に不孝と思ふべきなり
仁なきは義禮智三つもなき物を包けてなるぞと思ふべからに
しうも人下人も人ぞかわりなしなさけをかけて召つかふべし
親なくし兄を親ぞとおもふべし必ず不義の心もつなし
なには又弟をそと思ふへしなはきみたまへかへす〳〵も
よくゆゑふ兄弟なかもなしくなるよくふれなれて身をしるぞよき
親は事常に忘れぬものならは兄弟なかのなしき事なし
はなれてもはなれにくきは色と欲仇なる色に迷ふへからを
何事もしなんぬんべほ先にしてさて其後に事をなすべし
五常とは外になるぞと思ふなよ皆人々の身はうちになり
人々くらひならそひする事なかれ身をへり下て人をうやまはせよ物いふに人は耳ふこるゝやうな
る事にくき事をいふまじき事下々ずいぶんあさばやわらかにあつかいてよしせんしかる事なりとも
もあさばきたなくごうよくにしかるまじき事心ひろく體ゆたかにしとやかに身をもつ物なり
女兄弟わけてふびんに思ふべし

明和六己丑五月廿五日　流憩書

與三兵衞以下代々相續勘兵衞ト稱ス七代ヲ鐵助源政ト云フ維新後陸軍大尉タリシカ明治廿七年征淸ノ役占領地淸國安東縣ニ在テ死歿ス

丹羽久左衛門氏廣

丹羽氏廣 金十郎、按系譜後改稱久左衛門

丹羽氏廣、與丹羽勘助氏次同宗、永祿六年年甫十九、謁　東照公於濱松城、賜祿六百石、屬大須賀康高、高天神長久手諸役、皆從而有功、小田原役亦有功、與曾根福岡等共有特恩、關原役起旣致仕、東照公强起之赴軍、後屬公、寬永九年歿、年八十一、子金十郎氏信襲家、丹羽系譜

按大須賀五郎左衛門康高、初稱六藏、仕參河上野城主酒井將監忠尙、十七八歲時、將赴岡崎、路與人鬪立斬敵六人、傷而匿人家、土人群集捕之、會　東照公、諸伊賀鄉八幡祠而聞之、喜其膽略、拉歸岡崎、命治其瘡、愈而遣歸、及後忠尙亡、公召六藏而祿之、改稱五郎左衛門、賜偏諱名康高、命爲先鋒隊將、後使率其隊治橫須賀城、及公移封駿遠、使安藤直次統其隊、後公又移封紀伊、直次率以移焉、因以直次爲先鋒隊將、統之如初、因稱曰橫須賀隊、

又按橫須賀隊九十人、其最顯者、曾根孫太夫長一、渥美源五郎勝吉、久世三四郎廣宣、坂部三十郎廣勝、丹羽彌惣氏吉、丹羽金十郎氏廣、福嶋太郎八光忠、呼曰七人衆、特被禮遇、後久世坂部二人歸麾下、(按其子孫仕紀伊)五人從公移紀伊、獨丹羽氏吉有故不祀、其餘顯然以至今、稱曰御加恩衆

丹羽金十郎氏信

丹羽久左衛門氏廣

丹羽金十郎氏信

家　譜

丹羽久左衛門氏廣　一色公源十三代丹羽若狹守氏清ヨリ三代尾張岩崎城主 丹羽勘助氏次弟丹羽次郎助氏重惣領　初金十郎　生國尾張

永祿六癸亥年月日不知於遠州濱松十九歲ニテ初テ　大御所樣ヘ御目見仕知行六百石被下置大須賀五郎左衛門康高ニ御預ケ被遊横須賀ニ罷在高天神其外所々御陣之御供高名仕天正十二申年尾州長久手御合戰之節ハ三好孫七郎陣ヘ働入高名仕同十八寅年相州小田原御陣之節勇功之働有之付翌卯年七月從　權現樣於上總國爲御重恩貳千百石曾根孫太夫久世三四郎坂部三十郎丹羽彌惣福岡太郎八金十郎淺美源五郎ニ被下置三百石充配當可仕旨被　仰付御代官證文七人連名孫太夫方ニ所持罷在候

御加恩地御證文寫ハ曾根孫大夫傳ニ揭ケ爰ニ略ス

一右小田原御陣之節夜軍有之其夜依働於　御前御肌御守リ錦之御陣羽織御香箱拜領仕候御肌守リハ今以所持仕御陣羽織御香箱ハ先年洪水之節流失仕候

一慶長五子年關ケ原御合戰之節御供高名仕候其後奉願家督無相違惣領仁右衛門氏信ニ被下置隱居仕候處追テ年月日不知山之手御要害御預ケ被遊再勤仕新知三百石被下置名久左衛門ト相改メ候樣被　仰付候

一元和二丙辰年　南龍院樣ヘ横須賀之諸士被爲進候節久左衛門儀モ御附被遊候

一同五己未年御國替之節紀州ヘ御供被　仰付御留守居足輕御預ケ被遊格別之品ヲ以テ御普請役モ御宥免被遊都合五十年相勤申候

一寛永五戊辰年四月廿日病死仕候于時八十一歲

丹羽金十郎氏信　久左衛門氏廣惣領 初仁右衛門　生國駿河

父久左衛門氏廣家督年月日不知無相違被下置元和二辰年　南龍院様ヘ横須賀之諸士被爲進候節仁右衛門儀モ御附被遊同五未年御國替之節紀州ヘ御供仕寛永十二亥年九月七日病死仕候

右以下代々相續御加恩知三百石モ無相違相續之處四代金十郎氏治ニ至リ元祿十一寅年三月廿四日右御加恩地金十郎所務ノ分就御用被　召上駿河國ニテ左ノ通替地被下置

駿河國安部郡之内　高合百五拾石

同國駿河郡之内　同合百貳石九斗七升九合

同國同郡之内　同合四十七石貳升壹合

合高三百石

右替地代々所務委細ハ祿制御加恩地之條ニ詳ナリ而シテ八代金十郎氏幹ハ寛政十年年高貳百石御加恩地三百石ニテ御小姓組勤タリ

初代金十郎後久左衛門ハ惣領仁右衛門氏信ヘ家督ヲ譲リ氏信同ク　神祖ヘ奉仕之處御附人トナリタルヲ以テ子孫代々本家相續御加恩地ヲモ所務之品件之通リニシテ久左衛門隱居後再勤新地ヲ賜リ尚又御附人トナリシヲ以テ孫則チ仁右衛門氏信之次男久左衛門正武ヲ養子トシ別家ニテ相續依テ御附人之家本末兩家トナレリ其品左ノ如シ

別　家

丹羽久左衛門正武　久左衛門氏廣再勤之養子同姓金十郎氏信次男　初名不知　生國紀伊

寛永五戊辰年月日不知養父久左衛門爲跡目知行三百石無相違被下置大御番被　仰付延寶五巳年十月十二

丹羽久左衛門正武

日病死

右以下代々相續七代久左衛門氏音天保十四卯年十二月御切米貳拾五石新御番ニテ病死養子駒吉恒安家ヲ嗣ク

丹羽平助

家譜

丹羽平助 実名不知 丹羽又左衛門惣領 生國尾張

權現樣遠州濱松御在城ノ節年月日不知被 召出祿高不知大須賀五郎左衛門康高ヘ御預ケ被遊所々御陣ノ御供仕働之レアル由申傳ヘ候ヘ共舊記留録相知不申其後年月日不知 南龍院樣ヘ御附被遊於駿州病死

一平助實子惣領縫殿左衛門始繩左衛門勝重

於駿府父平助家督被 仰付元和五未年御國替ノ節紀州ヘ御供六百貳拾石被下鐵砲頭相勤寛永二十未年六月廿七日病死

以下代々相續五代目宇右衛門勝之幼少ニテ家督減祿九代縫殿左衛門勝時御小姓組與頭五拾五石高ニテ安政六未十二月病死惣領安太郎勝春相續ス

丹羽彌四郎

丹羽彌四郎丁澄 生國尾張

尾州藤嶋ノ郷ヲ領知仕織田信長ニ仕罷在往年　權現樣參州岡崎ニ被成御座候節御出入仕度々
御前ヘ被　召出天正年中信長滅後一類共何レモ信雄ニ屬シ罷在小牧御陣之節ハ　權現樣信雄ト
御一味故忰丹右衛門（次男三男之譯不詳）ト申者ヲ岡崎御城ヘ人質差上御陣御供相勤候藤嶋ヲ領知仕候比ヨリ追
々數度之軍功有之由申傳ヘ候其後信雄衰微ニ付彌四郎儀モ領地ニ離レ一旦浪人仕罷在候處關ヶ原
御陣之節堀尾信濃守手ニ付致高名暫ク同家ニ罷在慶長年中大坂御陣之刻彌四郎儀　權現樣御持
御座候趣承知仕候付大坂表ヘ馳參天王寺ニテ御目通リヘ罷出御懇之奉蒙　上意則御供被　仰付御
歸陣ノ後於駿府（年月不詳）松平右衛門大夫殿奉リニテ御知行三百石被下置（御列物御座ナク候）　南龍院樣ヘ御附被
遊駿府ニテ屋敷モ拜領仕元和年中御國替之節紀州ヘ御供仕同七辛酉年九月十四日病死仕候（年月未詳）彌
四郎了澄實子惣領彌四郎了代父跡目三百石被下大御番被　仰付以下代々相續七代楠次郎（後彌右衛門）
了敬ハ七百石小十人頭格ニテ天保二卯年二月隱居惣領彌四郎ヘ六百石被下寄合被　仰付タリ

西村清左衛門久清

西村久清

西村久清、實外松氏、稱清左衛門、系出于楠諸兄、其先曰和国加賀四郎正清、爲和泉岸城主、父曰外松孫左衛門久氏、久清仕東照公、食祿貳百石、屬加藤喜左衛門部下、一日喜左衛門、謂久清曰、子委身于松平氏、而稱外松、豈非不倫哉、於是冒母氏、改西村、後屬公、增賜祿百石爲大番、弟八兵衛久次、襲家爲大番組頭、

西村八兵衛久次

西尾孫左衛門

西村清左衛門清久　外松孫左衛門久氏惣領　始外松金兵衛　生國三河

權現樣へ被　召出年月日不詳　御知行貳百石被下置御判物ハ無御座候加藤喜左衛門組附ニテ罷在候其節喜左衛門申候ハ松平之　御家ニ罷在候テ外松トハ如何ト申候付母方之苗字ニ罷成西村清左衛門ト相改メ申候其後大須賀五郎兵衛組附ニ罷在伏見名古屋丸御番仕其以後　上意ニテ松平式部大輔忠次へ御附被遊横須賀へ罷在候内ハ　權現樣御用相達御間番相勤元和元乙卯年月日不知　南龍院樣へ御附被遊御加增百石被下置三百石ニ被　仰付同五己未年御國替ノ節紀州へ御供仕大番被　仰付其後南龍院樣御簾中樣附相勤寛永十八辛巳年六月十八日病死年齡不詳　仕候處悴無之弟八兵衛別段ニ被召出相勤罷在候付跡目不被仰付八兵衛儀家名相續仕候

西村八兵衛久次　清左衛門久清弟　生國三河

元和六庚申年月日不知　新規被召出現米六拾石被下大番ニ被仰付其後御加增被　仰付高貳百石被下大番組頭相勤延寶二甲寅年正月廿四日病死仕候于時八十二歳

以下代々相續七代孫左衛門久隆小十人頭格貳百石ニテ慶應二寅年十一月隱居養子左平太久成百五十石寄合被　仰付タリ

西尾孫左衛門

一祖公外記ニ曰ク　西尾孫左衛門ハ武功モ有之ニ付五百石ニ御抱被遊候或時孫左衛門林彌市ト同道ニテ戶田八郎方之振廻ニ參

候處孫左衞門ハ大ニ酒ニ給醉暫ク眠候間ニ双刀ヲ被盗候付直ニ髮ヲ拂ヒ京都へ引籠候此趣申上候處流石髮ヲ拂ヒ候哉然レ圧眠候内ニ被盗候間可恥事ニテハ無之候間早々歸リ候樣可申遣トノ　御意ニ付其段申遣候得ハ若殿樣ノ難有御了簡ト感涙ヲ流立歸候ト落合十郎兵衞話候

孫左衞門ノ家譜不傳元和御切米帳ニ百二十石西尾孫左衞門元和九亥年知行五百石ニ成ル寛永十四丑年病死跡目不知トシ又駿河ヨリ御附屬御役々姓名錄ニハ大番衆三番五百石西尾孫左衞門トアリ駿河ニテ百二十石ニ被召出後五百石ニ御加增被下タルナルベシ唯御附人ノ否ハ不判然ナリ

仁科久大夫

仁科紋左衞門久之

仁科久大夫

家譜

仁科久大夫 實名不知　　仁科淸三郎惣領

父淸三郎知行三百石被下駿河ニテ　權現樣御賄頭相勤病死

權現樣御賄役相勤其後年月日不知　南龍院樣へ被爲附相勤病死

惣領久大夫實名不知於駿河被　召出御切米拾七石五斗被下御賄役相勤メ寛文七未年二月朔日病死惣領久大夫へ跡目御切米拾石被下以下代々相續之處初代久大夫ヨリ五代目專助叔父仁科伴五郎左京大夫樣方勤中享保十四酉年八月十八日同御家中上田理右衞門ト果合相果候付敵理右衞門ヲ打留度旨書置致シ立退家斷絶ス

分家

四代目久五郎三男紋左衞門久明新規被　召出　延享二丑年十一月　淨眼院樣御徒拾石三人

扶持被下以下分家ニテ代々相續三代紋左衛門久之ハ三十五石御留守居物頭格麹町御殿勤番ニテ天保十三寅年二月病死二男五郎次久迪相續ス

贄　掃　部

按スルニ 贄ノ家譜今傳ハラズ巨細ヲ知ルニ由ナシ唯左ノ記錄アリ

元和御切米帳ニ

高四百石　　贄　掃　部

被召出終身錄ニ

高四百石　　贄　掃　部

正保二酉年一郎大夫ト名前替リ有之元祿七戌年木水ト改同十丑正月病死跡目同苗彌次右衛門へ無相違被下彌次右衛門取來之知行三百石上ル

而シテ正德六年四月晦日　有德公　公儀御相續御供ニ被召連此時御小性勤高二百石掃部ト稱ス同年六月廿五日御小姓三百石ニ被仰付諸大夫主計頭ト改ム爾來御旗本トナリシヲ以テ　御家之家譜除キタルナランカ御家書武功働覺書中ニ左ノ記錄ヲ存セリ蓋シ本人ノ記スル所カ今之ヲ揭ケテ本傳ニ換フ

贄　掃部覺書

一參州一ノ宮に而掃部一騎乘出し敵之物見武者と出合頭に而勝負仕敵を打取高名仕候而手負申候是初高名也

一三州棒山之取手は信長家者佐久間大學持にて候其刻　權現樣御馬向候節掃部儀歩行にて十文字之鎗を持敵へ向申候敵も門を披六七十程にて待懸居申候松平又藏と申仁御旗本衆にて候馬にて跡より參候處を城内より鐵炮にて打申候へは馬のひら首へあたり其あまり矢掃部前之草摺へあたり申候由又藏儀は馬より落ち申候内に掃部儀（一張紙一番ニ鑓合聞猶下ノ二名仕）一番に鑓を合候又藏儀者其場にて討死致候　權現樣御下知にて御人數かゝり申候に付敵城内へ引取門を閉申處を掃部付入鑓を兩戸ひらの間へ入候に付くわんぬき指申事難成せり合申内に御人數一度に門を推開申刻掃部一番に城内へ入則御乘取被成候　權現樣御意にも掃部儀功者故兩戸ひらの内へ鑓を入申候と御擧被遊候由

一掃部儀前立物御葉指物は淺黄のつり鐘其節立物兩方打をられ指物にも鐵砲二つあたり申由右之首尾御旗本衆石河左兵衛殿より　南龍院樣へ書付被指上候由

一三州安祥の城に葛山備中小原肥前罷有候　權現樣御攻被成候刻御先手萩生少如本同松平筑後守手にて鑓合申候五本之内掃部鑓一本抽て敵を突崩堀下にて打取申候

一三州黒瀬と申處にて苅田小屋落しに參敵に付られ候時掃部馬を乘廻三度敵を追返候四度目に池之堤之柳有處にて足輕二三人のき來り候掃部其鐵砲をかり申候最前こみ候不存に重こみ仕鐵砲打候へば筒さけ指を損し夫より除申候其働酒井作右衛門米津藤藏見被申候

一大平と申所にて一揆おこり松平九郎右衛門と申人と立並弓にて射拂候其内御旗本御詰御利運に罷成候

一遠州月見里と申處にて久野三郎左衛門松平圖防守きりよせをいたし抱へ被申候今川衆寄來候時掃

部乘出し菖蒲はへの有所にかまり御座候にあたり七八人の内へ馬を入組打に罷成候久野覺之助本間十右衛門すけ來り候故掃部高名仕候

一天王山にて夜崩之時分掃部其外七八人ふみ止り候敵參候をさへいつれも高名仕候掃部も高名仕候

一掛塚にて海賊上り候時加藤比根之丞と掃部參高名仕り候

一高天神之沖之洲と申處にてせり合之時匂坂惣十郎熊谷小次郎曾根孫大夫福岡太郎八高名仕候掃部遲候て敵之除をしたひあげ巢戸之際にて高名仕候石にあたり甲之からくりはなれ三十間のすじ冑にて候へともひしけ申候

一江州姉川にて御一戰六月廿八日其三日前に馬上物見十騎斗被遣候姉川之はた國友村にて敵之物見六騎參候を見付何れも乘付申候天野傳六佐橋甚五郎杉浦野麻呂と掃部と四騎者もぬけて追懸候酒井與九郎馬はかたしに成三寸斗之馬七歳をくれにて候殊之外早く候て四人迄乘りこし候て敵之母衣武者へ乘付母衣までつかみ引寄組打に成候掃部早く乘付圍み腰差之武者を切落し高名仕候殘り三人之馬はしらの過たる馬にて實は遲く御座候佐橋が馬は小馬にて候故勝負之時をお候てたちのき候故下立敵之若黨を打申候

一箕形原御合戰之時あつき餅と申在郷にて信玄衆三騎に付られ返し合敵之中卷と掃部十文字之鎗にて馬上にて戰候十文字かまにて敵のうなじへかけ引落し渡邊半十郎除かゝり大事之除口に不入事を仕るすてよと被申候へ共下立頭よりかき候へ共のとわにかまひ手間取候内に中根喜藏若黨參引

仰首を取せ申候掃部高名と鎗に持そへ馬に乗かね候を中川大玄と申者かちにて走り參り掃部馬を

ばい取乘候て迯申候掃部は半十郎につき其目口より引取申候（原本ノマヽ）

一長篠にて竹廣山上りにて高名仕候信玄衆弓にて射申候鏃なき矢にて左之眉の上に中り殊ノ外鼻血

たり申候

一高天神落城之砌高名仕候

一新府御陣之時御機嫌窺に新府へ使に參り若神子にて高名仕候

一長久手之時稲場村にて高名仕候

一大閤樣小田原御攻被成候時山中城一時乘に遊はされ候三川衆に戸田左門青山虎之助早く御座候掃

部も早く候て高名仕候

一臺德院樣眞田御攻被成候時牧右馬允酒井宮内榊原式部御先手にて候眞田安房守昌幸子息左衛門佐

信賀苅田足輕かけ候に付（「張紙　掃部見付右馬允殿へ申達候處ニ見合押拂候樣ニトノ儀ニ付掃部一番ニ旗入申故相懸候」――」內朱書）右馬允下知にて掃部榊原

滋右衛門兩人之旗奉行早く旗を推立懸り候故惣懸りに罷成候眞田父子を城へ追込申候右馬允者共

早城へ付き申候此段扱懸乙詮義に成　臺德院樣御機嫌損し大久保相模守榊原式部大輔旗奉行は切

腹被　仰付候右馬允酒井宮内渡邊忠右衛門旗奉行共にも切腹可爲仕旨本多佐渡被申渡候へ共右馬

允私乙下知にて旗を推させ候間敷と斷を申上内々にて掃部も改易被申付候宮内忠右衛門者も同前

にて候由久敷事共あらまし書付候故相違可有之候

本間季近（五大夫○按駿河分限帳、在大小姓衆列、祿六百五十石、）

本間五大夫季近

本間季近、初仕北條氏直、屢有戰功、北條氏亡、仍黑田忠之仕東照公、賜祿貳百石、大坂役從焉、後屬公、賜祿八百石、爲先手物頭、元和四年歿、年六拾貳、子五大夫可近、亦仕東照公、大坂役從焉、後亦屬公、賜祿六百石、爲大番組頭、轉爲勘定奉行、祿至八百石、明曆元年歿、（本間系譜）

本間五大夫

同次郎大夫

本間五大夫季近（本間山城兵衛五郎國季入道學法六代 兵衛五郎長季男　生國遠江）

家　譜

北條氏直ニ屬度々軍功有之感狀等給之候同家落去之後天正十九辛卯年松平右衛佐殿御充次ヲ以

權現樣へ被　召出（月日並御役儀不知）於武州之内御知行貳百石被下置候（御判物無御座候）右五大夫儀先年遠州高天神相木籠城之砌從　權現樣御味方仕候樣每度奉蒙　上意候得共　御受不申上候付被　召出候節者相州之本間ト申立候由之處或時右衛門佐殿　御前ニ被在之遠州本間之儀ヲ被　仰出候付只今御家ニ罷在候五大夫者遠州之本間ニテ御座候旨被及言上候處御機嫌宜爲御加恩大和物成貳百石被下置足輕三十人御預被遊大坂兩御陣之供奉仕元和二丙辰年（月日不知）　南龍院樣江御附被遊高八百石餘被下御先手物頭相勤同四戊午年三月七日病死仕候干時六十二歳

右五大夫季近儀大坂御陣之後（年月日不知）　權現樣御手自唐蠟燭拜領仕于今所持仕候

本間次郎太夫可近

次郎太夫可近（季近實子惣領 始小市郎後五大夫）　生國武藏

慶長十六辛亥年（月日不知）部屋住ヨリ　權現樣へ被　召出（御役儀高不知）大坂兩御陣之供奉仕元和二丙辰年

臺德院様へ御附被遊同年二月廿日從　臺德院様御知行貳百石被下置候右御證文寫

御知行書立

合貳百石者　　イタミ郷之内

右可有御所務者也依如件

辰　　長谷川七左在判

松下孫十郎在判

二月廿日

本間次郎太夫殿

同三丁巳年（月日不知）從　臺德院様南龍院様へ御附被遊同四戊午年父五大夫爲家督高六百石被下大番組頭相勤同五己未年國替之節紀州へ供仕其後段々役替御加增被　申付高八百石被下勘定奉行相勤明曆元乙未年五月廿二日病死仕候（于時五十七歳）

可近惣領五大夫近常家督相續之處寛文八申年病死養子五大夫近照家督二百石被下後三百石五十人者頭ニテ寶永三戌年六月病死嗣子無之嫡家斷絕ス

一季近次男十左衛門次年ハ　權現様へ被　召出子孫御旗本ニテ相續三男ヲ藤村角左衛門ト稱シ濃州戸田左門ニ仕フ四男七右衛門ハ　南龍院様へ被　召出別家ニテ相續之處後斷絕ス

分家

本間五兵衛可英（季近五男 生國駿河 始兵命又五左衛門隱居後了恩）

寛永十三丙子年十一月日不知　南龍院殿代新規被召出現米二十石被下小十人相勤段々役替加增被申付高三百石被下廣敷用人相勤延寶八庚申年四月十九日依願隱居被申付惣領猶右衛門ニ爲家督高貳百石被下猶右衛門充來候現米貳拾五石爲隱居料五兵衛ニ被下元祿十二己卯年九月十八日病死仕候年齢不詳

可英惣領五兵衛初猶右衛門季曉寛文八申年三月部屋住ニテ貳拾五石新御番ニ被召出延寶八申年四月父家督貳百石被下後三百石御先手物頭トナリ正德元卯年四月病死以下代々相續八代榮之助季榮知行百七十五石大御番ニテ安政三辰年六月病死養子芳郎季驕家ヲ襲ク

細井長大夫

細井長大夫實名不知　生國三河

家　譜

年月日不知　權現様へ被　召出　上總介様へ被進知行千石被下置相勤罷在候處　上總介様勢州淺熊へ御移リ被遊候後知行貳百石被下置　權現様へ奉仕候知行ノ御朱印モ先年火災ノ節燒失仕候　南龍院様へ御附被遊貳百五拾石被下元和五己未年御國替ノ節紀州へ御供仕候御役不知

一萬治二巳亥年十二月日不知病死仕候年齢不詳

惣領角左衛門後長大夫部屋住ニテ被　召出御切米四拾石ニ至リ萬治三年父跡目知行貳百五拾石無相違被下以下代々相續六代八左衛門正備御切米六拾石御供番格本役同様勤ニテ文化十四丑年八

本多八藏

本多甚九郎吉光

月三日病死惣領喜内方陳相續ス

本多八藏 元和御切米帳終身祿ニハ本田トアリ

本多八藏 實名不知 本多八藏惣領

家譜

本家ハ本多中務大輔家ニテ祖父武左衞門ハ三州ニテ　道閑樣へ御奉公相勤候父八藏儀ハ

權現樣へ被　召出御奉公仕信玄東三河へ出陣ノ刻鳳來寺山家ヨリ味方ヶ原ニテ御合戰ノ節十九

歲ニテ高名仕長久手陣之節岩崎ト申所ニテ森勝藏ヲ討取申候其後於蟹江之城討死仕候

一年月日不知於駿河　南龍院樣へ被　召出三百五十石被下置御役不知其後御加增被下置知行四百石被

仰付寬永十四丑年病死仕候

惣領八藏寬永十四丑年父跡目知行四百石無相違被下延寶三卯年病死以下代々相續四代目八藏初市太郞御切米六十石御膳番勤メニテ正德六申年四月晦日有德院樣御供ニテ　公議へ被召出六月廿

六日御小納戶三百俵被　仰付志摩守ト改メ代々御旗本ニテ相續ス

分家

本多甚九郎吉光 初代八藏二男

寬永十一戌年新規被　召出御切米貳十五石被下置正保四亥年御切米四拾石被成下後御留守居番被

仰付元祿三午年三月五日八十八歲ニテ病死

以下代々相續五代八彌章敵御切米三拾石獨禮小普請ニテ寛政二戊年四月十九日病死惣領紋三郎義勝跡目ヲ嗣キ後享和二戌年九月改易被　仰付タル如シ

堀田重保　勘平○按駿河分限帳、在御旗奉行兼御使番衆之列、祿八百石、

堀田重保、關原役、從小早川秀秋有功、大坂兩役、從前田利長有功、後公召而祿之八百石、爲旗奉行、寛永十二年歿、子右馬丞清長、襲家爲鎗奉行、寛文十三年歿、　堀田系譜

堀田勘平重保

家　譜

堀田勘平重保　大人紀朝臣三十一代從五位下尾張守之高八代堀田帶刀正秀次男　始平八郎　又小一郎　生國尾張

從五位下尾張守之高儀　久明將軍從京鎌倉江　至之時之高以有罪旨　伏見院　叡聞業　勅勘正應二年尾張國中嶋之郡爲浪人、延慶四年依　王命爲尾張國郡司、任從五位下尾張守之高八代之男堀田帶刀正秀儀能登畠山義則歿落之時其家老溫井備前守三宅備後守逃往越後依景勝、於是信長使柴田勝家守越前、前田利家居能登、信長薨逝、能州石動山僧徒潛還人於越後、召溫井三宅以爲內應溫井三宅借兵於景勝、到石動山、利家乞救於柴田、柴田甥、佐久間玄蕃允、在加州、卽卒貳千五百人馳到戰敗溫井討死三宅揮長刀殺數人正秀大呼接戰以鎌鎗突倒三宅斬其首時天正十壬午年六月廿四日右正秀次男堀田勘平重保儀金吾中納言殿手に罷在候時分慶長五庚子年九月十五日關ヶ原御陣御勝利翌十六日金吾中納言殿田中兵部殿被　仰付佐和山城御攻被成候佐和山には石田杢

助宇多下野守石田隱岐守籠りかゝり尾の丸赤松下總介持しを平岡石見松野主馬攻候則堀田勘平一番付管田四郎左衛門續之勘平手負諸軍より見て褒美仕候由其後大坂御陣之時分は加州筑前守殿に罷在り極月四日眞田左衛門出丸之南小場瀨篠山に伏兵有之候付筑前守殿之内山崎閑齋奥村伊豫守手にて右之篠山を取卷さかし候節勘平儀早く乘付働鐵砲にて手負申候同夏御陣之時落城之日三の丸へ早く着働申候事右之外に武功之儀毎々有之候付所々より之書翰等所持仕罷在候且大坂御陣之節鐵砲にて手負候節着仕候肌衣陣羽織共所持仕罷在候右正秀長男堀田圖書正親儀は於大坂討死仕候二男堀田平右衛門則兼儀も亦大坂討死仕候四男堀田勘左衛門正利儀者當時堀田大藏大輔殿先祖堀田加賀守正盛之父にて御座候五男堀田藏人正行儀後に出家仕上敬上人と申候六男堀田休卜齋（實名不知）にて御座候得共記錄留缺にて右悴共之儀委細相知れ不申候

年月日不知於駿河　南龍院樣へ被　召出知行八百石被下置候最何御役に被　仰付候との儀は記錄留缺にて不詳候得共御國へ罷越候節は御旗奉行相勤罷在候其節之知行月錄于今所持罷在候

一寛永十二乙亥年十月六日病死仕候（年齡不詳）

孫之丞清長（勘平重保惣領　始四郎三郎又右馬丞）（生國紀伊）

一年月日不知於駿河部屋住ニテ　南龍院樣御小姓被　召出知行三百石被下置其後（年月日不知）有故テ御國ヲ立退於大坂一向宗木津村願泉寺へ罷越同寺之聟ト成候處其後（年月日不知）歸參被　仰付本知三百石被下置寄合被　仰付浪人五年之間之物成不殘被下置候

一寛永十二乙亥年（月日不知）父勘平爲跡目知行八百石無相違被下置候（御役儀不知）後御使番御持筒頭勢州役根來頭

等ニ轉勤ス

一寛文十一辛亥年八月八日豐嶋半之丞元組御鎗奉行被　仰付候

一寛文十三癸丑年正月八日病死仕候 年齢不詳

清長惣領孫之丞博道父跡目六百石被下以下代々相續六代勘平正孝六百石高大組格ニテ安政五年

年正月病死嫡子右馬丞正朝跡目相續ス

堀部五左衛門

家　譜

堀部五左衛門 實名不知 始奥太夫 生國近江

江州長濱堀部之者ニテ蒲生飛驒守方ニテ貳百石所務之處後牢人ニ罷成慶長六丑年若林五兵衛肝煎ニテ於伏見　權現樣へ御目見御奉公願候處駿府へ罷下リ可申旨被　仰付大坂御陣御供仕御歸陣ノ後被　召出駿府御城四足口御舞臺屋敷御花火櫓御預ヶ被遊右御屋敷内ニテ御小細工奉行被　仰付御切米拾五石三人扶持被下　權現樣御他界之後　南龍院樣へ御附被遊御入國之節紀州へ御供御藏奉行相勤

元和九癸亥年二之丸御殿建之節御用相勤

寛永元甲子年廣御殿建之節地形築セ御用相勤

同二乙丑年伏見御藏建之節右御用相濟右御藏留守居被　仰付伏見へ罷越

同五戊辰年伊豆御普請御用相勤
同七庚午年和歌御宮御破損ニ付御用相勤後御藏奉行幷過料缺所藏御預ヶ被　仰付
同二十一甲申年三月十一日病死
五左衞門惣領松齋父跡目へ十五石三人扶持無相違被下以下代々相續七代六郎左衞門忠備天明七未年十二月廿七日不埒之品有之御暇八代三次郎承興天明八辰年柔術出精ニ付三人扶持被　召出文政四巳年四月十一日御切米十三石獨禮小普請ニテ病死九代常吉常興文政八酉年三月十三日出奔ス

堀江次左衞門

堀江次左衞門

家　譜

堀江次左衞門 實名不知　堀江次左衞門 忰始治右衞門

父次左衞門天正年中　權現樣へ奉公關ヶ原御陣之節天野甚右衞門支配ニテ御供大坂御陣へモ御供仕　權現樣御他界之節元結拂久能山ヘモ御供仕駿河ニテ病死
次左衞門慶長十七年壬子駿河ニテ部屋住之節十九歲ニテ　權現樣へ被　召出御徒相勤元和五未年　南龍院樣御入國之節　御供仕明曆二申年隱居死去之年月日不詳
以下代々相續六代條右衞門安泰文化元子年小十人小普請被　仰付士席ニ列シ七代條右衞門常春十三石小十人小普請ニテ文政九年七月病死養子貞次郎弘道跡相續ス

堀江三藏

家　譜

堀江三藏 實名不知 生國三河

權現樣へ御奉公御草履取相勤御入分ノ節　南龍院樣へ被爲附御中間小頭相勤元和五未年御入國ノ節御供仕其後病死年月不知

以下代々相續五代德左衛門擧忠寛保二戌年織部正樣方御坊主ニ被　召出明和二酉年小十人格御切米拾五石被　仰付以來士籍ニ列シ七代包三郎敎道貳拾五石新御番ニテ文政十二丑年四月病死惣領鉦吉道完跡目相續ス

堀江平藏

堀江平藏政晨 堀江甚左衛門政涌養子 實和州宇智郡大津村醫師表野元英次男 生國大和

養父甚左衛門ハ 享保十二年射藝ニテ新規被　召出タル甚左衛門政忠養子ナリ本家初代ハ甚之丞政勝ト稱シ同ク射藝ニテ貞享四年新規被　召出三代彌一兵衛ニ至リ改易本家斷絶ス 元文三午年養父之跡目ヲ襲キ御切米拾五石十人組並小寄合ヨリ累進御供番頭格奥勤知行四百石ニ至リ享和二戌年九月五日七十九歳ニテ病死ス平藏ハ甚左衛門實方之甥ニテ明和八卯年八月甚左衛門養子トナル字ハ鷄鳴松樹ト號ス學識才幹アリ　舜恭公之御初政ニ當リ御政事改革ノ事ヲ上書ス　公之ヲ援擢斷然御用御取次ニ擧ラレ御直書ヲ賜フテ御改革ノ事ヲ一任セラル於是平藏奮然大ニ爲ス所アラントシ首ニ重臣初之賞罰ヲ正シ嚴ニ國用ヲ節シ藩中浮置歩増之事ヲ規畫ス然レ𪜈不幸僅ニ

七閏月ニシテ病歿遂ニ事ヲ果サズ維新前津田又太郎ヲ大ニ御拔擢御改革アリシ他ニ近世ニ於テ平藏如キ諸士ヨリ一時ニ重臣ニ擧ラレ御任用如此事絶ヘテ之ナク大平無事之時ニ當リテハ實ニ非常ノ大英斷ナリシナリ僅ニ六七月政蹟ノ以テ存セサルハ固ヨリ論ナシト雖モ後世改革之談出レバ必ス平藏ヲ押シテ歎惜セシヲ以テミレバ技倆頗ル凡ナラサリシナランカ平藏ノ事歴家譜記スル處左之如シ御政事改革ノ事ハ　舜恭公文化三年ノ條ニ詳ナリ合セミルベシ

一寛政六寅年五月廿日養父甚左衞門久々出精相勤候ニ付部屋住ニテ被　召出御近習番格被　仰付御切米貳十五石被下置

一同年九月四日御小納戸格被　仰付

一享和二戌年十二月廿日養父甚左衞門久々相勤候付爲跡目知行四百石無相違被下置

一文化二丑年九月十四日江戸表へ罷越可相勤旨被　仰付

一同三寅年二月朔日御用御取次被　仰付

一同年於江戸蒙　御内意候御直書之御書拜領

一同年四月御供ニテ罷歸ル

一同年六月朔日此度御改正ノ御趣意ハ　公邊ヘモ御内々被　仰達候處御尤成御趣意ニ　御聞被遊御滿足思召候右ハ年來經濟之儀相心懸ヶ舊冬以來ハ其方趣意モ　公邊へ相聞エ有之事故御時節柄ニハ有之候ヘ共大御番頭格被　仰付御加增貳百石被下置八百石ノ高ニ御足米被下置

一同日此度之被　仰出ニ付政府へ罷出候節ハ鈴木五兵衞次へ着座可仕旨被　仰付

一同日御用之隙ニハ評定所ヘモ罷出御勘定奉行トモ申合可相勤候大御番頭トモ申合頽敗ヲ振ヒ諸組之勵ニ相成候樣可致敎諭旨被　仰付

一同月三日内存奉願趣能相聞候儀ニ　思召候間存念之通此度被下置候御加增米貳百石差上ケ可申旨被　仰付

一同年八月十四日病死　于時五十七歲

同年八月廿三日嫡子八千藏ヘ平藏知行當所務被下置十月七日ニ平藏格段出精候品モ有之ニ付八千藏ヘ爲跡目知行四百石無相違被下寄合被　仰付タリ

紀伊國人物誌ニ平藏之碑銘齋藤大雅撰シ若山圓福院ニ建設ストアリ

一乞言私記ニ曰ク　堀江平藏(名政長字鷄鳴文化丙寅年)文武之心掛厚朝ヨリ暮マテ稽古場ヲ廻リ修行ス後御用御取次トナリ御儉約ノ御主法立五ケ一ト唱フ江戶御家中間地ニハ畑ヲ作ラセ文武ノ御世話殊之外有ケルサレ共新法ハ人ノキラフ者ト見ヘ落詞ニ

手もしぬに畑をほくるくそやらふお里れ忘をゑ芋堀江との

惜哉俄ニ病テ死ケリ

按スルニ平藏ノ事信幼年ノ比古老ノ談柄トセシヲ聞得シ事アリシガ今ハ多ク忘レタリ江戶邸庭園周圍ノ板塀ヲ往々土塀ニセント計リシモ此人ナルヨシ丸山口ノ邊ニ土塀ノ殘リアリシハ親シク見ル所ナリシ同人體短少色青ク口數多カラズ端座シテアリシト共比政府坊主ヲ勤メタリシ伊藤吉左衞門語レリ

堀内清大夫

堀内清大夫　彥大夫廣德　清八郎信高附

堀内清大夫正矩　三州八名郡堀内村居住　生國三河

家譜

慶長八癸卯年十七歳ニテ　權現樣御膳方ヘ被　召出大坂御陣之節御供仕夫ヨリ駿河ヘ御供仕相勤其後御人分ノ節　南龍院樣ヘ被爲附御膳方相勤元和五己未年御入國御供ニテ紀州ヘ罷越延寶四丙辰年九月廿八日九十歳ニテ病死此比御切米八拾石五人扶持被下置候旨申傳候

正矩惣領助右衞門正重正保四丁亥年部屋住ニテ被　召出御膳方相勤後御廣敷役人被　仰付元祿二己巳年正月病死以下代々相續六代ヲ彦大夫庸德ト云フ

堀田彦太夫庸德

彦大夫庸德　九右衞門正庸惣領　始德太郎後嘉藏ト改ム　生國武藏

十二歳ニテ父九右衞門病死之處駿河越筋血脈之者故右之品御立寶曆七丑年十月三人扶持被下雜ヘ御入被成後追々昇進天明元丑年表御右筆日記方小十人格被仰付同六午年九月御内々御用ニテ肥前長崎ヘ罷越百二日逗留歸路勢州三領巡回同七未年十月御用ニテ勢州ヨリ熊野巡回若山ヘ到リ又々勢州ヘ立寄同所ニテ圍籾取建荒救富國之儀農工商ヘ演說敎諭同八申年二月在中御救御用取調同四月ヨリ御用役佐野伊左衞門ニ屬シ勢州巡在大坂若山等ヘ奔走六月ヨリ伊左衞門同道熊野ヘ巡回夫ヨリ若山大坂勢州等數回奔走同年十月又々勸農救民荒救交易富國賑撫之御用被　仰付於自宅取調寛政元酉年七月御膳奉行格中奥詰三拾石高御用役部屋ヘ可罷出旨被　仰付同二戌年二月二日御人拂ニテ御前ヘ被　召出御用被　仰付翌三日江戸出立若山ヘ着同年十二月於若山病死于時四十六歳

右勸農救荒御用勤務中左ノ數書ヲ著述板行各一千部ツヽ御領分中民間ヘ施行ス

百姓教訓追加入　農業口號歌　遊穀仙方
試水論　客舍福德記
一寛政元酉年三月白鑑一篇目鑑抄及ヒ選擧大概一篇ヲ撰述獻呈ス又　香巖公御言行錄一篇ヲモ
編纂セリ
按スルニ　天明六七年ノ比ハ天下未曾有ノ大凶荒ニヨリ救荒撫恤ノ事　香巖公深ク御憂慮遂ニ御領中一ツノ飢餓ナキニ至リシハ御本譜ニ載スル所ノ如シ此際佐野伊左衛門及彦大夫等ニ特命アリテ紀勢熊野ヲ頻繁視察以テ賑恤救護ニ汲々盡力セシメ給ヒシ也故ニ彦大夫ヲ數々御前へ被爲召御親問或ハ御内旨ヲ蒙リタリト云フ
一乞言私記ニ曰ク　堀内彦大夫學問ヲ好ミ經濟ニ志アリ若山へ參リ熊野邊へモ巡見致シ村々立ユキヲ心懸利ヲ起セシトゾ海へ蛎ヲマキシ故今ニ其利ヲ得ルト云フ

堀内清八郎信高

清八郎信高　彦大夫庸德孫　初庄助　隱居後短齋　生國江戸
文化十四卯年御徒助三人扶持後表御用部屋認物勤年々銀七枚トナリ文政十二丑年七月於江戸關口流柔術稽古場頭取ヲ井内常右衛門へ初テ被　仰付候付作頭共罷出場内取締方行屆世話可致旨被　仰付天保三辰年十月父彦大夫矩定跡目御切米三拾石大御番格小普請被　仰付同年十二月小普請組頭三拾五石高ニ御足被下後六十石高ニナリ嘉永六丑年四月御作事奉行被仰付安政五午年六月御小納戸頭取被　仰付元治元子年六月新御番頭格與請ニ轉役同年八月小普請支配貳百石高ニ御足被下慶應二寅年十一月久々出精相勤其上配下取扱向且文武之世話厚行屆候趣一段之儀ニ被思召依之御加增地方百石ニ被　仰付貳百五拾石ニ御足高被下置同三卯年三月御改革御役廢止ニ付勤仕並被　仰付同四辰年七月依願隱居久々相勤候付知行百石無相違惣領四郎吉ニ被下置　明治六酉年十二月

八十二歳ニテ歿ス

一右清八郎信高ハ即チ信ガ父也其言行信之ヲ記スルハ敢テ私スルノ嫌ナキニ非スト雖モ既ニ諸臣ノ傳記ヲ編ス因ヨリ親疏ヲ論シカタキカ正記直筆憚ラサルハ輯史ノ定則不得止ノミナラズ却テ現時ノ古老乃至嘗テ其僚屬ニ在リシ輩ヨリ聞知セシコト亦少ナカラス而シテ之記セサルハ亦私ヲ免レズ依テ信ガ記得セル所ト共ニ併セテ左ニ敍列スルモノ也

信高人となり眞率樸實滿腔快豁一點の疑念を狹まさる恰も赤子の如し故に人の善且美を聞けは感泣是を稱賛し其非曲を聞けは直ちに面折す權家上官と雖も毫も假借せす常に曰く面從後言は不信切の極士道に有るましき儀と常語甚た大聲傍若無人也故に人呼て堀内の雷と稱す雷の綽名は小兒と雖も知らざるものなし

一性苟も隱匿私密を好ます人密語せんとするも大聲應答意となさす曰く士たる者は後ろ闇き事なき筈也己れか非は直ちに改むへし人の曲は直ちに面折すへし若し誠意忠實公に奉し絶て非分を願はす私利を謀らされは人に對し隱匿すへきものなしと信少壯の時赤坂邸内官舍に父と共に居住す外圍杉の生垣なれは通路之人心なくも家族團欒飲食等の狀を覗き去る信之が目隱しを設けんことを乞ふ信高曰く博奕をなすに非ず法度を犯すに非ず人の覗き去る何ぞ妨けんとて許さす

一常に曰く人間の上には虛言はなき筈也己れ虛言なきは固よりにて人も虛言なき筈也とされは小兒輩偶然の戯言にそれはうそ抔といふ事あれば痛く呵嘖して決て措かす酒を進むるに其人世辭詞に酒は不調法也と一旦いへは再ひ酒をすゝむる事なし家人等實は其好酒なるを知るか故他日來れる

時酒を出しすゝむれは人の嫌忌するものを强てすゝむるは甚無禮也と叱咤せらる其人手持ち無沙汰のさま見るに氣の毒に思ひし事儘ありしか遂には人々も堀内か前には一言の虛妄もいひかたしと各こゝろする事には至れり

一維新後松坂に移住之時庭丁安兵衛なる者願掛にて草葱を絕ちものにしたるを家僕宗三郎年若なれは戯謔に別當との今日おまへには大層の御馳走なるそといひしを安兵衛はまた某をなぶるよと互にどよめき笑ひしを程遠き蔭にてちらと聞込宗三郎を特に呼ひ付汝は人の嫌ひのものを進むるや甚宜しからぬ事也と眞顏になりて叱咤す宗三郎あれは戯言に候と陳すれ共中々に承引なさす大に困却なしたりと宗三郎後年に語れり

一人來て飮食閑談長座に至る時は無益の長座は要なしいさ歸られよと促し歸らしむ上下親疏更に斟酌なし時としては未た歸られすは隨意に語らるべし予は眠に就たし失禮なすとて何の頓着もなく臥蓐に入て鼾聲雷の如し

一外戚某婚姻をなす信高家眷と共に往て祝す初て新婦と面するにおまへは大層色黑しといふ新婦俯して赤面す一座皆色を失ふ家に歸りし後家眷等其無情失言を訴へ餘りの事に實に冷汗を流したりと歎けは信高曰く色白きを黑きといひしに非す黑き故に黑しといひしのみ何の憚る處あらんと恬然たり後新婦も度々往來打解け語り合ふ事となりし故折として彼時は實に穴へでもいり度思ひ也しと語出互に笑らひに付したりき

一一友人憚名あり緣談周旋の事を信高に依賴す信高諾する如く諾せさる如し其人後又頻りに依賴し

て止ます信高尚遲々たり友人少しく色をなし斷金の中何故如此なるや若し子細あらは願くは明し吳よ故あつて明かさゝるは不親切の極甚友誼に背すやと詰る信高大に窮して曰斯迄言はるれは無是非然れ共必定立腹あらんを恐る故に言はさる也と其人聲へ如何なる事と雖も決して立腹すへからすと斷乎誓言せり信高曰く然らは實を吐んが予か家はすじ也と人皆云へりと友人面色を變し憤怒顯はれなから其場は事なく濟たれとも己れ闇打にして吳んずの勢ひと聞て當座は戒心怠らさりしか是一生の誤り也しと常に信に語れり

すぢとは癩病遺傳の事にて若此沙汰あれは闔藩婣戚を交ふる者なき也

一信高小普請組頭之職に在る二拾二年也小普請（往昔ハ童子組又ハ雑抔トモイフ）とは御家中布衣已下士席の者病死の時は其跡式被命之役名也（大御番格小普請獨禮小普請小十人小普請以下小普請トアリ）父祖五十年已上勤務之他はいつれも減祿亦小普請免さて免強く御扶持方もなしされば貳三十石以下の徒は無借財なるさへ生活容易ならさるに十に八九は負債山をなす極貧也又父の跡目にてなく己れ放蕩無賴乃至法度を犯したる罸により格祿被　召放小普請に入るあり之を刑小普請と云ひ拾年之間門戸を固く鎖して親戚も出入ならさる禁錮也されは家内打寄り密かに內職なる者を工夫し或は紙鳶を張り烟草刻み綱すき抔細そ〳〵の手細工に僅に露命をつなくさまと云信高打廻りとて月一兩回つゝ見廻るに家主の衣帶より下ををゝわされは立事不成又は冬猶單衣寒に堪へず屋上に登りて日光に背を晒らし居驚き下りて面するあり或は其子弟を夜陰に使し來るを見るに帶する奴刀と思ひしは全く竹也し抔種々の奇談も不少而も不敵の徒は尙懲悔せす竊に博奕を催し或は官房の横窓より邸外へ拔け出不法をなす等にて再ひ嚴罸を

棄り十年の禁錮十五年二十年に增すあり概言すれば小普請組頭は貧困不良の輩窟を支配して其生計を處理し飢渇を免れしめ傍ら品行を督し文武を奬勵して早く就職の道をひらき又は懺悔自新救免の恩惠に預からしめんと勉むるもの也江戸幕府小普請の總數常に百人に下らす則小普請の分十人已上とす之が身上に係る百般の願達立身出世之世話負債處理の方時としては裁判公事或は爭鬪刄傷の出來事等實に亂麻の如く紛雜煩務名狀すべからず信高能く事に練熟暗記無私公平着々處理の力を窮竟すされは兼てを不知者或は配下の親戚（他藩他所ノ者）乃至關係の町人等暑寒の進物謝儀折には賄賂的の贈品も不少れ共一切嚴に拒絕し一紙半錢も受けす曰く職務の煩勞固より其分也爲に俸祿を受く何を苦んで他人の報酬を受くへきや凡物を受くれは惡からす思ふは人情免れかたき處不識不知私意を萌し公務を誤らは飯の喰ひ上け折角の芳志は吾か敵となるへしと恐るゝ事蛇蝎の如し信紡年の時配下に係る公訴の雜事結了に至りしに其親戚旗下の士小田某德として音物を持參し深く陳謝す信高斷然拒絕携へ歸らしむ後信高の不在を窺ひ鮮鯛一尾を贈り來る家僕元より心得あれば固辭して受けす應答の暇に投入て走り去る故直に跡を追へども影を見失ひたり術なければ歸家を待て告るに信高大に怒り痛く呵嘖し直に僕をして小田方へ返還せしむるに彼は又再ひ持來らしむ又持歸へらしたるに時盛夏なれは遂に道にて腐爛し惡臭鼻を突て堪へさりしとの事信令に記して忘れさる也

一信高御作事奉行に轉職す此職内外修繕構造の事を掌るか故御出入町人職工より歳暮暑寒の音物贈品多し信高一切之を拒絕せんとするに左すれは屬吏小給の徒は幾分か家計補助の道を失ふ己のみ

拒みて屬吏は之を許さんと云ふにたとへ許さるゝ共配下たる如何ぞ獨り受けらるへきや且つ是は往古よりの定例にて決て賄賂に非す年來の恩顧を君上へ謝するの義務也と屬吏等の請願も亦難止然らは政府の許否を伺ふへしとて詳に具狀するに政府固より許可せり依て年中每季の贈品卽ち鮭幾本某砂糖若干誰々とゴマメカズノ子海苔一紙寸品迄贈人の姓名住所等漏さず横帳へ逐一記載して政府與御右筆迄屆出るを例とす信か輩も此記帳を命せられ中々煩に堪へさりし往昔以來如此事誰一人も致したるためしなしといふ

一小普請組頭は同僚（一人也）及ひ以下小普請組頭と共に每月十六日頭之宅に會し公務を議す長谷川新輔小普請支配の時夏の比也しが例の如く會し公事既に畢る時に門外夕鯛々と賣り步行を新輔呼止め購ひて如何に調理せんやと問ふ信高曰く烹炙却て新鮮の眞味を失ふ唯鹽にて足れりと直ちに鹽をふりかけ二三尾を頭尾骨共に喰ひ盡し舌打して飮酒す新輔元より剛氣其振舞を奇怪と思ひ貴益灰吹きの汚物を鑑中へ覆し混合同しく頭尾骨ともに食するに忽ち悉く嘔吐して殺風景を極む信高曰く余は折角の馳走可成其美味を欲して也然るを我慢をなし何の益あるやと嘲笑す新助も是にはあたまを掻きたりとなり

一御作事奉行配下には元〆手代下奉行等の小吏五十人計附屬す信高此職に就きし年の六月亞米利加國の軍艦初て浦賀に入港天下騷然爾來文武獎勵の事甚急也然れとも御勘定所御作事方の如きは刀筆算勘以て媚を取る事一種之長袖俗吏と度外視せられ己れ等も亦其如くに自認して尙武の風は地を拂ふ是因習最久しく今日に初りしに非ず信高曰く苟も双刀を帶する者武を學はすして可ならん

や況や時勢如此たとひ弓馬の職に非すとも劔柔は捨かたし公務繁忙晝間其暇なくは夜間になすへしとて局中へ教員を招き夜稽古を初め自身亦時々臨場督勵す於是少壯の屬吏小使に至る迄修業之者多く猶志ある者は公務の暇々晝間各自好む所の武場へ入り勝手に修業せしむ尙武之風大に勃興せり

一信高六十七歳にて御小納戸頭取に任す從來表役にのみ職を奉し不圖君側に昵近するを得たれは如此老廢の野漢如此御拔擢を辱ふし祖先に超過の光榮を蒙りしと感泣措く能はす　公尙御幼君なれは時として御遊戯將棊等の御相手をなすに固より眞率無我毫も憚る處なきを却て大に愛させ給ひ特に寵遇を蒙ると雖も君側の祕敢て語らされは信亦聞く處なし安政六未年三月十三日　公大師河原平間寺へ御早乘にて被爲成信高六十八歳にて御往來共騎馬御供を勤む人皆其矍鑠を稱す七十歳を過き兩山御豫參御供をもなし極寒にも曉七ツ時より（今ノ午前四時比）出仕高股立を取り膝上より寒水を十分にそゝきて供奉す少壯の御小姓御小納戸輩尙寒に不堪戰栗すれは今の少年何そそれ怯弱なるや膝上より水をそゝくへし決て寒き事なし亦感冒もせさる也と鞭策するに止むなく皆水をかけそゝきたるか實に閉口したりと時の御小姓たりし奈良正は于今信に語れり信高酷寒御供之時は必す燒き餅を二つづゝ袂に入れ用意す曰く空腹にさへなくは冷へ凍へる事はなきもの也と

一御小納戸頭取は奥之番を兼務奥役人と稱し內廷女中の應答監察の言上を取次又御小姓御小納戸他行には必す附添行く事也（御小姓御小納戸ハ平素願濟ニテ親戚縁者ヘ出入ノ外ハ他行不成也）該所職は春秋一回つゝ公許公費を以て墨水の賞花瀧川の觀楓等に一日の快を極むる事恰も籠中の鳥初て放たる思ひにて終年慰勞の第一となす

信高嘗て両職を率ひて淺草に遊行途中両國に到り晝餐を喫せんと回向院前之奈良茶漬腰掛店に入る衆其意外に驚き恥て入らす（此店ハ往來ヨリ見通シニテ江戸見物ノ田舍漢又ハ奴僕馬夫ノ如キ下等輩器具汚穢ヲモ厭ハスアンカケ豆腐ニテ安價ニ飽食ヲナス處ナリ御小姓御小納戸ハ常ニ美服綺羅ヲ飾リ艶裁花奢風ヲ學フ者トス）信高曰く公許を得て外出途中空腹を凌くに見榮體裁を裝ふへきや士たる者懦弱處女の如くにのみあるへからす少しは艱苦に堪ゆるの覺悟あるへし且つ如何に公費也とて濫費すへからす然る上は晩食には八百善如き有名の割烹店に入て美味珍膳思ふ存分の歡樂を盡すへし是れ偶々撒散せよとの君意に適ふもの也とて歸途には隨意の散財飲食に滿足せしと雖もなら茶漬には實に困り果て今に忘れすと亦奈良正の談なり

一信高七十三歳にて小普請支配に拜任老年に付調練の節出張は御用捨との恩命あり小普請組頭は平士同支配は布衣以上なり配下より遂に頭に登りし事江紀其例を見す實に非常の御抜擢（此時嘗テ信高カ頭タリシ長谷川新輔ハ刑小普請ニテ禁錮ノ身タリ時人其倒ニ驚ク）と感戴の餘りに壹首を詠せり

武士乃道さへたとりふみ見ぬにかく登りけん位山には

小普請の事務情實は固より熟習鍛練なれは一層奮勵文武を奬勵し品行を督責して拮据黽勉勤務の暇には月數回の會日を立て私宅へ漢學國學の教員を請し（漢學ハ榊原精一國學ハ小中村將曹則今ノ大學博士清矩ナリ）組頭初配下を集めて組頭初配下を集めて講義を聽聞せしめ幼若の徒は其手跡の淨書を徵し素讀の試驗をなして賞與を行ひ或は文武場を打廻りて配下の勤惰を督し調練出張御用捨にも不拘風寒暑濕尙届せす出場す

慶應元丑年閏五月長州再征の事起り　君上御總督として藝州廣嶋へ御發向永々御滯陣也しか江戸よりも一隊を編成先鋒水野大炊頭に屬せらる小普請中其選に當る者多し出陣に臨み信高別を告て

曰く苟も武官に長として此際卿等と共に一死以て國に報する能はさるは牛甲斐なしと雖も老廢許されす願くは卿等予に代て盡忠せよと涕を攬て懇諭依賴し人每に鰹節及ひ若干金を贐す後配下松嶋某藝州大野村にて戰死其赴及濺血の遺物江戶に達す信高慟哭遺族撫恤の方最も盡せり夫れ如此故にや慶應二寅年十一月賞褒あり曰く久々出精相勤其上配下取扱向且又文武の世話厚行屆き一段之儀に被思召依て地方百石に御加增貳百五拾石に御足高被下置之旨也文武長官多しと雖も如此御文段は近世に其比を見さる處也と云ふ

一嘉永七寅年十二月大船新造費途として紀州勢州の在町へ日錢御用金を徵收せられ御家中にも家計の都合に依り多少を不論上納金可致の命あり信高未た低祿家產頗る乏し不得止殘念を忍ひ五ヶ年間每暮金貳兩つゝ獻金請願の處年賦上納は來卯年より上納可致由大夫より指令す信高再願を奉して曰く既に六十三歲餘命なし悴代に至て是式の上納も叶ひかたし兼々御奉公筋心掛と雖も未熟の身何等の御奉公も不致殘念の折柄今回の上命こそ幸ひ不過之然るを來年迄上納延引の儀彌殘念に不堪必す當暮より上納いたし度由具申し遂に許可を得欣然履行して五ヶ年目安政五午年に至て上納を結了す抑該在町御用金の件は一時物議不穩の傾きあつて間もなく廢止に至り御家中も當座一兩年は各々年賦上納の事ありしもいつか泣寢入の如く成果飽迄遵守之者ありしを不聞恐らく信高壹人のみ加之信高は其翌年十二月又々願書を捧け冥加金皆納と雖も猶又爲冥加每暮金一兩づゝ上納いたし度旨を具申し爾來轉職之度每に請願し終に退隱に至る迄履行貫徹す慶應元丑年長州征討として御出陣之際御供をも不勤安居恐入候迚白銀三拾枚を獻呈同三卯年十二月時勢切迫の秋老衰

に及ひ御用に不適殘念に付責て御用途內へ差加へられ度旨にて冥加金百兩を獻せり是皆其至誠に發し自から一奇風あるを見るに足るへし

一小普請組頭の並高は四拾石也之に超過せし先蹤絕てなし然るを信高は弘化二巳年五拾石高に增し賜はる固より特旨に依ると雖も頭推擧之恩謝せさるへからすと家に祕藏せし文明年中の銘ある大身一尺餘の槍を頭長谷川新輔に贈る信幼ナ心ニモ痛ク殘懷ニ覺ヘタリキ總して自から奉する甚た節約偶々家藏重器あれは家に勝ちたる太鼓也とて人に贈與するの僻あり最も美術なる金梨子地蒔畫の印籠ありしか故もなく親戚高橋五助奥掛り御用人御勘定奉行兼帶ナリへ贈りたり明治維新の際松坂に移住の後其妹堀井大奥ニ御奉公四十年餘勤務若年寄也シカ先年中風證發シ下宿同シク松坂ニ移ル重病に惱み加ふるに口中劇痛の變證に苦みしかは念佛して氣を鎭めよと頻りにさとしたり然るに兩三日過て信高は極めて麁造木地製手遊ひの木魚而かも栗大の如きを隻手に持ち叩きて病者の枕邊にて大聲稱名し病苦を慰むるもの丶如し信不審に思ひいつれにて求められしにやと問ふに求めしに非す西町を通りたるに乞食體の者此木魚携へをりしゆへほしくなり腰に付けし處の象牙の根付と取かへんといふに彼はいと悅ひしゆゑ代へたる也と該根付は祖父の代より持傳へ珍重せしものなりしが如此し

一信高行爲必規定あり一旦斯と極めし事は決して中廢せす每月十七日芝　安國殿へ拜參小普請組頭中ハ神恩ヲ謝スルト共ニ配下ノ無事平安ヲ祈念ス又目黑不動尊又赤羽根水天宮ヘモ祈念シテ月參スと每月父母忌日の墓參は君側の職に轉する迄二十五年間缺參なし暴風雷雨には簑桐油草鞋にて參拜せし事信よく記する處也少壯の時脚氣疾を病み一七日の鹽氣を絕ち麥飯にて全癒せしとて爾來死に至る迄も朝は鹽氣を絕ち三飯共麥飯貳椀に定め又拘杞は衞

養に功ありと聞て年中之を蓄へ飯に混し茶に代へ用ゆる事十年一日の如し毎月の初には七日灸さて足の三里へ灸治する亦同し而して器具の設置臥蓐座布の敷方等必す方正ならしむ曰く双刀の置きやう履ものゝ脱き樣襖障子の閉け立にて人の心は知らるゝ也と訓誡嚴なりし

一信高常に布施を好む毎月初には自己使用金の内より第一に安國殿初め參拜の諸神社へ奉する賽錢を除き必す自から擅にて研き切り火打かけ澁紙袋に仕分け藏め其餘若干を乞食非人に可施料さなし外出の度毎に布施す途中行逢ふ非人乞食は一人も洩さす彼れ若し知らされは程遠きをも我より呼ひ招きて與ふ信幼年常に隨行分與の任に當る一日水天宮に行き乞食充滿す是幸ひと兩人して四方八方へ分與散布するに二重三重に貧るあり與へされば惡口罵詈す信恣怒すれは信高曰く怒りの布施甚た益なし惡口罵詈彼に損ありて我に害なしと毫も意に關せずされとも乞食に取りまかれ惡口を受る程不愉快の事なかりし君側に轉職の後は容易に外出叶はす偶々允許外出の時は布施に充る分剩餘ありとて二倍三倍して與へたりし

一信高文學なきを常に自から卑下し退隱短齋と稱せしも淺智短才之意也といふ然れとも其交る處皆一時の碩儒博學豪邁不羈の徒也遠藤通（白鶴義齋ト號ス通稱務助藩中有名ノ儒官乞言私記ノ著者也）榊原權之助（藩ノ儒者輔ノ後）上田善右衛門（西條家ノ儒官）松村養全（藩ノ耳醫）の如きは就中親友也長谷川新輔（武人）梅澤鐵平（馬術ノ師）服部半助（武人）井内常右衛門池端善作赤堀八助（共ニ柔術ノ師）輩と友としよしいつれも豪放不羈の名あり信高も亦茂田十右衛門（江戸ニテ關口流ノ開基ナリ）の一弟子となり柔術を善くし大伴頭たり又恩人の墓參を怠らず公務暇なき時は其家の佛前に拜す齋藤英之助（今ノ櫻門老ノ父）は嘗て其頭たりしかば（小普請支配也）于蘭盆會に其家の佛前に拜する迚謁をも通せす直に靈牌に

燒香頓首し家内に會釋せすして立去る家内は先々と引留むれは本日は佛様に逢ひに來りたる也足下輩に用なしとて頓着せす笠井次郎兵衛は馬術の師なりしかは其佛前に拜する亦右の如くなりしと此事齋藤櫻門笠井勇（次郎兵衛ノ孫ナリ）時々信に語れり

一信高和歌を好み（水上長次郎ニ學フ冷泉流也後本居内遠ノ門ニ入ル）花鳥風月興來て自適自詠他の毀譽を顧みす故に其調奇風あり松坂に在る退隱の身なれは日々一瓢を腰にし隨意に散歩山水を友とす一日微醉歸家して曰く計らすも花見してたのしかりしと信いつれの花也と問ふに誰人の家にや知らされ共庭の蒔花餘り見事也し故案内もせす其家の縁に腰打かけ瓢を出し獨酌詠め居たりしに家内出來りたれば一首を詠し與へしかは痛く悅ひ怒もせさりし家人の名も知らすと如此境界なれは後には人皆西之庄の隱居々々と取はやしたりき

一明治六年より信命を奉して攝州神戸港の商事に從事す信高共に移住す土地珍らしけれは湊川生田の邊に杖をひき日々たのしめり時としては店に來りて繁華雜沓のさまを慰み居たるに風鈴蕎麥賣（神戸大坂邊ハ白書此行商多シ）を呼ひ止め店頭にて丼蕎麥を喫す身には黑縮緬葵章の羽織（拜領セシモノ）八丈の衣を着し此體なれは往來の諸人奇異に思ひてたゝずみ見るに忍ひすせめては奧に入り給へ運ひ進むへしといふに己れか錢にて己か食す何の憚る處あらんやと肯はす店の若者共の冷笑も氣の毒なりし

一信高節儉を崇む自奉の衣食毫も意に介せず毎夕晩酌をたのしむと雖も味を重ねす曰く食に向ひ飯之强柔を鳴らし下物の不足を訴ふは君恩を無する也士は戰場に泥水を飲み數日不食之事あり嵜山六郎右衛門のうたに

足る事を汁かけ飯に茶つけめし腹の減つたか何寄りの菜

と畢竟眞の空腹を不知ゆゑにて勿體なしと又書簡餘白の片紙糸屑竹木の小切れも必す其用を盡し自用の手帳手扣へは反古の裏に書するを常とす且曰く予の若年なるや竹の皮草履に木柄の大小也汝は木履を穿ち糸柄の双方を帯す世は奢れりと信に訓誡數〻なりし又小人閑居して不善をなすとて公務寸暇あれは野外に運動乃至自庭の除掃鋤鍬執て木石を移轉し夜間は忠孝義勇の傳記或は隨筆等の雜書を誦讀信等に聞かしむ書なけれは紙撚(コヨリ)を捻て觀世よりとし網をすく等寸時も手を空ふせす常に早起し天未た明けさるに自から雨戸を開き大聲家眷を呼ひ覺す事風雨暑寒の嫌ひなし信が輩いつれの日か晩起の安を得んやと思ひし程なり

一常の言に人病を以て死するは自業自得也常食程度ありて攝生を愼まは病ある事なしされとも折には大食を試むへし是れ胃の柔縮せさる爲なり又人は虚言妄語せさるものなれとも一生の間に君父の爲とあれは大虚言をなすへし徃古より老死を以て官に達する者なく千萬人悉く病死屆なり予死なは必す老死と屆出よ是れ予か遺言也と常に信に命せしか明治六年十二月十八日酒食常の如く剩へ晩景に好みて善哉三椀を快く喫し其翌十九日は何となくものうき體なりしかさして平素に變らされは信は終日店に在て夜間歸家し如何にと問ふに遠足したる如く草臥たる思ひなりと依て手足を安撫するに一旦起座を欲するゆゑ抱き起せは酒一盃をのみ明日は床の掛物をかけかへ花を活け座中清潔に掃除せよと云て頓て平臥し唯眠る如くに絶脈せり于時八十二歲神戸港共葬墓地春秋社境内に葬る老死せんとの遺言に毫も違はさりしこそ不可思議の至りといふへし

信高壯年若山に祗役し允を得て熊野三山を廻る其比は若山人と雖も熊野を知る者稀なりしと江戸にては諏訪鷲湖（書チヨクス）と信高二人のみといふ記行あり此他所々の記行詠草等多く存せり又若府の人某（岡田甚大夫トカ聞シカ忘失ス）信高の面顏を戯詠せしかよくもいひ取りたりと自から信に語れり

清八が眉毛は毛虫鼻のぞき口は桃口耳はきくらけ

堀内九郎兵衛正敏

堀内九郎兵衛

堀内九郎兵衛正敏（堀内九郎兵衛惣領 始名不知）

家　譜

父九郎兵衛　權現樣へ被　召出候由申傳候へ共舊記無之年月日其外共相知不申

九郎兵衛正敏儀年月日不知　權現樣へ被　召出候（御役儀不知）　南龍院樣（未御領知不被進節）御徒被　仰付大坂兩御陣之節御供相勤申候

一元和五己未年御國へ御供仕御臺所番被　仰付候

一寛永十八辛巳年正月八日病死仕候（于時五十六歲）

右以下代々相續四代九郎兵衛正信御目見以上ニ成リ六代定右衛門正房十五石高御馬具藏預ニテ天保十五辰年十一月病惣領楠之助正供家ヲ嗣ク

星野作兵衛

星野作兵衛

星野作兵衛 實名不知 生國三河

家　　譜

遠祖星野刑部大輔行明儀ハ元弘建武之頃足利家ニ屬依數度之戰功三河國守護職相勤候由申傳ヘ
候得共舊記斷絕仕委敷儀不詳候
永祿十一戊辰年月日不知　權現樣ヘ被　召出其後年號月日不知岡崎三郞樣ヘ御附被遊御手廻リ相勤御他界
後駿河ヘ罷越　權現樣ヘ奉仕元和三丁巳年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊同五己未年御入國ノ節
紀州ヘ御供仕罷越奉行組足輕相勤申候
一同年月日不知及老年候付奉願悴佐次右衞門ヘ代番被申付候
一寬永五戊辰十一月八日病死仕候 于時九十歲
悴佐次右衞門代番奉行組足輕明曆元未年二月八日八十二歲ニテ病死以下代々足輕又伊賀與力勤六
代忠次郞秀政二十石御城代與力ニテ文政四巳年五月病死養子常助不則襲ク

戶田金左衞門清堅

戶田清堅 金左衞門○按駿河分限帳、在大番衆之列、祿貳千貳百石、

戶田清堅、初稱三郞九郎、父曰三郞九郎清光、爲三河大津城主、諏訪原役、淸光年十七、先登陷外郭、奮
戰死之、清堅初仕　東照公、賜祿千石・後屬公、屢轉職、終爲執政、增祿至三千石、 戶田系譜

家　　譜

先祖ハ元來西三條之士族ニ候處大力剛强武勇ヲ好ミ公家之業ヲ繼サルニヨリ尾州之內戶田ト申

處ニ配流セラル依テ在名ヲ以テ戸田ト號ス後三州渥美郡室ニ居住同國大津村ニ城ヲ築キ居住又同國田原ニモ在城子孫彈正少弼康光ハ　廣光樣ヘ奉仕弘治二辰年十一月病死康光長男戸田丹波守康長　權現樣ヨリ松平之御稱號ヲ賜リ御一字拜領元和二辰年信州松本五萬石ヲ拜領當時戸田丹波守光則家也

一康光弟戸田庄左衛門尉光忠ハ康光之養子トナリ其跡ヲ繼田原之城主ニテ永祿二己未年三月三州苅屋近所志幾原ニテ討死光忠嫡男戸田三郎左衛門尉忠次　權現樣ヘ奉仕所々ニテ軍功不少忠次長男三郎九郎清光天正三亥年八月九日十七歲之時遠州諏訪原ニテ討死嫡子清堅幼少ニ付忠次二男清光之家督相續當時戸田土佐家守ナリ

戸田金左衛門清堅（戸田三郎九郎清光嫡男 始三郎九郎 生國三河 隱居雄山ト號ス）

權現樣ヘ新規被　召出上總下總之兩所ニテ知行千石被下置上方ヘモ度々御供仕關東御進發之時ハ御側ニテ御奉公仕關ヶ原御陣之御供奉仕其後（年月日不知）三郎右衛門舊領（高不知）之由　上意ニテ三州大津城ニ被差置慶長十九甲寅年元和元乙卯年大坂御陣之節依　上意　南龍院樣御供仕此節御使番相勤大坂御陣以後　南龍院樣ヘ御附被遊知行貳千貳百石被下置御年寄被　仰付屋敷下屋敷共拜領仕候

一寬永七庚午年十二月（日不知）千石御加增被下置御城代兼役被　仰付相勤候處及老年候付御年寄御役ハ御辭退申上御城代一役ヲ相勤申候

右御城代兼役被　仰付之節與力貳拾人足輕五十人御預ニ相成リ右與力足輕トモ清堅ヘ被下置由ニ

テ諸番等不相勤與力ハ貳人ヅヽ清堅屋敷へ相詰申候足輕ハ後ニ清堅依願岡口御門之番相勤申候清
堅隱居後與力ハ浪人仕足輕ハ貳十五人ツヽ二組ニ相分リ其儘御城代同心ト相成申候トノ趣書傳御
座候

一正保二乙酉年月日不知奉願隱居被仰付嫡子十郎左衛門へ家督無相違被下置只今迄十郎左衛門へ被下候
知行千三百石爲隱居料金左衛門へ被下置候

一承應三甲午年五月五日病死 于時八十歳

金左衛門嫡子十郎左衛門清正部屋住ニテ被 召出千三百石ヲ領シ正保二酉年父金左衛門家督無
相違被下大御番頭ニテ寛文七年七月隱居以下代々重職又ハ御家老相勤十代金左衛門清廉ハ貳千
五百石御家老ニテ慶應三年十二月諸大夫任官下總守ト改メ同四辰年十月四日 朝廷へ被 仰立
之御趣意ニ付官位返上總雄(フサ)ト改名明治二巳年二月十五日祿制御改革ニヨリ無役高貳百八拾俵被
下執政職御役料八百俵被下同月十九日名草郡民政知局事被 仰付同年六月十三日病死養子甚三
郎貞清跡目相續ス

戸田藤左衛門隆重

戸田隆重 稱藤左衛門、後號宗入、○按駿河分限帳、在御鐵砲衆之列、祿千石、

戸田隆重、後改左能 系出於多田滿仲、祖父曰野呂瀨對馬守光吉、父曰宮內介忠時、爲武田氏族、武田氏亡、移
仕於武藏瀧山、大坂役、屬黑田忠之有功、其夏役、從 東照公、爲扶持方奉行、其明年、公請而祿之、公之
移封紀伊、嘗聞其俗難治、召安藤直次、謀善撫之者、直次曰、戸田藤左衛門其人也、乃命先遣之隆重既

至、召士人神前中務、金谷次郎四郎、田所平左衛門、問淺野氏法制、斟酌以規書之、初隆重年十四、辭家去、仕稻葉正勝丹後守、仕小早川秀秋、司農政、又去赴京師、仕德善院氏、又去客於大久保長安石見守所、隆重嘗善書得定家體、長安得定家書、使隆重鑒定之、隆重見曰、此予少年時所書、具語其由蓋其精追定家云、

戸田系譜　記士雜談

御入國之節戸田藤左衛門ヲ前以テ被遣タル事ハ　南龍公元和五年之條ニ記ス

家　譜

戸田藤左衛門隆重 後左能ト改ム

先祖ハ多田滿仲ヨリ七代之孫加賀見次郎遠光ヨリ五代戸田次郎家定ヨリ十一代甲州武田之一族野呂瀨宮內介忠時之子ニテ御座候

一隆重儀武田家之浪人ニテ武州瀧山ニ罷在候處慶長十九寅年大坂冬御陣之節松平右衛門佐殿手ニ付相働夫レヨリ　權現樣へ　御目見仕翌元和元卯年大坂夏御陣之節ハ御扶持方渡奉行被　仰付相勤申候

一元和二辰年八月　南龍院樣御所望ニ付被爲附於駿州知行千石被下置同心三拾人御預ケ被遊候

一御國替ノ節紀州請取ニ參候右藤左衛門儀追テ法體仕宗人ト改名仕京都ニ隱居仕罷在寬永十七辰十月於京都病死仕候

一右於駿河頂戴仕候知行目錄于今所持仕候最モ藤左衛門姓名ハ　御筆ニテ御座候

一私紋所片菱ハ先祖隆重武功之節信玄賞美之餘リ武田家紋所割菱之片方ヲ給リ候由申傳へ候

隆重家督惣領八兵衛茂濟ヘ知行千石無相違被下與力同心ヲモ御預ヶ之處八兵衛寛永十四丑年正月壯年ニテ病死依テ千石ハ父隱居宗入ヘ御返シ被遊後宗入三男平内安吉ヘ千石無相違被下藤左衛門ト可改旨被命後奉行役御用役松坂御城代大普請奉行等ノ重職ヲ歷任久々御勝手御用向ヲモ相勤千貳百石ニ御加增貞享四卯年十二月隱居藤入ト改メ以下代々相續七代藤左衛門在明ハ四百石御小姓組番頭格奥詰ニテ安政二卯年七月病死惣領平内行恒家ヲ嗣ク

一藤左衛門居屋敷ハ御入國之節隆重紀州請取ニ罷越タル節拜領之由家譜ニ記シ又南陽語叢ニ右屋敷ハ丸之内湊口御門之角屋敷淺野在城之時龜田大隅守ガ住居セシ古宅ナリトアリ

戸田太郎右衛門忠澄

戸田太郎右衛門

家譜

戸田太郎右衛門忠澄 戸田孫右衛門忠興二男 生國尾張

父孫右衛門忠興 年月日不知　權現樣ヘ御奉公仕尾州智田郡之内高和ト申所ヲ拜領仕候其故孫右衛門儀高和ト　御呼ヒ被遊候付則異名高和ト末々マテ申候

太郎右衛門忠澄 年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊知行四百石被下 御役不知 元和五未年八月十八日駿河ヨリ御供ニテ紀州ヘ罷越寛永七申年五月廿二日病死仕候

忠澄病死ニ付其知行四百石ヲ兄弟ヘ分知惣領太郎右衛門ヘ貳百五十石二男六兵衛ヘ百五十石被下大番組被　仰付候處其後兄太郎右衛門病死嗣子無之嫡家斷絕分家六兵衛ニテ代々相續六兵衛

ヨリ七代與七郎忠邦御切米五十石御小姓組ニテ慶應元丑年十二月病死惣領貞之助忠孝家ヲ嗣ク

戸田重業 甚左衛門

戸田重業、父曰淺井九左衛門重秀、始稱松平加賀之助、三河竹谷城主、松平玄蕃亮親善弟也、爲親善部下、屢有戰功、後與親善有違言去竹谷、潛伏横須賀、　東照公召之、命改稱淺井九左衛門、以屬大須賀康高、天正四年、高天神之役、與渥美源五郎、鷲山傳八郎、柘植又十郎、共有殊功、小田原之役、公命康高、選、老功之士七十人爲先驅、重秀亦在選中、重業襲家、冒戸田氏、賜祿百貳拾石、爲大須賀氏部下、及大須賀忠次嗣榊原氏移館林、　東照公留其部下大半、後皆以屬公、因此輩嘗有戰功者、予所深寵、今特以屬汝、公使安藤直次統之、住横須賀、更戍駿府城、及公移紀伊皆從焉、概增祿爲貳百石、横須賀隊之稱如故、一日公謂其一隊曰、田邊、紀伊之要衝、宜遣其隊中微祿者守之、地多水草、於畜馬爲便、又有漁獵之利、易爲生計、然不指命其人、使探撚子配遣之、重業在遣中、移住田邊、所謂田邊與力之一也、寛永九年歿、 戸田系譜

家　譜

戸田甚左衛門重業 淺井九左衛門重秀二男 生國三河

本家ハ淺井九左衛門ニテ母方之氏戸田ヲ名乘 年月日不詳 　權現樣御代知行百貳拾石被下置大須賀組付ニテ罷在大須賀國千代忠次榊原家爲相續上州館林ヘ被遣之節　權現樣思召ヲ以テ横須賀黨過半御留置此者共ハ度々骨折候故御秘藏ニ被爲　思召候ヘトモ被爲進候トノ　上意ニテ元和二辰年月日不知

南龍院樣へ被爲附安藤帶刀直次相備被　仰付居城ニ遠州横須賀ニ住居仕同所ヨリ駿河御城番相勤
元和五未年八月紀州へ御入國之節御供仕知行御加增被成下貳百石ニ被　仰付

一同年月日不知　南龍院樣御意被遊候由ニテ安藤帶刀直次横須賀組一統へ申聞候ハ御國之內田邊ハ大事之要地ニテ候間横須賀ヨリ參候諸士之內小身者ヲ遣置候樣ニトノ御事然レトモ御人指ハ無之候間鬮取ニテ相究可然候彼地ハ草深キ處故馬ヲ飼候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ氣儘ニ致シ活計候樣ニトノ儀ニ付鬮取仕候處甚左衛門儀モ鬮ニ相當候付田邊へ罷越以來代々同所ニ居住仕候テ相勤申候

一元和六申年八月廿六日水野出雲守彥坂九兵衛安藤帶刀三判ニテ知行高村割御目錄被下置候

一寛永九申年九月廿五日病死仕候

重業惣領甚左衛門正時父跡目無相違相續以下代々田邊與力繼續九代甚左衛門與之ニ至リ安政三辰年九月十日品有之田邊退去浪人ス是安藤家ニ於テ横須賀與力一同ヲ臣下ノ列ニ付カシメントシタルニ與力一統不服和歌山へ直訴スト雖モ御採用無之ヨリノ事ニテ委細　照德公同年ノ條ニ詳ナリ後文久三亥年四月廿三日甚左衛門與之ノ養子八十吉正直歸參被　仰付御切米四拾石小十人小普請ニ被　召出松城御常番トナリタリ

分　家

戸田助右衛門政時　甚左衛門重業長男

元和五未年新規被　召出御切米貳拾三石大番被　仰付後地方百五拾石ニ被成下代々分家ニテ相續

東助左衛門

豊嶋半之丞朝房

慶應二寅年御切米七拾五石御留守居物頭格中奥詰ニテ病死シタル久左衛門光陞家ナリ

東助左衛門

家　譜

東助左衛門 東三郎左衛門惣領 始三五郎實名不知

父三郎左衛門儀駿州今川義元ニ罷在候節　權現樣御存知之御好身ヲ以小田原落城之後助左衛門年月日不明被　召出富士之根方ニテ知行五百石被下置則知行所ニ罷在駿州府中ヘ御番勤ニ罷出後年月日不知南龍院樣ヘ御附被遊元和年中御國替之節紀州ヘ御供仕高五百石被下置御役不知其後年月日不知隱居惣領仁右衛門ヘ家督知行五百石無相違被下仁右衛門ヘ被下置候御切米八十石隱居料トシテ助左衛門ヘ被下置寛永二十一年申三月廿一日病死仕候

惣領仁右衛門部屋住ニテ八十石ニ被　召出後父家督無相違被下以下代々相續四代助之進常敞七歳ニテ跡目三十八扶持ニ減祿七代仁右衛門常眞ハ御切米七十石大御番ニテ安政七申年七月病死惣領千熊常典嗣ゲリ

豊嶋朝房 半之丞〇按駿河分限帳、在寄合衆之列、祿五百石、

豊嶋朝房、系出于源頼光、其先曰土岐左衛門尉光基、住美濃土岐郡、子孫因以氏焉、兼領美濃尾張伊勢、後九世至左馬介秀成、屬源頼朝、爲常陸江戸崎城主、世襲至朝房、天正中、爲豊臣氏所陷、移住常陸龍

崎、後价其姻豐嶋刑部正、謁　東照公於駿府、公以其名家胤優禮之、不敢以爲臣、乃爲刑部義子、改稱豐嶋源十郎、以求仕　東照公賜俸貳百苞置之、後屬公、賜祿貳百石、爲小姓、從大坂役有戰功、轉爲小姓頭、增祿至五百石、致仕號休卜、慶安二年歿、年五十七、子半之丞朝淸襲家、歷大番組頭先手物頭根來頭槍奉行旗奉行、增祿至七百石、孫半之丞朝房襲家、亦有才幹、類被擢用、及有德公入承大統、從而移焉、遂請復土岐氏、豐嶋家譜

家　譜

豐島半之丞朝房　土岐左兵衛督胤倫長男 初土岐源十郎　生國常陸

遠祖土岐左衛門尉光基美濃國住居郡名ヲ以テ初テ土岐ト號ス後代々常州江戸ヶ崎城主之處天正十八年秀吉關東發向ノ節落城其後同國龍ヶ崎ヘ退身罷在候節母方從弟豐嶋刑部正御取次ヲ以テ

權現樣ヘ於駿府奉願御目見候處御懇之　上意ヲ奉蒙候上御料理頂戴仕折々罷出候樣　上意ヲ蒙リ其後度々爲伺御機嫌罷出相應之御奉公仕度旨刑部正ヲ以テ奉願候處土岐殿ノ子孫輕クハ御召仕難被遊之旨奉蒙　上意候付不苦之旨申上奉願候ヘトモ御許容無御座候付豐嶋刑部之子分ニ相成豐嶋源十郎ト相改メ御奉公奉願候

權現樣ヘ被　召出御側ヘ勝手次第相詰御奉公可仕之旨　上意ニテ爲御合力貳百俵被下置年月日不知

南龍院樣ヘ被進御小姓被　仰付候

一慶長十六亥年月日不知於駿府八幡村宇藤坂村之內知行所貳百石被下置同十九寅年大坂御陣之節

南龍院樣御供被　仰付罷越申候

一元和二辰年十二月御小姓頭被仰付御加増三百石被下置於遠州見取村笠井村知行所被下都合五百石被　仰付候

一同五未年紀州へ御入國之節病氣ニ付御跡ヨリ可引越旨被　仰候付御跡ヨリ罷越寛永五辰年十月隱居惣領熊之助へ爲家督知行五百石無相違被下寄合被　仰付候

一隱居仕名朽木ト改メ候處　南龍院樣文字不宜旨蒙　御意有卜ト名被下其後上ヨリ御替被下候哉休卜ト相改メ御座候

一南龍院樣御自筆之御懸書數通頂戴仕候

一當家之系圖及源平大系圖　南龍院樣へ御所望被遊奉入　御覽候處源平大系圖ハ御留置被遊當家之系圖ハ御下ケ被遊候

一慶安二丑年八月廿日病死仕候于時五十七歲

右惣領熊之助後半之丞朝淸父家督無相違相續追々諸役歷仕延寶七未年六月隱居惣領（實二男三郎左衞門後半之丞）朝治家督七百石無相違被下元祿十丑年十二月主稅頭樣（有德公）御家老被　仰付又貳百石御加增被成下　有德院樣御代ニ至リ御用取次御加增三百石被下追々昇進大御番頭被　仰付候處正德六申年四月晦日　公儀へ御供被　仰付諸大夫被　仰付信濃守（後淡路守）ト改メ代々御旗本ニテ相續ス

朝治長男竹之助（後八左衞門）朝澄部屋住ニテ被　召出中奧御番貳拾五石被下候處父ト同時ニ　公儀へ御供被　召出諸大夫大學頭ト改ム朝治三男左兵衞（初藤之丞）朝直モ新規被　召出奧御小姓勤之處是亦

豊嶋五郎左衛門朝與

東使實彈正實吉

公儀ヘ御供被　召出本姓土岐ニ改メ代々御旗本ニテ相續ス

分　家

豊嶋五郎左衛門朝與 半之丞朝治二男 初三之助

寛永二酉年八月新規被　召出追々昇進御勘定奉行四百石被　仰付父　公儀ヘ御供被　召出ニ付以來分家ニテ代々相續朝與ヨリ四代五郎左衛門朝仲五百石左京大夫様御家老ニテ安政六未年八月病死養子半之丞朝忠跡目被　仰付

東 使 實 吉 彈正

東使彈正實吉、其先曰岡田彈正忠、仕伊勢新九郎氏茂、實吉仕氏政氏直、屢有戰功、世呼爲東使岡田彈正、岡田其氏、而東使北條氏官名也、北條氏亡、仕上杉景勝、後致仕隱於武藏秩父郡、元和二年、公聞其勇名、命市川清長、召而祿之五十石、公又聞東使彈正之稱以武得之也命從其舊稱、遂改岡田爲東使、後屢增祿至四百石、寛永十二年歿、子孫七實照、歷海士郡奉行、伊勢田丸奉行、爲藥込頭、寛文十二年歿、東使系譜

家　譜

東使彈正實吉 岡田彈正忠之子 生國武藏

祖父岡田彈正忠ハ伊勢新九郎氏茂ヨリ伊勢宮内料免許狀給リ父岡田彈正忠儀北條氏康ヨリ武州比企郡猿渡リ郷ノ内ニテ屋敷地並領地給リ書簡且伊勢大神宮料給リ御書簡等所持仕候

實吉儀始東使岡田彈正ト名乘北條氏政氏直ニ仕ヘ數度鎗下ノ高名幷生捕分捕等仕首數級取申候内

同家沒落後上杉景勝ニ仕ヘ其後浪人仕武州秩父郡ニ住居罷在候處元和二丙辰年　御家へ可被　召出間駿河へ參候樣市川甚右衛門ヨリ申越候處野中六右衛門高田八郎兵衛彈正等關東ニテ數度之武功是又氏直之感狀ヲモ所持仕候儀安藤忠兵衛ヲ以テ御尋儀有之其段具ニ申上候處被　召出候儀ニ御座候

一東使岡田ト名乘候儀ハ岡田ハ氏ニテ東使ハ北條家之役名ニテ候處彈正實吉儀武功物數モ御座候付自然ト東使彈正ヲ呼習ハセ候旨申上候處武功ニ付呼寄セ候ハヽ其儘東使ヲ名乘候樣トノ思召ニ付御家へ被　召出候節ヨリ岡田ヲ改メ東使ト名乘申候

一元和二辰年七月日不知於駿河被　召出爲御扶持方現米五拾五石被　下置御留守居被　仰付同年安在ニテ屋敷拜領仕候

一同年十二月御加增御切米百六拾石被　仰付御入國之節御供ニテ紀州へ罷越候

一同六申年月日不知知行四百石寄合組被　仰付候

一寬永十二亥年五月十日病死仕候

養子彌四郎政章へ跡目知行之內貳百石被下殘貳百石ハ次男孫七へ分知被　仰付以後相續之處實吉ヨリ四代伴助知行百石御近所番ニテ元祿十四巳年十二月病死嗣子無之嫡家斷絕ス

分　家

東使孫七實照　彈正實吉次男

寬永十二亥年父彈正跡目養子彌四郎へ被　仰付候節貳百石分知被下大御番被仰付以下代々相續六

富田藤兵衛氏次

次布目市左衛門

代彈六實由六拾石大御番ニテ嘉永二酉年十月隱居養子甚之助政亮へ家督無相違被下大御番被　仰付タリ

富田藤兵衛

家　譜

富田藤兵衛氏次　始祖其外不詳　始藤左衛門

元肥後熊本城主加藤肥後守清正殿家臣知行四百拾八石給何役相勤候哉相知不申候

瑤林院樣御入輿之節御附ニ而　御供仕　御當家江罷越元和五己未年駿河ヨリ御供仕御切米百石被下置　瑤林院樣方相勤申候

一寬永七庚午年月日不知知行三百石被成下候

一正保三丙戌年月日不知病死仕候年齡不詳

氏次惣領文大夫氏政跡目無相違相續四代甚左衛門良久西條御家老被仰付追々御加増六百石ニ至リ六代甚左衛門良睦享和二戌年五月五百石寄合タリ

布目市左衛門

布目市左衛門　布目惣兵衛實子惣領　實名不知　生國上總

家　譜

父惣兵衛（實名不知）ハ遠州大須賀五郎左衛門康高ニ屬罷在候（卒年不知）

權現様御代（年月不知）父惣兵衛爲家督知行百拾石被下置後大須賀家組付被　仰付息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊原爲繼跡上州舘林ヘ被遣候節權現様思召ヲ以横須賀黨過半御留置此者共ハ度々骨折候故御祕藏ニ被爲　思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二丙辰年　南龍院様ヘ被爲附安藤帶刀直次相備ニ被爲　仰付居城ニ遠州横須賀ニ住居仕横須賀ヨリ駿河之御城番相勤同五己未年御入國之節紀州ヘ御供仕九拾石御加增被下高貳百石被　仰付同年（月日不知）病死仕

布目權左衛門

權左衛門（市左衛門實子惣領　實名不知　生國上總）

元和五己未年（月日不知）父市左衛門爲家督高貳百石被下後　南龍院様御意之由ニテ安藤帶刀直次横須賀一統ヘ申聞候ハ紀州之内田邊ハ大事ノ要地ニテ候間横須賀ヨリ參候諸士之内小身者ヲ遣シ置候様ニトノ御事然レ圧人指ハ無之間鬮取ニテ相究可然候彼地ハ草深キ所故馬ヲ飼候ニ便能ク又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ致氣儘ニ活計致候様ニトノ義ニ付則鬮取仕候處相當候ニ付田邊ヘ罷越居住相勤元和九癸亥年九月廿四日病死仕候

右以下代々田邊與力ニテ相續八代圓左衛門充盛ハ寛政十午年同與力貳百石ヲ領セリ

岡野三右衛門房次

岡野權左衛門英明

岡野伊賀守房明

田中越中守融成

南紀德川史卷之四十二

名臣傳第三

岡野三右衛門房次

岡野權左衛門英明

岡野伊賀守房明

按スルニ岡野家先祖ヨリ數代伊豆國田方郡狩野庄田中鄉ヲ領シ因テ在名ヲ以テ田中ヲ氏トス三右衛門初三人ハ岡野越中守融成江雪之子孫ナリ江雪ハ養珠太夫人トハ叔姪ニシテ有名豪傑之士且名刀江雪左文字之因故等アルヲ以テ御附人ニハ非ラサレトモ家譜及ヒ其家藏之由緒書ニ據リ首ニ江雪ノ傳ヲ揭ク漢文之如キハ頗ル拙陋文ヲナサヽレトモ事實明確ニヨリ原文ノマヽニス

田中越中守融成 田中越中守泰行長子入道號江雪、後改板部岡、

仕北條氏政、氏直自氏政被恩補傍臣、板部岡能登守跡之領知幷與力之士、尋被改田中於板部岡、其後外叔父、岩本攝津守、遺跡幷與力之士共被加恩之、自此寵祿日進、武州岩付城主北條源五郎死去之後、江雪在番彼城、後賜十郎氏房、氏政氏直、出陣之時、必留守小田原本城、天正十年壬午、　神君與北條家、於甲州結婚盟、江雪爲使節、往濱松幷駿府、彌堅誓約、定納采之日時、　神君之使節、來小田原之時、江雪必爲謁者、加之、武田信玄及勝頼、總而關東諸將之傳命、江雪司之、

同十六年戊子、關白秀吉、咎北條之不參、北條家以美濃守氏規爲使節、令上洛、秀吉大悅對面、約北條家上洛之儀歸國、

同十七年己丑、江雪爲使節上洛、曰於賜上野國沼田城者、氏政氏直父子之間、可致上洛 秀吉諾之、留江雪、自點茶賜之、此外被盡懇情、江雪下向、八月秀吉、遣富田左近將監津田隼人正、被渡沼田城、使北條左衞門佐江雪請取之、北條安房守守之、家臣有猪俣能登守者、不受君命、而猥乘取眞田奈久留美城、眞田訴之秀吉、北條家以石卷左馬允爲使、陳猪俣楚忽之由、秀吉不聽、大怒拘留石卷、和議破、

同十八年庚寅、秀吉小田原發向、持百餘日、 老臣松田尾張入道、有内應之聞、氏政糺彈之、事覺江雪預之、後遂切腹、自是城中不靜、秀吉以謀乞和、令氏直出城、氏直出時、以室家預江雪、守護本丸、氏政自殺、秀吉令 神君據小田原城、江雪奉拜謁、渡千本丸、其後參氏直寓所、申此旨、于時有秀吉命 神君以高力河内守成瀨伊賀守爲使、仰曰去年爲北條家之使、令上洛之時、賜沼田城者、來春北條父子之内、壹人可上洛之旨、堅約之處、違變了、是北條家之僞欺、江雪詐謀歟之由、速可返答、江雪申曰、去年上洛之時、直對高顏、委述子細、雖到今日、非直面者不可言上、兩使歸報、秀吉大怒、爲驚動江雪、門邊置桎械束縛、于時取刀脇指、取左右手、引張御前、仰曰、汝爲北條家之使節、上洛反覆之臣也、依之動天下之大兵、且又滅代々主君、於汝安乎、江雪陳曰、北條家、曾無表裡之旨、下輩之族、猥以井蛙之智、及悖楯、今致滅亡、是北條家之極運也、非凡慮之所及、又動天下之大軍、致一家之滅亡、是武士之面目也、假令北條家、雖有反覆之旨、爲臣而如何背君命哉、此外無別條、速可被刎首之由言上、秀吉嚴顏少解、今如汝縲紲、引登京都、可磔三條河原之罪也、雖然、爲囚人、身對敵大將不辱吾君之名、不恐湯鑊之罪者、忠義之至誠、勇士之本意也、感其雄辯、被扶一命、自今已後可仕秀吉之旨被仰、於卽座手下賜彼繩了、爾後日々近仕、改板部岡被召岡野、

文祿元年壬辰、秀吉征伐朝鮮、陳于肥州名古屋、　神君同在陣、于時常陸國下妻領主多賀谷修理大夫構虛病不應召而籠居、秀吉以江雪爲使節問之、　神君遣井伊兵部少輔　榊原式部大輔、發軍士發向下妻、多賀谷陳謝、江雪達上意趣曰、爲今度不參之過料、可出黃金千枚、多賀谷領之、江雪還名古屋、說其旨、多賀谷令赦、

慶長五年庚子、石田三成作亂、筑前中納言秀秋、初與三成同意、後有志于　神君、屬山岡道阿彌與江雪、密發赤心、小山進發之時、秀秋以忍足輕十人宛、被添道阿彌與江雪、具說三成造意、速願逆徒退治、神君九月朔日上方進發、秀秋飛檄、告可致忠節之旨、同十五日、關原合戰秀秋不違約、於松尾山應、三成敗北、即日　神君對面秀秋、感其軍忠、秀秋星夜發兵、攻江州佐和山之城、是三成之居城、而兄木工頭之所主也、翌朝　神君以江雪爲使節仰秀秋曰、昨日於關原、抽戰功、夜中馳長途、被攻佐和山之條、神妙也又長谷川式部少輔從秀賴爲使、今在城中、今日可出城、見切裂合符無事故、可被出圍之旨申達、式部少輔出城了、天下一統後、道阿彌江雪被加近仕拜領恩賞地、

一　江雪齋北條家ニテハ政事ヲ務ム其時之大切之人ナリ北條亡テ後秀吉之御伽坊之樣ニ務ム其後　神君一統之御代トナリ以前之如ク又　神君ノ御伽ニ出仕ス

一　神君御召仕ノ女中アリ 養珠院樣御事 此御腹ニ　長福樣 後常陸介紀伊大納言賴宣卿 鶴千代樣 後左衞門督水戶中納言賴房卿 御生レ被遊右養珠院樣ハ江雪齋ノ爲ニハ御姪ノ由ナリ或時　神君江雪へ其方大奧へ御連レ被成逢セタキ者有之奧へ可參トノ　上意ナリ江雪齋辭シテ何共此段ハ遠慮ニ奉存旨申上ケレハ達テ可參由ニテ大奧へ參ル處養珠院樣御出被成　神君上意ニ此女中ハ其方姪ナリ逢度由申故逢セ

ルトノ御諚ナリ江雪承リ其段ハ大ニ避事ナリ姪ニテハ無御座由再三申上罷出ル故　養珠院様御セキ被成我ヲ僞者ニ致ス事江雪ニ似合ザル申樣ナリト御機嫌不宜由然レトモ其時節ハ由緒ナトニ不寄風ナレバ　神君ニハ實ニ姪ト御存知被遊亦其後ハ　養珠院様ヨリ江雪へ毎度頭巾ナドノ類拜領御悃ノ義ナリ

一　江雪初ハ小田原一矢倉ヲ固ル程ノ事ナリ死去ノ比ハ京伏見屋敷ニ居ス江雪屋敷ト云テ伏見ノ人ハ今ニ至テ知ルナリ其屋敷ハ殊之外廣キ事ニテ臺所ナドハ八間梁ニテ有之由

一　或人ノ説ニ江雪ハ北條氏康ノ一家ナリト云ヘリ田中越中守泰行ヨリ先ハ知ラザリシニ北條寄兵衛事ハ　養珠院様御覽被遊候テ相知レタル由房明物語ノ旨右同一晰ナリ

一　或時　神君へ江雪齋山岡道阿彌出仕之時兩人知行所望ナルヤトノ　上意ナリ江雪ハ知行望ニ無御座由申上ル道阿彌ハ所望ノ段申上ケレバ則賜ノ由　以上由緒書

一　江雲所持ノ佩刀左文字ノ刀
　權現様へ奉獻候後
　南龍院様へ被進候由ニ御座候

南紀江雪左文字之刀ハ、板部岡江雪所持之佩刀也、以故後人呼之、云江雪左文字、往時江雪以此刀獻于幕下　家康公慶長年中攝州難波戰陣之時　神君帶此刀、遂勝其戰、故感乎此刀之德威、以重之珍之、厥後　神君謂以二刀、頒賜于右兵衛督義直卿 後尾張大納言 與　常陸介賴宣卿 紀伊大納言 因茲前日召　賴宣卿密告之曰、明日可賜佩刀二欛於　兩卿、其一刀江雪所送之左文字、是輙大坂勝軍之佩刀秘以藏之、明

日預置其處、必須執之也、卿唯以退、翌日双置二刀於席上、招　兩卿曰、此是所送于二卿之佩刀、宜預領之、刀之利鈍、合凭所受之幸也、　賴宣卿頓首、　先命職而取之、　神君忻然曰、常陸介所領之刀、大坂戰場之佩刀、如今卿領之、不思議之大幸也、於是可識、　神君祚愛　賴宣卿之賢良矣、仍　賴宣卿謹以韜之金匱、　賴宣卿之嫡君、光貞卿未能容易得而視焉、爾後以此刀、賜　光貞卿之嫡君綱教卿、當此時光貞卿始得覩之、　卿慮是　神君珍重之佩刀、不可輕忽視之、廼登上敷草薦、厥上設之、敬以覩焉、

右刀之來由知者マレナリ江雪胤裔、岡野伊賀守房明平日人ニ語ルヲ聞クモノアリ以此語予故、爲子孫證鑑、廣明 石見守 誌焉者也、

一　江雪ハ能書ニシテ歌道ニ志アリ詠歌之百首アリ其外春雨十首之歌モ自詠ナリ江雪ノ詠歌發句トテ悉月ノ覺ラレシモ有リ此外ニモ有ルヘケレトモ傳ル人ナシ歌ハ近衛信尹公ノ御弟子ナリトソ孫九郎貞明ノ家ニ有之百首ノ卷物江雪自筆自詠ニテ飛鳥井雅綱之点削アリ江雪ニ成リ不給前之歌カ融成トアリ當家ニ有之百首モ自筆自詠ニテ是ニハ点削モナク百首ハ別ノ歌ニテ江雪トアリ信尹公トハ至テ御懇切ニ有之由御文ハ數多アリ江雪死後ニ信尹公ヘ遺物ニ重硯ヲ獻ス其御追悼ニ詠歌並公家衆之詩歌共ニ一手鑑ニシテ貞明家ニアリ右之寫ハ當家ニモアリ信尹公御懇切ノ餘リ江雪方ヘ毎度御光臨有シナリ岡之一字ヲ御所望ニテ假ニ岡左兵衞ト號セラレタル由故ニ其時代ニハ近衞風ヲ岡左衞ト唱ヘタル由ナリ

慶長十二年二月後の三日雨つれ〳〵とふりくらして何となくものさひしかりしに硯にむかい世の中のよしあし事を筆の行にまかせて書もて行けれは數拾首はかりにやなり侍りけりし

ふりつゝく雨にはくらき空ながら春の日は又くれんともせぬ

春も猶空のきくらしふる雨やしくれし雲の名殘なるらん

うきくらし雨はふらねと打しくる軒や霞の雫なるらん

とふ人もなき我やとは春の雨のふるき戸ほそゝちしまりさりか成

さらすとも人はとはしをはかなくもさわり顔なる春の雨哉

淋しさは秋の夕へにかきらめや猶明ほのゝはるさめの空

このけくらき八重の霞と思ひしは分てそしるき春雨のそら

立出て袖しほらすは朝ほらけかすめるそらは雨としらめや

なれし雨のいかにかはりて冬は落葉春は木のめはなへてもゆらん

けふことにふる春雨や世の中をなへてもらさぬめくみなるらん

江雪齋自詠窓月覺給分

述懐作一

事ならぬひとつを數のはしめにてうきはあまたの身そあわれなる

窓中鹿

ほとのうちも秋はのとなる夕のれ鹿のねやとすみやまおろしふ

題不知

深草の野邊に住たるはたおりよぬきのたらぬのかみにきたるゝ

三右衞門
房次

權左衞門
英明

小男鹿のむねに思ひやみちしほのなきさによするかひよとそなく
くたさるゝ小袖のつまのなかけれは身にあまるほとうれしかりけり
奥歯にてかみならはすやねきの汁　以上由緒書

一慶長十四乙酉年六月三日病死　于時七十四歳
山城國伏見里ニ於テ卒シ洛陽宗仙寺ニ葬リ傑叟凉英庵主ト號ス由又　台德公ヨリ江雪へ被下候
御書三通越前秀康卿ヨリ被下候御書等于今本家分家之間ニ保存之旨家譜ニ記セリ
江雪北條家之臣糟谷豐後守之男平兵衞房恒ヲ養子トナス岩付城主北條十郎氏房ニ仕秀吉岩付城ヲ
攻ルノ時城ニ在テ能々拒キ負傷ス後天正十九年
神祖へ被　召出五百石ヲ賜フ以後代々御旗本ニテ相續ス

三右衞門房次　江雪二男
北條十郎氏房ニ仕天正十八年小田原破落以後父江雪之命ニ依リ氏直ニ從ヒ高野山ニ登ル氏直卒去
後美濃守氏盛北條家相續タルノ故ヲ以テ氏盛ニ屬ス
慶長九辰年　三十二歳　之時於伏見城
權現樣へ被　召出
南龍院樣へ被爲附慶長十六亥年九月廿五日病死嗣子無之家名斷絶ス

權左衞門英明　三右衞門房次總領
慶長九辰年　五歳　之時祖父江雪言上於城州伏見

權現様へ御目見江雪家督被　仰付　上意ヲ以テ弱年之間

南龍院様へ被爲附大坂兩度之御陣御供仕元和二辰年十七歳　迄勤之處御旗本ニ江雪跡目無之ニ付

養珠院様ヨリ被　仰立

權現様へ被　召返江雪知行ノ内攝州ニテ五百石被下置薨去以後自駿府江戸へ參リ　台徳院様大猷

院様へ御奉公追々結構被　仰付知行千四百石被下御先手相勤寛文三卯年八月廿五日六十四歳ニテ病

死以下代々御旗本ニテ相續

　權左衞門明暦元年朝鮮國信使來朝之節　上使トシテ岡崎へ出迎相勤タル品　南龍公同年之條ニ

記ス

權左衞門英明ハ能書ナリ平家之本自筆ニ書シタル當家ニ在男躰流ニ秀テ高ク力強ク衆ニ超タリ始

ハ勇氣盛ニシテ荒キ行ナリシカ中年ノ比ヨリ儒學ヲ心懸テ行ヒ堅固ニシテ義ヲ思フ事深シ常ニ平

家ヲ好ミ琵琶ヲ彈シ一尾伊織ト心易ク交ル

權左衞門英明ハ脊高衣裝付見事ナリ上下袴之仕立様ニ權左衞門タテト申カ有之候由其時ノ評判ニ

天下ニ三人之男ト申シタル由紀府之三浦長門守爲時モ其壹人ナリト云ヘリ

權左衞門忰多ク有之間　賴宣卿ヨリ何ニテモ御所望可有之由　家光公上意ナリ　賴宣卿ニハ三男

孫十郎ヲ御所望ノ　思召ニテ大小腰物マテモ御拵サセ被成可被下之所ニ又　賴宣卿ヨリ三男マテ

ハ御旗本へ御奉公ナル事ナレハ四男四郎太郎ヲ　御所望被成度トノ御事ニテ房明被　召出候夫故

右之大小腰物ヲ房明ニ被下

伊賀守房明

房明マテ兄弟四人ハ　養珠院樣へ御目見仕リタル由

一江雪縮合ノ事　養珠太夫人ヨリ權左衛門英明へ被下タル御書アリ同太夫人ノ傳ニ詳ナリ

分　家

伊賀守房明　權左衛門英明四男 初四郎太郎又平大夫　生國武藏 隱居後由道

父權左衛門御旗本へ御返シニ付悴之内壹人可被　召仕トノ御事ニテ寛永十五寅年二月廿七日南龍院樣へ御目見仕候處則被　召出　常陸介樣へ被爲附御小姓被　仰付御合力十人扶持金二拾五兩被下二十未年御切米八拾石ニ御直正保三戌年地方三百石ニ被　仰付以後大小姓頭御小姓頭御用達等ヲ經大番頭被　仰付祿高御加增都合千三百石被下寛文十二子年八月向後老中ニ差添御用相達可申依テ一倍之御加增貳千六百石ニ被　仰付猶追々御加增五千石ニ至リ元祿五申年十二月廿七日諸大夫被　仰付伊賀守ト改元祿十五年年十二月依願隱居爲家督嫡子平大夫へ知行五千石無相違被下只今迄平大夫ニ被下置候御合力米貳千石爲隱居料伊賀守へ被下置寶永二酉年十一月廿四日八十歲ニテ病死

房明嫡子平大夫一明部屋住ニテ被　召出格祿頻リニ昇進御家老加判之列現米八百石ニテ元祿十五年十二月父家督知行五千石無相違被下同月諸大夫信濃守ト稱シ寶永六丑年五月病死以下代々相續多クハ御家老諸大夫被　仰付六代平大夫辰明ハ知行四千石御家老ニテ文化四卯年四月隱居嫡子政吉維明へ家督四千石無相違被下大組被　仰付タリ

一本記中之由緒書ハ房明ヨリ三代目岡野石見守廣明 隱居江永 記スル處ナク廣明書ヲ善クセシヤ紀伊國

人物誌ニハ書家ノ部ニ揭ケリ陶玄ト號セシヨシ

小笠原義寛 （按駿河分限帳、在大小姓之列、祿二百石、）

小笠原義寛、系出於左京大夫長清、初稱彌太郎、後改伊右衛門、祖父曰玄蕃義時、父曰彌太郎良忠（後改久兵衛）、高天神役、小笠原氏族九人、曰小笠原右京進義頼、曰小笠原雲波、曰小笠原宗三、曰小笠原與左衛門清有、曰小笠原彌八郎義信（義頼子）、曰小笠原玄蕃義時（清廣子）、曰小笠原左馬丞清忠、曰小笠原作右衛門與康（義時弟）、及彌太郎良忠等、皆歸東照公、公皆祿其子孫、義寛亦在其中、同賜祿二百石、大坂冬役、義寛年十七、從東照公爲先鋒、其夏役屬公、亦爲先鋒、在大須賀忠吉部下、後屢轉職爲先手物頭、増祿百石、延寶二年歿、年七十七、（小笠原系譜）

按小笠原與八郎氏助、父曰美濃守氏清、爲遠江高天神城主、氏助襲守之、天正二年、武田勝頼圍而攻之甚急、既而聞東照公自織田信長來援、欲及其未至拔之、而氏助拒戰盡力、勝頼乃利而導之、氏助出降、先是小笠原氏同族、相誓不背德川氏、於是惣兵衛清廣爲質、後族論分爲二、一黨欲守前約、一黨欲與氏助同進退、小笠原雲波進曰、唯義所在、父子不顧者、武夫之常、況於骨肉、其生殺固不暇顧、抑今川氏累世名家、不能救其亡、而歸德川氏、未幾又從武田氏、不義不武謂之何、今乃從不義不武、予所不知、於是雲波弟宗三等、服其正議者貳拾四人、皆入貳城保守、從氏助出降者貳拾六人、皆保於本城、二黨相攻伐、東照公聞之、乃使岡部善九郎信田三右衛門、諭之曰、守前約不從不義、其志可感也、而其欲奉城主共進退者、亦不爲無理、今乃二黨相戰、於家康何益、於與八郎何裨、唯宜從善九三右處分耳、乃與武田氏和、小笠原彌八郎、出爲質於武田氏、武田典廐信豐爲質於我、於是雲波之黨、曾根長一福岡忠光等、皆歸濱松城、東照公皆以舊勳視之、因屬大須賀康高及其康移橫須賀、編入其隊、其從而移爲謂之高天神衆、以別之橫須賀本隊、

小笠原伊右衛門義寛 初彌太郎 生國下總

家譜

天正二甲戌年五月高天神御先手大須賀五郎左衛門へ被　仰付候付五郎左衛門ニ相添排キ可申旨同三乙亥年十二月十日　權現樣ヨリ御書被成下同家之者一黨御味方仕候右御書寫（御本書ハ同苗彌四郎于今所持仕候）

一紙ニ申入候高天神表之先手大須賀五郎左衛門被　仰付候各案內者之儀候間午伏塚へ參五郎左衛門ニ相添取出場カマワ所相排可有候惣兵入道人シチニ參祝着被　思召候高天神小笠原彈正別心仕候時作右衛門親ヲ人シチニ越申候彈正ハ人質ヲステ別心之儀兎角彈正ト相果シ候ハント本丸へ懸入候ヲ阿部善九郎富田三右衛門其時之樣子申上被爲聞作右衛門儀理之侍ト被　思召候高天神城東部御手ニ入候ハヽ小笠原時之本領各無相違可被下候以上

亥極月十日　御諱御判

小笠原右京進殿
同　雲波殿
同　宗三殿
同　與左衛門殿
同　彌八郎殿
同　玄蕃殿
同　彌太郎殿

同　左馬之丞殿
同　作右衛門殿

家柄戰功之儀被爲　思召慶長九甲辰年高天神城先手御預之悴共へ御知行二百石可被下置旨權現様被　仰出候處彌太郎儀ハ其節七歳ニテ罷在候付十五歳ニ相成候ハ御渡可被遊ト御座候テ同十七壬子年（月日不知）十五歳ニ罷成右二百石被下置（御判物無御座候）同十九甲寅年大坂御陣之節十七歳ニテ　權現様御先手へ被爲　召連元和元乙卯年御陣之節ハ　南龍院様先手大須賀國千代手ニ附供仕候（南龍院殿へ被爲附候年月日不詳）　御合戰御取合付早々被乘付候様　上意內藤主馬紺地ニ金之鹿角指物ニテ馬ヲ早メ備へ乘込候ニ付被急候故先手我增ニ天王寺へ急速駈付申候處程遠手合不申候元和五己未年國替之節南龍院殿供ニテ紀州へ罷越五十石加增被下供番被申付其後段々役替高三百石ニテ先手物頭相勤寛文九己酉年十二月廿一日隱居被申付總領伊右衛門へ家督無相違被下延寶二甲寅年二月廿一日病死仕候（于時七十七歳）

二代伊右衛門義重父伊右衛門家督二百五拾石無相違相續之處長男孫太郎儀ハ　有德公　公儀御相續之節長福様御抱守ニテ御供ニ被召連御小姓ニ被召出御旗本ニテ別家相續依テ義重へハ養子彌次郎義明被　仰付家督二百石被下以下已後代々相續五代惣兵衛義辰不愼之品ニ付知行被召放減祿六代伊右衛門義尙廿五石大御番ニテ文化十酉年二月隱居總領恒之助義直へ家督廿五石無相違被下大御番被　仰付タリ

小笠原與左衛門

小笠原與左衛門清有　小笠原左京進春義養子 初又次郎 生國三河　實羽津賀六右衛門義高長男

家　譜

永祿十二巳年正月廿日知行四百三拾貳貫文被下置御判物頂戴仕候

天正二戌年五月小笠原一統高天神籠城及ヒ横須賀御先手ニ被　仰付大須賀五郎左衛門ニ相添ヘ高天神御先手相持可申旨被　仰付天正三年十二月十日同族一統ヘ御書被下候品都テ同姓伊右衛門義寛傳ニ記スルト同斷ナリ

但横須賀御先手被　仰付候節以前之知行十分之一之割ヲ以テ千八百三十石被下トアリ

一年號不知四月九日仕合手柄ニ付　權現樣ヨリ御感狀頂戴元和三巳年十一月廿三日鷄一モト横須賀中並山入ニテ無相違可遣旨御朱印頂戴仕候

一年月日不知常陸介樣ヘ被爲附御加恩千石被下置候處翌年御斷申上初年ノ物成共差上候由年號不知七月十六日常陸介樣ヨリ御書頂戴仕候

一慶長十七子年七月十三日病死

清有總領與左衛門清正ハ慶長十七子年父跡目知行千八百三十石無相違被下置元和五未年南龍院樣御供ニテ紀州ヘ罷越大御番頭相勤明曆二申年六月二日病死

清政總領與左衛門初采女義和父跡目無相違被下以下代々相續六代與左衛門知宣千四百石大寄合御傳ニテ亂心自害ニ付養子跡目四百石ニ減シ九代與左衛門知惠不埒之品有之刑小普請被　仰付後御免慶應四辰年三月廿日御先手物頭持格中奥詰ニテ隱居養子八一郎知義ヘ家督知行四百石無相

遣被下虎之間席並銃隊被仰付タリ

小笠原久兵衛良忠

同　久兵衛良政

小笠原久兵衛良忠 小笠原玄蕃頭義時總領 惣兵衛清廣孫　生國駿河

家　譜

祖父小笠原惣兵衛清廣ハ左京進春義嫡子ニ候ヘドモ有故父之家督ハ弟美作守氏興ヘ讓リ清廣ハ駿河國有渡之城主ニテ罷在今川義元落城後高天神城ニ罷在候處彈正別心ニ付惣兵衛初親類共一統濱松ヘ參御奉公申上大須賀五郎左衛門高天神御先手被　仰付候ニ付相添排可申旨天正三亥十二月十日　權現樣ヨリ御書被成下同一家一黨御味方仕候品都テ小笠原伊右衛門義寛傳ニ記スル通リナリ

夫ヨリ遠州淺羽庄馬伏塚ニ居住又ハ知行所思々罷在候テ御先手仕リ卒年不詳

一父玄蕃頭義時

權現樣ヘ奉仕御先手大須賀五郎左衛門手ニ附數度御忠節申上行年五十二歲ニテ病死卒年不詳

久兵衛良忠儀

權現樣ヘ奉仕（家督年月御役儀不知）御先手ニ付數度御忠節申上天正十七丑年御證文頂戴仕右寫左之通リ

御給書立之事

一五百拾九俵　遠州 カミナカ村

一九拾八俵貳斗八升四合　榛原 飯淵郷

一三拾俵　遠州淺羽庄 柴村

以上六百四拾七俵貳斗八升四合

右可有御所務者也依如件

内三左

己丑十一月十七日　長七左

松孫

小笠原久兵衛殿

一慶長八卯年　南龍院様へ御附被遊大御番頭相勤知行千石被下置慶長九辰年六月廿六日五十三歳ニテ病死

小笠原久兵衛良政　久兵衛長忠實子總領 生國駿河

慶長九辰年父久兵衛家督無相違被下置父久兵衛通　南龍院様へ御附被遊元和年中御國替之節紀州へ御供其後段々御役替被　仰付御加增高千三百石被下御城代相勤萬治三子年六月五日病死

良政惣領久兵衛政明父家督無相違被下以下代々相續之處六代五左衛門政陳不心得之品ニテ兩度御役被　召放惣領久兵衛政鄰家督殆ト半知ニ減祿八代久兵衛政常ハ寛政十午年高貳百石大御番タリ

一四代久兵衛政尙總領平右衛門政登部屋住ニテ被　召出六拾石御小姓勤之處正德六年　有德公御供ニテ　公儀ヘ被　召出親之通知行千石御小姓被　仰付諸大夫石見守ト稱シ以來代々御旗本ニテ相續ス

小笠原兵右衛門

家　譜

小笠原兵右衛門茂久（小笠原右京進義頼孫長左衛門義信養子　實大村彌兵衛言重二男　初左京）

祖父左京進義頼永祿十一辰年十二月小笠原美作守氏清一統　權現樣ヘ御味方申上候節一類之者共同樣ニ人質ヲ差上申候天正二戌年五月武田勝頼大軍ニテ數日高天神之城ヲ攻メ候付匂坂牛之助ヲ以テ　權現樣ヘ御加勢之儀奉願候處信長ヘ御加勢御頼被遊候付彼是手間取候處ヘ右勝頼方ヨリ扱ヲ入候付同苗與八郎（後彈正少弼）氏助心替仕勝頼方ニ罷成候付御味方之者トモ御約束不違既ニ本丸貳之丸一戰ニ可及處　權現樣ヨリ爲見使被差置候阿部善九郎富田三右衛門兩人之扱ヲ以テ御味方仕候面々ハ高天神之城ヲ明濱松ヘ罷越シ　權現樣ヘ御目見仕候處城主之不義ニ一味不仕參上仕候忠節ヲ以御國御譜代御同前ニ被　思召候トノ　上意ニテ屋敷等被下置殊之外御懇意ニテ何モ落着申候其後大須賀五郎左衛門相備ニ被　仰付橫須賀一統御先手ニ被遊其後大須賀五郎左衛門ヘ高天神御先手被　仰付候付五郎左衛門ニ相添拵可申旨天正三亥年十二月十日從　權現樣御書被成下同家ノ者一黨御味方仕候慶長十八丑年九月十二日七十九歲ニテ病死

御書寫ハ同姓伊右衛門義寛傳ニアリ略ス

高天神役之事右京進義頼カ息長左衛門義信ノ詳記シタル覺書アリ左ニ附記ス

小笠原長左衛門覺書之内

一信濃國深志之小笠原修理大夫貞朝總領之子信濃守殿御子三人あり總領左京進次郎殿をは雲波三郎殿は宗三と申候總領左京進其後城東郡之内高天神之城を久嶋久左衛門との持被有候時刻今川殿へむほんの説御座候を今川との御聞被成御ふみつぶし被成度思召候刻小笠原左京進今川とのへ申上られ候はむほんの儀必定に候は我等ふみつぶし可申候間前方より我等を旗本に御附高天神の城に罷在候樣に被仰付被下候樣にと御訴訟を被申候に付被仰付候高天神の本丸の下二丸御座候それに罷在候別心之色見へ候所を即本丸へをしこみ久嶋久左衛門殿うち取申候其忠節に城東郡の城共に拜領被致其後病死被申候いはい寺は下藤之内安意院と申候左京進殿御子三人あり總領殿は駿河うとふの城主の久嶋殿の一跡に御なし候次に御子總領殿に御なし被成候三番めは右京進と申候代々總領若名は與八郎と申候後は美作守と申候遠州之城東郡はい原郡淺羽庄山名之郡ふるの郡迄知行いたされ候其後美作守代に永祿十一年辰の年　家康樣へ御味方可申と小笠原與左衛門を使として申上候遠州へ御手を引申候其節かけ川に今川氏眞公籠り御座候を家康樣と申合　家康樣はかけ川西しゆくより御せめよせなされ候小笠原は東鄕てんのう山よりせめ被申候城あつかいに成　家康樣へ渡し氏眞公はかけつかより船にめし小田原へ御のき被成候其後牛伏塚の城にて病死仕候いはい寺は女ほう松のふもとに天かく寺殿かいみやうは大わらと申候其所にはか所あり其後　家康樣

山鷹野に御通之時も忠節の侍のはか所とて御馬より御をり被成御通候事

一美作守子若與八郎と申候後彈正に罷成候其代に高天神の城持被有候甲州武田信玄公元龜二年未の三月初に高天神表へはたらきはたかや口ほろちかを山の崎に信玄公旗立ちやうす山に勝賴公ははたを立諸手より人數千騎揃大手口的場かまへ押たいこにて見れは上の山ほつちか村にて信玄公さいをふり押よするといへとも大手口兩より岩山のそきたる所切ぬき門たてたる所なれは乘入るへきやうも無之殊に山城なる故段々の丸より鐵炮打ちて見れは敵たまらす的場かまへの山の下はに鑓をそろえ有を城より見て大手口に百五六十侍有て申樣日比てきかな鑓可仕と存候間此時の儀候とて各被申候へは右與左衞門被申候はあのてきをつきたて追はらい候はゝ城中へ入可申につきまけ候は城へ入ましき由各へ申合候て突て出候跡を門城戸を押たて被申候最前右與左衞門如被申候敵千騎はかりの人數に城より出候は百騎はかりなる故つき立られ門きわに押入られ池の段へ引入其上二之丸に小笠原右京進組の衆に打たてられ敵たまられす殊手負數多御座候を引かけ引取一夜之陣取にて翌日引上る

城持口之次第

一はたかや大手之持口小笠原與左衞門同次右衞門同組之衆

一二之丸持口小笠原右京進同彌八郎同組之衆

一北立花持口小笠原玄蕃丞同彌太郎同組之衆

一西城ほつちかを持口久嶋十郎左衞門同河内同組之衆

一中城持口小笠原作右衛門安西越前守同組之衆

一東尾持口小笠原雲波同左馬丞同宗三同甚十郎其時城より出鑓を合候を信玄公は一々に指物を書付候由承候山城と申名城この城はかゝりに日暮是いかゝと被申一夜之陣にて頓て引取被申候其後天正二年目に武田四郎勝頼公又高天神へ働き城を取まき堀さくへいをかけ金ほりを入七十三日せめられ候其内に　家康様より信長を御頼み加勢可被成と被仰候故に切々鷺坂牛之介と申侍をしのひ使に遣し候へは　家康様より被仰越候儀は懸川へ信長公先例付候はゝ一番のろし青田山に上け被成候之由信長御馬見付へ着候はゝ二番のろし同所に上可被成之由掛川へ信長御馬着候はゝ三番のろし同所に上け可被成之由如此三番のろし迄あかり候へとも一圓人數見へ不申候に付城中上下鷺坂牛之介は僞を申者哉とて各あきれ罷在候由又ほりしゆくへいをかけ候陣場を牛之介をしのはせて

家康様へ越中見させ候へとも濱松迄御先勢着申候と鷺坂牛之介申候得は又僞にて可有と申城中よはり申候其内に勝頼方より彈正方へからくり狀參候事城を渡し味方と御なり候はゝ本國信濃國を可遣とたはかられ勝頼公と申合有て其時諸親類へ彈正被申候樣は加勢のろしの筈違すてにころす體に見へ申候間此上は別心仕候間各も御同意可被成候はゝと有時諸親類衆被申候樣は惣領衆は人質を御すて被成候諸親類衆は人質のために候とて城中にて總領殿を打果し可申と本丸へ鐵炮を打懸申候へは御使に被越候て籠城被成候安部善九郎殿飛田三右衛門殿兩人噯にて彈正殿より甲州方へ被申候諸親類共別心之同心不仕候間引のけ濱松　家康様御のけ候へとも勝頼方へ被仰候へは濱松方へ退度候はゝおくり出し可申と有に付親類衆城を出候時に甲州方よりてんきうを人質に取

親類衆よりは彌八郎殿を甲州方へ人しちに越申候遠州見付之府迄おくり被届見付原東坂にて人しち取替し其時濱松へ退候衆之事

一家康様へ人しち上候衆

小笠原惣兵衛入道
是は人しちに被参候

小笠原玄蕃
同　彌太郎
同　作右衛門
小笠原右京進
同　彌八郎
同　長助
小笠原與左衛門
同　彌次郎
小笠原次右衛門
同　清十郎
小笠原雲波
同　左馬丞

人しち無之衆

門奈左近右衛門
遅美源五郎　東より濱松へ後に参候
福岡太郎八　同断
三井孫左衛門
鷺坂牛之介
まゑかゑ三平
野々山七左衛門

小笠原宗三　　同子甚十郎

御せいはい久嶋十郎左衛門　　御せいはい同子川内守

同断安西越前

曾根孫大夫

一右は小笠原惣兵衛入道物語二代目の作右衛門せかれの時聞書に仕置候也

一小笠原彈正殿は甲州勝頼公御父子御退治之時小田原へ退鎌倉に隱置被成候を信長殿甲州御歸陣の時小田原へ御夫立此彈正は加勢待兼城明別心之者之儀候而早く御成敗無之者共へ取懸可申と御夫立候に付則鎌倉にて切腹被仰付驗濱松家康樣へ參候事其後驗をは諸親類共に被下就はかんはれ平殿寺に而さふらい其所にはか所御座候

一久嶋左衛門大夫北條上總か子也又父上總は遠州高天神の城主久嶋上總と申者の子也此久嶋上總守甲州西之郡迄發向出し候武田家老萩原常陸のはかりことを以信虎公に首をとられより如此甲陽軍には御座候其久嶋は高天神の城にて小笠原左京進をせめられ本丸にて首をとられ候小笠原作右衛門祖父惣兵衛物語被申置候其時久嶋親類共長太刀に而つき合きり合候并其後高天神にて二代目の作右衛せかれの時分其時の仕合委仕候甲州よりはかりことの狀故首取候事は高天神之城にて小笠原せいはい被申候甲州にてくひ取候と御座候儀は僞にて候別心有之とおとし文を今川殿御覽被成小笠原に被仰付候事

小笠原美作守 氏貞 位牌所遠州淺羽庄馬伏塚天岳寺法名秦翁

一　養父長左衛門初彌八郎義信年月日不知

權現樣ヨリ知行三千三百石被下置往年老衰ニ付右知行之內貳千石嫡子左門ニ被下置千三百石爲隱居料長左衛門ヘ被下置別宅ヘ取除罷在候處大村彌兵衛高重二男兵右衛門茂久ヲ養子仕隱居料千三百石之內千石兵右衛門ニ被下置殘リ三百石ハ長左衛門義信末子十左衛門ニ被下置寛永七年七月五日七十四歲ニテ病死

兵左衛門初左京茂久年月日不知　養父長左衛門義信隱居知之內千石被下置元和二辰年　南龍院樣ヘ御附被遣同五未年八月御入國之節紀州ヘ御供仕寛文二寅年四月十二日物頭被仰付同十戌年七月十九日病死六十六歲

養子市之丞後兵右衛門茂次知行千石無相違被下横須賀大番組被　仰付以下代々相續兵右衛門ト稱シ內幼少又ハ不愼等ニテ減祿六代兵右衛門定啓御切米八十石御徒頭格中奥詰ニテ嘉永五子年九月病死總領八百輔定良相續ス

小笠原左門茂治　長左衛門義信總領

父長左衛門知行之內貳千石家督被　仰付間モ無之病死子無之ニ付弟主馬義治ヲ養子ニ仕其子長左衛門又其子長左衛門後主膳二千五百石　有德院樣　公儀ヘ被爲入候節御供仕御側ニ被　召出諸大夫肥後守ト稱シ以下代々御旗本ニテ奉仕

一イツレ之長右衛門之事ニ哉北窓俚言ニ左之記アリ

小笠原長左衛門御小姓頭ノ時小姓衆仲間喧嘩ニテ一方ヲ手キリニ切殺シカス手モヲワスシテ卽

立除ケリ此時モ甚御立腹ニテ頭ヘ御カヽリ相手ヲ尋出シ早々差上ケ候ヘトノ御事ナリ長左衛門卽安藤帶刀水野平右衛門兩人ヘ被申候ハ是ハ御意ニテ候ヘ共左樣ニハナラヌ事ニテ候我等モ今日立除可申トナリ兩人聞テイカニモ最モナリ早々立除給ヘトナリ平右衛門被申候ハソナタノ道具ヲハ我等預ルヘシトテ裏門ヨリ平右衛門屋敷ヘ入サセ悉ク預リ給フサテ長左衛門ハ和泉國犬塚トイフ所ヘ立チノキテ三年居ラレケリ知行ヲバヤハリ其儘被下候扨三年メニ御國ヘメシカヘサレケリ

小笠原十郎右衛門

同　次右衛門

小笠原十郎右衛門清俊（小笠原次右衛門 初與次郎）初四郎右衛門　定信次男

家　譜

祖父宗玄信倫（初四郎右衛門 後治右衛門）ハ永祿十一辰年十二月廿一日小笠原美作守氏淸御手ニ屬刻父子共一族之者共　權現樣ヘ人質ヲ差上ケ御味方申上味方原御合戰之節敵貳人討取候處敵三人出合終ニ討死仕

一父次右衛門定信元龜元午年六月姉川御合戰ニ小笠原與八郎氏助御先手ニテ候時馬上ニテ組打ノ高名仕御感之上意有之候味方原ニテ父討死候ニ敵三人其首ヲ奪ヒ爭フ時定信別所ニテ相働敵壹人討取リ候處ヘ宗玄家來駒若丸ト申者馳セ來リ是ヲ告クルニ依リ取所之首ヲステ卽馳付當敵貳

人討取壹人ハ腕ヲ切落候ヘ共其場ヲ逃延申候宗玄印ヲモ取返右之趣達　上聞　權現樣　上意ニ其場ニテ親之敵即時ニ討取候事天道ニ叶ヒタル儀ト御感有之候

一遠州城東郡ニテ一揆起リセリ合有之刻定信馬上ニテ敵ヲ一太刀切申處敵馬ノ下腹ヘクヽリ馬ヲ刺倒ニヨリ則下リ立右之敵ヲ討取引取候節猶敵烈敷付ケ來リ候得共馬具等モ不捨取收歸リ候

權現樣此旨被　聞召御稱美被遊候

一天正二戌年高天神籠城之節阿部善九郎等ノ扱ヲ以テ定信並嫡子淸十郎元忠且一味之者トモ濱松ヘ罷越申候

一同九巳年三月於高天神勝賴ト御合戰之時城内ヘ忍ヒ之物見ニ被遣候城ヨリ罷歸リ則爲御褒美御笄拜領仕候

一同十八寅年小田原御陣之時御旗奉行之助被　仰付相勤於御陣小屋御茶壺拜領仕候

一關ヶ原御陣ニハ五之字ノ御使番相勤申候

一駿河ヨリ横須賀ヘ被遣候處草深キ所ニテ住心悪敷候付罷歸候由申上横須賀ニテ被下置候知行七百石訴訟ニテ二男同苗十郎右衞門淸俊ヘ讓リ定信ハ駿河ヘ罷歸上總ニテ知行五百石被下置候

一慶長六丑年九月近江ニテ五百石御加增被下都合千石ニテ伏見御番ニ被仰付罷越申候右五百石之證文名書　權現樣御直筆ニテ被遊被下候

一同十四酉年十月四日於關東病死仕候　于時六十七歲

定信嫡子淸十郎元忠天正十年八月甲州若御子之戰ニ　十八歲　ニテ大刀ノ敵ヲ大腰ニ懸打倒シ首

ヲ取　權現樣ヨリ御腰物拜領天正十二年長久手御合戰之刻二十歳ニテ討死

十郎右衞門清俊

權現樣へ被　召出知行七百石被下文祿五申年正月廿日之御日附ニテ　權現樣ヨリ四百石之御黑印被下置候

小田原御陣之節供奉仕於酒匂宿セリ合之時敵壹人討取關ヶ原御陣供奉仕敵壹人討取大坂御陣ノ節ハ横須賀御旗奉行相勤其後年月日不知　南龍院樣へ御附被遊元和年中御供ニテ紀州へ罷越申候

總領與次郎儀モ被　召出知行貳百石被下置代々相續之處子孫ニ至リ亂心家斷絶ス

小笠原次右衞門正信

小笠原次右衞門正信（次右衞門定信三男 初三右衞門 生國遠江）

慶長十四酉年父次右衞門定信爲家督知行千石被下置御使番相勤

同十九寅年月日不知　南龍院樣へ御附被遊元和五未年御國替之節御供仕紀州へ罷越御旗奉行兼御使番相勤寛永十五寅年十二月十六日六十一歳ニテ病死

年月日不知　權現樣ヨリ青貝柄御長柄一筋御鑓一筋滑革袋入御鐵砲貳挺拜領仕候

一正信總領三右衞門（後次右衞門）勝信父之家督千石被下以下代々相續八代次右衞門信全ハ六百石御書院番頭ニテ天保十四卯年十月病死養子仁之丸信善相續ス

一三代次右衞門信定總領小笠原三右衞門信盛（初政之助）部屋住ニテ元祿十四巳年六月御小姓ニ被　召出後御召御具足奉行三十石ニテ正德六年四月　有德院樣御供ニ被　召連八百石御小納戸諸大夫被仰付若狹守ト稱ス以後代々御旗本ニテ相續ス

小笠原庄大夫

小笠原庄大夫盛高　小笠原三郎朝宗　宗三總領 生國遠江

家　譜

父三郎朝宗ハ隱居後宗三ト稱ス永祿十一辰十二月小笠原美作守氏清一統　權現樣ヘ御味方人質ヲ差上天正二戌年五月高天神籠城之節匂坂牛之助扱ヲ以テ城ヲ明ケ濱松ヘ罷越　御目見天正三亥年十二月十日小笠原一統ヘ　權現樣ヨリ御書被下等總テ小笠原伊右衞門傳ニ記スル處ニ同シ

一天正二戌年於遠州高天神合戰之節鎗下高名仕惣靑貝柄十文字穗一筋從　權現樣拜領仕候趣申傳ヘ于今所持仕年月日不知病死

庄大夫盛高永祿十一辰年十二月遠州御合戰之時今川方月見里城ニ籠有之候ヲ久野三郎左衞門ヘ被仰付御攻落之時小笠原一統モ相働夫々軍功有之庄大夫盛高モ太刀打高名仕候

一元和二辰年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊知行千石被下同五未年八月御入國之節御供仕紀州ヘ罷越大番組頭勤同六申年十月十二日病死仕候

盛高總領庄大夫氏定同人養子庄大夫氏次家督千石無相違被下共ニ　南龍院樣ヘ奉仕氏次養子辨右衞門後庄大夫元朝ハ貞享四卯年十一月家督六百石被下以下代々相續後代替リ末期名跡等ニテ減祿九代庄大夫長謠ハ貳百五拾石小普請支配ニテ慶應四辰年二月隱居養子保五郎長恒ヘ家督無相違被下虎之間席並銃隊被　仰付タリ

小笠原作右衛門

小笠原作右衛門正信　小笠原作右衛門與康總領

家　譜

父作右衛門與康ハ惣兵衛清廣ノ次男ニテ天正二戌年五月高天神御先手大須賀五郎左衛門ニ差添相働可申旨被　仰付同三亥年十二月　權現樣ヨリ同家之者一黨ヘ御書被下御味方仕候品都テ伊右衛門義寬傳ニ記スル通リナリ
其後御奉公仕軍功有之趣知行御役儀等不相知元和元卯年十二月廿五日病死
正信儀元和元卯年父作右衛門病死後　權現樣ヘ奉仕年月日不知
南龍院樣ヘ御附被遊元和五未年御入國ノ節御供紀州ヘ罷越年月日不知　知行五百石被下慶安元子年十一月廿日病死
總領金五郎後作右衛門　正勝父跡目知行五百石無相違被下以下代々相續七代善右衛門初礒四郎　祕眞百五十石御留守居物頭格奥詰ニテ天保三辰年九月病死總領善輔眞苗相續ス

小笠原與兵衛

小笠原與兵衛清次　小笠原與左衛門清有養次男　實小笠原玄蕃頭義時二男　初孫四郎　生國遠江

家　譜

年月日不知小笠原與左衛門清有養子被　仰付候處後與左衛門ニ實子出生ニ付奉願出生之子ヲ與左

衛門總領ニ御立被下與兵衛ハ次男ニ仕

慶長十九寅年月日不知於駿河　權現樣へ被　召出高貳百石被下御小姓相勤別家ニテ御奉公仕元和二辰年横須賀一黨ノ者ト共ニ　南龍院樣へ御附被遊同五未年御國替之節御供ニテ紀州へ罷越大番相勤

慶安三寅年七月五日病死

清次總領與惣範情父家督高貳百石被下以下代々相續之内幼少ニテ家督又十七歳已下ニテ病死等ニテ減祿五代與惣範番ハ寛政十年四拾石新御番タリ

小笠原彦左衛門

家　譜

小笠原彦左衛門　小笠原三郎兵衛朝高孫　小笠原彦左衛門實子總領

祖父三郎兵衛朝高初メ新九郎ト稱シ三郎左衛門朝定二男也

權現樣岡崎ニ御座之時先祖之者共御手ニ付不申候テ罷在候付御扱被遊一門ノ者共へ御記證文被下置御本紙ハ嫡家小笠原左衛門佐方ニ拜納右左衛門佐子孫當時誰家ニ候哉相分不申候

御記證文寫

一兩城相違有間敷事

一幡豆知行方東ハ深崎郷西ハ宮崎山共北ハ小野加谷八幡境付大山小原山之事

一於郡中請不入事聊相違有間敷事

但境目之事可爲冥（本ノマヽ）法之事

一同右中（本ノマヽ）相違有間敷事

右此旨於如在ハ

上梵天帝釋下ハ四天王惣テ日本國中大小之神祇以下略ス

永祿七年甲子四月四日　　御　判

小笠原左衛門佐殿

同　新九郎殿

夫ヨリ權現樣へ奉仕味方原ニテ打病仕候

朝高弟小笠原新兵衛ハ東成屋崎ニテ討死仕

一父彥左衛門若年ヨリ　權現樣へ奉仕後岡崎三郎樣御所望ニ付御附被遊御旗奉行被　仰付三郎樣御仕合之後　權現樣へ被　召歸御鎗奉行被　仰付知行七百石被下置御朱印頂戴仕御朱印ノ寫左之通リ

武州村沼上郷之内

七百石出置者也

天正十九年辛卯五月十七日　　御　朱　印

小笠原彥左衛門殿へ

其後少シノ儀御座候テ蒙御勘氣候處石川長門守康道申聞候ハ先我等所へ引込居候へ被召出候樣

小笠原金平定武
同三郎右衛門

御序之節可申上候由ニ付總領彦左衛門共ニ康道方ニ罷在候
彦左衛門儀父彦左衛門病死後大坂冬御陣之節石川長門守康道息主殿ノ供ニテ罷越候處於御陣備小
笠原彦左衛門儀ハ大坂ヘ籠候哉何方ニ罷在候哉ト戸田又助ニ御尋被遊候處父彦左衛門儀病死仕候
由申上候ヘハ忰ハ無之哉ト重テ御尋被遊候付右彦左衛門之樣子申上候旨又助ヨリ申越候ニ付大坂
御歸陣之節主殿ヘ斷リ申駿府ニ於テ御禮申上夫レヨリ　權現樣ヘ奉仕御役儀高不知御他界後　台德院樣
ヨリ　南龍院樣ヘ御附被遊元和五未年御國替之節御供仕紀州ヘ罷越同六申年八月廿六日知行三百
石被下正保二酉年正月二日病死
右彦左衛門跡目實子總領彦左衛門ヘ貳百石被下以下代々相續八代孫次郎盛秋貳拾五石大御番之
處不心得之品ニテ御役被　召放寛政十午年貳拾五石小普請タリ
一祖父三郎兵衛朝高二男小笠原金平定武　南龍院樣ヘ御附人ニテ代々別家ニテ相續ス

小笠原金平
同　三郎右衛門

家譜

小笠原金平定武　小笠原信濃守長高四代三郎左衛門朝定二男三郎兵衛朝高二男　生國美濃
永祿二己未年月日不知七歲之時爲人質今川義元ノ方ヘ罷越候處臨濟寺雪濟和尙之擇ニヨリ父三郎兵衛
手前ヘ罷歸申候

一元龜三壬申年十二月遠州味方原御合戰之節魁仕勇功ヲ顯シ鑓刀之疵二十一ヶ所被リ　權現樣ヨリ御感ヲ奉蒙知行五百石被下置候由申傳候へ共御判物ハ無之候

一年月日不知男子無之ニ付石川源十郎男源太郎ヲ養子被　仰付候

一年月日不知　南龍院樣へ御附被遊知行四百石被下置候 御役儀不知

一元和五己未年御入國之節紀州へ御供仕罷越同人壬戌年十月十五日病死仕候 于時七十一歲

小笠原三郎右衛門定俊 金平定武養子 實石川源十郎宗朝男 初源太郎 生國三河

家譜

年月日不知實父源十郎儀ハ松平甚太郎殿ニ仕三州田中ひつ坂ニテ討死仕候源太郎儀其節七歲ニテ母ト倶ニ遠州高天神へ罷越伯父小笠原與左衛門淸有ヲ賴成長之上金平定武養子ニ相成大須賀國千代忠次方ニ罷在候

一年月日不知　權現樣へ被　召出候 御役儀不知

一天正十八庚寅年四月小田原御陣之節御供奉仕於酒勾宿セリ合ノ節一番ニ鎗ヲ合敵ヲ突倒候處へ多勢斬掛ルニ付鎗ヲ捨相戰又壹人斬伏候得共痛手ヲ負兩人共ニ首ハ取不申候

一慶長五庚子年七月關ヶ原御陣ノ節ハ忠吉卿供奉仕御一戰ノ刻先ヲ駈一番ニ首ヲ取則忠吉卿へ入御覽候處首ヲ捨可働旨被仰候付又相戰敵壹人討取其日忠吉卿ヨリ阿部河內ヲ被差添御本陣へ被遣當手一番高名之段　權現樣於御前披露之處御稱美之　上意有之候由ニ御座候

台德院樣御代年月日不知　南龍院樣へ御附被遊高三百五拾石被下置候 御役不知

小笠原三郎右衛門定俊

一元和五己未年御入國之節御供仕紀州へ罷越申候
一年月日不知百五十石御加増被下置候
一正保四丁亥年五月朔日病死仕候　于時七十三歳

角右衛門定勝　三郎右衛門定後總領

一年月日不知於駿府部屋住ニテ被　召出現米三十石被下置候　御役儀不知
一元和五己未年八月御入國之節父三郎右衛門ト一所ニ御供仕罷越申候
一正保四丁亥年月日不知父三郎右衛門爲跡目知行五百石被下置候　御役儀不知
一年月日不知病死仕候　年齢不詳
　定勝總領三郎右衛門勝定父跡目三百石被下候處後亂心ニ付定勝二男角之右衛門盛倚新規被
　召出別家ニテ相續之處後三代目角右衛門泰久ニ至リ不心得ノ品ニ付御城下追放被仰付嫡家斷
　絶ス

分家

小笠原清大夫勝成　三郎右衛門定後次男初主米　隠居後如件　生國遠江

一元和四戊午年月日不知於駿河新規被　召出御小姓被仰付候
一同五己未年八月御入國之節父三郎右衛門ト一所ニ御供仕紀州へ罷越申候
一寛永元甲子年月日不知御切米六十石被下置候
一同二乙丑年十一月日不知地方貳百石被成下候

一同六己巳年七月 日不知 御加增百石被下置候

一同十三丙子年二月 日不知 御加增被下置都合四百石被　仰付候

一寛文十一辛亥年十一月十九日本願隱居被　仰付養子一郎左衛門へ爲家督知行無相違被下置横須賀大御番被　仰付候

一延寶四丙辰年九月十一日病死仕候 于時七十一歲

已下代々相續六代主米備兵二百石大御番組頭ニテ文政二卯年九月隱居知行二百石無相違養子雄次郎元和へ家督大御番被　仰付

一金平定武三郎左衛門定俊ヲ養子之後二男金平貞保出生追テ　權現様へ被　召出　南龍院様へ御附被遊元和五未年御入國之節御供仕後家斷絶候得共三男家ニテ相續文化九年之比小笠原林右衛門尹信トイフ

大村高重 彌兵衛○按駿河分限帳、在大番衆之列、祿千五百石、

大村高重、祖父曰彌兵衛高信、初仕今川義元有功、今川氏亡、仕東照公、屢有戰功、父曰市藏重信、戰死於小田原役、高重、年甫十六、承家、從小田原役、會津役爲先鋒、大坂兩役、皆有功、役竣屬公、高重以廉直稱、其親戚有官者、曰茂都、嘗出入牧野長虎門、一日長虎謂茂都曰、予覊旅之臣、故國鮮親戚、大村氏以武顯、予欲與之結爲親戚、汝試謀之、彼若聽於我、亦將有所利也、茂都乃具語之、高重正色詳言、兵庫今方有寵、頗自負、故有斯言、予雖微乎、毫無倚熱附炎之念、且汝思之、無葭莩之親、而與之結爲親戚、是

僞之大者也、何以事君、汝善體斯意、速往辭之、後有所復、予將與汝絶矣、茂都大懼而止、及長庶得罪被配、高重謂其甥三井孫之丞武藤小十郎曰、往年牧野兵庫、价茂都、欲與予結爲親戚、予若從之、今將與村上彦右衞門通清子某同覆我宗、而遠及汝輩也、夫爲武士者、當正心守義耳、若喪其操、以飾僞、將取不虞之禍、汝輩宜戒之、兵庫傳記○按村上彦右衞門以黨兵庫之故、除籍、事在慶安中、後復而祿之、

一南陽語叢ニ云ク　駿府御城御普請之節大村彌兵衞爲　御目見罷出候淺美源五郎以下罷在候處　御意ニ源五郎ガ其外モ承候ヘ祖父彌兵衞ハ子孫ヲカワユク存候テ竹ノ子ヲ絶物ニセシト御聞及被遊候ナト御懇ノ　上意ヲ蒙リシト言

一祖公外記ニ言ク　石野傳一ニ箭術稽古可致樣ニト大村彌兵衞ヘ被仰付彌兵衞一兩度稽古ニ行其後ハ不行或時打續稽古ニ行候哉ト御尋之處一兩度行其後ハ行不申ト申上候ヘハ早其意ヲ御察被遊閑所ヘ被召其方箭稽古ニ不行トノ趣意ハ如何ト御尋之處傳一稽古教方ハ合戰ノ稽古ニ可相成事ニテハ無御座候付相止申候ト申上候ヘハ夫ハ尤ノ事ニ候ヘ共左樣申候テハ皆々稽古ヲ可相止間必其了簡ヲ人ニ談間敷ト被仰候

大村彌兵衞高重　大村市藏重信總領　生國遠江

家　譜

祖父彌兵衞高信ハ今川上總介義元ニ仕ヘ於遠州知行領四郷、同家ヨリ之感狀都合拾二通于今所持仕候其後年月不知　權現樣ヘ奉仕知行所遠州榛原郡ノ内ぬしもり城東郡之内川村同西之屋村濱松領之内小池村是四郷所領仕金藥師ニ砦ヲ取武田信玄之押ヲ仕　權現樣御出馬濱松ヨリあをな山へ被爲成候時ほんかう山之城ヲ小笠原長左衞門並彌兵衞兩人ニテ乘取申候爲御褒美永祿十二己巳年三月八日あを田山ニテ榛原郡之内なさうかつまだニテ新知八百貫文被下置自今彌出精高名可仕旨蒙　上意御判物頂戴仕于今所持仕候右御判物寫

今度於金藥師別テ依有奉公新知八百貫文出置上永不可有相違彌可抽忠節者也依如件

永祿十二己巳年　　御諱御判

三月八日

大村彌兵衛尉殿

永祿十二己巳年正月十一日同十二日總領彌三郎並小美同心者へ爲知行本領被下置都合三百五十俵四百六貫文六人扶持之　御判物頂戴仕于今所持仕候右　御判物寫

今度出置本地事小美同心衆

一三百五拾俵　勝間田之内　麻生村永代方共

一貳拾一貫文　代方　同所

一五拾貫文　小池村之内

一三拾貫文　樑木之内　彌三郎給

一拾貫文　さはの内 三人扶持　新同心　古志津橘三給

一拾貫文　三人扶持 同所　新同心　一木太郎左衛門給

右知行如前々不可有相違者也依如件

永祿十二年己巳

正月十一日　御諱御判

大村彌兵衛殿

今度出置本地事小美同心衆

一九拾貫文　笠原之内 西之屋村　古志津藤兵衛分

一八拾貫文　河村之内 和田村　大屋三郎左衛門分

一九拾貫文　西方之内　奥山助六郎分

一拾五貫文　矢部與五左衛門分

一拾貫文　家代之内　同人前

以上此内城東郡分ハ替地可出置之

右知行如前々不可有相違者也依如件

永祿十二年己巳

正月十二日　御諱御判

大村孫兵衛同心四人

金薬師ニ罷在候節信玄ト手合仕信玄之手鎗ヲ奪取候由ニテ代々持傳罷在候遠州榛原郡小山之城ヲおぎうのさくわんト彌兵衛兩人ニ被　仰付持堅メ罷在其後　權現樣依　上意同所ヲ明ケ濱松ヘ引取申候處元龜三壬申年十二月信玄掛川筋ヲ押來芝原ニ陣ヲ取久野城ヲ責落サント心掛候付權現樣鎌田迄御出馬被遊候付久野城ヲ久野三郎左衛門持候ニハヤ信玄袋井下久野川非マテ入ミタレ焼立久野城モ落可申樣子ニ　御覽被遊御吟味之上爲御加勢彌兵衛並總領彌三郎ヲ可被遣旨被　仰付候處城之麓マテ敵入亂レ候得ハ可入樣無御座候ヘ共任　上意入可申ト申上信玄陣場

之中ヲ押分ヶ久野之城ヘ入四五日籠城仕堅固ニ相守候夫ヨリ信玄濱松ノ城ヘ可責掛樣子承候ニ付久野之城ヲ明ヶ濱松ヘ罷越申候　元龜三壬申年味方ヶ原御合戰之節モ　權現樣之御供仕御跡城之後ハ御近習ニテ被爲召仕　天正二甲戌年之比遠州高天神城主小笠原與八郎逆心仕甲州方一味之後大須賀五郎左衛門ニ城東郡ヲ被下高天神城押トシテ馬伏塚ニ御差置被遊彌兵衛本地モ同所ニ有之ニ付依　上意馬伏塚ヘ罷越大須賀之手ニ加相守高天神落城之時彌兵衛家來神谷權六林藤内ヲ初三十六人忍之者ヲ召連御先手ニテ相働申候　卒年年齡不詳

高信實子總領彌二郎綱次父彌兵衛ト倶ニ今川家ニ仕同家ヨリ感狀等給リ于今所持仕候其後年月日不知
權現樣ヘ奉仕元龜三壬申年十二月遠州味方ヶ原御合戰之節討死仕候　年齡不詳

一父市藏重信高信二男ハ祖父彌兵衛高信ト倶ニ今川家ニ仕ヘ後兄彌三郎綱次討死ニ付高信ノ家督相續仕　權現樣ヘ奉仕尾州小牧御陣之節御供仕候敵壹人討取天正十八庚寅年相州小田原御陣之節モ御供仕五月十四日酒勾口仕寄場ニテ鐵炮ニ中リ討死仕候　年齡不詳

彌兵衛高重天正十八庚寅年五月十四日父市藏討死仕候節被　召出跡職被下置以　上意祖父之名彌兵衛ト相改十六歲ニテ小田原御陣御供被　仰付父市藏具足ヲ着セ御前ヘ出シ候樣被仰付御目見仕御懇之蒙　上意御盃頂戴仕御盃于今所持仕候

同十九辛卯年奥州御陣之節御先手ヲ相勤大坂御陣之節モ兩度共御供仕候其後於駿河年月日不知
南龍院樣ヘ被爲附元和年中御國替之節紀州ヘ御供仕千五百石被下　役儀不知
明暦三丁酉年十二月二十三日病死仕候　年齡不詳

高重總領彌兵衛（初彌一右衛門）高家家督千五百石被下以下代替之節ニ次第減祿八代彌兵衛高伴ハ三百石
御手筒頭ニテ文化七午年六月病死養子孝輔高行嗣ク

大村孫兵衛高儀

大村孫兵衛

家　譜

大村孫兵衛高儀（寺崎彦三郎兼忠總領 生國駿河）
有故母方ノ苗字大村ヲ名乘於駿河（年月日不知）大須賀五郎左衛門康高吹擧ヲ以テ　權現樣へ被召出現米
五拾石被下置（御役年月日不知）其後（年月日不知）　南龍院樣へ御附被遊元和五未年御入國之節御供仕寛永十酉年九月
十二日病死
高儀總領六郎左衛門政照父跡目五十石被下後三百石ニ御加増以下代々相續六代十郎左衛門政明
高百五十石御小納戸頭格奥詰ニテ天保十亥年正月病死總領兵左衛門（後十郎左衛門）政令嗣ク

大藪國安

大藪國安（新右衛門○駿河分限帳、在御鐵砲衆之列、祿千石、）
大藪國安、不詳其所出、初仕中村一氏、關原役、東照公召而祿之五百石、後屬公、大坂役從而有功、增賜
祿五百石、公移封紀伊、併領伊勢之地、時古田重恒、爲松坂城主、移之石見、公使國安等往受其城、以幹
理之、（大藪系譜）

家　譜

大藪新右衛門國安　初新八 生國山城

始中村式部少輔一氏之幕下ニテ御座候處慶長五庚子年關ヶ原御陣之節　權現様へ被召出於城州知行五百石被下置之旨御判物頂戴于今所持仕候右御判物寫

上山城井岡村之内貳百拾八石九斗五升三合平尾村之内五拾八石市坂之内貳百貳拾三石四升七合都五百石之事宛行訖全可領知者也仍如件

慶長七年十月二日　　御　黒　印

大藪新八とのへ

大坂御陣之節年月日不知　南龍院様へ御附被遊此節爲加增於駿河　南龍院様ヨリ五百石被下都合千石被仰付役儀不知元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕寛永九壬申年七月廿三日病死仕候　年齢不詳

國安長男次郎八部屋住ニテ　南龍院様へ被召出高三百五拾石ヲ賜リタル處父ニ先タチ寛永七午年八月病死ス

國安養子新右衛門　實名不知 實河合刑部次男　寛永九申年養父國安家督高千石無相違被下其子新右衛門常延幼少ニテ家督三十人扶持被下追テ三百石ニナリ以後代々相續七代藤松寛政九巳年七月十七歳以下ニテ病死名跡斷絶之處先祖以來相勤候者故同十年午十月　浚明院様十三回忌御法事之節左衛門國義ヲ名跡被仰付二十人扶持大御番格小普請タリ之ヲ八代トシ文政十亥年八月病死總領新之丞國平跡目相續ス

尾寄忠重 平左衛門

尾寄忠重、系出於藤原秀卿、世住遠江城東郡尾寄、因氏焉、忠重初仕武田氏、及其亡、東照公召而祿之、賜三百石、尋增六百石、後屬公、賜九百石、如故、從大坂役有功、役竣爲留守居番頭兼勘定奉行、與武藤源左衛門萬休齋、川北長左衛門共參機務、世呼曰三人衆、寛永六年歿、子平左衛門、初稱彥三郎、別開家、特賜祿五百石、及後襲家、合父子祿賜千石、 尾寄系譜

家　譜　所左衛門忠利附

尾寄平左衛門忠重 代々遠州城東郡尾寄居住 生國三河

甲州武田家ニ附屬仕勝千代早世後浪人仕其後年月日不知於駿河　權現樣へ被　召出御役儀不知知行三百石被下置御判物無御座候慶長十一丙午年二月御加增六百石拜領都合九百石被下置之旨御朱印頂戴于今所持仕候右御朱印寫

常陸國茨城郡渡村之內參百石此外那賀郡石神村之內四百石米崎村之內貳百石以上六百石ハ加增合九百石宛行訖全可領知者也

慶長十一年二月廿四日　御朱印

尾寄平左衛門とのへ

其後武田萬千代信吉卿へ御附被遊候處御早世ニ付追テ年月日不知　南龍院樣へ御附被遊大坂兩度之御陣御供仕元和五己未年御國替之節紀州へ被召連御留守居番頭御用人御勘定奉行兼帶相勤其後年月日不知相願隱居仕長男所左衛門病死ニ付次男彥三郎ヲ總領ニ被仰付爲家督平左衛門知行九百石幷彥三郎

取來候高五百石之內百石都合千石彥三郞ニ被下同人取來候殘高四百石爲隱居料平左衛門ニ被下寛永六己巳年二月十日病死仕候 年齡不詳

尾寄所左衛門忠利

尾寄所左衛門忠利 平左衛門忠重長男 初惣三郞

父平左衛門倶ニ於駿州 權現樣ヘ被召出 御役儀不知 慶長十一丙午年二月常陸國茨城郡ニテ御知行二百石被下置 御朱印頂戴仕其後貳百石御加增被下置信吉卿ヘ御附被遊候處御早世ニ付追テ 年月日不知 父平左衛門同樣 南龍院樣ヘ御附被遊大坂兩度之御陣御供仕元和五己未年御國替之節紀州ヘ御召連寛永二乙丑年七月二日病死仕忠利總領所左衛門 幼名不知 ヘ家督無相違被下候處無程病死仕候然所同六己巳年父平左衛門忠重病死之後同人取來候隱居料四百石所左衛門忠利次男平作ヘ被下別家ニ相立代々相續七代目所左衛門新御番相勤罷在依之前段御朱印ハ同人方ニテ于今所持仕候

按スルニ三代所左衛門伊利幼少ニテ家督十五人扶持ニ減祿五代所左衛門利命ハ廿五石五友之間御廊下詰ニテ文政十亥年五月病死養子作左衛門利延相續ス

平左衛門重定

平左衛門重定 平左衛門忠重次男 初彥三郞 生國三河

於駿府 年月日不知 南龍院樣ヘ新規被召出高四百石被下御小姓相勤大坂兩御陣ヘモ御供仕追テ御加增被下高五百石ニ被仰付別家ニテ相勤罷在候處兄所左衛門病死ニ付平左衛門總領ニ被仰付 年月日不知 爲家督父知行九百石幷彥三郞取來候高之內百石都合千石被下其儘御小姓相勤寛永十七庚辰年六月十三日病死仕候 年齡不詳

重定家督ハ總領平左衛門忠直ヘ無相違被下五代平左衛門忠利八百石御先手物頭ニテ寛延四未年

二月不心得之品ニ付御役知行被召放後十五人扶持被下遂ニ八十石ニ至ル以後追々減祿八代平左衛門利之ハ御切米四十石五友之間御廊下詰ニテ安政六未年八月病死總領猪之助忠孝相續ス

一平左衛門忠重川北長左衛門武藤萬休ト共ニ御留守居番頭タリシ時寛永元年正月廿四日三人ヘ龍祖ヨリ御直書被下同二年十二月廿九日三浦長門守初平左衛門等九人連名ニテ御直書被下イツレモ同年次之本譜ニ記載アリ而シテ兩御直書共平左衛門家ニ所藏スト云

落合左平次道次

落合道次 左平次○按駿河分限帳、在大小姓衆之列、祿八百石、

落合道次、遠江人、初仕武田氏、後仕東照公、賜祿八百石、後屬公、元和六年歿、子左平次道清襲家、爲旗奉行、孫左平次直澄、爲城代增祿至千二百石、初道次以鳥井勝高死節圖、爲背旗、又用朱幹槍、子孫世傳以爲至寶、 落合系譜

按安井息軒記勝高死事曰、勝高既報援兵之期、城中歡聲如雷、護衛者愕眙失措、走歸以告武田勝頼、勝頼大怒命磔於城南青海原、洞兩腋而去、甲人有落合左平次者、高其忠勇、往而觀之、見其未殊、仰十字架、而號之曰、子志烈矣、今雖死焉、千載猶生、請寫子圖以爲背旗號、勝高雖不能言領焉耳、左平次既寫、憫其苦楚、又號曰、謹領子惠、請一彈以爲報、銃其喉而絕此舊中津藩士所傳云、

家譜

落合左平次道次 生國遠江

權現樣ヘ遠州濱松ニテ被　召出御藏米八百石被下置御奉公相勤慶長十八癸丑年 月日不知 南龍院樣ヘ御附被遊知行六百石被下置元和五己未年八月十八日紀州ヘ御入國之節御供仕 年月日不知 御加增被下置八百石被仰付

同六庚申年十月十六日病死仕候　年齢不詳

一皆朱之鎗幷礫指物之儀子々孫々迄御免之段申傳候ヘ共イツノ比御免トノ品ハ不申傳候二代目左平次儀病死仕末期ニ養子被仰付候付其間ニ其節ノ家來之者無筆ニテ諸書附等燒捨候由申傳候由緒書等モ右之内ヘ紛燒失仕候ト相見ヘ彌ト相分不申候御入國御供仕候左平次ヨリ右兩品代々相傳罷在候

道次實子總領ハ左平次道淸ト稱ス家督八百石被下御旗奉行ヲ勤萬治三子年六月四日病死已後代々相續八代左平次道會三百石御先手物頭ニテ文化十酉年七月病死實弟九十郎道當相續ス

按スルニ　落合左平次ノ指物ハ鳥井强右衛門カ逆磔ノ圖タルコトハ御家ニ於テノミ有名ニアラス他藩傳稱スル所既ニ安井中平記事ノ如シ又平山行藏モ嘗テ之カ記ヲナセシ由頃日舊藩士佐々木廣明（舊藩臣非職陸軍大尉嘗テ熊本城ニテ神風黨亂ノ時聯隊旗ヲ取リ返シタル人）カ所持スル所ノ一幅ヲ閲覽ス是長州人某カ秘藏ノモノヲ騰寫セル也ト上ニ磔背旗ノ圖ヲ揭ケ下ニ文アリ左ノ如シ而テ該背旗之現品ハ當代左平次ヨリ和歌山德義社ヘ納メシヲ信明治廿六年四月出縣ノ際社長ニ議リ齎シ歸テ今寶庫ニ存ス皆朱之鎗ハ尙德義社ニアリ末ニ兩圖ヲ載ス

平山氏ノ記

落合左平次武田勝賴之臣也、甲軍嘗攻奥平氏所守長篠壘、衆寡不敵、陷在旦夕、戍將鳥井勝高者、出壘請援於濱松城、事既諧矣、還將入壘、爲敵邏卒所虜、勝賴召見勝高、謂之曰、汝反辭曰、援軍不來、則厚賞汝、否則不旋踵候、勝高陽諾、往呼城門曰、援軍不日而來、請堅守焉、勝賴聞之、愼其欺罔、遂縛勝高于十字架上、攢鎗刺殺之、左平次于時在軍中、覩之甚感其義、慷慨之情不能自止、因畫其就死之狀、以爲背旗也、武田氏滅後、事於南龍公、其裔孫今在南紀、背旗亦存家、愚因南藩之人得此圖、或亦聞其說如此、於是記其事於圖下、以藏焉、今也應堤賢兄之需、再書以塞其責云、

丙戌文政九年五月、兵原平山潜子龍氏□□、

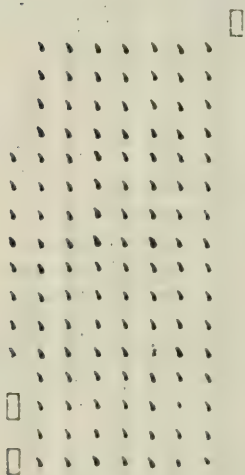
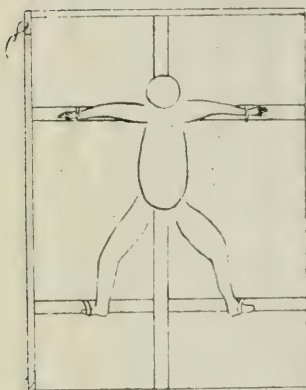
平山行藏ハ近世豪傑ノ士也著書勝テ云ヘカラス内ニ鈴林巵言ナルモノ七十有余卷アリ該背旗ノ記ヲ草セシ因縁詳也トテ或人齎シ來テ信ニ示ス是直接左平次カ傳ニ關セスト雖モ數百世ノ下能ク人心ヲ激昂セシムルハ偏ニ背旗ノ生氣凛々タルモノト左ニ併記ス

源子禮ニ贈ル書　子禮ハ榊原權之助事也

春雪余寒彌御健に被成御座奉壽候爾者過日は辱臨早々仕合其節御約束申上候通聯句乾打碑に寫上申候遲延之段多罪々々落合左平次背旗之圖記事一篇入貴覽候何卒乍御世話御存分に点竄改刪奉冀候例の通の諸事無々相分り兼候事共可有御座候へ共御書直しさ被思召をしけなく奉願候最御閑暇之砌にて宜御座候必々急々の事にては無御座候已上

正月廿七日

右圖記之小樣

落合左平次背旗之圖

箇様に致し表裝之積に御座候

世人より見候へは不佞かけ樣の事を好候は何とやら奇激昂なるやに御座候へ共左樣には無之候松齋先生より賜り候楠氏家訓に楠公常に一室中に物具して座し太刀を鯉口より二三寸拔出し只今敵に打向ふありさまにて居られしとあるを先生評して云く楠公の勳業に比して見れは何とやらん初心のやうなれとも一足切斷の立屍の場合に臨んて狼狽動着せぬやうに二六時中膽勇を鍛煉せられ下學の功を崇重せられし事こゝが楠公の楠公たる所以なりとて涙を流され候事御座候又鈴木正三は難波の役に働し人なりしか遁世して緇衣圓頂の身となりて佛に淫せり其著述七部あり不佞か見し驢鞍橋と云者は其弟子惠中か筆記なり其初めに二王坐禪闘聲坐禪なとゝ云ことあり佛道修行といつは精神を鍛練し熟柿の落て潰るゝやうに死なすとての事なれは其初めからとしやう骨をなへてかゝらねはならぬ事故かくの如く教しなるへし又天台の摩訶止觀の說とやらんに日輪觀月輪觀白骨觀なとゝ申事候て日月を畫きて是をにらみつめ白骨を畫て是を見つめ心を其物に置く事あり昔堀川の仁齋先生浮屠に入て白骨觀を修せり天地の間森羅萬象悉く空情をあらわし見るとして白骨にあらさる人なしと云へりと聞傳へたり其事は易れ共いつれ神魂を顚倒させぬ修行なり聖人の宥座之器を以て盈滿を戒め湯王は盤に銘して日新の德を治め周に金人の銘ありて多言の敗を警む是皆衒物にあらす物に因て心術を正ふする事を一際親くせしものなるへし不佞か鳥井强右衞門か磔になり候圖を壁上に安し睨して以て日をくらし夜を明すも精神を其他に居て轉動せぬ修行なり嗚呼大平二百年あまりなる者平風を吞込し肝膽されは中々此

工夫にても此破れ魂の療治はとゝき兼へきならん行藏人の誹謗を冒て憂すして只其工夫の至らさるを患ふ請ふ一笑せよ

一祖公外記附錄に云く武州大宮は當家の御鷹場にて此處に住居致候八王寺孫左衞門と申者不屆に付　公儀より討果候樣にと鎗術者小野典膳を被遣候依之此御方よりも落合左平次を被遣候兩人罷越候處孫左衞門は暫く御待可給迚緩々飯八椀酒八椀たへ夫より佩刀を持出其柄の長一尺五寸及長三尺三寸有之を車輪振廻典膳と仕合の處典膳は炭部屋へ被追詰討死に付左平次は孫左衞門を討果候

右左平次とのみにて實名なき故何代なるや知れかたし又武林隱見錄を按するに神子上典膳後小野次郎右衞門と稱す代々幕府に仕へ鎗術師範家とあり本記小野典膳とは蓋し次郎右衞門之誤りならんか四代目次郎右衞門迄の記には八王寺孫左衞門に討れしことなし或は後代次郎右衞門なるや知るへからす暫く疑ひを存す

落合左平次皆朱鎗

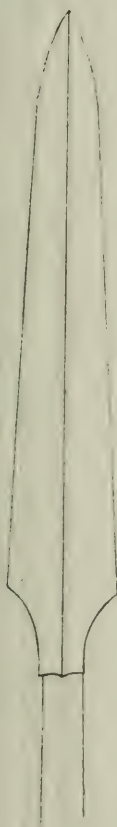
鞘長一尺一寸三分横九寸　柄壹丈貳尺七寸朱千段巻 二本共

鞘二本共黒たゝき　石突二寸五分

鞘長九寸　横七寸五分　柄壹丈

穂長五寸七分

中ゴ長八寸

魚則

落合義次 市右衛門

落合義次、父曰鈴木重藏義淸、仕東照公、死於某役、義次幼孤、爲叔父落合左平次道次所育、因冒其氏、爲大須賀康高部下、後屬公爲安藤直次部下、賜祿二百石、移住田邊、寛文三年歿、 落合系譜

按、橫須賀隊、移田邊者、猶多有之、家譜不詳其履歷、今擧其姓名於下、以俟他日、曰靑木彌見右衛門邦宗、曰澤美八右衛門正綱、曰布目總兵衛、曰辰田喜左衛門、曰加藤次左衛門正勝、曰山川新五左衛門吉正、曰岡本源兵衛正比、曰淺山次兵衛、曰門奈彌左衛門、曰佐津川三右衛門等也、

家譜

落合市右衛門義次 鈴木重藏義淸實子總領 生國三河

父鈴木重藏義淸ハ　權現樣ヘ奉仕本多中書組附ニテ御陣御供仕 御陣場年月共不詳 討死仕候

市右衛門義次儀父義淸討死之砌幼少ニ付叔父落合左平次道次養育仕因テ苗父落合ヲ名乘以來不復本姓

一權現樣御代 年月不知 父重藏爲家督御知行百五十石被下置其後大須賀家組附被　仰付息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊原家爲繼跡上州舘林ヘ被遣候節　權現樣思召ヲ以橫須賀黨過半御留置被爲遊此者共ハ度々骨折候故御秘藏ニ被爲思召候ヘ共被爲進候トノ上意ニテ元和二丙辰年 月日不知 南龍院樣ヘ被爲附安藤帶刀直次相備被爲仰付其儘遠州橫須賀ニ住居仕橫須賀ヨリ駿河之御城番相勤同五己未年南龍院樣紀州ヘ御入國之節御供仕五十石御加增被下高貳百石被　仰付其後南龍院樣被　仰付候由ニテ安藤帶刀直次橫須賀組一統ヘ申聞候ハ紀州之内田邊ハ大事之要地ニ

テ候間横須賀ヨリ參候諸士之內小身者ヲ遣置候樣ニトノ事ニ候然共人指ハ無之間圖取ニテ相究可然候彼地ハ草深キ所故馬ヲ飼候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ致氣儘活計イタシ候樣ニトノ儀ニ付則圖取仕候處市右衞門義次儀モ圖ニ相當リ候ニ付田邊ヘ罷越已來代々同所ニ居住仕相勤申候同六庚申年八月廿六日水野出雲守彥坂九兵衞安藤帶刀三判ニテ知行高村割目錄田邊詰横須賀組之者共ヘ被下所持仕罷在候萬治元戊戌年 月日不知 隱居仕總領彌市兵衞ニ爲家督高貳百石無相違被下寛文三癸卯年四月廿四日病死仕候 年齡不詳

以下代々田邊與力ニテ二百石無相違相續寛政十午年十二月系譜幕府ヘ提出之時ハ七代彌市兵衞淸規ト稱ス

落合七郎左衞門重長

落合重長 七郎左衞門

落合重長、初稱美作守、父曰主膳正重淸、歷仕織田豐臣二氏、朝鮮役屬加藤淸正有功、後屬東照公、屢有功、越前秀康公請祿之五千石、東照公助給五千石、合領一萬石、重淸歿、重長襲其祿、大坂役從忠直而赴焉、是役忠直部下、所獲首級凡三千七百五十一、而本多正富 伊豆守 所獲、百七十三級、重長所獲四十八級、役竣論功、政富自誇功爲第一、重長進曰、我所獲首級之數贏於卿、政富笑曰、較其數多少判然、何以云卿贏於予、重長曰、卿所領七萬五千石、而予則一萬石耳、推其本而較之、非予贏於卿而何、諸星金右衞門在坐斷之曰、美作論允當、於是政富默然而罷、然常憾之、乘隙讒重長、重長去越前、放浪四方、公乃資給二百口俸、改稱卜安、又召其子七郎左衞門重次、祿之千石、 落合系譜、及祖公外記

落合七郎左衛門重長　落合新八（後主膳）重清實子總領初美作守、後卜安

祖父内藏助重定儀、尾州須江ト申所ヲ代々取來カキアケヲモ仕罷在候父新八儀信長秀吉へ致奉公其砌ヨリ　權現樣秀康樣へ御出入仕大閤他界以後石田治部少輔等申合有之節ハ　秀康樣御屋敷ニ籠罷在御奉公申上候新八弟落合内匠ト申者京極丹後守殿家老ニテ罷在候付丹後守殿同舍兄大津宰相殿へモ新八別テ出入仕候付右之由緒ヲ以宰相殿丹後守殿兩人　權現樣へ御味方可被仕旨起請文取指上申候依之關ヶ原御合戰之時丹後守殿御味方宰相殿於大津籠城被仕候其外小身成衆數多御味方へ入候由其後　權現樣大坂へ御移　秀康樣伏見御城ニ被成御座候其節ハ御用心專ニ候處御城近邊治部少輔由緒有之寺ヨリ火事出來驚動仕候節新八諸事情ニ入働申候段　權現樣被爲　聞召御懇之御諚之上爲御褒美呉服拜領仕候

一關ヶ原御陣之節ハ新八儀　權現樣御供仕候御合戰之日ハ京極丹後守殿一手ニ罷在大谷刑部備へ掛自身高名モ仕藤堂玄蕃村越兵庫討死之場ニテ御座候大坂へ御着以後爲御褒美御加增拜領仕候其後秀康樣へ新八儀御貰請被成御加增被下都合壹萬石被下置候御證文所持仕候新八儀後主膳ト改名仕候

一親新八跡目無相違領知仕候大坂御陣之節越前先手仕冬御陣極月四日眞田丸責申候時分組ヲ召連先陣ニ進ミカセキ申候夏御陣五月七日天王寺表ニテ先手仕美作守手へ討取申候首數並直取モキ付之高名首帳ニ記兩御所樣へ入上覽申候其後品有之浪人仕七郎左衛門ト相改罷在候處寛永三寅年御家

へ被　召出貳百人扶持被下置候後剃髮仕卜安ト改名仕寬文二寅年正月病死仕候

重長實子總領七郞左衞門重次父ノ跡目知行千石被下延寶三卯年病死

已後代替之節漸次減祿七代九左衞門仲之ハ御目付四百石ニテ寬政七卯年八月病死養子楠次郞跡

目相續ス

一重次二男卿八豐久同姓門大夫重好養子トナリ部屋住ヨリ被召出　惇信院樣御館ニ被爲在候節御

膳番役勤務之處享保元申年御城へ被爲入候後紀州ヨリ被爲召同年八月御小納戶被召出子孫御旗

本ニテ相續ス

落合ト庵物語

一しづが嶽の山に添てよごの海と云有其間に太閤より向城を二つ築給ふ敵间近き向城者普請を丈夫

に致し本丸に木村常陸二の丸に大金藤八三之丸に山路將監を籠置給ふ又一つの向城は敵間隔り候

へは普請をも麤草にこしらへ是には中川瀨兵衞を籠置給ひて太閤は大垣へ越給ふ山路將監は本よ

り芝田に心入有けれは一旦太閤へ歸服すといへとも何そ一忠節致それを擅に芝田方へ可參との所

在にてすきをねらひ大金藤八を可擊と企先前方妻子を夜中に舟にてのけ申所に折節番船のいかり

つなにさはり候故番船よりとかめ候へは山路か妻子のよし申すに付本丸の木村常陸所へ注進を致

山路も妻子を被留候由聞內に乃企顯たると存野村庄次郎と云者に申付妻子を急柴田方へ遣候へと

申付遣野村途にて心替を致し本丸の木村常陸方へ參直に申度事有之由にて常陸に右之樣子有樣に

申聞候へは扨は別心無疑とて山路を可擊內談仕其に付何となく城中も騷きに驚山路は早々立退柴

田方へ走こむ其時山路か忠節に中川瀬兵衛か籠り候向城は敵間の遠を恃み城の普請そさうに候間是へおしよせ候は城を可攻落と申に付さらは夜中に可取懸とて佐久間玄蕃を大將にして手前の向城をはさし置程遠き瀬兵衛か城へおしよせ防戰す此由大垣へ注進有に付太閤早々馬を被出夜中にたいまつを燃つれ引も不切參候を見て程近に成候時分敵は引取此時中川瀬兵衛討死也太閤の先勢少々おし付るお次殿の内渡邊勘兵衛石子兵助は敵の跡をしたひ山手を左に見てよごの海の汀を行處に右子申は柴田本陣は山の上なれはよき働可成間是より山へ上り可然と申右之道筋殊外成足入にて敵も退かね難儀に及追手も五間六間にて敵を見かけ候へ共おい付事不成然共目の前成敵なれは是をさし置山へ上り候事も如何と申勘兵衛不同心然所に淺井喜八郎と申武功の者參候故勘兵衛申は石子も只今迄此道筋へ參り候へ共柴田本陣は山上なれば山へ上り可然と申參候如何と思召候哉と申けれは喜八郎も石子か申通尤也我等も山へ可上間其方も山へ被上候へと申それより兩人なから山へ上る嶮沮にて上りかたき所成をやう〳〵致上り候也太閤は其内に山上へ人數を進め其翌朝七本鎗有其よこあひへ右三人の者も出合て鎗にて働仕候由

一大坂夏御陣五月六日之晩（七日ノ朝共云）御旗本へ越前の家老小栗備後水野大藏參候所に　上意には今日備の向へ出たる敵へは何とて懸り候はぬと御しかり被成兩人申上候は其手〳〵の請取御座候へは其をさし置わきより罷出候事如何と被存越前の手は出不申候と申上　上意には請取と云は事に依儀也向へ出たる敵を見逃す事何も不覺之由御意被成候就は七日にはむたいに先へ御懸り被成候也

一七日の日加賀の手の中を横切にをし通阿部海道を茶磨山の方へ押行加賀の手にて何も腹を立つふ

やき候へ共耳にも不聞入人數きれ候はゝ加賀の手に隔られ候はん間すき間なく押候へと申押行也
其内は加賀の手も越前人數の通りしまい候を相待居申候それより茶磨山のきわへをし付茶磨山を
少左に見備を立申候他國勢も段々にをし付る越前勢の右は本多出雲左は出雲守相組秋田城之助也
よせろつまり候故越前の備もうしろへ長く立申候此時寄衆足場のよしあし有之故五十間三十間の
出入は何れも有之其内に越前の手は何れよりもはり出し備を立る茶磨山をみれは眞田人數もをし
出し何も赤備なれはつゝじの花の咲亂たる樣に見へ申候越前の左手本多丹下備は陣並の本多出雲
守備につかへ候故お引こみ罷在候備の前は一段つゝ小高き畠三段に有候故それにつかへ敵陣不見
候故何も右之畠へ上り申候に付備亂れ候故主には出候共下には本備に殘置出かへなとゝ下知する
越前の手すゝみ出候躰をみて御旗本の檢使城和泉黑か青か乃馬に乘具足の上衣の樣なる物を着む
さと人數不可出と乘廻申渡所に馬に敵の鐵砲中り尾首をはね申故和泉も折立申候是を見て敵方に
鬨を揚る横へ一かわに立たる備故鬨の聲左の端より右へ通り又左へ通り三返ほと通りていつ共な
くしつまり候故大坂勢は鬨の聲にしり聲なき間頓て敗軍可仕なとゝ下には申合然所に本多出雲備
より足輕十八人に小頭壹人つゝ付十組斗出し申候其に付越前の手よりも一組より鐵砲五てう十てう
つゝ出し打せ候樣にと何方からともなく申出すに付鐵砲の者少つゝ出し申候鐵砲の者二三町も可
參時分に本多丹下かちの者四五人つれ二段目の畠にて馬より下三段目の畠へ上り茶磨山の方を見
申候が腰よりざいを抜申候それを見候て待かねたる人數故色めき立てはや懸り申候道筋を能參候
者は早くかけ付候茶磨山之前に堀有口は狹く候へ共下にて深く切立たる堀故案内を不知直道と存

參かゝりたる者は馬にて越事不成候てそれよりあとへ返り廻り道仕候故思の外遅く大坂へ乘こみ候者も有候

一右之懸り口に越前旗本勢の内にて先へ早く參候は乙部九郎兵衛也御旗本の御使番豊嶋刑部乙部を敵かと存あとより乘かけ可撃體に見へ候故乙部方より詞を懸るそこにて豊嶋も越前衆にて候はゝ可申合と挨拶仕打過なり

一右之節御旗本へ小栗次右衛門石川左衛門兩人を御使に被遣先手はおい崩申候直に城へも乘込候樣にと申付候との御使なり御旗本にて使者の名を御尋被成兩人共に申上候へは越前に罷在候かと御詞を被爲懸然所に御先にて鐵砲を何ものか打申候付其にさわき御そばの衆不殘退散仕候其内に壹人鐵砲打たる所へ飛入頭壹つ取て出候と小栗次右衛門後に物語仕候

一祖公外記附錄に曰く越前少將忠眞卿は大坂落之時一番合戰也討取首數三千七百五十一級也右之内本多伊豆守手へ計百七十三級討取落合美作守手へ四十八級也僉議の時本多か言首數は我等一番也と云落合進出て我等の手の首數は貴殿より多しと爭論す其子細は本多は組かけて七萬五千石の身上にて首數百七十三也分け／＼にして見れは我手の首數は多にあらすやと言御使番諸星金左衛門元松山浪人大剛之兵也居眠して柱にもたれ居たりしか大の眼をクワッと見開き作州申分尤至極せりと云に付伊豆守閉口に及ふといへとも此遺恨に依て讒言し美作守浪人と成後紀州へ被召出二百人扶持の御合力にて隠居落合卜安と申著述の書を落合と庵物語と號子孫相續勤仕す

一宇佐美竹陰由緒之兜の記に落合卜安（美作事父主膳）象の鼻の冑鯖尾の兜は津田長門守より貰申候由鯖尾の

冑は加藤左馬介嘉明着料にて御座候卜安は落合美作と申候父主膳は太閤御直參元は尾州須江の城主にて關ヶ原御陣天下御一統後　大御所樣上意にて主膳事越前黄門秀康公へ御附被成一萬石被下置候其砌左馬介より祝儀抔貰被申候節彼鯖尾の冑も貰被申候由承及候美作卜安と申候て父の領地一萬石被下大坂兩御陣軍功御座候處家老本多伊豆守富政と出入御座候て夏御陣之暮改易浪人仕候を安藤帯刀直次内意にて御家へ浪人分にて被召出彼冑二首なから卜安曾孫落合九左衛門方に可有之候

落合源太郎利重

落合源太郎

落合源太郎利重　落合喜左衛門養子

源太郎ハ關口萬五郎男ニテ正德六申年閏二月喜左衛門之聟養子トナリ享保元申年六月部屋住ニテ被　召出表御小姓被　仰付支度次第江戸へ罷越可申旨命セラレ同二酉年正月十一日大小姓御切米貳拾五石被下置元文三午年十二月養父喜左衛門跡目知行百石無相違被下延享元子年五月廿八日大番組ニテ病死ス

牧笛類叢ニ左之一節ヲ記ス

眞性院樣ハ　大慧公御長女ニテ享保七寅年正月御早世同月廿二日御遺骨池上ヲ御發棺二月八日若山養珠寺へ御納リ也

源太郎總領吉十郎後喜八郎源太郎跡目三拾石大御番ニ被　仰付以下代々相續源太郎ヨリ四代喜左衛門叙庸五拾石御留守居番ニテ文政十亥年七月病死嫡孫定之丞喜庸家ヲ嗣ク

一落合源太郎ハ志操健ナル人也或年眞性院樣尊骨之御供シテ大井川ニ至ル水大ニ出テ御棺被爲渡ルヽ事ナルヘカラスト役人共申セトモ御越有ルヘキトノ事故無是非川ヲ渡シ奉ル川向ニ大綱ヲ引テ御棺無恙被爲渡ルヽトイヘトモ水勢スサマシク成リテ御跡勢壹人モ渡ル事ナラス御先ヘ越タル面々ノ外ハ皆々嶋田驛ニ滯留ス源太郎ハ御披露之御用ニテ殘リ有リシカ御棺之御跡ヨリ渡ラント云ヲ留メテ不入事ナリト制スレトモ物ヲモ云ハス渡夫ヲ呼フニ壹人モ答フモノナシ源太郎渡夫ノ居タル小屋ヘ駈入兩人ヲ捉ヘテ川端ヘ出ル川越共言樣此水勢甚強ケレハ沈沒スル事目前ナリ大切ノ御役人ヲ溺ラシテハ我々後難ノガレガタシ迚一向不諾源太郎ハ其時筆紙ヲ取出シテ劵ヲ書此水勢ヲ知リナガラ欲渉者豈可厭沈沒哉捨命事勿論ナリ若水勢ニ不堪ハ我ヲ放役シ汝等兩人身ヲ全フスヘシ少モ後難アルヘカラスト記テ判形居ヘ渡シタレトモ兩夫獨不諾ソノトキ源太郎眼ヲ見出シ兩夫ヲ白眼刀ニ反ヲ打テ言樣吾手形ヲ渡スニ汝等不諾ハ如何ナリ士タル者ノ主君ヲ川向ヒニ置キ奉リ此所ニ殘リ身ヲ全フシタレハトテ後日人ニ面ヲ向ヘキニ非ス汝等兩人シテ渡ス事不叶時ハ我ヲ捨テ去ラハ猶命ヲ全フモスルコトアラン爰ニテ否ト言時ハ眼前ニ手討ニシテ我モ切腹スヘキナリト顏色ヲ變シテ怒リケレハ渡夫共大ニ恐レ且其誠ヲ感シテ扨々是非モナキ事ナリ今日可死時節到來ト覺悟致シ候上ハ渡シ可申トテ源太郎カ兩脇ニ引添フテ川中ヘ飛ヒ入ルニ案ノ如ク渦浪面ヲウチ石礫踵ヲ叩テ前後ヲ不辨水ノ深ミニテハ唯頭上ニ急流ノ激スル音ヲ聞クノミナリ數十丁川下ヘ押流サレナカラ難ナク向ノ岸ニ着キタリ兩岸ノ人未曾有ナリト歎美セリトソ源太郎一生此事ヲ人ニカタラサリシトゾ 往年伊勢ニテ　南龍院樣御渡海遊サレント被　仰出シ時松平三郎兵衞達テ御止メ申上シガヤガテ鯨舟ヲ用意シテ自身壹人三州吉田ヘ乗ミ渡シタル事アリ同日ノ談ナリ

岡部正綱

岡部正綱、稱太郎兵衞、其先曰岡部權頭維綱、正綱仕東照公、賜相模邑三百五拾石、後賜粟米六百石、又增賜駿河越後嶋邑六百三拾石、後屬公、大坂兩役皆從焉、子太郎兵衞嘉綱襲家、（岡部家譜）

岡部太郎兵衞正綱

家譜

岡部太郎兵衞正綱（岡部雅樂介次男　生國駿河）

一天正十八庚寅年小田原御陣之節遠州濱松ニテ　權現樣ヘ被　召出小田原落城已後相州之内遠藤村ニテ御知行三百五拾石被下置　御朱印頂戴仕候（御朱印ハ兄宗六郎方ヘ遺右子孫岡部太郎左衞門（當時御役不知）方ニ所持仕候）其後伏見御番ニ罷越候砌御藏米ニ被　仰付六百石被下置大坂御陣三四年前駿河之内越後嶋村ト申處本領ニテ御座候付於同所高六百三拾石御加增拜領仕都合千貳百三拾石被下置（御判物無御座候）其後（年月不知）　南龍院樣ヘ御附被遊大坂兩御陣之御供仕候右太郎兵衞兄同苗宗六郎儀　大御所樣上意ニテ　將軍樣ヘ御奉公ニ罷出候節太郎兵衞知行之内奉願宗六郎ヘ六百石遣六百三拾石太郎兵衞所持仕寬永十癸酉年二月十日病死仕候（年齡不詳）

正綱實子總領惣五郎（後太郎兵衞）　嘉綱慶長九辰年　南龍院樣ヘ被召出七歲ノ時ヨリ奉仕後父ノ家督六百三十石無相違被下天和三亥年十一月依願隱居貞享二丑年八月八十二歲ニテ病死總領惣五郎家督無相違被下以下代々相續寬政十年年之比ハ六代惣五郎德綱ト稱シ御供番ニテ三百石ヲ領ス

岡部小左衞門

家　譜

岡部小左衞門 實名不知

於駿州　權現樣へ奉仕御目付相勤知行四百石被下其後　南龍院樣御入國之節御送御供致候處其儘御貰被成紀州ニ罷在四百石被下 御役儀不知 寛永五戊辰年正月五日病死

以後代々相續五代小左衞門信壽御加增七百石　大眞樣御側御用人相勤六代小左衞門信尹寛政十午年七百石小十人頭格タリ

南紀德川史卷之四十二

名臣傳第四

大崎長行 玄蕃允〇按、駿河分限帳在寄合衆之列祿八千卌石

大崎長行、未詳其所出、初仕豐臣秀吉、屢有戰功、既而有故辭去、依其從弟木村常陸介師春、師春既歿、仕福嶋正則、及正則移封、安藝賜祿一萬石、爲鞆城主、福嶋氏國除幕府、同召長行、及村上通淸、眞鍋貞成、皆命屬我長行、時年六十貳、通淸五十九、貞成五十二、大崎系譜

關原役、福嶋正則、使長行留守淸須城、石田三成、使人謂長行曰、福嶋氏有太閤舊恩者、其與我必矣、請開城門、以納我兵、長行瞋目曰、予奉君命而守之、安可無君命而開之乎、若欲強納兵、有一戰而已、罵而郤之、於是、益嚴防禦、報正則於小山、正則大喜、既而東照公問正則曰、孰守淸須城、正則答曰、大崎玄蕃、東照公喜曰、可謂得其人矣、後常言、不以淸洲爲敵有者、玄蕃之力也、大崎系譜、常山紀談

長行之、與村上眞鍋應召也、安藤直次、同延之、問其事功、二人屢指陳之、一座悚聽、長行曰、僕少稱與一郞、一條槍之士耳、仕木村氏、爲先鋒隊將、人呼曰、鬼玄蕃、後又仕福嶋氏、爲鞆城主、任於一面、如是而已、直次稱之、祖公外記

長行之來移於紀也、人々皆謂鹵簿必盛、而長行與其臣共負甲櫃、其既移也、邸宅壞而不修、自敝牆間窺之、繫馬廿餘匹矣、長行常苞甲貫之、以槍置之座右、及開八十壽筵、始藏之于櫃、曰、天下無復兵革之事矣、縱令有之、老衰如是、不任擐甲也、鈴木巵言

公嘗試諸士刀法、長行亦在試中、長行曰、臣不學刀法敢辭、公曰、汝經百戰豈不知刀法哉、長行曰、然臣少小從軍不暇學刀法、運刀之利害則在戰鬪中自得之矣、如眞刀決雌雄所不敢辭也、（祖公外記）

公既祿、長行欲並祿其子勝長、（稱八郎左衛門）長行拜命之、辱曰、賤息爲舊君所逐、其罪未解、公幸祿之臣將請之舊君矣、時福嶋正則謫在信濃、乃遣使、以請其罪、正則流涕、嘉其懇篤、謂其使曰、予赦其罪宜速就仕亦予志也、乃請祿之（祖公外記）

按 勝長實服部采女正淸春子初木村師春無子養勝長爲子師春臨終死託長行養之長行恐事露僞爲己子稱大崎與一郎終以爲己養子云、據大崎系譜錄之

寛永中修江戸城課役諸侯、公使彥坂光政及長行赴伊豆、監工事、永井直勝（左近大夫）在其邑（按是時直勝治淀城）使人謂二人曰、歸國之次、請枉路於弊邑、長行謝之、謂使者曰、召我二人者、蓋欲叩我素耳、僕本樸野、不習於進退、一拜之頃、無以酬厚意、若賜座終日侍淸閑、或有可聽者、若然請他日更召、乃止、（武邊咄聞書）

福嶋氏國除、長行與松田下總、同在納城、下總欲獨保納城以成名、謂長行曰、收城使西下在近、子宜往守廣島城、長行曰、君命守此城、豈可無君命而去哉、不聽、下總乃巡視、城中嚴防禦、長行泰然、無所設爲、倚柱而睡、衆責長行、長行冷笑曰、下總欲守則守、予則胸算既定、所以泰然自安也、夫保一城以敵於天下萬無一勝之理、而妄戰以殺人、非計也、使者至、予將出見曰、某城代大崎玄蕃也、願俟某割腹而收城、城中所留者、幸存恤之、予一死而代滿城之人、如是而已、又何防守之爲哉、（常山紀談）

按 長行尾張人父曰與兵衞仮竹中重治仕秀吉征韓役屬木村師春有戰功云

大崎玄蕃長行 始篠藏、又宇右衛門、兵庫 本國備後 生國尾張

若年之比秀吉ヘ勤仕其後浪人仕從弟木村常陸介方ニ居住仕候常陸介生害後福嶋左衛門大夫正則方ヘ呼取候由其節ハ備後鞆城主ニテ有之候廣嶋沒落以後　南龍院樣御代元和五己未年十月日不知　御家ヘ被召出本知八千石被下置候

寛永九壬申年三月十二日病死仕候 于時七十三歳

八郎左衛門勝長 玄蕃養子

右八郎左衛門儀實服部釆女末子ニテ始木村常陸介養子ニ罷成候處常陸介生害仕候付玄蕃備後鞆ニ罷在候節故有之養育仕候玄蕃御家ヘ被召出候節實子同苗與兵衛右八郎左衛門共召連申候其後玄蕃病死仕候處遺跡兩人ヘ御分チ被下置候其節與兵衛儀ハ若年ニ罷在候付八郎左衛門ヘ五千石被下置候右八郎左衛門家筋ハ當時大崎三左衛門ニテ御座候

長行嫡子與兵衛長治寛永九壬申年玄蕃遺跡八千石之内三千石被下正保二乙酉年五月十八日二十八歳ニテ病死三代與惣右衛門長治總領常長父跡目無相違被下置候處幼少ニ付三千石之内千石差上度旨願候處無用候樣被仰付候ヲ達テ奉願候處存念之通リ千石ハ御預リ被遊成長之節可被下置トノ御事ニテ知行千五百石被下五百石ハ弟與一郎ヘ被下置後大組ヨリ御城代等奉職千七百石ニ御加增五代延之助喜長幼少ニテ病死故ヲ以テ六代與惣左衛門豐長ヘ名跡三百石ニ被仰付後諸役歷任延享三寅年十二月ヨリ寶曆六年九月迄御用役相勤追々御加增千三百石ニ至ル然處寶曆二申年正月御勝手御不如意之上御中屋敷御殿御火災ニ付知行之内差上度願出再應御差止ヲ達テ申上候

ニ付差上候樣被仰付八代與惣左衞門喜長天明七未年七月家督相續七百石寄合タリ

大崎玄蕃働之覺 朱書入原本ノ儘ニ隨フ蓋シ追テ覺之者注解シタルナルヘシ（朱書ハ「」ヲ以テ示ス）

一大崎玄蕃生國は尾州也父は木村小隼人弟大崎與兵衞也幼少にて父與兵衞に離十五歳の比木下藤吉秀吉公江州北の郡領地にて方々より人數集り申由殊更尾州者之儀は無取次被召抱由及聞候に付依有由緒竹中半兵衞を以秀吉公へ早速被召抱候無程秀吉公播州へ御越則致供參候此時分玄蕃名は藤藏と申候

一中國衆退治之刻備中國於高倉中國衆と秀吉公先手衆とせり合有之及大事候に付旗本より何れも懸付候處敵退申刻首壹ツ討捕申候

一信長公紀州雜賀攻之時竹中半兵衞と一所に小雜賀がきが瀨之先陣仕候藤藏貳十歳之時也

一播州神吉之城攻之時首壹ツ討捕申候

一山崎合戰之刻追討に成申時三ツ四ツ目「崩ギハノ時二度三度目ニ及テト云フチ三ツ目四ツ目ト有之」之首壹ツ討捕申候

一勢州峯之城攻之剋城乘取候へとの御下知に付山半分程寄手登候處城中より敵も不出に裏崩にて隼人人數も崩申候山にて候故彌上（イヤガウヘ）に重り無是非能者共も押立られ申候と相見へ候玄蕃事大崎宇右衞門儀切岸に着居申候敵も見へ不申候故初中後場を踏宇右衞門只壹人罷在候に付被押立候者共そろ〱亦山へあがり宇右衞門に對し無面目由申候

一江北志津嶽にて七本鎗「七本鎗ハ信長ノ時三州小豆坂ノ七本鎗ヲ請テ名付ラルヽト云」之刻宇右衞門儀百足「百足トハ三十間バカリ云義歟」はかり遲候間八本鎗に不罷成候其節佐久間玄蕃內服部彌五郎と申者を討捕申候

一右之刻秀吉公御武者奉行戸田三郎四郎尾藤甚右衛門右七本鎗本鎗にて無之由申に付其場之様子大崎宇右衛門可存旨御尋候故鎗場之品委細に申候處彌本鎗相究申候宇右衛門申分にて本鎗に究り候とて人々感申候

一秀吉公を不慮の仕合にて罷出木村小隼人方へ罷越居申候此節小隼人侍四五拾人も召抱候身躰に罷成候時の事也

一同年十月秀吉公伊賀の國へ御働之刻首壹ッ討捕申候首之名不存候

一同年十一月秀吉公美濃國岐阜へ御働之刻在々放火可仕由木村常陸被仰付候宇右衛門も方々へ廻り焼立申候役不立首（役ニ不立首トハカブト首ニ不済者）共貳ッ參ッ討捕申候扱罷成候間合戰も無御座候

一權現様と尾張内府と御一味にて尾州小牧山にて秀吉公と御一戰之刻尾張内府内小森源七郎と申者を討捕申候

一伊豆國山中之城落去之刻攻口鐵炮にて則時に五六拾人手負死人出來候へ共渡邊勘兵衛に差次稲葉内記大崎宇右衛門塀裏へ付申候

一高麗陣木曾判官城攻之刻能首討捕候

一高麗陣之刻木村常陸乍御使高麗見物に罷越候高麗にて唐人拾萬斗にて罷出日本之諸勢及合戰候刻常陸先手を奸奪取先手に究り候常陸先手に人ヶ間敷者六人御座候其内に宇右衛門も罷出候常陸申付候は旗本より螺を立候はゝ早々懸り候へと急度申付候然所螺を立候へ共六人之者共目と目を見合不得懸候へは二の目に詰申候長谷川藤五郎人數崩懸り候故殘り五人之者に宇右衛門申候は勝五

郎人數に先をせられなは男は成間敷候最早我等は討死と申捨敵之眞中へ乘込壹町斗參候處敵方にて我等鼻之眞中を射申候て馬より落當座に相果候へ共家來共助來小屋へ歸十日斗にて漸矢を拔候て一命助り申候其節之儀高麗發向之諸大將中事之外譽被申候

一常陸にて知行千六百石弓鐵砲之者六十人預り候

一關白秀次公於高野山切腹之刻徒黨之面々切腹仕候木村常陸服部釆女も致切腹候其年釆女男子をもつて申候常陸申候は釆女は男子多候間此子は甥之事に候間我等養申由にて常陸方へ參宮御座候處常陸切腹之砌候へは何方よりも穿鑿も無之候故宇右衛門引取養置申候内々福嶋左衛門大夫へ望存候は此子を抱罷有故に候左衛門大夫より三千石にて尾州へ參候樣にとの事に付宇右衛門請申候併直段に申上度儀御座候旨申達候處ちかく／＼と御呼候て右養子之儀共申達候處被聞届候其上前々より別て心安申談候との事にて色々懇之儀共にて罷出候此剋兵庫と名相改申候（與力十三人貳百石預り宛足輕六十人）申候

釆女子は大崎八郎左衛門事

一關ヶ原御一戰之刻景勝爲御退治　權現樣關東御進發に付左衛門大夫東へ人數三ヶ一程召連被罷越候其砌福嶋丹波尾關石見兵庫山路久之丞（後長尾隼人ト申候）四人呼出し關東之儀如何存候哉と左衛門大夫彼相尋候兵庫申候は毎も私儀致御供候へ共此度は上方無心元時節候間御留守に御城代津田備中罷在候へ共私儀も御留守に罷在度存旨申候へは左衛門大夫にも左樣被存候留守に罷在候樣にとの事にて兵庫も淸須の留守に相殘り候然所石田治部少輔方より兵庫故傍輩木村惣左衛門松浦安大夫兩人を

以兵庫方へ申越候は左衛門大夫殿儀秀頼公之御手を可被引段無疑事候其上被得御利運候はゝ大夫殿天下之可爲執權候家中之輩大望之至此時候傍輩中へ相談候て清須之城借し被申儀御合点候樣に肝煎賴申由兩使申聞候兵庫申候は左衛門大夫儀關東へ無二之御味方とは存候へ共一往は城代其外へ可申聞と相届候處存之外左衛門大夫舅津田備中一人其趣致合点左候はゝ治部少輔方より加勢之者二三千も差越候へ繕普請なと可申付と申候然共兵庫左樣の儀可有之事無之段達て申兩使へ返事に城借し申儀罷成間敷由申津島より返し申候亦一兩日過候て木村惣左衛門津嶋へ參候間兵庫を呼出し先日其方存念之通治部少輔へ申聞候處近頃大夫殿爲に不罷成候今一往被申合御同心可然候秀賴公天下に罷成候はゝ兵庫をも一廉御取立可有之との口上なり兵庫申候は兎角之不及挨拶此度其方と討果度候へ共日比の馴染にて候故一命をは助け返し候重て被參候はゝ誰人にても境目にはりつけに可致候間其通被相心得候へと惣左衛門を追返し申候扨左衛門大夫は東より被登候とて路次中清須之城の儀千萬無心元被存其上備中儀第一無分別者にて大坂に娘孫なと有之候へは備中治部少輔へ致同心清須之城借し左衛門大夫城へ不被寄樣に成行候はん哉と晝夜氣遣被致候左候はゝ權現樣御爲諸人之嘲大事と被存候處兵庫飛脚之者十人拵置日々清須之城之樣子注進申候故左衛門大夫被致安堵滿足不大方候

一清須之者共自分之拵斗仕城之かこひ等少しも氣付不申候に付兵庫何もへ申總曲輪門亦は塀かけ度所へは弓鐵炮之者或は町人等呼出し町中の塀こほち取塀にかけさせ寺々の門こほち取門を付申候在々有之古米新米皆々城へ入させ都合六萬石有之候無程左衛門大夫清須へ被致歸國今度は兵庫壹

人之覺悟を以當城堅固の段不斜悅被申候

一關ヶ原へ左衛門大夫致供先手之左備は福嶋丹波右備は尾關石見二番備は大崎玄蕃三番備は長尾隼人にて候兵庫鎗を合首壹ッ討捕申候兵庫手之組附與力之内傍嶋太兵衛兵庫手にて一番高名故感狀遣し申候

一岐阜御攻落し樽井赤坂に何も御陣取其内西より御立候衆加藤左馬藤堂和泉守黒田筑前守永岡越中守桑山伊賀守其外小身成衆へ扶持方壹人に壹升宛左衛門大夫より相渡し候然は九月十日比　權現樣清須之城へ御着座一日御逗留被爲遊候上下四萬人程之御扶持方壹人に壹升宛左衛門大夫より相渡候　權現樣諸手への兵粮之儀御氣遣被爲思召候處關東小山にて淸須に六萬石古米御座候間拾萬人之御扶持差上候半と左衛門大夫御請合被申上　權現樣御機嫌被爲　思召候由

一關ヶ原御合戰　權現樣御勝被成三井寺に被爲成御座候節左衛門大夫今度之兵庫働之段委細被申上　權現樣具御聞届被爲遊文武兩道之侍其方致重寶國之内大事と存所に指置尤に被　思召之由御誉被爲　遊之由其時分安藝備後兩國左衛門大夫拜領然故備後國鞆に指置可申之旨被申上候へは尤之由　上意にて鞆に罷在候此刻五千石之加增にて都合八千石被申付候其外に鞆城付五百石有之候與力足輕前之通預り申候

一元和元年卯四月末廣島へ御陣觸有之五月二日に福島備後守殿出船にて廣島之家中不殘六七百艘之船にて登り申候玄蕃は廣島より三拾里上方備後之鞆に罷在丹波はかんなべと申候備中境へ六七里鞆より上方也兩人小早船を下し日々に備後守へ申遣候は大坂御一戰程有御座間敷候何とそ御陣初

に御取合候へと丹波玄蕃存旨一刻もはやく御急可然由申遣に付向風をも不構六七百艘之船を押立
五月六日之日の入に兵庫の浦へ着船翌七日總手之頭共談合にて七日には兵庫に滯留跡々より續申
者共待合可然と皆々相談仕第一尾關石見廣島より十三里奥に罷在家來乘替馬など不參に付逗留同
心にて七日一日は延引相極候然共丹波玄蕃逗留は如何と存丹波石見に向て申候は兎角備後守殿今
日御立可然候旨申候へは石見强口者にて候へは丹波廣島より四十里上かんなべに居り人馬不殘相
續我等は十三里奥に罷在候故乘替馬も不參候其上家中之侍共六七十に成候者之馬も不參備後守殿
御乘替馬も數多可參候今日御出とは丹州不聞申分と申候丹波物前にて不屆成言分とは存候へ共兎
も角もと有て彌七日は逗留相究候故玄蕃申候は是非々々今日御出可然候石見乘替馬無之候はゝ我
等乘替之內借し可申候共時はやく御出可然と申候處石見玄蕃への返答におかしき事を被申候かう
べがしやりに成候共今日御出は不罷成候とて致立腹候玄蕃申候は左樣候はゝ多分大坂御合戰今日
可有之候東之御勝は必定也備後守殿兵庫迄御出一日逗留にて大坂御合戰　權現樣御勝に成候はゝ
備後守殿日和を御覽候に可罷成候左候はゝ御身躰果天下之評判に大夫殿家中に歷々の物仕共有之
爲其甲斐わかき備後守殿に疵を付剩當家中の者も沮人いたし腰拔にいわれん事無念千萬に我等は
存候何もは如何被存候哉と座席を見候へは丹波を始末座居申候眞鍋五郎右衛門柴田源左衛門本庄
與太郎蜂屋將監松田下總一列に玄蕃申處尤無余儀候左候はゝ先手斗成共被指遣可然哉と申候其時
石見も尤と申御越と口論は止み申候丹波乘替馬出し七日之四ッ半比に兵庫を罷立候

一後日に玄蕃は重寶成侍此度玄蕃諫不申候はゝ備後守殿身體可相果に目出度事哉と家中悅申由

一元和五年左衛門大夫身體相果候刻六月比に國城共に近日請取參由風說有之家中騷申候廣島之者共何も寄合大夫殿判形なくては城難相渡由申籠城相極り候方々技城三吉東條かんなべの者共不殘廣島へ集り申候玄蕃儀家來與力召連廣島へ早々參候へと丹波方より申越候玄蕃返答被申越候一圓合点不參候納に城有之候はゝ納にて可致討死候へ共廣島より十六里上方三原之城へ入可申候此所之文言難合點仕輌ニ無城トハ無天守ニ依テノ文言　三原ハ廣島ヨリ上方寄手ノ來ル道筋ヘ十六里近シ依之福嶋丹波方ヘ玄蕃ヨリ申遣ス返答ナリ　此所書ソコナイトロ上ニ申候。トモト三原ト兩城玄蕃預申候籠城ノ時侍七十人餘矢間ク丶リ有天下の沙汰にも敵付はやき三原を捨大勢の廣島へ退候などゝ申候ては死後迄千萬無念之至候間三原は玄蕃廣島は可爲丹波由申遣候廣島にてヶ樣なる節重寶成玄蕃と申たるよし扨廣島寄手拾萬余騎被　仰付候由其內蜂須賀阿波守殿五年已前爲御加增淡路一國拜領故　上樣へ御奉公と被存承り候へは三原に玄蕃壹人籠りの由私壹人に三原之寄手被　仰付候樣にと言上にて三原へ阿波守殿壹人被　仰付候由其後左衛門大夫より墨付參城明渡候

一御國へ參候て御前へ玄蕃村上彥右衛門眞鍋五郎右衛門被　召出御意には御國の御先手安藤帶刀二の目は水野淡路に候玄蕃儀は淡路相備罷在萬端相談可仕候三浦將監相備に眞鍋五郎右衛門殿渡遣

一角相備に村上彥右衛門可罷在候一角儀は御旗本に被召置候故旁以被　仰付候由

一御國に陣場奉行無御座候其段玄蕃其外へ御尋被爲遊候付陣場奉行無御座候へは難相調儀御座候旨申上候處水野二郎右衛門大普請奉行被　仰付候以上

水野二郎右衛門モ玄蕃彥右衛門五郎右衛門同道ニ四人共ニ公儀付ニテ御家ヘ參候次郎右衛門ニ千石是モ先知四人共ニ先知ニテ被召出候玄蕃知行八千石ト此書付ニ御座候ヘ共廣島ニテ八千百三拾石故ニ御家ニテモ先知之通リ八千百三拾石被下置候ト

大崎三人口上ニテ申候玄蕃彦右衛門五郎右衛門被召出候刻ハ三人共寄合衆ノ肝煎被仰付候其後年寄衆へ寄合組御付被成候是モ三入物語」

信按るに元和御切米帳にも八千百三十五石とあれは朱書之説是なるへし

一大崎玄蕃長行は初與八郎とて小身者也數十度の軍功に依て木村常陸介か先手の大將と成て鬼玄蕃と呼はる關ヶ原の時は福島正則に仕へ正則が舅津田備中守繁元に差添尾州清須の留守居を守る正則は會津へむかふ其跡にて石田三成逆謀を起し大柿の城より木村宗左衛門を差越正則事は御幼君御一家なれは内々は大坂一味也早々其城へも此方人數を入可然之旨たはかる津田尤也とて約束す大崎是を聞て大に備中守を叱り正則御自筆の證文來らは不知何として敵勢を城へ引入可申哉大敵寄來らは一戰の内に討死を進むへし城を渡す事努々不相成迚要害彌きひしく狹間配りして籠城す上方逆意之趣小山へ注進す　大神君正則を被　召其方留守居には何と申者差置候哉と御尋被遊清須を被取候ては味方の大事也無心元と被　仰出處へ大崎が飛脚來石田清須の城をたはかり取に參候へ共我等急度かゝへ丈夫に持候條御心易と也正則此旨直に言上に及ふ　大神君御感不斜大崎玄蕃は兼々聞召及はれたる者也能者を左衛門もたれ候と　上意なり後々の　上意にも關ヶ原口思儘の勝利は玄蕃か清須を丈夫にかゝへたる故也と度々被　仰出候廣島落去之時は玄蕃備後鞆の城主也其組の番頭松田下總守覺へ者なるか玄蕃を廣島へ遣し我一人して鞆城を守り討死して名を揚むとたくみて玄蕃に申けるは　上使は十萬の着到にて寄來る由三原東條の城主も皆廣島へつほむと承るいさ廣島へ引取候半と言玄蕃か言此城は正則より某へ御預之城なれは無御意して開く事は不

相成候とて不行扨　上使衆寄來ると聞松田馳廻り城を持支度をする玄蕃は日比に違ひ具足を取出たる迄にて目を眠り靜座して居る皆々批判して玄蕃年來の剛氣失せ臆病に成たり松田はかい〳〵しく支度するに玄蕃默然として居るは扨々聞へぬ事なりと答ふ玄蕃聞て松田は氣か强ければ籠城之用意する我等分別あれは何事にも不構と言皆々其分別を問ふ玄蕃か言將軍を敵にし日本國の大軍を引受いか成名城に籠りいか成手立働ありとも勝利を得る事やあらん無用の籠城立をして咎なき士卒を損せんより　上使來らは大崎玄蕃と申者にて候此城渡進候我等一人切腹仕候間士卒男女御助命可被下と申て腹切るへし此分別故籠城之用意は不入と言松田を初皆々尤也と言後に　將軍家の　上意に依て大崎玄蕃村上彦右衞門眞鍋五郎右衞門を紀州へ被　召出安藤帶刀直次宅にて三人若年より之かせきを尋らる眞鍋五郎右衞門先我身十四歲の時よりの働不殘所演說す村上彦右衞門も十四歲竹の子陣の初陣に壬生川にて一番鑓の働より一生のかせきを話すいつれも聞事にて一座耳をすますさて大崎か前に成て玄蕃か言某事初與八郎とて鎗壹本の者にて候處段々仕上木村常陸方にては鬼玄蕃と呼はれ正則方にては一手の大將致納の城主と罷成候若き時分より鈍にもなかりしと思召候へとそ

一伊豆國石出御普請之爲彥坂九兵衞光正大崎玄蕃長行兩人被差遣候隙明候時分永井信濃守直勝使者を以遂に不申談候へ共語申度候間今度被歸候時分淀へ立寄給候樣にと被申越玄蕃返答に御使者に預悉存候但御心に入候はゝ重て序を以可被召寄候通り懸にては何之詮も無之候是は御使者へ申候此玄蕃差當りはたわけにて候へ共百度も長座仕れは無限ほとかしこきことを申者に候間緩々御對

而可然候半と也其子三左衛門長增五千石 宇左衛門長成三千石 等今に相續す然りといへとも三左衛門家は血脈無之宇左衛門家は血脈相續と云々 以上南陽語叢

一大崎玄蕃は紀州へ被 召出安藤帶刀世話にて八千石玄蕃は大難澁にて何分和歌山安藤屋敷迄來臨し玉へと兼て申談置く依て玄蕃は甚貧しく紀州へ十二月大晦日晩方非人の小屋に行暮て臥す 是は旅籠錢なければなり 明日身つから安藤屋敷へ至り夫より五三日過て被 召出其後御前にて劍術御覽あり大崎玄蕃も伺候 公仰に玄蕃も劍術致せと有ければ乍恐私存不申と云 公御不審に思召夫は僞ならんと仰せありければ乍恐實なりと申上る時仰には數年戰場往來殊に五體不具に成る程疵を受功名を顯し今の返答如何也と二度迄 御意有ければ又奉答は私乍恐十四歲より戰場へ出て劍術を習ふ間無之唯戰場にて敵に向ひ自然切れ味を覺へ候也眞劍にての勝負被仰付においては隨分奉畏候木太刀しなへの稽古道具は甚た不調法なりと申上るとそ 南龍言行叢

一大崎玄蕃御抱之節劍術は八人と仕合す凡二時斗鬪ふ八人の者遂に疲れたり 南龍公仰られ候ははけしき事也唯疲れたらんと有ければ朝鮮の合戰に手の下に四百人程うちたりヶ様なる事にてはなかりしと申上る 乞言私記

一島原一揆の節紀州より御使を遣はさるゝ時その仁玄蕃に懇志なりける故武功場數の人なれは渠か方へ至り戰場へ持參致し然るべきかくこ御傳授あり度候と望ければ若き人奇特なる事にて候乍去は何の事もなく鎗一筋刀一腰さへあれは何も入り不申具足も甲も畢竟は入不申候只何事も戰場にては先へ〳〵と心掛給ふへし品は多きは殊の外邪間にも成申候是は傳授にて候是にて推量あられ

よと教へけると也場をふみ武邊したる人の一言は各別なりとかんしけり 明良遺跡

一大崎玄蕃は軍用の草鞋を作る事極て上手也茗荷の葉を枯し置わらに交作る也廣島の古傍輩武藤修理亮は馬の沓上手也しか浪人の内しろなして渡世とす江馬與右衛門も草鞋沓の妙手たり浪人の内是をうる世に江馬沓と稱用せしと也今の竹中朽木草鞋も同樣なり 南陽語叢

一大崎三左衛門長次方には祖父玄蕃差料の具足胄白紙子の具足兜羽織は外祖父龜田大隅着料の具足兜大突具鷺の簑毛の羽織所持仕候又海老の胴の甲御座候是は出所不存候へ共隨分見事なる甲にて御座候 明良遺跡 蓋宇佐美竹陰由緒の兜の記ならん

小栗彌左衛門正重

小栗正重 按駿河分限帳在御旗奉行兼御使番衆之列祿六百石

小栗正重稱彌左衛門、其先曰小栗左衛門尉重成、住於常陸小栗、曾祖曰助兵衛正基、初仕足利持氏後移三河、世仕德川氏皆有戰功、一向賊之亂正重奮鬪有功、後屬公爲使番、賜祿四百石、小栗系譜

家譜

小栗彌左衛門正重 小栗助兵衛正種實子總領 生國三河

祖先常州小栗郷ニ居住曾祖父小栗助兵衛正基ハ小次郎助重ノ總領ニテ鎌倉持氏ニ仕後參州 郷村不知 ニ居住仕其後 年月不知

長親樣へ奉仕所々御合戰ニ相働候由申傳候

祖父彌左衛門 後助兵衛 正勝 清康様へ奉仕御合戰毎ニ供奉仕候

父助兵衛正種 初名不知 廣忠様 権現様へ奉仕候

彌左衛門正重 権現様へ奉仕永祿年中參州一向宗一揆蜂起仕候節父助兵衛且一族小栗大六ト共ニ岡崎御城へ早速馳參相働軍忠ヲ勵其後遠州濱松へ引移リ又駿州ニ至テ御奉公相勤候處其後 年月日不知 南龍院様へ被爲附元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕高四百石被下御使番相勤病死仕候 年月年齢不詳 正重病死跡弟彌左衛門養子相續之處寛文三卯年正月病死尚又養子新助相續寛文十三丑年五月病死嗣子無之嫡家斷絶ス

分家

小栗源太夫雅輝 彌左衛門正重次男 生國三河

於駿河 年月不知 権現様へ新規被 召出 御役儀高不知 其後 年月不知 南龍院様へ被爲附元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕段々御役替御加増高四百石被下小姓組番頭被仰付別家ニテ相勤寛文八戊申年十月廿九日病死仕候 年齢不詳

總領源太夫正秀家督三百石被下置其後追々昇進御加増千石大御番頭ニテ享保十八癸丑年四月廿八日病死以下代々相續六代彌左衛門正矩四百石御先手物頭ニテ文化九申年八月病死總領彌平正準家ヲ嗣ク

小栗忠實 主税助

小栗忠實、父曰又一忠政、忠政初稱庄次郎、毎戰有功、東照公賞其勇賜名又一、雖坂部久世不能抗其武功也、忠實仕公爲小姓、賜祿貳百五十石、後爲旗奉行、増祿至八百石、寛文七年歿、年六十五、小栗系譜

家　譜

小栗主税之助 初又右衛門 松平仁右衛門忠吉三代小栗又一忠敬五男 生國武藏

父又一儀　權現樣へ奉仕數度軍功御座候付忰共不殘　台德院樣へ被　召出 又一嫡家ハ當時御旗本小栗又一家ニテ御座候 此時主税之助幼年候へ共同樣被　召出　南龍院樣へ御附被遊御小姓相勤追テ高貳百五十石被下元和五未年御國替ノ節紀州へ御供仕其後高八百石被下御旗奉行相勤寛文七未年二月廿四日六十五歳ニテ病死

主税之助實子總領又右衛門忠直寛文七未年三月十一日父家督高五百石被下寄合被仰付以下代々相續六代又右衛門忠房不愼ニ付御役祿被召放五人扶持小普請ニ成リ以後減祿八代喜又 初安次郎 行忠ハ安政四巳年十月祖父仁兵衛跡目御切米貳拾五石無相違被下大御番タリ

一祖公外記ニ曰ク 小栗主税ハ左程武功ハ無之候ヘトモ武功之士ヲ御抱之節ハ山口邊迄大長刀ヲ擔キ迎ニ行道々案内ヲ爲致候故ニ新參之衆トハ其日ヨリ懇意ニ相成シ何角聞功者ニ有之候

忍穗彌五右衛門

同　惣　十　郎

忍穗彌五右衛門 初才三郎隱居後道榮 生國駿河

家　譜

慶長年中 年月日不知 權現樣へ被召出御小姓相勤於常陸國知行二百石被下置之旨御判物頂戴仕候

右御判物寫

常陸國那賀郡上國井村之内百拾八石八斗五升柳澤村内八拾壹石一斗五升合二百石右宛行訖全可
領知者也

慶長十一年二月廿四日　御朱印

忍尾才三郎とのへ

其後 年月日不知 南龍院樣へ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕候 役儀不知 其後段々御役替御加增被申付高三百五十石被下正保二乙酉年月日不知依願隱居養子惣十郎へ爲家督知行三百五十石無相違被下惣十郎へ被下候御切米四拾石ハ爲隱居料彌五右衛門へ被下置寛文五乙巳年六月十五日病死仕候 年齡不詳

別項佛祖統記ニ曰ク法師道榮ハ南紀ノ家臣俗稱忍穗彌五右衛門也名艸郡宇津村ニ第ヲ結ヒ歸休髻ヲ拂ヒ葬ヲ避ケ晝夜ヲ捨スシテ讀誦書寫多年ヲ怠ラス遂ニ國君ノ聽ニ達シ明暦元年乙未國君命ヲ下シ地ヲ同郡山ノ堂千年啓井ニ易ヘシメ本尊觀音像佛具併テ之ヲ賜フ養珠夫人聞テ隨喜シ給ヒ呼テ慈山法紹寺トナスト紀伊國續風土記載スル處亦同シ且日ク寺地一石九升ノ所ヲ免除セラレ養珠院妙紹日心尊尼ノ法號ノ文字ヲ采テ山號寺號トストテ云々

忍穗惣十郎 幼名惣十郎 隱居後舊翁　後彌五右衛門ト改

家譜ヲ按スルニ二代三代共家督三百五拾石無相違相續之處三代彌五右衛門元祿六酉年四月二日病死嗣子無之一旦斷絕然ルニ彌五右衛門遺腹ニ男子出生 惣十郎也 依テ寶永七寅年八月九日被　召出表御小姓被仰付四代目相續其後奥御小姓被　仰付享保元丙申年　有德院樣御城へ被爲入候節江戸御中屋敷ニ殘居候處同年六月二日御城へ被　召出三百俵御小姓被　仰付御役料三百俵被下同年七月十八日病氣ニ付願之通御戻被遊紀州へ罷越八月廿六日十人扶持小普請ニテ罷在同三戊戌年三月廿二日不埒

之品ニ付御役祿　召放一類ヘ御預ケ寶暦九乙卯年十一月三日被　召出五人扶持小普請入被　仰付追テ御切米十五石被下安永四乙未年二月朔日隱居ス同人不平ヨリ放逸ノ事アリト雖モ頗ル氣慨アリシト見ヘ南陽語叢ニ左ノ一項ヲ記シタリ（惣十郎九十歲ニテ天明二寅年六月病死六代彌五右衞門尙章ハ寛政十年十二石三人扶持ノ御徒相勤候也）

一忍穗彌五右衞門御小姓にて思召よく既に
有德院樣御入城之御供せしに如何在けむ四五日の後御歸しありけれは竹中門左衞門と兩人同樣にて述懷に及夫より身を持たき儘にせし程にいち〳〵無敬重り遂に追放仰付らる後年被召歸しに門左衞門は病死し彌五右衞門は七拾余にて存命なりし暫して隱居し舊翁と號せしか此人いまた御咎に不逢比の事にや我にひとしき惡少年多打寄酒興之上にて口論起りたかひに双傷に及んとす同席各取扱て双方をなたむれとも一圓承引せす然るに彌五右衞門は最初より柱にもたれ頰鬚ぬき居候て一言のあつかひなし一座の輩醬(キノマヽ)を添し挨拶に及とも不承知なれは今はせんかたなく彌五右衞門をせめていふ樣是程の事に其方一人一言のあつかひなく鬚のみに心を移は憶せしか武の作法もしらさるかと惡口す彌五右衞門か言く先刻より各の挨拶のをかしさに樣子いかにと見合すなり今日席は他人を交す親友の武士也その親友といひ武士たる者ゝ堪忍せぬといふに是非堪忍せよとは無理なる事也堪忍のなる程ならは人の挨拶を待へきやされは一應は取扱ともしひては無用也兩輩もよく聞れよいつれも親をもち主人をもち我儘にならぬ骸なりされとも其忠孝を捨て一旦の怒に身を果すも武の意地なれはしひて法外にもあらす古今有習也又喧嘩をさゆるも武の禮法也堪忍ならは堪忍せられよ堪忍ならすは打果されよ禮法を以て意地を一覽致さむとあるにそ兩輩屈伏して忽

和談に及ひしと也

大草久右衛門長榮

大草角助久榮

大草長榮　久右衛門〇按駿河分限帳、在大番衆之列、祿三百五十石、

大草長榮、其先爲小田原北條氏之族、世住相模三浦、爲春薦之東照公、賜祿三百石、後屬公、元和三年歿、子角助久榮襲家、六世孫四郎右衛門信高爲大寄合、増祿至千三百石、大草系譜

家　譜

大草久右衛門長榮　生國相模

一慶長十乙巳年正月日不知　於駿州三浦定環爲春肝煎ニテ　權現樣へ被　召出御役儀不知　於常陸國知行三百石被下置之旨御朱印頂戴仕于今所持仕候右御朱印寫

常陸國那賀之内北塩子村之内三百石右宛行訖全可領知者也

慶長十年正月十三日　御　朱　印

大草久右衛門とのへ

其後年月日不知　南龍院樣へ被爲附御役儀不知　相勤元和三丁巳年四月廿三日病死仕候年齡不詳

大草角助久榮　長榮總領生國相模

一元和三丁巳年月日不知父久右衛門爲跡目知行三百石無相違被下置御射手役相勤候由申傳へ候

同五己未年御國替之節紀州へ御供仕

正保四丁亥年十二月廿五日病死仕候　年齡不詳

大石十右衛門定賢

大石孫十郎安清

按スルニ久右衛門祿元和御切米終身祿及家譜ニ三百石トアレハ駿河分限帳ノ三百五十石ハ誤ナルヘシ角助跡目三代目久右衛門久眞無相違相續六代四郎右衛門信高父ノ家督百石相續之處已後格祿頻リニ昇進明和二乙酉年七月御用役被　仰付遂ニ大寄合御加增千三百石ニ至ル一代ニシテ十三倍ノ祿ニ進ミシハ近世多クアラサル所也八代四郎右衛門高達千石大寄合寺社奉行兼帶ニテ文政四巳年四月病死三男幸之助伊信跡目相續ス

大石十右衛門

大石十右衛門定賢 大石源左衛門尉定重四代 山中藏人總領

家　譜

權現樣へ奉仕 年月日不知 高三百五十石被下置遠州中泉御郡代相勤罷在候處　權現樣大石源左衛門尉定重子孫御尋被遊此時改山中可稱大石ト依　台命家名稱大石ト其後　南龍院樣へ御附被遊候 年月日不知
元和五己未年六月十六日於遠州病死仕候 年齡不詳
定賢長男作左衛門定俊跡目高三百五十石無相違被下大御番被　仰付其後斷絶委細相知レス
定賢次男與五右衛門昌亮　南龍院樣へ新規被　召出高三百石被下物頭相勤其後斷絶委細相知レス

分　家

大石孫十郎安清 十右衛門定賢三男 生國駿河
寛永十癸酉年月日不知　南龍院樣へ新規被呼出現米貳拾石被下小十人相勤申候其後御役替御加增被下現米五十石被下大納戸相勤
寶永二乙酉年七月廿三日病死仕 于時九十二歳 候處總領平兵衛儀部屋住ヨリ被呼出現米二十石被下相

勤罷在候付分テ家督ハ不被申付候
二代平兵衞定良高二百五十石被下　深覺院樣御附弓頭相勤正德四甲午年病死以下代々相續五代平
右衞門定則高百五十石御書院番組頭ニテ享和三亥年七月病死養子吉十郎定政嗣ク

大高源右衞門

家　譜

大高源右衞門重俊 生國駿河

於駿河　權現樣へ被　召出御小姓被　仰付大坂兩度之御陣御供仕後　南龍院樣へ御附被遊元和五
未年八月紀州へ御入國之節御供仕罷越大小姓相勤知行二百石被下置
此後大御番白子御代官白子御目付等ニ轉役イツレモ年月日不知
一寬永十七庚辰年月日不知町奉行被　仰付御加增百石被下置都合三百石被　仰付候
一年月日不知御用達被　仰付
一正保三丙戌年月日不知御供番頭被　仰付御加增貳百石被下置都合五百石被　仰付候
一慶安三庚寅年月日不知奉行被　仰付御加增貳百石被下置都合七百石被　仰付
一年月日不知大普請奉行被　仰付
一年月日不知松坂御城代被　仰付
一年月日不知男子無之付奉願通同姓之弟新右衞門次男孫太郎ヲ養子被　仰付

一寛文七丁未年七月十日奉願隱居被　仰付養子孫太郎へ爲家督知行百石無相違被下置寄合被　仰付

一延寶七己未年八月十三日病死仕候　年齢不詳

源右衛門重俊養子孫太郎重尙後源右衛門ニ改ム家督七百石被下以後代々相續七代才輔高志貳百五拾石ニテ天保三辰年十二月隱居養子駒楠義和へ家督無相違被下大御番被　仰付タリ

別家

大高新右衛門 實名不知　源右衛門重俊弟

南龍院樣御代　年月日不知新規被　召出 御役不知 段々結構被　仰付代々別家ニテ相續仕候處五代目六右衛門 實名不知 儀不埒之品御座候ニ付改易被　仰付家名斷絕仕候

一紀士雜談ニ曰ク　山野井惣兵衛（詰番）討者被仰付候小笠原七兵衛ト申者金銀ヲ貯ヘ候上御暇ヲ取上方ヘ引廻居申候右不埒之品追々相聞ヘ帶刀殿左樣之者ハ討セ候可能ト被申候惣兵衛被　仰付御討セ被成候京都町屋ニテ見付葛籠ハリ居申候ヲ討カケ手モナク討留申候處前方御斷モ無之候周防守殿（板倉）早速大高新右衛門（京都役人）ヲ被呼寄王城之近邊ニテ討者御斷無之段紀伊國樣ニハ御麁相成義ニ存候旨急度被申聞候新右衛門御尤ニ奉存候此度之儀紀伊國殿ニハ曾テ被存候儀ニテハ無之候居所トクト見屆候上ニテ御斷被申達討セ候積ニ有之候處惣兵衛儀若輩者ニテ候故見合候テハ若シ所ナド替可申哉トハヤマリ候テ討留申候右之品被聞召分可被下候ト答話之樣ニ申拔キ仕候處周防守殿一段得心被致候樣子ニテ　上ニ御存無之トノ儀御最ニ候又若キ仁ト有之候ヘハ餘儀モナキ仕合ニ候承屆候由被申聞事濟候

一右新右衛門答話思召ト一致仕候ヲ譽申候樣ニトノ御事ニテ和歌山ヘ被召兵庫殿御申聞候新右衛門兼テ無隱とりれ原本ノマヽ者ニテ　御意之趣承知仕至極迷惑ニ奉存候由申候難有ガリ可申處何タル品ニ候哉ト兵庫殿さとしり原本ノマヽ候ニ付重テケ樣ノ儀有之候テモ答話可仕私儀ニテモ無之候此度不慮仕合故以後

之儀ヲ存候テ申上候智恵分別有之答話仕候者ト思召候ハヽ迷惑仕候ト申候ヘハ御年寄衆ニ御取成候由也

大屋小平次

大屋小平次 實名不知 大屋小右衛門吉忠實子總領 生國三河

家譜

祖父大屋丹波滿實ハ信忠様清康様廣忠様御三代ヘ奉仕攝津有岡ノ城ニテ討死仕父小右衛門吉忠ハ部屋住ヨリ　權現様ヘ被召出奉仕候

小平次部屋住ヨリ

權現様ヘ被召出大坂御陣之御供仕其後　台德院様ヘ被爲進又　權現様ヘ御雇分ニテ御奉公仕候處元和五未年紀州ヘ御入國之節御所望ニテ御附被遊紀州ヘ御供仕高貳百石被下

正保三戌年四月廿三日病死

總領小平次ヘ跡目トシテ高貳百石無相違被下以下代々相續七代小平次純章ハ寛政十午年御切米廿五石大御番タリ

大屋市左衛門　大屋孫一附

大屋市左衛門 實名不知 苗字初天河

父天河善之丞天正七卯年正月　權現樣御小人御小道具之者被　仰付元和卯年病死
市左衞門慶長十九寅年　南龍院樣へ御附被遊御小人被　仰付御切米御扶持方不知
元和五己未年御入國之御供仕寛文九己酉年病死
以下代々相續四代孫平次信房ハ御切米貳拾石三人扶持小十人格トナリ始テ士籍ニ列ス

五代

大屋孫一宣胤　信房總領

寛保三亥年二月御用部屋書役被　召出延享五辰年二月父跡目拾七石被下寛延三午年十一月表御右筆見習御書方被　仰付追々昇進新御番格七拾石ニ御加增天明二寅年八月六十九歳ニテ病死
此人書ニ堪能故ニ御右筆御書方ヲ命セラレシモノナルヘシ左ノ一節ヲ以テ其精勵察スヘシ
一乞言私語ニ曰ク　大屋孫一高澤源八共ニ書ヲ善セリ初メ共ニキソヒテ學シ時或夜々半過ニ大屋孫一高澤カ勤ノ程ヲ見ントテ月夜ニ行ケリ途中ニテ高澤ニ行合タリ貴殿ハ何處ヘカ參ラル丶哉トイヘハ高澤モ亦大屋ニ向ヒ貴殿コソ深夜ニ何方ヘ參ラル丶ト云ハ既ニ互ノ心中顏ニ顯ハレ笑フテ別レ歸リシトゾ
右宣胤養子孫一本好モ父ニ繼キ表御右筆御書方勤務御切米八十石御留守居物頭格中奥詰ニテ天保三辰年十一月病死養子角次郎本道嗣ク

小島次郎右衞門

小嶋次郎右衞門貞清　小嶋武左衞門總領　生國三河

大屋孫一宣胤

小島次郎右衞門貞清

家　譜

父武左衛門ハ大須賀五郎左衛門ニ屬シ罷在後　權現樣大坂ニ御座被遊候節大須賀出羽守手ニテ伏見ニ罷在候處於大坂逆心ノ者有之由風聞ニ付出羽守家中之者共不殘早駈ニテ夜通大坂之御屋敷へ駈付候節小笠原與左衛門甥之旨與左衛門ヨリ披露仕候處　權現樣へ首尾能御目見御懇之蒙上意知行三百石被下置其砌大坂之御屋敷御普請ニ付右御普請奉行被仰付大坂ニ罷在候處慶長四亥年六月御普請之場ニテ病死仕候

一次郎右衛門儀慶長四亥年父武左衛門遠國ヨリ參御普請之御用乍勤相果候ハ御用ニ立チ相果申候モ同前トノ　上意ニテ十歲ニテ跡目被　仰付知行三百石無相違被下置大須賀五郎左衛門ニ御預ヶ橫須賀組ニ罷在候

一元和二辰年

南龍院樣へ橫須賀組被進駿州ニテ一等御奉公仕同五未年御入國之節紀州へ御供罷越承應元辰年奉願隱居總領金次郎へ家督知行三百石無相違被下橫須賀大番組被　仰付候

一明曆二申年四月廿一日六十七歲ニテ病死

總領金次郎後武左衛門政貞以下代々相續八代次郎右衛門信農知行百五十石小十人小普請ニテ天保五午年八月隱居養子數馬珍能へ御切米六十石被下以下小普請被　仰付タリ

小柳津作大夫

小柳津善兵衛清政

岡本源兵衛正比

小柳津作大夫 實名不知 生國遠江

家　譜

權現樣御代大須賀五郎左衛門康高組付被　仰付息國千代忠次代迄大須賀家ニ罷在候處國千代榊原家爲繼跡上州舘林ヘ被遣候節

權現樣思召ヲ以テ御留置被遊元和二辰年

南龍院樣ヘ御附被遊安藤帶刀相備被　仰付駿河御番相勤同五未年御國替之節紀州ヘ御供仕高貳百石被下同年八月帶刀爲與力紀州田邊勤被　仰付卒年月日不詳

養子作大夫ヘ家督無相違被下如父時相勤後病死悴ヘ家督相續之處其後家斷絶

分　家

小柳津善兵衛清政 二代作大夫次男

寛文十戌年五月新規被　召出御切米貳十石小十人被　仰付以下代々相續三代喜八郎元仕格祿并進寛政十午年高三百石御小姓組番頭格タリ

岡本源兵衛

岡本源兵衛正比 岡本彦兵衛實子總領 生國遠江

家　譜

父彦兵衛ハ岡本秀関總領ニテ大須賀五郎左衛門康高ニ附屬後出羽守忠吉上總ヘ國替ノ節附參又

忠吉横須賀へ移候節附罷越病死

權現樣へ奉仕知行百三十石被下置大須賀出羽守忠吉組付被　仰付後息國千代忠次榊原家相續舘林へ被遣候節横須賀黨過半御留置後

南龍院樣へ御附安藤帶刀相備ニ被　仰付御入國御供罷越二百石ニ御加增圖取ニテ田邊居住等都テ落合市右衛門輩ト同斷後明曆二丙申年四月廿一日病死

以下代々二百石田邊與力ニテ相續寛政十午年ノ比ハ八代彦右衛門雅智ト稱ス

岡本金右衛門祥邦

岡本金右衛門

家　譜

岡本金右衛門祥邦 生國三河

年月日不知於岡崎

權現樣へ被　召出御小道具役相勤祿不知　關ヶ原御陣大坂御陣之節ニ御供仕年月日不知

南龍院樣へ御附被遊元和五年御入國之節紀州へ御供仕後年寄候付役儀御免

年月日不知

權現樣關ヶ原御陣之節被爲召候御具足之　御尋被　仰出西丸へ被　召出本間五大夫ヲ以テ右御具足覺罷在候ハヽ可申上旨被　仰出御具足數多奉拜見候中ニ御威ハ直リ候得共覺罷在候品委細奉申上候處猶御陣之御樣子御尋被　仰出候付委細奉申上候處御感被遊御譽御座候

年月日不知右御具足悉細奉申上候爲御褒美米五俵頂戴仕寛永九申年悴與兵衛へ代番被申付明暦元未年七月病死　八十五歳

悴與兵衛代番御駕之者相勤以下代々錠前御藥込等勤七代丈左衛門明命御藥込九石貳人扶持ニテ明和四亥年十一月病死養子楠之右衛門邦脩相續ス

岡村嘉兵衛

家　譜

岡村嘉兵衛廣道　岡村九右衛門總領　生國駿河　初左兵衛

父九右衛門

權現樣へ奉仕御臺所頭相勤慶長十四酉年十一月於駿河病死

嘉兵衛廣道年月日不知

權現樣へ被　召出相勤罷在候處年月日不知

南龍院樣へ被　召出知行貳百石被下置御臺所頭相勤御入國之御供仕紀州へ罷越承應元辰年三月七十四歳ニテ病死

廣道總領半九郎後嘉兵衛道政へ跡目無相違被下御臺所頭被　仰付以下代々相續之處五代戸右衛門慶明御切米三十石御留守居番ニテ天明五巳年十二月不埒之品ニ付御城下ヨリ貳拾里外へ改易家斷絶後文化四卯年十一月駿河越筋目ノ故ヲ以テ娘方孫善之丞正明被召出跡目五人扶持獨禮小普

請末席被　仰付タリ

大橋次郎兵衛

家　譜

大橋次郎兵衛 實名不知

大坂浪人ニテ候處於駿河年月日不知

權現樣へ被　召出御切米五十石被下置御奉公仕其後　南龍院樣へ御附被遊御入國之節紀州へ御供仕段々御役替御加增高貳百石被下寛文元丑年十二月八日九十歲ニテ病死

次郎兵衛總領小次郎明春父家督無之相違被下以下代々相續之處五代目三郎左衛門暢春天明三卯年三月御道中御供ノ節河州丹北郡本了寺ニテ父子共自殺家斷絶後督名跡家名御立被下之ヲ六代辨之進義春ト云文化十酉年十月小十人小普請貳拾石ニテ病死養子小次郎春勝嗣ク

小川十兵衛

家　譜

小川十兵衛重喜 小川市兵衛重政實子總領生國駿河

父市兵衛重政慶長八癸卯年於城州伏見

權現樣へ御切米十五石五人扶持ニ被　召出御餌差役相勤駿府ニ御座之節遠州中泉御鷹ニ相詰御哭

服御金度々拜領病中松平右衛門佐殿ヲ以テ御尋ネヲ蒙リ御藥頂戴病氣ノ樣躰右兵衛佐殿ヨリ言上ノ處宗徹法印ト申御醫師療治被　仰付代々服藥其後病死

十兵衛重喜於紀州父家督十五石五人扶持無相違被下御餌差役被　仰付元和五未年御附被遣御入國之節紀州へ御供其後勢州御場御取立之節勢州詰被　仰付寛永二十癸未年七月晦日病死（六十貳歳）

以後代々勢州御鳥見十五石五人扶持ニテ相續六代辨左衛門高堅肩衣御免ニナリ七代加藏（後大郎右衛門）峯義獨禮御鳥見組頭ニテ萬延元申年四月依願隱居御切米拾五石五人扶持無相違總領與左衛門照恩ニ被下置小十人格松坂御鳥見被　仰付タリ

小川監物

元和五年御切米帳ニ高五百石小川監物トアルノミニテ家譜傳ラズ事歴成行共ニ知ルニ由ナシ左ノ一節ニ參州御番所云々トアレバ駿遠之御領地ノ比ニ被　召出則駿河越之家筋ナルベシ

小川監物ハ參州ニ在ケル比御番所ニ寢タリシカ夜更テ人音シケル故起上リタル處ナ誰カハシラズハッシト切付タリ扱ハキラレタリト思ヒナガラ拔合テ敵ノ兩脚ヲナキテ倒ル、處ヲ切留ヌ初ハ切レタリト思ヒシガ運能テ枕ヲ二ツニ切裂レヌ後ニ御吟味アリシニ切ラレシ士ハ奥ニテ人ヲ殺シテ立退ントセシガ監物ガ起合ンコトヲ恐レテ殺サントシテ却テ切殺サレケル然共御詮議ニ殘ル處モ有リシヤ御内意ニテ監物ハ身ヲ退テ後御家へ被　召出シトカヤ其切レタル枕ハ張拔塗枕中ニパンヤヲ入タリ此枕ハ小川楠五郎家ニ于今所持セリ（牧笛類叢）

大林平右衛門

大林平右衛門行定 大倉孫二郎行房十三代ノ孫 生國駿河

家　譜

權現樣伏見ニ被爲成御座候御時御切米拾五石五人扶持ニテ被　召抱御殺生方御役被　仰付其後駿府ニ被爲成御座候御節遠州中泉御塒ヘ被　仰付候

一元和五未年

南龍院樣御入國之御供被　仰付紀州ヘ罷越御餌差役相勤其後勢州御鷹場御取立ニ付勢州ヘ相詰候樣被　仰付七拾歲迄相勤

一南龍院樣勢州ヘ被爲成候御節平右衛門儀隱居仕罷在候得共御尋御座候ニ付御目見仕候處假ニ年寄御不便ニ被爲思召候トノ　御意ニテ隱居扶持二人扶持被下置候

一寛永廿一申年八拾歲ニテ病死仕候

二代平兵衛行晴親平右衛門之跡ヲ續キ御餌差後ヲ勤メ御切米十五石五人扶持ヲ賜リ四代以下代々拾五石三人扶持相續十代五一郎正修ハ嘉永七寅年七月父留右衛門ヘ被下候拾二石三人扶持無相違被下御鳥見被　仰付タリ

小田切彌三

小田切彌三 實名不知 初清兵衛 生國三河

彌三儀

南龍院様御幼少之時ヨリ御奉公仕御宮參ノ節御守刀ヲ持御供仕候年月日不知於駿河知行貳百石被下置元和五未年御入國之節御供仕紀州へ罷越年月日不知御加增知行四百石被　仰付候

一寛永十七辰年名彌三ト御附被遊

一正保四亥年五月廿七日病死

總領三右衛門 後彌三 へ跡目貳百石被下以下代々相續七代權衛左門信尹御切米貳拾五石御小姓組ニテ文化三寅年七月隱居總領留楠信吉へ家督二十五石大御番被　仰付タリ

大久保熊之助

大久保熊之助、鈴木五郎兵衛子、而加納直恒從子、而爲大久保權右衛門養子、幼近侍公、一日公游獵、直恒從焉、違旨、公怒衝墜之溝中、滿身皆濕、直恒自謂、醜辱至此、無面以見人、脫身歸家、稱病不出數日、公屢召之、固辭不起、公病之、因謂熊之助、彼從子且有膽略、必能起彼、乃命道之、熊之助既往、直恒固執不動、熊之助不得已決意辭去、直恒起送之曰、子能復命、熊之助疾聲曰、咄不能達君命、何面謁君、唯有歸家自裁而已、不顧而出、直恒追留之曰、予深感汝不辱君命也、謹奉命、宜復命曰、五郎左速朝矣、熊之助曰、果然幸甚、乃歸報、公喜而賞之、熊之助時年甫十七、 紀士雜談

一明良遺跡ニ曰ク 神君ノ御時大久保七郎右衛門弟同姓權右衛門ヲ　賴宣卿へ御附ナサレケルカ權右衛門死去シ子ナキ故斷絕ス御附人ノ事ナレハ加納五郎左衛門（御側御用人）弟熊之助ヲ養子ニナサル

此熊之助ハ鈴木五郎兵衛實子ナルヲ五郎左衛門爲ニ甥ヲ五郎左衛門弟ニシテ御小姓ニ出シ置アリ夫レヲ權右衛門養子ニナサル御小姓ヲ勤ムル

漢文記スル處熊之助加納五郎左衛門直恒ヘ御使勤メシ件ハ五郎左衛門傳ニ詳ナリ爰ニ略ス

信按スルニ權右衛門ハ七郎右衛門弟トアレハ七郎右衛門忠世(小田原城主)ノ弟則權右衛門忠爲ノ事ナランカ果シテ然ラハ彥左衛門忠敎ノ兄ナリ權右衛門及ヒ熊之助共元和御切米帳ニ出ス亦其家譜モ傳フサレハ詳ナルヲ知リカタシ一本ニ熊之助ハ八郎五郎ト稱シ其子亦八郎五郎ト唱ヘ入道シテト意ト云トアリ正德六年八月長福丸樣御城ヘ御引移ノ節大久保熊之丞ナルモノ御供ニ被　召連トアリ或ハ此熊之助ノ家ナランヤモ知ルヘカラス

大久保忠成　四郎左衛門後屬賴宣隨○按駿河分限帳在大番衆之列祿四百石

大久保忠成之爲松坂城代也、安藤直次欲知親其意志、豫召而謂曰、予欲爲松坂城代如何、忠成曰、如松坂、以予鎭撫之可、何必煩君、直次乃勸往、忠成曰、以予往之非允、便宜行事不可、直次乃如其言而命之、忠成既赴任、一日命悉斬城下果木、屬吏小栗某命存其根、忠成巡視、叱曰、盍斷其根、使果實多有、世將呼曰、紀州柑松坂李、是顯我公利名也、又嘗悉買城下所有椀、人不知其故、及公東覲宿此、忠成出其椀、徧供群從者飲食之用、曰、豈有五十萬石侯而借椀於商賈者乎、　澁谷幽軒雜記

嘗有一商人往謁忠成、語次謂曰、管下民庶皆仰明府仁風至朝夕向尊館合掌拜禱、忠成聞之默然者久之、從容謂曰、汝其聽之人臣奉職、誰不欲宣揚君德、今予得人心者幸副國君之意也、當朝夕拜君恩衆益歸心、　紀士雜談

一年阿濃津城下大火、造營匆劇、多買材松坂、於是奸商頓倍價射利、忠成聞之、諭曰、管內賣買低昂其價

猶不可、今隣國罹災、我乃投其急以貪利非恤災之意、宜減常價一等鬻之、四隣聞者感泣、同上

一大久保四郎右衛門若輩之時伯父治右衛門家來之樣ニ被　召仕居被申候名ヲ彌藏ト申候或時徒之者傍輩ヲ殺害シ立退候翌朝彌藏ハ宿ニ居候哉ト治右衛門尋被申候是モ夜前ヨリ見ヘ不申候由申候一兩日過候テ彼者ヲ彌藏討留歸被申候自分之甥之段披露被致其以後大久保ヲ名乘ト被申候

一大久保四郎右衛門幼ニ伯父治右衛門或時川殺生ニ被出伊奈鯰ヲ何レモヘ振舞被申候處四郎右衛門我等ハ精進ニテ給不申ト申候ヘハ治右衛門思案之躰ニテ今日ハ十五日ナリ八幡ノ精進ニテアルヘシ物前ニテ一足モ引マシト覺悟仕候ヘトモ其場ニ至リ左樣ニハ無之モノナリ神佛ヲ頼ミテハ武邊トハ成ルマシク候ト殊々シク叱ラレ候由被申候由

一大久保四郎右衛門後入道宗随　松坂御城代ノ節出入ノ町人世間咄之席ニ御自分樣殊之外御慈悲ニ御座候池在町共ニ朝夕拜ミ候樣ニ仕候旨承リ及ヒ候ト申候ヘハ暫タマリ居ラレ扨被申候ハ我等申聞ケ候處能可承候御奉公申程ノ者何卒　上ノ御意ニ入度相勤メ申候事ニテ我等勤方慈悲ナル樣ニ存候ハヽ上ノ思召ヨリ出タル事ニ候間朝夕　上ヲ拜ミ奉リ候ヘト被申候至極ナル名言ト今ニ松坂ノ者申傳ヘスグレテ筋目ナル人ニテ物語多候

一阿濃津藤堂城下大火事ニテ作事有之候付松坂ニテ材木屋共直段ヲ大分上申候由承リ松坂城代大久保四郎右衛門ナリ聞被申土地之事ニ候ハヽ賣買之事ニ候間勝手次第ニ候隣國之火災ヲ悦フニ當リ候間タトヘ安クハ仕候共トテ早速二本直ニ下ザセ候督テ心附無之處近國ニテモ行當リ感シ申タルトナリ

一南龍院樣山林竹材ヲ伐リスカシ候事御嫌ヒナリマシテ御城山ナトハ茂ル上ニモ茂リ候樣ニト被遊

候江戸ヨリ松坂ヘ寄セラレ候時御城山樹木餘程スキテ見ヘ申候イツノ間ニ誰カ申付キラセ候哉ト

御駕之內ヨリ早ソク御不審ニテ御側衆承リ四郞右衞門申付伐ラセ候由申上候左候ハヽ何トゾ存寄

可有之ト好ク候トノ　御意ナリ

一大久保四郞右衞門吃ナリ同息惣大夫（大小姓頭役）雄辨也親父被申ハヨク物ヲイフ者ハウソヲツクモノナ

リト申サレ候由

以上皆紀士雜談及明良遺跡

按スルニ　四郞右衞門ハ駿河御附屬姓名錄ニハ御弓之衆四番高四百石トシ元和五年御切米帳ニハ高五百石又ハ元和御切米終身錄ニハ高千三百石八合大久保四郞右衞門慶安三寅年惣大夫ト改メ承應三午年十月病死跡目無相違同苗四郞右衞門ニ被下トアリ蓋シ初メハ四百石ヲ領シ猶五百石ニ增祿遂ニ松坂御城代千石以上ニ累進セシナルヘシ終身錄之四郞右衞門ハ子之四郞右衞門ニシテ父ノ名ヲ襲稱後惣大夫ニ改メタルモノナラン是又家譜傳ハラサレハ詳カナルヲ知ルヘカラス

小野權大夫

家　譜

小野權大夫辰居（初五味雲五郎　生國甲斐）

初五味雲五郎ト稱シ駿州ニテ浪人罷在候處年月日不知

權現樣ヘ御徒ニ被　召出相勤メ候處故有テ駿州ヲ立退

元和五未年

南龍院樣御入國之節紀州ヘ罷越御奉公奉願候處駿州ニテ之儀御聞合セ被遊其後御徒ニ被　召出此

節小野權大夫ト御改メ被成候

一年月日不知御徒目付又御相撲之者支配被　仰付御切米三十石被下置正保二酉年九月十日五十五歳ニテ病死

總領實三男 角大夫後權大夫 往吉父家督二十石被下御徒被　仰付御加增三十石御留守居番ニ進ミ元祿三年午六月病死三代權大夫始市八 辰倫父跡目三十石無相違相續十人組ヨリ頻ニ累進御目付御用達御小姓頭奉行役ニ歷任追々御加增都合知行五百石被　仰付寬保二戌年九月總領八十之助ヘ爲家督五百石之內四百石被下寄合被　仰付寬保三亥年二月七十八歳ニテ病死以下代々相續六代權大夫辰彌高三百石御目附ニテ文政二卯年十二月病死總領市八辰庸家ヲ嗣ク

按スルニ牧畜類叢ニ左之一節ヲ記ス代々權大夫ト稱スル故何レノ權大夫ナルヤ三代權大夫辰倫ノ譜ニ元祿五申年九月廿一日　上意衆橋本ヘ御越ニ付俄ニ被遣之處早速取合罷越之旨ニテ白銀三枚被下トノ事アレハ蓋シ此權大夫ノ事ナランカ

一小野權大夫ハ道達者ナリ一年江戶詰メニテ在シ比和歌山ヨリ老母病氣大切ナルヨシ告來ル故看病ノ御暇濟ミテ國ヘ歸ルニ家來ニモ道達者アリテ彼ノ家來唯壹人召連テ泉州助松迄三日半ニ來レリシカ此所ニテ若山ノ飛脚ニ逢ヒケルニ老母病死ノ由ヲイヘリ是ヲ聞シヨリ力落テアユム事不叶駕ニテ國ヘ歸リシトゾ

一此比ハ道達者多カリシニヤ大島雲五郎名井仙兵衛杯ハ道成寺ヘ日歸リニ往來シタリ行程貳拾六里ナリ亦廣瀬紺屋町ニ屋根屋甚助トイフモノアリ是モ達者ニテ其步行サマヲ試ミニ管笠ヲ胸ニ當テアユム勢ヒニテ手ヲ放シテモ落チザリシトイヘリ亦京都ヘ行テ所用ヲ調ヘ翌日ハ歸ル田邊ヘモ往

來スルニ嶮路故京都ヨリハ遲カリシトカヤ　牧笛類叢

奥村正尙

奥村正尙、稱三郎左郎、幼爲公近侍、後命爲賴純公傅、及長累被登用、終爲西條執政、食祿八百石、元祿中、賴純公廢世子賴雄公、而非其罪也、正尙與逕美勝之謀、屢諫復之不聽、既而正尙臥病、思滌世子寃、憂勞益甚、一日謂勝之曰、予若不起、子必諫復世子、予死而無憾、勝之慨然曰、予與子傅公、而陷之不道、何面見天日、予若不起、予必諫復世子、若不聽、繼以死而已、正尙大喜、及正尙病篤、賴純公慮其無後、諭使納義子、正尙曰、臣所諫不聽、無望於後世、臣一世而絕、固無遺憾、且世莫適臣意者、幸勿以煩尊慮、後公屢諭之、正尙唯請復世子、他無一言、於是、公又諭曰、正尙有勤勞於國、後嗣之事、非其所請則已、若他有所望、當從其請、正尙流涕曰、有命如是、臣有所敢請、臣僕有竹田善八・和田孫九郎・辻賀右衞門者、方正而有才幹、公家擢用斯三人、何願加焉、既歿家絕、官擢其三人、如所請、天保中、官思正尙勤勞、命養菅沼新右衞門次子、以其族幕府士奥村忠次郎次女妻之、賜三十口俸、以繼其絕、正尙軀幹長大、有膂力才兼文武、會有赤穗義士事、公謂侍臣曰、淺野氏有臣如彼、內匠喜可知也、正尙在側厲聲曰、公家有三郎五郎在焉、公大喜、正尙以元祿十六年十月廿一日歿、年五十一、葬江戶四谷本性寺、及後公薨葬身延山建正尙碑於其墓側、蓋出於公遺命云、　奥村家記

豫州奥野庄右衞申傳書　逕美甚五郎政要所藏

左京大夫樣御附御家老

奥村三郎
五郎正尙

八百石　奥村三郎五郎正倚

按スルニ三郎五郎ハ奥村次郎左衛門正春四男ナリ

一承應二巳年月日不知誕生

一寛文四辰年月日不知從　南龍院様御小姓之儘ニテ　源性院様ヘ被進候于時十一歳也其後段々結構被
仰付御家老ニテ知行八百石被下置候處元祿十六未年十一月廿一日行年五十一ニテ病死其身一代
ニテ家名斷絶致候品合左ニ記ス

按スルニ家譜ニハ元祿十三辰年四月七日御年寄本役被　仰付從中納言様三百石加増被下置トアリテ四百石ヘ三百石ノ御加増
ナレハ合七百石也八百石トスルハ誤リナルヘシ

一元祿十二卯年　本地院様御事御嫡子被　仰出候以來御精勤被遊御座有之候處如何成御故にや其
後　本地院様御儀源性院様之御心に不被爲叶同十四巳年六月嘉定　御登　城御下り後より猶更
源性院様御不興に被爲思召御嫌らひ被遊日々御疎く相成早々にも御退身之御計らひ可被爲在御内
意に付奥村三郎五郎渥美甚五郎兩人とも大に驚　源性院様ヘ兩人申上候は　本地院様御儀何御誤
り御不孝御勤向等不宜御儀は聊不被爲在候に右等之思召は如何成御故か恐入候ヘ共此儀は御宥免
被爲在候様にと申上候ヘ共御聞入も無之御様子に付其後兩人猶又代る〳〵段々御諫め申上候て何
の御故も無之御方を御退身なとの御取計は誠に天理に叶ひ不申其上御家中の者も不穩事と奉存候
間何卒々々此儀は思召留らせ候様兩人數度申上候ヘ共兎角に御聞入無之折柄三郎五郎風と病氣に
打臥居る中にも　本地院様御儀を一心に奉存御いたわしく御事と甚五郎ヘ申候は我等病中若異變

も有之候はゝ貴様を便りに候間何分　本地院様を御相續被遊候様申上頼入なり是計か心掛り也と申候得は甚五郎申候は是迄幾偏申上候ても御得心も不被爲在候事故此上は我等一命にかへ御諫言可申上且又政事を執候貴殿夫に次候我等なれは無道の沙汰有之候ては世間へ言譯も無之不忠之第一也何分貴殿萬一之事有之候はゝ我等分骨碎身いたし御諫め申上御聞入無之時は其場を不去一命を捨可申上と答候へは三郎五郎大に悦ひ候よし其後段々病氣重り候付男女之子無之に付養子之儀可願出樣御内意有之候へ共三郎五郎申上候は元來我等一代にて相果可申心得也此日本に我等氣に入候者無之且又我等段々申上候儀も御承引無之何面白き事可有之哉養子之儀不存寄御捨置願度との申上也其後度々養子の事被　仰出候得共只御請には本地院様御相續之儀御決心被遊候樣にと斗の御請の由追々病氣も重り候付源性院様よりも久々出精忠勤致し候者なれは養子不得心なれは何成とも望に任せさせ度との誠に御懇の思召にて其趣三郎五郎へ申聞候へは誠に御落涙にて難有かり左候は望之儀可申上私家來之内竹内善八和田孫九郎辻賀右衛門と申者至て正直なる者御座候隨分御用立候ものに候間何卒右三人之者御直參に被成下候樣願候との事にて右願置三郎五郎は終に病死いたし候右故三人のもの其後御召抱に相成追々結構に相成候よし三郎五郎は一代にて斷絶いたし候事也此三郎五郎は大兵にて力量も衆人に勝れ文武も能心かけ常に太刀を帶し候よし右之腰物武器等は三郎五郎死後　上之御預りに相成有之との事なり　本地院様御儀　源性院様御嫌らひ被遊候一件は何と申上候御事かは不存候へ共女中の內に兎角讒言申上候御事を御信用被遊候よりとの御事にて夫ゆへ思召に不被爲叶終には御義絶に相成候御事也誠に〳〵御いたわしき御事無此

上御次弟と其比ひそ〱申あへりとなん

一元祿十五のとし赤穗義士一件之砌　源性院樣被仰候には内匠頭は總てよき家來を持大慶しらるゝてあろふと御側へ御意有之候節三郎五郎も御側に居申候て右之御意を伺ひ大に怒り大聲にて此御舘にも三郎五郎罷在ると申上候由勇々敷事に有之たるよし其時　源性院樣御笑被遊御滿足被遊候との御意のよし申傳へに御座候

遺體江戸四ッ谷法華宗本性寺に葬る

法號信了院道種日緣居士

家來三人之者左之通被　召抱

三郎五郎家來　竹内善八

元祿十六未十二月四日御持同心に

同斷　和田孫九郎

右同斷後享保元申七月奉行所物書被　仰付

同斷　辻賀右衞門

右元祿十六未十二月十四日御供同心に

一三郎五郎家斷絕より百廿八年を經天保元寅年に至り家名之儀同家御旗本奧村忠太郎二女を三郎五郎養女に願左京樣御家老菅沼新右衞門二男を聟養子に同年三月十九日願相濟左京樣御願にて

直に御附と相成御本家より十人扶持被下置左京様より二十人扶持被下置都合三十人扶持に被仰付家名相續頭役格被仰付天保四巳年十二月廿一日御本家より被下置候十人扶持を地方七十石被仰付左京様よりの二十人扶持を地方百石に被　仰付當分御小納戶勤被　仰付之を周三郎正緝といふ

大塚治大夫

大塚治大夫家譜傳はらす委細を知りかたし元和御切米帳に據るに高百五十石を領し寛文十一亥年七月病死に付願之通り知行差上御扶持方十人扶持被下延寶四辰年迄右御扶持を渡し同五年より渡さす死失不知とす蓋し父の敵を打遂け後百五拾石を賜はりしならんか牧笛類叢及ひ南陽語叢に記する處左の如し抄記以て傳となす

一大塚治大夫同兵助ノ父ハ遠州天龍邊ノ地士ナリ七月躍ノ場ニテ喧嘩ニ及被討候相手ハ立退行衛不知悴兄弟數年尋ネネラヒ候ヘ共居所不相知渇命ニ及ヒ候故御國ヘ御徒ニ罷出弟兵助ハ三浦長門守殿徒ニ在附當分ノツナギニ致シ隨分聞繕ヒ候ヘトモ其甲斐ナク年月ヲ送誰知者ナシト思フニ南龍院様聞召ヲヨバレ御手ヲ被盡候テ敵ノ所在相知レ桑名越中守殿ニテ貳百五拾石取居候由則加納五郎左衛門ヘ密々被　仰含夜深更ニ治大夫ヲ被呼寄居間ニテ何トナク敵ノ様子被尋候得共フカク包ミ曾又以左様之覺ヘナシト陳申ニ付其方聊示ニ申不明モ最ニ候　上ニ殊ノ外不便ニ思召居所等迄御聞屆被遊候早速罷越本望ヲ達可申トノ御事ナリ爲路銀被下之ト金子被相渡首尾能仕舞候ハ

、此壹通出シ候様ニト桑名家老中ヘノ御狀相渡候治大夫落涙數行ニ及兎角可申上様無之大恩蒙處ナキ仕合ト御禮申上直ニ長門守殿屋敷ヘ參弟兵助ヲ密ニ呼出シ兄弟打連勢州サシテ參リ野ニ伏シ山ニ臥シ所之者ニアヤシメサル様ニ旅籠屋等モ家ヲカヘ宿リ此間之艱苦哀レ成事トモ後ニ治大夫咄申候五十日程過敵之者等參リ致シ候ヲ跡先ヨリ兄弟名乘懸ケ打留申候供ノ者共ハ不殘逃散候故何ノ手モナク兼々宅ハ用心嚴敷故手寄ナク途中ヲ心懸候試扨一町ノ者共取圍ミ候敵討之由ヲ申扨右書狀ヲ出シ申候早速役人立合右書狀披見以後以之外成モテナシ也御國ヘ一左右在之貳人モ參リ見送リ之者モ差添罷歸リ候治大夫儀岡ノ谷堀田右馬助屋敷之後袋町ノ宅ヲ被下同町ノ面々ヘモ常々心附候様　御内意有之候敵之子供成長ノ後ネラヒ申由相聞候鈴木忠左衛門一類ニテ便リ忍ヒ參リ候由相知候處治大夫ヲ忠左衛門聟ニ被　仰付候依之ヲノヅカラ彼ノ者參リカタク程ナクネラヒ候モノモ病死之由ナリ

岡見市郎久映

按スルニ　市郎始房之助ト稱ス安永九子年九月祖父跡目知行貳百石ヲ嗣キ御目附御用人御小姓頭御廣敷御用人奥掛リ等ノ要職ニ歴任シ御供番頭格御加增貳百五拾石ニ至リ文化八未年五月江戸出府旅中遠州濱松驛ニテ病死ス乞言私記ニ左ノ一節ヲ記ス頗ル機敏ノ人トイフベシ

岡見市郎御用人勤ノ時御醫師之内ニ私儀ハ長刀ハ不得手ニテ御座候間御道中御供之節鎗ヲ持タセ度ト申出ル鎗ヲ持候事勝手タルベシ但シ長刀ノ袋ヲ掛ケ持セ候様ニト即答アリシトゾ

岡權右衞門

岡權右衞門辰芳

權右衞門ハ岡權兵衞ノ養子實ハ勢州松坂領六呂木村岡七助三男也延享二丑年輕キ御奉公ニ出久々御廣敷ニ勤務セシカハ御取立ニテ明和八年比ハ奧役人十三石肩衣御免タリ其年ノ十一月ハカナクモ澄清院ノ御方　觀自在公ノ御手ニカヽラセラレ既ニ岩千代君ヲモ被遊ントスルヲ老女芳村マハヤト抱キ奉リアハタヽシク外ニ遁レ出　岩千代君ヲカヒ取リニテカクシマイラセツルニ公ハ血刀ヲ引提ケ御氣色アラ〳〵シク追驅ケ給ヒテ奧役人番所前ヲ御通リアラントス此時權左衞門ハ一心不亂御前ニ立チフサカリ御通リ不相成ト云汝不屆モノ我通ルヲ拒ヤトハツタト御白眼ノアルニ臂ヘ御前ト雖元通シ無之上ハ御通シ不罷成其爲之御番ニ候ト遮リ奉レハ彼ヲ打果ナリト痛ク御セキ被遊シカ其身命擲チタル忠誠貫徹ニヤ遂ニ其儘御引戾被遊シトナリ權右衞門身ハ輕輩ニ居ルトイヘ共實ニ烈士ニ不恥精忠ト感賞永ク口碑ニ傳フ處トナル權右衞門後中奧御番格御切米三拾石ニ御加增四拾石高ニ昇進文化十一戌年七月八十四歲ニテ病歿ス

老女芳村之事等ハ　觀自在公御本記附錄ニ詳ナリ

一辰芳長子同シク權右衞門ト稱ス人トナリ篤實溫厚故芦川良助門人ニテ弓術ニ達シ其奧儀ヲ極ム嘗テ武場ニテ井田禎藏ト弓ヲ以テ鎗法ノ戯ヲナシ誤テ目ヲ突カレ終身一目眇タリ永年御勘定組頭ヲ勤務祿三百石ニ至リ循吏ノ聞ヘ高シ後御廣敷御用人ニ轉シ四百石ニ進ム家富豪貧者恩借ノ惠ヲ蒙テ德トスルモノ不少ト云　當公御繼統以後弓法ヲ指南シ奉リ所謂大名藝ニ習ヒ給フヘカラスト嚴

渡邊若狹守直綱

格其任ヲ盡セリトナリ

渡邊直綱 一學ヽ按駿河分限帳、在御鐵砲衆之列、祿三千石、

渡邊直綱、新左衛門秀綱子也、爲尾公近習、有寵、公數請之於尾公、尾公不許、我士川井松左衛門謂、尾公曰、曩者紀公數請一學、而公不許、紀公思之不安寢食、夫以一士、喪昆弟、蓋非公意也、臣請拉一學還、尾公曰、第少俟之、松左衛門曰、代一學者、紀公將進其人、公何愛一學、偶直綱在側、松左衛門執其手而起、尾公止之、松左衛門如不聞者、尾公見其意、色甚決、不能強止、既歸與共謁公、公喜乃命爲近習、賜祿三千石、後屢增至八千石、任若狹守、 祖公外記

直綱遇事剛果、松平信綱毎有疑議、私召直綱決之、直綱嘗价處士中井武兵衛於阿部四郎左郎曰、是予舊識幸善視之、四郎左郎轉价之人曰、是紀藩渡邊一學所囑也、諸君知之乎、一學一言足以當勳狀矣、其被推服、大抵如是、 紀士雜談

家 譜

渡邊若狹守直綱 渡邊飛彈守守綱男同新左衛門秀綱男 初一學 生國武藏

祖父飛彈守守綱ハ尾張義直卿ヘ奉仕

父新左衛門秀綱ハ拾五歲ノ時

權現樣ヘ奉仕慶長九辰年 月日不知 父飛驒守守綱同樣尾張義直卿ヘ御附被遊右同人子孫當時本家渡邊飛驒守 實名不知 家ニテ相續罷在候最モ新左衛門秀綱儀飛驒守守綱幾男トノ儀且若狹守直綱儀新左衛

門秀綱幾男トノ儀不相知

按ニ 飛彈守々綱ハ半藏ト稱シ後忠右衞門ト云十六歲ヨリ神祖ニ奉仕武功拔群世ニ所謂鎗半藏ナリ子孫世々尾州家ノ老職タリ

元和二丙辰年十六歲ニテ

南龍院樣へ御奉公仕於駿河知行三千石被下置御太刀拜領仕十七歲ニテ鐵砲足輕五十人御預ケ被遊候

信曰ク 此刀今尙家ニ存ス當代一學ニ請ヒ一見ヲ得タリ中身左之刻アリ

此妙刀也自右肩至左脇一刀截斷候

源賴信公以之賜予榮又榮也故命工刻焉示其不忘也

渡邊直綱書

元和二年八月十六日和州手搔住包國於駿府造之

寛永三甲寅年又十騎御增被成下其後紀州隅田組所等十五騎ヲ御預ケ被遊候

同十一甲戌年三千石御加增被成下都合六千石被　仰付候

正保二乙酉年若狹守ニ任官被　仰付候

明曆元乙未年知行八千石ニ被成下候

寛文八戊申年八月日不知病死仕候　年齡不知

能登守命綱　若狹守直綱嫡子初一學又若狹守　生國紀伊

清溪院樣御代

寛文七丁未年月日不知部屋住ニテ被　召出知行千石被下置候御役不知
同九乙酉年月日不知父若狹守爲跡目知行八千石被下置唯今迄ノ千石ハ上リ候旨被　仰付候
年月日不知若狹守ニ任官被　仰付候後貞享二年五月能登守ニ改ム
貞享五戊辰年四月十九日常々不行跡其上相違ノ儀共モ有之不屆ニ被　思召知行被　召放父子共急度御預ケニモ可被　仰付程ニ被　思召候ヘ共父若狹守儀　南龍院樣御取立舊功之者ノ儀故御用捨ヲ以知行之内貳千石嫡子新次郎ニ被　仰付能登守儀ハ隱居樣體ニ仕知行之内在鄕ヘ引籠可罷在候依之御扶持方五十人扶持被下置候旨被　仰付候
正德元辛卯年七月日不知病死仕候年齡不詳
新次郎國綱家督後元祿六年十二月大組被　仰付同八年八月病死男子無之實弟半五郎久綱ヲ末期名跡被　仰付百人扶持ニ減祿以後代々相續之處頻リニ代替ニテ次第ニ減祿八代一學方綱ハ知行百五拾石御徒頭格中奥詰ニテ安政四巳年十二月病死養子熊太郎正綱相續ス則當時之一學是ナリ
按スルニ　二代能登守令綱カ一時ニ六千石召上ケラレシハ全ク左記祖公外記ノ事由ニヨリテ如此非常之嚴譴ヲ蒙リシナランカ
主水ハ渡邊恭綱ニシテ源性公之御長子　龍祖若狹守直綱ニ特命アッテ其氏ヲ分テ別ニ家ヲ起サシメ給ヒシナリ事ハ同人傳ニ詳カナリ又源十郎濟綱トハ山田市兵衛次男ニシテ寛文十二年九月能登守令綱願之上養子トナシタルナリ
香嚴公嘗テ城東相佐山ヘ被爲成山腹之古墳若狹守直綱ノ墓タルコトヲ知シ召シ御追悼之御作文アリシコト御本譜附錄ニ載ス
一祖公外記ニ曰ク　義直卿之御小姓渡邊一學ヲ御所望被遊候ヘ共不被進候故御膳番川井松右衛門ハ義直卿之御前ヘ出先日ヨリ渡邊一學ヲ御所望之所不被進故此程ハ御食事モ不被召上御不例ニ被爲在候一學一人之事ニテ大切之御連枝樣ヲ御捨被遊候樣ニ相成申候間今日ハ私連歸可申ト申上候處其方申處尤成共今暫相待候樣被仰候故一學代ハ紀伊殿御小姓之内ヲ御望可被遊候迚折

揃一學御前ニ居テ引立退テ暫〔停〕候樣被仰候得共不聞振リニテ連退候强テ御差留候ハヽ一學ナ可刺殺樣子ニ相見候故其分ニテ相濟候松右衛門一學ヲ連歸直ニ　御前ヘ出候處御直ニ御小姓被仰付三千石被下置袖留之節千石元服之節千石御加增ニテ其後若狹守ニ任三千石御加増都合八千石被下置候

一南陽語叢ニ曰ク　一學殿才量之程如何計候哉當時伊豆守殿モ事ニ依テ被呼間公儀御用筋之内談有之由ナリ中井武兵衛江戸ヘ參候節阿部四郎五郎殿ヘ一學殿ヨリ傳言ニ兼テ賴入候浪人之儀被懸御心可被下候我等能存知之者ニテ候間申入候ト口上申届候四郎五郎殿被申候ニハ各々被存間敷哉當時紀州之一學能存知候ト申一言ハ大方ナル感狀程之事ニ候ト也此一學殿ハ尾州之渡邊新左衛門次男ニテ　大御所樣御小姓相勤居候ヲ御所望ニテ御モラヒ被成候

按ニ　大御所樣御小姓トスルハ誤リナルヘシ

一祖公外記ニ曰ク　若狹守末期嫡子能登守ヘ之遺命ニ其方八千石ノ内三千石主水ニ分遣シ候樣被申候付一兩年ハ分ケ遣シ候得共勝手不如意ニテ分米減少ニ付主水モ難澁之趣　清溪院樣御聞ニ達シ不屆ニ思召貞享五年四月能登守隱居被仰付五十人扶持被下置嫡子新次郎國綱ヘ貳千石被下置候然ル處元祿八年病死ニ付舍弟半五郎ヘ百人扶持被下置其跡ハ總領友之進ヘ五十人扶持被下置候　吉林院樣御母堂瑞應院樣御舍弟源十郎齊綱ヲ能登守養子ニ被　仰付候處其後新次郎出生故養子ト不和ノ處無程源十郎早世病中ニ取扱等不宜トノ風聞モ有之是等モ御咎之ケ條ニ入リ候

渡邊主水恭綱

渡邊主水恭綱　源性公御三男幼名松之助　隱居後愬道　生國武藏

家　譜

右松之助ト申名ハ萬治元戊戌年十月

南龍院樣御附被遊　御自筆御書被下置以今所持仕候

最　御書ニ十月吉日ト御座候渡邊ト名乘候儀ハ松之助十四五歳之節渡邊若狹守同道ニテ江戸表

ヨリ紀州ヘ罷越若狹守ヨリ渡邊名字遣候樣ニト被　仰付以來渡邊ト名乘申候右之外委儀ハ舊記缺ニテ難相分候右若狹守子孫ハ當渡邊一學登綱家ニテ御座候

南龍院樣御代

年月日不知爲御合力高五百石被下置候

清溪院樣御代

一寛文七丁未年六月三十日御加增五百石被下置都合千石ニ被　仰付候右ニ付　南龍院樣ヨリ　清溪院樣ヘ之　御直筆御印物其節頂戴仕今以所持仕候

一同九己酉年月日不知知行貳千石ニ被　仰付候

一同三丙寅年十月十六日年比ニモ成候付緣組ヲモ被　仰付可然就被　思召左京樣ヘモ御内意被　仰進中川彌次右衞門娘ヲ緣組被　仰付候

一元祿二己巳年六月日不知御合力金三百兩被下置候旨被　仰付候

一正德四甲午年六月十八日奉願隱居被　仰付嫡子數馬ヘ爲家督知行貳千石無相違被下置御年寄列被　仰付候只今迄之御合力金ハ爲隱居料主水ヘ被下置候

一南龍院樣御紋付御太刀一振拜領仕候

一清溪院樣ヨリ御自畫御掛物拜領仕候

一瑤林院樣ヨリ桔梗桐御紋付鞘螺鈿御太刀一振拜領仕候

右之外ニモ御品々拜領仕今以悉ク所持仕候

一元文二十巳年閏十一月十七日病死仕候　于時八十歲

周防守豐綱　主水恭綱嫡子 二代目　初數馬

源性公ノ血胤ナルヲ以テ以下特ニ世々ノ譜ヲ詳記ス　此行ハ朱書

一正德四甲午年六月十八日父主水爲家督知行貳千石無相違被下置御年寄列被　仰付候

大惠院樣御代

一享保二丁酉年十二月日不知不勝手ニ付何卒勝手取直候樣ニトノ御事ニテ年々金三百兩御內々ニテ被下置且又當年ノ儀ハ彼是物入之上此度京都へ之御使ヲモ被　仰付別テ難儀可仕ト被　思召候付是又御內々ニテ右三百兩之外ニ金五百兩被下置候

一同四己亥年二月十日月番判形仕御用可相勤旨被　仰付候

一同十一丙午年十二月廿四日御用モ相達候付　公儀へ御願被成諸大夫被　仰付御加增千石被下置周防守ト名改可申旨被　仰付候

一同十五庚戌年二月二日病死仕候　于時三十八歲

恭綱二男　渡邊吉三郎早世

恭綱三男　渡邊半之助早世

恭綱四男　渡邊八三郎則綱

元祿十三庚辰年二月廿五日村松鄉右衛門男子無之付養子被　仰付寶永五戊子年十二月三日鄕右衛門爲跡目五拾人扶持寄合被　仰付其後地力五百石ニ御直シ追々昇進御供番頭被　仰付候處享

保十五庚戌年三月十四日實家渡邊周防守致病死忰松之助未ダ幼稚ニ付思召ヲ以周防守家相續被
仰付村松名跡ヲモ斷絶不仕樣可被　仰付トノ思召之旨被　仰出

恭綱五男　渡邊藤之進早世

恭綱六男　有馬兵庫頭氏倫養子　有馬備後守氏久

恭綱女子　戸田金左衛門清勝妻

恭綱女子　中川彌次右衛門忠和妻

恭綱女子　山高庄右衛門信房妻

恭綱女子　宮地久右衛門周武妻

恭綱女子　早世

恭綱七男　渡邊繁之丞早世

豐綱嫡男　主水則綱養子　渡邊松之助親綱

主水則綱　周防守豐綱養子實弟　三代目　初八三郎

一享保十五庚戌年三月十四日渡邊周防守致病死候處忰松之助幼稚之事ニモ候付思召ヲ以テ周防守家
相續被　仰付依之知行貳千石被下置大寄合被　仰付候松之助儀ハ嫡子ニ可仕旨被　仰付候

一同年九月十五日松平圖書跡御城代被　仰付與力足輕ヲモ御預被成候旨被　仰付候

一寛保二壬戌年六月廿五日病死仕候　于時四十六歳

豐綱女子　木下次郎四郎共張妻

豐綱女子　山高庄右衛門信興妻

豐綱女子　小出權大夫堯明妻

主水親綱　主水則綱養子 四代目　實周防守豐綱嫡男 初松之助又數馬

一寛保二壬戌年八月十六日實父周防守病死之節幼稚之事ニ付思召之品有之周防守家相續之儀同名主水へ被　仰付候件之品モ有之付主水爲跡目知行貳千石無相違被下置大組被　仰付候

一同三癸亥年十一月五日年若ニハ候へ共筋目モ有之ニ付大寄合被　仰付候

一寛延二己巳年正月十一日筋目モ有之付年寄共列被　仰付御加增千石被下置江戸表へ罷越四五年モ相詰可申旨被　仰付候

一同月廿四日月番判形仕御用相達可申旨被　仰付候

一同三庚午年九月四日松平賴母殿供廻リト自分供廻リ及口論賴母殿供之者ヲ致殺害候品ニ付當御役御免被成候旨被　仰付候

按ニ松平賴母は越前家松平出羽守(雲州松江)支流松平志摩守家(一萬石雲州母里)なり本年六月十五日双方登城の途中外櫻田に於て松平家の挾箱持渡邊の同勢を拔け通らんとして渡邊の牽馬へ挾箱の棒を突當て馬驚きしより喧嘩となる此時渡邊の馬丁鹿平なる者其無禮なるを憤り帶する所二尺一寸石動國行の脇差を以て升平といへる奴を手もなく一刀に切殺したるにて一時は騷動大方ならす世評紛々落首抔喧傳中間小者の身として手並といひ明刀といひさすかは紀州家の武備也と人皆感し赤坂奴の名を輝したること古く口碑に傳ふる處とす此始末を筆記した赤坂奴石動實記なるものあり三家の儀は重罪之者たりとも天下へ構ひなく手前仕置の家法然るを罪人を引渡すことは三家の恥辱也と尾水兩公も大に反抗閣老等へ詰問に及はれ遂に閣老松平石見守一己の計ひに歸し申披不立割腹に及ひし由を記せり是全く好事者の俗說に出しならん甚た信しかたししかし此頃は總して手廻り中間なる者各伊達を競ひ異形の裝ひをなし動もすれは喧嘩口論を任俠となして彼の赤坂奴の稱抔にほこりし

ものか蓋し此喧嘩もありし故にや幕府には此年七月廿五日を以て總して供廻り從士之者風俗不宜我儘に有之別して中間奴共專
其外異風取拵我儘にて供先にても口論等致し惡言等申者有之不埒に付向後右風俗急度相改めはうさうに可致違背之者には御仕
置に可被仰付との嚴令發布せられたる也

同月廿六日御禮式ハ御城代之上へ可罷出旨被　仰付候

一寶暦二壬申年九月九日地廻リ御代參御年寄打込可相勤旨被　仰付候

一寛政元己酉年二月九日年寄共列被　仰付御用役共部屋へモ罷出只今迄之通御用ヲモ兼相勤可申旨
被　仰付候

一同年八月廿三日病死仕候　于時六十三歲

主水正載綱　主水親綱嫡子　實次男　五代目　初八三郎又八郎　主水隱居後　周防守

一安永五丙申年十月廿三日部屋住ニテ被　召出御膳番格被　仰付御切米三拾石被下置候
此後追々昇進大小姓頭三百石被　仰付略ス

一寛政元己酉年十月十九日父主水久々相勤候付爲跡目知行三千石無相違被下置大組被　仰付候

舜恭院樣御代

一同七乙卯年二月十八日當分御側御用人相勤可申旨被　仰付候

一同八丙辰年五月十五日年寄共列被　仰付月番加判仕御用相達可申旨被　仰付候

一享和二壬戌年十二月廿五日
公儀へ御願被遊諸大夫被　仰付主水正ト名改可申トノ御事之旨被　仰付候

一文化元甲子年十一月十五日男子無之ニ付戸田河内弟同苗主膳ヲ願之通養子被　仰付候

一同九壬申年十月三日奉願隱居被　仰付養子主膳ニ家督無相違被下置候

一同十三丙子年七月十七日病死仕候　于時六十一歲

親綱女子　　柴山太郎右衛門忠徹妻

親綱三男　伊達源左衛門正賀養子　伊達但馬守正博

親綱女子

主水登綱　主水正載養子實戸田雪山清鄉四男　六代目　初主膳　隱居後觀月又一道

一文化九壬申年十月三日養父主水正兼々持病氣有之近比ハ爾々無之江戸勤ハ別テ致難儀難相勤候付奉願趣被　聞召届隱居被　仰付家督無相違被下置大寄合被　仰付候

一同十三丙子年閏八月廿日年寄共列被　仰付候

一文政三庚辰年六月十五日加判之列被　仰付　大殿樣ニテ相勤可申旨被　仰付候

一同五壬午年九月九日勝手向從來不如意ニテ借財夥敷及難澁取續難相勤候付御役儀　御免之儀奉願趣被聞召届候何分ニモ取續相勤候樣被遊度候得共御時節柄　思召ニモ不被任候付加判之列被成御免之御表ニテ相勤可申旨被　仰付候

一同十一戊子年十二月十五日病氣ニ付願之通隱居被　仰付家督無相違嫡子八郎ニ被下置候

載綱女子　早世

載綱女子　渡邊主水登綱妻

主水正治綱　主水登綱嫡子初補之助又八郎主水　七代目

一文政十一戊子年十二月十五日父主水病氣ニ付願之通隱居被　仰付家督無相違其方ニ被下置大組被
仰付候

一同十三庚寅年十月十一日松平六郎右衛門跡大御番頭被　仰付候

一天保十己亥年三月五日大寄合被　仰付候

一同十三壬寅年十一月十五日加判之列被　仰付候

一萬延元庚申年十二月廿日出精相勤候付御足高三百石被下置之旨被　仰付候

一文久元辛酉年十二月廿七日
公儀へ御願被遊諸大夫被　仰付主水正ト名改可申トノ御事之旨被　仰付候

一同三癸亥年七月廿五日病氣ニ付願之通隱居被　仰付家督無相違嫡子八郎ニ被下置大寄合被　仰付
緩々養生可仕旨被　仰付候

治綱嫡子八郎爲綱家督三千石無相違相續後御用人御家老加判之列相勤明治二巳年御國政改革之
際一旦田丸民政知局事奉職之處後世之推選ト共ニ家勢零落遂ニ倒産ス則今ノ爲綱是也

一祖公外記附錄ニ曰ク　頼純公十三歳之時松之助殿御出生有之候へ共御年若故御披露モ無之若狹守養子ニ被　仰付主水恭綱ト御名改其後貳千石ニ被　召出候共嫡子數馬貴綱後周防守ニ任ス

渡邊又右衛門

渡邊又右衛門公綱　松平右衛門大夫正綱甥　初内藏之助後六藏　生國山城

家　譜

慶長元丙申年（月日不知）

權現樣へ被　召出（御役儀高不知）同九甲辰年（月日不知）

南龍院樣へ御附被遊御小姓相勤同十一丙午年二月於常陸國高三百石被下置之旨從　權現樣御朱印

頂戴于今所持仕候右御判物寫

　常陸國那賀郡之內勝倉村之內參百石右宛行訖全可領知者也

　　慶長十一年二月廿四日　　御　朱　印

　　　　渡　邊　六　藏　殿　へ

同十三戊申年（月日不知此時十九歳）駿河御城ニテ口論仕（相手不詳）双方共立退六藏儀ハ山城國舊里水尾村へ罷越浪人

仕罷在候處

元和九癸亥年（月日不知）

大猷院樣御上洛ノ節京都ニテ松平伊豆守殿言上之趣有之

南龍院樣へ歸參被　仰付高三百石被下御小納戶相勤其後段々御役替御加增被　仰付千石被下松平

左京大夫賴純樣へ被爲附御家老相勤萬治二己亥年病死仕候月日幷年齡不詳

　又右衞門公綱實子總領三之丞正綱ハ部屋住ヨリ

南龍院樣へ被　召出高三百石小十人頭勤之處病身ニテ退身病死依テ三之丞子六藏（後又右衞門）重綱

ヲ公綱嫡孫承祖ニ被　仰付萬治二亥年公綱跡目千石無相違被下寄合被　仰付三代又右衞門綱幸

幼少ニテ家督貳拾人扶持ニ減祿後三百石トナリ隱居養子又四郎ニ家督貳百石被　仰付聞モ無ク

病死實子無之跡目ハ不被　仰付父又右衞門綱幸ニ再ヒ養子被　仰付貳拾五石減祿是ヲ四代又右衞門房綱トス以下代々相續七代又右衞門利綱貳拾五石大御番ニテ天保十二丑年五月病死總領鹿之助勝綱相續ス

渡邊生綱　六郎左衞門ヿ按駿河分限帳、在大番衆之列、祿六百石、

渡邊六郎左衞門生綱

渡邊生綱、系出於左大臣源融、其先曰源太左衞門範綱、歷仕長親信忠清康三公、享祿二年死於三河下地之役、年六十、祖父曰平六遠綱、父曰平六眞綱、生綱年十六、仕東照公及台德公、長久手小田原關ヶ原諸役、毎戰有功、慶長十八年屬公、大坂兩役從而有功、後爲旗奉行、增祿至八百石、寬永十二年十二月歿、年七十二、　渡邊系譜參取武家系譜

家　譜

渡邊六郎左衞門生綱　渡邊六左衞門眞綱次男初小平六　生國三河

曾祖父源太左衞門範綱

長親樣信忠樣清康樣へ奉仕享祿二己丑年五月廿八日參州下地合戰之節討死　六十歲

祖父六郎左衞門遠綱ハ　清康樣廣忠樣　權現樣へ奉仕天正十五丁亥年七月廿三日三州浦邊村ニテ病死　七十九歲

父六左衞門眞綱

權現樣へ奉仕永祿三庚申年尾州大高役供奉仕

永祿五丙戌年三州八幡御合戰供奉仕得首級

同六癸亥年十月一向宗企一揆候節一家之者共ト寺内ヘ亂入致シ渡邊半藏相共根來十内ヲ討候以後蒙御免如元奉仕參州吉田御合戰供奉仕鎗合功仕

元龜三壬申年十月武田信玄先手之者遠州見附臺ニ出張一言坂ニ於テセリ合ノ時渡邊半藏同半十郎等ト一所ニ返シ合敵ヲ追拂同年十二月味方原御合戰之節半藏半十郎以下漸七八人ニテ玄藏默口ヲ相固天正十二甲申年四月九日尾州長久手御合戰供奉仕得首級

慶長五庚子年台德院樣信州眞田御攻被遊候節供奉仕

慶長六辛丑年月日不知於攝州大坂病死仕候　五十八歲

六郎左衞門生綱兄平六憲綱高天神ニテ討死仕候付總領ニ罷成

權現樣ヘ奉仕甲州新府御合戰供奉仕

天正十二甲申年尾州長久手御合戰供奉仕得首級

同十八庚寅年相州小田原御陣供奉仕候

同年二月御知行百俵被下置御代官證文于今所持仕候右寫

御知行書立

一三拾九俵貳斗　駿州山東　下足洗鄉內ニテ

一六拾俵壹斗　遠州曾我庄內　梅橋之鄉內ニテ

合百俵

右如此可被成所務候取高之外田畠上中下共壹段ニ壹斗宛之夫錢有右ノ分百姓請負一禮有之依

如件

天正十八庚子年

二月十一日

渡邊小平六殿

伊奉熊藏書判印判

同十九辛卯年五月十七日於武州御知行貳百石被下置御朱印頂戴仕于今所持仕候右御朱印寫

武藏國

一百四拾三石貳斗

百世塚

一五十六石七斗

大仙波之內

合貳百石

右出置者也依如件

天正十九年辛卯

五月十七日　　御朱印

渡邊小平六殿へ

同年七月百石御加增被下置翌辰年七月五十六石餘御足高被下置御代官證文于今所持仕候右兩通

寫

御知行書立

一七拾六石四斗四升八合五勺七才　下總小金領之内かみやきり内

一貳百貳拾三石五斗五升壹合四勺三才　同領下屋きり内

合參百石

右分御請取可被成候重テ　御朱印可被御申請候爲後日依如件

卯七月吉日　伊奈熊藏書判

長谷河七左書判

渡邊小平六殿

渡邊御知行足之事

一五拾六石七斗八升ハ　武州山相筋

藤指之郷内ニテ

以上

右分可有御所務候依テ如件

辰七月十七日　伊奈熊藏書判印判

大久保十兵衞書判

渡邊小平六殿

慶長五庚子年關ヶ原御陣供奉仕同十八癸丑年 月日不知 南龍院樣へ被遊御附大坂兩度之御陣御供仕其後御加增被 仰付高四百五拾石被下 役儀不知 元和五己未年御入國之節紀州へ御供仕旗奉行被 仰付御加增被下都合八百石ニ被 仰付
寛永十二乙亥年十二月朔日病死仕候 于時七十四歲

生綱總領綱治へ
台德院樣へ被 召出豐前守ト稱シ三千石甲府勤番タルヲ以テ次男六郎左衛門知綱父ノ家督ヲ繼キ高八百石無相違被下御旗奉行ニテ延寶三卯年五月隱居以下代々相續生綱ヨリ六代六郎右衛門坑綱ハ寛政十年年高五百五十石御持筒頭タリ

渡邊傳四郎正朝

渡邊傳四郎正朝ハ龜田大隅 淺野紀伊守家來 次男ニテ渡邊六左衛門ノ養子ナリ六左衛門ハ元松平大和守ニ奉仕之處寛永三寅年加納五郎左衛門取次ニテ
南龍院樣へ被 召出御切米五十石被下正保三戌年知行百五十石トナリ慶安四卯年貳百石ニ進ミ寛文十戌年二月病死傳四郎正朝父之家督貳百石無相違賜リ後郡奉行御代官等歷任元祿十四巳年三月病死ス南陽語叢左ノ一節ヲ記ス
家譜ヲ按スルニ 越前家ニ奉仕ノ事ナシ或ハ嘗テ越前家ニ仕ヘ後大和侯ニ仕ヘシニヤ如何チ知リカタシ
一渡邊傳四郎正朝カ祖父ハ越前ニテ御目付役ナリシガ大坂御陣之時 少將樣御召之冑ヲ被下家ニ傳

フ吹返ニ桐ノトウノ御紋アリ傳四郎父ハ六左衛門也 南陽語叢

正朝以下代々相續五代六左衛門正純ハ御切米四十石江戸常詰御使役ニテ寛政元酉年四月病死養子半七正陸家ヲ嗣ク

渡邊縫殿之助

渡邊縫殿之助

渡邊縫殿之助ハ小笠原丹齋カ門人ニテ禮法ニ委シカリシ有徳院様未タ主税頭様ト申上候頃御他行之折節雨天ニテ路次悪敷然ルニ或御旗本衆ト行逢ニ成シニ御供ノ人少々彼士ニ障リタリ御旗本衆大ニ怒リテ御駕近ク進ミ寄時渡邊縫殿之助ハ御近習番ニテ御供ニ有シカ飛出押隔テ御駕早ク遣ルヘシト云ナカラ彼ノ御旗本衆ニ向ヒテ只タ御自分様御行違ニ供之者障リ其儀ヲ被仰ントテ是ヘ御進ミト察シ存候今日ノ雨天道悪敷ク供之者片寄リ候迚不思御自分ヘ障リ申タルニテ候御立腹之段ハ御最ニ候ヘトモ右ハ主人ノ存シタル事ニ無之揃夫ハ供之者共萬事指圖致ス役ニテ罷在候ヘハ幾重ニモ御詫可申候夫レトモ御勘忍難被成品ニ候ハヽ是非ニ不及御相手ニ可罷成ト言葉正敷ク言述タリ御旗本衆モ御駕ヘコソカヽリケレ縫殿之助ヲ相手ニシテハ不足ナリ共其上縫殿之助思ヒ切リタル顔色ニテ否トイハヽ切リ掛ルヘキ様子ナリシ故思案シテ其邊ニテ濟シケルトナン 牧笛類叢

渡邊半平珪

渡邊半平珪

渡邊半平名ハ珪渡邊作右衛門申（中ノ間番二十五石）之三男ナリ天明八申年六月學問出精ニ付年々銀貳枚被下寛政

三亥年二月學校授讀助二人扶持被下同六寅年七月學問宜敷ニ付新規被　召出七人扶持ヲ賜リ同十年年七月御廣敷御用達詰所勤後小十人格ニ進ミ文化元子年十一月御廣敷番格御廣敷番同樣勤同五辰年五月小十人同樣勤ニ歷任文政六未年七月非常ニ付出在ノ節不心得ノ品有之旨ニテ御役　御免小十人小普請末席ニ貶セラレ天保二卯年六月小十人小普請十五石ニテ病死于時六十八歲ナリ二男蓮之助茂跡目相續ス

按スルニ　半平嘗テ　香嚴公之御事蹟ヲ編纂シ瑞德院ト題セシニ　舜恭公之内旨ニヨリ更ニ之ヲ漢文ニ譯述文化十年八月成ヲ上ルト云フ紀伊國人物誌ニハ其小傳ヲ聞人之部ニ掲ケタリ即左之如シ

姓源氏渡邊名珪號龍門、或號辨齋、或號禹爵堂、通稱半平、或彌平、天保二年辛卯七月四日歿、法名如臨院清涼信士、葬于車坂感應寺

若林善九郎

若林善九郎、父曰和泉直則、初仕北條氏、屬武藏松山城主上田上野亮部下、爲武者奉行、後仕東照公、爲鑓奉行、賜祿千百石、關原及大坂兩役皆從焉、善九郎屬公時甫三歲、善九郎甫十一、後賜祿貳百石、爲納戸頭、正保元年沒、

家譜

若林善九郎 實名不知　若林和泉直則惣領 初兵彌

父和泉直則ハ初仕北條家武州松山ノ城主上田上野亮旗下ニテ武者奉行仕候沒落以後松平加賀守利家之陣ヘ加リ武州鉢形之城責先手仕候其後

權現樣ヘ被　召出千百石被下置御鑓奉行被　仰付勤役中關ヶ原大坂夏冬之兩御陣共供奉仕寬永二

乙丑年十月相摸國愛甲郡愛甲鄉九百五十石貳斗餘新土村五十七石貳斗中原村三十三石貳斗岡津古久村五十七石合千百石之御判物頂戴今以同家御旗本若林主税方ニ所持仕候其後　台德院樣御代マテ御鑓奉行相勤寛永三丙寅年六月晦日病死仕候

善九郎　初兵彌

權現樣へ被　召出慶長九甲辰年 月日不知

南龍院樣御三歲之時兵彌十一歲ニテ御附被爲遊慶長十六辛亥年 月日不知 於駿州御知行貳百石被下置御朱印頂戴仕處御朱印ハ於紀州明曆元乙未年火災之節燒失仕候元和五己未年

南龍院樣紀州へ御入國之節御供仕罷越其後御納戸頭相勤正保元甲申年八月十七日病死仕候 于時五十一歲

善九郎實子總領兵彌父跡目貳拾人扶持大御番被　仰付以下代々相續九代兵彌直親三拾石御書院番ニテ文久二戌年十二月病死養子株之助春壽家ヲ嗣ク

若尾右衛門四郎安親

若尾安親 右衛門四郎○按駿河分限帳、在大小姓衆之列、祿二百石、

若尾安親、父曰右衛門四郎泰直、初仕武田信玄、武田氏亡退仕於甲斐、若尾及東照公入甲斐、召而祿之、安親襲家、屬公大坂役、年甫十五、從而有功、後屢轉職、增祿至五百石、爲町奉行、延寶二年歿、年七十五歲、 若尾系譜

家　譜

若尾右衛門四郎安親 若尾右衛門四郎泰直實子總領 初彌九郎

祖父左衛門次郎君豊ハ武田信玄ニ仕同家没落之後浪人仕甲州岩尾ト申所ニ居住仕候處其後
權現樣甲斐信濃兩國御出陣之節御休所ニ相成其節拜領物等仕御供被　仰付候此時父右衛門四郎
奉直儀被　召出御奉公申上候

右拜領物慶長年中火災之節燒失仕御品不相知舊記等モ其節燒失仕委儀相分不申候

右衛門四郎安親父家督被　仰付其後年月日不知
南龍院樣ヘ御附被遊大坂御陣之節十五歲ニテ御供仕元和五己未年御國替ノ節紀州ヘ御供仕候以後
段々御役替御加增等被　仰付高五百石被下町奉行相勤其後年月日不知依願隱居被　仰付家督無相違總
領ニ被下爲隱居料現米貳拾五石右衛門四郎ニ被下延寶三乙卯年四月十四日病死仕候于時七十五歲
安親總領右衛門四郎安重父家督五百石無相違被下以下代々相續代替ノ節々次第減祿七代彌九郎
恭憲ハ貳拾五石御書院番ニテ寬政五丑年六月不埒之品ニテ御役祿共被　召放愼被　仰付八代平
右衛門安行先祖以來久々相勤候付別儀ヲ以テ貳拾五石大御番ニ被　召出享和元酉年七月病死弟
長三郎恭興ヲ養子跡目相續ス

南紀德川史卷之四十四

名臣傳第五

加納平右衛門久利
同　角兵衛　久通
同　五郎左衛門直恒
同　大隅守　政直

家譜

加納平右衛門久利（松平孫太夫久直惣領　初九十郎　生國上總）

父孫太夫久直ハ松平三河守泰親公之六男松平備中守久親末葉ニテ參河國加茂郡加納村之住士御當家御一族ナルヲ以テ御代々へ仕

廣忠君御逝去後　權現樣御幼稚ニテ尾州ニ御在住之比三河國廣瀨高橋之兩城之主三宅右衛門太夫之幕下加茂郡寺部之城主鈴木日向守重教ニ屬ス其後　權現樣駿府御在住ニテ西三河大半織田家ニ屬セシ時矢作定助之兩鈴木黨比日織田信長ニ從フ時永祿元戊午年　權現樣今川義元之下知ヲ受給フテ西三河之信長へ屬スル城々ヲ責給フ初ニ加茂郡寺部之城ヲ攻給フ處堅クシテ城ハ陷ス同三庚申年今川義元尾州桶挾間ニテ討死後

權現樣廣瀨高橋之兩城ヲ攻給ヒ城主三宅右衛門太夫者服部市平保淺カ從士雪岡久右衛門カ爲ニ

討死シテ落城ス依テ三宅ニ屬セシ西三河之地士七十餘人ヲ赦シ給フテ高橋衆ト稱シテ本多作左衛門重次ニ御預ニテ與力トナシ給フ是多クハ鈴木黨也此時久直モ本多重次之組トナリ松平之御稱號ヲ憚テ加納ト稱シ姓ヲ藤原ト改ム天正十八庚寅年小田原北條家滅亡後ニ　權現樣關東ヘ御入國之時本多重次ニ上總國小井戸三千石ヲ賜フ此時孫太夫モ上總國ニ移知行貳百石被下置慶長年中關東ニテ病死仕候

平右衛門久利幼稚之節ヨリ子細有之　傳通院樣御舘ニテ御養育被成下後慶長十三戊申年　權現樣ヘ被　召出知行貳百石被下其後　南龍院樣ヘ御附被遊元和五己未年御入國之節御供ニテ紀州ヘ罷越元和六年庚申三月廿六日病死仕候（年齢不詳）

家之柏之紋之儀ハ　傳通院樣ヨリ拜領仕加納家之定紋ト仕候由申傳候

一久利總領十郎兵衛（實名不知 始主殿）元和六庚申年父跡目知行貳百石無相違被下慶安四辛卯年八月改易被　仰付

一十郎兵衛總領角兵衛久政寛永十一戌年新規被　召出御切米廿石被下後追々昇進貞享五辰年隱居知行三百石之內貳百石養子孫市ニ被下（殘百石ハ角兵衛ニ被下）

加納角兵衛久通（角兵衛久政養子 始孫市 實ハ同姓大隅守政直二男五郎左衛門直恒ノ孫也）

貞享五辰年養父家督知行貳百石相續後追々昇進大番頭御用役千石ニ被　仰付正德六年江戶在勤之處四月晦日　有德院樣　公儀御相續之砌有馬四郎右衛門ト共ニ御供ニ被　召連御側被　仰付遠江守ト稱シ追テ一萬石被　仰付當時華族加納久宣家也久通德廟ヲ補佐誠忠ノ功績世普ク知ル所ニシ

テ德廟御譜中ニモ其一端ヲ略述ス

德川十五代史寬延元年ノ條ニ曰ク 七月十九日大御所若年寄加納遠江守久通卒ス

享保元年從ツテ移リ五月廿六日側衆トナリ近江守ニ叙任シ正月千石ヲ加ヘ十一年正月十一日八千石ノ地ヲ加ヘテ萬石之列トナル宿直ヲ免シ延享二年大御所ニ從ツテ西丸側衆トナリ九月朔日同若年寄ニ進ミ四年九月月番ヲユルサレ此月七十一歳ニテ卒ス久通紀州ニ在シ時ヨリ前代ノ信任ヲ得テ大小ノ事悉ク執行ヒ皆其旨ニ適ヒケレバ權勢亦執政ノ上ニ出タリ然レドモ常ニ謹愼シテ衆ニ謙リ廉潔ニシテ勢ヲ弄フノ心ナカリケレハ政治ニ害ナクシテ身ニ誹リナク終ニヨク功名ヲ全クセシト云フ

加納五郎左衛門直恒

加納直恒 五郎左衛門 按駿河分限帳 在夜居間番衆之列祿九百石

加納直恒初稱九十郎、又稱數馬、鈴木五郎兵衛次子也、東照公、命爲平右衛門久利義子、久利初仕東照公後屬公 幼近侍東照公、公深寵之、賜祿貳百石、慶長十六年、豐臣秀頼來謁東照公於二條城、東照公、使公及義直公迎之鳥羽、命木下市藏、及直恒、從公、時年甫十三、大坂役、促公、、直恒能騎而屬焉、公知其非凡、深寵之、及長爲名臣、加納家譜

直恒常自言、爲人臣者、不以其君手刄爲分、不能盡忠、每旦朝公、輒與妻子訣而出、故其事君、謇諤無所憚、公嘗謂直恒曰、予欲云云、直恒指公腹曰、此恐非心腹中語也、請反省之、公不憚曰、五郎左、予不欲復見汝、直恒曰、臣亦不欲復見公、其亢厲不屈、大抵如是、而公深倚頼之、其有所爲、未嘗不謀於直恒、加納五郎左衛門行狀記以下皆同 一日直恒侍、公有所問、而其對非公意也、公不懌曰、予謂汝必異於他人、今乃如是、因召三浦爲時、問曰、予意如是、而五郎左所言如是、不知是非如何、爲時曰、誠如公意、直恒睨爲時曰、子實以公意爲允當、當上誓書以爲信、爲時愧悚不能答、

由比正雪、介渡邊直綱、求仕於公家、直綱自之公、公曰、五郎左嘗痛拒彼、宜與五郎左謀之、直綱乃使吉

見經孝說之、直恒固執不可、經孝曰、若狹既稟之公矣、將如之何、直恒曰、此非子所知、第以予言報之、夫公家之欲祿之非以其講兵法邪、而彼乃請爲掃除坊主、是必有姦計、決不可允、子亦喜諭此意、於是其議遂止、後直恒謂人曰、予爭召正雪是一世報國之大節也

堀部佐左衛門（按駿河分限帳在大小姓衆之列祿參百石）自陣大坂役戰功、以請增其祿、當是時、牧野長虎（兵庫頭）大有權寵、而嫉堀部功、會有事干大智寺、諸士群列、事既竣、長虎言於稠人中曰、矯其功以利祿者有乎、有則宜徇之於市、以磔於第九街之堰上、直恒進曰、人實有功、而嫉之者有乎、有則亦宜徇之於市、以磔於第九街之堰上、長虎曰、在權貴則如何、直恒曰、鄙劣如是、列士猶不可容、況在權貴乎、長虎撫刀曰、五郎右不遜、直恒冷笑曰、鄙劣男子、安能斷此剛項頸、進而迫之、一座皆失色、時直恒及澁谷八左衛門、爲監察、共糾問堀部事功云、

牧野長虎、以沮堀部氏之故、出逃京師、公欲召還、故讒直恒、及澁谷而幽之、時二人皆在江戶邸、會澁谷在直恒舍、而嚴命下、澁谷、懼將遽辭而去、直恒從容留之曰、公讒我二人、是自使也、在我無得讒之實、無愧於天地、何懼之有、寒厨飯方熟請喫之而去、乃留食飯罷、直恒又點茶饗之、款晤良久而去、及後見允、澁谷欲與直恒共、謝執政之門、直恒曰、子以見允爲恩乎宜往謝、某則謂無往謝之理、夫公有所自便而讒之、期至而允之、何嘗關於我、既不關於我又何謝之爲、終不往謝、

水野重上（對馬守後改土佐守）毀万松寺、以廣其邸、猶以爲狹、感應寺其隣也、因欲幷之、直恒既老、聞之曰、感應寺、養珠太夫人之所置也、對馬欲敢廢之、不敬甚矣、重上憚直恒未發、一日欲見直恒而謀之、乃往訪將命者、白水野對馬在門、直恒病聾、不詳其言曰、對馬何故欲來於此退隱之所、將命者曰、對馬既上外驛矣、直恒

曰、此其來、必爲感應寺也、予眼猶黒決不可得、汝告五郎左不在、其聲頗然外徹、重上聞之、蓬累而去、後重上欲使布施重紹說之、重紹曰、五郎左守義甚堅、假有轉坤旋乾之辨、不可得而回也、請絶望、重上乃罷、後又有境界之爭、而終不能蠶食寸地者、蓋以憚直恒也、

關口柔心、平生少所推、常云、予於人無所畏、獨加納五郎左可畏耳、安藤直治亦嘗曰、使公家有如五郎左者貳人足矣、初直恒爲大小姓、公嘗病、直恒左右就養、衣不解帶者五旬、後屢轉職、終爲執政、增祿至貳千石貞享元年十月四日歿、年八十有五、顏色如生云、

按平右衛門久利子曰角兵衛久政、別開家、久政養大隅守政直子久通爲子、實直恒孫也、從有德公仕幕府、後任遠江守

家譜

分家

加納五郎左衛門直恒 平右衛門久利猶子 實鈴木五郎兵衛直儀二男 始五郎三郎 又數馬 九十郎隱居後快遊 生國上總

五郎左衛門母者、加納平右衛門久利妹ニテ故有之幼稚之節ヨリ　盛德院樣御屋形ニテ御養育被成下十一歲之時　權現樣侍女加納平右衛門妹佐阿ハ伯母ニテ同人厄介ニ相成駿府御城長局ニ罷在幼年之内於大奥相勤其後依　臺命平右衛門猶子被　仰付

權現樣御小姓被　召出知行貳百石被下置御朱印頂戴仕候慶長十六辛亥年三月廿八日豊臣秀頼上洛之刻二條於御城　權現樣御對顏被遊翌四月二日　尾張源敬樣南龍院樣大坂へ被爲進御小姓之内御選ニテ木下市藏加納九十郎兩人御供被　仰付候此時秀頼ヲ九十郎見覺候由元和乙申年五月大坂夏

御陣之節　尾張源敬様南龍院様　權現樣江供奉ニテ御出陣此時　權現樣ヨリ緋威之御具足九十郎ニ被下置同月七日　尾張源敬様南龍院様段々御押出平野堤ニテ　權現様ノ御使番二騎駈來テ御合戰初リ候付早々御乘附被遊候様ト依上意御二方様茶臼山迄早々御乘附被遊候御小姓之内ニテ伊藤八十郎加納九十郎兩人御馬ニ續テ馳付候右ニ付　南龍院様ヨリ御懇之蒙御意御座候

一年月日不知

南龍院様ヘ御附被遊候元和五己未年月日不詳於駿河御加増都合三百石被成下候同年八月紀州ヘ御入國之節御供ニテ罷越同月十八日和歌山ヘ着仕候元和六丙申年月日不知御加増貳千石被成下候年月日不知六十人者與力鐵砲同心被成御預候寛永二十癸未年月日不知大御番頭被　仰付一組被成御預候萬治二己亥年月日不知御年寄列被仰付候

一寛文七丁未年七月十五日願之通隱居被　仰付家督無相違平次右衛門ニ被下置平次右衛門御切米貳百石爲隱居料五郎左衛門ニ被下置候跡役被　仰付候迄只今迄通御用相達可申旨被　仰付候

一貞享元甲子年十月四日病死仕候　于時八十五歳　子孫之事ハ末ニ記ス

加納五郎左衛門行狀記

一渡邊彌太夫ト云者後落合左平次ニ奉公ス云先年何事ヤラン道中ノ供イタシ申處ニ何方ノ國主ノ御休所カ松原ノ中ニテ狹筥ニ腰ヲ掛タル人有シニ老人馬ニ乘リナカラ通過キ被申候ニ人數二三十人追掛來ル體ニ見エ申候彌太夫申候ハ御跡ヨリ大勢追懸候ト申老人少シモサハキ不被申鑓ヲ手近ク持セ候得ト計ニテ常ノ顏色ニ候彌太夫立留リ跡ヲ見候得ハ亦遙カ跡ヨリ追懸參リ候者トモヲ扇ニテマネキモト

シ候故無事ナリト云總シテ物ニ不動事如此ト云シ

一加納五郎左衛門山本藤四郎御小姓衆ニ指添ラレ道中同心ノ時道寄サセ候事御法度ニ候得共古跡ナト見タカル衆ヘハ加納氏ユルシテ被見セ候依之御咎メ有兩人共ニ高野ヘ登リ三日逗留迷惑イタシ候逗留ノ内藤四郎ハ高野ノ寺々方々見廻リ能序トテ見物致候加納氏ハ遠慮仕カラハ出アルキ申當ニテ無之トテ三日三夜床ヲハナレス打カヘリ〳〵寢申サルヽ由今ニ傳ト云

私ニ曰　加納氏イサヽカノ事有テ御不審ヲ蒙リ荒川ヘ蟄居其節山本藤四郎モ一同ニ御咎メ有テ蟄居致サレ候由藤四郎ハ三年ノ内能暇有トテ學問致シ一廉ノ義ニ達サレシトナリ加納氏ハ三年ノ内八疊敷ノ一間ニ籠リ被寢候由片器量格別ノ事ナリト五郎左衛門ニハ大小姓ヨリ御家老迄ニ立身知行百五十石ヨリ貮千石ニ成被申山本藤四郎ハ此御方ニテ物頭ヲ勤メ被申候由諏訪氏物語ナリ本文ト爰ノ所正説如何難計依之記之

一加納氏大番頭ノ時分御城ニテ大番頭被宿候御番所ニテ小栗主税助次ノ間ニテ嘲ケルハ昔ノ武士ト今ノ武士トハ殊ノ外カハリタリ今ノ武士ハ身ヲウマスト言五郎左衛門是ヲキヽテ被申主税介名ヲ呼テ言左樣ニ申サルヽハ拙者モ御番所ヘ結構成夜着フトンナト持來ルヲ見テノ當言ナルヘシ尤昔亂世ノ武士ノ作法ト今ノ太平ノ武士トハ品カハルヘシ今時大番頭被　仰付カラハ葉侍ト一樣ニハ有ヘカラス且ハ上ノ御外聞ト存如此士ノ武邊ハ一心次第ナリ能フトンニヨルヘカラス其一ヲ知テ其二ヲシラレサルナリツマル所ハ明日何事ゾ有時其方被參候場ヘ此五郎左衛門不參候時見テ笑可被申候今此座ニテハ知ルマジキトナリ主税介返答ニ不能口ヲ閉テ歸ルト云フ

一加納氏屋敷先年不慮ニ出火ノ事有之依テ長屋住居ニテ暮シ被申武具馬具等多ク燒失故出來候內ハ本宅ノ造作ヘハ取懸リ不被申ト言

一或年江戸ニテ御振廻有シ時牧野兵庫頭カ威勢其比肩ヲナラブル者ナシ御臺所ナカバニ立置ル屛風何者カ取退タルモ又立ラル五郎左衛門邪魔ナル故取ノケタル屛風何者カ立タルトテ取テ除ラル兵庫頭腹ヲ立又元ノ如ク立サスル又五郎左衛門サマタケニナルユヱ取ノケタルヲヒタモノ何者カ立置候トテ今度ハ取テ片付片脇ヘ除ラル兵庫頭權威強候得共五郎左衛門カ勇威又如此何トモスル事ナク其通リニテ止ミヌ其勇猛タヽチニ雲ニセマルト言ヘシ

一或時設樂八之助御行水ニカヽリヌルトキアヤマリテ熱湯ヲカケ奉ル其時少シモ御サハキ不被遊御湯御カヽリ御仕廻被遊湯カヽリテ見ヨト御意八之助手ヘ懸ケテ見ルニワキカヘル熱湯ナリ爲方ナク其湯ヲアタマヨリカヽリ一身ヤケタヽレ申候其後此八之助何樣ニ被　仰付可然ト御家老中ヘ御尋有シニ何レモ口ヲ揃ヘ切腹被　仰付可然ト申上ル加納氏計此者命御助ケ可然ト申上　公被　仰ハ諸老ノ申所如先也汝計命助ントハ如何樣ノ譯有テ贔負ヲイタシ候哉但諸家老ヨリ其方分別カマシタルヤト御意也加納氏御返答ニハ八之助何ノ由緒ナシタトヘユヒシヨ有ハトテ　殿樣ト思カヘ可申哉先年　將軍御行水ノ時坊主衆熱湯ヲカケ奉ル是ハ八丈嶋ヘ流罪被　仰付候由然ルニ　公儀ヨリ御仕置重ク候得ハ御爲惡敷ト奉存計ニ御座候又アヤマチ仕候者ヲ死罪ニ被　仰付候テハ心有武士ハ御家之御吟味ニ非言ヲ入可申ト奉存候ト申上被遊御得心八之助新宮ヘ被遣候云々

一桑山白齊曰　南龍院君被　仰出御意何事ニテモ五郎左衛門ニ仰聞サレ候終ニモレタル事ナシ主人ニカク賴母敷被思召候事扱難成事ト云々

一老人平日尊ミタモノハ天道主君ノ事計ナリ常ニ人來ルト雖モ默然トシテサノミ語ラルヽ事ナシ然

レトモ人ノシタヒ來ル事言葉數多キ人ニマサレリ仁愛ノ深キ故ナリ君子ノ仁ニ志ス食ヲ終ルノヒマモ造次顛沛ニモ此仁ニオイテスト論語ニモ見エタリ此老人平生ノ志此所ニ近シ然ル故平生物事外ヲカサルニヒマナシ心ヲ內ニマモルノ間所ナキ故ナリ大崎山人語テ曰或夏老人ヲ見廻シニ麤相ナル團扇シカモ破レケルヲ持居レシ山人重テ見マハレシ時（此時ハイマタ三左衞門ノ時ナリ）粉河團扇ノ奇麗ナルヲ手ツカラ老人ヘ送ラル其時三左衞門ノ曰御所持之團扇餘リ見苦敷候故申付持參致候今日ヨリ是ヲ御ツカヒ候ヘト被申老人請取サテ〳〵キレイナルウチハ給リ候トテ喜ル又重テ大崎氏見マワレシニ老人又以前ノ破レウチハヲツカヒ居ラル內證ニテ近習ノ者ニ先度進候團扇ハ如何成候哉ト被尋近習ノ者云二三日ハ御心入忝クトテヒタモノツカハレシ夫過テハイツ方ニオカレシヤワスレテ又以前ノ團扇ヲツカワルヽト云

一藪痩牛御借金子隱居ノ後御藏ヘ返納三浦長州裏判有之手形ヲ御藏ヨリ戾ル其砌裏判御ケシ被下候樣ニト御年寄衆之前ヘ出シ申筈ヲ痩牛不案內ニテ延引時過テ後人ニオシヘラレ延引之段迷惑致候御判御消シ被下候樣ニト長州ヘ遣シケレ共長州程過申出タルヲ咎メ承引ナク被返痩牛行當リ何トモスヘキ樣ナク加納氏ヘ賴ム加納氏心得タリトテ寄合ノ日右之手形會所ヘ持參長門守殿ヘ向被申ケルハ痩牛無念至極仕迷惑致スニ付御斷申セトモ御承引ナキ由仍テ某ヲ賴ミ申候古手形御ヤブリ被遣候ヘトテ申サレケレトモ長州尚顏色トケス承知ナク其時加納氏御勘定頭衆ヲ呼ヒ起シ藪痩牛御拜借ハ相濟候ニキワマリ候哉急度吟味致サレ候得ト被申候付御勘定頭衆吟味仕候ニ不及御金返納無候テハ手形返スモノニ無御座候相濟申段紛無御座候ト云其時加納氏件ノ手形ヲフトコロヨリ

取出シ御金スミヌル上ハ此手形ハ反古ナリトテ引キサキ申サル丶ヲ見テ一座ノ衆中目ヲサマス長州曰五郎左衛門セキ被申タルカト加納氏答テ曰瘦牛不念至極迷惑申アマリ御ワヒ申候得共無御承引故某頼マレ御斷申上候得共御承引ナク頼候瘦牛ハ勿論吾等モ頼マレ候テ形付不申候テ一分立不申候殊ニ今御勘定頭衆申通反古同前ノ手形ヲ引サキ申候事ニ候得ハセキ申道理無之候ト被申長州不興氣ナリケレトモ道理明白ナレハイカン共セラル丶事ナカリシトソ

一何事ニテカアリケン御城ニ於テ　南龍院君ヘ五郎左衛門御諫申上ル然トモ御聞入不被成大田邊ヘ御鷹野ニ被爲入候節又申上ル折節御拳ニ御鷹ヲ居エサセラレ鳥ニ御寄セ被成ステニ御合ナサル丶所ニ少モヲクセス御傍ヘ參リシキリニ申上御鷹ノ御邪魔ニナリ候トテ御ツキタオシ被成候ヘ共起上リ〱三度マテ御ツキタオシ被成候ヘ共不構其時如何樣ニナリトモ致セト御意ナサルヲ謹テ奉畏候ト申テ歸宅セラレケル前方御手討ニ成ヲ本望ト平生志ヲ定メラレシ證據顯然タリ君ノ爲ニ命ヲ一塵ニ比シ申サレシ忠誠鬼神ヲ感セシムヘシ

又一說アリ明良遺跡ニ曰ク　或時賴宣卿御放鷹ニ御出之節五郎左衛門御供仕リ　賴宣卿御思慮アル名將ニテカハシケレ共殊之外短慮ノ御氣質ニテ御心ニ叶ハサル時ハハシタナキ御休怒ノ御仕業ヲモナサレケリ五郎左衛門如何御心ニ背キケン杖ヲ以テ叩キ倒シ給ヘハカタヘノ溝ヘ倒込這上リケルヲ又叩キ給フ一身泥土ニマミレ諸傍輩ノ見ル目モセヒナキ仕合平生ノ御氣質トハ知リナカラ曲モナキナサレカタト歸リテ引込出仕ヲ止メケル五七日過テ五郎左衛門ヲ召シ引込出仕不仕ト申上ル御用是有ル間可出由　仰下サルトイヘトモアヘテウケカハス是非病氣ナリトモ少シノ間出ヨト再三御使ニ及フトイヘトモ元ヨリ覺悟ヲ極メタレハ堅ク辭シテ出ス時ニ　賴宣卿御小姓熊之助「大久保熊之助實ハ鈴木五郎兵衛ノ子加納五郎左ノ甥ナリ大久保權右衛門養子」ヲ召テ五郎左衛門方ヘ行罷出ヨト申ヘシト　仰付ラル熊之助時ニ十七歲畏テ五郎左衛門方ヘユキ案内ス御通リアルヘシトテ對面ス五郎左衛門曰ク「各々ハ我等方ヘ參ル事ハ御法度也何迚被參候哉トイフ熊之助　仰之趣ヲノヘ

登城可有ヨシヲイフ五郎左衞門彼是存念ヲ語リ出仕致マシキ覺悟ノヨシヲ語リ宜敷御斷仰上ラレ給ルヘシト申切ケ、時ニ熊之助扱々迷惑仕ル仰ヲ承ル是非モナキ次第ニ候御暇申トテ罷立ケル時ニ五郎左衞門貴殿　御前ヘ出ルカト問フ立留リ此御使ヲ仕負セスシテ何ノ面目アッテ　御前ヘ出ラルヘキヤ罷歸リ切腹仕ルト言捨テ立出ルヲ五郎左衞門アヤマッタリ先戻レヨ尤也オシッケ登城致スヘシ健氣ナル心底カンシ入リタリ先ヘ行テ只今罷出ルト申上ラレヨト言ケレハ忝次第也トテ急キ罷出候テ其由申上ケレハ御感アリ五郎左衞門罷出テ相勤ケル也熊之助八郎五郎ト云テ其子八郎五郎入道シテト意ト云則ト意カ咄シナリト意カ子八郎五郎物語ナリ不幸ニシテ早世ス弟熊之助兄ノ養子トナリ伊勢平トイフ其妹スマ今西丸大納言様（俊明院様御事）御實母深徳院殿トイフ加納五郎左衞門遠江守カ父ナリ」

一公方樣ヘ御目見之節御顏ヲ拜シ候者無之五郎左衞門雅樂頭殿御奏者之時雅樂頭殿顏ヲ爾ト見御奏者申上ラルヽ時ニ　公方樣御顏ヲシカト見奉リ頭ヲ下ケ御禮被申上候由或時老人物語ニ若キ時不敵者ナリシ御城ヘ御供ニ行殊ノ外ニ寒ル御庭ニ御腰物ヲ持テ居リシカ中々御庭ニテ寒氣コラヘ難ク御玄關ヨリ上リ御旗本衆被居候中ニ御腰物持居タルニ御旗本衆此體ヲ見テイナ事ト思フカホニテ目ヲ付ラレ候ヘハ吾等モ又急度目ヲ付ルニ依テ先ノ人外ヲ見ル又見ラルヽ人アレハ度々如此シタル故後ハ目ヲ付ケル人ナカリシト被申候ナリ

一先年將軍樣御病氣俄ニ御大切ニ被遊御座候由注進有之其節
南龍院樣江戸御鷹野ニ被成御座御馬ニテ御急キ被成候節御馬ノ口ニハ畔田彥右衞門唯壹人餘ノ者ハ皆下リ候加納氏ハ馬ニテ只壹人御供ニ續キ被申候御城一ノ御門ヘ御乘込被成候ト御番之衆紀州樣ト見テ通シ申候五郎左衞門續テ乘込申ヲ見テ御番之衆是ハ如何ト咎メ被申候五郎左衞門馬上ヨリ此節之儀何ヲ馬鹿ナト申捨通リ申候二ノ御門ヨリ殿樣御下馬被遊候付五郎左衞門モ下馬致シ申候其時彥右衞門精ツカレウロタヘ申候處ニ五郎左衞門何ノタハケメト叱リ申候後五郎左衞門云其

時ニ彦右衛門シカリオトロカセ不申候得ハ精拔候テ目ヲマワシ申物故如此ト云

一中井太郎兵衛語テ曰ク先年　南龍院君御在世水戸樣御出之度コトニ御多葉粉ニ難ヲ被仰御ワヤクニ如何樣ノ御煙草差上候テモ何角ノ御小言ヲ被仰故　公御世話ニ被遊御近習衆ヲ御叱リ被遊候或時又水戸樣御見廻之節五郎左衛門御玄關ヘ出水戸樣之衆ヘ向御多葉粉御用ト被申候ヘハ則取出シ相渡書付ヲ取候テ段々ニ差上候時水戸公御持參ノ御タバコトハ御存シ不被成例之通樣々難ヲ御付ケナサレ候トキ五郎左衛門是ハ御前樣〆御モタセ被遊候御多葉粉ニテ此方ノニテハ無御座候ト申上ル水戸樣御コマリ被遊其以後御出被成候節御ワヤク被仰候事ナク　君モ御世話止ミ申上カヤウノ氣轉モ正敷心ヨリ出ルモノ也

一朝比奈惣左衛門下屋敷ノ向ニ有之松倒レ候儀惣左衛門密ニ松ノ根ヲ切ラセ置候故タヲレ候トノ風聞有之時分老人長坂角彌所ヘ被參碁ヲウタレ候其次ノ間ニテ此度松ノ木倒レ候事惣左衛門所爲ニテ可有ト世上ノ沙汰ニ候老人ハ樣子可被存候半ト長坂義兵衛ニ尋見可申ト各申ニ付老人傍ヘ被參惣左衛門事如何樣ニ可被仰付哉ト答老人兎角之挨拶ナク碁盤ノ下ヘ兩足ヲ蹈込ウントテアヲノケニ寢ラル儀兵衛驚キ次ノ間ヘ被參上ノ思召ヲ下ニテ計難ク候イラヌ事ヲ我等ニ口ヲキカセ迷惑スルト云々

一老人安藤忠兵衛ト義絶イタサレシ譯ハ先年岡野平太夫門並ニ長屋黒塗ニ致候處元日早朝夜分ノ事也其後御吟味有之鷲谷武太夫稲葉彌兵衛御預ケ之儀アリ右兩人大晦日夜更候マテ安藤氏方ニ語居タリ其歸リニ右ノ仕合ニテ有之由風聞也仍之忠兵衛御目付中ヘ誓紙ヲ以申譯イタサルヽ由

此段老人被聞武道ニウトキ仕方一家ノ恥ト被存由ニテ義絶イタサル、ト云人ニ依テ忠兵衞仕方上ヲ敬ヒシナド、存スル者モアルベシ此老人一門ノ不吟味ヲ咎メ義絶イタサル、ヲ以御家中ヘ武士ノ本意ヲ教ラレシ可成志有者心ヲ可付事也

一落合道夢物語リニ云我等御後扈ノ時分總テ御小姓衆アヤマリ有之節ハ五郎左衞門ニ被　仰付御叱ラセ被遊候被　仰出候後御意之段申付候哉ト御尋有シニ申未付ト申上ル某御小姓相勤候内个樣ノ義毎度有之是如何致シタル義ト老人ヘ尋シニ老人云品ニヨリ少シ御世話過タル義モアリ子供衆ノ行儀御次ノ間ニテ四角四面ニナラヌ事アリワルサノ品ニヨリ急度申付候譯モアリサシテモナキ事ハ大樣ナルカ能候御意ニテモ我心ニ得ト落付ヌ事ヲ申付候分ニテハ聞候人ニコタヘ不申候仍之御意ハ受ナカラ見合申候其内ニハ上ニモ御合點マイリ夫ニテ濟申物ニテ候ト也是正大ノ理胸中ニ具リ忠義厚キ人ニアラズハ此味知リカタカルベシ心ヲヒソメテ工夫スベシ

一或時安藤帶刀殿老人ヲ招請ナサレ向後何事ニヨラズ思召寄事アラハ被仰聞被下候得トノ義也然ルニ帶刀殿ヨリ歸候ト其儘以手紙御禮ニ云色々御心入之御馳走忝奉存候夫ニ付存寄候義ハ無遠慮申進候樣ニト被仰聞候故申達候貴樣淨溜理本ヲ見臺ニノセ御覽候ト承及候カヤウノ儀御人體不相應ニ候御無用可被成ト申遣サル帶刀殿此手紙ヲ御披見被成候テ其儘右ノ草紙ト見臺トモニ臺所ノ釜ノ前ヘ御出サセ皆々御燒捨サセ被申シト云老人ノ志ヲ以帶刀殿急ニ非ヲ御改メ候事後世ノ鏡トイツヘシ

一牡丹盛リノ時分大崎氏ヲ招請ニテ被參候トキ床ニ掛物懸リ有之候村上與兵衞云今日ハ大崎氏御

馳走ト見エテ御掛物懸リタリト云老人曰誠ニ是ハ去年土用干ノ時掛置タルカ今ニ有ト被申牡丹ノ花盛リモ散モ大方不覺ト也乍去膳ヲハ自身ニスエラル食退テ後茶ヲモ自身スエラレシナリ物ニカヽハリ不被申内格ヲバハヅシ不被申トナリ物本末アリ事終始アリ先後スル所ヲ知時ハ則道ニ近シ共云リ

一鈴木亦兵衞ニ家來御預ケノ折柄御城火事アリ此時御目付毛利太郎左衞門組之者ニ氣ヲ付ラレ候得ト通シ有之以後彼者逃申候得共遠慮ニテ相濟申候處ニ老人ノ云又兵衞義拙者一類ノ儀ニ候得ハ御赦免被下間敷候切腹被 仰付テモ能候ヘ共兎角御改易被 仰付候樣ニトノ事ニテ一端御改易其後御赦免ニテ相勤申候 鈴木五右衞門物語ニ辨才天山竹本五兵衞屋敷長屋ニテ手アヤマチ致少燒申候其向生松院ノ隣鈴木又兵衞也亦兵衞家來喧嘩致候ニ付御目付木村太郎左衞門ニ家來御預之由被 仰付候處右之火事ニ付御預ケ者御ハナシ被申仍テ快遊老人一類ユヘ別テ御吟味右之通ニ有之ト云々

一水原元亭若年ノトキ御道中計江戸御供被 仰付養父受玄久々病氣タルニヨツテ也此時 光貞公未御部屋住ノ御時也佐武方庵御供ニテ伊勢路ヲ召連ラレ候木海道諸士余多廻リ供ニ御醫者壹人モ入不申故 南龍院樣ヨリ御雇ヒナサルヽ也加納老人誰壹人ナリト御人指被遊候得ト申付候半ト申上ル其時受玄養子ヲアナタヨリ御ヤトヒニ不及受玄儀御部屋附ニヨリ見事醫術仕候ハヽ御付可被成トノ思召ナリ板坂ト齋奉請合 御前ヘ罷出難有思召ト感涙ヲナカス年若ナルトキヨリ御仕付被遊タルカ能トノ御意也此段ヲ御用部屋ニテ板坂有カタキ由ヲ申此時加納氏云此段受玄爲計ニテナク總御家中ノ者難有仕合ト被申總テ此老人ノ胸中此一言ニテモ計知ルヘシ

一近藤似人語テ曰今時ノ出頭人衆互ニ身ノ爲ヲ存シ御前ニテ取合ヲ申合役替加增被 仰付候互ニ

申合サル通リ立身致シ候得ハ上之御恩薄クナリ申候老人ノ曰吾等　南龍院樣ヘ申上候テ役替加増被　仰付候衆無限候今時ノコトキ身ノ爲ニカシコク候ハヽ大名ニナリ諸人ニ馳走ニアイ可申身ノ爲ニ損ヲ致候コト被申候由二三十年過候テ前方ノ儀承リ出シ候テ辱ト老人ヘ禮ヲ被申衆モ有之候由ナリ

一加納大隅守未タ平次右衛門ト申セシ時千石御加増拜領之由告來ル老人兎角ノ事ナク物書ヲ呼テ狀ヲ書セラル內室老人ノ名ヲ呼テ平次右衛門御加増拜領致丈ニ喜シキ事ナリ聞タマワヌカト申サルレ共返答ナシ暫アリテイカニ聞タマワヌカ是ホトノ能事ヲト有リケルトキ先ヨリ聞依之難有サニ今御禮狀ヲカヽスルナリト云ヘリ尋常ノ人ナラハイカバカリ多言ナルベシ天性ノ明決大度ナル事隋ノ世ノ牛弘ニ似タリ

一大隅守殿若年ノ時駒木根八兵衛鐵炮指南ニ行シ時如何シタリケン鐵炮ノ藥ヘ火入候テ殊ノ外ハネ申候尾根ヘモエ上リ候ハントセシトキ八兵衛疊ヲ上テ消シ候時老人サハタ髮ニテ大小ヲサシ其席ヘ來リ右ノ樣子ヲ見廻シ一言モナク其儘奥ヘ入被申候其體餘人ノ及フ所ニアラスト云カヤウノ類數ヲ知ラス皆是ニテ押テ知ルヘシ

明良遺跡ニ曰ク加納五郎左衛門（快遊）常々物言ヌ人也古人ハ詞少ナシ子息達ヘ心得カマシキ事不被申聞候由也或時平次右衛門ハ後入道了存大隅守ニヘノ一言ニ御主之前ヘハ機嫌ヨクシテ出ヌモノ也ト

一老人方々ヨリ招請候得共六ヶ敷トテ毎度在鄉ヘ罷越候トテ被參事ナシ或時三左衛門方被申候ハ明日此方ヘ御越候ヘトハ申間敷候其元ヘ參リ得御意度候間一日御延引被下候ヘトノ儀也左候得者此方ヘ御出可被成トノ返辭ニテ其日大崎氏スクレタル鯛持參茶ヲヒカセ懐中シテ被參終日語

リ被申候其翌日ヨリ在郷へ被參候分ニテ大門ヲサヽセ在宿ニテ留守見舞ノ使抔ニ候得ヘハ家來心得ニテ帳面ニ記置申候處ニ　光貞公達御聞芦川甚五兵衛ニ被　仰候ハ快遊在郷へ參リ候由何方へ參リ候哉ト御尋甚五兵衛御意ヲ承リ快遊儀者諸傍輩トモ招請可申ト申候ヲヤカマシク存在郷へ參候分ニテ宿ニ罷在候ト申上ル重テ御意ニハ左樣致候テハ氣モツキ可申候隱居ノ儀心安キ事也心次第ニ致ヨリ可有候氣儘ニ暮シ候得ト御意被遊候由也

一中井太郎兵衛語テ云先年落合道夢舌下ニ物出煩ノトキ快遊老人見廻ニ來リ逢申サルヽトイナヤ道夢ソバヘヨリ兩手ヲ取テ云死ナレスカト思ヒテ來レリ先氣遣ヒナシトテ其儘歸リ被申シ親太郎兵衛ナト居合存命不定ト聞レ暇乞ノ心ニテ大抵ノ氣色見廻ニテハナシ然ルヲ兎ヤ角大抵ノ氣色見舞ノ樣ニ志申サレズ思ヒヨラレタル志ノ通リト見ヘタリ何事モ本心ヲアサムカヌ正直ノ是ニテ見習手本トナスヘシ

一快遊老人毎度御金拜領ノ節誓紙ニテ拜領ノ時ハ終ニソノ誓紙ニテ御藏へ金子請取ニ遣シ被申タル事ナキ故スタレニナリ申候然ルニ金子ニテ拜領ノ時ハ宿へ持參吹聽有之事モナク其儘何方ニ成共被差置候金銀ニ心無之事ヲ知ルヘシ有時ニ棚ノ隅ヨリ金子百兩包スヽビ候テ有之候御內室召仕ノ女見出シ候御內室是ハ如何ト被相尋候ヘハ夫ハ先度拜領致候棚ノ角ニサシ置タルト挨拶也內室夫レハイツ御拜領候哉ト爾ト日限ハ不覺トナリ甚左衞門ト云者先年申ハ　公御意被遊候ハ五郎左衞門へ尾州ノ數馬ホト知行可被下トノ御事ノ由其後御息方合候得者七千石程ノツモリニ被成下シトナリ尾州ノ數馬殿ト申モ七千石被下候由

一鈴木甚右衞門カ曰加納老人平生威有人ニテ諸人恐レ尊ミ申候トアリ芦川如閑岡部正悦ロヲ揃ヘ吾等モ同前ニ存スルトノ挨拶ナリ鈴木甚右衞門云先年禪林寺ニ物讀アリシ時若キ所化有シニ人柄イヤシカラズトテ高五左衞門入道一道殊勝カラレ此所化勢州ノ人ニテ歸國ノトキ一道人ヲ附可申トテ荷物ヲ持者壹人若黨壹人相添送ラセル折節一道無人ニテ他出セラレ知音ノ方ヘカヘラレシ由一道老人ヘ參會ノ節始終物語セラル老人ノ曰一道何トシテ破家ナル事ヲイタサレ候哉其僧能キ出家ナラハ御自分左樣ニ被申共承引セズ手包ニテ歸ルガ出家本意ナリ然ル處所化ノブンザイニテ若黨中間ヲ連人ニハ事ヲカヽセ我物顏ニ飛歩キ身ノ程シラヌヤツニ何カ殊勝氣可有哉ト被申ト云

一大岡六太夫（快遊老人姪聟ト云）關ヶ原御陣之時岐阜加納ニテ手柄有之右之物語ヲ自分ニ方々ニテ語ヲ御家中ニテソシリ候衆有之由達　御聞此後トテモ六太夫高名咄何方ニテモ無遠慮可仕ト被　仰出六太夫難有奉存其後六太夫少之事ニ御家ヲ立退可申トノ事也老人ノ曰立退申度ハ心次第也山口ヨリ先ヘハ遣シ申間敷候分別次第也ト被申ト云

一三浦長州中症ニテ二三日ノ中ニ終ラル老人聞被申長門守殿御爲ニハ扨々仕合ナルオワラレ樣ナリアノ方々御家ニテハ大身ナレハ長病候トキハ御家中諸士下々迄殊ノ外迷惑致スモノナリト云

一南龍院樣御隱居之時加納平次右衞門殿原田市十郎殿兩人御隱居附ニ被　仰付市十郎老人ヘ見廻ル老人ノ曰懸御目ニ度待申候何トテ御無音候哉ト被申原田氏曰早々御見廻申度存候ヘ共平次右衞門殿御存之通リ兩人同役被　仰付候故重キ御用拾一色迄兩人ヘ被　仰付候故寸暇無之夜モ少

シマトロミ候ト其儘ニ起候ヤウニ毎日相勤申候依テ御無音申候ト被申老人云尤ノ儀也夫ニテハ何トモ御勤ナリ申間敷候其段殿樣ヘ可申上候平次右衛門モ同シ事ニ候ヘハ申上ニクキ事ニ御思可有候其イワレハ臣下タル者君ヘハ此一身ヲマカセ置候ウヘハ代物ニテハ無之候左候ヘハアナタノ身ニテムカヒ居候ヘハ何樣ニ成候テモ上ノ御爲ニナリ候事ハ少モ無遠慮申上候トテ其儘御前ヘ被罷在右之通リ被申上兩人勤少クナリ候由

一宇津淨心寺妙守或時快遊老人ヘ語ラルヽ事有リシニ老人耳遠キ故聞違ヘラルヽ妙守シキリニカタル其分相違シテ老人イカリ被申妙守短氣ナル者ニテ其身耳遠クシテ相違セル事ハオキテト不興氣ニテ歸ル其跡ニテ老人近習ノ者ニ妙守談スル所ノ始終ヲ委ク聞被申得心セラレテ其翌日ハサト淨心寺ヘ被參昨日對面ノ節談シ申セシ事耳遠ク聞違ヘ疎略ノ樣ニ可被心得ト迷惑致候堪忍セラルヽ樣ニト被申ワツカノ事ニモ非ヲカクシ被申ズ妙守是ニ依テ感動スト云

一安藤帶刀殿譜代ノ家臣兩人子細有リ追出サントセラル怨ノ衆笑止ガラレ候得共如何共スヘキ樣ナシ或時老人ヘ語ラル老人隱居ノ後タリトイヘトモ帶刀丈ヘ被見舞我等隱居ノ身何方ヘモ出不申候得共此度ノ思召立御爲ヨロシカラザル儀笑止ニ存參リ候御無用ニ可被成ト有段申入ラル帶刀殿段々譯ヲイワントセラルヽ所老人云耳遠ク候ヘハ聞エ不申候畢竟ノ處御爲宜カラズト存如此ニ候此上ハ御了簡次第ニ候ト云捨被歸追付帶刀殿被參思召ノ御內意被　仰聞候段忝候依之最早暇ヲ出シ申間敷候ト也言下ニ其人ヲ感セシムル誠ニ思ヒヤルヘシ右之一儀青地與五兵衛鎌田九郎右衛門飯塚作右衛門カ事也ト快遊物語ニ云

一隱居ノ後度々御懇ノ御意有之度每ニ御禮ニ御通之節道迄ナリトモ罷出可然ト申人アリ老人ノ曰如何ニ御懇ノ御意忝トテ身ノホトヲ不知行步モ不叶耳モ遠キ者カ見苦敷體ヲ忘レ出ルハ宜シカラストテ終ニ不被出ト云

一安藤帶刀殿御隱居壽光院殿御事不自由ニ無之樣ニ被致可然ト氣ヲ付候樣ニト平次右衞門方ヘ末期ニ申置ルヽ樣ノ事迄氣付タル事ハ不被忘トナリ

以上書名ヲ揭ケサル分皆行狀記ニ載スル處也此外尙數條アリト雖モ漢文既ニ譯アルヲ以テ略ス且ツ行狀記卷尾ニ寶永六己丑年ト記セリ直恒ノ死ヲ去ル二十二年也

一紀士雜談ニ曰ク　加納快遊老ノ所ニテ市川甚右衞門快遊ノ小僧將棊指候ヲ脇ヨリ助言被申候小僧肴候ヲヒタトセカセ被申候ヘバセキ募リ小僧脇差ヲヒ子クリ廻シ詰掛申候甚右衞門取合不申候得共ホトケニ不仕血眼ニ成候子供之儀候モ物ニ不似候一座ノ衆取扱ニアクミ心ニ罷成候時快遊老ハ寢コロヒ居被申候カムク〳〵ト起上リ小僧メ出カシ候サスガノ甚右衞門ヲコマラセシマヽ隨分詰掛候ヘト却テ擧被申夫ヨリ一座笑候樣ニ成小僧ヲ押示シ事濟申ト也

一祖公外記附錄ニ曰ク　牧野兵庫頭一件加納五郞左衞門取計忠勤之至ト諸人致挨拶候得ハ兵庫頭一件ハ左程ニ被擧候程ノ事ニテハ無之候由比正雪ヲ可被召抱トノ節我等取扱ニ懸リ三年迄延引シ遂ニ埒明不申候是ハ一應ノ御奉公ト存候正雪ハ小祿ヲ可望人體ニテ無之處貳參百石ニテモ不苦御家ヲ望トノ事我等意ニ叶ヒ不申初ヨリ二三千石望候ハヽ所持モ可致存念ニテ候ト申候

按スルニ兵庫正雪ノ事行狀記ニモアリ漢文記スル處ノ如シ兵庫ノ事亦其傳ニ詳也併セ視ルベシ

一同書ニ曰ク加納平次右衞門宅ヘ關口晉伯水原元貞吉田春庵ヲ被招話之節御祖父五郞左衞門殿之御行狀ハ諸人ノ耳目ヲ傷驚候御事共ニテ我等モ兼テ聞傳ヘ候事ヲ書集候付今日ハ持參仕候御覽可被下ト元貞差出候得ハ平次右衞門大ニ悅ヒ祖父ニ逢心ニテ拜見可申ト請取初ヨリ讀カケ候ニ晉伯傍ニテ聞其事ハ相違ニテ候夫ハケ樣〳〵之事ニテ候又ハ次ニ讀候ヘハ夫モ違申候其時ノ御使者拙者相勤其品ハケ樣〳〵ニテ候トテ大方相違之事ノミニテ平次右衞門モ無本意元貞モ手持惡敷夫故カ平次右衞

加納大隅守政直

門モ勝手ヘ入リ候（中略）水原後宮瀨ト改春庵ハ加納氏之家來筋ニテ後仙庵ト改元貞作之書ハ加納行狀ト題シ世ニ流布

按スルニ此記ニヨレバ行狀記ハ水原元亭カ編述タルハ無論ノ如シ然トモ行狀記中ニ水原元亭若年ノ時云々トノ條アリ文體己レノ事ヲ自記シタル如クニモアラズ元貞亦五郎左衞門ト遠ク隔世ノ人トイフニモアラズ然ルヲ營伯兩人之不與ヲ來スマテ事々敷非駁ストハ少シク穩カナラサル談ニテ疑ヒナキニ非レトモ暫ク記シテ後ノ再考ヲ待ツ

又按スルニ水原宮瀨共ニ家譜傳ハラズ事歷分リカタシ關口營伯ハ慶安四年貳拾四歲ニテ被　召出四年目承應三年藝道修業シテ御國立退キ夫ヨリ二十年目延寶元年十二月歸參被命五郎左衞門ハ是ヨリ先キ寬文七年隱居而シテ貞享元子年病死ナレハ營伯歸參後十一年間世ヲ共ニストト雖モ隱居中老衰之時也之ニ依テ考フルモ五郎左衞門ノ事歷ヲ營伯ガ悉ク辨駁ト云ハ一應所シカタキニ似タルカ

加納大隅守政直　直恒惣領　始數馬　又平次右衞門　隱居莫存ト號ス

慶安二己丑年部屋住ニテ　南龍院様ヘ被　召出御合力米八十石被下後大番與頭御切米貳百石ニ御加增依　命平次右衞門ト改名寬文七丁未年七月十五日父五郎左衞門家督知行貳千石被下後御家老加判之列四千石ニ御加增元祿四未年正月諸大夫被　仰付大隅守ト改同十二卯年七月隱居家督無相違惣領平次右衞門ニ被下正德五未年十二月廿四日九十四歲ニテ病死ス

以下代々家督無相違御家老加判之列諸大夫被命大隅守ト襲稱シ棟梁之重臣タリ直恒ヨリ六世大隅守補舊ハ御家老加判之列高四千五百石ニテ天保十三寅年九月隱居嫡子平次右衞門ヘ家督無相違被下菊之間席被　仰付タリ

一牧笛類叢ニ曰ク　加納大隅守ハ力量多キ人也或時心易キ士來リテ様々物語リ致シタリシカ夏ノ事ナリシカ拾匁ノ種ケ島ノ鉄炮ニテ素試シタリシヲ彼士後ヨリ申ケルハ兼々御力量アリト承リ候ヘ共折無テ來見不仕今日ハ何分御力ヲ致拜見度ト望ケレハ隅州夫ハ間違ヒナルベシ我等ハ力ハナシト固辭スレ共兎角屈望シタリケレハ然ハ迚件ノ筒ヲ試ミナカラ向ヘ投タリケルニ貳間程間ヲ置テ板塀有ケル其板塀ヲ突抜テ筒ハ遙ノ外ヘ飛出タリトソ人皆肝ヲ潰シケルトゾ

一隱居ノ後度々御懇ノ御意有之度每ニ御禮ニ御通之節道迄ナリトモ罷出可然ト申人アリ老人ノ曰如何ニ御懇ノ御意忝トテ身ノホトヲ不知行步モ不叶耳モ遠キ者カ見苦敷體ヲ忘レ出ルハ宜シカラストテ終ニ不被出ト云

一安藤帶刀殿御隱居壽光院殿御事不自由ニ無之樣ニ被致可然ト氣ヲ付候樣ニト平次右衞門方ヘ末期ニ申置ルヶ樣ノ事迄氣付タル事ハ不被忘トナリ

以上書名ヲ揭ケサル分皆行狀記ニ載スル處也此外尙數條アリト雖モ漢文既ニ譯アルヲ以テ略ス且ツ行狀記卷尾ニ寶永六己丑年ト記セリ直恒ノ死ヲ去ル二十二年也

一紀士雜談ニ曰ク 加納快遊老ノ所ニテ市川甚右衞門快遊ノ小僧將棊指候ヲ脇ヨリ助言被申候小僧負候ヲヒタトセカセ被申候ヘハセキ募リ小僧脇差ヲヒ子クリ廻シ詰掛申候甚右衞門取合不申候得共ホトケニ不仕血眼ニ成候子供之儀ニ候得ハ結句叱候モ物ニ不似候一座ノ衆取扱ニアクミ心ニ罷成候時快遊老ハ寢コロヒ居被申候カムク〳〵ト起上リ小僧メ出カシ候サスカノ甚右衞門ヲコマラセシマヽ隨分詰掛候ヘト却テ譽被申夫ヨリ一座笑候樣ニ成小僧ヲ押示シ事濟申ト也

一祖公外記附錄ニ曰ク 牧野兵庫頭一件加納五郞左衞門取計忠勤之至ト諸人致挨拶候得ハ兵庫頭一件ハ左程ニ被譽候程ノ事ニテハ無之候由比正雪ヲ可被召抱トノ節我等取扱ニ懸リ三年迄延引シ遂ニ埒明不申候是ハ一廉ノ御奉公ト存候正雪ハ小祿ヲ可望人體ニテ無之處貳參百石ニテモ不苦御家ヲ望トノ事我等意ニ叶ヒ不申初ヨリ二三千石不望候ハヽ所持モ可致存念ニテ候ト申候

按スルニ兵庫正雪ノ事行狀記ニモアリ漢文記スル處ノ如シ兵庫ノ事亦其傳ニ詳也併セ視ルベシ

一同書ニ曰ク 加納平次右衞門宅ヘ關口晉伯水原元貞吉田春庵ヲ被招話之節御祖父五郞左衞門殿之御行狀ハ諸人ノ耳目ヲ爲驚候御事共ニテ我等モ兼テ聞傳ヘ候事ヲ書集候付今日ハ持參仕候御覽可被下ト元貞差出候得ハ平次右衞門大ニ悅ヒ祖父ニ逢心ニテ拜見可申ト請取初ヨリ讀カケ候ニ晉伯傍ニテ聞其事ハ相違ニテ候夫ハケ樣〳〵之事ニテ候又ハ次ニ讀候ヘハ夫モ違申候其時ノ御使者拙者相勤其品ハケ樣〳〵ニテ候トテ大方相違之事ノミニテ平次右衞門モ無木意元貞モ手持惡敷夫故カ平次右衞

門モ勝手へ入リ候(中略)水原後宮瀬ト改春庵ハ加納氏之家來筋ニテ後仙庵ト改元貞作之書ハ加納行狀ト題シ世ニ流布
按スルニ此記ニヨレバ行狀記ハ水原元亭カ編述タルハ無論ノ如シ然トモ行狀記中ニ水原元亭若年ノ時云々トノ條アリ文體己レノ事ヲ自記シタル如クニモアラズ元貞亦五郎左衛門ト遠ク隔世ノ人トイフニモアラズ然ルヲ昝伯兩人之不與ヲ來スマテ事々敷非駁ストハ少シク穩カナラサル談ニテ疑ヒナキニ非レトモ暫ク記シテ後ノ再考ヲ待ツ
又按スルニ水原宮瀬共ニ家譜傳ハラズ事歷分リカタシ關口昝伯ハ慶安四年貳拾四歲ニテ被　召出四年目承應三年藝道修業シテ御國立退キ夫ヨリ二十年目延寶元年十二月歸參被命五郎左衛門ハ是ヨリ先キ寛文七年隱居而シテ貞享元子年病死ナレハ昝伯歸參後十一年問世ヲ共ニスト雖モ隱居中老衰之時也之ニ依テ考フルモ五郎左衛門ノ事歷ヲ昝伯ガ悉ク難駁ト云ハ一應肯シカタキニ似タルカ

加納大隅守政直　直恒惣領　始數馬　又平次右衛門　隱居頁存ト號ス
慶安二己丑年部屋住ニテ　南龍院樣へ被　召出御合力米八十石被下後大番與頭御切米貳百石ニ御加增依　命平次右衛門ト改名寛文七丁未年七月十五日父五郎左衛門家督知行貳千石被下後御家老加判之列四千石ニ御加增元祿四未年正月諸大夫被　仰付大隅守ト改同十二卯年七月隱居家督無相違惣領平次右衛門ニ被下正德五未年十二月廿四日九十四歲ニテ病死ス
以下代々家督無相違御家老加判之列諸大夫被命大隅守ト襲稱シ棟梁之重臣タリ直恒ヨリ六世大隅守補舊ハ御家老加判之列高四千五百石ニテ天保十三寅年九月隱居嫡子平次右衛門へ家督無相違被下菊之間席被　仰付タリ
一牧笛類叢ニ曰ク　加納大隅守ハ力量多キ人也或時心易キ士來リテ樣々物語リ致シタリシカ夏ノ事ナリシカ拾匁ノ種ケ島ノ鐵炮ニテ素試シタリシヲ彼士後ヨリ申ケルハ兼々御力量アリト承リ候へ共折無テ來見不仕今日ハ何分御力ヲ致拜見度ト望ケレハ隅州夫ハ聞違ヒナルベシ我等ハ力ハナシト固辭スレ共兎角屢望シタリケレハ然ハ迚件ノ筒ヲ試ミナカラ向へ投タリケルニ貳間程間ヲ置テ板塀有ケル其板塀ヲ突抜テ筒ハ遙ノ外へ飛出タリトソ人皆肝ヲ潰シケルトゾ

加納兵右衛門

加納兵右衛門 實名不知 松平孫太夫次男 始久太郎

家　譜

年月日不知　權現樣へ被　召出此節松平之御稱號ヲ憚加納ト改メ申候
慶長七寅年七月　南龍院樣へ御附被遊同十三申年二月十九日從　權現樣御知行貳百石被下置御朱印頂戴仕候右御朱印ハ常陸國茨城郡上阿久津村之内百石那賀郡市毛村之内百石合貳百石宛行訖全可領知者ナリト有之候
元和五未年御國替之節紀州へ御供仕罷越其節御加增百石被下都合三百石被成下寛永十一戌年五月病死仕候　于時四十五歲
惣領五郎三郎勝直後兵右衛門幼少ニ付父家督十八人扶持被下後段々御役替御加增高五百石被下以下代々相續四代五郎三郎勝敵六十石大御番之處不調法之品有之御役祿被　召放十八人扶持被　仰付
六代兵右衛門勝品寛政十午年二十五石大御番タリ

蔭山土佐守

蔭山土佐守宗信 始大草角藏 又蔭山式部

家　譜

養珠院樣へ御由緒有之者ニテ年月日不知　權現樣へ被　召出御近習役被　仰付

慶長十三戊申年二月十九日　權現樣ヨリ御知行千五百石被下置　御朱印頂戴仕于今所持仕候右

御朱印寫

常陸國新治郡之內坂村千三百九拾八石五升石川村之內百六石九斗三升那賀郡之內下小瀨村之內

三拾五石貳升合千五百石右宛行訖全可領知者也依而如件

慶長拾三年二月十九日　御朱印

大草角藏とのへ

權現樣思召ヲ以養珠院殿之御苗字ヲ被下置養子被　仰付蔭山式部ト御改被成下且養珠院殿定紋添紋共相用候樣被　仰付候（定紋替紋共養珠院殿紋ニテ御座候幕ニハ前々ヨリ實家之紋相用申候）御甲いろは御陣羽織赤地ニ白請三日月四半御指物御具足御下召之品々拜領仕于今所持仕候其後大御番頭被　仰付（年月不知）南龍院樣御傅役被仰付土佐守ト被御改下八百石御加增都合貳千三百石被下置元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越正保二乙酉年七月七日病死仕候（年齡不詳）

宗信惣領宇右衛門重堅家督無相違相續大番頭　清溪公御傅役等ニ歷任三代角藏重是壯年ニテ病死男子無之末期名跡三百石ニ減祿已下代替之節ニ減祿九代角藏廣道ハ勢州田丸御目付知行百五拾石ニテ文久三亥年十月病死養子忠次郎爲美跡目相續ス

家譜ニ家之紋丸ニ水花澤瀉替紋抱花澤瀉六葉葵幕之紋瓦燈之內文藏與トアリ

川北一政　長左衛門

川北一政、系出於菅原道眞、其先曰內匠介正久、爲伊勢河北城主、一政始屬酒井左衛門尉、領五百石、東

照公召置之麾下、屬武田信吉公、賜常陸邑千石、後屬公、爲城代兼留守番頭、寛永四年歿、年七十、主水正重襲家　川北系譜

家　譜

川北長左衛門一政　勢州河北城主河北内匠介正久五代生國三河

酒井左衛門尉旗下ニテ知行五百石領罷在候處　權現樣江戸御居城之時年月日不知　御旗下へ被　召出其後武田萬千代信吉卿へ被附慶長九甲辰年二月於常陸國御知行千石被下之旨御朱印頂戴于今所持仕候信吉卿御逝去以後　南龍院樣へ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕御城代御留守居番頭兼相勤仕年依願隱居被　仰付家督無相違惣領主水ニ被下主水ゟ來候貳百石爲隱居料長左衛門ニ被下寛永四丁卯年二月九日病死仕候　于時七十歳

一政實子惣領主水正重ハ元和元卯年部屋住ヨリ御小姓ニ被　召出高貳百石被下元和五己未年御國替之節御供ニテ紀州へ罷越通番御小姓頭被　仰付後父長左衛門家督無相違被下往年病氣依願寄合被　仰付寛永十一甲戌年三月三日病死長子主水正彦跡目千石相續已後四代門左衛門正盈ニ至リ改易嫡家斷絶ノ處正重三男市郎左衛門兄正彦跡目之際正彦ゟ來千石之内貳百石分知被　仰付タルヲ以テ以來分家ニテ嫡家相續六代長左衛門正堅三拾石御腰物奉行ニテ文政八酉年四月病死惣領彌五郎義行跡目相續ス

一長左衛門一政尾寄平左衛門武藤萬休ト共ニ御留守居番頭タリシ時　公方樣御成首尾能被爲濟候迚　龍祖ヨリ御直書ヲ賜フ御書ハ平左衛門方ニ所藏ト云

筧重政 四郎左衞門○按駿河分限帳在御腰物奉行之列祿三百五十石

筧重政、祖父曰圖書重忠、父曰勘右衞門重成、卅有戰功、重政仕公、賜祿貳百石、後屢轉職、爲旗奉行、增祿至七百石、正保元年歿、 筧家譜

家譜

筧四郎左衞門重政 筧勘右衞門重成四男 始勘助

重政ノ高祖父筧淸兵衞正綱ハ三州六ツ名ノ鄕ニ居住於三州安祥初テ　親忠公ヘ奉仕曾祖父淸左衞門正治ハ　長親公信忠公ニ奉仕ス祖父圖書助重忠ハ　淸康公ヘ奉仕廣忠公岡崎御在城之時松平三右衞門忠倫異心アルヲ以テ命ヲ蒙リ天文十六年十月廿日夜上和田城ヘ忍入三左衞門ヲ刺殺枕元之刀平安城長吉作爲證據取來リ御感狀及萬疋ノ知ト右刀ヲ賜ル父勘右衞門重成之惣領勘右衞門元成二男助兵衞爲春三男九藏重勝イツレモ御旗本ニテ相續仕

年號月日不知　權現樣ヘ被　召出御奉公申上其後　南龍院樣ヘ御附被遊慶長十一丙午年於常陸國御知行貳百石被下置之旨從　權現樣御朱印頂戴仕于今所持仕候右御朱印寫

常陸國茨城郡之內吉沼村之內五拾貳石三斗五升那賀郡之內小場村之內百四拾七石六斗五升合貳百石宛行訖全可領知者也

慶長拾一年二月廿四日　御朱印

筧勘介殿へ

元和五己未年御國替之節紀州ヘ御供仕罷越三百五拾石被下寬永八辛未年三百五十石御加增都合七

百石被下御旗奉行相勤正保元甲申年九月廿六日病死仕候 年齢不詳

勘右衛門重成嫡家ハ當時御使番筧助兵衛家ニテ御座候高祖父清兵衛ヨリ代々御當家ニ奉仕重政祖父圖書重忠父勘右衛門重成儀ハ　權現樣御代所々御陣之供奉仕軍功有之御感狀等頂戴仕候兩人働書寛永年中嫡家ヨリ寫與テ今所持仕候

重政惣領　筧四郎左衛門重定 初清太夫

重政二男　筧平十郎正勝

重政三男　筧右近重與

父四郎左衛門死後正保元甲申年月日不知兄四郎左衛門始名不知重定ニ家督被申付候砌父高之内平十郎ニ貳百石右近ニ百石分知被申付平十郎子孫代々別家ニテ相續仕候右近儀ハ其後別家同姓四兵衛重俊養子被申付候

四郎左衛門重政惣領清大夫重定父跡目四百石被下己後代々相續六代平三郎忠議四百石新御番頭ニテ文化十一戌年八月病死養子平三郎忠長跡目相續ス

加藤安世

加藤安世稱大隅、不詳其系、晉祖曰播部賴景、仕淸康公、祖曰內記景俊、仕廣忠公、父曰播摩守景元、仕廣忠公、及東照公、安世仕東照公、賜祿四百石、後屬公、賜祿五百石、寛永十五年歿、

家譜

加藤大隅安世 加藤播磨守景元男 始九吉 生國三河

加藤大隅
安世

曾祖父掃部頼景ハ　清康公ニ奉仕祖父内記景俊ハ　廣忠公ニ仕ヘ父播磨守景元ハ廣忠公神祖ニ
奉仕共ニ三河ニテ病死年月日不知兄播磨ハ　信康公ニ奉仕品有之知行千石被下内藤彌次右衛門ヘ
御預ヶ被成其子龍藏（安世ノ甥ナリ）ハ慶長年中於伏見内藤彌次右衛門ト一所ニ討死ス
一年月日不知　權現様ヘ被　召出候（御役祿不知）
一天正十七己丑年十一月十九日知行七拾九俵之御證文頂戴仕于今所持仕候右御證文ノ寫左之通

御膀書立之事

一卅俵（是ハ濱松御藏ヘ羽紙遣）　御　切　府
一四拾九俵　　駿　州　ウトウノ郷

以上七拾九俵者

右可有御所務者也依テ如件

松　總　書　判

己丑　　　由　々　汜　書　判

十一月十九日　　長　七　右　書　判

加　藤　九　吉　殿

一年月日不知知行四百石被下置其後年月日不知　南龍院様御附被遊元和五己未年八月御入國之節御
供仕紀州ヘ罷越申候（御役不知）
一年月日不知知行五百石ニ被　仰付候

一寛永十五戊寅年十一月七日病死仕候　年齢不詳
總領彌兵衛安敎寛永十一戌年部屋住ニテ被　召出御切米六十石被下同十六卯年父大隅跡目知行
五百石無相違被下正保三戌年十一月病死以下代々相續八代彌右衛門經祝明治四未年三月無役高
五十俵表御番ニテ隱居養子幸三郎經高ヘ五十俵被下隊長被　仰付タリ
加藤次左衛門

加藤次左衛門正勝

加藤次左衛門正勝　加藤次郎左衛門正之實子總領　生國上總

家譜

祖父ヲ加藤因幡清信ト云父次郎左衛門正之ハ大須賀出羽守忠吉、上總國領地之比、附屬仕後遠
州横須賀ヘ國替之節附添ヘ罷越病死ス
權現樣御代年月日不知父次郎右衛門爲家督知行百石被下置其後大須賀出羽守忠吉組付被　仰付息
國千代忠次代迄罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊原家爲繼跡上州舘林ヘ被遣候節　權現樣思召
ヲ以横須賀黨過半御留置被爲遊此者共度々骨折候故御秘藏ニ被爲　思召候得共被爲進候トノ　上
意ニテ元和二丙辰年　南龍院樣ヘ被爲附安藤帶刀直次相備被爲　仰付居成リニ遠州横須賀ニ住居
仕横須賀ヨリ駿河之御城番相勤同五己未年
南龍院樣紀州ヘ御入國之御供仕罷越百石御加增被下高二百石被　仰付其後　南龍院樣被　仰付候
由ニテ安藤帶刀直次横須賀組一統ヘ申聞候ハ紀州ノ内田邊ハ大事ノ要地ニテ候間横須賀ヨリ參リ
候諸士ノ内小身者ヲ遣シ置候樣ニトノ事ニ候然共人差ハ無之間鬮取ニテ相究可然候彼地ハ草深キ

所故馬ヲ飼ヒ候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ致氣儘ニ致活計候樣ニトノ儀ニ付則
圖取仕候處次左衛門正勝儀圖取ニ相當リ候付田邊ヘ罷越相勤年月日不知病死仕候
以下代々田邊與力ニテ貳百石相續九代佐文多初泉之進正脩安政三辰年安藤家ト田邊與力ト縺レ件
ニヨリ同年九月十日同與力一同田邊表退去之節共ニ退去浪人トナリ後文久三亥年四月歸參御切
米四十石小十人小普請當分松坂御城番被　仰付慶應四辰年三月隱居養子尚輔正謙ヘ三拾石被下
以下役ノ上銃隊被　仰付タリ

笠原助左衛門氏隆

笠原氏隆 助左衛門○按駿河分限帳在大番衆之列祿三百石

笠原氏隆、北條氏同族也、祖父曰新六郎政堯、爲伊豆戸倉城主、父曰能登守氏信、爲伊豆韮山城主、食十萬石、北條氏亡、東照公召而祿之、後屬公、賜祿三百石、爲大番、元和九年歿、笠原系譜

家　譜

笠原助左衛門氏隆 笠原能登守氏信嫡子 本國生國共伊豆

北條氏直一族伊豆國韮山之城主高拾萬石領知仕候小田原落城以後年月日不知被爲　召候付駿河ヘ罷越
候處　權現樣ヘ御目見被　仰付則被　召出 御役儀不知
南龍院樣ヘ被爲附元和五己未年紀州ヘ御國替之節御供仕其後高三百石被下大番相勤元和九癸亥年
六月二日病死仕候 年齡不詳
助右衛門氏隆祖父長州戸倉之城主笠原新六郎政堯儀北條氏政爲名代天正八庚辰年八月十六日
權現樣御陣營ヘ罷越高天神城攻之儀御契約申上候節　御書ヲ以テ岩切丸御刀一腰拜領仕　御書御

刀共于今所持仕候右　御書寫

今度高天神之一件契約相整令大慶訖就中申談意趣被及同心滿足候依之爲勞芳志刀一腰岩切九贈之猶期後會候

天正八年八月十六日

御　判

笠原新六郎殿

氏隆實子甚内後助左衛門　氏則家督貳百石大御番被　仰付以下代々相續八代助左衛門政種二十五石大御番ニテ享和三亥年十一月病死養子恒五郎後助左衛門　政藏跡目相續ス

垣屋一郎兵衛吉綱

垣屋吉綱　按駿河分限帳在大小姓衆之列祿二百五十石

垣屋吉綱稱一郎兵衛、其先曰隱岐守光成、爲伯耆浦濱城主、仕豐臣秀吉、屢有戰功、天正中薩摩役、與宮部善祥坊等共進、尤有殊功、關ヶ原役黨於石田三成、及三成敗與子小五郎光教共賜死、光教子曰清十郎光重、生甫四歲、乳母抱而逃、寓於小出播磨守秀政家、後東照公聞之、召而祿之、年甫十九、是爲一郎兵衛吉綱、後屬公、賜祿五百五十石、正保三年歿、子一郎兵衛秀政、襲家屢轉職爲副執政、增祿至二千二百石、貞享三年歿、年七十二　垣屋家譜　龍之稜威

家　譜

垣屋一郎兵衛吉綱　垣屋小五郎光教總領　初清十郎　隱居後道啓　生國伯耆

父小五郎光教ハ伯耆國浦住之城主垣屋隱岐守孫ニテ隱岐守滅亡之節ハ一郎兵衛吉綱幼年ニテ母ニ添小出播磨守吉政方ニ寓居罷在候

元和元乙卯年四月朔日　權現樣上意ヲ以　南龍院樣へ被　召出知行百五拾石被下其後御役替御加增高五百五拾石被下長福殿徒頭目付兼勤　正保三丙戌年月日不知依願隱居被　仰付總領一之丞へ爲家督高五百五拾石無相違被下同年四月十二日病死仕候于時五十歲

吉綱實子一之丞後十郎兵衛　秀政家督無相違相續後貳千貳百石ニ御加增御家老列被　仰付已後代々相續六代十郎兵衛豐長後秀壽　享和四子年二月千貳百石御城代ニテ隱居嫡子槌六秀敏へ家督千百石被下寄合被　仰付殘百石ハ爲隱居料十郎兵衛へ被下タリ

片切次郎左衛門

同　市太夫

片切次郎左衛門重衡 片切助右衛門重時男 初久作

家　譜

始武田信玄家士馬場美濃守ニ仕罷在候處年月日不知信玄ト御合戰ノ節ニ忍テ御當家へ御忠節申上候品御座候由申傳へ候其後美濃守身體果浪人仕候ニ付　權現樣上意ヲ以テ大久保七郎右衛門後相模守へ御預ケ被遊候處又候相摸守家斷絶仕候故浪人仕罷在候然ル處年號不知於駿府同姓權右衛門ニ御尋被遊先年御忠節モ有之モノニ付早々呼寄可申トノ御懇ノ奉蒙　上意候由ニテ駿府へ參上可仕之旨左之通權右衛門ヨリ書狀ヲ以テ申越候

右書狀之寫

まゐる　ひな
こしもとしう　非　わ
〇　何　ら

猶々申入候まつ
申度きに子共
御内所〇

今度ぬりよよさこのミ敵
ミきの御意よ候る為の
仕合に付て其元御きつかい
もしをそんじ早々御むね
何と相成候哉御心元なく存候
ほど被成御あしまち入申候
それに付正月廿九日ふ
返す／＼よのしうもれふ
上様御為河祢被成候やうは
おゐてゐ我等ふをせ事おふせ
小田原ふ片切めうじの者共

川あら生はれんと
罷在はが何者ふてはは哉志らぬこのゞと
御意はる早ゝ御あしまお
御なづ祢ふて御座はなく
いまかは以上
いまれ次郎左衛門とかは
まへれ久作と申なる者ふて
御座は我等ゆとあにて御座はと
か上は得れこの久作れそまゝ川に
御座被成は時分中せ川
ゆなしなる者には何方に
罷在はと　おほしめ志はへバ
かのをこのこ　所に罷在はこ
をおこれな記者にはる早ゝ
愛元へよひよせはへあとに
この乃久作れてきれときゐ
人道放者にはそまゝ川ふ

御座被成候時よき中せ津候に付而
七郎右衛門ふ御ほ津参被成候又
我をも多き参多るものふ候
とかくあまた何方にもおほせらまぬ
者ふ候ゟ早〻よひよせ候へ
駿州遠州三河三ヶ國をれ
中上様へ被きし候間あとふ
其方遠州れもれふ候ゟ
中上様ふ御附候れんと被
仰出候宮里のつるふなすび
をからす者ふ候子共おひ共
までそな〳〵めしつまさせ
よびよせ候へと御意に候ゟ
御意忝存早〻引越被成候
委申入多く候得共あゝ元に
御越し候時分　上様の
忝　御意　此末文難相分申候

片桐市大夫重晴

恐々謹言

片切権右衛門　實名書判

二月二日

片切二郎左衛門　此下文字消難見候

右ニ付早速駿府へ罷越奉待御沙汰候處慶長十九甲寅年大坂冬御陣ノ節　南龍院様御供可仕之旨被　仰付翌乙卯年夏御陣ノ刻モ同様被　仰付御供相勤候處歸陣ノ後　権現様御沙汰之趣モ御座候哉於駿府　南龍院様へ被　召出 役儀不知 高貳百石被下元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕寛永九壬申年八月十七日病死仕候

右権右衛門儀ハ　権現様へ奉仕後　南龍院様へ御附被遊高五百石被下代々相續仕候處子孫 権右衛門ヨリ四代目ト相見申候 丹左衛門 實名不知 儀享保八癸卯年九月出奔家斷絶仕事蹟不詳候

重衡總領次郎左衛門 始久作 重民父跡目貳百石無相違被下大御番相勤以下代々相續五代德太郎政周御切米拾五石大御番格番外末席ニテ寛政十午年八月不愼之品ニヨリ御切米被　召放四人扶持被下病死六代谷之助政喜御切米十三石獨禮小普請ニテ文政元寅年五月病死次男楠之助政之跡目相續ス

次郎左衛門重衡ト市大夫重晴トハ兄弟ニテ元ヨリ同姓ノ處市太夫重晴家譜ニハ代々切ヲ桐ニ認メアリ別ニ故アルニ非ス蓋シ習慣上書來リシナラン

片桐市太夫重晴　片桐助右衛門重時三男生國遠江

祖父小八郎重宗遠江國奥山ヲ領シ甲州武田家ニ隨身仕罷在候ヘ共兼テ　權現樣ヘ志ヲ通シ候趣
信玄被聞及重宗ヲ殺害被致候
父助右衛門重時儀甲州之討手ヲ切拔三州岡崎ヘ罷越其後病死仕候市太夫重晴モ最初武田家ニ隨身
信州先方衆ト申候

一元和二辰年於駿河兄次郎左衛門重衡ト同時ニ　南龍院樣ヘ被　召出御切米八拾石被　下置同五未年御入國之節御供仕紀州ヘ罷越寛永九申年九月十七日病死
重晴總領助右衛門重持部屋住ニテ四拾石ニ被　召出以下代々相續ノ處四代助右衛門景充出奔斷家斷絶ス

一重晴次男市太夫始與惣重政寛永七午年新規四拾石ニ被　召出候處肥前嶋原一揆之節同所ヘ罷越石川左門手ニテ討死家斷絶ス

分　家

武兵衛重吉　市大夫重晴三男

寛文元丑年十二月十八日新規被　召出御切米貳拾石被下十人組被　仰付後有田郡奉行日高御代官等ヲ勤メ四拾石ニ御足高被下元祿三午年六月御代官御免鐵炮之弟子取立被　仰付同七戌年九月病死以下代々分家ニテ相續四代十藏周富ハ御切米拾貳石輕小寄合ニテ天明二寅年八月病死養子武兵衛方卿跡目相續ス

按ニ　武兵衛重吉ハ炮術ニ達シ片桐流ト稱スル一派ノ師範家タリシガ一代ニ止リ平井市郎右衛門尙貞其流法ヲ傳ヘ以來平井家ニテ代々師範相續ス委細ハ武術傳炮術ノ部ニ詳也

河島意休
宣海

河嶋九左
衛門忠次

可兒長右
衛門正榮

河嶋意休

河嶋意休宣海　河島新介宣家總領　生國伊勢

家譜

代々勢州瀧川家ニ從事仕同家沒落ノ後浪人仕其後大久保石見守ニ仕罷在候及石見守御咎後　權現樣御内意ニ依テ慶長十八丑年駿府ヘ參リ拜謁則被　召出御奉公申上元和二辰年　南龍院樣ヘ御附被遊同五未年御國替之節紀州ヘ御供仕高貳百石被下御小納戸相勤寛永十酉年十一月十九日病死仕候

以下代々相續之處五代權八御切米三十石大御番ニテ明和六丑年四月兼々不行跡ニ付改易被　仰付嫡家斷絶ス

分家

河嶋九左衛門忠次　意休宣海二男忠兵衛光次總領

父忠兵衛倶ニ京都ニ住居ノ處忠兵衛病死後紀州ヘ罷越　承應二巳年　南龍院樣ヘ被　召出小十人其後段々昇進八十石御留守居番被　仰付元祿十三辰年七月病死以下代々分家ニテ相續五代猶右衛門高晧ハ文化八未年貳拾五石御留守居番タリ

可兒正榮　長右衛門

可兒正榮、才藏吉長子也、吉長住美濃可兒郡、因氏焉、吉長之移安藝、正榮留在可兒、於是公召而祿之、

嘗爲園田伊兵衛部下、以功增賜祿貳百石、子孫襲稱才藏、

家　譜

可兒長右衛門正榮　可兒才藏吉長總領 生國美濃

才藏吉長儀出生美濃國可兒郡ニテ代々同所ニ住居罷在候處武邊有之所々ニテ相働申候指物ハ生竹ニテ御座候付異名笹才藏ト申福嶋左衛門太夫正則ヨリ被相招隨身仕藝州ヘ引越候長右衛門ハ可兒郡ニ殘リ罷在候

一南陽語叢ニ云ク　可兒才藏吉長ハ隱ナキ覺ノ者也笹ヲ差物ニス關ケ原ニテ討取首數三十餘級笹ノ葉ヲ口ヘサシ入置シナリ世ニ笹ノ才藏ト呼フハ此故也幼年ヨリ愛宕ヲ信仰シ常ニソノ緣日ニ死セントト誓フ果シテ六月廿四日身ヲ淸メ物具シ長刀タツサヘ牀几ニ腰掛テ息絕タリ遺言ニテ廣嶋ノ矢賀トイフ處ノ坂脇ニ葬ル石碑ニ尾州羽栗郡住人ト誌ス家老ニ竹內久右衛門ト云フ覺ノ者有イツニテモ才藏知行半分ワケ也長久手一戰ニ才藏ハ金吾中納言秀秋ノ手ニアリ敗軍ニ付秀吉公才藏ヲ御叱被成夫ヨリ日蔭者トナル後ニ福嶋正則ヘ七百石ニテ被抱廣嶋落去ニ付紀州ヘ參リ子孫相續スト云（才藏廣嶋ノ墓ヲ實見シタル某ノ談ニハ廣嶋ノ入口岩鼻ト云フ處街道ヨリ少シ山手ニ高サ一丈四尺計リノ碑アリ「かにさいぞうはか」ト平カナニテ大字深彫也ト云）

一年月日不知　御當家ヘ被　召出相勤候役祿不知　南龍院樣紀州ヘ　御入國被爲遊候節薗田伊兵衛與力ニテ御供仕候其後　公議御小姓ヲ盜出シ候者有之右肝煎候モノ四人ニテ熊野ヘ立退山口ヘ入込旅宿仕御座候處先達テ御內通有之總領薗田伊兵衛被　仰付與力不殘同所ヘ捕參候處右之モノ一間ニ閉チ籠リ內ヨリ釘〆ニテ居候得ハ取掛リカタク候付長右衛門壹番ニテ戶ヲ打破リ切込不殘討留申候其節ノ刀永祿祐定ニテ代々持傳ヘ罷在候

一正保三丙戌年月日不知御切米五拾石被下置候御役儀不知

一萬治元戊戌年月日不知知行貳百石ニ被　仰付候御役儀不知

一寛文四甲辰年閏五月十七日病死仕候年齢不詳

正榮總領若右衛門正矩跡目無相違被下六代孫助正員十七歳以下ニテ病死滅祿十代才藏長興蘇鐵之間席五友之間御廊下詰ヨリ無役五拾俵ニテ明治六酉年一月病死嫡孫承祀藤熊正久相續ス

川井嘉兵衛

川井嘉兵衛

川井嘉兵衛

家　譜

川井嘉兵衛 實名不知 生國相模

北條左衛門大夫氏勝之手ニ屬シ地方五十石ヲ領シ小田原沒落後安藤帶刀取持ヲ以天正十八寅年於駿河　權現樣ヘ御鷹匠ニ被　召出沼津御鵰飼ニ被　仰付年月日不知於駿河　權現樣ヨリ御紋　御免被遊候右ニ付紀州ヘ御入國以後モ御鷹匠ニテ御紋附衣服着用仕子孫迄モ　御目見以上被　仰付候ヘハ御紋付着不仕御役ニテモ着用仕來申候

一元和三丁巳年月日不知　南龍院樣ヘ御人分之節御附被遊御切米貳拾壹石被下置同五未年八月御入國之節御供ニテ紀州ヘ罷越寛文八申年正月廿五日病死仕候

元和御切米終身錄ニハ寛永十五年權太郎ト改メトアリテ嘉兵衛ト養子伊八郎トノ間ニ今一代無之テハ年歷符合不致如クナレ𪜈家譜ノ表ニテハ左樣ニモ見ヘス分リ難シ養子伊八郎寛文八申年

養父嘉兵衞跡目御切米拾五石被下同十二子年七月病死忰無之嫡家斷絶權太郎實子善兵衞寛文十二子年新規被　召出三人扶持御鷹居習被　仰付後御切米二十石ニ成リ以來分家ニテ代々相續四代善之丞以孝小十人並高ニテ文化十二亥年八月病死養子愛之助方孝跡目相續ス

川合光重

川合光重、稱岡右衞門、住美濃郡上、長久手役、屬遠藤但馬守慶隆、攻岩崎城、先登有功、後屬金森出雲守、關原役、有戰功、後公聞其武名、召祿之貳百石、爲大番

家譜

川合岡右衞門光重　濃州郡上住

遠藤但馬守手ニ屬

權現樣尾州長久手御合戰ノ時池田勝入御先手相勤但馬守茂勝入御組ニ成岩崎城ヲ攻メ候節鷲見八右衞門ト岡右衞門岩崎城壹番乘仕兩人共高名仕候其後金森出雲守ニ屬罷在候處石田治部少輔

權現樣ヘ逆心之時稻葉右京モ御敵仕濃州郡上八幡之城ニ居住ニ付遠藤但馬守ニ被　仰付出雲守モ加勢被　遣候付岡右衞門儀出雲守ニ從出陣仕先城之出丸ヲ欠破可申旨出雲守下知仕候付吉田權四郎今井平助岡右衞門三人欠ヨセ候處城中ヨリ柴田甚右衞門稻葉内藤内ナワノ五右衞門中村太郎右衞門ト申者出鎗ヲ合其時味方ノ人數跡ヨリカサナリ出丸ヲ取夫ヨリ權四郎遠藤太郎兵衞大坪新七岡右衞門四人敵ヲ慕本丸堀端迄追寄追付本丸ヲ乘取可申ト出雲守下知仕候付味方ノ人數追々堀際

迄欠ヨセ狹間ヲトチ欠候處城中ヨリ突テ出何レモ追拂レ候處新七岡右衛門踏止兩人覺悟ニテ竹束ヲ附サセ候ヘハ味方ノ人數返シ合晝夜六日互ニ鐵炮ヲ打チ相戰候關ヶ原御陳ニモ出雲守ニ附參高名仕候

一元和九癸亥年月日不知依武功　南龍院樣ヘ被　召出御切米八十石被下大番組被　仰付候

一寛永四丁卯年月日不知御切米ヲ地方貳百石ニ被　仰付候

一同十八辛巳年七月廿四日病死仕候　于時七十九歲

光重總領岡右衛門光成寛永二丑年部屋住ニテ被　召出三十石夜居番被　仰附同十八巳年父跡目御切米八十石大番組被　仰付以下代々相續十代岡右衛門喬紹知行三百五十石小十人頭ニテ嘉永七寅年十月病死養子啓三郎信敬相續ス

神谷善右衛門尙證

神谷善右衛門

神谷善右衛門尙證　神谷善右衛門尙勝總領 生國三河

家　譜

父善右衛門尙勝

權現樣ヘ御奉公仕御切米拾石五斗被下置病死仕候付父跡目無相違被　仰付　權現樣ヘ御奉公仕候處年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊御切米十石五斗被下置元和五未年八月御入國之節紀州ヘ御供仕寛永八年御切米十五石被　仰付同十七辰年三十石ニ御加增被　仰付萬治三子年六月二日病死仕

川村角右衛門

川村甚右衛門

候

總領與一兵衛始武右衛門尙信父跡目無相違被　仰付所々郡奉行御代官ヲ勤元祿十丑年七月又內藏頭樣御拜領地請取トシテ越前へ罷越翌寅年四月迄彼地御代官相勤後御留守居物頭御切米八十石ニテ享保三戌年十月隱居以下代々相續五代善右衛門尙伸ハ御切米四十石ニテ文化四卯年八月江戶常詰御小姓組被　仰付關口流指南ヲモ勤文化九申年正月病死總領織之助尙次跡目相續ス

川村角右衛門

川村角右衛門 實名不知 生國紀伊

家譜

慶長十五戌年月日不知　權現樣へ御奉公ニ罷出御先手同心相勤後　南龍院樣御入國之節駿河ヨリ御供仕紀州へ罷越御奉公相勤寬文四辰年正月廿二日病死仕候

忰彌五右衛門元和六申年伊賀小頭御切米十七石四人扶持被下以下代々相續五代角右衛門寬成御目見以上ニ昇進六代角右衛門恒雄中奥御番御切米三十石高ニテ天保二卯年四月病死養子角右衛門安行相續ス

川村甚右衛門

川村甚右衛門 實名不知 初井上勘兵衛

家　　譜

甚右衛門ハ加藤肥後守清正家來井上大九郎弟ニテ初井上勘兵衛ト申浪人ニテ山城之國桂郷ニ住居ノ處故有之川村甚右衛門ト改名後城州伏見ヘ罷出年月日不知於伏見　權現樣ヘ御奉公ニ罷出相勤罷在候處　南龍院樣ヘ御人分ノ節右御人數ノ内ニテ御附被遊元和五未年御入國ノ節鏑木與兵衛支配ニテ御供仕罷越申候

一年月日不知與兵衛預之者ノ内久々相勤候者可有之ニ付御城をなま御番可申付旨與兵衛ヘ御意被遊候由ニテ御城をなま御番被　仰付其後小笠原甚六御取次ヲ以御金度々被下置後病死仕候年月日不知

忰甚右衛門父代番同をなま御番相勤以下代々相續五代又右衛門豐良ハ御目見以上ニ昇進寬政十二申年四月獨禮御作事吟味役御切米貳十石ニテ病死惣領又右衛門芳正相續ス

川口與三兵衛

川口與三兵衛　實名不知

家　　譜

年月日不知　權現樣御小人ニ罷出其後御人分之節　南龍院樣ヘ被爲附御小人相勤元和五未年御入國之節御供仕紀州ヘ罷越後病死仕候

以下代々相續四代理助光明御目見以上獨禮格御切米貳十五石被　仰付五代彌右衛門甫古三十五石高御膳奉行格奥詰ニテ文化九申年四月病死總領八之助秋古跡目相續ス

勝田道順
勝田宋清
龜田甲

勝田道順

家　譜

勝田道順 實名不知 生國駿河

權現樣へ被　召出年月不知後　南龍院樣へ御附被遊其後　養珠院樣方相勤申候病死年月年齡不詳

同宋清 實名不知 道順實子

權現樣御代年月不知 部屋住ヨリ被　召出　養珠院樣附御寧子坊主被　仰付其後　南龍院樣へ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越寧子坊主相勤寛文三癸卯年月日不知病死仕候年齡不詳以下代々相續四代太兵衞正利御目見以上ニ昇進五代七郎右衞門思順ハ御徒頭格中奥詰七拾石高ニテ文政二卯年病死養子勇次郎信織跡目相續ス

龜田甲 紀伊侯臣

有一禪僧、說以佛理、龜田曰、師有妻乎、曰、無有、有子乎、曰、既無妻、焉得有子、曰、然則師所說、虛語耳、吾嘗聞、釋迦在家時、有妻孥、及爲僧棄之、是釋迦者、知室家父子之情、而厭棄之者、也故其說心法、得其實、而人信之、今者師未知之、而自言無情、且勸人割愛、此非虛語、而何僧默然、

右一節ハ近世叢語ニ記スル處ナリ家譜傳ハラザレバ事蹟年代共詳ナル事知ルベカラズ

葛山六郎右衞門

家　譜

葛山六郎右衛門泰久 駿河葛山城主葛山備中守勝嘉三代齊院爲久養子實松田晩翠軒重國長男幼名十藏後長十郎久恒生國山城

元祿三午年十二月廿八日儒業ヲ以　清溪院樣ヘ御目見被　仰付御用ニ付度々出殿拜領物仕候
同五申年七月朔日五拾人扶持ニ被　召出
高林院樣御代榊原玄輔ト兩人於富士ノ間月次講釋被　仰付其外　兩少將樣御部屋ヘ御用次第相詰候樣被　仰付毎々晝夜共罷出申候
以後寶永四亥年六月御小姓組被　仰付御扶持方ヲ御切米百石ニ御直被下御用之節ハ是迄ノ家業ヲモ可勤旨被　仰付尚享保三戌年御供番地方貳百五十石ニ被　仰付五十人組ノ頭先手物頭ヲ經同十六亥年十一月六十七歳ニテ病死代々江戸常府ナリ

同六郎左衛門維久 二代十郎左衛門泰榮養子實尾州藩高山庄左衛門弟　初新九郎

按スルニ乞言私記ニ孫ノ某奇人之名高シト蓋シ此六郎左衛門維久ノ事ナルベシ六郎右衛門泰久惣領ハ(實二男)十郎左衛門泰榮ト稱シ父跡目御切米八十石相續後御書院番格ニテ文化元子年三月病死長男長十郎ハ部屋住ニテ出奔次男ハ他ヘ養子十藏(後長十郎)ハ不心得ノ品ニテ改易依テ再ヒ此維久ヲ養子トス則六郎左衛門泰久ノ養孫ナリ維久文化元子年五月養父十郎左衛門ノ跡目八十石無相違相續後御小姓組御供番御使番五十人組ノ頭小十人頭格御取次等ヲ勤務紀州ヘ立歸御供且京都ヘノ御使ヲモ勤タリ天保十四卯年三月八十歳ニテ病死ス

一乞言私記ニ曰ク　葛山某ハ天智天皇之孫竹之下孫八左衛門之裔ナリトテ家柄ナリ儒者ニテ五十人扶持ニ被　召抱榊原玄輔ト同寮ナリ其孫ヲ某ト云奇人ノ名高シ玄關ニ聯アリ語忘ル髑髏ヲ自ラ塗抹トナシ重組ヲ棺箱ニシツラヒ獄門ノ首ヲ貫シ釘ヲ箸トシ捨札ヲ額トシ異風ヲ好ム所望ノ者モノアレハ酒ヲノマス此人氣象ノ高キ人ニテ他所ヨリ歸リ來リ玄關ヲ上リ奥ヘ通ルニ臺所

見ヘ候ヘトモ遂ニフリムキ見タル事ナシ下人ニカキネニ結セ自ラモ出テ手傳フ刀掛ヲ庭ヘ出シ置又雪隱ノスミニツブテ石ヲ四ツ五ツ積有シ敵ノ頭ヲ打碎クト石ニ書付アリシトゾ常ニ鍔丸ト云先祖持傳ヘノ刀貳尺八寸ナルヲ老年マテ帶ケリ世ニ名高キ落合泰雲寺ノ開山了然法尼ハ今ノ六郎左衛門ニ大伯母ナリ某老年ニテ夫婦連ニテ紅裏ノ衣服ヲ着シ遊行ス古風ナル事ナリト四ツ谷仲殿町ニ住ス南隣ハ石堂是一ノ家ナリ門内ニ突捧札又飭リリキミタル人ナリ

六郎左衛門號シテ髑髏右衛門ト云常ニ袴ハスゲヒダ火事ノ節ハタチツケヲ着スト云

一葛山六郎右衛門ハ和歌ヲ好ミシガ嘗テ公事ニテ紀州ヘ趣ク途中鳴海邊ニヤ住ム或老媼和歌ニ堪能ノ名世ニ高カリシヲ尋ネ行キシニ折シモ老媼重キ病ニフシ面會ナリ難シサレバトテ風雅ノ道ヲ以特ニ訪ヒ給フヲ興ナクコトハリ申スハ本意ナケレ願クハ一首ヲ給ランニハイカ計ノ悦ヒニヤアラント取次ノ者筆紙ヲ差出セシニ六郎左衛門實ニモト筆取ラントスルニ其筆筆クサテウモノニテアリシカバ

命毛のながゝれと思ふこそ此筆草になりもならひて

カクテ公事果テ其歸ルサ彼老媼ノ事思ヒ出シ既ニ身マカリヤシツラントニカクニト再ヒ尋ネ見シニ家ウチ打騒キ、マメタチテ敬々敷奥ヘ請シヤガテ老媼威儀ヲ正シ立出テ過シ御歌給ハリテヨク、フシギニモ重キタツキモ、サナガラ、日ニマシ快ク今ハ、カクノ如シ是ヒトヘニ御歌ノ徳ニヨリシ也命ノ親トイタク謝シ厚クモテナシケルトゾ此六郎左衛門我ラハ歌ヲ以テ人命ヲ助ケシナリト常ニ自負シテ戯レケリト故原勘兵衛ノ語リシト云

信少壯父ノ夜話ニ葛山六郎右衛門ノ狂歌ナリトテ聞シモノアリ

足る事を汁このあめしに茶漬飯そらのゐつたが何寄の菜

横井次太夫

横井次太夫時廣　横井孫十郎時雄總領　生國　尾張

家　譜

父孫十郎時雄ハ北條相模守高時次男相模次郎時行五代横井播部介時永男雅樂助時延次男也

曾祖父北條源五郎後播部介時永尾州愛智郡横井村ニ居住仕此節ヨリ苗字横井ト相改申候父孫十郎時雄儀若年之比勢州長嶋合戰之節討死仕候其後年月日不知次太夫時廣儀　權現樣ヘ被　召出地方三百石被下置御判物ハ無御座候御鷹匠同心御預被遊後年　南龍院樣ヘ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州ヘ御供仕寛永十一甲戌年二月廿六日病死仕候　于時六十六歲

祖父雅樂助時延總領伊折介時泰儀モ　權現樣ヘ奉仕候處慶長五庚子年石田治部少輔反逆之時濃州福塚之城主丸毛三郎兵衛石田治部少輔ニ合志候故伊折介幷同人舅市橋下總守幷德永石見守伊折介弟孫右衛門同作左衛門等計略ヲ廻シ福塚之城ニ馳向首五拾貳級討取城ヲ攻落又同國高須之城主高木十郎左衛門是ハ治部少輔一味ニ付右之人數ニテ高須之城ヲ攻落関ヶ原御合戰之節モ右之人數多藝口之押トシテ金谷河原ニ陣ヲ張リ牧田村ニテ出戰治部少輔徒黨安國寺長曾我部土佐守敗軍栗原山ヲ越多羅山ヘ退候時右人數彼翟ヲ追討首數八拾貳級討取横井作左衛門此節大功有之從　權現樣御感狀幷御書頂戴仕候右伊折介時泰總領伊折介始名不知時安儀モ　權現樣ヘ奉仕食祿五千八百石之御朱印頂戴仕赤目之城ニ罷在孫右衛門儀モ　權現樣ヘ奉仕食祿千貳百八石九斗三升被下置作左衛門儀モ　權現樣ヘ奉仕食祿千九百石被下置候處其後伊折介時安幷孫右衛門作左

衛門共尾張義直卿へ御附被遊イツレモ尾州ニテ代々相續仕罷在候
一時廣實子總領次太夫好時家督無相違相續三代迄祖父時廣通リ御鷹匠相勤御鷹匠同心御預ケ六代次太夫令時寛政十年ニ三百石高大眞樣附五十人物頭格タリ當代次太夫ハ文久二戌年十二月伊達五郎ト共ニ紀州ヲ立退キ薩藩ニ據リ御國政筋ヲ越前春嶽老公へ直訴ス事ハ當公同年ノ譜ニ詳也後歸參維新之際周旋方又ハ公議人トナリ公武ノ間ニ鞅掌スル所アリ

吉田彌九郎

吉田彌九郎 吉田四郎兵衛總領 生國駿河

家譜

祖父吉田三左衛門ハ金吾中納言譜代之侍ニテ千石給リ物頭役相勤父四郎兵衛初名彌九郎ト申シ同家ニテ小姓役相勤知行三百石給リ申候右之家ニテハ小姓近習手廻ノ侍共鷹居候付彌九郎儀モ小姓ニテ鷹居相勤候後浪人仕罷在候處慶長五子年關ケ原御歸陣ノ砌　大御所樣へ御目見仕被召出御切米五十石五人扶持被下置御手鷹匠被　仰付其後眼病相煩奉願右五人扶持ノ內ヲ貳人扶持差上置養生仕相勤慶長十八丑年病死仕候
一慶長十八丑年十五歲ニテ父四郎兵衛家督無相違被下置羽合御鷹匠相勤御鷹餌積ノ書付差上奉伺候節　大御所樣御自筆ニテ御書入御直シ被遊候テ下リ候御紙面幷拜領之御脇差一腰ハ今ニ所持仕候
一元和元卯年大坂御陣之節十七歲ニテ御近習ノ御供被　仰付弓鎗ヲ一日替ニ持每日御供相勤申候

一同二辰年久能山へ　御尊骸之御供仕候
一同三巳年　南龍院様へ御手鷹匠十八人御附被遊候節右御人數内ニテ彌九郎モ御附被遊其儘御鷹匠相勤同五未年八月御入國之節御供仕紀州へ罷越申候
一寛永三寅年九月十八日二十八歳ニテ病死仕候
彌九郎總領彌九郎（初名不知）七歳ニテ父跡目御切米五十石三人扶持被下羽合御鷹匠被　仰付候處寛永二十未年二月二十四歳ニテ病死男子無之付聟名跡被　仰付候迄母へ五十石三人扶持被下候由正保二酉年妹兩人ヲ娘ニ相立被成下西村孫右衛門長男勘兵衛幷吉田九左衛門之兩人ヲ聟名跡被　仰付五十石ノ内勘兵衛へ三十石三人扶持被下羽合御鷹匠被　仰付九左衛門へハ二十石被下以下代々相續九代三左衛門時兼ハ御切米十五石獨禮小普請末席ニテ文化十三子年十月病死總領三之助時知相續ス

吉田角之丞
同　金平
家譜

吉田角之丞資意（吉田孫兵衛資次長男 生國美作）
祖父作太郎左衛門資之儀ハ江州甲賀郡ノ者ニテ織田家ニ屬シ京都本能寺ニテ討死
父孫兵衛資次ハ初作九市郎ト唱ヘ浪人仕追テ森美作守ニ仕ヘ知行三百石給リ大坂御陣ノ節美作守

供ニテ騎馬武者射落シ外ニ壹人討取候ニ付加增給リ五百石ニテ足輕頭相勤候處故有之同家ヲ立退吉田孫兵衞ト改名淺野因幡守ニ仕五百石給リ右跡ハ次男ニテ相續後千田儀左衞門ト唱ヘ同家ニテ御座候角之丞資意京都ニ罷在吉田印西弟子ニテ弓道修業仕候テ强弓名ヲ得申候處薗田伊兵衞鈴木六兵衞取持ニテ寛永四卯年　御家ヘ被　召出御切米十五石被下置寛永十三子年御弓役被　仰付知行貳百石被下置延寶二寅年病死仕候

資意總領孫助父跡目知行百五十石被下大番組被　仰付以下代々相續之處五代幾之丞御切米三十石大番組ニテ安永七戌年七月出奔嫡家斷絶ス

一枚笛類叢ニ曰ク　吉田角之丞ハ弓道ノ達人ナリ其上力秡群ナリ壹年江戸ヨリ東海道ヲ上リシカ或驛ニテ茶屋ニ腰掛酒ヲ飮ミ居タリシニ六尺計モヤアラント見ユル男ノ面相アレテ手足ノ筋太ク逞敷クツト入來テ角之丞ト對座セリ茶店ノ主又休ミ居タル旅人共モ、スハ、コトコソト各息ヲ詰居タルニ角之丞ハ見ヌフリニテ酒ヲ呑テ盃ヲ下ニ置ケハ彼男ムツト手ヲ指延テ角之丞カ顏ヲ白眼ナガラ件ノ盃ヲ取ラントス角之丞右ノ手ヲサシ延テ彼ガ手シカト握リタリ彼男涙ヲ垂レ汗ヲ流シテ物イウ事能ハス已ニ絕入ラントスル體ユヘ暫ラクシテ放チヌ彼男迯出シタキ樣子ナレ𪜈足タヽス暫クシテヨロボヒ立テ漸歩ミ去レリ是ヲ見ルモノミナ其强力ヲ感セズトイウ事ナシ茶店ノ主角之丞ニ向ヒ唯今ノ者ハ强力自慢ニテ常々人ヲ惱シ候ヘ共此所ノ者渠ガ力ニ怖レテ如何トモスル事能ハズ夫レ故益放埓亂行相募リ此頃ハ既ニ旅人ヲ妨ケ往來ニ難儀ヲカクル故地頭ヘ訴ヘント驛中申合居タル折カラニテ只今ノ御懲ニテハ此以後猥籍モ致ス間敷存ラレ候ト悅ヒタリトゾ一角之丞先祖ハ信長公ノ臣伴太郎左衞門ナリ角之丞ニ至テ吉田流ノ弓道ニ達セシ故師ノ名字ヲ襲テ吉田ト改メタリ强弓ヲ射ル事此人ヲ以テ近代無類トス所持ノ弓ヲ今吉田家ニ傳ヘタリ鐙ヲ引延シ鉄砲ヲ捻タル程ノ大力ナリ彼角之丞カ妻ハ中國ノ產ナリシカ女ノ手業縫針等ノ事ハ描ク矢ノ羽ヲバハグ事ハ至テ名人ナリシトイヽ傳ヘタリ

分　家

吉田金平資清　角之丞資意次男　生國紀伊

一寛文八申年十二月四日新規被　召出御雇十八人組被　仰付御切米二十石三人扶持被下天和元酉年十二月屋敷奉行被　仰付後銅山御目付口前奉行御普請奉行ニ歴任御切米八拾石ニ進ミ病氣依願御留守居被　仰付正德三巳年八月廿日七十歳ニテ病死ス

金平惣領角之丞資重父跡目六十石被下後御弓役八十石ニ至リ以下代々相續五代角之丞高偶ハ六十石御具足奉行ニテ天保四巳年九月病死養子邦輔方眞跡目相續ス

一祖公外記附錄ニ曰ク　吉田金平江戸ヨリ歸リ候節乘懸ニ乘行向ヨリ馬子壹人馬ヲ牽來其衣服馬具トモ甚奇麗ニテ道之眞中ヲ歩來此方ニ向早其馬ヲ可除ト申ニ付彼ハ如何ナル者哉ト我カ馬子ニ尋ネ候ヘバ權内ト申馬子ニテ剛力之男伊達ニテ何ニテモ道之眞中ヲ歩行人ニ爲除申候若道ヲ除不申候得ハ某等ヲ打擲仕候間此馬ヲモ除可申ト申候ヘハ武士ノ乘馬ヲ彼等ニ除可申哉其儘可行ト言内ニ權内來懸何故不除哉ト云儘金平ノ馬子ノ持候牽綱ヲ取リ片腋ヘ引寄セ懸ケ候ヘバ金平ノ若黨ハ權内ニ組付ケ權内事共不致若黨ヲ三間程捕テ投ケ是ヲ見テ金平馬ヨリ飛下リ權内ヲ提テ六間程向之畠中ヘ投ケ付走懸腰骨ヲ二三踏候ヘバ御免可被下ト言儘致氣絶候金平ハ問屋ノモノヲ呼出シ右ノ次第ヲ申聞打返候權内ハ正氣付候ヘ共夫レヨリ筋痿ニナリ候由

高野上増常菩提ハ剛力之聞有之付吉田金平登山之節立寄リ御力量ヲ伺度ト申入候ヘバ座敷ヘ通シ弟子僧壹人罷出今日ハ他行仕候ト申ニ付夫レハ殘念ニ存候ト挨拶之内火鉢ニ有之鐵火箸ヲ取リ扨々子供ノ様ナル事ヲ被成候御方哉ト申テ火箸ヲ縷戻シ兩手ニ持テ眞直ニ引延候ヘバ金平驚貴僧ト御師匠トノ御力量優劣如何ト尋候ヘハ我等力ヲ五人合セ候トモ中々師匠ニハ叶不申ト答候付金平ハ所詮不及事ト存シ早々歸リ候右ハ弟子僧ニテハ無之卽常菩提之由後ニ相知候

米倉傳五郎昌縄之事

按スルニ　徳川十五代史三卷ニ左ノ記アリ紀州ニ仕フトアレバ我藩士タルベシト雖モ家譜傳ラズ又元和御切米帳其他士籍人名中載スルモノナク事實如何ヲ知ルニ由ナシ暫ク揭ケテ再考ニ供ス

寛永四年三月八日大番ノ士興津七之助内田五郎左衛門ト謀リ米倉傳五郎昌縄ニ遺恨アリトテ押掛ケ鬪爭ニ及ヒ昌縄カ老母下知シテ遂ニ三人ヲ殺ス昌縄後紀州ニ仕フト云

南紀德川史卷之四十五

名臣傳第六

伊達政勝 源左衛門○按駿河分限帳、在大小姓衆之列、祿千石、

伊達政勝、系出于伊達宗村、初稱市藏、甫九歲、東照公召而祿之、命名與七郞、賜兼法短刀寵之、後南龍公、賜祿六百石、屢轉職、爲執政、祿至貳千五百石 伊達系譜

家譜

伊達源左衛門正勝 伊達常陸介宗村十七代伊達主殿助信正四男始市藏又與七郞覺彌隱居後了念

先祖常陸介宗村ハ下野國中村之領主ニテ中村時長ト申文治五酉年初テ奥州伊達ニ下向伊達常陸介宗村ト名乘申候

祖父加賀景信ハ今川家ニ仕ヘ義元桶狹間ニテ討死之時ハ駿府ニ留守罷在其後モ氏眞ニ隨身仕元和三巳年八月病死仕候

父主殿助信正初ハ　薩摩守忠吉卿ニ奉仕其後尾張義直卿ニ奉仕家督ハ六男甚右衛門ヘ讓隱居仕宗庵ト唱ヘ寬永廿年十二月病死仕候

慶長九申辰年月日不知九歲ニテ　權現樣ヘ被　召出童名市藏ト申候處嚴命ヲ以與七郞ト御改被遊被下其節兼法ノ短刀被下置今以所持仕候其後年月日不知

南龍院樣ヘ御附被遊御役儀知行高不知知行六百石被下元和五己未年御國替ノ節紀州ヘ御供仕後追々御加增被

下貳千石御家老被　仰付承應元辰年貳千五百石ニ御加增被成下候年月日不知　南龍院樣ヨリ覺彌ト改名被　仰付其後源左衞門ト相改寬文四辰年正月依願隱居被　仰付家督無相違總領角十郎ヘ被下延寶六戊午年五月三日病死仕候　于時八十三歲

按スルニ紀伊國人物誌、武勇之部ニ揭ケ寬永二十年十二月歿、葬于東阪感應寺境内ト死歿ノ年月誤レリ

正勝嫡子角十郎（後源左衞門）正種ヘ家督貳千五百石被下後三千石ニ御加增以下代々無相違相續御家老加判ノ列被　仰付五代源左衞門正博六代源左衞門正時ハ共ニ諸大夫但馬守ト稱シ正時ハ三千三百石ニ御加增七代源左衞門正義三千三百石御家老菊之間席之處元治二丑年正月廿一日不埒ノ品有之知行ノ内八百石被　召上御役御免大組格屹度愼被　仰付慶應三卯年五月依願隱居養子泰次郎正徹ヘ貳千五百石無相違被下虎之間席被　仰付タリ

一紀士雜談ニ曰ク　秀賴公二條御城ニテ御對面以後　右兵衞樣常陸介樣爲御名代大城ヘ御越被成候節於御城御供中ヘ御料理被下御給仕ノ衆已やくチ仕掛候樣子ニテ代リノ本椀ニ食チ山モリニ致シ候御供ノ内伊達源左衞門（此時甚角彌後剃髮號了心）少年ニテ御小姓ナリ椀チ出シ掛給仕ノ衆請取候ハント仕候時指ニテ赤ベイチ致見セ候チ出候椀チ引申候

竹本茂兵衞正吉
竹本茂兵衞正房

竹本茂兵衞正吉　附次郎左衞門正成

同　茂兵衞正房

家　譜

竹本茂兵衞正吉　竹本九八郎正重總領　生國三河

父九八郎正重ハ　權現樣ヘ奉仕天正十九卯年五月三日武州衆之鄕ノ内ニテ知行貳百石被下　御朱印頂戴ス

權現樣台德院樣ヘ奉仕之處慶長十七子年於駿河　南龍院樣ヘ被爲附大坂御陣御供仕元和五未年

竹本次郎左衛門正成

御國替之節紀州ヘ御供仕段々御役替御加増知行五百石被下町奉行相勤寛永元子年十月四日病死仕候

同次郎左衛門正成（茂兵衛正吉次男初傳藏寛永二十未年茂兵衛ト改隱居後休憹　生國武藏）

大坂御陣ノ節父茂兵衛正吉ト共ニ御供仕寛永元子年父家督五百石無相違被下大番被　仰付後大番組頭ニナリ萬治二亥年隱居被　仰付同年六月十七日病死ス

同茂兵衛正房（次郎左衛門正成總領初早之助又次郎左衛門隱居後遊快　生國紀伊）

萬治二亥年父茂兵衛家督五百石無相違被下後段々御役替御加増知行六百石被　仰付御旗奉行相勤元祿十六未年六月依願隱居正徳二辰年八月十七日八十八歳ニテ病死

正房總領茂兵衛正長父家督無相違相續寶永七寅年五月病死其子九八郎正綱幼少ニテ家督知行四百石大番被　仰付候處享保三戌年五月　淨圓院樣御供ニテ　公儀ヘ被　召出諸大夫被　仰付佐渡守又大膳亮ト稱シ以來代々御旗本ニテ相續

一右之通嫡家ハ　公儀ヘ被　召出タルヲ以テ二代次郎右衛門正成四男彌次郎（初彌吉又傳右衛門）正孝承應元辰年新規被　召出十人組御切米貳十石被　仰付後知行貳百石山家同心頭ニ昇進以來代々分家ニテ嫡家相續正孝ヨリ四代十之右衛門正受ハ天保四巳年四月貳百石寄合ニテ隱居總領善之丞正寛家ヲ繼ク

一彌次郎正孝長男次右衛門正伸部屋住ニテ被　召出御切米三拾石御近習番之處是亦享保元申八月四日　長福樣御供ニテ　公儀ヘ被　召出御小納戸被　仰付

一牧笛類叢ニ曰ク　竹本茂兵衛ハ關口柔心之弟子ニテ柔術ノ達者ナリ牧野兵庫召捕ノ節家ヨリ廣瀨大橋マデ出タル處ニ老父休悦跡ヨリ洗足ニテ追來リ膓當壹足携テ呼返ス故何事ヤラント馬ヨリ飛下リケレハ其方柔術ニテ兵庫ヲ組留候ハンナレ共彼モ田宮流之居合之上手ナレバ横ニ拂フ事モ有ルベシ膓當致候ヘトテ相渡ス茂兵衛押戴キ則着用參リ候由山口ニテ兵庫駕ヨリ出タル處ヲ組テ投ケタレバ案ノ如ク倒レナカラ脇差ニテ横ニ拂フ茂兵衛カ足ニ當リ膓當之骨三本切折タリ此ニ於テ休悦ガ考ヲ感シタリトゾ

按スルニ　牧野兵庫被　召捕ハ慶安三年十一月也老父休悦云々トアレバ此茂兵衛ハ正房ナルベシ休悦ハ即チ次郎左衛門正成家譜ニハ休幓トス蓋シ幓ト悦ト草書ノ字形相似タルヨリノ誤リナランカ且一本ニ兵庫ヘ申渡之節駕之内ニテ情ナキト云ナカラ脇差ヲ抜カントスル處ヲ茂兵衛スカサズ鐺ヲ返ヘシ脇差ヲモギ取リタリト是ト少差アリ暫ク原書之儘ヲ存ス

竹本丹後

竹本丹後吉久　始祖其外不詳　生國尾張

家　譜

一年月日不詳　南龍院様へ被　召出知行四百石被下御船奉行被　仰付後知行千石ニ被成下承應元辰年三月病死

總領角大夫後丹後　吉行父家督無相違被下御船奉行被　仰付延寶五巳年病死三代傳吉吉尊七百石御船奉行之處元祿十二卯年七月不屆之品有之安藤釆女へ御預ケ田邊へ被遣後追放被　仰付家斷絕ス

按ズルニ　紀伊國人物誌武勇之部ニ竹本吉久慶安五年壬辰三月七日歿ス年七十三、銘永田善齋誌、建高松寺境内トアリ

按ズルニ　寛文六年獄中刑人壹人モ無之ニヨリ郡奉行御代官ヲ御褒之上竹本丹後方ニテ振廻見物モノ拵モ申付終テ色々馳走

仕候樣ニト被　仰出（同年ノ本譜ニ記ス）又船手之竹本丹後方へ御入絲テ御遊宴ノ御能ヲ竹木ガ大夫ニ被　仰付云々（南龍公譜ニアリ）トモアレバ吉久ハ頗ル御信人厚カリシ事トハ察セラル

分　家

竹本一郎右衛門 丹後吉久三男 初兵藏

寛永八未年　南龍院樣へ新規被　召出御切米貳十石被下同十二亥年四拾石ニ御加增延寶六午年六月病死以下代々分家ニテ嫡家相續四代覺大夫似信四十石十人組之處不埒之品ニテ改易被仰付五代源右衛門似實歸參五人扶持小十人小普請末席ニテ文政十亥年正月病死弟貞藏似行相續ス

附錄

竹本五兵衛之事

竹本五兵衛之家譜傳ハラス駿河御附屬ナルヤ如何ヲ知リ難ト雖モ元和御切米帳ニハ高四百五十石萬治元戌年兵大夫ト改メ寛文二十年五兵衛ト改メ延寶四辰年八月病死跡目不分トシ又元和御切米假名寄帳ニハ高三百五十石トアリ宇佐美竹陰カ由緒ノ冑之記ニ云ニ原隱岐守ガ十王頭之冑ヲ竹本五兵衛所持セシ由ヲ記シテ曰ク傳來之譯ハ不存候ヘドモ此冑ヲ　南龍院樣御覽被遊候五兵衛悴兵大夫御改易之後拂物ニ成候テ名井仙兵衛方ニ御座候ヲ水野志摩守方へ拙者肝煎求サセ申候只今水野家ニ所持仕候原カ十王頭ノ冑迚甚名高キ冑ニテ御座候云々トアリ兎ニ角　龍祖ニ奉仕シ其子武

辰田喜右衛門直重

ハ孫ニ至リテ改易家斷絶ノ者ト察セラル

辰田喜右衛門

家　譜

辰田喜右衛門　實名不知　生國大和

畠山右衛門大夫高政ニ屬罷在候處同家來ヲ討立退其後年月日不知城州伏見名古屋丸ヘ大須賀五郎兵衛胤高被參候節浪人分ニテ百石ニ拾人扶持申請相勤息國千代忠次代百五十石給罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊原家爲繼跡上州館林ヘ被遣候節　權現様思召ヲ以横須賀黨過半御留置被爲遊此者共ハ度々骨折候故御秘藏ニ被爲思候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二丙辰年　南龍院様ヘ被爲附安藤帶刀直次相備被爲　仰付居成遠州横須賀ニ住居仕横須賀ヨリ駿河ノ御城番相勤元和五己未年　南龍院様紀州ヘ御入國ノ節御供仕罷越五十石御加增被下高貳百石ニ被　仰付同年月日不知病死仕候　年齢不詳

喜右衛門直重　喜右衛門總領 始名不知　生國山城

元和五己未年月日不知父喜右衛門爲家督高貳百石無相違被下其後　南龍院様被　仰付候由ニテ安藤帶刀直次横須賀組一統ヘ申聞候ハ紀州ノ内田邊ハ大事ノ要地ニテ候間横須賀ヨリ參候諸士之内小身者ヲ遣置候様ニトノ事ニ候然𪜈人指ハ無之間鬮取リニテ相究可然候彼地ハ草深キ處故馬ヲ飼ヒ候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩リニテモ致氣儘活計致候様ニトノ儀ニ付則鬮取仕候處喜右

衛門儀闔ニ相當リ候ニ付田邊ヘ罷越以來代々同所ニ居住仕相勤申候
一萬治元戌年八月二日病死仕候
以下代々貳百石田邊與力相續八代桂左衛門辭令文政十二丑年九月病死金右衛門通達跡目相續ス

高岡彌五右衛門

家　譜

高岡彌五右衛門政昌　高岡藏人仲光四代孫 高岡五郎右衛門仲善總領

大須賀出羽守殿ノ手ニ屬於上總久留利地方貳百石ニテ罷在候然處出羽守殿子息國千代殿榊原式部大輔殿ヘ養子ニ被　仰付候砌　權現樣ヘ被　召出候 御役祿不知
一元和二丙辰年 月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊於駿河知行貳百石被下置大番被　仰付候
一同五己未年八月御入國之節御供仕罷越候
寛永十八辛巳年 月日不知 病死仕候 年齡不詳
政昌總領市左衛門重時大須賀國千代榊原家繼續之砌國千代供ニテ相勤罷在候處父政昌家督相續シテ元和七酉年紀州ヘ罷越同八戌年部屋住ニテ被　召出御切米六十石被下後寛永十八巳年父ノ跡目大番組被　仰付知行貳百石無相違被下寛文三卯年病死以下代々相續九代一郎右衛門正信ハ明治四未年十一月依願隱居無役高五十俵總領喜一郎正邦ニ被下タリ

武村三右衛門専道

高城庄藏

武村三右衛門

武村三右衛門専道 武村三右衛門男 後泉阿彌 苗字竹村ト改

家譜

父三右衛門ハ攝州本願寺顯如上人内ニ罷在候由

専道儀慶長年中駿河ニ於テ　權現樣ヘ被　召出御同朋相勤御切米八拾石被下後　南龍院樣ヘ御附被遊五十石被下御國替ノ節紀州ヘ御供仕元和九亥年七拾石ニ成リ同年泉阿彌ト改寛永六巳年遷阿彌ト改明暦二申年病死

按スルニ 家譜ニ祿高及ヒ改名ノ事ナシ今元和御切米帳ニヨリ校正ス

専道總領左次右衛門家督八人扶持童子組ニ入苗字竹村ニ改ム後四十石伏見御屋敷奉行ト成リ正徳三巳年十一月病死以下代々相續五代目十右衛門景純ハ寛政十午年五十石高御徒頭格奥詰タリ

高城庄藏

高城庄藏 實名不知 初甚之助

家譜

養父喜之助重宗ハ小田原北條家ニ罷在伊豆國韮山之城二ノ曲輪ニ相詰小田原落城ノ砌リ浪人仕其後　權現樣ヘ被　召出現米五十石被下御鷹匠勤ニテ病死ス

庄藏儀　權現樣ヘ新規被　召出御切米百俵被下御鷹匠相勤其後於駿府　南龍院樣ヘ御附被遊御入

國ノ節紀州ヘ御供仕元和八戌年六月十九日病死

養子庄藏時重家督無相違被下御鷹匠ニテ病死總領甚之助相續病死嗣子無之嫡家斷絶ス

分　家

庄藏重張 庄藏時重二男

父取來現米ノ内拾五石分知被下御鷹匠相勤後段々御役替御加增三十石御留守居番ニテ享保八卯年九月病死以下代々分家ニテ相續重張ヨリ四代九左衛門義著ハ寛政十午年御切米十三石小十人小普請タリ

高橋惣兵衛

家　譜

高橋惣兵衛 實名不知 高橋大和守秀宗後胤 初與四郎 生國駿河

年月日不知　權現樣ヘ奉仕年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊御切米三拾五石被下置御役不知元和五未年八月御入國ノ節駿河ヨリ御供仕紀州ヘ罷越明曆元未年八月三日病死

惣兵衛二男與四郎初庄兵衛秀周父跡目相續後貳百石大番組頭ニテ病死其子庄兵衛定賢相續之處寶永四亥年十二月姉不作法之品ニテ御吟味之砌リ不都合ノ儀ニ付御暇家斷絶ス

分　家

高橋與吉利之 惣兵衛長男與大夫利芫總領 初左平兵衛

明曆三酉年部屋住ニテ被　召出表御小姓被　仰付後御切米三拾石御留守居番以下代々分家ニテ嫡

家相續五代爲吉利和御切米五十石御納戸頭格奥詰ニテ文化十酉年九月病死養子正九郎利尚相續ス

瀧村瀬左衛門

瀧村瀬左衛門光重　瀧村瀬左衛門三男 生國駿河

家　譜

年月日不知於駿河　權現樣へ被　召出　養珠院樣此節奉唱候チマン樣トへ被爲附御徒相勤朝比奈惣左衛門支配ニテ御駕之者御預御側近被　召仕大坂御陣之節　南龍院樣御陣場へ御陣羽織被進候御使相勤其後江戸表へ御供仕寛永八未年五月七日病死

光重總領長左衛門光政承應三午年幼年ニテ御切米十石五斗被　下御廣間へ相詰十八歳之時　御意ニテ元服御徒被　仰付　養珠院樣御逝去以後丸山御庭之内清水蓮池御預被遣大奥向御用ヲモ相勤天和二戌年病死以下相續四代瀬左衛門光長ニ至リ御目見以上ニ成リ七代次郎七光尚貳拾石大御番格小普請ニテ文政十二丑年十一月不埒之品ニ付隱居愼被　仰付養子助左衛門光至相續ス

竹谷助大夫

竹谷助大夫　實名不知　美濃部右馬頭三男 生國近江　後代本苗美濃部ニ復ス

家　譜

在故苗字竹谷ト相名乘申候遠州於濱松年月日不知　權現樣へ被　召出御駕之者支配被　仰付御切米百

石被下置文祿元壬辰年朝鮮陣之節御供仕肥前那古屋之御陣ニ相詰申候元和五己未年月日不知　南龍院樣ヘ御附被遊同年御國替之節紀州ヘ御供仕其後御城下番所見廻役相勤寛永十九壬午年九月七日病死仕候　于時八十歲

總領助大夫 初名不知 父跡目被下如父時御駕之支配被　仰付以下四代迄代々御駕之者支配ヲ勤六代三郎大夫拾貳石三人扶持御徒目付ニテ明和二酉年二月不埒之品有之追放嫡家斷絕ス

一三代善兵衛正綱二男兵彌元祿十六未年新規　主稅頭樣御徒ニ被　召出木苗美濃部ニ改メ以下代々分家ニテ嫡家相續六代權十郎惟寅ハ御切米貳十五石三十石高御書院番組頭ニテ文久三亥年十二月病死總領豹次郎寅正嗣ク

田代角兵衛 附田沼專左衛門重意

田代角兵衛 實名不知 清水監物男 生國相摸

家　譜

父清水監物ハ豆州韮山城主ニテ壹萬石ヲ領シ北條家之幕下ニテ御座候角兵衛儀相州田代寺ニ由緒有之田代ヲ名乘リ松平下總守殿ニ仕罷在候處追テ　御家ヘ被　召出候

年月日不知於駿河被　召出段々結構被　仰付知行三百石被下置元和五未年九月七日病死仕候

角兵衛儀勢州桑名城主松平下總守殿ニ仕罷在候或時同國一志郡邊ヘ鷹野之供ニ參候處同所日置之池中ニ辨天嶋有之此邊ヘ折々大蛇出候テ人ヲ害シ候噂ニテ行人等無之趣ニ御座候處角兵衛儀池ヲ

遊越候テ右之嶋へ上リ候處角兵衛頭之上へ大蛇覆候テ既ニ同人ヲ呑ント致シ候處差添之鈒ヲ抜キ終ニ大蛇ヲ退治仕候然ル處天俄ニ曇リ大雨車軸ヲ流如クニテ御座候故下總守殿大ニ立腹仕暫テ賞之沙汰無之剩咎ヲモ可申付樣子ニ御座候付其夜桑名ヲ立退駿河へ罷越此段　南龍院樣へ申上候處御用ニ可相立者ト思召即刻被　召出官祿被下置候角兵衛ハ水藝之達者ト申傳へ罷在候右之斷蛇劔ハ同人次男田代七右衛門重章家ニ所持仕候

按スルニ 此事祖公外記附錄ニモ出タリ而シテ角兵衛ヲ角右衛門松平下總守ヲ松平越中守ト記シ駿河へ來タルヲ紀州へ來ル事トナス共ニ此家譜ノ趣ヲ誤傳セシモノナルベシ

一御香爐金之茶具ヲ盜取缺落仕候處知音之子細ニテ御小姓清水三十郎追テ立退申候ヲ田代角兵衛遠藤兵右衛門ヲ討手ニ被　仰付駿府ノ寺ニテ討取申候清水ハ十八九歳ノ角前髮ナリ御國替之砌ニテ彥坂九兵衛御跡仕廻ニ殘リ居被申候内ニ候依之九兵衛へ兩人斷置申候寺へ仕掛候節三十郎サトリ早速着込ヲ固メ申候鉢卷ハ得取合セ不申候田代强力故先へ入兩腕ヲ取スクメ候時勝手ヨリ若黨罷出田代ヲ一刀突ヱクリ申候處へ遠藤切込ハタシ合セ候へドモセマキ處故御鴨居へ切付候處ヲタヽミ付切ラレ候眉見ノ血眼へ入倒レ申候三十郎留メニ不及裏道へ立退候九兵衛ヨリ事聞候與力五人兼テ被申付裏口ニ待伏切合申候 竹内勘右衛門山路權三郎渡邊市郎兵衛三嶋十右衛門今壹人名失念 三十郎必死ノ働何レモ仕アグミ渡邊着込心付頭ヲ切候へト聲ヲ掛ケ漸仕留申候

一此節三嶋ヲ後ヨリ若黨切付候處取合候へバ垣ヲ飛越逃候ヲツヾイテ飛越へ追テ切留申候

一渡邊ハ以前强盜仕候者ニテ被召捕候處ニ一命御助ケ與力ニ被爲入置候隨分究竟之者ニテスカサズ持病ニテ打留候時三十郎ハナガミ袋ニ小柄ヲ奪取後々マテ所持致候殘リ四人ノ與力ハ右ノ樣

子見付不申不存候由渡邊ハ子細有之大高源右衛門妹聟ニテ有之由ニ候

一寂前寺へ入候時門前ニテ田代小便可仕ト申候處遠藤儀モ心得小便仕候田代其隙ニ先へ入申候セバキ廊下故三間程通リ三十郎ニ仕掛申候由

一五人ト働候内下ヲク丶リ候抔前髪地ヲハラヒ候様ニ相見へ候蝶鳥ノ如ク牛若ナトヽ様ニ候哉ト存ル程ニ覺へ候由後ニ竹内語申由竹内モ眉間ニ壹ヶ所手負後々マテ其疵之跡有之候竹内噺ニ三十郎働ク内道具ヨクノビ候テ長刀ノ様ニテ大方五尺程モ覺相見へ候後ニ見候ヘハ貳尺三寸程ノ刀ニテ有之候由田代ハ以前上橋様ニ罷在蛇切角兵衛ト異名有之者ナリ　以上記士雅談

一角兵衛總領庄九郎駿河ヨリ御奉公仕父爲跡目知行三百石無相違被下寛文元丑年五月病死以下代々相續八代楠大夫虎久七拾五石高御供番ニテ天保五午年八月病死二男熊之助常方相續ス

一角兵衛次男七右衛門重章モ駿河ニテ　南龍院様へ被　召出後三百石御目付相勤寛文十戌年正月病死以下代々別家ニテ相續八代織部成美ハ百五十石御小姓組ニテ天保三辰年九月病死總領大八郎成禮相續ス

田沼專左衛門重意　初名專之助

專左衛門ハ田代七右衛門重章之養子實ハ菅沼半兵衛悴之處由緒有之七右衛門養子ニ被　仰付御伽ニ被　召出田代之一字ト菅沼之一字トヲ取リ田沼ト名乘家之紋ハ田代之常紋七曜ヲ用ヒ候様被　仰付後御小姓五拾石ニテ　有德院様　公儀御相續之節御供ニ被　召連正德六年六月廿五日御小姓三百俵諸大夫被　仰付主殿頭ト稱ス享保十九年二月沒ス其子主殿頭意次幼キヨリ　惇信公ニ仕ヘ

父ノ後ヲ承テ六百石ヲ領シ　惇信公ノ御世頻リニ御登用寶暦元年御側衆トナリ續テ萬石ニ列セラレ後城主トナリテ遠州相良城ヲ築キ遂ニ御老中五萬七千石ニ至ル嫡子山城守意知亦若年寄トナリテ父子權勢世ニ並ブモノナカリシガ山城守意知ハ終ニ佐野善右衛門ノ爲メ殿中ニ刺サル世ニ有名ナル田沼騷動トハ是ナリ

田中由貞　按駿河分限帳在寄合衆之列、祿千二百石、

田中由貞、初稱彦六、後改勘兵衛、又改玄蕃、父曰九助由榮、世住近江高嶋郡宮部庄田中村、父子共仕宮部善祥坊法印、繼潤及其子兵部少輔、屢有戰功、後居因幡鳥取城、及上杉景勝叛、兵部黨景勝、由貞乃去、投田中吉政於岡崎、吉政請之東照公、從關原役爲先鋒、有殊功、及吉政封筑後、從而移焉、吉政歿無子國除、公乃召由貞而祿之、賜千二百石、由貞初以黑天衝爲背旗、公命改金天衝、寛永十五年歿、年七拾、田中家譜

田中玄蕃由貞　田中九助由榮嫡子　初彦六　又勘兵衛　生國近江

家　　譜

父九助由榮ハ江州高嶋郡宮部ノ庄田中村ノ住人ニテ父子共初宮部善祥坊法印其息宮部兵部少輔二代ヘ仕ヘ因幡國鳥取ニ住居景勝御退治之節兵部少輔ニ屬シ關東ヘ下向ノ處上方筋謀反ニ付　權現樣御出馬ノ節兵部少輔石田治部少輔ト申合有之村玄蕃初頭立候者十騎餘モ不和ニ成兵部少輔ニ離レ申候其節田中兵部大輔吉政三州岡崎ノ城主ニテ有之元ヨリ玄蕃トハ同生國同名由緒モ有之ヲ以テ岡崎ヘ罷越此度之先手相勤度旨申候處其段達　權現樣御耳關ケ原御陣之兵部大輔先手相勤岐阜

城幷關ヶ原表ニテ鑓合武功等有之佐和山城攻ニ城乘働等有之其後兵部大輔筑後國拜領仕罷越候付
其息筑後守共二代ヘ玄蕃儀附キ居申候後ノ筑後守跡職無之付筑後國爲御仕置秋元但馬守被　仰付
被下候節　南龍院樣可被　召抱旨但馬守ヘ被　仰遣候由ニテ但馬守取持ヲ以テ御入國ノ砌御懇ノ
御意ニテ御家ヘ被　召出候

一玄蕃指物ハ黒之天衝ニテ候處被　召出候砌　南龍院樣思召ニテ金之天衝ニ仕候樣被　仰付其通リ
ニ仕此外因州鳥取城攻越中陣紀州太田陣筑紫陣小田原陣高麗陣ノ節々宮部善祥坊ニ附隨働等有之
候

一元和八壬戌年月日不知御切米五百貳十石被下置　御役不知

一同九癸亥年月日不知知行千三百石被　仰付

一寛永十五戊寅年十月二日七十歳ニテ病死　以上家譜

一南陽語叢ニ曰ク　天正十五年秀吉公薩州征伐ノ時耳川越之根白トイフ處ニ砦ヲカマヘ宮部善祥坊木下龜井垣屋福原等壹萬五
千ニテ堅メタリ此時嶋津方ヨリ夜討ヲ懸ル善祥坊一番鑓ト名乘其手ノ兵ニ田中九助其子彦六國友半右衛門三田村太郎右衛門等
二番鑓ヲ合ス此田中彦六後勘兵衛ト改メ又圖書共云紀州ヘ奉仕ス則田中勘八其後也（按スルニ圖書ト稱セシ事家譜ニ見ヘズ）

一龍稜威ニ曰ク　九助ハ六條河原ニテ石川五右衛門ガ御仕置ニ引カルヽ時繩取等ヲ切リ散ラシテ五右衛門ニ面會シ舊恩ノ禮謝
ヲ伸ヘ又多勢ヲ切ヌケテ命ヲ全フシタル豪士ナリト云々

一按スルニ　玄蕃由貞子孫ノ成立左ノ如シ
由貞總領市之丞部屋住ニテ御小姓ニ被　召出病死次男作右衛門ハ他藩ヘ養子依テ三男三右衛門一氏父之家督ヲ嗣キ千三百石之
內八百石被下延寶四辰年正月隱居總領三右衛門由房六百石相續之處貞享二丑年五月出奔嫡家斷絶ス

一由貞四男杢右衛門初七郎兵衛由久父知行千三百石ノ內三百石被下別家ニ相立彦六由勝彦六正周彦

六正連マテ四代相續之處正連事延享五辰年七月出奔家斷絶ス

龍稜威ニ曰ク　田中家名斷絶ニ及ヒ其子弟大勢アリケルカ上田新五右衛門ハ縁者ナレハ皆々上田ノ厄介トナリ其中ノ壹人御旗本安藤和泉守ノ養子トナレリト云々

右新五右衛門ハ正周三男ニテ上田傳五右衛門之養子トナリ正周四男某安藤郷右衛門之養子トナリ後彈正少弼惟虔ト稱ス後天明元丑年ニ至リ右安藤彈正少弼ヨリ内願之旨ヲ以テ正連之孫定次郎由煕五人扶持十人組並ニ被　召出家名御立以下代々相續近代江戸常府麹町御殿勤番勘兵衛家是ナリ

田中九助由重

一由貞五男九助由重　初佐平太 又十左衛門

寛永十三子年二十五石中小姓ニ被　召出同十六卯年父知行千三百石之内貳百石被下總御具足奉行大番組頭山家物頭等ニ歴仕元祿十二卯年十月病死同姓杢右衛門由久之三男勘八由昌其養子トナリ三百石表御小姓頭格ニテ享保十九寅年病死以下代々分家相續七代勘八由徵明治二年年隱居無役高五十俵ヲ總領光太郎由常ニ被下タリ

田中七三郎由恭

田中七三郎由恭　勘八由昌長男　號履道

享保九辰年正月部屋住ニテ御切米拾五石大小姓ニ被　召出同十巳年御近習番トナリ後御役御切米被　召放七人扶持被下追テ御扶持方差上履道ト改名家督相續不致明和七寅年八月病死

右七三郎ハ文學ヲ善クス紀伊國人物誌儒家ノ部ニ

田中由恭、字履道、號峒嶁　稱勘八、學祇南海、旁善書、明和七年庚寅八月十九日歿、年七十有六、葬車坂延壽院境内、碑銘祇園尙濂撰、

〔勘八ト稱ストハ誤ナリ勘八ハ其父ノ通稱也又南紀風雅集ニモ同人ノ小傳ヲ記シ履道一ニ鳳泉ト號ス本藩士族嘗テ仕ヘヲ罷メ文雅ヲ以テ事トナストアリ御役御切米被　召放シ理由詳ナラス其詩作風雅集ニアリ〕〔　〕內一本ナシ

田中源兵衛好問

家譜

田中源兵衛好問　田中伯元可述養子 實日高郡小松原村醫師久保田平四郎教春二男

延享二丑年十二月田中伯元可述御匙醫並御切米八拾石養子被　仰付同三寅年十月養父伯元跡目被　仰付二拾人扶持ヲ賜フ醫業ヲ襲キ寶暦十二午年十月御扶持方ヲ御切米五拾石ニ被成下後追々御加増八拾石ニ成リ安永二巳年二月還俗改名被　仰付遂ニ御徒頭格知行三百石御足米四拾石ヲ賜リ終始　大眞公ノ奥詰勤仕寛政八丙辰年十二月廿五日八十九歳ニテ病死ス

按ニ南紀雅風集同人ノ小傳ヲ掲ク曰ク　田中好問號佩蘭、本姓久保氏、日高郡人、少遊京師、事伊藤東涯有年矣、後爲田中氏嗣、稱源兵衛、官跡頗顯、寛政丙辰卒、年八十九、

官跡顯ルトハ如何ナル事蹟アリシヤ不詳頻リニ寵遇ヲ蒙リシモノヽ如シ

高井伊織

公侍臣間宮久彌有罪、公痛責之、後公從外歸城中、偶見久彌、公又責之而入、久彌從而入脫刀引頸而進、公直斬之山本正春圖書乃上別刀受其血刀而退、公眼如木、謂左右曰、久彌有罪予手斬之、汝等以爲如何、

皆拜曰、孰敢咎公、獨高井伊織默然、公曰、汝面以不平者、豈以予爲非乎、有説宣明陳之、伊織曰、久彌有罪、而刑之可也、獨不煩公親下手耳、夫在軍、公親下手、是出於不得已、今居治世、班三位之高、而輕擧如是、不敬甚矣、臣懼以爲衰運也、因泫然涙下、公辭屈而入、後召伊織謝曰、嚮汝言、甚有理、予誓戒他日矣、後伊織從公日光廟、在大桑村營、與松平信康、久七郎有違言鬪死、公聞而深惜之曰、往年伊織、諫予斬久彌、精誠切至、可謂忠臣、因問其後、有一女子、乃使花井某繼之、稱五左衛門、伊織父曰助次郎、仕今川氏眞云、 南龍公言行錄

大君言行錄ニ曰ク 寛永元年年甲子二月廿五日日光御下向之時大桑之御旅館ニテ松平久七郎康信（松平石見守康安四男）ト高井伊織喧嘩ニテ打果ケルニ 賴宣君殊之外ヲシミ給ヒ伊織ハ主君之爲メニハ身命ヲ捨奉公ノ誠ヲ盡シケル者ナリ先年間宮久彌ヲ手打ニセシ時之忠節ノ諫言世ニ稀ナル武士成シヲ扨モ不便殘リ多キ事ナリトテ子ヲ御尋有リシニ娘壹人（實ハ妹ナレ氏養子被 仰付）有テ男子ナケレバ花井ガ子ヲ實名跡ニ被 仰付高井五左衛門ト號シ伊織ガ跡ヲ相續被 仰付候

私曰 伊織ガ祖父高井助次郎ハ今川氏眞之家臣ニテ氏眞方々浪々ノ時随分忠節ヲ致シ奉公ス長久手ノ合戰前ニ御家ヘ御預リニテ 權現樣ニ御奉公長久手合戰之手ニ不合高名無之候付助次郎殊之外無念ガリ候ニ御聞被成 權現樣御意ニハ主君今川氏眞ニ附シタカヒ牢浪カンナンノ奉公仕候段忠節大切此上アルヘカラズ候今日手合タルヨリ氏眞ヘノ奉公ガ手柄ナリト被 仰候其助次郎子ハ助兵衛其子伊織ナリ

按ズルニ 高井伊織之家譜傳ハラズ左記元和御切米帳及ヒ 大憲公譜正德六申年八月八日 長福樣御供ニテ公儀ヘ被 召連面々之内ニ千石高井五左衛御書院番頭格只今迄ノ通リ相詰奥向諸事御用相勤申可候先知之通リ被下之御役料ハ無之旨被 仰付ト記載アレバ全ク御旗本トナリシナリ右五右衛門諸大夫拜名飛彈守ト稱シ其子五左衛門モ享保二酉年二月 公儀ヘ被召出タリ

元和御切米帳ニ

高四百石　　　　高井善七

正保二酉年五左衛門ト改天和元酉十二月

隠居被　仰付知行無相違同苗善七ニ被下

駿河ヨリ御附屬御役々姓名帳ニ

四百石　高井善七

子孫高井飛驒守トアリ

元和御切米カナ寄帳ニ

高五百五十石（内二百五十石御加増）高井伊折

田屋菊右衛門

田屋菊右衛門（按駿河分限帳在大番衆之列、祿二百五十石、）

田屋菊右衛門、初稱右馬之介、又稱五郎左衛門、嘗以武聞、大坂役、屬塙正之、與木村喜左衛門、畑角大夫、牧野湖太、夜攻蜂須賀氏營、力戰有功、後喜左衛門死是役、角大夫仕稻葉正則（美濃守）湖太仕本多忠利（長門守）於是、公召菊右衛門而祿之、（武勇物語）

一南陽語叢ニ曰ク　塙團右衛門直之手ニテ蜂須賀之陣ヘ夜討ヲ懸ケル時、木村喜左衛門、畑角大夫、牧野湖太、田屋右馬助四人鑓ヲ合ス此内右馬助、持道具長刀ナリ團右衛門長岡監物御宿越前ニ問テ言、田屋カ手前鑓ヲ合ストハ被申上マシト言報アリ、イカニ、御宿答テ言鑓モ樫ノ柄長刀モ樫ノ柄ナレバ同事ナリ長刀ハ短カケレバ猶強キ働也ト議シテ事濟ス木村ハ落城之刻討死畑ヲハ稻葉美濃守召抱ラレ牧野ヲハ本多中務大輔抱ラル田屋ハ五郎左衛門ト改ム紀州ヘ被　召出菊右衛門ニ改ム（祖公外記附錄ニモ載ス）

菊右衛門之家譜傳ハラズ元和御切米帳ニモ見ヘズ唯駿河ヨリ御附屬御役々姓名帳ニ大番衆二番ニ

百石田屋左郎左衛門トアルノミニテ他ハ分リガタシ

田所平左衛門

家　譜

田所平左衛門季豐（田所宗喜季幸總領　始平竹　生國紀伊）

遠祖従五位下、壺井主計正宗成後胤、散位大夫成實ト申者紀州名草郡五ケ庄ヲ領シ其子三郎大夫成幸、同郡三葛村ヲ開發仕、其孫幸季儀、建保六戊寅年將軍實朝公之御下文貳通兩度ニ給ヒ其子兵衞、尉季高建治三丁丑年鎌倉惟康親王御下文給ヒ候右代々之下文ニ田所職ト認御座候付自然家苗田所ト唱ヘ候儀ニ御座候成實ヨリ十代目左兵衞尉季榮儀正平十二丁酉年七月　後村上天皇ヨリ任左衞門少尉平季榮ト　宣旨被下置候付平姓ヲモ名乘申候十二代平左衞門季幸儀享德三甲戌年五月足利將軍義政公ヨリ五家庄領家証文給リ十六代宗久算季儀桑山果報院若山居城之節郡司職相勤十七代宗喜季勝天正五丁丑年雜賀中津合戰之砌相働織田將軍ヨリ感狀貳通給リ候其子平左衞門季豐儀慶長五庚子年桑山修理大夫新宮城主堀内安房守ヲ攻候節修理大夫ニ屬シ相働其後大坂方ヨリ一味仕候樣申來候得共同心不仕候テ淺野但馬守手ニ屬シ泉州樫井ニテ相働申候

元和五己未年　南龍院樣御入國之節山口マデ御迎ニ罷出御目見仕候處御城へ御供仕候樣被　仰付御供仕候處御初入之御供仕候付駿河以來御譜代同前可相心得旨　御意被成下候

一同年月日不知被　召出御藏米拾石被下置御代官被　仰付在役人ヘモ地理之品能申合候樣ニ被　仰

付候

一同年月日不知由緒之儀御尋被遊候付系圖並　宣旨下文感狀其外古代之書付等指出候處　御覽被遊年經候ハヽ文字難見可相成トノ御事ニテ李梅溪ニ御書ヲ被下置最右本書共所持仕候

一同年由緒之品ヲ以名草郡三葛村ニテ高百五十石之諸役引高永々被下置候旨被　仰付寛永三丙寅年御加增被　成下都合御切米三十石被下置候

一寛永十九壬午年六月廿一日病死仕候　于時六十六歲

季豐總領久三郎後平左衞門季茂部屋住ニテ當分御前奉行有田郡奉行等被　仰付寛永十九年父跡目無相違被下置六代平左衞門季佖マテ代々郡奉行又ハ御代官勤之處季佖安永三年年四月不心得之品ニテ御役御切米被　召放七人扶持ニナリ七代三郎大夫季廷ハ貳十五石大御番ニテ文化十二亥年十二月隱居總領平左衞門季寀ヘ家督貳十五石被下大御番被　仰付タリ

曾根孫太夫長次

曾根長次　孫太夫○按駿河分限帳、在御鉄炮衆之列、祿千石

曾根長次、父曰孫太夫長一、屬高天神城主小笠原氏助、天正二年、武田勝頼、大擧來攻、氏助出降、長一不肯降逃走濱松城、東照公喜焉、以屬大須賀康高、九年高天神役、先登有功、小田原役、與久世廣宣坂部廣勝丹羽氏吉、福岡光忠、丹羽氏廣、渥美勝吉以積功、同賜上總地貳千百石、各分領三百石、大坂役、長一既致仕、隱於遠江城東郡朝比奈村、東照公命安藤直次强起之赴軍、元和三年歿、子長次襲家、屬公、寛永十七年歿、子長重襲家、致仕號一閑、元祿五年歿、　曾根系譜

曾根孫太夫長次 曾根孫太夫長一總領

父孫太夫長一 隱居後兵右衛門 ハ遠州高天神之城主小笠原與八郎 後彈正 手ニ罷在　權現樣へ御味方仕候天正二甲戌年正月武田勝頼大軍ヲ率テ高天神城ヲ責候節城主與八郎勝頼方へ降參仕其節降參不仕者共ハ濱松へ參リ孫太夫儀モ濱松へ罷越　權現樣へ御目見仕候處城主ノ不儀ニ一味不仕致參上候忠節ヲ以御本國御譜代御同前ニ被爲　思召候トノ奉蒙　上意濱松其外向寄所々ニテ各屋敷被下置御奉公仕候尤武功之者共ニ候故御先手へ被爲遣候由ニテ大須賀五郎左衛門康高へ御預被遊　權現樣於遠州馬伏塚甲州方ト御取合之刻相働敵壹人討取天正四丙子年高天神城兵粮入ノタメ武田勝頼城東郡へ出張之節　權現樣横須賀表御出馬ニ付勝頼ハ鹽買坂ヲ避テ濱邊ヲ押通其內敵少々此坂へ掛通候ヲ味方衆合遮之付孫太夫壹番ニ鎗ヲ合候此度鹽買坂ニテ之鎗合無比類働之由渡邊金太夫其外何モ稱美仕候其後孫大夫子細有之テ横須賀ヲ立退柴田修理亮方ニ三ヶ年浪人ニテ在住之處　權現樣御一戰之節 場所年月不分明 馳參敵壹人討取首奉入　上覽依之御勘氣御赦免被遊遠州高天神沖洲ト申所ニテ鎗合有之匂坂惣十郎熊谷小次郎曾根孫太夫福岡太郎八高名仕天正十八庚寅年相州小田原御陣之節武功之働有之翌辛卯年七月從　權現樣於上總國爲御重恩貳千百石右孫太夫久世三四郎坂部三十郎丹羽彌惣福岡太郎八丹羽金十郎渥美源五郎ニ被下置三百石宛配當可仕旨被　仰付御代官證文私方ニ所持仕候右御證文寫

渡申御重恩之事

一千七百卅五石貳斗九升五合　　横田之郷
一百九拾七石七斗九升五合　　山中之郷
一百六拾六石九斗壹升　　根岸之郷
合貳千百石者

右何茂三百石宛之御重恩ニ候其積ヲ以御配當可被成候御朱印者重テ可被御申請候以上

卯七月吉日　　大久保十兵衛
　　原田さ左右衛門

曾根孫太夫殿
久世三四郎殿
坂部三十郎殿
二羽彌三殿
福岡太郎八殿
二羽金十郎殿
あつミ源五郎殿

右七人之内孫太夫太郎八金十郎源五郎子孫紀州ニ罷在于今御加恩知所務仕候慶長年中不知月日隠居被　仰付總領ニ家督無相違被下置孫太夫儀ハ御斷申上横須賀へ引込罷在候處大坂御陣之節　權現様ヨリ御使安藤帯刀ヲ以テ御意被成下候ハ於國様御幼少ニ候之間横須賀之者トモ曳廻可參由

被爲　仰付候處隱居仕罷在候間御免被成下候樣御辭退申上候得共今度之儀ニ候間横須賀之者共
召連參候樣左候ハヽ新知五百石可被下置旨尙蒙　上意候付大坂へ罷立兩御陣相勤申候
一右御陣之節安藤帶刀ヨリ申越候書狀寫
松助たにもた奉行之儀異見被申候樣ニト申越候處ニ煩氣ニテ御理リ可有由承候五郎左衛門ニ
テハ•若少ニ御座候間今度ハ　上樣へノ御奉公ニ御座候間御出候テ萬指圖迄モ被申候樣可然（•若か本ノマヽ）
存然候御陣相濟候ハヽ御取合之儀ハ可申候間其御心得シテ可有御遣候恐々謹言
十月九日　安藤帶刀　名乘書判
曾根兵左衛門殿
參
一年月日不知從　權現樣台德院樣へ被進候　御自筆御書　台德院樣ヨリ拜領仕御座候右寫
尙々早々下待入候
年頭祝儀而書狀祝着至候我々無何事そくさいにて候可心安かる候頓而下待入候恐々謹言
正月十九日　家康
中納言殿
一元和三丁巳年四月廿二日病死仕候　年齡不詳
孫太夫長次慶長年中月日不知父孫太夫爲家督高千百石被下置候御役儀不知　元和五未年　南龍院樣へ御附被遊

元和年中御國替之節紀州ヘ御供仕候役儀不知寛永十七庚辰年九月廿六日病死仕候　年齢不詳

孫太夫長重　長次總領　隱居後一閑

寛永十七庚辰年月日不知父孫太夫爲家督高千百石無相違被下役儀不知天和二壬戌年正月十七日依願隱居被仰付家督無相違總領十太夫ニ被下元祿五壬申年十一月四日病死仕候　年齢不詳

以下代々相續九代孫太夫長則ハ知行千石大寄合ニテ安政三辰年八月病死嫡子衞門長傑家ヲ嗣ク

御加恩知三百石ハ代々無相違相續セリ

一祖公外記ニ曰ク　曾根孫太夫長重渥美源五郎正明ハ同心頭ヨリ御先乘被　仰付候節辭退仕候得共當分相勤候樣トノ　御意ニ付無據御受申候然共自然之節ハ必御先ヘ被遣被下候樣申上候得ハ御聞屆被遊候依之御先乘組之足輕ハ附不申自分之組ニテ相勤候

一南陽語叢ニ曰ク　曾根孫太夫或時横須賀四組年頭御禮ハ組ト打込年番ニ相勤サセ申度旨申上ル　南龍院樣御意ニ安キ事ナリ然ハ先手チモ十二組打込順番ニ可被　仰付之旨被　仰下孫太夫承リ左樣ニ御座候得ハイヤニテ候ト申上ル物頭ハ番頭同意ニ一手之働ナリ御先乘ハ御旗本ニテノ勤ナリ依之古代ハ物頭ヨリ御先乘ニ成事チハ本意ト不存事ナリ

園田榮久　伊兵衛〔按駿河分限帳、在御弓頭衆之列、祿八百石、〕

園田榮久、父曰刑部某、仕武田氏、榮久仕公、賜祿貳百石、大坂役、從而有功、增賜百石、嘗有幕府俠士三人、內藤左近等結黨兇暴、爲害横行府下、官命捕之、三人者覺乃去、放浪四方、官乃命諸藩物色之、一日三人者、逃入於藩、投宿山口驛、驛吏馳報府城、有司會議、將擇三壯士遣之、公以榮久爲忠果有謀、擧置其一、榮久辭固、命不聽、公曰、榮久非徒拒命者、召見詰之、榮久曰、此一難事、欲同遣三人、臣請辭、公曰、獨任汝

如何、榮久乃奉命、不歸家而發、至二人者旅館、請見曰、予紀侯使也、侯使予諭卿等曰、追捕甚嚴、終不可免、與落匹夫手、何若快然自裁、宜速決意、予請介錯、（邦言、助自裁者、謂之介錯、）於是二人者奪膽、相對默然、榮久厲聲喝曰、捕手在門、非再思時、縱令卿等勇戰、安得破圍哉、誤落匹夫手、紀侯爲卿等惜之、於是二人者起拜曰、謹謝侯意之辱、就坐自裁、榮久介錯還報、公賜刀賞之、初榮久辭二人同行者、慮議或不諧、遷延誤機也、榮久後爲大普請奉行、增祿至千五百石、承應二年歿年七十、（園田系譜紀士雜談）

家譜

園田伊兵衛榮久　（園田刑部總領　生國甲斐）

父刑部儀ハ武田逍遙軒ニ附屬仕伊兵衛儀於駿州（年月不知）一位樣御肝煎ヲ以テ初テ　權現樣へ御目見仕則御奉公仕（御役儀不知）慶長十乙巳年（月日不知）　南龍院樣四歳之節御附被遊同十三戊申年二月十九日御知行貳百石被下置御朱印頂戴仕于今所持仕候（御朱印ハ常陸國茨城郡ノ内池野邊村之内百三十三石那賀郡之内市毛村之内六拾七石合貳百石宛行詮云トアリ）大坂御陣之節南龍院樣御供仕候處味方崩候節能續キ樣子能候段達　上聞候由ニテ　南龍院樣ヨリ百石御加增被下同五己未年紀州へ御國替之節御供仕候　台德院樣御代（年月不知）內藤左近同主膳御咎有之候處逐電仕候付御尋有之候節右兩人之者馬口勞壹人召連紀州表へ罷越山口ト申所ニ止宿仕候付討留候樣ニト被　仰付彼地へ罷越右兩人並馬口勞共討留則左近主膳兩人之首江府へ持參仕差上申候處松平伊豆守殿御取次ニテ　台德院樣へ御目見仕候其後御役替御加增被仰付千五百石被下大普請奉行相勤及老年依願隱居被　仰付惣領六太夫へ家督無相違被下候處六太夫病氣ニテ退身仕知行差上候付右知行伊兵衛隱居以後再被下所務仕承應二癸巳年八月五日病死仕候　（于時七十歲）

榮久三男兵十郎（後伊兵衛）榮有ヘ跡目五百石被下以下代々相續六代彦兵・榮支（一備大カ）ハ知行七百石大寄合格ニテ慶應四辰年依願隱居嫡子彦太郎榮ニ七百石之内六百五拾石被下虎之間席大隊長被　仰付タリ

一南龍院殿之時園田伊兵衛榮久（三百石物頭）或正月元旦之夜夢想ヲ見ル「初春ニソノタクヒナキ朝夕カナ」ト吟シテ伊兵衛モ何トヤラン小氣味ワルキ夢カナ」ト妻ニ語ル妻ハ歌學アリテシホラシキ者ナルカ二三篇吟シテ扨モ〳〵目出度夢想ニテ候ソレハ苗氏ニ心ヲ付ル故心ニカヽリ候也其類ナキアシタカナトイフ事ニ候ト祝ヒケルト也其年之事ナルカ江戸御旗本ノ男立三人アハレ歩行キ惡行重過シ既ニ嚴科ニ處セラルヘキヲ察シ江戸ヲ出奔シ是ニ依テ國々ヘ御下知アリ三人ノ人形ヲ持テ御尋アリケル處ニ紀州山口ト言所ニ件ノ三人ノ御旗本一宿シタルヨシ所ノ者ヨリヒソカニ和歌山ヘ注進スヨツテ御用人加納五郎左衛門其外諸役人評議アツテ討手ヲ二人ニ被　仰付園田伊兵衛一番口ニ當ル時ニ殘リ兩人ノ異見ニ不構其義ハ此打手ハ御免下サルヘシト御請申サス年寄中モ伊兵衛ハ腰カ拔タルカサスカ男ニテ御目カネニ背キタル事ト再三御受イタシ候樣スヽメケレ共園田申候仰ニテハ候ヘ共三人ノ内一人ハ大刀二人ハ劍術ノ達人ノ由餘人ハシラス中ニ某カ仕負セ申ヘクトハ存セス且ハ御爲ノ義ヒタスラ御免ヲ蒙ルヘキヨシヲ訴フユヘニ其旨是非ナク言上ス時ニ　賴宣卿ソレハ伊兵衛所存アツテノ言分ト聞ヘタリスク尋問ヘシトテ被召出イカナル所存アツテ辭退仕候ト御尋有リ伊兵衛申ハ別ニ所存迚モ御座ナク大切ノ討取者ニ候ヘハ二人ニ被仰付ナハ私義ハ御請仕リカタク候ト申スニヨツテ然ハ汝壹人ニ命スヘシト仰有リケレハ畏リ奉ルト御請申直ニ御城ヨリ山口ヘ至リ山口ヨリ一里半引トルト泉州路ユヘ諸役人モ殊ノ外大切ニオモヒケル也園田山口ヘ

着トヒトシク二人ノ旅宿ヘ仕カケ紀伊殿ヨリ使者ニ罷越候御直ニ口上申入候樣ニト被申付候ト云入ケル故此方ヘ御通リ有ルヘシト對面セリ時ニ伊兵衞申ハ各樣ノ儀天下ニ御觸有テ嚴敷御尋アリ何方ヘ御越有共終ニハ御逃レアルマシニテ候雜人ノ手ニ御掛リアランヨリ御歷々ノ義ニテ候間御切腹アルヘク候御介錯トシテ園田伊兵衞ト申者指遣シ候ト演ス三人目ト目ヲ見合一言モ言出ス人ナシ其時伊兵衞申ケルハ是ハ御思案處ニテハ是ナク候イカヤウニ御働キナサレ候テモモハヤ十重廿重ニ道ヲ取切リ罷在候得ハ五人十人御手ノ下ニ健氣ナル御働候トモ終ニハ御討留可申事ナリ時宜ニ寄リテ雜人ノ手ニ御掛リ有テ生捕共成リ給ヒ繩目ニモ及ヒ給ハンヲ　賴宣卿イタマシク存セラレ尋常ニ御生害アルヘシトノ御事ニテ候重テ申ケル時ニ三人一同ニ誠ニ難有御芳志ニ候イカニモ切腹可仕候迚尋常ニ腹ヲ切ケレハ介錯シテ事濟ケリ伊兵衞歸リテ其旨言上ス御褒美トシテ金二枚ノ御脇差ヲ被下置翌年正月十一日ニ日比出精相勤トテ七百石御加增ニテ都合千石ニナリテ相勤

三人行時ハ辭義モ揃ハス殊ニ夜更トイヽ手延ニナル時ハ討モラスヘキ事ヲハヤク察シタル働キ賴宣卿人ヲ能ク見知リ給ヒシユヘ渠カ辭スルニハ存念アルヘシト察シ給ヒケルヲ諸人感稱シケル也

柘植三十郎知忠

柘植知忠　按駿河分限帳、在御小姓衆之列、祿千三百石、

柘植知忠、稱三十郎、曾祖曰益田外記長綱、仕東照公、死於長久手役、祖傳次郎忠知幼孤、爲尾張人柘植某所育、因冒其姓、爲柘植氏、東照公思其先功、賜祿三百三十石、父惣兵衞昌次襲家、知忠年甫十二、仕

公爲小姓、延寶八年歿、年七十五、柘植系譜

家　譜

柘植三十郎知忠　柘植惣兵衛昌次實子惣領 生國駿河

祖父益田外記長綱ハ益田信濃守長氏三男始三郎ト稱シ　權現樣へ奉仕候被　召出年月日知行高御役儀等委細之儀ハ相知不申候元龜三壬申年十二月廿二日、遠州味方原御合戰之刻、御供奉仕、敵壹人討取、濱松へ御引取被遊候節、馬上ニテ取テ返シ相働討死仕候　年齡不詳

伯父傳次郎忠知 外記長綱惣領 始益田傳次郎 父外記戰死仕候節、幼少ニ付母方祖父柘植氏 前々不詳 之厄介罷成候處、慶長九甲辰年 月日不知　權現樣爲御鷹狩、武州忍之城へ被爲成候刻御鷹匠夜居仕御餌積指上候處、傳次郎名前モ有之候付、安藤帶刀ヲ御使ニテ尾張之柘植ニテ候哉ト　御尋被遊候故、尾張之柘植ニテ御座候段申上候處、其節被　仰出候ハ其方親外記、味方原ニテ引返シ討死仕候節金ノ鞍ニテ馬ハ黑ノ馬ニテ有之候其時ノ有樣被　思召扨々御不便ニ被　思召候由　上意ニテ則御知行三百三十石被下置御朱印頂戴仕候于今所持仕候右御朱印寫

駿河國增津郡大學寺村之内

參百三拾石之事

右宛行訖全可領知之狀如件

慶長九年三月十九日　御朱印

ツケ傳次郎へ

此名御直筆

右栢植ハ母方之苗字ニ候得共御朱印ニ隨ヒ不復本姓候（病死年月 年齡不詳）

父惣兵衞昌次（傳次郎 忠知弟）兄傳次郎悴無御座候付（年月日 不知）御朱印知無相違惣兵衞ニ被下置其後駿府田中之御殿御預被遊慶長十五庚戌年閏二月十三日病死仕候（于時五十一歲）

三十郎知忠元和三丁巳年（月日 不知）父惣兵衞家督無相違被下置候此時十二歲ニテ　南龍院樣へ被爲附御小姓相勤同五己未年御國替之節紀州へ御供仕其後段々役替等被　仰付寬文二壬子年依願隱居被　仰付家督無相違總領忠三郎ニ被下延寶八庚申年六月廿一日病死仕候（于時七十五歲）

按スルニ　知忠祿高ノ記ナシ元和御切米帳ニハ高千三拾石栢植三十郎慶安二丑十二月御暇被下トアリ然ハ千三十石ヲ領シ一旦御暇被下後再ヒ被　召歸減祿三百石ヲ賜リ病死共三百石ヲ無相違忠三郎勝秀ニ被下シナラン又駿河ヨリ御附屬御役順姓名帳ニハ御小姓衆千三百石栢植三十郎トアレ𪜈元和御切米帳ハ從來證憑トスル所ナレハ百八十之誤寫ナルヘシ

知忠總領忠三郎勝秀家督相續高三百石被下候處男子無之病死ニヨリ別家ニ被　召出アル知忠三男長五郎忠俊ニ本家相續被　仰付然ルニ忠俊淸溪公ノ特旨ヲ以テ原田市十郎跡目ヲ被　仰付依テ知忠二男益田源之右衞門忠宣別家ニ被　召出アルヲ猶又本家相續ニ被　仰付以下代々繼續十一代傳次郎榮綱ハ二百石ニテ御足高貳百石御供番頭格奧掛リ御用人ニテ弘化五申年正月病死嫡子千之助定綱跡目相續ス

土屋市左衞門

土屋市左衞門盛勝（土屋織部盛央實子總領 生國相模）

家　譜

土屋市左衞門盛勝

父織部盛央ハ北條氏政ニ仕使番役ニテ鷹匠頭兼相勤罷在候處　權現樣御内々御存知之者ニテ小田原落城三日目ニ御尋被遊則被　召出知行百五十石被下置後病死仕候

天正十八寅年十七歳ニテ部屋住ヨリ　權現樣ヘ被　召出知行百五拾石被下置御鷹御預被遊慶長四亥年九月下旬伏見ヨリ大坂ヘ御動座ノ節伊奈圖書大坂ヨリ夜中ニ早馬ニテ伏見ヘ歸リ急御用有之間御人數急キ大坂ヘ可參由申來候其時吉田清三郎野間權兵衛同金三郎市左衛門四人ハ御弓ウツホ持參仕寺本市藏ハ御鐵砲持參仕右五人夜明ニ伏見ヲ罷立四時分ニ大坂ヘ馳付石田杢頭所ニ被爲成御座候節村越茂助ヲ以テ御道具持參仕候由申上候處即刻　御前ヘ被　召出早速參殊ニ御武具ニ心附持參仕候トノ奉蒙　上意御料理被下置其日西之丸ヘ被爲移候付右御道具御中間ニ持セ五人ノ者共御供仕入御ノ後五人共御前ヘ被　召出猶又御感之奉蒙　上意其上爲御褒美松平右衛門佐殿ヲ以御羽織拜領仕候右人五之者共　御座之間之後御櫓ニ晝夜共可罷在旨　上意ニテ相詰翌子年六月大坂ヨリ江戸ヘ御下向ニ付御供ニテ罷越申候其後年月日不知於駿河　南龍院樣ヘ御附被遊御鷹方御用相勤元和年中御國替之節紀州ヘ御供仕以後御留守居物頭被　仰付明暦元未年五月朔日八十二歳ニテ病死仕候

養子市左衛門盛光十七歳ニテ　南龍院樣ヘ被　召出御鷹方御用相勤明暦元年養父盛勝跡目百五十石無相違被下大御番被　仰付以下代々相續五代長左衛門盛信御留守居番御切米三十石ニテ明和七寅年十一月隱居總領元右衛門盛珍ヘ家督貳十五石被下大御番被　仰付タリ

筒井又兵衛満照　筒井治兵衛政凞總領 初兵藏又藤三郎　生國武藏

家譜

父治兵衛政凞ハ　清溪院様御代元祿九子年十一月御上屋敷御守殿御賄人被　仰付後十人組並御切米貳拾石ニテ享保七寅年病死

享保八卯年正月父爲跡目拾五石小寄合被　仰付同年御用部屋物書助ニ成リ後江戸常詰御用部屋下肝煎五十石ニ昇進寛保三亥年六月　久姫様御附御使役並御加增地方百五十石ニ被　仰付後累進遂ニ詰番頭格四百石ニ御加增明和八卯年十一月依願隱居養子市之進ハ家督トシテ四百石之内三百五十石被下殘リ五拾石ハ爲隱居料又兵衛ヘ被下同九辰年五月六拾七歳ニテ病死

一乞言私記ニ曰ク　筒井又兵衛大森三平御用部屋下肝煎ヲ一所ニ勤ム仲アシカリケルニ或時大切之御調事アリシニ兩人ヘ被　仰付兩人調アゲケル節合セ見ルニ符節ヲ合ス如ク相違ナカリシトゾ　上ニモ御感心アリテ御用人ニ被　仰付兩人之仲直リヲサセラル

按スルニ御用部屋下肝煎トハ近世表御用部屋日記方之事ナリ

君上御勤品何吉凶御大禮等之事ナレハ別ニ係リ員トナツテ調査スルヲ任務トス乞言私記御用人被　仰付大森三平ト仲直リヲサセ給フ云々ト記スレﾄﾞ又兵衛満照ハ下肝煎ヨリ　御姫様方御附ニ轉シ格祿累リニ昇進ト雖モ御用人就任之事ナシ満照養子市之進亦又兵衛（正昭）ト稱シ家督後江戸常詰御使役御城附助御使番唯之進様御附又大組等ニ歴仕御加增四百石ニ至ト雖モ是又御用人拜命之事ナシ乞言私記御用人被　仰付之說ハ全ク誤傳ナルベシ近時江戸常府筒井金十郎ハ此又兵衛之子孫ナリ

内藤忠次　甚五左衛門〇按駿河分限帳 在大番衆之列、祿六百石、

内藤忠次、系出於藤原秀卿、祖父曰甚五左衛門忠卿、右京進義清次子、父曰甚五左衛門忠村、世仕德川氏、屢有軍功、忠次屬公、賜祿六百石、寬永十七年歿、年六十九、内藤系譜

家譜

内藤甚五左衛門忠次 内藤甚五左衛門忠村實子總領 初名不知 生國三河

祖父甚五左衛門忠卿 始甚三 内藤右京進義清之次男ニテ右京進初甚太郎岡崎五人衆之内ニテ三州碧海郡東上野之城主、自祖父奉仕　信忠樣、代々軍功有之其嫡子彌次右衛門尉清長ハ内藤能登守政詔家日向延岡ニテ御座候其外別家ニ子孫多御座候甚五左衛門忠卿ハ　信忠樣御代被　召出　御三男鵜殿十郎三郎殿へ御附被遊其後又　廣忠樣へ奉仕御知行被下置御證文頂戴仕于今所持仕候

右御證文寫

今度大藏算此方へ御同心祝着候如約束爲給知百貫之分遣置候然ハ鷹落名田野羽々前々之給分不入ニ遣之候此兩所相改其都合イハミ之所々ニテ引合百貫之首尾ニ可被執候猶委細阿大可申候彌御走舞候テ三木落居候ヤウニ奬人候於末代給知不可有相違候依テ如件

天文十貳卯　　岡　三

八月十日　　廣忠御在判

内藤甚三殿

家之舊記ヲ按スルニ　甚五左衛門忠卿松平十郎三郎康孝卿へ附屬之處、康孝卿御病死御領地見須之鄕御子ナキヲ以テ

廣忠卿御領地ト可被成候處、康孝卿之御兄藏人殿押シテ御領地ト被成其上織田ト一味　廣忠公へ御敵ヲ被成故忠卿ハ　廣忠公へ參也此時　廣忠公御證文甚三ニ被下云々ト記セリ

一右甚右衞門忠卿軍功、不少由之處舊記等水害ニテ流失、詳悉シ難キヨシ　廣忠公御証文及ヒ阿部大藏証文本紙ヲ近時文學博士重野安繹地方之古文書調査ノ際徵集官記ニ登祿スト云信モ亦一見ヲ得依テ寫眞ニ撮影別ニ揭載ス

一父甚五左衞門 始甚三 忠村祖父甚五左衞門跡相續仕候拔鎗次郎爺十三刀戰

此所脫文ニテモ可有御座哉難相分候得共舊記之儘認出申候

此時從　權現樣御加恩被下置阿部大藏ヨリ之證文于今所持仕候 卒年不知

右證文寫

條々

一鷹落名田之事

一村野羽之內石職九石參斗九升ハ自前々御親父御合力ニ被取候由候然ル上ハ末代不可有相違候事

一於羽角之內米貳拾俵ハ新加增ニ被遣候依テ如件

天文廿亥霜月六日　　阿部大藏判

内藤甚五左衞門殿參

甚五左衞門忠次父甚五左衞門跡相續仕其後 年月不知 南龍院樣へ御附被遊高六百石被下 役儀不知 元和五己未

年御國替之節紀州ヘ御供仕寛永十七庚辰年七月廿九日病死仕候 于時六十九歳
總領甚五左衛門忠吉父之家督四百石ヲ嗣キ寛文五巳年正月病死三代甚五左衛門忠門相續後隱居
養子彌平一旦家督之處不埒之品ニテ改易家斷絶享保五子年十二月格別ノ譯ヲ以テ再養子ヘ五十
石被下家名相續以下代々相續八代甚藏忠煕ハ七拾五石御徒頭格中奥詰ニテ文化九申年七月病死
總領甚之丞隆忠相續ス
一忠次二男甚藏忠治ハ　大猷公御旗下ニ被　召出三百俵御書院番被　仰付爾後御旗本ニテ相續同
三男八右衛門忠房ハ　南龍公ヘ被　召出別家ニテ相續之處故有テ斷絶ス

內藤兵四郎

內藤兵四郎正重 内藤右京進義清三代太郎左衛門忠成總領彦市郎重成二男　生國駿河

家　譜

祖父太郎左衛門忠成儀初テ　道幹樣ヘ被　召出以來嫡家　御代々公儀ヘ御奉公申上當時西丸御
小姓組內藤吉之助家ニテ御座候
元和三丁巳年月日不知　權現樣ヘ十三歲ニテ新規被　召出御役儀高不知御奉公仕翌四戊午年　南龍院樣ヘ御附
被遊役儀不知高貳百石被下同五己未年御國替之節紀州ヘ御供仕萬治元戊戌年御加增被　仰付高三百石
被下候寛文十三癸丑年五月廿七日依願隱居被　仰付高三百石之內貳百石總領太左衛門ニ被下殘高
百石爲隱居料兵四郎ニ被下同年八月十日病死仕候 于時六十九歲

總領太左衞門正武父家督二百石被下勢州五ヶ所番勤元祿六酉年五月病死以下代々相續七代兵四郎元政ハ御切米貳十五石五十石高御弓役ニテ文政四巳年十二月病死總領楠之丞忠政嗣ク

內藤金兵衞

內藤金兵衞　內藤金左衞門養子　實松平監物家老小浦喜右衞門三男

家　譜

養父金左衞門ハ松平左馬允ニ代々相勤知行六百石ヲ領シ足輕貳十人預リ　權現樣御存知之者ニテ度々高名走廻リ仕　權現樣信長公ト御和睦之以後ハ御加勢ニ被遣又ハ御取合ノ刻物馴タル者被遣候節ハ櫻井之家ヨリハ何時モ金左衞門筒井金太夫罷越度々高名走廻リ仕候合戰始リ若シ味方四度路成ル時分櫻井之金太夫金左衞門抔ハ不罷在候哉ト切々被　仰出御歸陣被爲　成候テ御前ヘ被　召出難有御諚御座候其節沙汰仕候ハ何時モ櫻井家中ニテハ筒井金太夫內藤金左衞門之兩人勝テ働候樣ニ申習ハシ候由

權現樣武州瀧山城御責被遊候節筒井金太夫同新兵衞內藤金左衞門兩三人壹番ニ塀ニ附無比類働高名仕候

金左衞門儀實子無之ニ付金兵衞養子ニ罷成金左衞門跡式無相違相續之處松平左馬允不慮ニ被相果候砌　權現樣被　仰出候ハ年寄分之者共ハ壹人モ離散仕間敷旨　上意御座候故慶長之比五ヶ年之間御合力被下置遠州濱松ニ罷在其後　權現樣上意ヲ以　南龍院樣ヘ御附被遊知行貳百石被下置水

野對馬守與力相勤候樣被　仰付元和五未年御入國ニ付新宮へ罷越ス
右以下代々貳百石新宮與力ニテ相續弘化四未年之比ハ内藤半之丞ト稱ス

長坂小右衛門

長坂小右衛門、祖曰七郎左衛門勝直、仕東照公、食祿貳百石、某役傷而死、長子喜作、死於三方原役、二子又大夫襲家、屢從軍、亦死於岩付役、小右衛門襲家、爲大番組頭、賜相模邑貳百石、後屬公、爲使番、增祿至五百石。 長坂系譜

家　譜

長坂小右衛門 （長坂又大夫總領實三男 實名不知 生國三河）

祖父七郎左衛門勝直ハ　權現樣へ奉仕參州中山大林ニテ御知行貳百石被下置候（被召出年月御役儀不知御知行之御判物無御座候）甲州方ト御取合之節（年月不知）松平彌三郎逆心ニ付天野三郎左衛門ト七郎左衛門へ　上意ヲ蒙リ三州中山道ト申所ニテ彌三郎ヲ討留其時七郎左衛門モ手疵負相果申候七郎左衛門長男喜作ハ元龜三壬申年於味方原討死仕候付二男郞父又大夫へ祖父七郎左衛門之家督無相違被下置數度御陣之御供仕手疵負相果申候右家督幷相果候年月日年齡等相知不申候

又大夫長男甚平ハ天正十八庚寅年小田原御陣之節本多中書手へ御附被遊武州岩槻ニテ討死仕

同二男與助モ戰場ニテ討死仕候場所年月共不詳

小右衛門儀父又大夫家督無相違被下置大御番組頭被　仰付候（年月不知）天正十九辛卯年相模國七木鄉之

内ニテ　權現樣ヨリ貳百石被下置御朱印頂戴仕于今所持仕候
右御判物寫
相模國東郡以七木之鄕之內貳百石出置者也仍如件
天正十九年辛卯
五月三日御朱印
長坂小右衛門とのへ
慶長十八癸丑年　南龍院樣ヘ御附被遊月日不知御使番相勤元和五己未年御國替之節紀州ヘ御供仕其後
御加增高五百石被下病死年月年齡共不知
總領小右衛門初名不知慶長十八丑年部屋住ニテ　南龍院樣ヘ被　召出父ト一所ニ紀州ヘ御供其後父
之家督無相違被下寛文元丑年八月病死以下代々相續之處六代市郎大夫不埒之品ニテ正德五未年
七月改易家斷絕然ルニ品モ有之者之故ヲ以テ享保七寅年十月新宮與力夏目彌右衛門次男五郎右
衛門ヲ聟名跡ニ被　仰付知行百石被下以來代々相續十代小右衛門勇ハ知行貳百五十石大御番ニ
テ嘉永四亥年九月病死總領武之助正貞家ヲ嗣ク
長坂久綱　又左衛門
長坂久綱、祖父曰長坂八十郞、死於三方原之役、父曰半兵衛重綱、爲大須賀康高部下、久綱襲家、屬公爲
安藤直次部下、賜祿貳百石、移住田邊、貞享二年沒、年九十三　長坂系譜

長坂又左衛門久綱

長坂又左衛門久綱 長坂半兵衛重綱總領 生國上總

養祖父八十郎ハ　權現樣へ奉仕（御役祿不知）元龜三壬申年十二月廿二日遠州味方原ニ於テ討死仕父半兵衛重綱ハ　權現樣へ奉仕（家督年月不知）御知行百五十石被下置大須賀五郎左衛門康高組附被　仰付同出羽守忠吉上總へ國替之節附添罷越候慶長五庚子年宇都宮御陣之節ハ半兵衛儀大病ニ罷在候ニ付彌助ト申譜代之者ヲ爲陣代指出申候同年七月廿四日病死仕候（年齢不詳）

又左衛門久綱儀慶長五庚子年（月日不知）父半兵衛爲家督御知行百五十石無相違被下置大須賀家組附ニテ國千代忠次代迄罷在候處同十二丁未年國千代ヲ榊原家爲繼跡上州舘林へ被遣候節　權現樣思召ヲ以横須賀黨過半御留置被爲遊此者共ハ度々骨折候故御秘藏被爲　思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二丙辰年　南龍院樣へ被爲附安藤帶刀直次相備被爲　仰付居成ニ横須賀ニ住居仕横須賀ヨリ駿河之御城番相勤同五己未年　南龍院樣紀州へ御入國之御供仕罷越五十石御加增被下高貳百石ニ被　仰付其後　南龍院樣被　仰付候由ニテ安藤帶刀直次横須賀組一統へ申聞候ハ紀州之内田邊者大事之要地ニテ候門横須賀ヨリ參候諸士之内小身者ヲ遣置候樣トノ事ニ候然レ共人指ハ無之間鬮取ニテ相究可然候彼地ハ草深所故馬ヲ飼候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ致氣儘ニ致活計候樣ニトノ儀ニ付則鬮取仕候處又左衛門儀鬮ニ相當リ候ニ付田邊へ罷越相勤萬治二己亥年二月隱居仕總領又左衛門へ爲家督高貳百石無相違被下貞享二乙巳年七月七日九拾三歳ニテ病死仕候

總領又左衛門綱之家督無相違相續以下代々田邊與力ニテ八代造酒右衛門綱矩モ貳百石田邊與力

之處安政二辰年九月右與力一同田邊表退去之節同樣退去浪人致シ文久三亥年二月歸參御切米四拾石小十人小普請ニ被　召出松坂御城番被　仰付タリ

夏目定次　彌右衛門〇按駿河分限帳、在大小姓衆之列、祿三百石、

夏目定次、父曰次郎右衛門吉信、系出於六孫王經基、其先世有ニ柳三郎大夫國忠者、仕源頼朝、陸奥役有功、賞賜信濃夏目邑、國忠有二子、長曰次郎忠康、襲二柳氏、次曰左近將監國平、以夏目氏焉、吉信仕廣忠公、爲三河六栗城主、上和田城役、吉信年甫十五、先登有功、賞賜諱字、改名廣次、及東照公時、與酒井雅樂助本多作左衛門、同爲三遠二國郡代、毎公出戰、未嘗不從、三方原役、守濱松城、聞公危急、直率旗下士卅五騎赴救、遂代公戰死、定次襲家、長久手役、奪闘有殊功、公深賞之、加賜五拾貫邑、慶長中屬公、爲水野重仲部下、子豬左衛門定春襲家、　夏目系譜

家　譜

夏目彌右衛門定次　夏目次郎左衛門吉信次男

父次郎左衛門吉信儀ハ六孫王源經基公五男下野守滿快ヨリ六代之末葉二柳太郎國高嫡子三郎大夫國忠右大將頼朝卿ニ仕奥州合戰之節泰衡追討之賞ニ賜信州夏目之郷是ヨリ夏目ト號ス其嫡子次郎忠康ハ二柳ト號ス次男夏目左近將監國平ヨリ七代之孫源八郎恭扶建武二年相模太郎時行叛逆之時今川式部大輔頼國ニ屬相模國於川村山討死ス其子十郎盛直其子源三郎吉恭ハ明德二年山名氏清謀叛之時於神祇館討死ス右吉恭曾孫五郎兵衛忠氏ハ奉仕　清康樣從是　御當家御代々奉

仕其子九郎右衛門吉久ハ奉仕　廣忠樣三州礒邊之城主ニテ御座候其總領彌右衛門次男吉信兩人ヘ三州幡豆郡六栗之城御預ヶ被遊住居仕　廣忠樣　權現樣御兩代御奉公仕候彌右衛門吉重ハ壯死仕候依テ弟次郎左衛門吉信父之家祿ヲ續キ吉重子彌四郎定次ハ六歲ニテ父ニ離レ候故伯父次郎左衛門養育仕次男ト相成申候

一父次郎左衛門吉信ハ三州六栗之城主ニテ　廣忠樣御代三州上和田之城御攻伐之時十五歲ニテ壹番乘仕　御褒美御諱之御一字被下置候由從是廣次ト相改申候

權現樣御代ニハ次郎左衛門儀遠州三州兩州之郡代相勤酒井雅樂助本多作左衛門同樣ニ御證文加判之列等被　仰付相務御戰場ヘモ數度御供仕永祿四年八月三州牛久保表御歸陣被遊候節ハ後殿被　仰付牛久保ヨリ國府迄之間六度取ッテ返シ甲首五ッ討捕敵ヲ追退候亦候二連木牛久保佐脇八幡ノ敵競來リ酒井左衛門尉敗北仕候依テ次郎左衛門手勢三百餘人ニテ左衛門尉ヲ救味方無滯御人數被引揚御心易御通被遊候付其夜次郎左衛門ヲ被爲　召今日之働御感被爲　思召候由ニテ爲御褒美御感狀被成下並備前長光之御腰物被下置候

一元龜三年十二月　權現樣於遠州味方原武田信玄ト御一戰之刻次郎左衛門ハ濱松御城之御留守仕御門ヲ堅メ罷在候處御陣御勝利無御座由注進ヲ承リ則御門ハ渡邊半藏ヘ讓リ麾下之士貳十五騎召連味方原ヘ馳付候處御敗軍ニテ　權現樣御一騎ニテ御殘被遊敵中ヘ御馳入可被遊ト被仰候處御馬之口取久右衛門御馬口ヲ扣ヘ放シ不申候ニ付御鐙ニテ御蹴立テ被遊候得共御馬ノ口ニ縋リ放シ不申候然ル處ヘ次郎左衛門馳付下リ立御馬ノ口ヲ扣ヘ涙ヲ流シ御諫メ申上候ハ早濱松ヘ御

歸城被遊候事可然乍恐御名稱ヘ詐テ御名代ニ討死可仕ト御馬ヲ引向御馬ノ尻ヲ鑓鐏ニテ叩キ候得バ飛出其場ヲ御立退被遊候御後影ヲ奉見送其所ニテ手勢貳十五騎敵ヲ防留メ御諱唱ヘ候ヘハ敵之先鋒山縣三郎兵衛馬場美濃守等實ニ然リト取圍戰次郎左衛門十文字鑓ヲ以敵多討取討死仕候首ヲバ輪形内善兵衛ト申人取申候由手勢モ大形討死仕候

一次郎左衛門吉信總領ハ次郎左衛門吉忠ト號シ家督相續仕關ヶ原御合戰御勝利之後慶長七年權現樣次郎左衛門吉忠ヘ　上意被遊候ハ伯父味方ヶ原ニテ忠死御忘レ不被遊候間伊豆國韮山之城可被下置ト　御懇ノ蒙上意候處同年十一月廿一日四十三歲ニテ頓死仕候其子次郎左衛門宗吉六歲ニテ家督相續被　仰付候處七歲ニテ病死仕候

一次郎左衛門吉信三男長右衛門信次ハ甥次郎左衛門宗吉夭死之後格別ノ以　思召新知被下置被召出四男杢左衛門吉次モ其後新知被下置被　召出右兩人子孫于今御旗本ニ相勤罷在候

一元和二年四月五日夜　權現樣御病中ニ次郎左衛門吉信三男長右衛門信次四男杢左衛門吉次兩人ヲ被爲　召唯今迄御存生被遊思召之儘天下御治　御心易御臨終被遊候モ汝共父次郎左衛門類無キ忠節申上候故ナリト御懇之　上意御座候由申傳

彌右衛門定次若年之時彌次郎ト申拾五歲ニテ　權現樣ヘ被　召出天正十二年尾州長久手原御合戰之時此方ヨリ榊原小平太内足輕大將ト敵之足輕大將ト出合相戰處敵二騎助ヶ來リ三人ニテ此方ノ足輕大將ヲ討取リ申候處彌次郎馬上ニテ追掛ケ其敵ヲ討取其上此方ニテ取ラレ候首ヲモ取返シ罷歸彌次郎母方ノ叔父小野彌兵衛ニ逢同人申候ハ披露可仕候間參候得ト申候得共跡ニテ御合戰初リ

候へハ如何ト存持參被致入御覽給ヘト賴差上申候所彌兵衞ヲ御覽被遊何者哉覽ン首取參候急キ來
候得ト御使被立候故急キ付老人ニテ息切レ兎角之儀得不申上候然ル處ニ亦何者哉覽首取參候是ハ
今村九郎兵衞ト申仁ニ御座候前方之首モ御斷不申上候故彌兵衞高名ト計リ被爲　思召候其内追付
御合戰初リ候之由御先手ヨリ申上候付當日　御覽之首ハ此二ツノ由申候同日晝時分ヨリ敵之足再
ヒ惡敷候付テ　御意被遊候ハ追討ニ致シ首不可取候鼻ヲ搔印ニ持參仕候樣御觸ニテ彌次郎モ鼻三
ツ取御着帳ニ付申候御合戰相濟其夜高名之御穿鑿被遊候處十二三人手ニ逢不申候衆モ有之候其内
ヨリ申出候ハ今日ノ壹番首ハ相討ニ仕候由申上候付　御意被遊候ハ壹番首ニ相討ハ無之物ニ相討
ト申上候段　御不審ニ被爲　思召彌兵衞ニ御尋被遊候得ハ相討ニテハ無御座候ト堅ク申上候付彼
仁ヲ被　召出右之趣御尋被遊候得ハ　上意御最奉存候此首ハ彌兵衞甥彌次郎取申候ヲ彌兵衞貰申
候間彌兵衞ハ樣子存申間敷ト申上候就夫彌次郎ヲ被爲　召出御尋被遊候得ハ私取申候相討ニテハ
無御座由申上候彼仁申候ハ私後ヨリ鐵砲ニテ打申候ヲ首取申候由申上候彌次郎申上候ハ私討取申
候其時節定テ鐵砲ヲ跡ヨリ放カケ候テ左樣申候哉私ハ不奉存候ト申上候得ハ彌次郎取申タル首ハ
壹番ト　上意被遊殊之外御感被遊候由申傳へ候其日朝合戰之壹番高名ハ水野日向守貳番高名ハ久
野三郎左衞門家來本間忠三郎ニテ御座候由貳度目御旗本御戰之時高木主水扱ハ彌次郎高名壹番ニ
罷成申候由此儀渡邊六郎左衞門榊原八兵衞宮崎仁左衞門小野彌兵衞渡邊新左衞門右之衆中能存候ト
申傳候其後　御歸陣被遊岡崎之於御城彌次郎ヲ御前へ被　召出右長久手原ニテ高名仕候樣子一々
被爲　仰聞其上ニテ爲御褒美三州野羽之鄕鳥井小七郎跡五十貫之地御加增ニ被下置御感狀モ被下

置候由申傳候右彌次郎定次儀彌右衛門ト改名仕其後大御番被　仰付文祿年中ヨリ慶長初之比ハ水野對馬守番下ニテ駿州並城州伏見之御番相勤申候處慶長八年　南龍院樣へ常州水戸被爲進候處御幼少故暫御入國無御座其後同十二年御人分有之　南龍院樣へ對馬守被遊御附候節彌右衛門モ奉附候樣被　仰付候其後爲　御名代對馬守水戸へ被遣候節番下ノ内召連度旨依願

水野傳兵衛	貳千石
平岩助右衛門	六百石
岩手九左衛門	五百五十石
夏目彌右衛門	三百石
酒井掃部	九百五十石
鈴木七右衛門	四百石
山比甚太郎	三百石
水野甚三郎	貳百石
宮川金八	三百石
久米吉十郎	貳百石
夏目彌十郎	貳百石
太田外記	貳百五十石

右拾貳人對馬守與力相勤候樣ニ被　仰付候其後慶長十四年　南龍院樣へ駿州遠州東三河被爲進御

國替之節彌右衛門定次モ遠州濱松ヘ罷越亦々元和五年御入國之節新宮ヘ罷越申候
彌右衛門定次總領猪左衛門定春ハ新規　南龍院樣ヘ御小姓ニ被　召出段々結構被　仰付子孫別家ニテ相續夏目次郎左衛門ト稱ス
一同次男新之丞定重親定次家督無相違被下後彌右衛門ト改メ以下代々三百石新宮與力ニテ相續天保四巳年之比ハ八代廉平ト稱ス
漢文ニ猪左衛門定春定次之跡相續ト爲ハ誤ナリ
一定次三男次郎右衛門忠次　南龍院樣思召ヲ以テ夜居番ニ被　召出段々結構被　仰付子孫別家ニテ相續則夏目三郎大夫家是ナリ

長野九左衛門清貞

長野九左衛門
同　權右衛門
長野九左衛門清貞　矢野安藝守昌祐四男 生國伊勢
家　譜
年月日不知　大御所樣ヘ被　召出御奉公仕候年月日不知　於駿河初テ　御目見仕候處五年以前知行五百石被下置候樣　御覺被遊候處無祿ニテ罷在候儀　思召ニ違候由　上意ニテ右五年分之御知行一度ニ拜領仕駿州御代官役相勤申候則松平右衛門佐殿秋元但馬守殿板倉内膳正殿連判之　御證文于今所持仕候右

御證文之寫

覺

其方ニ知行高五百石被下●心之間四物成之積從酉之歳貴所勘定ニ相立可被申候恐々謹言（●ノ所原文不明）

卯月朔日　　松　右衛佐　在判

　　　　　　秋　但馬守　在判

　　　　　　坂　内膳正　在判

長野九左衛門殿

且又大坂御陣之砌ハ總領權右衛門次男八助御供被　仰付九左衛門ハ駿府ニ御殘シ被遊大坂筋御内證之御用相勤御歸陣之節阿部川迄御迎ヒニ罷出候處兩人之子共御用ニ相立候間悅可申旨且御留守中大坂表御用相勤候付御懇之蒙　上意爲御褒美

御召

御羽織　御表紺地淺黃ニ白キ大紋之菊惣身ニ付御紋紫之ク丶シ染
　　　　御裏茶　御襟阿カ附御座候

御袴　御表黃カウチヤ之綾之如キ寶珠チ
　　　地紋ニ付是又御紋付御座候御裏紫

右之通拜領仕于今所持仕候元和二丙辰年　大御所樣御他界之後　台德院樣ヨリ（月日不知）南龍院樣へ御附被遊同五己未年御國替之節紀州へ御供仕（役儀不知）高五百石被下寛永十六己卯年六月三日病死仕候

于時七十七歳

清貞總領實五男　九左衛門祐憲父跡目五百石無相違被　仰付御留守居番頭ニテ延寶七未年九月病死以下代々相續八代平兵衛祐周四百石小十人頭格ニテ文久三亥年五月隱居知行無相違嫡孫承祖右馬之助祐邦ヘ被下寄合被　仰付タリ

權右衛門知貞　清貞次男

於駿河　權現樣ヘ別家ニ被　召出其後　南龍院樣ヘ御附被遊知行三百石被下置四代相續之處品合不分改易被　仰付家斷ス

成瀬重俊　權兵衛

成瀬重俊、父曰虎藏正重、年甫十六、仕東照公、賜祿七百石、屢有戰功、三方原役、七從騎之一也、後以奉一向宗、與渡邊半藏、寬助大夫共被放、既而被釋、命使改宗不聽、再被放、後思其功、召還之、賜祿百五十石、不復問其宗旨、子重俊爲大須賀康高部下、後屬公爲安藤直次部下、賜祿貳百石、移住田邊、正保三年沒、成瀬系譜

家　譜

成瀬權兵衛重俊　虎藏正重實子總領　生國三河

父虎藏正重ハ十六歳之時ヨリ御知行七百石被下置　權現樣ヘ奉仕數度御合戰之御供仕遠州味方ケ原御一戰之砌纔ニ七騎御供ニテ濱松之御城ヘ　御入被遊候時虎藏モ其一騎ニテ御座候其後年月不詳新門徒宗ニ罷成候ニ付渡邊半藏寬助大夫一所ニ蒙　御勘氣ヲ經數日御散免被成下此度之御褒賞

ニ改宗可仕旨　上意御座候處改宗之儀ハ何分御免可被　成下ト御願申上候得ハ再ヒ蒙　御勘氣
其後於遠州田中年月不知御知行百五拾石被下置宗門御改無御座　御勘氣御赦免被成下歸參仕御奉公
申上關ヶ原御陣之節ヨリ大病相煩大坂御陣ニ三年前ニ相果申候
權現樣御代年月不詳父虎藏爲家督御知行百五十石被下置年月不知遠州横須賀大須賀五郎左衛門康高組付被
仰付夫ヨリ同姓出羽守忠吉國千代忠次ニ附屬罷在候處慶長十二丁未年國千代ヲ榊原家爲繼跡上州
舘林へ被遣候節　權現樣思召ヲ以横須賀黨過半御留置被遊此者共ハ度々骨折候故御秘藏ニ被爲
思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二丙辰年　南龍院樣へ被爲附安藤帶刀直次相備被爲　仰
付居成ニ遠州横須賀ニ住居仕横須賀ヨリ駿河之御城番相勤同五己未年　南龍院樣紀州へ御入國之
御供仕罷越五十石御加增被下都合貳百石ニ被　仰付其後　南龍院樣被　仰付候由ニテ安藤帶刀直
次横須賀組一等へ申聞候ハ紀州之内田邊ハ大事之要地ニテ候間横須賀ヨリ參候諸士之内小身者ヲ
遣シ置候樣ニトノ事ニ候然共人指ハ無之候間鬮取ニテ相究メ可然候彼地ハ草深キ所故馬ヲ飼ヒ候
ニ便能又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩リニテモ致氣儘ニ活計致シ候樣ニトノ儀ニ付則鬮取仕候處
權兵衛儀鬮ニ相當リ候付田邊へ罷越相勤正保三丙戌年二月十九日病死仕候

以下代々相續九代林左衛門正信貳百石田邊與力之處安政三辰年九月右與力一同田邊表退去之節
同樣退去浪人致シ後文久三亥年三月歸參御切米四十石小十人小普請被　召出松坂御城番被　仰
付タリ

波切金左衛門

波切金左衛門尙政

長田權十郎吉正

波切金左衛門尙政 波切主稅廣政實子總領 生國三河

家 譜

父主稅廣政ハ 權現樣ヘ奉仕天正六寅年横須賀城成就之節大須賀五郎左衛門ニ御預ケ被遊相備之者不殘横須賀ヘ引越候付主稅儀モ相備ニテ同所ヘ引移リ申候卒年月日不詳

金左衛門尙政於横須賀年月日不知父主稅家督被 仰付其後年月日不知 南龍院樣ヘ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州ヘ御供仕高貳百三拾石被下大番相勤寛永十二乙亥年月日不知依願隱居被 仰付家督無相違總領安兵衛ニ被下候處同人儀無程病死仕總領岩之助幼少ニ付知行無相違金左衛門ニ被下再勤被 仰付追テ岩之助ヲ嫡孫承祖被 仰付寛永十四丁丑年十二月廿六日病死仕候年齡不詳

嫡孫承祖岩之助忠休寛永十五寅年幼少ニ付祖父家督五人扶持小普請被 仰付後貳十五石日熊野御目付ニテ病死以下代々相續ス六代彥四郎勝政貳百石高御徒頭格中奥詰ニテ文化六巳年八月病死總領金平盛政家ヲ嗣ク

長田權十郎

長田權十郎吉正 長田金平吉勝總領 生國三河

家 譜

父金平吉勝ハ三州碧海郡大濱之住人長田喜八郎二男ニテ 權現樣ヘ被 召出知行二百石被下後台德院樣ヘ御附被遊病死仕候

權現樣へ十四歲之時ヨリ御奉公仕（御役儀高不知）御他界之後　南龍院樣へ御附被遊御切米八十石被下大番組相勤正保三戌年知行二百石被成下寛文十戌年三月廿六日八拾四歲ニテ病死

養子左平太（後權十郎）之重部屋住ニテ御切米十五石ニ被　召出後三十石ニ成リ一旦改易被　仰付候得共養父　權現樣へ御奉公御他界之後　南龍院樣へ御奉公申上候者故寛文十戌年七月養父知行之內跡目百五十石被　仰付以下代々相續六代權十郎以忠ハ御切米貳十五石御留守居番ニテ享和元酉年四月隱居養子平十郎利勝嗣ク

長尾一在　勘兵衛

長尾一在、初稱山路四郎兵衛、系出於近江佐々木氏、祖父曰山路玄蕃允、父曰隼人佐一勝、一勝初稱山路久之丞、仕神戶藏人友盛、爲伊勢高岡城主、後仕福嶋正則、軀幹長大、有膂力、世所稱四缺唇之一也、（四缺唇者、川田靫物、木田百助、山縣三郎兵衛、及一勝）岐阜關原役、皆有功、爲東條（在伯耆石見界）城主、食一萬石、改稱長尾隼人佐、東照公、嘗稱爲武士中之人參、元和年五正月歿、年七十、一在武勇有父風、岐阜關原大坂諸役、亦從正則有功、福島氏國除、公召而祿之、島原役、與市川淸長等、共屬松平信綱戶田氏西而赴島、後以病辭職、（時爲使番）久而不允、固請、乃允特命曰、如舊職之背旗、當奉之如故、人皆以爲榮、旣而病漸加、久不奉朝請、公問其子勝年曰、勘兵衛病何如、勝年拜曰、未復、公曰•有如島原役之事、則可立復耳、凡人有快意之事、元氣自復矣、勝年歸家具語之、一在感泣、（參取紀士雜談言行錄諸書、）

長尾隼人正一勝

同　勘兵衛一在

按スルニ　長尾氏ノ御家ニ奉仕スル勘兵衛一在ニ始ル父一勝之傳記御家ニ關セサル如シト雖モ　神祖武士之人參ト迄賞シ給フ程ノ名士ナレハ蓋シ　龍祖ノ思召淺カラサリシナラン依テ之ヲ首ニ掲ク文一ツニ家系記スル所ニ從ヒ且ツ信其家ニ就キ實視スル所一勝ノ肖像ヲ載ス

長尾隼人正一勝

長尾隼人正一勝　玄蕃允子　元祖

初ハ山路久之丞ト申父ノ家督ヲ繼織田三七郎ヘ仕高岡ノ城ニ住居壹萬六千石領後福島左衛門大夫正則ニ仕岐阜詰ノ城攻ノ時木佐大膳籠リ衆ニテ致下知居候處手負申候付南部越後ト申仁大膳ニ替リ致下知候時久之丞向フ挾間ニテ附合申候節久之丞缺脣ヲ越後見付ケ我名高聲ニ名乘扱ニ致度トテ降參ヲ乞夫ニ付矢セリ合指留申候由其後慶長五年關ケ原御陣ニ軍功有之正則領國藝州廣島ヘ被移候節家老職トシテ壹萬三千石領備後備中伯耆出雲四ケ國ノ境目東條ノ城大切ノ場所トテ預ケ被申候此節山路ト申名字正則相生惡敷トテ廣嶋ニテ長尾勘兵衛ト改其後隼人正ト改申候

一關ケ原御勝利ノ上左衛門大夫家老福嶋丹波小關石見隼人　大御所樣ヘ被　召出御目見仕候

一朝鮮陣之節正則之供ニ參リ異國ニテ具足羽織幷貳枚屏風押繪丸盃等分取仕候右之内高野山中靜院ヘ納候物モ有之候由朝鮮幷關ケ原ヘ持參之武具馬具等所持仕罷在候處四代目儀右衛門代以前紛失之由承及候今ニ少々ハ所持仕候

一隼人存生ニ自寫置候像所持仕候尤　香巖院樣御代奉入御覽右像ニ左之記御座候

一勝其先者出于江州佐々木四郎、曾祖號山路彌四郎、勢州河曲郡、神戸領內、高岡城主也、祖紀伊守襲領高岡、父玄蕃允、仕于織田三七郎信孝、一勝亦奉仕之、號久之丞、信孝移於岐阜也、讓神戸于其母兄小嶋兵部少輔、高岡賜一勝而屬于兵部、天正十一年五月信孝亡也、兵部爲林與五郎所攻、一勝開門出戰大破圍、後城中無故而騷擾、敵以爲一勝出戰而虛驚遁走矣、兵部自殺之後、一勝仕于福嶋左衞門大夫正則、小田原之役、正則攻豆州韮山、一勝先登呼自名曰、當能看認吾缺口、敵射之、中頰而穿腮、然猶厲進、後又攻也創重而不出、敵呼曰、山路久之亟死乎否、今日不聞其名、其勇膽可知焉、改姓名長尾隼人佐、慶長五年攻岐阜、擒木造左衞門佐、關原大捷、福嶋家臣三人拜　東照神君、福嶋丹波守跛蹇、小關石見守隻眼、一勝缺唇也、侍臣匿笑、　神君恕曰、男子以心之剛爲全、肢体不闕焉、彼三人者武士之人參、欲煎其骨而服汝等也、正則移封于藝州、一勝賜東條城、領一萬三千石、一勝剛毅而有禮、每披正則之手狀、沐浴衣冠、令讀者坐上座、躬拜下座而聞之、加之重義下士之行、世所稱也、嘗參曹洞禪、預治葬具而置于寺、元和己未正月二十九日卒、（一本ニナシ）享年七十、空埋國泰寺、號松雲院傑山常英居士、

贊曰

族派遡流　江源淵深　敬忠無倖
起居維欽　剛毅介確　石膓鐵心
韮山先登　岐阜活擒　藝州甘艸
武門人參　功名顯揚　家聲如金

子々孫々　豈不嗣音

此眞像、蓋居士生時、自令寫之、子勘兵衛一在、孫與六右衛門勝年、置于家廟予與勝年有舊、故誌焉、

一陽齋杢衡正

長尾勘兵衛一在

長尾勘兵衛一在　初代

隼人次男ニテ岐阜關ヶ原御陣親ニ差添相勤岐阜ニテハ本城一番乘仕關ヶ原ニテモ高名仕候其節ハ山路四郎兵衛ト申候處隼人ト一所ニ長尾ニ相成申候其後父ノ名勘兵衛ト改大坂夏冬之御陣ニハ左衛門大夫總領備後守供仕罷越候福島家滅候以後　南龍院樣ヨリ御國へ被　召出知行八百石被下置大番組被　仰付無程御使番被　仰付候處病氣ニ付奉願寄合組被　仰付候其後西國嶋原一揆ニ付上使へノ御使江戶表御人指ニテ被　仰付　上使松平伊豆守殿へ市川甚右衛門戶田左門殿へ勘兵衛罷越大坂ヨリ供仕罷下候由倅與六右衛門モ召連參申候寅二月廿七日原之城落去之節蓮池本丸塀下へ勘兵衛與六右衛門細川越中守殿衆ト相見壹人一所致着候其後大勢相詰本丸へ乘込申候廿八日ヨリ罷還大坂迄供仕夫ヨリ御國へ罷還候處貳百石御加增被下置都合千石不被成下候テ相勤候處正保四年亥十二月病死仕候

信其家ニ藏スル古文書ヲ撿スルニ福嶋正則等ノ書翰數通アリ又一在辭世ノ歌四首アリ小片紙ハ細字ニテ書ス左之如シ

包紙ニ

長尾勘兵衞一在辭世

正保四丁亥十二月晦日

傑山全英居士

行も夢殘るも夢の世の中そ地水火風ハ皆犬くら以

名も當坐後にハ名おもひをせなりてハおくらそちりはいもなし

ミな人の百年迄とおゝろへて望もこのけを名をものおさす

目に見ゆる利德斗かしおくにて一寸さきをしらぬはかなさ

長尾勘兵衞父子岐阜城攻働之覺書

此書ハ勘兵衞一在之子六右衞門ヨリ勘兵衞之故傍輩井伊掃部頭内某方ヘ申遣タルモノナリ御藏本武勇働書之内ヨリ抄出ス

長尾與六右衞門殿ヨリ來

當十六日之貴札今日廿日ニ慥ニ相屆懸御目候心知御床敷事彌増候

一先以御無事御息災之儀以何ヨリ目出度大慶不淺此地ニモ今日マテ息災ニ居申候

一森又右衞門•ハ度御書中之通ニ御座候長之難ガン御存知之通今御推量ノコトクニ御座候（•本ノマヽ）

一ムカシヲカソヘ候ヘハ年月御書中之通今之我等之スカタ浦嶋ト可被思召候カヽミニムカヒ殘多無念ニ存候•左様モチトカハラセラレ候由イマタ左様ニハ有間敷ト存候カ左様ニ御座候哉今一度懸御目コシカタ御物カタリ申度候（•本ノマヽ）

一日外之書狀相屆候由大慶ニ存候タヽ愛元ヨリ便承急候

一ワカヤキタルニ仰聞樣ニテ其時分之樣ニ罷成存出ス儀心新敷罷成候御心安思召間之儀ニ御座候可申趣之由貴面ニテ御物カタリ仕ト存申入候

一慶長五年子ノ年八月廿一日之夜ニ入五ツ過ニ清須打立萩原ノ渡リヲハ夜ノ内ニコシオコシノ渡リヘハ廿二日ノ夜アケ日ノ出ニ着候福左衞門大夫申候ハ我等親山路久之丞先ヘ越候ヘト申付其時鐵砲五十五丁預リ候其鐵砲舟二ソウニノリ一ソウニハ久之丞ノリ一ソウニハ我等ノリ渡リ候オコシヘ着堤ヘ上リ候時タケカハナヨリ出シ候哉馬貳騎堤ヨリ六七丁程ギフノ方ノリ廻シ候テクレニ見ヘ不申候我等オヤ川越候テギフ地ノツヽミヘアカリ候ヘハ堤ハラニ在家御入候頓ニアケ候ト見ヘ申候

一ヒタト路ヨリ渡リ候內福嶋伯耆ト申左衞門大夫養子ニテ候其仁ト靑木清右衞門ト申仁松田七右衞門ト申者柴田十兵衞我等ト此五人半道程ギフノ方ヘ乘込見候ヘ共在々ミナアケ候テ人キレハ無御座候其後左右衞門大夫人ヲ越可戾由ニテ先ヘ不參諸勢揃今ノカノヽ御城所ヨリ壹里カ半里カ清須ノ方ニ陣取廿二日ノ夜ナリヨリ前ニ打立本道筋ニテ少待夜明前ニスイリヤウ寺ノ近邊桑ノ木原ヘ着スイリヤウ寺口ヘハ本庄將監武藤長兵衞靑木清右衞門山田小右衞門我等親山路久之丞此五人鐵砲百五六十丁召連門口ヘ着候ヘハクヽリアキ候テ御入候故ハイリ候テ見候ヘハ山下ハ悉（如本）々アケ候スイリヤウ寺ヲハ石田治部少內カシ原ト申者三千ノ大將ニテヤウカイヲカマヘ居候故山半分ヨリ下ヘオリ下リ外カハノカヤ町ノカタヘヒタ物鐵砲ウチクタシ此方ノ者ハカヤ町ノムネニモタセ打アケサセ申候此鐵砲セリ合ノ內ニ火ノテアケ候ヘト左衞門大夫兩度使番越候ニ付テ門矢倉ヘ我等

參候テツケ候へ共内斗燒外へ見へ不申候ユへ又使番ヲコシ何トテオソク火ノテアケ候ヤト申越候ニヨリウツホヤ口ノ町へツケ申燒立申候其内ニ大手口ノ總カマへノ内ヨリ總勢ハイリ申候スイリヤウ寺口へ着候右之者共ハウツホヤ口ノ町サイ中ニヤケ申候ニヨリ不被通大手口へ廻リハイリ候テ七マカリノ坂モトへカヽリ候へハ左衛門大夫カチ者何カニ廿人斗ニテ被居候ギフへノ寄衆大身小身十二三頭御人々ト覺申候其人數一人モ不殘ミナ山へ上リ候ト見へ申候左衛門大夫我等親山路久之丞斗ソハへヨハレ候テ被申付候ハ手負多出來候ト聞へ候間イツレノツブラヨリ六手ノスハイカケ候テウチスクメ置候へト被申渡ソレヨリ坂へカヽリ一町ホトアカリ候ト上ヨリヒタクツレニ坂道一ハイニ成候テ崩下リ候谷ノ方ニ少高キ一騎ウチノ細道ニテソレへ乘リカケヒタ上リニアカリ候へハ左ノ方ハ本道ニ候崩ヤマスヒタ物下リ候此方ハ上リ坂ニ候へハマカリメノナキ所ハ一町餘モ見通シ候敵ト見へ候者ハ無之ヒタクツレニクツレ申候スイリヤフ寺ワカレ口へ近寄候ト馬ヨリオリ何モ鎗オツトリガンセウ次第ニアカリ候處ニ其時分ハ我等廿斗ニ御座候故山モ坂モ苦ニ不仕ヌキンテ先へアカリ候へハ十二三頭ノ人數下リキリ候ト見へ候テスイリヤウ寺ワカレ口ニハタツレ殘リノ者共アソコヤ爰ニ十四五人ホトモ居申候カト存候ソレヨリスイリヤウ寺カ本丸へカトシアン仕我等ワカタウ二三人ツレ居候へ共談合モ不成我等壹人ノシアンニハトカク大將ノ御入候所へカヽリタルカヨク候ハント存本丸へアカリ申候ス戸ヤ門ヲ越候テ二三丁モアカリ候へ共敵ニモ味方ニモアヒ不申候サテキリハギへカヽリセ筋ヲ一町アマリホトアカリ候ト堀切御入候其ホリ切ノ内ニ我等傍輩ニ犬井金右衛門岡田半右衛門ト申者二人居申候其堀切へ我等モトヒコミ兩人ノ

者ニ上ヘアカル間敷カトタツネ候ヘハ口ニブク候間我等ハ堀キリノ上ヘアカリヌセ筋ヲアカリ候ヘハ一町アマリホト上ニイヤクラノハフマト見ヘ申候其イヤクラヘ着候ハント存ヒタアカリニアカリ候テイヤクラノ下ハ柴手五六尺ホトタカサ有之カト覺ヘ申候其柴手ノカトヨリ下リヘイ御入候其ヘイヘ着身ハカルク御座候右之手ニ鎗ヲツエニツキ左ノ手ニテウテ木ニ取ツキノリ候トワカタウ一人ソレマテツキ候テ參其ワカタウシリヲツキアケヘイヲコシ申候ヘハチクシヤウヨリモ生物ハ日本國中大小ノ神祇弓矢冥加ツキハテ可申ソ居不申ウツノ門ノ右ノカトヘ着候ト我等ノリ候ヲ跡ヨリ見候哉他ノ家ノ者乘候テ内ヘハイリ候所ヲウタレ内ヘコロヒ申候其者外ヘヲチ候ハヽノリ申マシキカ内ヘタヲレ候ユヘ又アトヨリ乘候者モ討レ是モ内ヘタヲレ重リ候其後マハリ候テ門ノ左ノ方ヘ是モ他ノ家ノ者ニテ金カフトハ着不申候一人着申候其者ツキ候テ内ノ石垣ヘヽ是モコサレ候テハト存我等石垣ヘアカリ申候石垣ノ高サ三間ホト御入候柄ミカケテ貳間斗ノ大身ノ鎗ヲ其時持候塀ノチフクチカク成候間鎗不被持候故下ヲ見候ヘハ我等ワカタウマハリテ參候間ナケツケ渡シ候

一我等着候ヘイノ左ニ弓サマ右ニ鐵砲サマ候左ノ弓サマヨリ鎗ヲスジカイニ入カヘ〳〵ツキ出シ左ノコテカタ指物ノウケツヽツキタヽキ候處ヲ我等ワカタウ下ヨリトヰ申候ニヨリオトシツギニハラヲカキサカレ申候ハンカイ〳〵敷ヤツニテヒルミタル體モナク下ヨリヒタツキニトヰ申候其時是ハヤ下ニ四五人モ見ヘ申候其中ニ大夫殿カチノ者岡本源太郎ト申者スハタニテ參候下ヨリ金カフトヲ見テ我等カ名ヲタツネ申候其時シヤウ〳〵ヒノ羽織ヲ着タル者我等着候右之方ニ門之オリ

參候テツケ候へ共内斗燒外へ見へ不申候ユヘ又使番ヲコシ何トテオソク火ノテアケ候ヤト申越候ニヨリウツホヤ口ノ町へツケ申燒立申候其内ニ大手口ノ總カマヘノ内ヨリ總勢ハイリ申候スイリヤウ寺口へ着候右之者共ハウツホヤ口ノ町サイ中ニヤケ申候ニヨリ不被通大手口へ廻リハイリ候テ七マカリノ坂モトへカヽリ候へハ左衛門大夫カチ者何カニ廿人斗ニテ被居候ギンノへノ寄衆大身小身十二三頭御人々ト覺申候其人數一人モ不殘ミユ山へ上リ候ト見へ申候左衛門大夫我等親山路久之丞斗ソハへヨハレ候テ被申付候ハ手負多出來候ト聞へ候間イツレノツヅラヨリ六手ノスハイカケ候テウチスクメ置候へト被申渡ソレヨリ坂へカヽリ一町ホトアカリ候ト上ヨリヒタクツレニ坂道一ハイニ成候テ崩下リ候谷ノ方ニ少高キ一騎ウチノ細道ニテソレへ乘リカケヒタ上リニアカリ候へハ左ノ方ハ本道ニ候崩ヤマスヒタ物下リ候此方ハ上リ坂ニ候へハマカリメノナキ所ハ一町餘モ見通シ候敵ト見へ候者ハ無之ヒタクツレニクツレ申候スイリヤフ寺ソカレ口へ近寄候ト馬ヨリオリ何モ鎗オツトリガンセウ次第ニアカリ候處ニ其時分ハ我等廿斗ニ御座候故山モ坂モ苦ニ不仕ヌキンテ先へアカリ候へハ十二三頭ノ人數下リキリ候ト見へ候テスイリヤウ寺ワカレ口ニハタツレ殘リノ者共アソコヤ爰ニ十四五人ホトモ居申候カト存候ソレヨリスイリヤウ寺カ本丸へカトシアン仕我等ワカタウ二三人ツレ居候へ共談合モ不成我等壹人ノシアンニハトカク大將ノ御入候所へカヽリタルカヨク候ハント存本丸へアカリ申候ス戶ヤ門ヲ越候テ二三丁モアカリ候へ共敵ニモ味方ニモアヒ不申候サテキリハギへカヽリセ筋ヲ一町アマリホトアカリ候ト堀切御入候其ホリ切ノ内ニ我等傍輩ニ犬井金右衛門岡田半右衛門ト申者二人居申候其堀切へ我等モトヒコミ兩人ノ

者ニ上ヘアカル間敷カトタツネ候ヘハ口ニブク候間我等ハ堀キリノ上ヘアカリヌセ筋ヲアカリ候ヘハ一町アマリホト上ニイヤクラノハフマト見ヘ申候其イヤクラヘ着候ハント存ヒタアカリニアカリ候テイヤクラノ下ハ柴手五六尺ホトタカサ有之カト覺ヘ申候其柴手ノカトヨリ下リヘイ御入候其ヘイヘ着身ハカルク御座候右之手ニ鎗ヲツエニツキ左ノ手ニテウテ木ニ取ツキノリ候トソカタウ一人ソレマテツキ候テ參其ワカタウシリヲツキアケヘイヲコシ申候ヘハチクシヤウヨリモ生物ハ日本國中大小ノ神祇弓矢冥加ツキハテ可申ソ居不申ウツノ門ノ右ノカトヘ着候ト我等ノリ候ヲ跡ヨリ見候哉他ノ家ノ者乘候テ内ヘハイリ候所ヲウタレ内ヘコロヒ申候其者外ヘヲチ候ハヽノリ申マシキカ内ヘタヲレ候ユヘ又アトヨリ乘候者モ討レ是モ内ヘタヲレ重リ候其後マハリ候テ門ノ左ノ方ヘ是モ他ノ家ノ者ニテ金カフトハ着不申候一人着申候其者ツキ候テ内ノ石垣ヘ一足モコサレ候テハト存我等石垣ヘアカリ申候石垣ノ高サ三間ホト御入候柄ミカケテ貳間斗ノ大身ノ鎗ヲ其時持候塀ノチフクチカク成候間鎗不被持候故下ヲ見候ヘハ我等ワカタウマハリテ參候間ナケツケ渡シ候

一我等着候ヘイノ左ニ弓サマ右ニ鐵砲サマ候左ノ弓サマヨリ鎗ヲスジカイニ入カヘ〳〵ツキ出シ左ノコテカタ指物ノウケツヽツキタヽキ候處ヲ我等ワカタウ下ヨリトヤ申候ニヨリオトシツキニハラヲカキサカレ申候ハンカイ〳〵敷ヤツニテヒルミタル體モナク下ヨリヒタツキニトヤ申候其時是ハヤ下ニ四五人モ見ヘ申候其中ニ大夫殿カチノ者岡本源太郎ト申者スハタニテ參候下ヨリ金カフトヲ見テ我等カ名ヲタツネ申候其時シヤウ〳〵ヒノ羽織ヲ着タル者我等着候右之方ニ門之オリ

カ御入候其オリヘ着我等ノコシノ通マテアカリ我等右之方ノケサンヲツカミ我等カフトヲ見テ左衞門大夫様ノ御衆ト見申候御名承度ト申候間福嶋左衞門大夫内山路久之丞ト申者ノ二ハンメノセカレ山路四郎兵衞ト申者ニ候ト名ノリ候其後我等ト同タカサニアカリ申候我等右之方ノ鐵砲サマシヤウ〱ヒト我等ノ間ニ候故シヤウ〱ヒハ左之手ニテカナクリ我等ハ右之手ニテクツシ申候ニ付テキ是ヲ見テカタナトワキサシヲ出シクリマハシテクツサセ不申候其後ハ下ヘ大勢着申候門ノロソヘテ十間アマリノ間ニハヒタトサマセリ合ニテ候其間ニシヤウ〱ヒカ主ノ名ト又シヤウ〱ヒカ名ヲタツネ申候ヘハ長岡越中内牧新五ト名乗候サテ前之鐵砲サマヲ我等ト新五トコワシ候サマモカタナニテクリ廻シ候事ウスク成候ニヨリヒタコワシニコハシ申候マヽ見ゴトハイリ候様ニ成候故シヤウ〱ヒニコサレシトテ我等ハイリ候又シヤウ〱ヒ我等コシニ取ツキ候様ニシテハイリ申候其次ニ左衞門大夫普請奉行サセ候ツネ川角右衞門ト申仁ハイリ候其次ニ加藤三右衞門ト申者ハイリ申候是モ大夫殿モノニテ候此四人ハカリニ候其時南部越後ト申仁伊豫ニテハ大夫殿ニ居申人ニテ候此仁コモリ衆ニテ我等親久之丞ムカヒサマニテ下上ヨリツキ合申候時久之丞イクチヲミテ上ヨリヌシ名ヲナノリアツカヒニイタシ度トテカウサンヲコヒ矢留セリ合留リ候其時マテ右四人ハ内ノヘイニソイヌキカタナニテ居申候ヘ共南部ト我等オヤ久之丞ト和談ニテシツメ候故シヤウ〱ヒモツネ川モ加藤モ右之ハイリ候アナヨリ出下リ候我等ハオヤ久之丞ヲ南部上ヘ引アケ申候ニヨリ其所ヘ參本丸ノ家ノ内ヘハイリ候テ又テンシユノ下カフキ門ノ内ニ木造左衞門尉ト申仁手負被居候處ヘ參居申候其所セハク候ヘ共大夫殿内物頭何カ二十人斗ト其内ノモノ七八

人モ居可申カト存候其晩ニ中納言殿御サカリ候ニヨリテンシユヨリ御理ニテ寄衆ニ先ヘサカリクレ候ヘト御申ニ付ミナミナサカリ申候其日ノ晩牧新五越中殿ヘ申候ハ福嶋大夫殿御内山路久之丞子山路四郎兵衛ト申仁ト一度ニ詰ノ丸門口ヘ一番ニ着石垣ヘアカリヘイニツキサマヲコワシノリコミ申候其シサイ山路方ヘ御タツネ被成被下候ヘト申タルニテ越中殿被仰候ハ其オヤ山路久之丞ハ御存知之者ニ候ウタカヒ有間敷トノ御感ニ預リ候ト承候扨丹後御替リニテ九州豊前ヘ御越候テ牧新五丹後ニテハ貳百石取候者ニ五千三百石御加増ニテ五千五百石ニ成申候其明年又千石御トラセ候テ六千五百石ニ成申候我等モ知行コソ取不申候ヘギフニテノ働ハ同前ニ候

一右之一通ハ長尾四郎兵衛後ニハ勘兵衛ト申候今之與六右衛門父ニテ候四郎兵衛故傍輩井伊掃部殿ニ罷在シカ岐阜ニテノ様子申越候ヘトノ時遣シ候状之ヒカヘニテ候與六右衛門方ニ御座候ヲ所望イタシ寫申候此奥ニ四郎兵衛兄出羽守關ケ原ニテノ働之事一ケ條有之候ヘ共ソレハ別儀モ無之由ニテ與六右衛門越不申候

與六右衛門口上之咄

一山路久之丞其時四十餘ニテ可有候

一四郎兵衛石垣ヲ乗候時ドヨリ尻ヲツキ上候若黨ハ藤右衛門ト申者ニテ候腹ヲツキサカレ候者モ同人ニテ候

一石垣ヘ着候時木造左右衛門胄ヲハヌキ塀之上ヘ出下ヲ見ヲロシ下知致シ居申候所ヲ松田七左衛門家來ノ持タル鐵炮ヲ取打候ヘハ左右衛門ガ口ト鼻トノ間ヲ打抜キ申候又七左衛門カ家來打タルト

モ申候其手ニテ左右衛門ハ引入其カハリニ南部越後出候ト見ヘ申候由

一長尾父子ワカレ候ハ馬ヨリ下リガンゼウ次第ニ書付ニ御座候處ニテ四郎兵衛石垣ヲノリ候内ニ父モ其所ヘ來リ扱ヲ取持申候南部越後扱ノ事申候ヘハ隼人心得候ト返事ヲ致シナカラ左右衛門大夫心底ヲモ不知候故ヤウチナルシカタト可被存カト思召家來ヲ以テ左右衛門大夫内意ヲ窺ニ遣シ候其内ニ南部ハ扱ノシルシニ其方ガホロノ出シヲアケ候ヘト申候ヘ共隼人右之所存故出シヲバアケ不申候其内福嶋丹後其所ヘ來ル故隼人右ノ子細ヲカタル丹後申候ハ左右衛門大夫手前ハ我等請合候ヘハ出シヲアゲ候ヘト申候得共隼人猶相待申候其内左右衛門大夫返事來扱ヲ請候ヘ但南部ヲハ生捕候ヘト申コサレ候是ハ南部元福嶋所ニ罷有福嶋惡ミ有之ニ依テ也此返事ヲ聞出シヲアゲ降參ヲ請ル其内ニ南部ハ何方ヘヤラン退候由

一龜田カ書付ニ有之長尾勘兵衛瑞龍寺ノ一番乘ヲ心懸候事與六右衛門ニ相尋候ヘハ其段々不及承由但シ久之亟噂シ候ハ今日龜田ト近付ニ成申候我等カスヒヅヽヲミテ酒ヲ持給フトミヘタリ一盃申請ントテ互ニ名乘近付ニ成リタルヨシ是ハ岐阜攻ノ日ノ事之由

一井上記ニ有之内野平左衛門事尋候ヘハ相違ニテ候森田平左衛門ト申者ハ有之内野平左衛門ハ無之森田ハ關ケ原ニテハ軍法ヲ背能カセキ仕候カフトノ印團ニテ候軍法ヲ背候故左右衛門大夫ヨリ穿鑿候時隼人カ家來ト申候ハヽ中々福嶋ユルシ申間敷候福嶋使番之内青木清右衛門同團之印ニ候間清右衛門ニテ候ト申可然トノ談合ニテ其通ニ申難ヲ遁申候此平左衛門總テ武篇者ニテ候大夫殿身上相果候時長尾出羽方ヘ加藤左馬殿ヨリモラヒニ被越知行千石クレラルヘキ由故出羽モ參リ候ヘ

トシイテ申候ヘハ平右衛門ブケウイタシ夫ハ士ノ本意ニアラス候タトヒ其方ノ許ニテ釜ノ火ヲ焼候ヘトテ他所ヘ參ル者ニテ無之候由故出羽作州ヘ有付候後三千石之内五十石カ五百石トラセ于今其子孫罷在候

一隼人嫡子出羽守ハ福嶋刑部ニ附罷在候刑部　權現様淸須御着迄淸須ニ罷在城ヲ相渡シ十一日之晩赤坂ヘ出陣仕故岐阜ヘハ不參候關ケ原之日ハ能ク相働キオモテヲヲヒ候故弟四郎兵衛才覺ニテ關ケ原之焼跡ニ小キ宮一宇有之ヘカキ入レ看病イタシ候夜中大雨ハ降リ食物ハナシ難儀ニ及候故御本陣近所之衆ヘ使ヲ遣シ福嶋者ニテ候ガオモ手ヲ負難儀仕候ミソヲ少シ給候ヘト申候ヘハ誰ニテ候ヤラン味噌ヤ米ナト給リ夫ニテ息ヲツギ翌日出羽守ヲハ淸須ヘ遣シ四郎兵衛ハ大夫殿跡ヲ追ヒ參リ候ヘハ諸勢モ福嶋家中ノ者ト見候カ道ヲヨケテ通シ申候大夫殿ハ佐和山ヘカマハス越智川ヘ被通候由故四郎兵衛モ追付參ル夫ヨリ都入ニテ候以上

一二代目ヲ與六右衛門勝年ト云則李梅溪ノ友タリ父勘兵衛跡目知行六百石賜リ寄合組ヨリ物頭ヲ勤貳百石御加增御先乘根來頭御鎗奉行ニ歷任シ後病氣願ニ依リ寄合組トナル貞享二年丑十二月病死後世々相續ノ内幼少名跡等アリテ漸次三四十石ニ減祿ス九代勘兵衛ニ至テ烈婦都留女アリ十代勘兵衛勝斌陸軍大尉奉職中横難ニ罹リ死ニ至テ職ヲ辱シメサルノ事等烈女傳ニ併記シ爰ニ略ス

一先祖一勝カ關ケ原及ヒ賤ケ嶽戰ニ用ヒタル名刀二振リヲ持傳タルノ處明治十四年九月廿六日都留女ヨリ　南龍神社ヘ獻納今寶庫ニ存ス左之如シ

劔銘藝州東條城主長尾隼人佐一勝指之　一口

劔銘　元重　一口

一福嶋左衛門大夫陣鑓ニテ賤ケ嶽七本鑓ノ時用ヒタルヲ先祖隼人佐拜領關ケ原高麗陣其他所々ノ戰陣ニ取持ノ由申傳ヘ後代ニ至ル迄持傳ヘタリト云

右鑓身八寸銘相模守藤原政常裏ニ福嶋市兵衛トアリ

成田彌三右衛門守行

一麓之士ニ曰ク菩提心院樣御代御勝手御用ニ付松本甚五衛門上總之方ヘ參リ色々術計ヲ廻シ金子才覺致シ罷歸リ御用役之席ニテ右才覺之致方辨舌能ク咄シ候テ自慢ノ樣子ニ有之候處篤ト申終リ候テ其席ニ罷在候成田彌三右衛門申候ハ甚五左衛門正法ニ寄妙ナシト申ソヤト申候ヘバ流石之甚五左衛門一句モ出不申私宅ニ歸リ候テ扨々成田親父ニ壹本サヽレタリ殘念之事ト申候由

家譜ヲ按スルニ　先祖彌三右衛門直證ハ加藤肥後守清正ニ仕ヘ五百石ヲ領セシ處肥後守忠廣落去之砌リ浪人母ハ水野和泉守忠重之女ニテ其姉清正之室　瑤林院樣御母之御由緒アルヲ以テ彌三右衛門直證寛永十七辰年八月　御家ヘ貳百石ニ被　召出後五百石ニナリ　瑤林院樣御附被　仰付右ヨリ四代之孫則彌三右衛門守行ナリ守行實ハ加納大隅守政信三男ニテ成田彌三右衛門行廣之養子トナリ享保七寅年十月養父跡目知行七百石寄合組ヲ被命　菩提心公御代ニハ知行千石大御番頭ニテ御勝手御取締向御勘定奉行申談勤大奥方御用ヲモ勤タリ此比　截姫樣御上京御婚姻　愛君御下向御婚禮相姫樣勝姫樣致姫樣悦姫樣御婚姻等重ネ々々之御入費差湊御操合至極御困難トノ事ニテ松本甚ハ左衛門モ御廻逝筋盡力シタルナルベシ彌三右衛門後大寄合ニ進ミ千七百石ニ御加增明和八卯年二月隱居仙道ト號シ天明五巳年三月八十一歲ニテ病死以下代々相續ス

南紀德川史卷之四十六

名臣傳第七

村上義清　彦右衞門　按駿河分限帳、在寄合衆之列、祿四千二百廿石、

村上義清、其先出於信濃村上氏、父曰右衞門大夫通康、移伊豫、依河野氏、得井半右衞門通之、來嶋出雲守通總、皆其兄也、本州壬生川之役、義清年甫十四、力戰有功、年十八、初謁豐臣秀吉、賜百口俸、屬黑田長政、征韓役、屢有殊功、後仕福島正則、元和五年屬公、後爲總軍武者奉行、寛永十五年七月歿、年七十六　採摭諸書

福嶋氏國除、保城之儀既決、於是、諸士契家而逃者、後先相繼、福嶋丹波憂之、欲諭止之、義清曰、何爲止之、丹波曰、人衆逃散、恐難爲保守、義清冷笑曰、保一城以敵天下、固不足戰也、何止逃者、某雖怯乎、以一身鬪國之士、與坐正寢剖腹焉、未足爲我公之辱也、保守之計、某一人而足矣、無用之徒、祇足以爲累耳、何憂人衆逃散哉、　近史餘談

家譜

村上彦右衞門義清　河野彈正少弼通直聟、村上右衞門大夫通康二男、初竹松又彦四郎　生國伊豫　慶長四年ヨリ福嶋左衞門大夫正則ニ仕フ

一元和五未年九月中比大埼玄蕃村上彦右衞門眞鍋五郎右衞門水野次郎右衞門京都へ御呼被成本多上野介殿安藤飛騨守土井大炊頭殿酒井雅樂頭殿此四人ヨリ竹田釆女使ニテ四人之者共紀州　中納言

樣ヘ被遣候トノ　上意ニテ候早々參候ヘトノ御事ニテ十月二日御當地ヘ參着同六日ニ御禮申上候

一元和五未年月日不知被召出御藏米三百石被下

一同六申年九百石同七酉年千貳百石同九亥年四千二百二十石被　仰付

一寛永十五寅年七月廿九日病死　于時七十六歲

村上彦右衛門通重

彦右衛門通重　義清總領　初才藏

元和八戌年部屋住ニテ被召出知行五百石被下　寛永十五寅年八月父彦右衛門爲跡目四千二百廿石無相違被下　慶安四卯年十二月日不知　御暇被下右ハ牧野兵庫一件ニ付御暇被下候旨申傳候　明暦二申年四月六日於豫州病死

按スルニ通重御咎ハ牧野兵庫ニ與ミシタルニ非ス唯堀部佐右衛門カ書類ナ尋レタル不束有リシ事トノ儀牧野兵庫カ傳ニ詳ナリ

村上與兵衛通同

與兵衛通同　通重總領　隱居後不制

慶安二巳年部屋住ニテ被召出御切米百貳拾石被下置　宰相樣御小姓被　仰付　承應元辰年御暇被下明暦二申年歸參被　仰付寄合組御切米百三拾五石被下　万治三子年四月知行千石被下後大御番頭御城代ヲ歷任千貳百石ニ御加增元祿十二卯年九月依願隱居養子三十郎通泰ニ千石被下寶永七寅年八月八十歲ニテ病死

以下代々相續五代與兵衛通村ハ御家老加判之列三千五百石ニ至リ以後代々遺領無相違被下御家老相勤六代與兵衛通貫ハ諸大夫伊豫守ト稱シ九代與兵衛通榮ハ文久三亥年ノ比大寄合タリ

一牧野兵庫頭一件に云く　村上彥右衛門御暇被下候子細は堀部か一件にて藤堂和泉守殿よりの書狀を兵庫頭に可渡子細なし渠か感をかりて佐左衛門へ意趣を遂けんとするの仕方武士の身に有間敷仕方と思召御暇給はりし全く彥右衛門左樣の心いきにて有之間敷なれとも無下に狀を取られ其分に差置たる處を御咎め申開かたく是非なき事なり

一又云く村上彥右衛門弟同八十郎迚無足にて御小姓を勤め其身は科なしといへ共兄の科によつて是亦浪人す其節金子貳百兩被下拾年過て八十郎被召返五百石給はる時に八十郎金百兩包を取出し此金子は私御暇被下候節浪人の難儀を被思召被下置誠に以て申上難き御思召之程骨髓に徹し候故何卒是を不遣自然の事も候はゝ此金子御馬先の御用にも可立と存大切に所持仕候へ共此度ヶ樣に過分の知行被下置候へは此金子上納仕度と願ふに頭も是を聞尤なる申分潔白なる儀なり此金子預り置候迚扨年寄衆へ支配より其趣申立けり年寄衆にも取扱致しかたく　上へ申上けれは御聽の處　上意には八十郎暇を遣す時金子貳百兩とまさしく覺へたり詮議せよと被　仰出御金預り中村宗左衛門へ取調御用人衆より其時の御帳には二百兩と有り然は八十郎百兩は遣ひ殘りを差上しならんと申上候八十郎へ御詮議之處元より百兩拜領仕り金百兩と書付あり封印も中村宗左衛門押たる儘也二百兩の內共書付なけれは宗左衛門へ嚴敷御詮議有りける處浪人するものに被下候金子よもやヶ樣に遣すして出すへし共歸參すへし共思はさる故百兩は宗左衛門押領したる由露顯し申わけ立すしは首をはねられけり慾心邪智にくらまされ御念比に金子を被下程の者なれは若歸參する事もあらんかと遠き慮りも可有事なるに士の道に背きし故淺間敷御仕置被　仰付けるとなり

一八十郎ハ村上與兵衛と改め五百石被下御城代を勤め入道して不（勢〔制か〕）と號し長命にて終りける當時村上與兵衛の祖也

系譜を按せるに　彥右衛門通重弟は村上又八と稱し新規被召出四百石の御小姓なりしか兄と同時に御暇被下とありて八十郞なるものなく又被召返の事なし且入道して不勢と號云々等によれは本文は與兵衛通同の事たる明なり祿高隱居名皆系譜によるを正とす

彥右衛門義淸一代の軍功取調差出へく旨其子彥右衛門通重へ被　仰出家來山野井左右衛門等認め寬永廿年八月（通重御暇被仰付九年前なり）呈出の一卷なり左に附記す

村上彥右衛門義淸働私共覺候分書付上申事

一奥州たこなの城敵重（兒）籠城の刻彦右衛門九歳にて初陣兄德井半右衛門十三久留嶋出雲守十歳何も自身の働無御座候へ共爲家中攻落申候事

一奥州とうせん竹の子合戰の時彦右衛門十四歳にて御座候敵は黒川同爲加勢石川勢張出申候久留嶋勢幾にて指むらひ候處に敵待伏仕候を味方の先手不心得にて被追立總敗軍仕壬生川のかこひまて引取候處に彦右衛門壹人道より少脇ふ古塚御座候高所へ上りこれふて討死可仕とふみ留下知仕候付味方之内村上三右衛門見付候て引返し一所ふ居申候敵大勢參り候中より八九人程進出さしむらひ候處に則彦右衛門鑓合申候三右衛門も同前に合せ申候其内に味方の者共引返しつきかゝり申故敵敗軍仕候事

一太閤様播磨に御在陣の時彦右衛門十八にて御目見仕り則百人扶持被下候然處太閤様中國へ御向被成備前高松之城御責被成候刻淺野彈正殿は西國への舟手被仰付候彦右衛門も同前に被仰付候こゝに彦右衛門は西國の案内を存舟手功者にて可有候間御頼被成候由にて彈正殿へ御附被成候其時彈正殿舟ともほとく迄參候備前の小嶋を彈正殿御責可被成とて小嶋へ物見ふ御越候刻則彦右衛門手舟壹艘にて同道仕ほとくより下津井の浦迄參山へ上り小嶋の様子とも見及候折節敵大勢うち出候と相見候付彈正殿へ彦右衛門申候は敵大勢さしむかひ候近付候ては舟へもれりふね申ものにて候間急御舟へ御れり候へ私儀はあとをふせきすきまを見候て舟へ乘り候事はやさく候と申に付て左候え舟へのり候半と御申候内程なく敵二三百程うち懸參候彦右衛門手勢ふて右之處より少下り山影ふひらへ待伏仕候處に大勢の内四五十人程進み參候ものと出合早速追拂候に付跡よりの同勢も

くつれ申候其内に彈正殿ハ舟へ御のり被成候彥右衛門もあとより舟へのり申候又敵船近近參候へ共船と陸とニて別條無御座候夫より彈正殿ゑわくへ御歸被成候其時分大閤樣備前の內庭瀨のとろと申處ニ被成御座候故彈正殿彥右衛門同道被成御本陣へ御越候處其日太閤樣は高松の貴口の山見に被成御座候て御歸候時分路次まて御越候て御目見にて候其時太閤樣御馬より御おり被成曲系ニ御かゝり御座候則彈正殿右下井にて彥右衛門申分働の樣子被仰上候殊の外御感ニて御感狀御甲御召被成候て御座候御羽織幷米五十石船中飯米に仕候へとて被下候事

一豫州久留嶋出雲守籠城の時よせ手ハ中國勢豫州ものこらす中國へ一味仕候付て太閤樣へ久留嶋より加勢にあふけふね被下候へと申上に付て太閤樣より彥右衛門參候樣ニと被仰付またあたけの奉行ふは淺野彈正內證成者遣候へと御意に付則あふけ奉行ふは彈正內淺野三十郎と申者參候久留嶋かゝへの城糸山うのすわ琵琶か首にて候然候にひわか首の山々かさには中國勢陣をうち其山の下入江にも中國舟多くよせ其濱にも陣をうち度々の合戰毎日矢軍仕候處に寄手山の峯より少下へさかり矢切を付夫より石火矢なとうち申候處に彥右衛門申候は舟とも三手にわけ關舟ハ何れも兩浦へ付ゑはゐへ上り矢切を取くつし候へ左候ゑ敵打出可申候條あたけ舟はしゐの出ゑなのおきへ廻り大筒ニて打立可然と申付則關舟の人數ハ濱へおり立候處あんのことく敵峯より見付候て人數出し矢軍御座候夫より敵琵琶か首を越可申と相見候處彥右衛門味方をそなれ先懸仕り則琵琶か首にて鑓合候時あとより味方の內たんげ仁兵衛かけ付參候て夫にて討死仕候仁兵衛首を敵より取候半と彌きをひ申候へ共彥右衛門ふせき申候故敵はわか首をも越不申ゑはらくたゝかひ申候處に味方あ

たけの大將淺野三十郎沖より横合に大筒打立申に付敵悉くひき申候其後右之死人此方へ引取候て歸り申候右の次第度々のはたらき下知の樣子彈正殿へ淺野三十郎具ニ申候へは太閤樣へ彈正殿被仰上（一本に候）付獮手から無比類よし御意に付て御感狀參候事此籠城の內信長樣御他界之樣子相聞候付毛利殿より御噯入候て久留嶋和談仕候ゑこれとも彥右衞門儀は太閤樣より御意なき內は和談仕間敷と申親通康隱居城日高へ籠城仕候事

一豫州日高之城彥右衞門一國一城ニて三年籠城仕候中國豫州一同之人數方々に陣をうち日高の城取まき罷在候難所にて候故責入候事も不相成兵粮詰に可仕樣子ニて候へとも其內ニ城より方々へ度々夜打を仕兵粮取仕候或は中國より兵粮船參候を城より見付候ては道ニまちふせを仕悉打取候故三年の間籠城飯米續申候然處に二年目の何月に大閤樣へ籠城之次第彥右衞門言上申候へは永々の籠城奇特千萬手柄に思召候とて御感狀參候則毛利殿とれ和談被成候間此上れ日高之城毛利殿へわたし候へ彥右衞門知行にれ豫州の內きくまの里被下候其段毛利殿へ被仰遣候とて隆景よりも彥右衞門方へ御使參候て相濟申候就夫毛利殿より城御請取候半と被仰候付彥右衞門申候は左候は總人數御引候へ城相渡し可申候無左候はゝ渡ましきよし申（一本に候）付中國勢不殘引申候其內に宍戶は日高之城より四五町ほと間御座候さるのかう村に川を隔陣をうち總人數より二三日も引不申居申候故彥右衞門不審に存何とある樣子にて候哉（本ノマヽ）にくき仕合とて夜討をかけ申候其時彥右衞門申候は人數を二手に分け半分れ後へ廻し扨（面口）より時々聲を上ヶ候へ左候へ陣所の者のこらす面へ可指向候條其時後より切込候へと下知申候處案のことく敵面へ出むかひ候を大勢打取大將宍戶ヶもうち取

候て夫より陣所に火を懸相圖の貝をぬき引取申候自然敵付入なと候へハとてきり火繩に火を付け竹ふそさみ此方の川端ふ餘多ゐて置候案のことく敵付參候へ共火繩の火を見付大勢居候と存候哉川を越ト參候夫より捨置候焼草に火を付其あかりにて味方のおらすあつまり城中へ引取申候其段毛利殿遺恨に思し召し候へ共太閤様より御意重に付別條なく毛利殿被思召（一本に候）付大閤様より申參候通彌城わたし候へと申參候付則本丸をゐ中國衆へ渡し彦右衛門は二ノ丸へ下り居申候其暮やくそくの筈ちかひ知行少も可渡様子にて無之故首尾違候とて彦右衛門又日高之城番のもの追おろし夫より明る年迄籠城仕扨太閤様へ右之旨言上仕候へは其時太閤様より重て彦右衛門へ御書參候は毛利とかふく筈御取被成候處に相違仕候哉又毛利方へ被仰遣候間左様相心得候へと御諚御座候故其後きくまの里受取候て城渡申候事

一高麗御陣文祿元年小西攝津守殿壹岐嶋よりそし沱て御渡海之時黒田筑前守殿ハ宗對馬殿城下府中と申所へ御着被成候小西攝津守殿ハ對馬之内高麗渡口といさ沱と申所へ御着にて候といさきと府中との間二十里程と申候筑前殿彦右衛門衣笠久右衛門兩人へ被仰付候は攝津守殿高麗へ夜中にても被渡儀可有之候間様子見合候とて彦右衛門へ早舟四十二挺立壹艘衣笠久右衛門へもせき舟壹艘被仰付候攝津守殿高麗へ被渡候そ衣笠久右衛門はとい崎より府中筑前殿御座所へ歸り候て注進申上候へ彦右衛門は攝津守殿被渡候そとくさま高麗へわたり候へと被仰出候付則舟急ふせといさ沱へ參候へはそや攝津守殿ハといさ沱ゟ御のり出し舟そるゐに見へ申候付久右衛門ハ夫より注進に罷歸候彦右衛門ハ則高麗へのりわたり候其内に攝津守殿ハふさんのいの城御取廻し城石ゐきの下

そはこのけにきよくろくふ御懸り候て城へ射込を被仰付御座候處へ彦右衛門參り攝津守殿へ口上之趣申わたし候内に城を乗申候故攝津守殿人數同前乗込首三ツ取内一ツハ自身取二ツは鑓付家來之ものにとらせ申候再半弓高麗刀取候て又舟にのり筑前殿御迎に罷出候則海中にて右之首半弓かたな同前に御目にかけ候時殊之外御感に御座候事

一辰ノ年四月十六日の晩筑前殿彦右衛門へ被仰渡候ハうるうさん口へは加藤主計被參候と相見候間何方にても敵城在之所を見立候へと被仰付同十七日之朝きんむいの城彦右衛門見付候により濱そとまて舟よせ候處敵馬上にて二三十騎のり出し矢を射かけ申(候)[一本に]付下々鐵砲をうち可申と申候へそ彦右衛申候ハ鐵炮なとうち候ハヽ若城明ケのき候得そとて鐵炮うたせ不申急舟を出させ筑前殿御座候所へ同日の晝時分ふ參右之様子申上候へそ御機嫌のよしにて則其晩御取まき被成候同十八日之夜明に落城申候其時筑前殿彦右衛門へ御意被成候ハ其方今日之働其上今度之城ハ其方才覺を以攝津守主計同前ふ首數日本へ御渡し上ケ候事御感の御意ふ御座候事

一同四月廿日之晩筑前殿彦右衛門へ被仰渡候ハ此川上の在々を燒拂候へとて鐵炮貳百挺其上後藤又兵衛與力之内能嶋は彦右衛門與力之者共召連候て關舟參候處迄の川之左右やき拂候へと被仰付候故早速やきそらひ同廿三日之晝程に(ち)[ち一本ナシ]やくさんの城見へ申(候)[一本に]付舟よりあこのり候て東口と存候かたへかヽり鐵炮共うたせ手つよく責申に付敵西之方へ落候と見へ候間何れも與力の者とも西口へ廻りのき候武者共うち取候へと申彦右衛門ハ東より手廻り斗りにて乗込候則落城申候都合首數三百余と存候落城候て則其城に彦右衛門居申城より一里程之川端へ札をたてさせ候は黒田甲斐守内

村上彦右衛門ちやくさんと申城せめおとし則城に罷有候と書付置しを筑前殿使番衆右之札見付さり候て筑前殿へ上け候へて敵城を取まき候へばと被仰夜中に彼城へ御押被成候同廿四日の日の出に後藤又兵衛馬印見へ申と矢倉より番の者彦右衛門へ申候又筑前殿も先手同前に御越被成候哉御馬印も見へ候と申に付則彦右衛門迎に出候へは筑前殿御意被成候ハ少人數にて城乘取候上其儘城に居候事被聞召付候故敵よせ候得はと思しめし夜通しに被成御座御意にて首數御覽被成殊の外御機嫌に御座候其時爲御褒美領地貳百石出申候其後筑前殿總人數方々廻り首取參候へと被仰付候へとも彦右衛門人數ハ前日に骨折候間休候へと御意御座候則日本へちやくさんの城廿三日に責おとし申との御注進にて首數多參候事

一きんむいより都へ御押候道七日路ほと御座候其時先手衆道をふみちかへ少々間人數立置候處筑前殿御意被成候ハ何たる事にて人數おし不申候哉中揃の人數先手を越押候へと被仰付候により中揃之のほり參り候へ共先手衆通し不申候然處に黑田兵庫筑前殿へ申候ハ日本にても道をばふみ違申ものにて御座候ヶ様なる儀御意被成候ハ如何かと被申候付先手衆無理に先へ人數被押候時一里ほとの原御座候其先に松の木山有之候其中に敵大勢居申候を見付追拂可然とて彦右衛門一番に馬乘込申候後藤又兵衛黑田次郎兵衛もそやく御座候敵あまたうち取候へ共何もうち捨にて御座候事

一都と古都の間に大川御座候彼川迄都より十六里御座候一番小西攝津守殿人數參候へ共彼川ふ番舟四五艘御座候川むかひにハ人數多く御座候付攝津守殿先手何とも成間敷と被存候哉古の都へ歸り候を筑前殿御聞被成先手被成候然處ふ十八日の朝六ッ半時の比川むかひより敵此方へ人數を渡し

申に付追拂可然といつれも御相談の時彦右衛門早速懸出し候其外何れもかけ出し申候て追拂うち捨にて御座候其より皆々陣山へ引取申候其時彦右衛門跡無心元存候哉しんかり仕候處敵付參候を又追拂引取申候其道にて上原新左衛門鐵炮の者三人彦右衛門へ申候ハしつはらひ被成候ハ彦右衛門殿と見申候上原新左衛門組鐵炮の者にて御座候御見知被下候へと申候夫より彦右衛門陣山へ歸候事

一同日の四ツ過時分敵四五百ほと丸山の高所に居申人數之躰無心元とて物見に彦右衛門黒田勘右衛門參候山之後能見及罷歸候節勘右衛門山かけより引のき歸り候故勘右衛門へ彦右衛門申候ハ其ハ矢道にて候間山かけへより候へと申内にはや勘右衛門ハ躰おとし候當座に果申候勘右衛門死骸をすて置候てハ如何とて彦右衛門取退させ候處に後藤又兵衛朝合戰に手を二ヶ所負候得共是も物見に罷越彦右衛門居候處へ參り申候は大敵之儀候間以來の證據には我等立可申候條勘右衛門死骸をは捨置可然と申又兵衛ハ歸候然とも勘右衛門死骸を捨置候事如何と彦右衛門存候哉手前の者壹人勘右衛門者壹人にて一二町ほとわきへ引のき谷合のしけり御座候其中へかくし置歸申候然處にほとなく陣山へ敵數萬騎寄せゝてをつき參候味方との人數の間五十間の内外に見へ申候其時又兵衛彦右衛門へ申候ハ敵大軍の儀に候間鐵炮まはらにうたせ候てハ如何に候てつぼううたせ候事も各われら見合下知にてうたせ可申候しかしなから拙者手負候間我等組の者も彌下知候て給候へと被申候彦右衛門申候ハ其段尤候拙者存候も敵のはたらき見合總人數一度につきかゝり能候半哉と申候へハ又兵衛も其通可然の由申互に馬を入違下知申内に彦右衛門見及候栭のいろめき候處を見合

能時分と存一番にのり込候付又兵衛上原新左衛門も其まゝ乗り込候故其外いづれも總人數一度ふかゝり候て敵敗軍仕おひうちに數人うち捨大川の端迄追詰申候明る日筑前殿御越候て敵數人うちとりたてあまた御座候を御覽被成其上右之次第一々御聞屆被成殊の外御感に御座候事

一都より古都へ筑前殿御座被成候間に川御座候其川をそは小西攝津守殿先手衆被居候又川上枝川には加藤主計殿先手衆被居候中ハ筑前殿先手の筈にて御座候然所先手の内にて彦右衛門衣笠久右衛門川々の樣子見合候半とて何もより先へ參候處に番船あまた懸り居申候折節川そふに小舟つなきすて御座候其船へ彦右衛門久右衛門乘候て川上に有之番舟へ押かけ參候處ふ敵皆川へ飛つかり一艘明退候舟大く候故則其舟へ乗りうつり又敵有之舟へのりかけ候て敵あまたうち捨都合番舟二艘取申候其時此方に手負死人も御座候其内に殘る番舟ともハ乘退申候其後あさより先手みな〳〵參候て何も舟にて川わたし申候筑前殿御聞被成彦右衛門久右衛門へ御意被成候ハ爲多人番船責取事一入御感に覺し召し候との由に御座候事

一ゑいあんの城に唐人籠居候大川を隔有之候宗對馬殿先手へ夜討仕候を筑前殿御聞被成候て御かゝり候時彦右衛門ハ早懸付敵討取申候喜多村孫之亟も敵討取候此時筑前殿御手負被成候黒田二郎兵衛討死にて御座候事

一同九月廿九日にゑなんの城筑前殿御責被成候先手中備御旗本三方へ御懸り被成候其時の御觸一番貝ふ揃二番貝ふ堀際へつき三番貝に城へのり候へとの御觸にて御座候彦右衛門ハ一番貝に堀そこへつき二番貝にもはや堀を渡し石垣へ着申候先手にてハ彦右衛門ならてハ石垣へ一番につき申も

の無御座候其内に味方手負あまた有之(候)(一本に)付先引取候へと長政より御使御座候へ共御旗本より御引なく候てハ引申間敷由先手のものとも申に付其より御旗本御引取候により彦右衛門も引取申候

其時彦右衛門與力自分之者ともに手負死人八人御座候事

一そいせんよりしなん取合候時敵二人田中にて彦右衛門へ指向候壹人ハ彦右衛門鑓付高名仕候壹人ハ彦右衛門與力村上左馬くみうち高名仕候左馬さし物五本しなへにたしは彦右衛門家之紋そそおしきちゝミ三文字にて御座候右之様子筑前殿御覽被成候哉則其晩に被仰候ハ彦右衛門それにてくみうち仕候五本しなへの武者ハ何者にて候哉と御尋被成候時後藤又兵衛委申上候へハ能仕候と御意被成候事

一明る巳の正月九日にしなんの城ふ唐人數萬騎籠居候筑前殿ハそいせんの城に御座候其間三里程にて候そいせんの城より四五町ほど置候て切ぬき御座候敵急川をたゞ六町ほどそいせんの城際へ參(候)(一本ナシ)時彦右衛門先懸仕候へは敵半弓にて指向ひ甲を射ぬきひたひに手負申候則其者を鑓付一番首取申候其外喜多村半次同孫之亟高名仕候彦右衛門内村上三右衛門も高名仕候其外枝川を越追討仕候事

一晋州城乘之事かめのかうにて崩候いしかきのくつれ口より筑前殿内衆七人乘申候唐人見かけ半弓そけ敷いかけ申(候)(一本に)付て少之間右之者共居留り敵陣の様子見合候時何もこされ候てハと存候哉彦右衛門一番にそしり出崩口に内よりかこひ置候板押そつし城中へそいり申候殘る六人の者とも引付乘申候右六人の者ハたてのきそにけのこり候敵高名之心懸にて候彦右衛門壹人は其(等)(一本に)もかまひなく本丸への心かけにて候處あとより不知武者壹人乘取ていたたての際にて晋州一番乘と名乘

候を彦右衛門聞候てふみ留り我等より跡にて名乘候が一番乘にて候哉本丸の方より見返り候てと
がゑ申ものが一番にて候哉名乘り直し候へと申候へハ彼武者申候ハ我等ハ加藤主計內飯田覺兵衛と
申ものにて候主計內にての一番乘に(存)〔一本て〕候主計者に我等より外壹人もそやくれり候もの候哉と覺兵
衛申候付其斷にて候へそよく候と申夫より又直ふ本丸へ彦右衛門壹人參候覺兵衛申候ハ本丸への
御心さしと相見へ候わきらも同道可仕さ申則彦右衛門(に)〔一本ナシ〕引付本丸へ十四五間口ほと參申內に彦右
衛門名をも覺兵衛ふつね申候付其返事なと申處ふ覺兵衛儀ハ何と存候哉又あとへ引返し申候彦右
衛門ハ彌本丸へも一番にそいり敵居申哉と尋候處に家來鎌足八兵衛本丸にて追付申候同あとより
もまた六人手廻りの者參り方々供仕り敵相尋候へとも皆々川へ崩落候と相見へ壹人も役立申もの
居不申年の比七十斗ふ相見へ候人足一人脚も不立躰にて居申故其男にハかまひなく方々敵尋候內
に最早總人數みたれ人申候事其後筑前殿右一番乘の樣子直に御覽被成候とて御感狀出領地三百石
御加增にて候但し御感狀出候時彦右衛門申候ハ忝儀に候へ共加程之儀に御感狀拜領仕間敷と申上
候へハこのさねて兎角可被下との儀に御座候付左候そ晋州城乘の次第に被下候ハ拜領可仕(由)〔一本被〕申に
付彦右衛門へ一番に御感狀出申候殘る衆も御感狀御知行も出可申と承候へ共六人なから皆々取り
申候哉其段ハ不存候六人の者名を覺候ハ野村太兵衛相山孫兵衛分部久七手塚與平次にて御座候事
一右之後久留嶋出雲守所へ罷歸候て高麗なんもんの城御責候時久留嶋出雲守請手にて御座候然る處
慶長元年八月十四日之夜なんもんの城より敵切ぬけ申候とき久留嶋勢掛合追討仕首數多く取申候
其時久留しま先手に彦右衛門居申故則自身のりかけ彦右衛門手へ首數百三十二取申候都合首數四

百六拾壹にて御座候其首數の改熊崎玄齊山野井五右衞門にて御座候則右之首數日本へ參候事

一九月十六日久留嶋出雲守番船へ乘付討死仕候時彥右衞門船ハ遲く候てあとより參候處出雲守討死の樣子彥右衞門へ山野井五右衞門注進申に付てすくさま番舟へのりかけ候處家來手負死人共十二人御座候彥右衞門かふとのしころ錣にも矢を射付ヶ申候しるしあるところに加藤左馬之助殿御乘舟を押よせ彥右衞門舟へかぎを御かけ御留候て被仰候ハ彥右衞門働かんし入候是非討死と相見へ候とて御留候其間に番舟は帆をかけのり延候事

一關ヶ原御陣之時秀頼樣より爲手舟彥右衞門管野右衞門八へ被仰付秀頼樣御舟も二艘被遣候是には船頭衆斗にて候一人ハ明石助太郎一人は尼崎甚三郎此衆被遣候由承候又毛利殿より村上八郎左衞門野美孫兵衞參候彥右衞門右衞門八兩人ハ大坂を何茂よりさきへ舟を出し伊勢之鳥羽へ廻り候時伊勢濱しはへ舟かゝり仕候此所の庄屋百姓罷出彥右衞門へ訴訟申候は此浦ハ九鬼大隅知行にて御座候是より少下にこしかの浦と申所御座候是は九鬼長門領分にて候此こしかのに長門より番舟三艘おき候其故濱島の者とも度々せひらかし候敵たゝもとなりかね申仕合に御座候鳥羽へハ程遠に候付手立もなりかねめいわく仕候或は關ヶ原へ廻り舟を一二艘もうち取申候各のごとく舟數にて御通り候舟ハかまひ不申兎角所の者迷惑に極り候間こしかの番舟合戰被成御取被下候へと申に付こしかの樣子具に物語聞届左候ハ合戰させ可申候しるしなからもましはのものとも人しちを出し候ハゝ合戰可仕と彥右衞門申候樣子はこしかハ入みなとにて候へハ濱しまのもの知略ふも仕跡をも取切可申儀も可有と彥右衞門存候て人しちと申候所の者共其段ハいかやうとも御意次第と申の

こらす人ゑち出し何も多き人ゑちの內にてよく改所々庄屋百姓にてもおもふる人ゑち斗舟ふのせ申候彥右衞門舟數十六艘管野右衞門八ふね七八艘何も夜の明けさる內ふおしこの湊へ入候へハ夜ハあけかゝふ罷成候先舟彥右衞門內熊崎玄齊太田喜助山田理右衞門三人乘候舟一番ふつき太田喜助早く舟にのりうつり壹人討取候夫より跡何も手分のこさく一度に三艘へのりこけ申候敵舟のものとも何も海へとびつかり迯申候夫より三艘なこら火をこけやきわり申候右番舟にのぼりさし物有之を取り又鐵炮もすてのき候を皆々取申候其時の首太田喜助取候壹ッにて御座候右之段早飛脚にて大坂へ御注進申候則增田右衞門尉殿被仰越候ハ伊勢こしこの浦にれゐて九鬼長門番舟三艘切取申候段御感に思召候由右衞門尉殿より被仰付(候)一本下首取申候太田喜助に爲御褒美銀子五枚被下候事

一其後伊勢あのりの沖におゐてうきあひの合戰御座候右こしこふ居申候番舟の者共にけ上り九鬼長門殿居城へハ程近く候故右之段注進申と相見へ長門より射手舟五六艘さし向候其時此方の舟共いつきもけんさきふおしならへ鐵炮うち合申候彥右衞門下知申候ハ敵舟ハ小舟にて候間沖へそひき出し候ハヽ四五艘うち取可申候陸近候てハ此方の舟共ハ大候間存するまヽになるましく候其上あのりさきふハおちばへ在之由候旁以陸近へは舟おし申間敷候右衞門八舟ハ合戰にもかまひ不申あひを隔居申候長門殿射手舟何れの舟ふも鎧武者さし物御座候敵舟より日の足のさし物をたてまつさ兄へおしかけ參舟御座候付彥右衞門乘舟押向させ鐵砲うち合申候處ふ其舟の大將を討候へと申に付彥右衞門家來熊崎玄齋鐵砲にてうちたをし申候就夫殘る舟とも皆次第〳〵に引取申候彥右衞

門乘舟ふも手負二人御座候夫より鳥羽へおし入大隅殿へ右多度々合戰の次第具に彦右衛門物語申
候へハ其時日の足のたて物ハ長門内にて九鬼宮内と申者にて候と被仰候右こしかふて打取候番舟
に(有)〔一本在〕之候のほりさし物鐵砲大隅殿へ進申候夫より二三日毛利殿待請候事
一鳥羽にて大隅殿に御目にかゝり二三日逗留之内に毛利殿内村上八郎左衛門野美孫兵衛參候付何も
大隅殿にて相談の上を以大隅殿同道にて尾張地とこなべの沖ふ居申候時大隅殿下知にハ乘船あた
けより貝三ッ吹切候そ何れも浦々へ舟を付濱へ上り合戰仕り町放火いふし候様にと被申候就夫貝
二ッまてハ御吹候へ共三ッ目の貝吹切不被申候に付とこなべの沖に居申候其内野美孫兵衛子野美
主水舟を付上り申候付彦右衛門舟もおしよせさせ上り申候とあなべの士井にのぼり七八十本ほと
御座候沖よりハ本ののほりと見へ申候人數も有之様ふ存候へハ敵何も明退紙のほり立置申候野美
主水そやく候故其紙のほり何れもとらせ野中放火仕候彦右衛門も無程かけ付敵有候かと相たつね
させ候へ共皆々にけ申に付彦右衛門内山野井五右衛門敵壹人敵炮にてうちとをし首取申候其後大
野浦に敵大勢有之候大野浦へ彦右衛門一番に押寄責申に付敵懸出申候を則追拂大野町のこらす放
火仕候是にて一番彦右衛門内太田四郎左衛門太刀うちにて首取申候二番首太田喜助鐵砲にてうち
たをし取申候其より彦右衛門家來追々首捕申候其後余人の手へも追々首取申候其より同十日之朝
濱部〳〵に火をかけ申候へ共殘浦には指向候敵も無之放火仕候然所爲何出家にて候哉ぬりこしに
のり大隅殿見廻に被參候て被申候ハ此一兩日以前東衆大勢歸り申候多分家康様にて御座候半と被
申候其時大隅殿被仰候ハ左様可有之候左候へハ關ヶ原無心元候間先大隅殿ハ城本御見廻り夫より

關ヶ原へ御越可有候間各ハ桑名表へ御乘越候て關ヶ原御見廻候樣にと御談合にて則夫より何も舟
出申候同十二日の曉桑名浦へ乘付同十三日早天より彥右衞門八同道にて關ヶ原へ罷越何も
に相申候其時安國寺へ直に參り彥右衞門申候ハ御陣所の躰敵味方の樣子見及候處我等共心にのり
不申候と申候安國寺被申候ハ我等も左樣に存候去かしなから東勢壹人に上方勢十人ほどの積りに
て候其上四五日も持こたへ候へハ必味方の勝に可成と存候由被申候又彥右衞門申候ハ尤被仰通に
候へ共兎角御陣所之しかた山高取上りまむらにてうそく御座候さのみ合戰可仕樣にも相見へ不申
候あのごとく山へ取り上り居候てハ早速おり合候事も成かね可申候（尤）〔一本老〕じやゑんの備へとて可有
候又東勢ハ小勢にて候へ共何も物仕にて候哉備の樣子もあつく見へ申候其上敵陣の躰ハ多分一兩
日の內にも合戰可仕樣子と存候に味方ハ旁以油斷之間必負軍と存候よし申候乍去隨分御手立被成
候へと申罷歸候右咄申候次第山野井五右衞門供に參承候其より御横目衆に御目にかゝり候て其後
長束大藏殿へ參り候大藏殿被仰候ハ彥右衞門右衞門八ハ四日市の城急き請取候樣にと被仰由候其
より毛利宰相所へ參り兩人なから夜半時分迄居候て扱罷歸候節宰相彥右衞門右衞門八おくり候て
しらす迄被出候其時彥右衞門申候ハ物語申候通彌關ヶ原之樣子御負軍と存候間萬端覺悟專一之由
申兩人なから宿へ歸申候同十四日早天よりけいらう山を立其晚四日市へ參着申候其夜右衞門八彥
右衞門舟へ參候て申候ハ城の儀明日早々受取可然哉と申候處彥右衞門申候ハ兎角關ヶ原之樣子右
にも申通我等見及候處ハ大方味方の負軍と存候間明日十五日の早天に城へ使を立十六日之朝請取
候半と可申遣よし申候へハ如何樣にも彥右衞門次第と申則十五日の早天に城へ兩人申遣候ハ愛元

の城兩人請取候樣にと大藏殿被仰渡候今日ハ城中御仕廻可有候明十六日之朝請取候半と申遣候相
心得候由返事にて候則十六日之朝早天に城請取に兩人參候時城の大手口にて馬乘壹人あとより乘
懸參り久留嶋殿にて候哉と相たつね候山野井五右衛門罷出何方より御尋に候哉と申候へハ長束大
藏使之由申候故久留嶋にて候と答申候其使口上にハ大藏申候ハ關ヶ原昨日十五日に味方總敗軍に
て候頓て夫へ可參由申參候故夫より兩人只今是へ參候由申來候無程大藏殿一騎にて御越候則彥右
衛門辨當にて湯つけ少まいり候其時彥右衛門申候ハ爰元にて兩人隨分ふせき可申候條御居城まて
御引取可被成程御ふせき候へと申候處に中〳〵大軍と小勢にてふせき候儀なる事にてハこれなく
候急船御出し候て晩之五ツ時分迄津にて御待候て給〔一本ト〕（候）へ關を越候事難成候を津へ參り船にて大
坂表へ引取可申由御約束にて候故津に其夜半時分迄まち申候得共大藏殿御越無之故舟出し候處に
兩人談合にて重而之たゝんに候條九鬼大隅殿へ關ヶ原之樣子可申さて鳥羽へ乘込候て則大隅殿へ兩
人より使を以て申候ハ關ヶ原味方總敗軍に候大藏殿も御落城にて被仰候ハ急き上方へ廻り候へと
の儀に候故拙者共も是迄參候直に通り可申と存候へとも關ヶ原の樣子爲可申爰まて參り候由申
遣候それに付大隅殿より二番目の子息人しちに御こし候て兩人に被參候へ關ヶ原の樣子具に可承
との御事に候故人しちをは彥右衛門舟へ留置兩人上り程なくもとり候て右の人しちかへし夫より
舟出し候事

一於海中關道之儀幷喧嘩御座候へ共書載不申候御事

以　上

右者古彦右衛門働貳拾三ヶ條私共存候分書付ヶ申候此外度々働御座候へ共私共供不仕候付書付不申候只今右之品改申儀紀伊　大納言樣彦右衛門悴共へ被爲　仰付書せ置可申之由　御諚之上以子共我等共に尋申に付書上ヶ申候

寛永廿年　　　山野井五右衛門

未ノ八月吉日　　鎌足八兵衛

村松郷右衛門重國

村松重國　郷右衛門○按駿河分限帳、在御鉄炮衆之例、祿千石、

村松重國、父曰新三郎、屬大須賀康高、爲隊將、海老江庄右衛門、門奈左近右衛門、鷲坂惣十郎、近藤武助、橋山八藏、鷲山傳八等、皆爲其部下、重國仕東照公、屢有戰功、高天神役、坂部廣勝、獲中野彈左衛門、重國獲落合九平次、於是其名大顯、元和二年、屬公、賜祿千石、寛永十一年歿、村松系譜

家譜

村松郷右衛門重國　村松新三郎總領 生國遠江

始祖不相知代々遠州郡村不詳居住祖父市左衛門實名不知駿州今川家に屬父新三郎若年ヨリ大賀須五郎左衛門ニ屬五郎左衛門取立ニテ軍法之時モ五郎左衛門備四手ニ分大須賀五郎兵衛組一手新三郎組一手小姓組一手是ハ自分之與力ニテ新三郎組ニハ海老江庄右衛門、門奈左近右衛門、鷲坂惣十郎、近藤武助、橋山八藏、鷲山傳八、其外七拾騎程組付ニテ　權現樣へモ度々被　召出候

郷右衛門重國於遠州　權現樣へ被　召出（年月日御役儀等不知）

一永祿十二己巳年正月掛川天王山柵下ニテ鎗合之高名仕

一同年三月於同所鎗下之高名仕

一天正五丁丑年四月高天神城責之節二十九人御撰先駈被　仰付候節郷右衛門儀モ御撰之御人數ニ被爲加

一同七己卯年九月（城之名不知）城兵城戸ヲ開キ打出（一本候刻）〔互〕鐵炮ニテ相掛ニ成甲州方ヨリ中野彈左衛門落合九平次ト名乘鎗ヲ入突掛候處坂部三十郎勝廣ト名乘脇ヨリ駈入彈左衛門ヲ討取郷右衛門儀ハ九平次ヲ討取申候

一元和二丙辰年橫須賀ノ士一統　南龍院樣へ被附候節郷右衛門儀モ被附高千石被下

一同五己未年國替之節紀州へ御供仕（役儀不知）

一寬永十一甲戌年十二月七日病死仕候（年齡不知）

重國總領郷右衛門重明家督相續六代郷右衛門武春ニ至リ二千三百石ニ御加增御家老被　仰付已來常府御家老相勤九代郷右衛門安政五午年六月廿五日　昭德公公儀御相續之節御供ニ被　召連御小姓組番頭格知行三千石奧向勤之內千俵被下諸大夫備中守トナノリ後御小姓組番頭ニ轉シタリ

村井久右衛門

村井久右衛門敬行　村井九兵衛氏俱總領

父九兵衛氏俱ハ佐々木源三秀義十二代村井三郎右衛門尉敦綱孫ニテ年月日不知於遠州横須賀
權現樣へ被　召出知行貳百石被下置大須賀出羽守組ニテ横須賀ニ罷在候（病死年月日年齡共不知）
一久右衛門敬行父九兵衛病死後年月日不知同所ニテ家督相續仕候
一元和二丙辰年（月日不知）横須賀之者共一統　南龍院樣へ被進候節御附被遣候
一同五己未年御入國ノ御供ニテ紀州へ罷越知行二百石被下置横須賀大番組相勤申候
一寬永十八辛巳年正月十二日病死仕候
久右衛門敬行跡養子久大夫義虎相續七代久右衛門美明江戸常府被命御加増四百石ニ被仰付十代
左近（後久右衛門）御目付御用人等相勤嘉永六丑年六月不容易奸計相工シ候旨ニテ貳百石被召上小普
請入逼塞被仰付翌年十一月友ヶ嶋御目付トナリ同所へ移住後江戸へ被召歸維新之際四百石高御
城附勤タリ

村田九郎右衛門

村田九郎右衛門

村田九郎右衛門（實名不知　生國駿河）初長次郎
金吾中納言秀秋ニ仕罷在候處逝去之後　權現樣ヨリ御尋有之（年月日不知）於駿河被　召出御切米二十石
六人扶持被下置御鷹匠相勤申候　權現樣關ヶ原御歸陣之節駿府金森法印ヨリ旋子三ツ差上候處其
砌長次郎ヲ御座之間へ被　召御炬燵ニ被爲遊御座右之旋子壹ツ被下置候間後々迄秘藏致所持仕候

様　上意ニテ赤銅瓶子旋子地ナヽコ葵御紋菊桐ノ金居紋作祐乗御手自拜領仕于今所持仕候其後長次郎名九郎右衛門ト御直ニ御附被爲遊被下候於駿河御人分之節　權現様御差圖ニテ　南龍院様へ被爲附元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕候病死年月年齢不知

九郎右衛門跡目總領九郎右衛門相續五十石六人扶持被下御鷹匠相勤以來代々相續五代目九郎右衛門隆寛政十年之比四十石元方御金奉行タリ

村河軍兵衛

家　譜

村河軍兵衛　實名不知　稻村太郎兵衛養子　實金田善大夫次男　初金田利兵衛隱居後勇山　生國武藏

養祖父稻村佐渡ハ里見安房守忠義稻村之城主十二萬石妾腹之忰ニ付在名稻村ヲ名乘成田左衛門尉ニ仕ヘ罷在

養父太郎兵衛ハ　大猷院様ヘ奉仕追テ加賀大姫君様ヘ被爲附罷在候由

軍兵衛ハ御旗本金田善大夫次男ニテ追テ稻村太郎兵衛養子ト相成候後モ其儘實家之氏ヲ用ヒ金田利兵衛ト名乘申候

一萬治元戊戌年月日不知　南龍院様ヘ被　召出御國ヘ罷越知行貳百石被下置横須賀與力組被　仰付田邊ニ罷在候處寛文七未年九月二日横須賀大番組被　仰付御城下ヘ引越參申候其後村河軍兵衛ト姓名相改延寶五丁巳年七月廿二日御供番被　仰付同九辛酉年十月三日依願大番組被　仰付元祿十六癸

未年七月十日奉願隱居被　仰付嫡孫紋九郎へ家督シテ知行貳百石之內百五十石被下殘高五十石爲隱居料軍兵衞へ被下寶永二乙酉年二月十九日七十四歲ニテ病死

軍兵衞長男半之亟ハ部屋住ニテ元祿八亥年病死

半之亟總領紋九郎嫡孫承祖トナリ元祿十六未年七月家督知行百五十石被下後三百石御小姓頭ニ昇進以下代々相續五代紋九郎義苗御旗奉行四百石ニテ天保十五辰年十月隱居養子壽之助香明ハ家督三百石被下寄合被　仰付タリ

一紀士雜談ニ曰く　村河軍兵衞喧嘩之事田邊に居申時は金田理兵衞と申候橫須賀大番に成候て村河軍兵衞と申候老後入道して一先（家譜には勇山とあり）と申候若き時浪人の時分の名忘れ申候右利兵衞十八歲の時意趣切仕候其身內有之れらひ申候由承候坂部三十郎に掛り罷在候廿四歲の五月木挽町通り候へは後より聲を掛け右のかひなを切申候挨合壹人を仕留申候貳人目をも餘程仕合候て切倒候是迄は前後の覺無之候相手幾人有之候も曾て不存候三人目に成り仕勝可申と存候心底に覺出來手負候へ共相手引目に成り申を物陰迄追ひまくり切伏申候殘り二人は退散申候初の本人を見屆可申と立歸り候時町のもの共棒を入候に付拔刀をふり候へば、のき申候付本人にとゞめさし申候飢に及ひ申候付芝居へはいり役者共に湯漬所望致箸を取候へばかひなげなりと仕叶不申候くゝめ貰ひ申候本人竹村伴左衞門（先年討れ候者之弟）貳人目一條安右衞門（先年討れ候者之姉聟）三人目（名承候へ共忘れ申候）外に壹人（是亦名失念）又壹人目あかし小者體のもの以上五人にて御座候早速壹町より三十郎方へ注進有之候處百人御番所當番にて居被申御城大目付へ斷被申達御當番牧野伊豫守殿差圖にて御番所明候て手負引取候樣にとの御事に候へ共事濟たる上にて第一御番所明け申間敷由三十郎被申候て組與力之內兩人櫻田李今壹人（氏名失念）右兩人參引取申候此兩人兼て別懇仕候故望申て參候由右之物語軍兵衞一生不仕候乍去剃髮以後懇望仕候方にて　御前にて申上候趣之由にて右之通り語り申候寶永元申年七十歲にて物語仕候寫し瀨戶に於て　南龍院樣御船へ被爲呼候ゝ御導被遊候時奉畏候然れ共次第を申候ては曾て覺不申段申上候尤に被爲　思召候乍去其節三十郎へ語り申さぬ事は有間敷候只今思出し嘶に申上見候樣にとの　御意に付右之委細申上候御側に桑山次郎右衞門被居候　御意にはあれ承候へ扨々運の強き者にて候昔咄には有之事に候へ共直に被爲　聞候は初ての樣に被　思召候其方は弓箭にては死候事有間敷候と　御意御座候右の外に一先物語左之通

一三十郎方へ早速　紀州樣より御使被下候外よりも呼申處有之候へ共御詞雖有仕合に候間早々御國へ參候樣にと三十郎被申候て御請申上候未た敵のもの有之由相聞候に付草ぶかき所に被差置候旨被　仰付田邊へ參り貳百石被下置候敵之者共後病死仕候由相聞へ大番に被　仰付若山へ引越罷越候

一最初拔合候時一寸も引候とは覺不申候へとも町のものおだれの下にて見物致候者共後に申候は五間計引合候樣に見へ候由申候刀は備前則光にて候切先五寸計折れ申候むれの方よりそがせ大脇差に致し老後迄指申候此時單羽織編笠着致候由腕先に貳參ヶ所疵有之候其節迄兵法稽古仕たる事無之候不心得故と存其以後師に付ならひ申候聞人何かとねとひ仕候へば地に下り候太刀は損多く只上へ〳〵と卷上候太刀にはあだ太刀無之候と覺申由申候

一祖公外記に曰く　村河軍兵衛江戶にて倖輩を討果立退御旗本衆の內に入込居候或時芝居見物に行き候へは爪を商者六人軍兵衛を取卷我等先達て其方討果候倖輩之一類にて仇を報可申と存姿を變持居候覺悟可仕と申に付軍兵衛は六人を相手取り無雙五人を切伏殘る壹人は酒桶之蔭に隱るゝを桶共に討放候其刀は定祐作にて此時切先少く折れ候得共能切れ候故其後も差料に用候由此次第を御聞被遊二百石大番に御抱被遊候其後軍兵衛を被召其方劍術功者成との沙汰有之間其理を話可申と被　仰候へは御側之衆を御拂被下候はゝ可申上との儀に付其通り取計候處私儀劍術稽古は不仕候へ共誰を相手取り候ても必定可勝心得にて御座候併ヶ樣の事を餘人承り候はゝ扱は心得にて勝事と存稽古不仕候ては不宜に付密に申上候と申候

一紀士雜談に曰く　村河半之丞(軍兵衛子なり)臺所にて手討いたし未た拔身にて居申候內軍兵衛奧より出合道具之仕舞樣遲く候とて事々敷叱り候由夫れに付或人物語にヶ樣之時でかし候抔とはいはぬ事に候若き者など跡々氣靜り兼申候物にて候古老の習にて候由

按するに　軍兵衛喧嘩の時二拾四歲とあれは是明曆二申年の事にて夫より三年目二拾六歲にて御家へ被召出たるなり且家譜卒年にて算すれば紀士雜談に寶永元申年七十歲とは七十三歲の誤なるべし

武藤萬休

武藤萬休

家譜傳わらも元和御切米假名寄帳に

未年七月十日奉願隱居被　仰付嫡孫紋九郎へ家督シテ知行貳百石之内百五十石被下殘高五十石爲
隱居料軍兵衛へ被下寶永二乙酉年二月十九日七十四歲ニテ病死
軍兵衛長男半之亟ハ部屋住ニテ元祿八亥年病死
半之亟總領紋九郎嫡孫承祖トナリ元祿十六未年七月家督知行百五十石被下後三百石御小姓頭ニ
昇進以下代々相續五代紋九郎義苗御旗奉行四百石ニテ天保十五辰年十月隱居養子壽之助香明ハ
家督三百石被下寄合被　仰付タリ

一紀士雜談ふ曰く　村河軍兵衛喧嘩之事田邊に居申時は金田理兵衛と申候橫須賀大番に成候て村河軍兵衛と申候老後入道して
一先（家譜には勇山とあり）と申候若き時浪人の時分の名忘れ申候右利兵衛十八歲の時意趣切仕候其身内有之れらひ申候由承候
坂部三十郎に掛り罷在候廿四歲の五月木挽町通り候へは後より聲を掛け右のかひなを切申候拔合壹人を仕留申候貳人目をも除
程仕合候て切倒候是迄は前後の覺無之候相手幾人有之候も曾て不存候三人目に成り仕勝可申と存候心底に覺出來手負候へ共相
手引目に成り申を物陰迄追ひまくり切伏申候殘り二人は退散申候初の本人を見屆可申と立歸り候時町のもの共棒を入候に付拔
刀をふり候へば、のき申候付本人にとゞめさし申候飢に及ひ申候付芝居へはいり役者共に湯漬所望致箸を取候へばかひ〻げな
りと仕叶不申候くゝめ貰ひ申候本人竹村作左衛門（先年討れ候者之弟）貳人目一條安右衛門（先年討れ候者之姉聟）三人目（名承
候へ共忘れ申候）外に壹人（是亦名失念）又壹人目あかし小者體のもの以上五人にて御座候早速壹町より三十郎方へ注進有之候
處右人御番所當番にて居被申御城大目付へ斷被申達御當番牧野伊豫守殿差圖にて御番所明候て手負引取候樣にとの御事に候へ
共事濟たる上にて第一御番所明け申間敷由三十郎被申候て組與力之内兩人櫻田李今壹人（氏名失念）右兩人參引取申候此兩人兼
て別懇仕候故望申て參候由右之物語軍兵衛一生不仕候乍去剃髮以後懇望仕候方にて　御前にて申上候趣之由にて右之通り語り
申候寶永元申年七十歲にて物語仕候寔し瀨戸に於て　南龍院樣御船へ被爲呼候ゝ御尋被遊候時奉畏候然れ共次第を申候ては曾
て覺不申段申上候尤に被爲　思召候乍去其節三十郎へ語り申さぬ事は有間敷候只今思出し噺に申上見候樣にとの　御意に付右
之委細申上候御側に桑山次郎右衛門被居候　御意にはあれ承候へ扨々運の強き者にて候昔咄には有之事に候へ共直に被爲　聞
候は初ての樣に被　思召候其方は弓箭にては死候事有間敷候と　御意御座候右の外に一先物語左之通

一三十郎方へ早速　紀州樣より御使被下候外よりも呼申處有之候へ共御詞雜有仕合に候間早々御國へ參候樣にと三十郎被申候て御請申上候未た敵のもの有之由相聞候に付草ぶかき所に被差置候旨被　仰付田邊へ參り貮百石被下置候敵之者共後病死仕候由相聞へ大番に被　仰付若山へ引越罷越候

一最初拔合候時一寸も引候とは覺不申候へとも町のものおだれの下にて見物致候者共後に申候は五間計引合候樣に見へ候由申候刀は備前則光にて候切先五寸計折れ申候むれの方よりそがせ大脇差に致し老後迄指申候此時單羽織編笠着致候由腕先に貮參ヶ所疵有之候其節迄兵法稽古仕たる事無之候不心得故と存其以後師に付ならひ申候聞人何かされとひ仕候へば地に下り候太刀は損多く只上へ〳〵と卷上候太刀にはあだ太刀無之候と覺申由申候

一祖公外記に曰く　村河軍兵衞江戸にて倖輩を討果立退御旗本衆の内に入込居候或時芝居見物に行き候へは瓜を商者六人軍兵衞を取卷我等先達て其方討果候倖輩之一類にて仇を報可申と存姿を變持居候覺悟可仕と申に付軍兵衞は六人を相手取り無難五人を切伏殘る壹人は酒桶之蔭に隱るゝを桶共に討放候其刀は定祐作にて此時切先少く折れ候得共能切れ候故其後も差料に用候由此次第を御聞被遊二百石大番に御抱被遊候其後軍兵衞を被召其方劔術功者成との沙汰有之間其理を話可申と被　仰候へは御側之衆を御拂被下候はゝ可申上との儀に付其通り取計候處私儀劔術稽古は不仕候へ共誰を相手取り候ても必定可勝心得にて御座候併ヶ樣の事を餘人承り候はゝ扱は心得にて勝事と存稽古不仕候ては不宜に付密に申上候と申候

一紀士雜談に曰く　村河牛之丞(軍兵衞子なり)臺所にて手討いたし未た拔身にて居申候内軍兵衞奥より出合道具之仕舞樣遲く候とて事々敷叱り候由夫れに付或人物語にヶ樣之時でかし候抔といはぬ事に候若き者など跡々氣靜り兼申候物にて候古老の習にて候由

按するに　軍兵衞喧嘩の時二拾四歲とあれは是明曆二申年の事にて夫より三年目二拾六歲にて御家へ被召出たるなり且家譜卒年にて算すれば紀士雜談に寶永元申年七十歲とは七十三歲の誤なるべし

武藤萬休

武藤萬休

家譜傳はらす元和御切米假名寄帳に

高九百石　　武藤萬休

又同斷終身錄に

高九百石　　武藤小十郎

寛文元丑十二月病死跡目不分

右記せる所と横須賀覺書載する處に據り考察すれハ萬休ハ寛永七年に歿し其子小十郎九百石無相違相續寛文元丑年十二月病死後斷絶に及ひたるものならん此横須賀覺書にハ萬休ハ即ち辨左衛門の先祖とあれとも辨左衛門ハ平左衛門家にて別家たる事次に記する如し全く誤謬と雖も暫く其儘を掲く

一横須賀覺書に曰く　武藤辨左衛門の先祖万休は遠州横須賀の人にて知勇勝れたる英雄なり横須賀に在ける比神地寺院等へ證文を出し夫へ判形を致し被置候由　嚴有院樣御代替りの折右の證文を準據として寺社等へも御朱印を被下候由紀州へ御入國之後横須賀組之事は申迄もなく總ての御用向を元になり相勤候なり万休と尾寄平左衛門川北長左衛門を三人衆と唱へて專ら御用向取捌ける三人共御留居番頭をも兼勤たり是れに依て　南龍院樣右三人へ江戸より被下たる御書もあり此御書は尾寄家に所藏せり其寫は大君言行錄に出たり万休は寛永七年紀州にて死去せり遠州横須賀之寺院には各寺に万休の像を安置したりとぞ是は公儀御朱印を拜領して田地等作取にするは件の万休か仁智の餘澤なりと申傳て今に追福をすと云へり

武藤平左衛門

武藤平左衛門　五助高般附

武藤平左衛門　實名不知　左京之進正清嫡流武藤五助總領　初兵助又五助又十兵衛　生國若狹

家　譜

父五助ハ若狹國佐布利谷城主後細川兵部大輔に仕へ所々にて勳功有之且細川玄蕃頭藤堂和泉守

其外名家の感狀幷証據書類等所持仕候

平左衞門若狹國にて細川幽齋殿方に小姓立相勤關ヶ原御陣之節戰功有之其後金吾中納言殿に仕又

池田三左衞門殿にも仕　南龍院樣駿州御在城之節牧野傳藏安藤帶刀推擧にて知行五百石被下置大

御番組頭被　仰付紀州へ御入部之節御供にて罷越寬永五辰年七月廿八日病死

總領平左衞門高利（隱居後如心）父之跡目御切米八拾石被下大御番被　仰付後御供番御目付御鎗奉行に

歷任知行六百石に御加增元祿十二卯年八月病死已下代々相續六代五助（初主殿又平三郎又要人）高般は二百

五拾石にて奧御小姓小十人頭等を勤寬政四子年不心得之品に付御役被　召放知行之內百五拾石

被　召上後御小姓御徒頭格中奧詰等被　仰付貳百石に御加增文政十二丑年十一月病死（八十一歲）

七代辨左衞門高操二百石御徒頭格中奧詰に而文久三亥年十月病死養子要人高行相續す

一武藤五助と云しハ剛力の大勇にて兎角放逸無賴にてありけるこの種々公禁を犯しゝる事も有けれバ

監察の糺彈にて近日御咎ぢへ被　仰付に事きまりありしとぞ御城炎上にて上下騷動しける時五助宿

直にてありけるこの御疊を五六疊つゝ重ねゝる儘に御庭へ投出し其外拔群の働しけるを　香嚴院樣

御覽被遊五助ハ用に立つ者なりと　御意被成けるに依て事極りたる罪科も其儘無難にありしと言

傳へたり（橫須賀覺書老人談採要）

一乞言私記に曰く　武藤要人强力の聞へあり品川に遊び歸りの節麴町邊出火あり要人久留米侯の屋敷前にて馬上之人を引下し其馬に乘て歸り御書院にて働く服部角左衞門兩人にて御疊を二三疊つゝつかみ同廣庭へ投ることかるたを飛す如く成しとぞ

君公御覽ありてあれ見よ平常放らつものと笑へどもあの働を見よ萬一の節は御用に立つと被　仰しよし

一又一說に曰く　武藤要人力量あり然れども頗る放蕩を極む御持頭にて江戶詰の節麴町御屋敷表御門に宿直頭之事故自由に出入し品川の遊女屋へ通ふ此事監察の察する所となり或時役人に其跡を付しむ要人ふりかへり見て汝等は吾を何ふものならん不埓なりと兩人共執へ海へ投け込みたり役人辛ふして遁れ歸り事の由具申依て監察言上に及ひ既に御處置と決し發せんとする前夜麴町邸出火あり拔群の働きをなし御座敷の杉戶をはずし火をあふり彼の有名なる達摩門之扉をはずし後世迄殘りたるも全く要人壹人之働きなりしと云ふされは　一位樣御感被遊御咎めの事は御沙汰止みなりたるよしなり長谷川新助話

要人の母亦大力のよし要人江戶へ出立の前日要人に向ひ江戶は大都會なり如何なるものあるも知るべからず其方小力ありと雖も若し自負の色あれば禍を取るへし必す愼むへしといひながら何氣なくも爐にある火箸をかんぜよりにして汝是を戾し見よと示せしには要人も打驚し母大力の事是迄少しも顯さざる故絕へて知らざりしが中々及ひ難しと耻ち恐れしとなり

按するに　要人膂力ある事及ひ出火の節働の事三說區々なり畢竟一事にして傳聞の誤謬斯く異同を來せしか家譜に據るに六代五助後要人と稱し　舜恭公の御時　觀自在公の御小姓を勤め寬政四子年不心得の品有之御役被召放知行之內百五拾石被召上とあり是年七月麻布笄橋より出火南風強く大火に成り赤坂邸山屋敷邊類燒夫より麴町邸西北表內御長屋乾御門其燒失の由なれは蓋し此時の事ならんか然れども要人常に　觀自在公の御小姓勤なれは江戶詰の筈なく又現に知行百五拾石被召上たれは御咎の事御沙汰止とは云ひ難し其他要人と稱せしは三代高久五代德高の兩人のみにて何れも寶曆以前に係る又香嚴公の御時若山城及ひ麴町邸火災の事なく甲乙更に符合せす敢て判定を下し難しと雖も先つは六代五助(後要人)の事となす是に近からんか

因に記す　達磨門とは元麴町邸表御門の名にして今北白川宮邸御門の邊其舊跡なり門扉の木理自然に達磨の形を顯せり此事頗る有名となり參觀者群集するにより黑色に塗抹すると雖も其形依然として消滅せす依て彌其名高く遂には他邸に代へ該扉は御勘定所に收藏する事に至りしと(自幼年の比聞知せりされは自から地名の如くなり來り當時尙達磨門前と云へは麴町邸邊たるを辨知のもの多しと云ふ

村岡八藏

村岡八藏良長　村岡七兵衛良房養子　實西御茶屋預り下村佐次右衛門久則三男初岩之助後周參隱居後義脊

家譜ヲ按スルニ　先祖七兵衛良則は紀州加茂谷農民にて　南龍院様御代正保二酉年　芳心院様御賄所人御切米拾二石に被召出紀州より江戸へ移住以下四代七兵衛良房代々御目見以下役輕輩にして五代則八藏良長享保十八丑年五石二人扶持の坊主に被　召出後士席に昇進尚累進遂に頭役三百石に至り　香巖公之御時御取次役を十五年間勤務　舜恭公之御時御廣敷御用人二十一年間在職御勘定奉行格御勘定所御勝手御用をも兼務八百石に御加増御足高千石に至り享和元酉年四月隱居同二戌年十月八十歳にて病死す五石二人扶持の坊主より一世にして千石の重臣權職に至りしは近世絶て比類を見さるの榮進と常時頗る喋々せし處と云ふ

一乞言私記に曰く　村岡八藏は小身より御側御用人格に昇進ある出入のもの來りて嫡子に追從するをきいて又われらか來て悴を阿房にするはよさいはれし由同人至て記臆よし御取次を勤められし時使者十八人を並へたき壹人にて段々に口上を受けらる姓名並口上之趣一つも遺忘なしと云ふ

一又曰く　齋藤大次郎は書を能く讀み豪爽の人なり八藏御取次之節其功者なるを惡み飲酒の節輿に乘し刀を侍き八藏殿是れ見て下されと鼻の先へ差出す驚く氣色なく是れは見事なる御差領なり御差裏をも拜見仕たしとすかさぬ挨拶ありしとそさしもの大次郎も跡にて人に語られしはきやつは小身より出し者なれは武藝もさせる事あるまし定て驚くへしと思ひしにすかさぬしれ者なりと語りし由

良長嫡子久吉良温ハ部屋住にて病死其子豐之亟良毅嫡孫承祖となり良長の家督八百石無相違相續六藏と改む後御家老菊之間詰千五百石に至り弘化四未年隱居す良毅頗る文學ありて嘗て麟徳記を編す人となり方正祖父八藏ハ元來御中間より出身せし故を以て身丈夫ふりしも年頭にハ必す御中間部屋へ年禮に行きたり是れ昔を忘れさるなりと語りしとの一話あり果して然りしの不知

良穀養子を直四郎良賢と云家督千石相續八藏と稱し又直記と改む御用人御小姓頭等を經遂ゐ御家老加判之列に進む維新之際和歌山に移住之處明治二年御國大改之革際激徒の嫌忌する處となり寺内藤次郎と共に不慮之難に罹りしも竄匿僅ゐに身を逃れたり

海野兵左衛門良次

海野良次　兵左衛門○按駿河分限帳、在御目付衆之列、祿六百石、

海野良次、其先曰左衛門入道幸氏、父曰彌兵衛本定、仕武田氏、後從東照公有功、兄曰彌兵衛元重承家、良次別開家、後屬公、賜祿三百石、爲監察、屢轉職、爲勘定奉行、增祿至千百五拾石、與彥坂光政參與國政、寛永十九年歿、海野系譜

家譜

紋所之儀本家ニテハ七曜穀葉相用申候右七曜ハ同族望月氏ノ紋所穀葉ハ安部氏ノ紋所ニテ本家ニ用來申候私家ニテハ　南龍院樣御沙汰ニテ本姓紋所六連錢相用七曜穀葉ハ替紋ニ相用ヒ申候

海野兵左衛門良次　海野左衛門入道幸氏十代、海野彌兵衛泰頼男、海野彌兵衛本定次男、

父彌兵衛本定ハ武田信玄勝頼兩代ニ奉公仕罷在候處天正年中同家ヲ立退　權現樣へ歸降仕信玄御取合之節舅安部大藏元眞同樣御奉公申上所々御陣之御供仕駿州へ　御隱居被遊候節山中御要害之御用幷御茶壺御用巢鷹御用刎橋御用砂金御用等相勤井川七ケ村支配被　仰付知行所屋敷地等拜領仕御感狀御證文頂載仕候後舅大藏子安部彌市郎信勝江戶ニテ　台德院樣へ相勤申候最安

部家ハ元來同家之儀ニ付彌兵衛儀井川ニテ大藏家督相續仕大藏儀ハ彌兵衛手前ニテ致養育天正十五丁亥年十月十日病死仕候彌兵衛本定儀元和三丁巳年六月廿三日病死總領彌兵衛元重跡式相續井川七ヶ村支配被　仰付井川ニ罷在同人子孫代々同所ニ罷在候

兵左衛門良次儀父彌兵衛ノ勤功ニ依リ年月日不知　權現樣へ新規被　召出御役不知相勤罷在候處追テ御切米貳百俵被下置之旨父彌兵衛へ井出志摩守ヨリ書狀ヲ以テ申越右書狀于今所持仕候寫

以　上

一書申入候彌兵衛殿御子息御切米之事昨日右衛門殿致談合申上候へハ貳百俵宛三ヶ年分六百俵可被下由被　仰出候先以可有御心安候松右衛門殿へモ能々御禮御申可被成候恐々謹言

十二月廿五日　　　　在　判

上　書

海野彌兵衛殿　　　　方

人々御中

裏ニ

井　　　志　摩　守

一年月日不知拜領仕候由ニテ　權現樣御筆之由申傳左之通御掛物一軸所持仕罷在候

毛のみ沖　　　　わくろさき　　　　みつのこしま

おふのうら

一年月日不知　南龍院樣へ御附被遊駿州ニテ知行三百石被下御目付役相勤

一元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕已來段々御役替御加增被　仰付千百五十石被下御勘定奉行相勤御政事向之儀モ彥坂九郎兵衛ニ差加リ相勤

一寬永十九壬午年五月十四日病死仕候 年齡不詳

良次總領兵左衛門淸長ハ寬永二丑年部屋住ニテ被　召出現米三十石被下父病死家督千百五十石無相違被下已後代々兵左衛門ト稱シ相續七代兵左衛門勤ハ家督六百石ヨリ御側御用人御勘定奉行加判之列等ノ樞要ニ歷任御加增千七百石ニ至ル內兩回御役不應之旨ニテ御咎ヲ蒙ル九代兵左衛門希與ハ大御番頭千三百石ニテ嘉永七寅年八月病死養子龍二郎明謙嗣ク

海野五郎三郎

海野五郎三郎 實名不知 海野彌兵衛本定三男 初縫右衛門 生國駿河

父彌兵衛本定勤功ヲ以テ慶長年中於駿河　權現樣へ被　召出其後　南龍院樣へ御附被遊高貳百石被下元和年中御入國之節御供仕後御加增高四百石被下勢州松坂御目付相勤寬永二十一申年三月六日病死

總領縫右衛門へ跡目〔一本四〕（貳）百石大御番被　仰付以下四代縫右衛門賀廣ニ至リ嗣子無之斷絕ス

二男五郎三郎 姓名不知 正保三戌年新規被　召出貳百石被下後七百石ニ御加增嫡家斷絕已來ハ分家ニテ代々相續六代五郎三郎廣業ハ嘉永二戌年比貳百石小十人頭格ニテ後病死養子九郎七廣幸嗣ク

上野三郎右衛門忠次

上野忠次 三郎右衛門〇拔駿河分限帳、在御目付衆之列、祿四百石、

上野忠次、父曰三郎四郎忠家、系出於足利泰氏、遠祖四郎大夫義辨、世仕德川氏、天文中、忠家仕廣忠公、公賜偏諱、又命世襲用其字、忠家從東照公、幼時常近侍左右、一向賊之亂、力戰有功、後長久手、三方原、關原大坂、諸役、皆從而有功、忠次襲家、亦屢有功、後屬公、寛文四年歿、上野系譜

上野三郎右衛門忠次

上野新丘左衛門忠久

家　譜

上野三郎右衛門忠次 足利左馬頭泰氏嫡子上野四郎大夫義辨十二代 上野三郎四郎忠家實子總領 隱居後常見 生國三河

遠祖四郎大夫義辨ヨリ代々　御當家ヘ奉仕父三郎四郎忠家ハ天文十三甲辰年十一月九日　廣忠様ヨリ御諱名之御字　御名之御字被下置三郎四郎忠家ト御改被下　廣忠様御筆ニテ被遊候御折紙頂戴仕今ニ所持仕候依之代々三郎忠之三字相用申候右

御折紙寫

御　書　判

忠

天文十三年

上野三郎四郎殿

權現様御幼年之節ヨリ忠勤ヲ勵候トノ御事ニテ參州信州之內ニテ御知行被下置候高ハ相知レ不申信州知行分之　御朱印頂戴仕今ニ所持仕候右

御朱印寫

信州知行分之事

右如前々不可有相違之狀如件

天正十年

一向宗企一揆候節拔群之忠勤今ニ不初段　御稱美被遊御具足御感狀頂戴仕長久手味方ヶ原關ヶ原大坂御陣等ニモ戰功有之其節々御感狀御朱印頂戴仕候由申傳候

右拜領之品ハ五代三郎右衞門忠宣改易被　仰付候節如何相成候哉難相知御座候

慶長十八癸丑年十二月十七日病死仕候（年齡不詳）

三郎右衞門忠次　權現樣へ奉仕度々忠功之段御感被遊關ヶ原御一統之後慶長六辛丑年本領參州瀧泉寺被下置其節本田佐渡守殿ヨリ御代官淺井金右衞門へ之書狀今ニ所持仕候右寫

猶相違被成間敷候以上

急度申入候何レ瀧泉寺之事上野三郎四郎殿へ如前々被下候間無相違可被渡進候爲其如此ニ候右趣伊備前守殿へモ參會次第可申候恐々謹言

十月十八日　本田佐渡守

正信　判

淺井金右衞門殿

駿府御在城之時（年月不知）　南龍院樣へ御付被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越知行貳百六

上野七大夫忠義

上野新五左衛門忠久

十石被下後四百石被　仰付万治二巳年三月隠居總領四左衛門ニ家督四百石無相違被下寛文四甲辰年閏五月三日病死仕候 年齢不詳

總領四左衛門 後三郎右衛門 忠往家督四百石相續以下代々相續之處五代三郎右衛門忠宜五百石大御番中寛延三午年七月常々不行跡ニ付御城下ヨリ貳十里外ヘ改易後安永九子年七月御法事ノ御赦ニテ忠宜總領三郎右衛門忠利歸參七人扶持獨禮小寄合格番外ニ被　仰付九代三郎四郎忠敷ハ貳十石高獨禮五友之間御廊下詰勤務明治三午年六月病死總領庄三郎忠宗跡目相續ス

上野七大夫忠義 上野三郎四郎忠家二男 三郎右衛門忠次弟 生國駿河

寛永四卯年　南龍院様ヘ被　召出貳拾石被下後知行三百石被下慶安四卯年九月病死以下代々相續九代藤十郎忠達ハ四百石御目付ニテ天保六未年九月病死養子助吉忠撰嗣ク

上野新五左衛門忠久 三郎四郎忠家三男 初半彌又金三郎 生國三河

於駿河　權現様御小姓ニ被　召出知行二百石被下弘治二辰年十月二日從　權現様金之一字　御直筆御書ヲ以テ拜領右寫

金

弘治二年十月二日　　御諱御書判

上野金三郎との

右御書ニ金三郎ト被成下候付則金三郎ト相改其後　權現様ヨリ濃州關住兼宗御脇差一腰拜領仕所持仕候

一年月不知　南龍院樣へ御附被遊高貳百石被下元和五未年御國替之節紀州へ御供仕慶安三寅年正月廿七日病死仕候

總領源之亟（後新五左衛門）忠政爲跡目知行貳百石無相違被下大番組被　仰付以下代々相續七代三郎忠茂貳十五石大御番ニテ文化十酉年十月隱居養子藤之亟忠政家督貳拾五石被下大御番被　仰付タリ

一二男七郎左衛門義照寛永三寅年　南龍院樣へ新規被　召出三十石被下別家ニテ相續之處同人總領七郎左衛門ニ至リ　長福樣御附頭役ニテ　公儀へ御供爾來御旗本ニテ勤仕ス

內村又十郎

內村又十郎（實名不知）

一家　譜

父又十郎　權現樣へ被　召出おしか樣御附相勤五十六歳ニテ病死

天正十五亥年　權現樣へ被　召出大坂御陣之御供仕元和五未年　南龍院樣御入國之節御供仕慶安元子年病死

以下代々相續六代又十郎正森寛延四未年部屋住ニテ御徒十二石三人扶持被　仰付後累進高三百石　大貳樣御實母清信院樣御附物頭勤八代出來助正道寛政十午年相續御切米四拾石大御番タリ

臼杵又藏

臼杵又藏天常

野々山七左衞門政高

臼杵又藏天常 臼杵又惣天信總領

家譜

父又惣天信ハ豐後浪人ニテ罷在候處　權現樣へ被　召出御奉公相勤關ヶ原其外所々御陣之御供仕元和五未年十月三日病死

又藏天常慶長十巳年十九歲ニテ部屋住ヨリ　權現樣御下男被　召出大坂御陣之御供仕其後御臺所人被　仰付駿河ニテ御分人之節　南龍院樣ヘ被爲附慶安三寅年八月三日六十四歲ニテ病死

總領勝右衞門久夫跡式被下如父時御臺所人相勤以下代々相續四代半左衞門堯哲貳十石小普請ヨリ遂ニ三百石ニ御加增小十人頭格ニ至リ其子雲平和昇ハ寛政十午年三百石御徒頭格タリ

野々山政高 七兵衞○按駿河分限帳、在御弓頭衆之列、祿五百石、

野々山政高、初屬小笠原氏助、守高天神城、天正二年、武田勝頼大擧來攻、氏助出降、政高等不肯降、逃走濱松城、東照公喜之、以屬大須賀康高、九年東照公、攻高天神城、政高從康高、爲先鋒、奮戰有功、康高歿、後屬公、政高常慕武藏坊辨慶爲人、使畫辨慶擐甲騎馬之狀、揭之壁、以自樂、朱明李自成之亂來乞援、政高躍然起曰、可以試日本刀利鈍矣、既而議止、政高憾之、子七左衞門義政襲家、爲弓頭、賜祿五百石、寛永十二年歿、 野々山系譜紀士雜談

家譜

野々山七左衞門政高 生國三河

上野七左衛門義政

三州上野ニ居住罷在候處永祿十一辰年　權現樣遠州へ御出馬被遊候節同國高天神之城主小笠原與八郎氏助御味方仕其儘高天神ニ在城仕候其節七左衛門政高氏助手ニ罷在候天正二甲戌年武田勝賴大軍ヲ率シ高天神ノ城ヲ攻候節城主與八郎氏助勝賴ニ降參仕候然ル處氏助手ニテ降參仕間敷ト申候者共ハ遠州濱松之御城へ參　權現樣へ御目見仕候其節七左衛門抔モ一統御目見仕候　上意ニ其方共城主之不義ニ不隨是迄參處忠義之至リナリト　御褒被遊同六戊寅年遠州横須賀ノ城主大須賀五郎左衛門康高手へ御附遊サレ候故同年ノ冬遠州横須賀へ引越同九辛巳年　權現樣高天神之城ヲ御攻被遊候節城中ヨリハ岡部丹波守横田甚五郎等城門ヲ開キ大勢ニテ切テ出候處大須賀五郎左衛門康高手ニ罷在候者共粉骨ヲ盡シ無比類働七左衛門抔モ高名仕候其後五郎左衛門死去以後（年月不知）南龍院樣へ御奉公可仕旨被　仰付駿州へ罷越相勤申候（病死年月年齡不知）

七左衛門義政（七左衛門政高實子總領 初名不知 生國駿河）

南龍院樣へ御奉公仕高五百石被下御弓頭相勤元和五己未年紀州へ御入國之節御供仕罷越寛永十二乙亥年（月日不知）病死仕候（年齡不詳）

義政總領七左衛門友政家督五百石無相違被下大番被　仰付以下代々相續六代利左衛門壽政幼少ニテ家督減祿八代七左衛門政侶御切米十三石御書院番格五友之間御廊下詰ニテ文久元酉年十二月病死于時九十歲也養子七郎政房嗣ク

南陽語叢ニ曰く　野々山七左衛門尉政高は常々武勇之たしなみ厚く心ばへすゞしくもの場之對に逢され共覺有之樣に見へた

り武藏坊辨慶か物具して馬上に長刀なかさしたる圖を畫繪に書せて不斷是をながめて喜悦せし也寛永之比大明御加勢なと來りしに不被遣事を大に不興し幸ひの事なるにごやしかけさせてくれめされいでいつか燒刄之鹽梅見むさ中き小栗主税宅にて知音中會話之節膳後大なる鉢に皮くるみをそれる程に積鐵槌をそへて菓子に出す一座誰かは手さす者なかりしに野々山やがて鉢を床前へ持行結構なる床ぶちへくるみをのせ打割むさする勢にさしもの亭主手をすりわびければ野々山書口して大笑たり

野口長兵衛

野口長兵衛朝榮　野口中將宗親九代 野口又左衛門朝貞次男隱居後隱齋

家　譜

年月日不知　權現樣御小姓ニ被　召出後　南龍院樣へ御附被遊御用人被　仰付知行三百石被下後御役御免御扶持方貳拾人扶持被下年月日不知寄合本知三百石被下追テ山家同心頭ニテ隱居總領平六へ家督貳百五十石被下殘高五十石ハ爲隱居料長兵衛へ被下寛永八卯年三月八十五歲ニテ病死

養子平六後長兵衛友正家督貳百五十石寄合被　仰付以下代々相續七代長兵衛家重貳十五石新御番旧宮流劔術稽古肝煎ニテ天保十三寅年八月病死總領團之丞友茂家ヲ嗣ク

野口甚右衛門

同　甚　助

野口甚右衛門利吉　紀州日高郡野口村居住野口甚九郎利勝總領　生國紀伊

父甚九郎利勝儀總領甚右衛門利吉二男甚助舒利三男源藏利春ト倶ニ慶長六辛丑年月日不知松平右衛

門佐殿取持ニテ於城州伏見　權現樣ヘ被　召出御切米拾五石五人扶持被下置御餌差役被　仰付駿府ニ被爲成　御座候節ハ遠州中和泉御畤ニ相詰申候其後（年月日不知）年罷寄候付勤御免跡式無相違總領甚右衛門ニ被下寛永六己巳年十月五日於中和泉病死仕候　于時七十五歳

父甚九郎爲跡目（年月日不知）御切米拾五石五人扶持無相違被下置如父時御餌差役相勤元和五未年　南龍院樣ヘ御附被遊同年御國替之節紀州ヘ御供仕寛文三卯年三月朔日病死仕候　于時七十九歳

總領甚九郎吉久跡式拾五石五人扶持無相違被下以下代々勢州詰餌差役又ハ同御鳥見役ニテ相續十代彥次郎善幸御切米十五石五人扶持御鳥見組頭ニテ慶應元丑年八月病死總領（我）（一本付）吉幸久跡目相續勢州御鳥見タリ

野口甚助舒利　（野口甚九郎利勝次男　生國紀州）

慶長六丑年父ト俱ニ於城州伏見　權現樣ヘ被　召出御切米拾五石五人扶持被下置御殺生方御役相勤駿府ニ被爲成　御座候節ハ遠州中和泉御畤ヘ被　仰付於同所御餌差役相勤元和五未年　南龍院樣ヘ御附被遊同年御國替之節紀州ヘ御供仕候其後勢州御鷹場御取立ニ付勢州ヘ相詰候樣被　仰付候

一年月日不知　南龍院樣於勢州御鷹野被遊候節度々　御手自御金吳服拜領仕候

一寛永十六卯年二月廿六日病死　于時五十三歳

總領七大夫舒勝ヘ跡目拾五石五人扶持無相違被下餌差役被　仰付以下代々勢州詰ニテ野廻リ又ハ同御鳥見小頭等相勤九代忩藏保定ハ拾七石五人扶持小十人格御鳥見方勤慶應三卯年御役廢止

野間與五左衛門尚忠

野間久左衛門乙長

後第一大隊兵士タリ

一甚九郎利勝三男源藏利春モ父ト倶ニ　權現樣へ被　召出後　南龍院樣へ御附被遊代々別家ニテ相續勢州御鳥見役之處後代勢州奉行同心トナリ由緒書不差出ヲ以テ分リ難シ

野間與五左衛門

家　譜

野間與五左衛門尚忠 野間與五左衛門尚定總領 初與五右衛門 生國遠江

祖父ヲ佐野右衛門尉尚之ト云三州寶飯郡一城之主ニシテ小笠原大膳大夫長時ニ屬シ武田晴信ト甲州韮崎ニ於テ合戰之時討死此時父與五左衛門尚定幼少ニ付暫ク尾州所縁之方ニ住居依テ野間ト改後　權現樣へ被　召出大須賀五郎左衛門康高ニ御預ケ被遊慶長三戌年八月病死仕

慶長三戊戌年 月日不知 父與五左衛門家督被　仰付其後 年月日不知 南龍院樣へ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕高貳百石被下大番相勤寛永十一甲戌年九月廿五日病死仕候 于時四十五歳

總領與五左衛門尚廣家督無相違貳百石被下大御番被　仰付以下代々相續七代林左衛門好春御切米七十石五友之間御廊下詰ニテ天保十四卯年病死總領直次郎昌朝嗣ク

野間乙長 久左衛門〇按駿河分限帳、在大番衆之列、祿六百石、

野間乙長、父曰久左衛門乙重、世住尾張野間、初仕織田信長、後仕豐臣秀吉、賜祿七百石、爲母衣騎、後

又從東照公、攻上杉氏、乙長、初仕蜂須賀家政、福嶋正則愛其武勇、朝鮮之役、請之家政自從、以其功與祿八百石、元和六年公召而祿之、寛永廿年歿、（野間系譜）

家　譜

野間久左衛門乙長（野間久左衛門乙重總領　初忠助　生國美濃）

父久左衛門乙重ハ尾州知多郡野間之住人ニテ織田信長へ仕其後太閤秀吉ニ仕賜祿七百石腰母衣役ニテ戰功數度ニ及ヒ追々加祿賜三千石罷在候處　權現樣駿河へ被爲　召（年月祿共ニ不詳）一兩年相勤候內慶長五庚子年上杉景勝爲御退治關東御下向上方衆數多供奉之刻久左衛門儀モ參向仕候處石田治部少輔謀反之由於野州小山達　上聞御上洛可被遊旨被　仰出御出馬前上方衆各尾州迄參候其刻從　台德院樣御書被成下今ニ所持仕候久左衛門儀其後病死仕候（年月不詳）

台德院樣御書寫

猶々今度長々御苦勞察入候切々以書狀成共
可申述處何角取紛不任心中無音所存之外候
以　上

雖無差儀令啓達候今ニ其元御在留候哉御床敷候當表隙明候間信州眞田表爲仕置明廿四日令出馬候猶從彼地可申述候恐々謹言

八月廿三日　　江戸中納言

御諱御判

野間久左衛門殿

御宿所

久左衛門乙長若年之比太閤家ニ罷在候處父久左衛門乙重蜂須賀阿波守同國之產ニテ懇意ニ付阿波守貰申度旨ニテ被預則阿波守手ニテ場數戰功御座候後福嶋左衛門大夫正則乙長ヲ阿波守ヨリ被貰朝鮮陣相勤歸陣後賜祿八百石慶長五子年福島左衛門大夫手ニ付　權現樣關東御下向之節參向仕關ケ原御陣ヲモ相勤岐阜城攻之節岐阜中納言退城之節城臣木造左衛門ヘ福島左衛門大夫ヨリ意趣申聞城中退去取計之義等右御陣之節於福嶋家勳功御座候福島家斷絕之後元和六庚申年月日不知　南龍院樣ヘ被召出知行六百石被下後大番組頭被　仰付寛永二十癸未年九月六日病死仕候

右　台德院樣ヨリ被下置候御書之儀　南龍院樣御尋御座候付奉差上候處御拜見被遊トノ御書ニテ御返被下　淸溪院樣御代ニモ御同樣之御事ニテ御拜見後御返被下候

久左衛門乙長總領守右衛門後久左衛門乙成父跡目三百石被下詰番被　仰付以下代々相續九代久左衛門乙是知行六百石寺社奉行ニテ安政五年三月隱居家督無相違嫡子靖一郞乙吏ヘ被下寄合被　仰付タリ

野本彌大夫友憲

野本友憲 彌大夫○按駿河分限帳、在大番衆之列、祿二百石、

野本友憲、系出於佐々木高綱、父曰主膳忠高、仕東照公、有戰功、後屬公、友憲初仕越前秀康公、大坂役、年甫拾七、奮戰有功、賞賜祿貳百石、後有故去越前、公乃召而祿之、野本系譜

野本彌大夫友憲　佐々木次郎左衛門尉光綱十三代 野本主膳忠高總領　初庄三郎

宇多源氏佐々木四郎左衛門尉高綱二男次郎左衛門尉光綱兄佐々木太郎重綱叡山軍ニ討死仕候付光綱儀高綱ノ嫡子ニ相成雲州野本村居住仕後氏ヲ野本ト改紋所丸ニ洲濱ヲ相用申候以來代々野本ヲ名乘北條家足利家并鎌倉將軍ニ仕光綱ヨリ九代目野本彌太郎高郷ハ鎌倉持氏亡後高郷親子兄弟三州野本村移住仕候此時氏ヲ野本ト改候共申傳又右高郷ヨリ三代目彌大夫忠範　長親樣へ被　召出候刻野木之名字差支有之木之文字ニ一点ヲ加へ野本ト改メ申候由申傳候得共此譯不詳候右彌大夫忠範儀　長親樣へ被　召出候　信忠樣御代御出陣之節度々軍功有之爲御褒美二男小太郎ニ親之字ヲ被下置親範ト相改嫡子ニ仕候右小太郎親範後彌大夫ト相改申候摠モ總領名不知儀ハ櫻井家へ仕申候右彌大夫親範儀　清康樣へ奉仕後　廣忠樣へ奉仕候其子主膳忠高初彌十郎儀權現樣へ奉仕候御役並祿高不知永祿六癸亥年三州一向宗一揆之刻松平勘四郎信一手ニテ軍功有之又尾州石ケ瀨城攻之節モ武功御座候由申傳慶長十二丁未年十一月　南龍院樣へ御附被遊同十九甲寅年月日年齡不知病死仕候處同人總領庄三郎友憲儀其節越前家ニ相勤罷在外ニ家督相續可被　仰付者モ無之主膳跡目之御沙汰ハ御座ナク候

彌大夫友憲儀慶長十九甲寅年大坂夏御陣之刻部屋住ニテ越前少將忠直卿御供仕此時十七歲五月七日二之丸へ早乘込申候其砌御旗一本敵方へ奪取申候處庄三郎駈付敵追拂御旗取返シ其外働モ有之御旗奉行櫻井武兵衛其場ニテ及見則同人ヨリ證據狀ヲ相送リ申候御歸陣之後御吟味有之被　召出

知行貳百石賜候（役儀不知）其後故アリ越前ヲ立退申候

一元和九癸亥年（月日不知）被　召出御切米四拾五石被下置候（御役儀不知）

此節大坂表働之儀御吟味有之委細戸田金左衛門ヲ以テ言上仕候

一寛永二乙丑年（月日不知）御切米八十石被　仰付候

一同四丁卯年（月日不知）御切米ヲ地方貳百石被　仰付候

一同十四丁丑年（月日不知）御加増百石被下置候

一正保四丁亥年九月（日不知）病死仕候（年齢不詳）

總領小兵衛（後彌大夫）兼次跡目貳百石被下以下代々相續四代庄三郎則房ニ至リ左京大夫様へ被進爾後代々御同家ニ奉仕七代小膳信近左京大夫様奥之番ニテ紀州地百石豫州知五十石ヲ領シ弘化四未年九月病死總領要則政跡目相續ス

紀士雜談ニ曰ク　松平出羽守殿城下雲州松江大火事に付紀州より爲御使野本彌大夫江戸へ被遣候於御前御口上被　仰付候彌大夫御次にて出羽守殿若し此度之火災に付御暇被下候儀も可有之哉左候は直に國元へ罷越候儀に候哉と申達候へは夫には不及由　御前相濟よし若狹守擧被申候扨江戸に於て出羽守殿へ參候處に餘程之風氣にて逢不被申野本と聞被申候て不圖氣付有之押て逢被申直に被相尋候故右續之儀申達候は今日御自分へ不遂對面候はゝ　大納言様思召に違候事と申我等冥加に叶候由御申候となり

右彌大夫は越前家野本右近一類故御人指にて大番より被　仰付被遣候

野澤次大夫

次大夫家譜傳ハラス元和御切米帳其他見ル處ナク事蹟及ヒ年代共分リ難シ唯左之一説アルノミ

南龍公言行叢に曰く　松平左京大夫紀州へ入部有て諸士の弓馬劔術を御覧あり重て參勤有て江戸邸に於て侍士之武藝御一覧有るへき由左京大夫家より附屬せし家老三井孫次郎と云ふもの用人野澤次大夫へ其旨を申渡し孫次郎重て申けるは御在國にては隨分何れも精を出し御慰に成候様にと申渡され候へしと念を入れて申渡す夫は　御意にて候か又は御自分之心入にて御申候哉と云ふ孫次郎かいはくいな事なり御不審あるものかなと答ふ次大夫かいはく　御意にて御座候はゝ申渡す事なる間敷候當家は南龍院様より武藝を御慰と有て御覧ありし事はなし左様に申渡し候ては畏り候と申て罷出るものはあるましく候とにかく敷申ければ孫次郎理に伏して詞なかりしとなり一言にても心を付て言へき事なりと古老名話なり

南紀德川史卷之四十七

名臣傳第八

久野宗成 丹波守○按駿河分限帳在御老中列、祿八千五百石、

久野宗成、系出于工藤遠江守藤原爲憲、爲憲八世孫爲久野六郎宗仲、宗仲十四世孫爲三郎左衞門尉宗能世爲遠江久野城主、永祿中、從東照公、屢有戰功、宗成襲家、慶長十四年屬公、初關ヶ原役宗成、年甫十八、稱金五郎、屬本多忠勝、擊嶋津氏軍有功、大坂冬役與三宅康貞・松平家忠同留守駿府城、其夏役從公軍、其所率精銳五十騎、隊伍整齊、嚴不可犯、敵望而畏之、後公移封紀伊、併食伊勢之地、於是以安藤直次水野重仲守田邊新宮、以宗成守伊勢田丸城、特命曰、此爲熊野之咽喉非汝無以守之也、其年賜暇歸邑、 久野家譜

久野宗俊、襲稱丹波守、又稱和泉守、武而有才幹、公深信任之、一年、高野山、學侶行人相訴、幕府判決、定法令二十余條、僧徒不服、於是遣諸有司鎭之、公乃急召安藤直淸於田邊、與三浦爲時、渡邊直綱、加納直恒等、集議爲軍備、而獨不及宗俊、宗俊自謂遠召帶刀於田邊、而不及我、是外我也、一旦有事、予輩先彼輩而發、示我伎倆而已、乃嚴爲軍備、既而事止、後公聞之、謂宗俊曰、嚮高野山之亂、議不及汝者、以汝能獨立有爲也、如帶刀則以幕府之命傳我、故予誘掖之、欲使不傷其明、是其所以遠召也、如汝、何俟予指令哉、宗俊拜謝而退、 南龍公言行錄

久野丹波守宗成
同　少外記宗晴
同　和泉守宗俊

家　譜

久野丹波守宗成 久野民部少輔宗朝二男 從五位下 初金五郎

祖父久野三郎左衞門尉宗能ハ大職冠鎌足之苗裔工藤遠江守爲憲八代久野六郎宗仲十二代孫久野三郎四郎元宗養子 實三郎左衞門忠宗二男元宗弟 ニテ永祿三庚申年五月十九日於尾州桶狹間元宗戰死後家督相續仕候 月日相知不申候

永祿十一戊辰年依　權現樣御內意三郎左衞門儀御味方仕候同年十二月 日相知不申候 甲州ヨリ秋山伯耆守遠州表ヘ働出三郎左衞門ヘ一味之調略仕候得共承引不仕候付久野城ヲ爲可攻平尾ニ陣取申候三郎左衞門儀モ鼻欠淵ヘ出張合戰仕候處　權現樣御出馬被遊候由ヲ承伯耆守儀人數ヲ引取申候付三郎左衞門儀嫡子千菊幷一門同心之者共召連早速不入計之御陣所ヘ罷出御禮申上初テ　御目見仕嫡子千菊ヲ人質差上候處　御感之、上意被成下千菊幷一門同心之者共ニ本領被下置　御直判之御證文貳通頂戴所持仕候右寫

久野一門同心本知行之事

上久野 德當村 若狹方 池田渡方 下久野 中村方 上末元下末元別所村松 同菅谷方 菅谷不入計留賀見谷河戶綿岩滑文賀嶋松袋井名賀嶋祝井德光貫名桑地正道

堀越之内海藏寺領士氣垂木之内五十貫文勝田之内中村五十貫文鎌田下河合之内帳ハツレ岡
部之内給物有之國領給物有之
以上總都合貳千五百貫文
右今度忠節ニ付テ本地如駿州之時宛行處永不可有相違若此以前ニ何方へ判形雖出置此上ハ
別條不可有彌出抽忠節者可令扶助者也仍テ如件
永祿十一
十二月廿一日　御諱御書判
久野三郎左衛門殿一同同心衆

山名庄之内井瀬
こもかわたくミ河てんわう松山横井別所のふぬき七ヶ郷此外大屋八拾貫文
右之旨領掌之上永相違有間敷者也依而如件
永祿十一戊辰
十二月廿八日　御諱御書判
久野千菊との

同年遠州天王山へ砦被　仰付三郎右衛門尉相守候樣被　仰付候其後當表　御出馬被遊候節數度
御先手被　仰付相勤申候
同十二己巳年正月掛川へ　御出馬被遊候節御先手相勤申候處一族久野淡路同彈正同采女等依今

川氏眞之勸逆心御敵對可仕企有之氏眞ヨリ內通之使川井與四郎ト申者三郎左衞門家來久野八右衞門方へ差越御陳所ヲ前後ヨリ可夾討由申越之候ニ付右使之者ヲ捕置三郎左衞門早速不入計之御本陣へ罷出右之次第言上仕御加勢ヲ奉願候處逆意之一族共儀存分ニ可相計旨　上意ニテ爲御加勢榊原小平太ヲ被成下候付御加勢ハ久野城之本丸へ入置三郎左衞門儀ハ二ノ丸ニ罷在逆意之一族共ヲ成敗仕候右爲御褒美同年八月廿八日一族三人之者共跡式被下置　御直判之御證文頂戴所持仕候右寫

宛行內名淡路守同彈正并釆女佐知行之事

右今度彼三人雖企逆意宗能無別儀旨甚以忠節也然間爲其賞彼跡職知行等一圓出置上永不可有相違若同心之者共於有無沙汰義者如存分可被申付之重テ彼同心之者雖令訴訟不可許容者也仍如件

永祿十二己巳

八月廿八日　　御諱御書判

久野三郎左衞門との

元龜三壬申年十二月（日相知不申候）武田信玄掛川筋ヲ押來芝原ニ陣取久野城ヲ攻申候節鎌田迄　御出馬被遊爲御加勢大村彌兵衞同彌三郎ヲ被成下候此節久野城堅固ニ相守候儀奉蒙　御感候　天正元癸酉年三月（日相知不申候）石川日向守久野三郎左衞門兩人へ被　仰付可久輪城攻取申候　同二甲戌年九月（日相知不申候）武田勝頼遠州表へ出張所々放火仕天龍川邊迄來候處洪水ニ付水落候ヲ相待候此節敵之

樣子ヲ見切家來本間周防同左衛門五郎ヲ以御注進申上候右兩人之者共水練ヲ得早速川ヲ越候テ濱松之　御座所ヘ罷出敵之樣子言上仕候處　御賞美被成下兩人之家來　御前ヘ被　召出御盃被下置候

同十二甲申年尾州小牧御陣之節爲海賊之押居城久野ニ被差置候付家來本間忠三郎ヲ差上候處四月九日朝合戰之節於御先手二番首ヲ取入　上覽候

天正十四丙戌年十月　御上洛供奉仕候

同十八庚寅年關東　御入國被遊候節下總國佐倉城ヘ所替被仰付御加增被下置壹萬三千石被　仰付候

同十九年辛卯年奧州九戸一揆之節御供被　仰付御書頂戴所持仕候

急度申越候依テ七月下旬奧州表出陣之事候條無油斷用意專一候日限之事從京都可被　仰出候間重テ可申遣候也、

六月二日　　御判

久野三郎左衛門との

天正年中老年ニ至奉願隱居被　仰付名宗安ト改申候（年月日相知不申候）

慶應元丙申年十二月五日悴民部少輔有故領知被　召上候後宗安ヘ　御慈之　上意ヲ以於下總國知行千石被下置候

同五庚子年關ヶ原御陣以後關東ヘ御下向遠州　通御之刻宗安入道舊功之儀　思召之旨　上意有

之同八癸卯年二月日相知不申候再ヒ舊領久野城被下置舊知七千五百石ニ下總ニテ頂戴仕候千石都合八
千五百石被下置候
同十四己酉年十月八日於遠州久野病死行年八十三歲
一宗成長男千菊丸後與四郎ト改早世
一父左大夫宗朝初宗秀天正年中年月日相知不申候父三郎左衛門尉家督無相違壹萬三千石被下置叙爵被　仰付
民部少輔ト相改　慶長元丙申年　台德院様御上洛供奉仕同年十二月五日於京都三宅彌次兵衛ト
依遺恨討果候付領知被　召上候
丹波守宗成儀父民部少輔死後本多中書忠勝方ニ厄介罷成關ヶ原御陣之節九月十五日島津兵庫頭之
勢退口ヲ忠勝手ニテ追崩候刻金五郎儀于時十八歲本多出雲守忠朝ト同所ニテ働敵二騎討取モギ付之
高名仕候處ヘ亦々敵二人掛來候ヲ二人共生捕申候此節家來之者モ敵壹人討取申候
慶長十四己酉年月日相知不申候　宗安入道家督無相違被下置叙爵被　仰付丹波守ト相改同年月日相知不申候　常陸
介様ヘ駿河遠州被進候節大須賀國千代丸松平河内守松平主殿頭丹波守共被是八人　常陸介様麾下
ニ御附被遊候
慶長十九庚寅年大坂一亂ニ付駿府御城御留守居被　仰付候處不及老年ニモ候間御供仕度之旨奉願
候處達　上聞御供被　仰付　御跡ヨリ出陣仕候
翌年夏御陣之節モ御供被　仰付　常陸介様ヘ處罷在候　元和五己未年八月　南龍院様紀州ヘ御國
替被　仰出候節丹波守儀　南龍院様ヘ御附被遊御懇之　上意ヲ以御馬拜領仕候左之通本多上野介

正純申渡候

今度中納言殿紀州へ御國替被成候出雲帶刀儀者御國内田邊新宮ニ被差置候其方儀ハ勢州田丸城被　仰付候田丸之儀熊野邊ヨリ一揆之出口候故一入大切　思召旨御懇之　上意ニテ被　仰付候間難有可奉存候

右之通被　仰渡在所田丸へ之御暇被下置　御目見仕御馬并御茶壺拜領仕候　寛永二乙丑年十一月廿九日於三州池鯉鮒病死行年四十四歳

少外記宗晴（宗成嫡子從五位下　初ニ郎右衛門）

寛永三丙寅年正月（日相知不申候）家督相續仕候

正保三丙戌年四月五日叙爵被　仰付少外記ト相改

慶安二己丑年六月朔日於勢州田丸病死行年四十一歳

和泉守宗俊（從五位下　初丹波守　幼名千松又三郎右衛門）

慶安二己丑年十月（日相知不申候）家督無相違相續仕候

寛文元辛丑年九月廿九日叙爵被　仰付丹波守ト相改後元祿三庚午年七月十二日和泉守ト改名仕候

寶永三丙戌年四月廿七日於紀州病死行年六十四歳

右以下代々家督無相違（相續）（一本ナシ）勢州田丸之城主諸大夫御家老加判之列ニテ所謂五家之一也宗成ヨリ六世近江守輝純ニ至リ寛政七乙卯年九月先祖舊功之品ニ付兼テ思召之旨　公儀へ被仰立之上一萬石之高ニ御加增被下八世丹波守純固明治元戊辰年十月正名之典御興隆ニ付テハ是迄舊幕府

之同八癸卯年二月日相知不申候再ヒ舊領久野城被下置舊知七千五百石ニ下總ニテ頂戴仕候千石都合八千五百石被下置候
同十四己酉年十月八日於遠州久野病死行年八十三歲
一宗成長男千菊丸後與四郞ト改早世
一父左大夫宗朝初宗秀天正年中年月日相知不申候父三郞左衛門尉家督無相違壹萬三千石被下置叙爵被　仰付民部少輔ト相改　慶長元丙申年　台德院樣御上洛供奉仕同年十二月五日於京都三宅彌次兵衛ト依遺恨討果候付領知被　召上候
丹波守宗成儀父民部少輔死後本多中書忠勝方ニ厄介罷成關ヶ原御陣之節九月十五日島津兵庫頭之勢退口ヲ忠勝并ニテ追朋候刻金五郞儀于時十八歲本多出雲守忠朝ト同所ニテ働敵二騎討取モギ付之高名仕候處ヘ亦々敵二人掛來候ヲ二人共生捕申候此節家來之者モ敵壹人討取申候
慶長十四己酉年月日相知不申候　宗安入道家督無相違被下置叙爵被　仰付丹波守ト相改同年月日相知不申候　常陸介樣ヘ駿河遠州被進候節大須賀國千代丸松平河内守松平主殿頭丹波守共彼是八人　常陸介樣麾下ニ御附被遊候
慶長十九庚寅年大坂一亂ニ付駿府御城御留守居被　仰付候處不及老年ニモ候間御供仕度之旨奉願候處達　上聞御供被　仰付　御跡ヨリ出陣仕候
翌年夏御陣之節モ御供被　仰付　常陸介樣ヘ屬罷在候　元和五己未年八月　南龍院樣紀州ヘ御國替被　仰出候節丹波守儀　南龍院樣ヘ御附被遊御懇之　上意ヲ以御馬拜領仕候左之通本多上野介

正純申渡候

今度中納言殿紀州へ御國替被成候出雲帯刀儀者御國内田邊新宮ニ被差置候其方儀ハ勢州田丸城被　仰付候田丸之儀熊野邊ヨリ一揆之出口候故一入大切　思召旨御懇之　上意ニテ被　仰付候間難有可奉存候

右之通被　仰渡在所田丸へ之御暇被下置　御目見仕御馬并御茶壺拝領仕候　寛永二乙丑年十一月廿九日於三州池鯉鮒病死行年四十四歳

少外記宗晴　宗成嫡子従五位下　初三郎右衛門

寛永三丙寅年正月日相知不申候　家督相續仕候

正保三丙戌年四月五日叙爵被　仰付少外記ト相改

慶安二己丑年六月朔日於勢州田丸病死行年四十一歳

和泉守宗俊　従五位下　幼名千松又三郎右衛門　初丹波守

慶安二己丑年十月日相知不申候　家督無相違相續仕候

寛文元辛丑年九月廿九日叙爵被　仰付丹波守ト相改後元祿三庚午年七月十二日和泉守ト改名仕候

寶永三丙戌年四月廿七日於紀州病死行年六十四歳

右以下代々家督無相違（相續）[一本ナシ]勢州田丸之城主諸大夫御家老加判之列ニテ所謂五家之一也宗成ヨリ六世近江守輝純ニ至リ寛政七乙卯年九月先祖舊功之品ニ付兼テ思召之旨　公儀へ被仰立之上一萬石之高ニ御加増被下八世丹波守純固明治元戊辰年十月正名之典御興隆ニ付テハ是迄舊幕府

一年月日不知　權現樣格別之　思召ニテ御撰出シ御懸之　上意ヲ以岡崎三郎信康卿へ初テ御具足奉爲　召候右之御趣意ニ依テ　信康卿ハ別テ御懸被成下候　信康卿御果被遊候後ハ存寄之品申上濱松へ引籠罷在候　權現樣ヨリ度々　上意之趣モ御座候得共終ニ罷出不申其後病死仕候年月日年齢共不詳
武兵衛吉清儀年月日不知　權現樣へ奉仕數度御陣之御供仕候初名清吉ト申候付兼テ異名清力ト御呼被遊候

一慶長二丁酉年九月日不知　於武州二俣川大熊之内知行貳百石被下置候

一慶長十九甲寅年大坂御陣之節ハ御使番相勤度々御懸之奉蒙　上意候翌年夏御陣之節別テ難有奉蒙
　上意候由御座候

一元和二丙辰年八月廿日駿州遠州之内ニテ知行三百五拾石被下置候

一年月日不知　南龍院樣へ御附被遊元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越大番頭相勤尤本知八百石被下置候由申傳候

一寛文元辛丑年十一月廿日病死仕候年齢不詳
吉清長男清兵衛清政ハ　台德院樣　大猷院樣へ奉仕之處不慮之儀ニテ近藤長右衛門ト喧嘩及刄傷相手ハ快仕留候得共大勢ニテ深手ヲ負一日過相果タル由

一吉清二男ヲ大學勝政ト云父吉清ト共ニ紀州へ罷越住部屋ニテ　南龍院樣へ被　召出高貳百石ヲ賜奉仕之處後故有テ浪人致シ大坂へ立越閑居之內寛永十四年西國一揆之刻肥前之國へ馳着城下嶋原ニテ上使板倉內膳正御目付石谷十藏へ面謁之上度々城際へ出張相働翌十五年正月朔日一人

ニテ城之塀下ニ付働キ於其場打死ス

一吉清三男吉十郎後武兵衛吉富父武兵衛之跡式高貳百石相續其子七之助家督相續之處嗣子無之嫡家断絶ス

一右吉富二男高井勘之丞二男高井淸五郎勝喜後久米養右衛門元祿九年十二月　長七様物書ニ被　召出候處嫡家斷絶ニヨリ分家ニテ相續以來代々繼續勝喜ヨリ四代武兵衛吉周ハ御切米三十石中奥詰ニテ嘉永七寅年十二月隱居養子亟四郎吉博ヘ家督無相違被下大御番被　仰付タリ

一龍之稜威に曰く久米武兵衛は隱れなきカナトコオロシの昔もの也年寄候て南龍院様御前へ罷出候節紅裏之頭巾御手つから下され寒氣を防候様との御懇之御意なりしか御前にて捻くり廻しケ様の赤きものはいやにて候何に仕へきとて直に御返し申候又或時密柑のおし割たるを半分懐中より出し御前へ罷出是を召上り御覽被成べし是程甘きは覺不申候とて指上候御取被成直に召上られ誠に甘き事かなとの御意により又或時手作の根葱を十分臺にのせ、自分かゝへ候て罷出上りしを臭氣御難儀の御様子をも見せさせられす扨々見事に出來候とて御機嫌なりしとそ

長澤伴雄云く久米新四郎は天正元年六月　神君伊賀越御難の時渡邊半藏本多平八大塚七藏石川日向守等御供相勤し中之一人也東輝婦能傳に見へたりと云々新四郎は武兵衛吉廣之事なるへし

畔柳意春吉景 按駿河分限帳在大番衆之列、祿五百石

畔柳意春吉景、初稱五郎左衛門、後改内藏、祖父曰孫左衛門淸常、死於三方原役、父曰壽學盛政、爲三河代官、賜祿七百石、後屬公、吉景、仕公、爲小姓、賜祿五百石、嶋原役有功、爲鐵炮本行、初加賀侯、以祿千石招吉景、不應曰、予非去紀伊者也、公亦聞之曰、五郎左非離違予左右者也、芦川如閑嘗曰、五郎左之武勇、世有其倫、不應加賀之招、是可尙也、吉景爲人忠信而有膽略、善處事變　世畏而稱之、畔柳系譜紀士雜談

畔柳壽學

同　意春

畔柳壽學盛政　（畔柳孫左衛門總領　生國三河）

家　譜

祖先ヨリ代々三州御譜代ニテ父孫左衛門ハ元龜三壬申年十二月遠州味方ヶ原ニテ討死仕候
壽學盛政儀父孫左衛門討死之砌リ幼少其上病氣ニテ御奉公難仕候ニ付在所へ引込法體仕罷在候處
其後病氣本復仕御奉行可仕體ニ罷成候段　大御所樣達上聞被　召出則御代官役被　仰付七八年モ
知行不被下置御奉公仕罷在候其後知行七百石ツヽ七八年分一度ニ頂戴仕候　大御所樣御他界以後
於駿州　南龍院樣へ御附被遊其儘御代官役兼帶仕候處元和年中御國替之節紀州へ御供仕罷越高七
百石被下置候依之御代官役　御免之儀奉願候處願之通被　仰付以來於御國彥坂九兵衛相加リ公事
等之取扱相勤申候

一寛永三丙寅年四月五日病死仕候

盛政長男ヲ安藤半之丞ト云　台德院樣へ被　召出（子孫不知）二男淸十郎ハ　南龍院樣へ新規被　召出
後病死斷絶タルヲ以テ三男意春吉景へ跡式可被下處長病中ニヨリ願之上孫則意春吉景之悴甚左
衛門良房ヲ養子被　仰付壽學爲跡目知行四百石壹合被下置以下代々相續三代甚左衛門良建ハ御
側御用人大御番頭御城代等歷任御加增千五百石ニ至リ六代甚左衛門良隆ハ不愼之品ニテ五百石
ニ減祿蟄居隱居被　仰付八代五郎左衛門盛林四百石寄合ニテ寛政八辰年二月病死總領甚左衛門

盛應相續ス

畔柳意春吉景 壽學盛政三男

於駿河 南龍院様へ年月日不知被 召出御切米八拾石被下置御小姓相勤罷在候處元和年中御國替之節紀州へ御供仕罷越翌年御加增被 仰付知行五百石被下置候 父壽學盛政儀病死仕候付右跡式意春ニ被下置候ト 南龍院様御意被遊候處意春儀其節長病相煩御奉公難仕候付右之段安藤帶刀方迄申達參州ニ意春忰有之候付呼寄壽學養子ニ仕度段奉願候處願之通被 仰付意春儀ハ病氣故浪人仕候其後意春儀病氣本復仕寛永十五戊寅年嶋原陣之節彼地へ罷越高名仕候由申傳候得共爾ト仕候舊記無御座候右意春儀嶋原一揆落着後年月日不知歸參被 仰付知行五百石被下置寄合被 仰付年月日不知御鐵砲行被 仰付候

以下家譜欠失不分明ト雖モ子孫孫左衛門意爲ト稱シ享和元酉年親孫左衛門意純之跡式相續之如シ意純ハ御切米六拾石御留守居物頭タリ

一紀士雜談ニ曰ク 畔柳五郎左衛門五百石被下候松平加賀殿ヨリ千石ニテ呼候得共我等ハ紀州ナハーレ申者ニ無之候迚不參候

南龍院様御聞及被遊五郎左衛門ハ參ル間敷由 御意ナリ尾州ニテ捕物九州之働共後柘植亂心之節之仕略無双ナリト老人衆物語ナリ其内ノ一人 背川如閑 被申候ハ武勇ハ又類モ有ルベシ加賀へ不參之事ハカツユク候我等抔立退候ヘト進メタル人數ニテ候ト殊更ナル珍美ナリ五郎左衛門後意春浪人ニテ尾州徘徊仕候時町內ニ所籠之者有之強力ニテ與力役人取アグミ遅引ニ及ヒ候處ヘ通リカヽリ申候右之者兼テ知ル人ニテ候何レモノガレ候ヘ我等取リ申可トテ戶口ヘ入リ其方ハ不屆ヲ致シ候迚叱リ〳〵ハイリ申候彼者スクミテ何ノ手モ無ク捕レ申候五郎左衛門勇威故ニテ候ナリト役人申驚感申候又五郎左衛門和歌山ニテ柘植忠三郎妻致出產候時見廻ニ寄リ合碁打候ヲ見物致シ罷在候柘植庄齋廿年目ニテ亂心差發リアヒ口ヲ拔キ五郎左衛門意春ガ横腹ヲ突申候ヲ身ヲヒネリ即柄本ヲ取リ疊ヘ差置取鎭メ申候章門之後ヲ突カスリハヤノリ傳ヒ申候處ニ少モ氣色カツル事ナク勝手ヘ知ノセ申間敷候

血心ニサハリ可申ト家來共ヘ聲カケ申候神妙ナル慣後々迄何レモ感シ申候天草ニテカセキ勝レ候得共右兩人之事常々人々感申候

一明良遺跡ニ曰ク　紀州ニテ明石某申候ハ陣中ニテ具足ノ毛色ヲ覺其外人々之働キ拵ヲ後々迄語申事ニ候我等ハ不審ニ存候申々外ヘクハリ候心ナク候ト申候其後畔柳意春聞候テイナ事ヲ申候常ニ覺候程ノ事ハ別テ替ル事無之ト申候人々之勇壯段々有之者ニ候ト存候由老人衆物語ナリ

黑柳市郎左衞門重元

黑柳市郎左衞門

家　譜

黑柳市郎左衞門重元　黑柳九左衞門重直實子總領　生國遠州

黑柳之二字ハ往昔　天子ニ踊御座候節先祖黑キ柳ノ出シヲ指シ於禁中踊申候節黑柳一ト　勅命御座候夫ヨリ苗字黑柳ト名乘申候二男家ハ畔柳ト認來申候系譜書ハ亂世之頃京都公家方ノ内一類御座候付出陣之砌リ預ケ置候處右公家方子細有之京都離散仕候付紛失仕候旨申傳ヘ候

父九左衞門重直ハ　權現樣ヘ奉仕大須賀五郎左衞門康高組付ニテ罷在慶長七寅年三月廿九日病死仕候

慶長七寅年五月十五日父九左衞門爲跡目知行百石被下置大須賀出羽守忠吉組付ニ被　仰付其後上總ヘ國替之節附參息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二未年國千代榊原家爲繼跡上州舘林ヘ被遣候節　權現樣思召ヲ以テ横須賀黨過半御留置被爲遊此モノ共ハ度々骨折候故御秘藏被爲　思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二辰年　南龍院樣ヘ被爲附安藤帶刀直次相備被　仰付居成リニ遠州横須賀住居仕横須賀ヨリ駿河之御城番相勤申候

一元和五未年八月十八日　南龍院様紀州へ御入國之御供仕罷越知行二百石ニ御加増被下置後　南龍院様御意被遊候由ニテ安藤直次横須賀一統へ申聞候ハ田邊ハ大事ノ要地ニ候間横須賀ヨリ參候諸士ノ内小身ノ者ヲ遣シ置候様ニトノ御事ニ候然共御入指ハ無之候間鬮取ニテ相究可然彼地ハ草深キ所故馬ヲ飼候ニ便宜又殺生等自由ニ候罷越候テ鹿狩ニテモ致シ氣儘活計致候様トノ御儀ニ付則鬮取仕當候付田邊へ罷越寛永九申年八月十四日病死仕候

以下代々田邊與力二百石無相違相續九代辨之助重光安政三辰年九月田邊與力一同立退之節同様田邊ヲ立退浪人文久三亥年三月歸參御切米四十石小十人小普請松坂御城番被　仰付タリ

畔田半右衛門

家　譜

畔田半右衛門正成　畔田半右衛門時定實子總領 初三吉又半平

八代之祖ヲ黒田三郎政信ト云應永廿六年江州黒田ヲ出テ三州安祥ニ移住世良田萬徳丸様へ昵近永亨十年作手へ移住六代之祖黒田半内滿治　信光様へ奉仕寛正六酉年五月御上洛之節供奉文明十戌年九月安祥御攻取リ之節御先手相勤軍功有之其後安祥ヲ　親忠様へ御讓之砌半内儀御附被遊候半内總領三郎兵衛勝高其子半八好高共ニ　清康様へ奉仕候

一祖父半右衛門勝大ハ　廣忠様へ奉仕天文十八酉年十一月　竹千代様今川義元へ人質ニ被爲成候節御守ニテ御供仕永祿元午年四月松平勘四郎信一手ニ從ヒ尾州科野城ニ籠リ尾張勢ト一戦之

刻相働打死仕候

右半右衛門代ヨリ黒田ヲ畔田ト認來候ヘ共其譯相知レス

一父半右衛門 初半平 時定天文十八酉年十一月　竹千代様御供仕父半右衛門ト倶ニ今川家ヘ罷越申候右之頃三河御譜代衆他國ニテ奉公仕又ハ武者修行ニ出候モノ多ク御座候由半平儀モ織田家ニ暫ク仕ヘ永祿二未年同家ヲ立退　御當家ヘ歸參仕同三申年五月十九日尾州於丸根熱捕部ト一所ニ鎗合仕同六亥年十一月於上和田　權現様一向一揆ト御取合有之各鎗合之刻渡邊源藏ト鎗合源藏ヲ鎗付申候然共其場ハゲシク御座候故首ヲ取不申候天正十八寅年小田原御陣之時板倉四郎右衛門淺井鷹兵衛畔田半平三人依　台命諸軍之行儀差引仕候

半右衛門正成儀天正七己卯年九月松平甚太郎牧野右馬允ニ被　仰付駿州持舟城ヲ攻落候刻敵一人討取同十九辛卯年五月關東御打入之刻從　權現様武藏四ヶ村ニテ御知行三百石被下置御朱印頂戴仕候

此時ハ三吉ト申候此名拜領之名ニテ御座候

一慶長十七壬子年　南龍院様ヘ御附被遊元和五己未年御入國之節御國ヘ御供仕高五百石被下置其後御加増六百石ニ被　仰付候

一寛永三丙寅年五月六日五十九歳ニテ病死

正成長男半平ハ大坂御陣之節討死二男三五郎ハ寛永二年三月五日病死

正成三男三吉 後半左衛門 正家父半右衛門正成ト倶ニ紀州ヘ御供仕兄半平討死ニ付總領ニ被　仰付

寛永三寅年父ノ跡式高六百石無相違被下同十三子年十月十二日病死以後代々相續七代半平正勝
高三百石御供番ニテ寛政二戌年十一月病死半右衛門正利家ヲ嗣ク

桑山次郎右衛門

桑山次郎右衛門亮政（桑山修理大夫貞久長男桑山治部卿法印重晴曾孫初左馬介又式部隱居後日齋）
同苗誰家ヨリ分レ且何方ニ罷在候トノ儀相知不申候幼少之時分於駿河　南龍院樣御小姓ニ被
召出知行八百石被下置其後段々御役替被　仰付大御番頭被　仰付御加増被成下都合千石被
成下右御役替之年月日相知不申候
一寛文十三年歳罷寄候付御役　御免奉願候處同年九月十五日老人ニテ相勤ガタキ段被爲　聞召候得
共仲間共ニ歳カマシク者モ無之間先其儘可相勤旨被　仰付候
一延寶三年卯五月十五日願之通御役御免隱居被　仰付知行千石無相違總領吉兵衛ニ被下置是迄吉兵
衛ニ被下置候御切米八十石ハ爲隱居料被下置後名草部園部村ニテ屋敷地被下候付引越罷在元祿七
戌年五月七日病死仕候
總領吉兵衛尚政（實二男）部屋住ニテ御膳番ニ被　召出後御加増御切米八十石被下延寶三年五月父
家督知行千石無相違被下以下代々相續五代代替之節分知ヲ願ヒ六代次郎右衛門尚政御咎ヲ蒙リ
知行三百石被召放十人扶持被下後御切米六十石御鎗奉行ニテ安永九子年十二月隱居次郎右衛門
英晴相續ス

一祖公外記ニ曰ク　南龍院樣一年加太浦ニテ海鯨ヲ追セラル丶ニ如何シケン御船之綱鯨魚ノ尾ニ纏ヒツキテ遠ノ洋中ヲ瞬息ノ間ニ數里走ル事風帆及ヒ難キ迄ナリ御舟既ニ危ク見ヘタルニ桑山次郎右衛門御舟ノ舳先ニ躍リ出テ脇差ヲ拔キテ件ノ綱ヲ切捨テケレバ御舟ハ則止リケリ其時既ニ尼ケ崎ノ城近ク見ヘルニゾ其頃世評ニ次郎右衛門聽シテ御船ノ帳ヲ切リタル樣ニ言觸ラシケル今少シ切ル事遲クハ誠ニ危カルベキ事ナリ(牧笛類叢ニモ載ス)

九鬼四郎兵衛廣隆

九鬼廣隆　四郎兵衛○按駿河分限帳、在寄合衆之列、祿千石、

九鬼廣隆、實松木氏、伊勢山田長官、松木修理政彦子也、母鳥羽城主、九鬼嘉隆妹也、廣隆爲嘉隆所養、因冒其氏、年十八、從嘉隆有戰功、後屬織田信孝、亦屢有戰功、後屬加藤清正、朝鮮役有殊功、大坂役、屬藤堂高虎、爲旗奉行、威名大顯、元和九年、年七十三、公召而祿之千石、不溷以職務、後有特命、與荒川甚太郎、渡邊六郎左衛門、關根織部等同爲旗奉行、寵遇尤渥、寛永十八年歿、年九十一、公嘗從容問曰、汝老而益壯、不知何所養以致之、廣隆曰、無他、唯清晨蚤起、昏晩蚤睡耳、公嘆稱之、九鬼家譜及祖公外記朝鮮役、蔚山城中食竭、士卒大困、加藤清正病之、乃遣使於明將楊鎬議和、因約相見、明人大喜、將陰計以擒清正、而清正不悟、將蒙銀兜鍪臨會、淺野幸長攬涙、爭曰公狂乎、何爲斯輕舉、渠心固難測、若有伏焉將奈何、公必欲蹈前約、某請蒙公兜鍪代公相會、公日本弓箭之冠、不可失也、如某碌々、縱爲彼所擒無缺我威武、於是廣隆、直進、奪其兜鍪蒙之曰、使我公爲敵擒、肥後闔國士、無面天下、固不可遣、淺野公亦不可遣、某當代公、臨會相刺而死耳、清正乃止、因賜其兜鍪賞之、後廣隆得罪當死、清正思蔚山之功滅死遂之、及大坂役起、屬藤堂高虎、有戰功、當日亦蒙其兜鍪、今猶傳於家、御由緒書之記

廣隆家譜記スル所ハ末記働之覺書ヲ畧採シタルモノ故別ニ家譜ヲ揭ケズ廣隆長男ハ早世二男佐

渡寛永十八巳年十二月家ヲ襲ギ知行千石無相違被下置四郎兵衛豐隆ト稱ス以下代々相續七代四郎兵衛隆義ハ五百石高寺社奉行ニテ文政九戌年七月病死總領四郎兵衛隆禮家ヲ襲ク家藏ノ長嘯子ノ兜ハ　龍祖御覽被遊其由緖ヲ御尋ノ處豐隆ハ廣隆七十六歲ノ子ニシテ十六歲ノ時父ニ別レ幼少ナリシヲ以テ不存旨奉答シニ　龍祖御穿鑿アツテ齋藤縣立本及ヒ加藤右馬之亟子片岡孫兵衛ニ御尋兩人申上タル趣其他名甲ノ事共宇佐美竹陰筆記シ由緖之兜ト題セリ此兜ヲ嘗テ　香嚴公電覽ニモ供シタリト云又豐隆筆記シタル廣隆働之覺一卷アリ九代ノ孫隆恕ニ至リ維新變革ノ後家聲漸衰天下ノ名器後世保シ難キヲ憂ヘ明治廿四年四月該長烏帽子兜及ヒ朝鮮王子書翰廣隆働覺書由緖ノ兜記朝鮮役軍令狀淸正高虎初名將ノ書札感狀等若干ヲ併セ獻呈保存ヲ請願ス依テ之ヲ許可金貳百圓ヲ賜ハリ永久寶庫ニ藏セラル今原本ニ憑リ左ニ働書及ヒ由緖ノ兜ノ記ヲ列記ス

九鬼四郎兵衛働之覺

一九鬼四郎兵衛藤原廣隆は天文廿年辛亥年生る父は伊勢國山田の長官松木修理政彥と申候其頃志摩國鳥羽城主九鬼右馬允嘉隆は廣隆叔父にして候故若年の時より右馬允所へ參り母方の九鬼を名乘り十八歲のとき初陣に高名致候右馬允後に大隅守と申候

織田信長公勢州へ御越被成たる事有之時右馬允道まて（罷）[一本ナシ]出かけ屋をたて御馳走いたし候御屋へ入御之後御盃被右馬允に被下候時よき駒を爲牽候はゝ可遣候へ共此度は能駒も無之候との御意よて御長刀被被下候明智十兵衛光秀右之長刀を持被出候を廣隆も次まて見申候由也

其後廣隆信長公の三男織田三七殿信孝へ罷出候天正六年夏城介殿信忠三七殿其外諸大將として播州神吉（カンキ）城を御攻被成時廣隆鐵炮に中り堀へ打落され絶入いたし候故下人共相たすけ引退候處暫有て氣力付候故是程のうす手にて其まゝたまり居へきにあらすと申又押返し働出申候古能原か二度のかけにも粗相似たる樣子なりと御褒美有(候)（一本ナシ）て其後御加增并金の筋甲たいひさんと申臺天目を致拜領候此天目は信長公より三七殿へ被遣候天目にて候由也廣隆廿八歲なり

四郎兵衞は伊勢者にて風呂につよく能ふき候とて切々罷出候によき下帶無之傍輩の内に絹のねりね染の下帶一筋持たる者一人有にそれを細々このそて出候只今は世の中結構に成下々迄卷物類の下帶を致すと常々廣隆物語りして笑申候

天正十年の夏三七殿四國を御拜領被成大坂住吉邊へ御越追付御渡海有之筈にて船之用意可仕由廣隆と川越九之丞と兩人に(候)（一本ニナシ）被　仰置紀州表之樣子爲可被御覽候暫紀州へ御越被成候兩人は泉州堺の所司代へ船之儀御申付可給由斷に參候道にていつも三七殿へ參候舞まひに行逢候此者道の片脇へ兩人を呼よせ小聲に成て申候は上樣の御事は何共御聞不被成候哉と申候それは何事やらんと尋候へは御腹を被爲召候と申沙汰御座候と申候兩人申は其樣なる事が有るべきかたわけたる事を申すなとて行分れ所司代へ行船之事申入候へは留守にて云置罷歸り候道にて兩人申候は四國へ御入部被成候はゝ何れも大身に成候半めてたき事のないさ是より風呂へ入んとてふろへゆき又所司代へ逢んとて行ければ所司代何方へやらん被出候に玄關にて見逢なり所司代被申候は上方の樣子御聞不被成候哉各御油斷にて候と云捨被出候さこにて肝をつふし兩人馬に乗急き紀州に參候に泉

州貝塚の上手に三七殿御旗先見へ申候故兩人馬も草臥たり是にて待可申とて馬より下り相待内に無程三七殿御越にて兩人に被仰候は上方喧嘩之樣子聞候哉と被仰候扨四郎兵衞馬いきしたると見へたり乘替を遣し候へと被仰御乘替被下それより御供いたし候其日大坂迄御越被成筈之處に丹羽五郎左衞門殿より使者參られ申候は今夜は住吉に御陣を居られ御尤に奉存候大坂へ被爲入諸人大勢入込下々騷き物云仕候へは如何に御座候と申來候故其夜は住吉に御宿陣被成候誠にふみゝに水の入たるとは此時の樣なる事なる事なるべしとかく侍は油斷のならぬ事也と廣隆常々申候

其後三七殿丹羽五郎左衞門長秀兩大將にて大坂千貫櫓織田七兵衞信澄を御攻候七兵衞殿は信長公の甥なれ共明智が聟にて一味たる故也此時廣隆一番に城の門口へ押付候へは内より門をたてんと致候所へ鑓を入候故門をたつる事ならす候其時内より鑓にて廣隆が股を突候へ共門の内へつき入候鑓を不引取せ𪜈合候内に跡より大勢押かけ城内へ込入り終に落城仕候城中にも不思寄體にて有之候由廣隆手負候よりは跡より參候大勢に押付られ候に致難儀候と咄申候其後三七殿明智日向守と於山崎表御一戰之時は右の手疵爲養生有馬へ湯治罷在候此後は三七殿天下に成可申と諸人の風說有之候ぞのさも有たればこそ有馬の者共殊外致馳走候由廣隆三十二歲也

天正十一年江州志津ヶ嶽合戰之時分には三七殿美濃岐阜に御在城にて柴田修理勝家と被仰合候故切々岐阜へ注進有之柴田方よしといへは諸人きほひ妻手の由申せは力をおとし申候其後勝家敗軍切腹の後三七殿も岐阜の城を明野間内海にて御切腹被成いつれも致浪人候廣隆三十三歲なり

紀州和歌山の桑山治部卿法印廣隆を能存知の故浪人にて被居候半より先當分我等方へ被參候へと

て和歌山へ參り爰はらく住居仕候其後廣隆屋敷より火事出候故迷惑致し候段申上暇を乞立退申候始終足を留るものにては無之と法印申候由

廣隆池田備中守殿に罷在候時備中殿言外御念比にて毎度御相伴に被召出御咄相手に成罷在候或時城下へ大水出備中殿も御出被成諸士町人地下人迄悉罷出土俵をかつき水を防申候處廣隆は不罷出候付御尋被成候へは私は無役の者に候故不罷出と申候付以の外機嫌損し御前あしく成候故終に立退申候依之備中殿御構ひ有之候付平野權平殿を賴み漸わびこと相濟申候由

廣隆加藤主計頭清正へ罷出申候主計頭殿後に肥後守殿と申候天正十七年の冬小西攝津守行長於肥前國天草一揆退治有之候時清正小西をすけ出陣被致候其時廣隆には跡勢を支配仕候て致渡海候へと被仰付合戰過候て翌日天草へ着陣いたし候へは即被召出昨日合戰の樣子御物語可被仰聞とて敗軍の諸將悉呼あつめ牀机に腰をかけ仕形にて先手旗本迄木山彈正に切崩され敗軍せし故そんせう誰それ何某誰某にてはなきか返せもどせと高聲に罵り或は甲の鉢をおさへて誰にてはなきかさいへ共聞もいれず逃くづれ候故そさかし鑓を以彈正を突きふせ悉仕返し候と被仰聞候敗軍の諸士赤面仕候體笑止千萬成事にて御座候歸陣の以後も機げんよき時は折々先年天草大崩の時ヶ樣の樣子にてありしなどゝ御咄被成候故又天草が出たはさて諸士こまりはて候由など

其日清正廣隆に被仰付候は小西陣所へ參可申趣は昨日は終日我等致合戰一揆の奴原共ほし候を御見物さぞ面白可被思召存候と申をるし卽參右之通申入候へは其取次の侍廣隆と別て心やさき者なれはあのけんきやう者がいへはとて其樣な事をいふてくる者があるかと申候何事にてもあれら云

付たる通はいはねばならず返事は如何と申候へは其如くなるたわけ成事か主人へいはるゝものか
返事は何と成共つくろひていへと申て大きに太このつて申候それより罷歸り候へは又淸正廣隆に被仰
付候は今夜人數三千(一本ばかり計)り召つれ小西陣所の上の山へ上り津のかみはおしぬけえいやわうと三度
ときの聲を上させ候へと被仰付候廣隆其段如何可有御座候半やと申上候へはいわれさる事を申も
の哉急き參きと大きに怒り玉ふ故右の通りとたの聲をなげ申候へ共別儀も無御座候由此節廣隆二
十九歳なり
文祿元年辰のとしより朝鮮陣初り候朝鮮にて慶州と云所の城を淸正攻玉ふ時先年廣隆同しく加藤
右馬允なと弓鐵炮を放ち時の聲抜なけ勇み進んて責候故終に落城致し大勢討取候由
於朝鮮廣隆橋中と云城を請取籠り居候時唐人大勢寄來攻申候馬上多く乘つれ馬上にて弓を射候か
弓も馬も上手にて大聲を揚けゐひな〳〵といひ攻かゝつて候いき得ひ中々夥しくたをさましき事にて
候然とも城中能相防き堅固に持詰申候
淸正朝鮮の都へ可被引入候と都二奉行衆より申來候故諸方れ城々に籠置たる人數なまとめ可引入
との儀にて何れも引取可申旨申來候により廣隆も城抜引拂申候其外諸方より來り集それより都、
被引入候廣隆四十二歳の時なつて朝鮮在陣中淸正より被下候御狀數通又人數押の書付法度書も有之
いつきも淸正直の御判形なり
淸正朝鮮の王子御兄弟幷婦人官人等を生擒廣隆に御預被成候折節婦人御懷胎にて候か牛を上申度
候間可致用意由官人廣隆に申候故日本にてなき事なれ共異國の習なきは不及是非淸正へ申上赤牛

を一正渡し候へは何の造作もなく一打に打殺し料理いたし上候由なり

朝鮮の王子を廣隆預り申候内如形御馳走申上候由扨日本朝鮮和睦の扱調候て王子都へ御歸之時清正へ書簡を被遣候又隆廣にも王子勅筆の御書を被下候歸朝の後廣隆存候は只今は諸人存知たる事なれ共子孫に傳へ後の世には大國の王子日本の平士に對し書簡を被下候事はあるまじき事なり何事か僞を申候と嘲可申候間後代の證據の爲に候とて近衞三藐院信尹公に奥書を奉願上候近衞殿被仰候は大國の王子の勅書に某奥書如何と御意に候へ共再三願申上候付奥へ紙をつぎ紙のつぎ目へかけて奥書遊し被下候を掛物に致置候也其勅書の寫

相遇之後凡百之事力達
大將軍不爲渡日本而還
京極甚可喜々々我还京
之後九鬼四郎兵衞之恩
多報平生亦永世不忘

朝鮮王子

萬曆二十一年六月初四日　臨海君（印）

加藤肥後守清正生擒朝鮮王子兄弟後
擇稠廣之中令九鬼四郎兵衞尉藤原廣
隆衞護之及餞別之時裁斯玉章以與渠

寔千歳一遇之奇事也

慶長鬪逢搗提格林鐘　信尹ま塗之

其後日本朝鮮和睦の扱破を慶長二年の春重て日本人渡海し釜山浦順天蔚山三所の城々日本勢拾萬餘り在陣候然る處に其年暮より蔚山の城を大明人朝鮮人合して百萬におよふ大軍にて取圍み責申候大方四方七八里が間は鳥のかよひも無之體にて城中には清正淺野幸長其外都合二萬斗も籠り候由廣隆も一廓請取持固め申候城中いつきも堅固に防候へとも後には兵糧盡はて水の手を被取切翌る正月初迄十日餘り飢渇に及ひ其上極寒にあゞへ困究致上下共に死期を待はかりにて既に落城可仕處に思の外後詰の日本人大勢押來り悉切崩し候故唐人等足をためず敗軍し總崩れに成て逃候故追討に數抜えらゝゝ討取城中極運をひらき申候此時のやう成事には終に不逢候と申候此年戌の秋太閤樣御他界被成其冬日本人不殘歸朝いたし候前後七年の陣にて候由

朝鮮より歸陣已後働勝れたる者共に清正加增被下候へ共廣隆にはいまた何の沙汰もなく候故我等程に無之者にさへ加增被遣我等には其沙汰なきは面白くもなき事なりとて煩にして引込其後氣色爲養生上方へ參度奉存候とて暇を申致浪人候肥後にては知行二千石餘致領知候清正より被下候知行目錄有之候

廣隆肥後に居申候内清正の姪を妻に被下候其腹に娘一人有肥後を立退候節妻娘共に一同に出船しけるが船中より妻は離別し肥後へ逆戻し娘はかりつれて上方へ參候

慶長五年關ヶ原陣之節は廣隆浪人にて罷在候石田治部少輔（方）(一本ナシ)よりも參候へと申來候へ共不參候廣

隆五十歳の時なり
黒田甲斐守殿長政廣隆浪人之由被聞召及可被召置由にて御使者被下候其使者別て心やとき近付にて有之により廣隆申候は長政へ我等參候事はいやにて候其子細は先年我等肥後守所に居申候時公儀御普請有之我等致普請奉行候に肥後守普請場と長政の普請場と隣にて候處清正ふしん場はちとおくれ長政のふしん(場)[一本ナシ]ははかゆき候時長政普請場へ御出我等に被仰候は肥後守は人をもたぬか普請は何と致候哉埒不明候此方の普請を見よ普請は此様にする物そと被仰御自慢被成候我等もちとせき候故申候は肥後守ふしんは下手にて候共合戰場にて今迄誰にてもあれ人に被越たる事終に無御座候とあらゝかに申上候へは以之外機嫌損し既に杖にて御打可被成程の様に見候故近習衆四郎兵衞立候へと申候て其場を立退申候其頃長政ちと人に被越給ひたる程の事有之候故如右申たる事に候長政立腹の餘りに明日も定て四郎兵衞普請場へ可出候間ごろ水をあびせ喧嘩を仕かけ打果し候へとて其役人誰々と被仰付候我等は其段曾て不存候處仕合にて其日は外之用事被云付普請場へ不出候故又其翌日も右之通に致候へとの事なり此様子を長政の家老衆聞付四郎兵衞今日不出候は定て覺悟仕ての事成へし已來は肥後守殿との出入に成可申候左候ては御爲いかゝに御座候必御無用に被成へしと達てとめ被申候故やめに成候由なり如此慮外を申たる事有之候間我等を呼寄打殺すへき奥意もあらはと候間參ましき由申候使者申候はそれは其方に似合はぬ事を申物かな長政程の大將がそれ程の小事故遺恨に持ち其方をたまし呼よせ殺す事有へきやそれはきたなき仕形にて候若又左様の事有之は我等も一同に切腹すへく候氣つかひなく參候へと申候それより長政へ罷出

候へは御念比にて四郎兵衛は普請も功者に候とて普請奉行被仰付候其後普請手廻しよく候とて長政より被下候御狀有之

廣隆黒田殿を致浪人候て後金吾中納言殿へ三千石の領知にて在付申候中納言殿追付御死去被成候故致浪人候

其後廣隆藤堂和泉守殿へ罷出候無役にて知行千石の約束にて參候へ共大坂陣之節旗奉行賴候と被仰候故旗奉行仕候元和元年卯五月六日屋尾表にて先手之衆多く討死いたし備みだれに成本陣迄もさはがしく候へ共旗を堅固に立固め申候權現樣被爲御覽遊和泉が旗奉行は何と云者なるぞ能立候との上意にて御座候由其時の樣子安藤帶刀よく見屆被申候由なり此時廣隆六十五歲歸陣の後和泉殿より爲褒美知行三百石加增被下候

廣隆和泉殿を致浪人江戶に久敷罷在候內諸大名衆御旗本衆いづれもよく御存知の事なれは諸方より御念比にて何の不足なる事も無之候加賀へ三千石にて可參と被仰下候へ共遠國にて寒氣つよく其上もはや年は寄男子はなし知行には構はす候間上方近き所にて樂に居候樣にと存加賀へは不參候

廣隆御國へ參候次第は戶田因幡守殿御肝煎被成戶田金左衛門取次にて安藤帶刀被申上相濟申候其節金左衛門方より九鬼長門守殿へ參候狀にも知行之儀は千石御取候てらくに御座候樣にと貴樣迄我等かたより御內儀申上候由帶刀申候と申來候即元和九亥のとし廣隆七十三歲にて紀伊中納言樣へ御目見仕知行千石無役に拜領仕罷在候度々被召出はなし等申上候右大坂にて旗之樣子安藤帶刀

委細に殿様へ被申上候由なり其後御旗奉行被仰付候相役は荒川甚太郎其次渡邊六郎左衛門其次關根織部三人なから死去其後は廣隆一人にて相果候迄役儀相勤申候御旗指の中間衆誰々が組之内にて誰々合何十何人各へ渡り申分なりと奉行宮地九郎太郎書付有之候

殿様廣隆屋敷へ御成可被爲遊との御事に付前廉より作事等いたし寛永四年卯十月十八日に入御被爲成御相伴衆には竹田慶安被罷出候かゐひの内には朝鮮王子より被下候書簡に近衛殿奥書有之候を掛物に致候御機嫌宜しかりしとなり其後廣隆廣島衆三人へ申候は各大身なれ共御成は我等先へ致し候とてゐんげんに申候

細川越中守殿日來御念比故致御成候を御聞被成釜花生石燈籠を早船にて被贈下候又或時越中守殿より爲御見廻緋縮面綸子の夜着蒲團呉服酒肴等被下御使者關船にて參候其使者藪三左衛門方へも參候此爲御禮廣隆かたより太田彌右衛門と云藪三左衛門かたより上野庄右衛門と云者爲使者一所に致進上候廣隆は毎年爲御見廻以飛札申上候なり

御鹿狩御鷹野御川狩に出御之節も度々被爲召御料理被下又御鷹野鳥御川狩之魚先々より爲持被下候事數度御坐候或時九鬼は息災にて長命なるか何とぞ養生仕覺たる事はなきかと御尋被爲成候其時申上候はさして養生と申儀も覺不申候只宵より寢申朝はとくおき申候れ能御座候と覺申候由申上候へは殿様御機嫌にて御笑被爲成候由江戸へ御下向之節御目見に罷出候へは御扇子を御手つから被下隨分息災にて罷在候へと御意被成候事も有之候

或時廣隆癲氣の類を致候氣色以之外に有之に付鳥羽の九鬼長門守殿より使者御附置候て日々れ氣

色の様子食事醫者等之事毎日飛脚にて鳥羽へ申遣鳥羽より江戸へ注進有之由廣隆娘鳥羽の九鬼勘左衛門妻山田に在し廣隆孫娘と姪と三人なから爲見廻來候其時の煩は本復いたし候
九鬼長門守殿存生之時御子息之内弟大和守殿を總領にゐて兄式部殿を弟に被定置候死去之後出入に成候へ共右定之通公儀相濟申候其節鳥羽の家中物云有之に付廣隆當座の御暇申上和歌山より鳥羽に參古來の事共申きかせ家老の銘々と示合せ相靜め申候鳥羽の諸士は不及申町地下に至迄廣隆を恐れうやまひ馳走いたし候それより大和守殿は攝津國三田へ式部殿は丹波綾部へ所替有之候寬永十四年丑の冬より肥前國嶋原にきこえたん一揆起り世上さわかしく馬物具を用意し殿様御馬出るとひしめきける折ふし廣隆は作事を初候人々の云は九鬼は老耄しゐるか今此中にて作事所ては有まいとの沙汰なり廣隆此由を聞て若き者共が何のわけもしらず事珍しかこてさわゞ事このなあの様な事は子供わざの様な物で事になる儀にてはなしたとひ又殿様の御馬出る事有とても別に何にても用意する事もなし萬一御馬出るにしてもはるこのあなたに被成御座先衆に被仰付御攻させ被成御下知被遊はかりの事御家中の諸士手をくたき働くといふ事はなき事なり此やうな時は職人隙にて作料やを死物なをはよき作事のし時なりとて作事專にて居申候
廣隆連歌をすき茶の湯を好ミ伊勢守流の玄つきをも覺へしなり常は廣嶋衆大崎玄蕃村上彦右衛門眞鍋五郎右衛門三人其外古老の覺ゐる衆大勢彼方此方へ寄合かたりける或時何も雜談に一二三四の死くじ拔可取とてくじ拔取しか一二はくじの通に死にける間此くしよくあひ候とて何も又寄合笑申候

或時廣隆所へ何そも寄合終日咄けるに廣隆申そは我等は馬にてのく敵を追懸しに金の子持筋付たる具足を着大きなる男遥わきにて高名し首を取て立ならす四方を見まはしけれ共其間遠かりしかは我等はそぐに乘通り候が何者にて有しやらんと物語いたし候其時池田讃岐申候は其馬にて乘り通り候は貴樣にて候か其金の子持筋付たる具足は我等にて候よと申候座中の人々扨々久敷事なるに不思儀に咄合そられ證據出たると被申候其場所は何方にての事やらん聞覺不申候へ共書付申候

或時小鶴五郎左衞門廣隆所へ參今日は御具足の虫ほしを致候へは殿樣御出被成色々御咄有之候て陣中の樣子共御尋被遊候我等申上候は軍陣にては只大將の腰がくじけ申ては何事も成不申候と申上候へは御機嫌にて事外御笑被成候と物語いたし候それは無造作なる事抜被申上候とて廣隆もわらひ申候

廣隆股に鐵砲の玉二つ有て雨氣なとには來たるく候とて人にもみやわらげさせ候鎗疵太刀疵も有之候毎年盆祭には棚を別にかざり朝鮮にて討死致候家來共六七人を祭り廣隆自身水を手向申候なり

廣隆感狀有之候共度々火災に逢燒失いたし候由申候

寛永十八年辛巳十月二十一日廣隆九十一歳にて致死去候遺言に御旗之儀能相改候て役人衆へ相渡し申をへし死骸は高野山遍照光院へ送候へ若不懷の事有之御暇なと申事ならは九鬼和州へ參へし三百石合力しくれられ候へと内々約束し置候と申置候廣隆に子三人有一人は女子肥後よりつれて參候娘なり成長して伊勢山田十二人の禰宜の内松木神主に嫁そ娘二人有夫死そ後家に成て後鳥羽

の城主長門守殿家老九鬼勘左衛門妻と成又娘二人有初山田にて出生しける娘二人の内姉は死と妹は是も山田の神主之内へ嫁を後勘左衛門妻と成て出生しける娘二人之内姉は同家中九鬼孫六妻と成妹も同家中柳川助十郎妻と成助十郎後に舘林宰相様へ被召出千村長兵衛と申候廣隆後妻に男子二人有兄は勢州おはやしにて早世す二男拙者は紀州にて生ま幼少之時は佐渡と申候十六歳の時廣隆相果候暮に跡目無相違千石被下寄合組に被仰付九鬼四郎兵衛に成豊隆と申候其節被仰渡候趣は故帯刀申上置候儀有之に付跡目無相違被仰付候餘人は例に存ましく候との趣數三左衛門我等兩人罷出承候也

右者廣隆物語候儘に聞覺候分書付申候廣隆老人故委細に物語仕事も無之拙者若年故尋聞申智惠も無之一生涯之働委は不承置候以上

寛文十二年壬子正月日　　九鬼四郎兵衛豊隆記之

由緒之兜

一九鬼四郎兵衛銀の長帽子の兜は

南龍院様御覽被遊忰四郎兵衛右兜の由緒御尋被遊候處四郎兵衛申上候は私儀亡父四郎兵衛老後の忰にて幼少之節父病死仕候故由緒の様子不存候と申上候　御意に加藤清正家に齋藤佐渡守利芳と言者有之右之者は明智光秀か甥齋藤内藏之助利三か子にて候故明智滅亡以後光秀が聟細川忠興へ被成御預候而是非誅伐可有之處　大政所の御詫にて命赦免清正へ御預齋藤立本と改申候尤數度の軍功有之者にて此立本は　大猷院様御乳母春日局の兄ゆへ後には御旗本に被召出伊豆守と申候松

平伊豆守信綱へ遠慮し佐渡守と改申候朔の稲葉丹後守か後見に御附置被成候右佐渡守へも御逢被遊朝鮮在陣七年の間の事共御尋被遊候付段々委細に申上候内九鬼四郎兵衛蔚山にての忠義幷武勇粗申上候　御意に佐渡守も慶安二年に八十餘にて相果候尾張源敬逝去の前年かと　御意被遊候誰も外にて覺之者も有之間敷候片岡孫兵衛は加藤右馬之亟か子にて候間肥後の者共に昔語りを聞置候事も可有之なりと　御意にて菅沼九兵衛を以御尋被遊候處孫兵衛御請申上候は肥後の古老の輩物語に慶長二年朝鮮蔚山籠城の節城中兵糧盡て上下共に牛馬を殺し喰ふに及候時清正より箕部金大夫富田平七を使として寄手の總大將大明の經理（武官總大將の事）楊鎬か陣へ遣し日本國の大將加藤主計頭清正と大明の楊鎬と相戰事數日徒に兩國の士民無罪に死せる事を憐み此故に我直に楊鎬へ對面し日本の意趣を申通和談して軍兵を可引取と申遣候へは楊鎬大に悦ひ候て申候は清正勢盡て降參を乞然共我是を不赦只今清正を北京へ獻上せんと陣中へ觸候へは朝鮮百萬の兵共皆悦ひ勇む是を清正不知給約束之時節なれは寄手の總大將楊鎬は其場所へ參成儀を調へて清正を呼付申體なり清正は出候半と被致候を淺野左京大夫幸長申候には清正に物の付て狂ひ玉ふか異國の心難計對面の時に大力の兵共を隱し置急に出て貴殿を引立候て行候はゝ矢丈に思召候とも叶申間敷候若又彼と約束して不出候てはいかゝと思召候はゝ長帽子の冑を着し清正と名乘て此幸長が出可申候清正は日本の弓矢の張本なり此幸長は數ならぬ身なれは生捕れても日本の弱りにはなり不申候と押留被申候其時九鬼四郎兵衛小屋之内にて清正長帽子の甲を免しもなきに着致して清正幸長の前に出主人は勿論幸長殿を敵に取られても肥後一國の軍兵は男か可成哉拙者清正と名乘て大明の大將揚鎬に

對面し刺違て死んと申されは幸長の義信と九鬼か忠義とを清正感し玉ひ暫く案し候を見て毛利家の宍戸備前守吉見大藏亟吉川廣家を始清正の家人加藤與左衛門箕部金大夫庄林隼人齋藤立本なと口々に清正出候を止めけれは清正道理に服し出候事牧止被申候其時數千人の肥後勢の內に九鬼四郎兵衛壹人主の命に替らんと出候事を清正滿足し長帽子の甲を即ち四郎兵衛へくれ被申又肥後より參候犬童作太夫と申て被召出候者へも相尋候處右之通物語申候四郎兵衛肥後に居候時家老幷の判形致候付清正立腹し四郎兵衛へ閉門被申付兩月過候て免し候節清正よりの使者井上大九郎に對し過分之慮外過言を申候付清正又々大に立腹し可被討果處に蔚山にて身代りに出んとし候忠義を被思出て四郎兵衛命を免し被申候

宇佐美竹陰

余署を

竹陰は宇佐美二代目左助定祐 二代目 ふして慶安二己丑年被召出元祿十六癸未年六月竹陰と號を

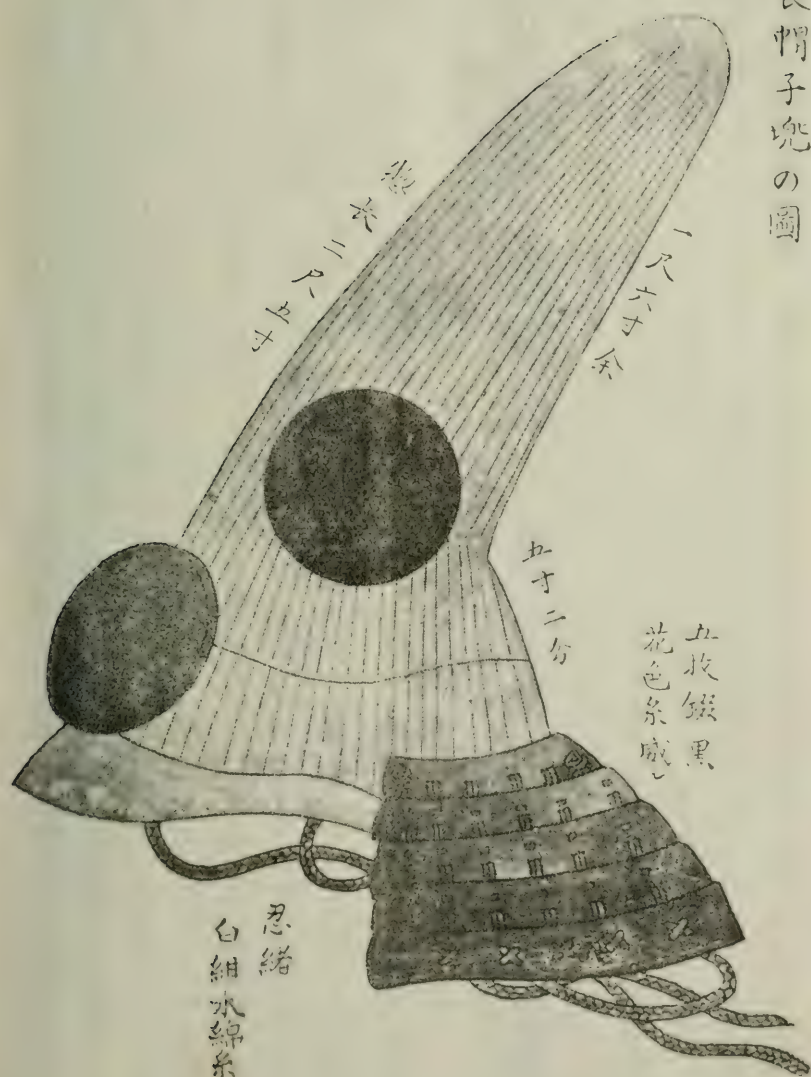
長帽子兜の圖

總長二尺七寸

一尺六寸余

五寸二分

五枚鍛黒
花色糸威し

忍緒
白組水綿糸

功力勘右衛門

功力勘右衛門 實名不知 生國甲斐

家　譜

甲州武田家ニ仕ヘ知行貳百石給リ使番相勤候處同家沒落後浪人仕於駿河　權現樣ヘ被　召出御切米貳十八石四人扶持被下置御小人頭被　仰付御小人五十人支配仕候其後　南龍院樣ヘ御附被遊其儘同役相勤元和五未年御國替ノ節支配四拾三人召連紀州ヘ御供仕寛永元子年病死仕候

總領淺右衛門父跡目二十八石四人扶持無相違被下御小人頭被　仰付以下代々相續六代淺右衛門榮彬ハ御切米三十三石御小姓組頭五友之間御廊下詰ニテ嘉永三戌年三月病死總領熊太郎榮壽相續ス

倉地彦左衛門

倉地彦左衛門時敎 倉地主計勝時次男 生國三河

家　譜

父主計勝時ハ　道幹樣ヘ御奉公相勤申候

慶長十一午年　權現樣ヘ被　召出御奉公相勤同十三申年御分人之節　南龍院樣ヘ被爲附年月日不知　清溪院樣ヘ被爲附後　芳心院樣御附被　仰付寛文四辰年隱居同五巳年二月十八日病死仕候

忰次左衛門知通相續　芳心院樣御臺所人相勤三代權之亟知行初テ士席ニ列シ五代彥左衛門知綱

熊谷藤右衛門

桑嶋喜左衛門

ハ御切米四拾石大御番格小普請ニテ天保二卯年二月病死嫡孫承祖虎之丞知秀跡相續代々江戸常府ナリ

熊谷藤右衛門

家　譜

熊谷藤右衛門 實名不知　生國紀伊　後苗字熊澤

權現樣城州伏見ニ被遊御座候節奉願御奉公ニ罷出三ヶ年相勤其後　南龍院樣ヘ御附被遊元和五未年御國替ノ節紀州ヘ御供仕候後病死年月日不知

忰七兵衛承應三午年部屋住ニテ御切米拾貳石三人扶持ニ被　召出御臺所人被　仰付後十五石御廣敷番ニナル延寶年中ヨリ苗字熊澤ニ改メ以下代々相續四代七兵衛孝昌ハ獨禮小普請十五石ニテ寛政十一未年九月病死男作左衛門嗣ク

桑嶋喜左衛門

公嘗東覲、至大井川驛、吏白漲水不可濟、公乃臨河上、親曰、水勢如是、豈不可濟乎、乃召桑嶋喜左衛門、謂曰、汝濟以驗水勢、喜左衛門、乃結馬帶、脫障泥、裸而帶刀於褌、騎而泝上流、水勢奔騰、乃執鞍扶馬以泅、逆浪滔々、失其所在、衆以爲溺死、久之達下流、牽馬上陸馳驅一回、左右以報、公召見、親問其狀、曰、怒濤張大、臣賴公威靈、幸得濟、若公欲强濟不重犯險乎、乃止、賜刀賞之、 牧笛類叢

按スルニ喜左衞門ノ家譜傳ハラズ元和御切米帳桑嶋出羽一百六十石ヨリ四百石ニ至ル・桑島六兵衞高二百石ノ兩人アリト雖モ跡目名稱トモ相違喜左衞門家筋トモ判シガタク其詳ナルヲ知ルニ由ナシ

一祖公外記ニ曰ク　御参府之節大井川滿水ニ付御渡リ難被遊旨川役人共申出候處水勢ヲ御覽被遊此位ニテ難渡事ハ有之間敷ト被　仰御使番桑嶋喜左衞門ヲ召試ニ可渡ト被　仰喜左衞門ハ犢鼻褌ヘ双刀ヲ帶ヒ少シ川上ヨリ乘入リ川下ヘ游着又馬ニ乘リ御目通ヘ馳付又少シ川上ヨリ乘リ込川下ヘ游着馬ヲ牽御前ヘ出テ存之外水勢荒候漸御威光ヲ以テ渡リ候ヘ共御渡リ被　遊候儀無勿體奉存候ト申上候付其儘川端ヨリ御歸リ被遊候喜左衞門ヘ御脇差ヲ被下置候

一牧笛類叢ニ曰ク　桑嶋喜左衞門一トセ　南龍院様之御供ニテ宮御渡海之時大風波ニテ御舟危ク毫毛ニテ搾タル總付シ碇貳挺海底ニ入レケレバ御船ハ止リタレト潮次第々々ニ高ク登リテ四面ヨリ御船ヲ厭ス故御船鳴響テ既ニ破レントス碇ヲ上ケ候ヘト　御意ナレ共海底ヘヒシト喰ツキタリ大勢エイ々々聲ヲ上ケテ引上ケレトモ少モ碇ハ上ラス潮ハ益々ウツ卷キ上ケテ勢ヒ強ク御船危キ事言計リナシ其時桑嶋喜左衞門取付タル大勢ノ人ヲハラヒノケ脇差ヲ拔テ件ノ碇綱ヲ一打ニ切リ捨テタリケレハ御船浮ミ上テ無恙御渡海被遊ケリ夫ヨリ彼ノ脇差ヲ綱切リト號シテ家珍トス此時　南龍院様ハ御船櫓ニ御座被成御鼓ニテ江口ヲ御謠遊シ御氣色御平生ノ如ク被爲在ケルトソ

久保田源藏

久保田源藏久壽　傳醫久保田平四郎好春二男　初源太　生國紀伊

家　譜

兄田中伯元厄介ニ罷成有馬武右衞門ニ就テ弓術ヲ修業寶曆四戌年四月十九日江戸深川三十三間堂ニ於テ半堂通矢ヲナシ半堂總一トナル于時十二歲ナリ

通リ矢壹萬千六百三十八本

總矢數壹萬四千三百貳拾本　十八日酉刻ヨリ十九日未迄于時雷雨ナリ

寶暦四甲戌年四月廿一日此度半堂ノ矢數總一仕候付新規被　召出御切米八十石被下置新御番格被　仰付後新御番御供番御使番ニ歷任地方貳百石三百石高ニ御足被下又御先手物頭小十人頭修理大夫樣御附ニ轉役三百石ニ御加增寬政元酉年御納戸頭被　仰付同三辛亥年四月御廣敷御用人格同役申合勤ニナリ同六寅年七月本役被　仰付爾來御廣敷向勤續キ文政二卯年三月七十七歳ニテ病死ス久壽長男内匠好道部屋住ニテ被　召出後御手筒頭格奥詰四十石ニ至ル然ルニ病氣ニヨリ退身依テ村井久右衛門三男新三郎久雄ヲ久壽嫡孫承祖ニ被　仰付家督相續代々江戸常府ナリ

一右新三郎後源藏ト改メ御目付御用人御勘定奉行等數十年勤務遂ニ菊之間詰ヨリ御家老加判之列千石高ニ累進ス人トナリ硬直武ニ長ス維新前騷擾之際江戸樞府ニ在テ專ラ事ヲ執リ明治元年若山ヘ移住退隱久ト稱ス時津田又太郎担任御國政大改革ニ際スルヤ其專横ヲ憤リ大ニ不利ヲ謀ルモノト誤認頗ル又太郎ニ迫ル處アル等ヨリ不慮之嫌忌ニ罹リ終ニ幽囚セラレ程ナク獄中ニ死ス事ハ當公同年之譜ニ詳カナリ時人其志之切實ヲ憐ム者多シ

一乞言私記ニ曰ク　久保田源藏善弓術半堂一晝夜大矢數ヲ以テ召出サル井田幸次郎御用人ヲ勤ラル曾テ茶ノ湯ヲ好ム久保田源藏御廣敷御用人ナリシ時御用人梅澤十助ニ申候ハ幸次郎殿ニハ茶湯ヲ被成候ヨシ御用人初メケ樣ナル花車ナル遊ヒ被成候テハ御家中武備ヲ懈リ奢リヲ好ミ候樣ニ相成候ハヽ如何可被致候ヤ表立候御役人ヨリケ樣成御心得ニテハ示シ屆申間敷御仲間ノ儀ニ付御異見被成可然ヨシ申候ニ付十助共通リヲ以テ幸次郎ニ異見アリシトソ

記者曰ク源藏今ヲ去ル事僅ニ三四十年前之事ナリ其比之風ケ樣ニモ有シナリ今ハ茶ノ湯流行何事モ茶ニシテ御座ナリヨキカ賢人トナリ忠臣伊達ハ荒キ息モツカヌ樣ニナリタリ我子孫共モ身ノ立身ヲ願ヒテ座ナリヲイヒテ君ニ忠ナル道ヲ失フ事ナカレ

源藏御廣敷奥ニテ老女ト申分事有シニカシコノ札ヲコヽヘ掛度シ御移シ被下ヨト申シケレハ我ハ其役ニテハナシ其役ニ御申付候ヘト答ヘシ由此人頭ノ丸キ小男ニテ至テ堅固ナル人ナリ

熊谷次郎左衛門

熊谷次郎左衛門幸中 熊谷次郎大夫功信總領 初(一本憂)次郎 生國武藏

家譜

先祖ハ小山大椽政光之孫熊谷兵庫幸政 始稱小山後母方之姓ニ改 十八代之孫尾張守幸宗嫡三左衛門幸延男熊谷次郎左衛門幸豐ト云下野國山田村ノ内幸政居住之地今以テ熊倉屋敷ト唱ヘリ

幸豐寛文二壬寅年八月於江府 南龍院樣ヘ被 召出知行二百石被下以下代々相續四代次郎大夫功信ハ御切米五十石御供番並高ニテ寶暦九卯年正月病死ス

次郎左衛門幸中寶暦九卯年三月父跡目御切米四十石被下大御番格小普請被 仰付後新御番御書院番御小姓組御使番等歷任御加增地方二百石被成下安永六酉年正月御目付被 仰付後三百石ニ御加增寛政元酉年六月御側御用人御供番頭格五百石ニ御足同三亥年四月御勘定奉行之上七百石ニ御足被下同五丑年大御番頭格五百石ニ御加增千石ニ御足高被下同八辰年六月大寄合格七百石ニ御加增同年七月御年寄格千三百石ニ御足高被下同九辰年御側御用人之勤 御免千八百石高ニ御足高被下緣側詰御年寄同樣勤被 仰付同十一未年八月千石ニ御加增同十二申年十一月再ヒ御側御用人被仰付文化三寅年正月加判之列被 仰付文化四卯年九月十日六十三歲ニテ病死

養子次郎左衛門當幸始泰次郎跡目千石無相違被下大組被 仰付以下代々相續次郎左衛門幸中ヨリ四代目ヲ英藏幸知ト云近時御目付御城付等ヲ勤務病死養子正八郎實明嗣ク

一乞言私記ニ曰ク 先々熊倉次郎左衛門御側御用人格勤之時竊ニ出入ヲ願フモノアリ餘リ度々コヒシニ或時酒宴之席ヘ呼出シ

其方ハ毎度能ク尋ネ吳レ候扨テ此方ヘ懇意ニ參ルモノハ不仕合之事有ルヘシ若明キ跡ナドアル節內存申出ルモノ兩人アラムニ何レモオ能チトリ無クハ我方ヘ出入セヌ者ノ方チ用ユル事モアルベシ出入ハ詮ナキモノナリト被申ケルトゾ

又曰ク頻リニ立身チ求ムルモノアリ人モテイワセラル、ハ此間鮫鞘ノサヤ計リチ手ニ入レタリ鞘ハヨケレトモ身ノ相應セルナシ能キ相應之身チハメタシト申ケル其ネ再ヒ求メザリシトゾ

又　雪隱ニ行ク時ハ脇差ノ反チ打チカヘシ駕ニ入ル時ハ柄チモチ鞘ヨリ入レベシ長袴ノ時ハ小サ刀チ袴ノ紐ニサスヘシト語ラル

(以上乞言)

一熊倉實明信ニ語テ曰ク　次郞左衞門幸中ハ我ヨリ五代前ニ當レリ次郞左衞門父チ次郞大夫トイヒ顏色甚タ黑ク大酒ナルチ以テ人呼テ黑熊泥大夫トアダ名セシト家極メテ貧更ニ壹物ノ蓄ヘモナク唯具足壹領旗指物アルノミ次郞ナ夫死ルヤ子次郞左衞門ハ斯ル貧苦ニ迫リ多クノ家眷チ引受テ勤仕セン事思ヒモヨラズトテ既ニ舊里下野小山ヘ退キ歸農セントス親戚其人トナリ用チナスベキチ見込强テ止ムルニゾ雖默止家督チ相續ス然ルニ　香嚴公御側御用人ニ御拔擢　舜恭公ノ時尙同職永勤遂ニ御家老ニ進ム嘗テ御目付拜任ノ時同僚チ招待饗セントスルニ器物ナシトテ擂鉢ヘ奴豆腐チ盛リ盃事ナセシトナリ御家老祿千八百石ニ至ルト雖常ニ節儉チ主トス澁谷兵助ハ永ク次郞左衞門ノ厄介トナリ居テ　修理大夫樣方ニ勤仕青山御殿ヘ出勤スルニ辨當ノ飯粗惡ナルチ以テ同僚ノ輩厄介ノ身ナレハ奴僕同樣ニ扱ハレ然ルナラント嘲ル兵助曰ク次郞左衞門ハ平素飮食等ニ於テ上下ノ別アリシ事ナシ次郞左衞門ノ辨當固ヨリ如斯ト示シタリトゾ其死ニ頻シ疲勞次第ニ重ケレハ家內ノモノ絹夜具チ被ラシメシニ次郞左衞門大ニ怒リ我ハ百石ノ家ナリ今大夫ノ身ト雖昔チ忘ルベカラズト足ニテ之チ刎ネ除タリトナリ

一次郞左衞門常ニ小兒敎育之事ニ深ク注意シ小兒自カラ頭ヲ柱抔ニ觸テ泣ワメク時傍ノ者惡キ柱抔ト柱ヲタ、キ示シ或ハ種々ノ戲言ヲイヒテスカスハ幼年ヨリ虛言ヲ敎ユルニテ以テ之外之次第心得違之至リナリト懲戒甚タ嚴ナリシト又ヨク奴僕ヲイタワリ使タレハ重年奉公ノモノ多ク其菩提所ニハ家來ノ墓三基迄アリトナリ或時雀ニ米ヲマキアタヘシニ心ナク其米ヲ蹈ミ通ル家來ト除ケテ通リタル家來トアリシヲ見テ除ケテ通リシハ正直ナルナリト別テ目ヲ掛ケ使シトソ家極テ貧ナレドモ食客ハ常ニ絕ヘサリシトナリ是皆澁谷兵助ニ直接ニ聞得シ處ナリト語リシ

南紀德川史卷之四十八

名臣傳第九

山本正春 圖書○按駿河分限帳在大小姓衆之列祿貳千石

山本正春、系出於菅原道眞、曾祖曰室兵庫頭正成、世居三河室城、祖父曰彌三郎茂成、幼孤、爲山本彌兵衛所育、因冒其氏、東照公召而祿之、屢有戰功、父曰勘助茂春、田原七十騎之一也、茂春有二子、長曰十太夫茂房、寛文五年、公召而祿之八百石、次曰圖書正春、初仕東照公、賜祿五百石、後亦隨公、屢轉職爲執政、增祿至三千石、万治二年歿、山本系譜

山本圖書
同　十太夫
同　六右衛門

家譜

山本圖書正春 山本勘助茂春二男 始山田平十郎

祖父彌三郎茂成ハ菅相丞貳拾四代室兵庫頭正成總領ニシテ父兵庫頭正成迄代々三州室ニ在城仕候處大永六丙戌年四月十八日　清康樣御代故有テ生害仕候其節彌三郎幼年ニ付緣類吉田之城主牧野右馬亮方ヘ引取同家之從士山本彌兵衛茂門ト申者養育仕成長之後山本ヲ稱候テ則山本彌三

郎茂成ト申其品達　權現樣上聞本多百助ハ室氏一類之由緒ニ付百助方へ罷越遠州濱名ニ居住仕其比武田信玄家ヨリ苅田ニ働出候處百助カマリ伏首數七ツ討取申候　權現樣右之首共　上覽被遊彌三郎引取候節途ヲ替又首壹ツ討取申候段御感被遊被　召出以來於所々軍功相働御賞美被爲遊其後岡崎三郎信康卿へ御附被遊信康卿御遠行被遊候付引込罷在候處可被　召出旨本多佐渡守殿ヲ以奉蒙　台命候處再勤之儀堅ク御辭退申上候處上總國ニテ御扶助米被下置閑居仕罷在慶長五庚子年七月三日病死仕候 于時八拾六歲

彌三郎茂成ニ六男アリ何レモ家ヲ起ス其畧左之如シ

長男　勘助茂春　次ニ記ス

二男　半右衛門正元

元和年中　南龍院樣へ新規被　召出別家ニテ相續山本織衛正貞家ナリ正元長男九郎右衛門正則亦元和八年新規被　召出別ニ家ヲ起ス其子孫勘五郎ナルモノ桑名御渡海之時武勇之事アリ末ニ記ス

三男　彌兵衛重晴

舊記斷絕事蹟不分男子兩人有之長五郎又左衛門ト稱ス長五郎ハ　權現樣へ奉仕後　南龍院樣へ御附人三百石被下代々相續山本吉右衛門直秀家ナリ末ニ記ス

一又左衛門是又事蹟不分其子市右衛門重房承應二巳年月日不知　南龍院樣へ被　召出十人組貳拾石被下代々相續左京大夫樣御家中山本守次郎義知家是ナリ

四男　唯右衛門忠重

忠重ヨリ三代目理左衛門忠貞天和二戌年二月左京太夫様ヘ被　召出弐百石被下代々相續山本理左衛門忠意家ナリ

五男　庄左衛門義貞

南龍院様ヘ被　召出知行四百石被下代々相續山本彌五郎長成家ナリ

六男　彌六郎正珍

彌六郎事蹟不分總領文右衛門頼久御奉公不仕文右衛門子久右衛門茂青寶永二酉年八月深覺院様ヘ被　召出其子彌左衛門ニ至リ家斷絶、文右衛門二男勘左衛門正方元禄六酉年十二月　清溪院様ヘ被　召出代々相續之處五代目源五右衛門正明天保五午年十二月不埒之品ニ付改易

一父勘助茂春ハ　權現様ヘ被　召出御役祿不知　田原七拾騎之内ニテ長篠五拾八度之戰長久手軍功有之小田原御陣之節本多中務大輔殿手ニ屬シ於岩附軍功多御座候付關東組ヲ被預小原茂之右衛門ト隔日ニ中務大輔殿總先手ヲ相勤申候

一元服之節　權現様上意ニ甲州山本勘助儀武邊ノ者ニ候由緒モ有之儀ニ付アヤカリ候様トノ　上意ニテ勘助ト御附被下候由申傳候

一慶長十六辛亥年六月十二日病死仕候　于時六拾壹歳

同壻正春慶長十一丙午年二月廿四日　權現様ヘ被　召出常州ニテ五百石之御朱印頂戴仕候

一年月日不知　權現様ヨリ御短刀千代鶴御持筒壹挺善四郎作御鞍鐙紋セキレイ拜領仕御短刀御鞍ハ今ニ所持御鐙ハ如何相成候哉不知

一年月日不知　南龍院様ヘ御附被遊御入國之節紀州ヘ御供仕後段々結構被　仰付知行三千石被下置御年寄列ニテ　淸溪院様御傅兼相勤

一南龍院様ヨリ御茶壺壹拜領

一淸溪院様ヨリモ御筆之畫三幅對御掛物拜領仕

一万治元戊戌年五月十六日依願隱居嫡子十郎右衛門ヘ家督知行三千石無相違被下大組被　仰付十郎右衛門ヘ是迄被下置候六百石爲隱居料圖書ヘ被下置候

一万治二己亥年四月廿日病死

勘助茂春長男ハ十大夫茂房ト云家譜次ニ記ス

圖書正春三男十郎右衛門良崇始十助　寛永九年部屋住ニテ被　召出七拾石被下貳百四拾石ニ進ミ又六百石トナリ万治元年五月十六日父圖書家督知行三千石無相違被下後大寄合延寶二年七月病死以下代々相續圖書正春ヨリ九代十郎右衛門正忠ハ千五百石大御番頭格ニテ慶應三卯年五月廿五日病死四男久吉正敦相續ス

一祖公外記ニ云ク　駿府ニテ剛盜三人町家之土藏ニ取籠リ候段御聞被遊燒殺シ候様被　仰付候得共近所類燒ヲ迷惑可仕間私方ニ抱置シ浪人石井四郎兵衛ヘ申付爲召捕候様可仕旨御家老山本圖書(三千石)申上四郎兵衛ニ申付候處四郎兵衛直ニ藏窓ノ鐵網ヲ踏破飛込三人ヲ討留四郎兵衛モ左手半分切落シ候得共貳人之首ヲ刀ニ突貫被切落候腕ヲ抱ヘ藏ノ扉ヲ開出此趣御聞被遊御感心ノ餘御抱被遊度旨被　仰付候得共圖書ハ差上不申其悴利助モ浪人ニテ相果利助悴四郎右衛門ハ町同心相勤候

山本十大夫茂房 勘助茂春長男 圖書正春兄 生國三河

幼年之節従　權現様越後少將忠輝卿へ御付被遊相勤年月日不知　南龍院様へ被　召出知行八百石被下置候 御役儀不知

正保四丁亥年五月晦日病死仕候 于時六十一歳

茂房總領九右衛門茂寫寛永十七辰年部屋住ニテ二十五石ニ被　召出正保四亥年父十大夫跡目知行八百石之内五百石被下殘リ三百石ハ弟彦右衛門 茂房二男ナリ 被下置延享四辰年八月病死總領彌兵衛茂則跡目二百五十石相續間モナク病死總領八郎右衛門茂明跡目十人扶持相續正徳六申年二十石御小姓ニテ　有徳院様御供ニテ公儀へ被　召出

茂房次男彦右衛門茂門父十大夫知行之内分知三百石被下新規被　召出代々相續四代目彦右衛門延享二丑年五月百石大御番ニテ不心得ニ付追放家斷絶

一茂房四男彌三郎輝達寛文元丑年新規被　召出御切米四十石被下子孫相續天保七申年比山本五郎左衛門茂昌家ナリ

一茂房五男才兵衛昌貞病身ニ付在中ニ罷在候處　南龍院様ヨリ有田郡北湊砂濱被下子孫相續北濱地士山本才兵衛貞昌家ナリ

茂房三男ヲ勘十郎ト云早世ナリ

一九右衛門茂寫二男善右衛門茂村 初彦次郎 寛文五巳年正月新規被　召出大小姓二十五石ヨリ御供番二百石ニ進ミ以來分家ニテ嫡家相續善右衛門茂村ヨリ四代權左衛門義厚三百五十石御手弓頭ニテ

天保七申年八月隱居總領大輔道茂へ家督三百石被下寄合被　仰付タリ

山本六右衛門良重　彌三郎茂成三男彌兵衛重晴男 實ハ長五郎　生國三河

權現樣へ奉仕知行二百石被下後　南龍院樣へ御附被遣元和己未年御國替之節紀州へ御供仕追テ御加增被　仰付高三百石被下　御役儀不知　明曆三丁酉年正月廿八日病死

總領六右衛門茂元父之家督高三百石被下御小姓組被　仰付以下代々相續六代吉左衛門高敎ハ寛政四子年之比御切米二十五石大御番タリ

山本次郎五郎正命　山本九郎右衛門正則ノ孫同次郎五郎善正養子 實伊藤所左衛門次男　初名不知

家譜ヲ按スルニ祖父九郎右衛門正則ハ山本半右衛門正元長男（日次郎三郎）ニテ元和六戊年部屋住ニテ被　召出御切米三十石大御番被　仰付寛永十三子年六月病死總領次郎五郎善正父之跡目三十石無相違相續大御番後十石御加增被下寛文四辰年八月病死

次郎五郎正命寛文四辰年九月養父跡目御切米四十石無相違被下大御番被　仰付其名ヲモ次郎五郎ト御附被遣天和元酉年十二月廿五日　中將樣中之間番被仰付支度次第江戸へ可罷下旨被　仰付後大小姓被　仰付元祿十五午年六月右庫御目付被　仰付寶永三戌年六月十四日病死ス

正命總領勘五郎正疇寶永三戌年八月父跡目十人扶持被下童子組被　仰付享保二酉年九月中之間番御扶持方ヲ御切米廿五石ニ御直シ被下寶曆八寅年十二月病氣依願御役　御免同九卯年九月六十二歳ニテ病死以下代々相續六代九郎左衛門正務ハ御切米貳拾五石中奧御番ニテ享保元酉年七月病死三男松三郎正純家ヲ嗣ク

一山本勘五郎　清溪公桑名御渡海之時剛勇ノ事牧笛類叢ニ左之一節ヲ載ス同公之譜既ニ之ヲ揭ケリ家譜ニ據ルニ勘五郎正備ハ寛永三年父之跡目相續此時僅ニ拾三歳故ニ御扶持方ヲ賜リ童子組ニ入且ツ寛永三年ハ　深覺公之御代ナリ他ニ勘五郎ト稱スルモノナシ察スルニ次郎五郎正令之事ナルヘシ次郎五郎ハ終身　清溪公ニ奉仕シ　公之薨去ニ後ルヽ一年ニシテ歿ス家譜初名不知トシ又名ヲモ次郎五郎ト御附被遊云々ニヨレハ或ハ始メ勘五郎ト稱セシヲ跡目之時養父之名ヲ襲稱セシメ給フナランカサレハ自然勘五郎ノ稱世間ニ傳ヘ多クシテ牧笛類叢亦勘五郎トナセシモノカ兎ニ角事實ニ於テ勘五郎正備之事トハナシ難キヲ以テ今專正次郎五郎正令ノ傳トナス

一牧笛類叢に曰く　清溪院様桑名御渡海之時海中にして逆風俄に起て御供船四方に散亂す山本勘五郎は尾州様より御馳走の御船大野丸に乘組たりしが陰雲四面にたち掩ひ逆浪飄々として船中の人々皆々醉ふしぬ元來此大野丸は金壁畫障美を盡したる御船なるに風浪の烈しきに不堪して消金の丹青こと〴〵く破れ損しぬ船のはしる音櫓櫂の碎る音風濤に混して響しく尾州の御船頭岩田七左衛門は剛勢の士にてさばかりの風波をものゝ數とせす水主楫取を叩廻し勇んで大風雨に[illegible]て働ともすこしも進まずかへつて御船殆んどあやうく術も盡候にや楫を直さんとする故勘五郎をどろき立上りて七左衛門に向ひて只今楫を直さるゝはいかなる事にやと問ふ答て先刻より御覽のとほり風波を乘ぬけんと千變萬化すれども少しも進ます御船猶危うければ此上は各方の無事をはかるより外なければ船をあとへ戻し便よき所にかゝらんと楫を直すなりといふ勘五郎また問ふ　紀伊殿の御船は乘戻るや七左衛門云ふの通りに四方くもりて咫尺の間も見へざれは御船の事は不知といふその時勘五郎色を正していふやう中に及ばぬことなれども士の習なれば主君のゆくへをも知らず船を乘り戻して命助かりたればとて生甲斐あるへからずたゝ何國迄も　紀伊殿之船のある所までこきゆきかなはざる時は沈沒するまでなり此御船に乘組たる侍輩とも誰か一人殘りて身を全ふする者あるべからず左あれば此楫にて御船を進め給へといふ七左衛門答て仰の通り尤至極なれとも野夫もまた主命なり　紀州之御家中海上無恙送屆よと尾張殿の命なりかゝる逆風をさけず此楫を不直時は甚以危し尚一

雖あるときは拙者また主君の命にたかふゆへいか様に申さるゝといふとも跡へ船を戻すより外の事なしといひてかたく諸にざれば勘五郎顔色をやはらげ貴所のいはるゝ所至極尤の事なりしかれども拙夫が心底には可申事もあれども傍輩も數多の中にて野夫一人申出べき事にあらず暫く楫を此まゝにて指おき給はれといひ捨て船に醉臥たる面々へ自分之存念と七左衛門了簡とをいひ聞けるにいつれも一同して跡へは戻るべからずと一決するゆへ勘五郎また七左衛門に對して貴殿の御了簡傍輩共へ申聞せ候に御申の趣據なくいつれも存れとも主君の船をすて跡へ戻ては各一分不相立然とも貴殿も主命に背かたしとの義なれば兎角を不被申去なから拙者ともは最前申たる通の義なれは此所を了簡あられ給るまじきや傍輩とも一同の心底如此といふ七左衛門かつて耳にも聞入れず是非楫を直さんと立さわぐゆへ勘五郎色をかへて七左衛門か膝元に詰よつてケ様にまで再三申のぶれとも貴殿も主命の重を以てきゝ入たまはずまた野夫も一旦申出たる儀なれば楫を直されては一分不相立所詮此上は死を共にすべしと脇指の柄に手をかくれば七左衛門も尤なりとすでに刺ちがへんとする勢故尾州の下役人左右の中へ立入てまつ取さゝめ双方尤至極なり然れども爰にて刺ちかへらるゝ時は此船中の面々いつれも同死するより外なし左あるときは兩國の御人數を失ふこと勿體なし元來　紀伊様御馳走の事なれば七左衛門了簡いたされとても死することならば楫を直さず此まゝにて船をやりたとへ沈没するとも　殿の思召に可叶と存すれば理をまげて了簡あられ候へと取持ゆへ岩田も理に折れて楫を直させず水主楫取は汁の玉をなして力を盡せどもたゝ御船はをなし所にあるがごとし其間にすこし天晴風もはらかになりけるゆへなにとぞ　御召船を見とゝけんと船中各遠見すれども船一艘も見へざりしに川村藤五郎は御船櫓に上りて有りしが船には不醉とも風波つよき故御艪より下ること不叶遠見していふ様雲間遙に船一艘はるか向ふに見ゆる長刀の様なるものありもし御船にはあらずやと罵るゆへ勘五郎七左衛門とも〳〵見るになるほど御長刀の様なるもの見ゆれは大に力を得て乗付んとすれども御船中々すゝまず勘五郎また七左衛門に向ふてあの船に長刀見ゆれば紀伊殿御船かきたけ家老どもの船なるべければ何とぞあの船へ參りたし然れども御船は大船故風に向ふてはすゝまず端舟に達者なる水主をそへ給はれ乗りゆきて見とゞけべしといふ七左衛門此舟に端舟はなしといふケほどの大船に端舟可無之哉御隠したくとも出し給はれといふ七左衛門答て尤の事なれどもあの風浪のあらき所へ小船にてゆかんことかなふべきにあらず今少し風和たらば漕つけんといふ勘五郎またいはく向の船若し　紀伊殿の乗船ならんには風浪あらければとて見て可居ことにあらず流没せば夫までの事也傍輩共も罷在れば貴殿の難義には致すべからず據なく同心して端舟に水主兩人乗せて木船より下したり風ます〳〵荒く浪怒りてゆり上げゆり下したる有様見るに眩く七左衛門指さしてあの通りなり勘五郎わらふてたとへ危ければとて乗らでそのまゝ

あらんやさ身繕ひして舟ばたに出て濵にて端舟をゆり上たるさき輕らかにさび乘り漕切らせて件の舟へ近寄て見れば御船にはあらずして御家老朝比奈氏の船なりけり五郎案内して後舟に乘り移りける朝比奈は先ほどより此船の危きさまを見てさて〳〵危き所をよく參りたるさのことなり勘五郎は先刻より七左衛門さ問答したるをもむき逐一いひ述てさて御船ハ御座所御存知ありやさいふ朝比奈答てその事にて候先刻より此方にても色々穿鑿すれども御座相わからす白子へ御上り候さも申由何卒はやく御安座の御樣體を承知いたしたき事に候さて御船頭をよひ此邊に船のよるべき所はなきかさ尋るに則此前にハセ出し浦さ申所あるよし答るゆへ朝比奈氏勘五郎へその許今日のふるまひ感し入候しかし此風波にては船にて追付來ることさ中々叶ふべからず其上夜に入たれば方外に存し付も無之近頃太儀なる事なれども其許これよりかの馳出浦へ上り早かけにて白子へゆかれなば御樣子は知れ申べし其上にて早々注進せられよさあるゆへ畏さ申てまた彼小船に乘りうつり汀へ漕近付陸の方を見れは火の光うす〳〵見へ人の首ばかりをほく見へたり則陸に上れば人をほく出迎ふ相伴はれてゆくに向ふは砂堆き丘なりそこをこゆれば松明提灯彩數人群をなせりその所の役人さおぼしきもの出迎たるゆへ右の次第をかたり白子へ早駈の事を賴む役人さもうへなひ月毛の馬の駿足なるを出し案内者數拾人提灯松明にておくらんさすこの浦は藤堂大學頭殿の領分にて往昔御渡海雖風の節此所より御上り被遊たることありし故兼て藤堂家より役人を出され手當を申付られをかるゝ由、且またそのせつ拜領もの致したる者の子孫のよしにて多く姓名を記て相渡すものあり勘五郎送りの人數を固辭して達者なる案内者三人をめし連れ件の馬に打乘て暫時に白子へ馳付たりその道程三里なり白子には只今　殿樣御殿へ被入たる處へ參り御用達山田傳兵衛にあひ右之次第を語りて御安座之御樣體早速に朝比奈へ申傳せんさいへば傳兵衛留めて表向に御人一人も無之御番出來申さず故近來太儀ながら直に御番いたさるべし朝比奈は此方より早飛脚にて御安座之御樣子申つかわすべしさのことにて其儘宿直せり勘五郎如此風波喧噪の中七左衛門さ大音にて問答したる故二三日の間聲かれたりさぞ

家譜

山本正國　平兵衛

山本正國　父曰吉良平六郎國廣、世住三河吉良、正國爲大須賀康高部下、屢有戰功、後屬公、爲安藤直次部下、賜祿貳百石、移住田邊、寛永六年歿、年八十、　山本系譜

山本平兵衛正國　吉良上總太郎長氏拾代 平六郎國廣總領初平(六)一十太　生國三河

三州吉良之庄ニ代々浪士ニテ罷在候處遠州森之城主大須賀五郎左衛門康高ニ附屬知行百五十石所務仕數度出陣仕候處吉良之筋目モ有之故ヲ以テ段々御取立康高甥大須賀(五六右衛門)一十五六五右衛門女ト緣組被仰付息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二未年國千代ヲ榊原家爲相續上州舘林へ被遣候節　權現樣思召ヲ以テ横須賀黨過半御留置被爲遊此者共ハ度々骨折候故御秘藏ニ被爲　思召候得共被爲進候トノ　上意ニテ元和二辰年　南龍院樣へ被爲附安藤帶刀直次相備被　仰付居成ニ遠州横須賀ニ住居同所ヨリ駿河御城番相勤元和五未年八月十八日　南龍院樣紀州へ御入國之御供仕知行御加增二百石ニ被　仰付候

一同年　南龍院樣御意被遊候由ニテ安藤帶刀横須賀一統へ申聞候ハ御國之內田邊ハ大事之要地ニテ候間横須賀ヨリ參候諸士之內小身者ヲ遣シ置候樣ニトノ御事ニ候然レドモ御人指ハ無之候間鬮取ニテ相究メ可然彼地ハ草深キ處故馬ヲ飼ヒ候ニ便能又殺生等自由ニ候罷越テ鹿狩ニテモ氣儘ニ致シ活計候樣ニトノ義ニ付則チ鬮取仕候處鬮ニ相當リ候付田邊へ罷越同所ニ居住仕寛永六巳年十二月三日八十歳ニテ病死仕候

總領平兵衛初金大夫正成父跡目無相違被下以下代々二百石田邊與力ニテ相續七代平兵衛正心安政三辰年九月田邊與力一同同所退去之節共ニ退去文久三亥年三月歸參御切米四十石小十人小普請松坂御城番被　仰付タリ

山本宗庵

山本宗庵 實名不知 生國相模

家譜

元北條家ニ附屬同家滅亡後　權現樣へ被　召出御前詰御伽被　仰付其後御人分ノ節　南龍院樣へ御附被遊紀州へ御供仕坊主相勤年月日不知病死

總領喜庵跡目相續五代甚八邦孝ニ至リ士席ニ列シ六代甚十郎尚演ハ御切米二十石御留守居物頭格中奧詰二十五石高ニテ文政三辰年六月七日病死總領爲之助尚義嗣ク

山本某

牧笛類叢ニ左之記事アリ　山本一家之家譜ヲ按スルニ西條家御附屬トナリ且ツ死歿之年月等イツレモ是ト認ムヘキ符合ノモノナシ固ヨリ山本理左衞門一家之內ニモ見ヘズ原書既ニ其名ヲ失スレバ其誰タルヲ今考ヘカタキ無論トイヘトモ空シク放棄ニモ付シカタケレバ暫ク爰ニ附記シ後ノ參考ニ供ス

源性院樣御家來山本某江戶ニテ御使ニ出タリシ折節雨天ニテ有シニ御旗本ノ子息若黨壹人ト乳母付添テ遊ヒ居タリシガ山本其前近ク過ルトテ馬之蹴上タル泥水ソノ子供ニカヽリ山本ハ何ノ心モツカズ乘過ルニ彼乳母若黨ニ向ヒソノ方ハ不甲斐ナキ男カナ眼前若殿ニ泥水ヲアブセラレ其儘ニ居ルカト恥シムル若黨此一言ニ迷惑シテ山本ニ追付詞ヲカクル山本少シモ擬氣セス馬ヨリ飛下リ挨合セテ切結フ件之若黨ハ流石イヤシキ者ナレバ初之詞ニハ不似合迯出シテ人家ノ雪隱之中ヘカクレタリ山本スカサス雪隱ニ入テ中取シテ刺殺ス山本ハ（此之間三字缺）公儀へ被召捕切腹被　仰付タリ　源性院樣甚御惜ミ被成山本理左衞門へ參リテ介錯致シ遣ハセトノ御事ニテ理左衞門介錯シテ潔ク切腹ス此山本カ戒名ヲ勇猛院ト附シカ紀州菩提所ニテモ同名ヲ附タリ自然符合セシモ珍ラシキ事也

山田八右衛門正長

山田正長 彌作後改八右衛門〇按駿河分限帳、在御歩行頭衆之列、祿七百石、

山田正長、父曰但馬守某、仕清康公、爲三河碧海郡筒針村城主、正長仕東照公、爲小姓、賜祿四百石、後屬公、屢增祿至七百石、寛文三年歿、 山田系譜

家譜

山田八右衛門正長 山田但馬守初八藏男 初彌作 隱居後休心 生國三河

但馬守實名不知遠祖之義代々尾州山田郡傳領罷在候處寛正年中故有テ參州へ引移申候右但馬守實名不知義年月日不知於參州安祥 清康樣へ奉仕同國碧海郡志貴庄筒針村之城主ニテ罷在候由申傳候得共舊記無御座委儀相知不申候

一遠祖之内公方義正ヨリ感狀幷褒賞賜候由申傳候得共舊記無御座委義相知不申候得共右感狀先祖ヨリ所持仕罷在候

一年月日不知 權現樣御小姓被 仰付相勤申候

一天正十九辛卯年五月三日武州燒邊之內（一本於村）久米川內二百石之御朱印頂戴所持仕罷在候御朱印頂戴所持仕罷在候御朱印之寫

武藏國燒邊之內（一本於村）久米川之內二百石 出置者也

仍如件

天正十九年辛卯五月三日 御朱印

山田彌作とのへ

一慶長二丁酉年九月日不知　總州小金鄕內ニテ二百石之御證文頂戴所持仕罷在候

御證文之寫

下總國小金鄕內貳百石之事

右所宛行不可有相違者守此旨可抽忠信之狀如件

慶長貳丁酉九月吉日

山田彌作とのへ

一慶長十七壬子年月日不知　南龍院樣へ被爲附候其節何御役相勤罷在候との儀記錄留欠にて不詳候得共元和二丙辰八月廿日駿州興國寺柳澤村內同山東瀨名村內遠州相良くろお村同堀內村右四ヶ村にて知行四百石被下置候との　御目錄頂戴所持仕罷在候

一元和五己未年八月　御入國之節御供仕紀州へ罷越申候

一同六庚申年八月御加增被下置都合知行七百石被下置候

一正保二乙酉年月日不知奉願隱居被　仰付願之品に付總領彥左衞門へ爲家督知行七百石之內五百石被下置殘高二百石次男長右衞門へ被下置別家被　仰付候是迄總領彥左衞門へ被下置候御切米二十五石は爲隱居料八右衞門へ被下置候

一寛文三癸卯年二月八日病死仕候　于時八十四歲

台德院樣御文之寫

竹子代

疱瘡付て
細々湯川の心
かゑ志斗なく
拵ん志候
以よ〱ほ念して
昨日十一日ふゆ状
かゝりやう候
委事ハ
ふんゑ懸向〔湯か〕宮
申上まいらせ候
志かせも
かう志んかうれ
湯くもり
被下候
かたし斗な記
よし能々あひ
心得可か以らん申まいらせ候
かしこ

むて　忠

參る

れなゑ

右ちやは誰母妻との儀難相分候得共先祖より右御文所持罷在候

按に右御文の文讀下し難き所あり傳寫の誤りならんか

一御繪草書之梅　壹枚

右者　何方樣御筆ニテ誰拜領仕候トノ儀不詳候得共先祖之內拜領仕候由申傳候テ所持仕罷在候

彥左衛門成正後彌作ト稱シ三代目八右衛門正知以下代々八右衛門ト稱シ八代八右衛門正彬三百五十石御小姓組頭格ニテ文政十一子年十月病死總領彌作正楠相續ス

一正長次男長右衛門成勝分家貳百石ニ被　召出相續之處三代目長右衛門病死嗣子無之家斷絕ス

山田作兵衛

山田作兵衛方厚　代々駿州田中之鄕士 生國駿河

家　譜

慶長年中　權現樣へ被　召出御鳥見役被　仰付御切米三拾俵貳人扶持被下置年月日不知　南龍院樣へ御附被遊元和五未八月御入國之節御供仕紀州へ罷越正保四亥年御切米拾石五斗被下慶安元子年七月二日七十七歲ニテ病死

長男平十郎厚政分家被　召出以下代々御鳥見相勤四代柳左衛門方義士席ニ列シ七代平十郎（初金兵衛）方秀御城代與力ニテ文化五辰年五月十二日病死總領柳左衛門方照相續ス

山田所左衛門

山田所左衛門
同　雄次郎

家　譜

山田所左衛門（實名不知）（代々駿河國清水ニ住居生國駿河）

慶長十六辛亥年於駿河　權現様へ被召出高井助兵衛組下ニテ相勤同十九甲寅年大坂御陣御供仕伏見ニ相詰後　於万様方七人者被　仰元和二丙辰年　御他界被遊候付元結拂久能山へ御供仕同五己未年八月　南龍院様紀州へ御入國之節御供ニテ罷越寛文三癸卯年二月廿三日七十一歳ニテ病死以下代々輕御奉公相勤七代喜内久雄ハ小間使ヨリ追々昇進士席ニ列シ獨禮小普請貳拾石ニテ天保五午年八月隱居養子雄次郎久秋家督相續拾五石小十人小普請トナリ同六未年十二月朔日三十歳ニテ病死養子熊楠成孚家ヲ嗣ク

一雄次郎久秋ハ岡本源右衛門盛明之男ニテ山田喜内久雄之養子トナル久秋本居大平ノ門ニ入テ國學ヲ學ヒ和歌ヲヨクス嘗テ同門ノ加納兵部小浦惣内土岐孫次郎神前宇右衛門（松平六郎右衛門之家來ナリ）等數輩ト

一夜百首之會ヲ催セシニ兵部初或ハ百首或ハ九拾首少キモ五六拾首ノ和歌ヲ詠スルニ久秋壹人ハ終夜ニ唯左之一首ヲ詠セシノミ

春の水　岩の多乃ミもゝかもすゝ氷ぞぬし　ゐ法のしほとも落る春かな

皆々余りの事なりとひそかにうさみ合ひしかハ久秋さあらす今一會せんと請ひ又々集りてうたよみしにこたひは終夜に貳百首を詠したり是天保三辰の年十一月廿五日夜の事にて貳百首の詠草子今其家に存せりと辭世の歌に

郭公死出れ多ふ徒ふ飛もこのそ我思ぬる嘀て傳へよ

久秋養子熊楠ハ後兵右衛門ト稱ス信政府ニ在リシ時ノ同僚タリ右之話ハ兵右衛門ヨリ直チニ聞得シ儘ヲ記ス

山下茂兵衛正兼

山下正兼　茂兵衛○按駿河分限帳在御歩行頭衆之列、祿六百石、

山下正兼、祖父曰茂右衛門清行、仕織田信長、後仕東照公、父曰茂兵衛淸期、死於美濃某役、正兼亦仕東照公、賜祿三百石、後屬公、爲小姓、轉爲勘定奉行、增祿至八百石、山下系譜

茂兵衛家譜傳ハラズ按スルニ駿河ヨリ御附屬姓名帳ニ御歩行頭衆六百石山下茂兵衛（御附人ノ家筋ノ印アリ）ト記シ元和五年御切米帳摸ニハ高四百石内百石御加增山下茂兵衛トシ元和御切米終身錄ニハ高六百石山下茂兵衛天和三亥年四月病死跡目同苗岩之助ニ拾五人扶持被下トアリ依テ察スレバ御附人ニテ初四百石被下後六百石ニ進ミ病死之節相續人幼少ニテ拾五人扶持ニ減祿セシナルベシ事歷ノ詳細及ヒ子孫相續ノ如何ハ今知ルニ由ナシ

山中彦兵衛

山中彦兵衛

山中彦兵衛　實名不知　山中彦助總領元祖上總介廣重ヨリ拾代目　生國駿河

元祖山中上總介廣重ハ山中安房守式慶嫡ニテ武州新倉郡福田新倉ヲ領知則新倉ニ居城上州ニテ
有親様ニ御奉公仕總領造酒之助廣高足利左兵衛督持氏落去之後上杉民部大輔憲實之人數上州德川ヘ押寄合戰之時　有親様御父子德川ヲ御披キ被成相州藤澤之道場ヘ御引籠被成候刻上杉之人數藤澤ヘ取掛リ及合戰供奉之隨士貳拾四人於淨淸光寺門前討死仕造酒之助モ右貳拾四人之内ニ御座候

三代隼人式和造酒之助廣高總領父造酒之助討死之節亂軍ノ中ニ付　有親様御父子藤澤之道場ヲ御引退被成候儀不奉存無是非浪人仕駿州ニ罷在候處其後三州ヘ立越　親氏様ヘ御奉公　三河守様マテ相勤三州所々ノ御陣ニ御供仕候

四代彦助重完隼人式和總領　泰親様ヘ御奉公　信光様マテ相勤安祥御合戰ノ御供仕候

五代造酒之助式次彦助重完總領　信光様親忠様ヘ御奉公仕井田郷御一戰岩津御陣之御供仕候

六代作次郎重道造酒之助式次總領　長親様ヘ御奉公仕三州矢作川御合戰之御供仕信忠様淸康様迄相勤申候

七代造酒之助次延作次郎重道總領　淸康様ヘ御奉公仕野呂岡崎宇理吉田其外所々御陣ノ御供仕候

八代造酒之助初彦助造酒之助次延總領　權現様ヘ御奉公仕所々御陣之御供仕於三州牛久保一向宗一揆ヲ企御敵仕候節近藤登之助手ニテ討死仕候

九代彦助造酒之助總領父造酒之助討死之節幼稚ニテ經年罷在遠州濱松之御城ニ於テ近藤登之助取次ヲ以テ十五歳之時　權現様ヘ被　召出遠見目付被　仰付其後關ヶ原御陣之御供仕候

権現様へ御奉仕山本十郎右衛門組相勤罷在候處後　南龍院様へ御人分之節右御人數之内ニテ元和五己未年御國替之砌リ紀州へ御供仕寛永十二乙亥年二月三日病死仕候

總領助右衛門父彦兵衛跡式無相違被下父之通リ可相勤旨被　仰付後埋樋藏番相勤先祖武州福田ヲ領知ニ付當代ヨリ苗字福田ト改メ以下代々相續彦兵衛ヨリ四代目仁大夫ニ至リ士席ニ列シ彦兵衛ヨリ六代目彦兵衛淨延苗字再ヒ山中ニ復稱小十人格小十人同様勤御切米十五石高ニテ文化七午年九月四日病死總領小太郎延昇相續追テ天保十四卯年八月十日病死斷絶ス

山中作右衛門友俊

山中友俊　作右衛門初稱藤大夫〇按駿河分限帳在大番衆之列、祿五百石

嶋原役、一夜賊攻黑田忠之營、會松平信綱臣、岩上角之助尼子八郎兵衛、及友俊、巡夜焉、友俊執十字槍先進斃壹人、以示角之助曰、某壹番槍矣、岩上尼子、亦各斃壹人、以示友俊、於是友俊壹番槍之名顯、事聞江戸、偶公登柳營　諸侯皆進賀曰、公家士山中作右衛門壹番槍、可謂壯哉、公有喜色、既而公歸國、諸士出迎郊外、其赴嶋原役者、皆特有恩言、謂逸友俊、一日公臨貳城、曬旌旗、因召友俊曰、前歸藩日、汝等出迎、予偶忘汝、故言不及、今日曬烈祖所賜旌旗、故使汝拜觀也、因問嶋原役事、且曰、汝壹番槍乎深喜之、友俊曰、臣與角之助共進、無前後也、公曰、汝先角之助而進、非壹番槍乎、友俊猶辨之、公曰、汝不當時呼曰壹番乎、後公又謂左右曰、作右衛門徒爲謙讓者、彼自呼曰壹番槍、是其明證也、　南龍公言行錄

按舊記、友俊父曰山城守長俊、仕豐臣秀吉、爲右筆、嘗奉命著太平記及中古日本治亂記（摽中古日本治亂記自序）友作ー什福田常眞、常眞歿後、公召祿之、

山中作右衛門友俊 山中山城守長俊三男隱居後道興（生國近江）一本ナシ 篤之助信吉附

祖父橘内忠俊迄江州甲賀ニ住シ代々佐々木家ニ仕ヘ戰功有之同家離散後暫ク柴田勝家ニ仕ヘ戰功有リ父山城守長俊ハ太閤秀吉ニ仕ヘ文道之名有之於河内國八千五百石ヲ領知ス山崎合戰柳瀬合戰兩度共武功有小田原陣之節計ヲ以大功ヲ立テ秀吉之爲近習天下之政事軍中之成敗ヲ執行慶長十二丁未年十二月廿四日病死

作右衛門友俊若年之節織田常信ニ仕ヘ十六歳ニテ元服初テ遠侍ヘ着座之時同家中壹人傍輩ヲ打留門外ヘ出者有友俊脇差計ニテ追掛門外ニテ切留ル此事主人信雄賞美有之候由無程暇ヲ乞受浪人罷在候

一寛永七午年月日不知 南龍院様ヘ被 召出御切米百貳拾石被下置御役不知 同十三子年月日不知 知行三百石被成下候

一寛永十五寅年嶋原一揆之節松平伊豆守殿ヘノ御使被 仰付彼地ヘ罷候處於同所軍功有之伊豆守殿御賞美不斜紀州ヘ罷歸候後同十七辰年月日不知 右武功之段御賞美不斜依之一倍之御加増被下置知行六百石被 仰付御先乘被 仰付候

一正保四亥年十一月日不知 御改易被 仰付候

一承應元辰年月日不知歸參被 仰付知行六百石被下置候

右浪人中忠勤之家來木下彦大夫長谷川伊右衛門石松兵右衛門三人爲規摸百石充之黃金被下置倍臣之可爲騎馬諸事無役トノ蒙 仰候右木下彦大夫子孫斷絶仕成行不詳外兩人ハ被 召出御奉公

仕長谷川伊右衛門子孫當時長谷川大藏家石松兵右衛門子孫當時石松左内家ニテ御座候

一年月日不知御鎗奉行被　仰付寛文四辰年（月日不知）存念申上候儀有之御役儀差上剃髮仕江戸ニ罷在同十二子年五月十一日年寄病氣ニ有之男子無之ニ付願之上笹本太郎作ヲ養子被　仰付同年八月十八日七拾四歳ニテ病死仕候

養子太郎作（後作右衛門）俊淸儀養父道與　南龍院樣別テ御懇被　思召候付道與跡式無相違被下召仕三人之モノニ其身一代只今迄之通リ御金被下置候旨被　仰付以後御小姓頭御用達御用役大御番頭等之要職ニ歷任千四百石ニ御加增以下代々重ク被　召仕五代作右衛門俊誘御加增千七百石ニ御家老被　仰付六代作右衛門俊信ハ文化十二亥年六月御家老加判ノ列御側御用人兼帶逢ニ諸大夫被　仰付筑後守ト稱シ二千五百石ニ御加增之處天保五午年正月十二日　公邊ヨリ御內々御沙汰之品有之御役　御免隱居愼ミ被　仰付然ルニ間モナク同年九月　公邊御趣意ニ有之旨ニテ愼ミ御免其十二月ニ至リ年來精勤之趣モ有之旨ニテ加判之列同樣勤被　仰付御合力米八百俵被下前後政府ニアル事三十余年權勢一門ニ蔓リ所謂門前市ヲナスノ類ニテ安水兩大夫ト雖モ殆ト口ヲ箝スルニ至リシガ嘉永五子年九月廿九日病死嫡子熊之亟（後作右衛門）俊德ハ大寄合三千石高御用人兼務之處嘉永六丑年五月十日兼々不愼之品ニテ隱居知行貳千七百石之內五百石被　召上嫡子熊太郞ハ小普請入屹度愼ミニ成猶同月十六日亡父筑後守存生之內品々如何敷品有之其上不輕奸計ノ品及露顯候付知行之內千二百石被　召上逼塞愼被　仰付一門皆罸ヲ蒙ル是　舜恭公薨セラレシヨリ僅ニ五六月水野大夫威權方ニ盛ナルノ時ナリ山中筑後守ト山高石見守ト互ニ權ヲ競ヒ黜陟

常ナカリシ事ハ　顯龍公譜ニ詳ナリ作右衛門後徳嫡子熊太郎後殿居　俊章父及ヒ祖父之罸ニヨリ
千石ニ減祿慶應二寅年御持筒頭ニテ藝州ヘ出陣中於　御本陣不容易擧動不心得之至トノ旨ヲ以
知行之内五百石被　召上刑小普請被　仰付慶應四辰年六月隱居養子敬太郎後韶門百石虎之間席
並銃隊ニ被　仰付タリ

一紀士維誠ニ曰ク　山中作右衛門初メ織田常眞老ニ罷在候時或日足輕體之者（河瀨六左衛門）不屆有之馬手方ニテ成敗被申付候ヲ打損シ遁出已ニ門前ヘカケ出候處ニ作右衛門支關ノ番ニテ是ヲ見テ遁サヌト聲ヲ掛ケ刀ヲモ不取得即飛出門外ニテ大脇差ヲ以テ果シ合切留申候彼者倒レナカラ刀ニテ拂ヒ申候作右衛門左之キビスニ其疵付有之候同座之番之士共刀ヲ取候トキ少シ遲ハリ手ニ合ヒ不申候作右衛門首尾無殘處候紀州ヘ被　召出候時モ申立ニ成リ候由ニテ前田五左衛門ト申モノ此節傍輩モ後ニ堀丹後守殿ニ居申候右之通リ物語ナリ
水谷久大夫打損候付岡田伊兵衛深手負支關ニ居合候モノ古川長介伊川助右衛門（此時ノ名吉内）

一又曰　山中作右衛門九州ニテ之働人々申廣タル事ニ候處畔柳竟春申候ハ拙者ハ左程ニ不存候戰場ハ此方ヨリ仕掛ケタルヲ働ト可申候返答之手ヲフサカスハ逃ルニコソト申候由

一又曰　紀州黑澤ニテ御鹿狩之節栢木與五左衛門勢子杖ニテ下知仕候處（栢木ハ丹後守支配ニテ御船手與力ナリ即丹後守勢ナリ）山中作右衛門家ニカヽリ居候牢人（名不知）其傍ニ居候テ下知不用候ヲ輕キモノト心得杖ヲフリ叱候トテ浪人之肩ヘ杖當申候扨御狩濟候テ浪人山路之峽ニ待ブセ栢木ヲヤリ過シ背ヲ一刀切引返シ果合彼ノ浪人ヲ切留脇差ヲ拭候處ニ作右衛門壹人來掛リ我處之浪人切倒サレタルヲ見テ何ノ詞モナク拔合切結ヒ候（作右衛門此時坐乘ナリ）栢木ハ若成達者モノニテ山中切立ラレ既ニ上目釘拔大脇差之躬ハシリ已ニ危ク候處ヘ渡邊六郎左衛門（御目付ナリ）有無之詞モナク横合ヨリ栢木カ頭ヲ半分程割付即倒レ死申候兩人共ニ栢木ヲ又者ト心得候ナリ三人共ニ大脇差ニテノ事ナリ作右衛門深手ニテフイラフイラト仕候得トモ栢木カ死骸ヲ引寄モラヒ目釘ハシリタル柄計ニテトヽメ指候體老功神妙成儀ト申候扨山中儀ハ澤美六郎右衛門ニ御預ケ御詮儀之上切腹ニ極ヌ（面々數ケ所深手負御預ケ之内療養平癒イタシ候ヨシ）候處ニ牧野兵庫頭再三申上候ハ山中ハ頭役栢木ハ輕キモノナリ其上最早壹人ヲ殺タル事ニ候ヘハ山中ト相手向ニハ立ガタク候此旨上ニ御承引無御座候ヘハ其身御暇可申上樣子ニテ事未決之御沙汰ノ内此度之義切腹ヲモ可被　仰付候ヘトモ嶋原之節　上聞ニモ達シ候モノヽ義ニ付一命御助之由ニテ御改易被　仰付候

此節加納五郎左衛門ハ山中御助ケ被成候テハ政法立不申候兎角切腹被　仰付兵庫御暇申上候ハヽ其通ニ被遣可然旨過言カマシ
ク被申上候付サンザン御叱ニテ河上荒川邊ニ百日計引込居被申候由此度山中義内縁ヲ以テ一命之事ヲ兵庫殿へ何トヤランス
ガリ申候兼テ似合不申ト下々ニテ批判有之由

渡邊六郎左衛門助太刀仕不調法ナル仕合之由淡路守殿へ密ニ申達シ候得バ左様之義ハタマリ居候物ナリト大キニ叱被申候ト
ナリ

一南陽語叢ニ曰ク　山中作右衛門家ハ元來江州士ニテ淺井之旗下タリシガ蟄居シテ在ケルヲ被　召出タリ其時日那寺西教寺ト
イフニ暇乞ニ至テ明智左馬介カ奉納セシ白練ニ雲龍畫シ羽織ニノ谷之冑ヲ住僧ヨリモラヒ受ケテ御國ヘ持參セシナリ

信按スルニ　作右衛門友俊一ノ谷之兜ヲ坂本之西教寺ヨリ貰リ受ケ紀州ヘ持參後傳來之詳細等字佐美竹隱ガ筆記アリ該冑及
ヒ筆記共今　御家ニ傳ハリ寶庫ニ存ス

一又曰ク　寛永十五年嶋原ノ賊征伐之砌二月廿一日夜ノ事ナルカ黒田左衛門佐忠之陣ヘ城ヨリ夜討ヲ懸ル今夜廻リ番ハ松平伊豆
守内岩上角之助尼子八郎兵衛紀州使番山中作右衛門也則廻リ合セ候處賊多勢柵ヲ破ラントス(飢ノマヽ)人共皆崩逃ル三人立コタヘ柵
ヲフミ破リ一揆トモヲ追込山中ハ壹番ニ鑓ヲ合セ手負申候岩上尼子ハ注進之爲引退黒田衆入替ルト云々

按スルニ　原書世間ノ沙汰ニ夜討ニ鑓ト云事ハナキ法也ト評セシヲ以テ或人水野日向守勝成ニ質セシニ勝成一々例證ヲ挙ケ
作右衛門カ鑓夜討ナレバ鑓ニ不成トハ不吟味ノ沙汰也ト駁シタル由ヲ記セリ爰ニ要ナキヲ以テ之ヲ略ス

山中篤之助信古　筑後守俊信二男

天保九戊戌年四月廿八日父筑後守兼々格別出精相勤候品モ有之付別段之　思召ヲ以中奥勤中奥頭
役打込　御名代御使等相勤ヘク旨被　仰付其後追々昇進遂ニ一家ヲ起シ樞要ノ職ニ歴任慶應四年
ノ比ハ大廣間席タリ此人夙ニ本草學ヲ修シ小原八三郎桃洞ノ門ニ入リ深ク講窮スル處アリ南紀最
モ蚌蛤ニ富メルヲ以テ之ヲ和漢ノ書ニ考ヘ又見聞實驗ニ資シ其數百種ヲ蒐集慶應三丁卯年南海包
譜一卷ヲ著シテ獻ス蛤譜ノ撰實ニ之ヲ初トス夫レ本藩ニ在テ本草學ニ明カナルハ享保ノ度松坂ノ
丹羽正伯後小原八三郎坂本浩然上辻邦彦及ヒ此信古ノミナリ

山川新五右衛門

山川新五右衛門吉正　山川惣右衛門吉則實子　生國三河

家譜

權現樣御代父惣右衛門爲家督知行百五十石被下置後大須賀出羽守忠吉組付被　仰付息國千代忠次代迄罷在候處慶長十二未年國千代榊原家爲繼跡上州舘林へ被遣候節　權現樣思召ヲ以テ横須賀黨御留置　上意ニテ　南龍院樣へ被爲附安藤帶刀相備被　仰付後御入國御供五十石御加增高二百石被仰付鬮取ニテ田邊へ移住等都テ山本平兵衛正國ノ通リ也畧ス萬治二亥年七月十七日病死

二男新五左衛門始八大夫吉次へ跡目無相違被下以下代々二百石田邊與力ニテ相續八代新五右衛門公儔安政三辰年九月田邊與力一同退去ノ節共ニ退去万延元申年七月病死養子恒次郎正一文久三亥年四月歸參御切米四十石小十人小普請松坂御城番被　仰付タリ

山崎長九郎

山崎長九郎正親　太兵衛正淸實子總領

家譜

父太兵衛正淸於三河　權現樣へ被　召出御奉公仕候

慶長五子年十六歲ヨリ　權現樣へ御奉公御鳥見役相勤勤役中御直書ニテ御鷹場之御書付御下ケ被遊所持仕候御他界之後從　台德院樣南龍院樣へ御附被遊元和五未年御國替之節紀州へ御供仕現米二十石三人扶持被下御鳥見役相勤寬永二十未年六月廿一日五拾九歲ニテ病死

總領長久郎部屋住ヨリ御鳥見相勤以下代々相續九代孫三郎祇吉二十五石大御番ニテ文政七申年四月病死養子門之丞倘利名跡被　仰付タリ

藪三左衛門正利

藪正則 三左衛門○按駿河分限帳在寄合衆之列、祿二千石、

藪正利内匠頭正照、初忠綱第三子也、祖父曰伊賀守某、仕織田信長、死於長嶋役、正照初仕中村一氏、食一萬石、後去仕細川忠興、食一萬二千石、正照嘗擇壯士十七人養之、常以自從焉、及其將終、請忠興、以其祿配分十七人、而養之、不傳之子孫、忠興如其請、正照有六子、皆別開家、正利亦仕忠興、食一本二千石千石、爲番頭、後有故辭去仕公、慶安貳年歿、年五拾五藪氏系譜 大坂役、細川忠興使子忠利率兵、以藪正照爲總督、從陸路進、自率手兵貳千從海路進、及凱戰之日進次天王寺、謂左右曰、今日縱汝等挺進、宜奮戰立功、衆大喜、爭先而出、時正利年甫廿一、稱新太郎、此役也忠興賜紫保侶乃蒙而出開忠興斯令叱咤而進、直踰先隊躍入敵軍、大聲呼曰、細川越中守臣藪新太郎、敵人曰、是其内匠頭之子乎、曰然、言未終、奮然提槍而進、縱壹人斬之、乃還獻其首級、忠興喜與共謁東照公、人皆壯之、

關原役、中村一氏臥病、自謂天下將大亂矣、而病漸加、家之存亡未可知、顧今天下、可倚賴者獨有德川內府、群臣誰能見德川公陳說我心事者、既而自謂、藪内匠其人也、乃遣之、正照既至、見曰、寡君、式部少輔、使臣謹陳其情、曰某受豐臣氏恩以至今日、是殿下所知、其嘗無禮於殿下、則各爲其主、義不得已者、幸恕之、賤息一學猶幼、未辨東西、今某又病、命迫旦夕、弊家存亡、唯在殿下矣、若夫某精誠無二則明如日而已、東照公領而遣之、正照尋馳還復命、後正照既老、謂人曰、予攻山中城先登、中村公深賞之、加賜

三千石、然以予思之、中村公之病也、使江戸謁内府、陳其心情、當日苦心、是予一世之功也、

關原役、中村一氏病、使弟一榮（彦右衛門）代統軍、正照從焉、請先鋒、細川福島諸將謂曰、先鋒既任池田福島二氏矣、慰諭遣之、正照堅座不動、謂諸將曰、式部雖病乎、群臣從故太閤時、從式部任先鋒者昔在而今不允斯請、深以爲憾、明日之戰、固期一死、或後軍法未可知、敢豫陳之、意色甚壯、於是諸將相議、命中村氏爲先鋒、正照拜舞而出、後去中村氏寓京師、細川忠興竊召之、賜祿貳萬石、

渡邊吉光（勘兵衛）初與正照同仕中村氏、將去出京郊外使人謂正照曰、某有故將去公家、願告別而行、幸來見於此、正照乃往見、吉光馬上揮薙刀脫室揖曰、某今將去公家、無一言而別、非武夫本志、然無友可告別者、獨有卿耳、故煩玉趾、願以此爲贈、因授其薙刀、正照意色壯勇、直進受之曰、某亦以此爲酬、乃脫腰刀、擲及而進之、吉光謝其意之厚、乃相視而別、世以爲亂世奇事云、（以上四條、皆[illegible]獨[illegible]正照事功雖不關於我[illegible]、因據正照事、併及其父、）

家　譜

藪三左衛門正利（藪内匠頭正照三男　初新太郎　生國肥州）

祖父伊賀守ハ織田家ニ仕ヘ於勢州長島打死仕父内匠頭正照始中村式部少輔一氏ニ仕ヘ一萬石給リ度々軍功有之内天正十八寅年豆州箱根并泉州岸和田城責之節且慶長五子年關ヶ原御陣之節ニモ於（一〇）〔大〕楯表就中高名有之候其後有故テ中村家ヲ立退其節武功之士十七人召連豐州へ罷越細川越中守忠興ニ仕ヘ一萬二千石給之右十七人之士モ手前ニ扶助致置候處末期願ニ依十七人之者共新規ニ同家へ被呼出正照知行ヲ右之輩へ配當被申付候

正照總領大隅二男圖書五男市正共部屋住ニテ同家へ被呼出知行二千石ツヽ給リ罷在候付正照

遺跡ハ相續不仕候

三左衛門正利始細川家ニ仕二千石給リ番頭役相勤慶長貳拾卯年大坂御陣之節五月七日於天王寺當手壹番首之高名仕候依之　台德院様御(旗)[ホナシ]本陣へ越中守召連罷出候處御目見被　仰付候其後右爲御褒美定利之脇差給之所持仕候往年存慮之品有之暇ヲ取リ紀州へ罷越候處寛永四卯年　南龍院様へ被　召出高二千石被下置御城代格大寄合被　仰付其後與力拾貳人足輕五拾人御預被遊候

一慶安二丑年七月十一日五拾五歳ニテ病死

正利總領彌次右衛門利直父跡目千石被下以下代々相續七代內匠英勝四百石御鎗奉行ニテ文化四卯年隱居養子三左衛門利陳へ家督四百石無相違被下寄合被　仰付タリ

一正利二男七郎左衛門勝利（隱居後瘦牛）慶安二丑年父遺跡之內三百石分知被　召出御供番被　仰付別家ニテ相續三代目七郎左衛門（始半之丞）勝信儀高四百石　有德院様御小姓頭勤之處正德六申年四月　公儀へ御供被　召連御小納戶被　仰付諸大夫美濃守ト稱シ子孫御旗本ニテ相續ス

一右七郎左衛門勝利二男三郎左衛門忠通元祿六酉年十一月新規被　召出候　有德院様御廣敷御用人三百石之處享保元申年八月八日　惇信院様御供ニテ　公儀へ被　召連御小納戶被　仰付諸太夫ニ任シ主計頭ト稱シ子孫御旗本ニテ相續ス

大君言行錄ニ曰ク　砂丸馬場ニテ御馬ヲ召ケル砌時雨降リ來リ南之出シ櫓へ御入雨之晴間ヲ御待其內堀內之方之矢間ヨリ百間長屋ノ前之道ヲ通ル往還ヲ御見物被成御座候處ニ青柳傳三郎トイフ御小姓純子之袴クヽリ股立ニテ羅紗之雨羽織數寄屋足袋高木履ニ下人ニ長柄之傘サヽセ通リケル其跡ニテ藪三左衛門通リケルニ股立木綿羽織ニ小笠指歩者拾貳三人眞黑ニ連レ通リケルヲ御覽ナサレ御近習ニ被　仰候ハ三左衛門ハ細川越中守忠興ニ幼少ヨリ被遣立萬事見習シ故アレ甲斐々々シキヲ見ヨ貳千石取テ居

ル身ガハタシニテ木綿羽織ヲ笠サシ歩之者共ハ鬼之樣ナルヲ大勢連廻タル利發サヨ、アレコソ武士ナレ小切米之青柳傳三郎メ、ク、リ股立數奇屋踏皮高木履ニ長柄之笠指掛サセ扨モドンナル仕方哉下人ノ善惡ニテ使立候主之賢愚ガ知レルト聞候青柳カ仕方ハ我恥ナリト被　仰ケルトゾ

此青柳傳三郎ハ此以後盆之踊之場ニテ喧嘩シテ立退行方不知トナレリ

信按ニ　三左衞門正利ノ父内匠正照之事前記漢文明良洪範ニ據テ之ヲ詳ニス而シテ原書ニハ三左衞門正利ガ大坂之役之働之事及ヒ正利細川家ヲ去リ御家ヘ奉仕之事由ヲモ詳記ス漢文之ヲ略譯シテ悉サス故ニ其條ヲ左ニ採錄ス

前略細川忠興五月七日天王寺邊ニテ側ニ居タル小姓共ニ向ヒモハヤ軍令ヲハ免ス間先手ニ進ミ高名スベシト申サレシカハ若者共大ニ悦ヒ我劣ラシト乘出シケルニ其中ニ内匠カ一子新太郎トテ生年貳拾壹才幼少ヨリ忠興之側ニ仕ヘシ此度出陣ニ忠興ヨリ紫之母衣ヲ給リシ故今日其母衣ヲカケテ出陣ナリシ此時主人之一言ヲ聞クヨリ一文字ニ乘出シケレ共如何シケン一番ハ清野七郎二番ハ何某ニテ漸ク三番ニ乘行ケル元ヨリ畑中ノ細道ナレハ力ナク一騎並ニ行處ニ右之方ナル畑之高ミニ大坂勢百騎斗備ヘ見ヘシ儘新太郎ハ此敵ニ向ハントテ馬ヲ畑之中ヘ乘卸シケリ先ニ進ミシ兩人ハ旗下ヘ乘歸ルニヤト思ヒテ行過シニ新太郎ハ彼敵近ク乘寄セ馬上ニテ大音ニ細川越中守内藪新太郎ト名乘ル敵ノ中ヨリ壹人立向ヒ藪新太郎トハ内匠カ子カト尋シニ新太郎聞テ中々内匠カ子也ト云捨テ馬ヨリ飛下リ鎗ヲ合セ忽突伏セ首ヲ取テ旗本ヘ馳歸ル忠興ヘ右之樣子申ケレハ大ニ悦ヒ卽チ同道シテ　神君之御馬前ニ參リ此首ヲ獻シ新太郎ニモ御目見致サセケル然ルニ新太郎事年若ト云ヒ其上フシアル者ナレハ不行跡之事抔モ有リシ故忠興ニモ一旦コラシメノ爲ニト遠サケラレシニ此事不快ニ思ヒテ彼家ヲ立去リ浪人セシヲ　紀伊賴宣卿ニハ兼テ父内匠ガ武功ヨリシテ御存ノ事ナレハ御懸望アツテ貳千石ニテ召抱ヘラレケリ云々

藪九郎太郎勝心

藪九郎太郎勝心　服部武左衛門能勝總領　初小勝　生國肥後

藪九郎太郎

家譜

父武左衛門能勝義細川家ニ仕罷在候處咎メノ品有之暇出浪人仕九郎太郎共ニ南部ニ罷在夫レヨリ御國ヘ罷越九郎太郎勝心伯母　御家ヘ相勤罷在同人奉願候故ヲ以テ被　召出

万治元戌年　南龍院樣表御小姓ニ被　召出本苗ハ服部ニテ候ヘドモ藪次右衛門儀先祖ヨリ由緖有之由ニ付右彌次右衛門子分ニ仕藪ヲ名乘候樣被　仰付後追々昇進地方三百石被下延寶四辰九月御用達被　仰付元祿十一寅年五月御加增都合五百石被下同年七月會所ヘモ罷出御勝手向之儀奉行共ト致相談諸事吟味可仕旨務方之儀ハ御用役ヘ委細可承旨被　仰付後遂ニ御城代千二百石ニ御加增享保六丑年二月隱居同七寅年十月二日七十九歲ニテ病死

養子熊之助後九郎太郎　勝喜家督千二百石無相違被下以下代々相續五代九郎太郎勝以七百石大御番頭並高ニテ文化十酉年六月病死養子九郎太郎勝興相續ス

一乞言私記ニ曰ク　藪九郎太郎御勘定奉行被　仰付候處勘定之儀ハ御免可被下ト申然ラバ若萬一之節ハ先手ニ可申付トアリケレバ畏テ御受ケ申上ルヨシ

同人武功之人ナレバ人々望テ大嶋鎗場ニテ入身ス多ク突レタリサラバ今一度來レトテ竹刀ヲ四五本束ネ無二無三ニナグリ廻ス壹本モ中ラズ入リツケタリト言フ

南陽語叢ニ曰ク　高林院樣御代御用達藪九郎太郎御次之間通リカケニ御小姓ヘ向ヒ子供衆ソヤク成事ノミ成リソカ只今ハ神妙ニナリシト昔咄ヲスル御小姓衆耳ニカヽリ其後於御前御酒被下候時九郎太郎吸ホス內ニ巾着ナユ(?)メ口ヘ酒ヲナムナムツキ込タリ是渥美治部同也夢ニモ知ラズ罷在候處衣服ヲ汚シ難儀散々之體ナリ

山野井惣兵衛

按スルニ　乞言私記御勝手向之儀御勘定奉行ト相談吟味可致ト拜命之時之事ナルヘシ此外九郎太郎家ニテ御勘定奉行トナリシ事五代九郎太郎ニ至マテ無之

山野井惣兵衛

同　可右衛門

山野井惣兵衛 初源右衛門 山野井善之丞次男

父善之丞ハ福嶋左衛門大夫ニ仕ヘ後浪人仕元和九亥年新規被　召出高二百六十石分御藏前ニテ七拾八石被下寛永元子年病死長男彥五郎父跡目御切米八十石被下万治四丑年二月病死後成行不知

惣兵衛寛永四卯年新規分家ニ被　召出御切米二十石被下同六巳年御切米六拾石被下置同十一戌年知行三百石被下寛文元丑年三月病死

山野井可右衛門 惣兵衛總領 後惣兵衛ト改

寛文元丑年父惣兵衛跡目貳拾人扶持被下後段々昇進知行千石大御番頭格被　仰付享保九辰年十月病死

總領源五郎 後惣兵衛 寛永八卯年二月父家督八百石被下以下代々相續五代惣兵衛ハ知行三百石御先手物頭ニテ天明七未年十月病死惣兵衛正常家ヲ嗣ク

紀士雜談ニ曰ク　山野井惣兵衛(詰番)討者被　仰付候小笠原七兵衛ト申モノ金銀ヲ貯ヘ候上御暇ヲ取リ上方ヘ引込居申候右不屆之品追々相聞ヘ帯刀殿左樣之者ハ討セ候カ能候ト被申候惣兵衛被　仰付御討セ被成候京都町屋ニ見付

葛籠ハリ居申候ヲ討カケ手モ無ク討留申候

按スルニ 此時板倉周防守ヨリ 王城之近邊ニテ討者御斷無之段紀伊殿御麁相ト察度有リシニ京都請役人大高新右衛門作速之答振ニテ故ナク相濟 龍祖御興被遊候トノ事アリ新右衛門傳ニ詳ナリ

一牧笛類叢に曰く 山野井可右衛門ハ(様)〔タメシ〕物之達人ニテ門弟モ多有之年若キ比ハ風雨之夜ニハ町中致徘徊行逢者ヲ討果其技ヲ試候或夜宇治杉之馬場ニテイ居候向ヨリ屈竟之男早足ニ來ヲ見受刀之柄ニ手ヲ懸得候バ貴公ハ山野井可右衛門殿ト存候某ヲ可討果御所存ト相見候某此身ヲ惜ニテハ無之候得共此度ハ長門守ヨリ用事有之江戸ヨリ飛脚ニ來候只今被殺主用達不申候テハ死デモ餘罪有之間主用ヲ達候迄暫時暇ヲ可給候其上ハ思召ニ可任ト無餘儀賴候ヘ共無聞入大袈裟ニ討放候老後甚是ヲ悔此者下賤ノ身ニテ主用ヲ大切ニ思ヒ暫ク暇ヲ乞事不便之至候是迄多人ヲ殺候得共少モ心ニ不懸ニ彼男之事ヲ思出度々致落涙候ト孫上野三郎左衛門ニ話候其比杉之馬場ニハ家居モ無之杉林之由可右衛門ハ元祿九年子四月七日病死(祖公外記附錄ニモ載ス)

家譜を按するに 可右衛門(後惣兵衛)ハ享保九辰年十月病死其子源五郎寶永八卯年二月父之家督八百石被下トアレバ蓋シ寶永八年可右衛門隱居家督ヲ源五郎ニ讓リ後十三年ヲ經享保九年ニ歿シタルナリ本記元祿九年病死トスルハ誤傳ナルベシ

一一書に曰く 紀伊對山公之時ニ御手廻リノ御長刀持木綿三反盜タル事相知レ多少ニハヨラス盜賊之沙汰コトニ手廻リ之者ナレハ死罪ノカレ難キニ極リケル時ニ山野井惣兵衛トイウ奉行申ケルハ彼者一人ノ老母長病ニ著シミ貧苦ニセマリ母ヲ養ン爲メニフト此木綿ヲ盜タルヨシ恒ノ產ナケレバアラヌ心モ起ルモノナリ母ノ病中ニタベモノヽナキニ著シミ盜タレバ同シ盜賊ナガラモ不便ノ事ナリ先ツ見合ナバ了簡モアルベキカト延引ス同役長坂儀兵衛トイフ者何迚此盜賊ヲハ死罪ニ行ヒ給ハヌヤトイフ惣兵衛右之趣ヲ述ル儀兵衛聞テ然ハ此者助ントノ事カトイフ惣兵衛カイワク御定法ナレバ中々助ル事ハナルマシクナリトイフ儀兵衛曰助ラレズバ早ク仕置シ給ヘトイフ惣兵衛曰ク殺シテハ再ヒ生ル事ナラズ殺スハ安シ今少シ待給ヘト入牢サセテ其後ハ沙汰モナカリシカ其翌年對山公ノ御八十賀ノ祝ヒアリ扨コソ此盜賊免許ノ時來レリトテ母ヲ養ヒ申度心ヨリ致シタル盜賊ナレバ今度之御壽ニ彼ヲ御助ケアリタランニハ外ノ例ニハ成間敷由申上ケレバ則ユルシ候ヘトテ命助リケルトナリ

按スルニ 對山公御八十ノ御賀ハ寶永二酉年正月十一日ニ御祝儀被爲整タリ

矢部虎之助

矢部虎之助家譜傳ハラサレバ事歴詳ナラズ蓋シ其孫半左衛門ハ　有徳公之御時百五十石御近習番タリシガ正徳六申年御供ニテ公儀ヘ被召連六月廿五日三百俵御小納戸ニ被召出諸大夫ニ任シ左衛門佐ト稱シ爾來御旗本トナリシ故其家譜除キタルモノナランカ元和五年御切米帳ニハ高二百石矢部縫殿トアルノミニテ其他記スル處ナシ虎之助後縫殿ト改メシカ或ハ別人ナルヤ知ルベカラズ暫ク左之一節ヲ掲ケテ傳トナス

明良洪範ニ曰ク大坂陣之時賴宣卿之士ニ矢部虎之助ト云者大力ナリシカハ長サ弐間ノ折カクノ指物三尺餘ノ大刀ナリ立物ハ大位牌ニ壹首ノ歌ヲ書ク

咲頃は花の數にはたられさも散にはもれぬ矢部虎之助

如是出立寔ニ目ヲ驚シケレトモ馬ハ重キニ不堪シテ進ミカネシ故人跡ニ下リテ手ニモ合サリシカハ大ニ悔ミ歸陣シケル家中ニテモ沙汰悪敷武道不案内トノ評判ニ逢ヒテ恥惱リ自ラ食ヲ斷テ廿日計リカ中ニ自滅セシトソ惜キ事ナリ

長澤伴雄云コノ矢部虎之助ノ子息ヲ仁兵衛トイフ　南龍院樣ニ仕ヘ奉レリソノカミノ童謡ニ跡カラゴザレ矢部仁兵衛トイヒシト古老之夜話ニ聞タル事アリ今按ニ有之虎之助カ事ヲ子ノ仁兵衛ニ及ホシテ跡カラゴサレト云囃リタルモノナルヘシ扨矢部仁兵衛カ子之半左衛門ハ　有徳公ノ御供ニテ　公邊ヘ參リ御旗本ト被成タリ近頃矢部駿河守ガ先祖ナリ又矢部カ和歌山ニ有シ程ノ居住ハ和歌道新堀ニテ今、井口源三右衛門カ居宅ナリト云ヘリ

矢野庄左衛門

矢野庄左衛門清秋　矢野伴五郎清房總領　生國信濃

家譜

先祖ハ海野小太郎幸恒ノ末裔ニテ代々信州眞田家ニ仕ヘ祖父小平太清集ニ至リ浪人ス
庄左衞門清秋壯年ヨリ江戸ニ出テ　公儀御代官ヘ附屬シ地方業術修業明和七寅年八月松平大學頭樣ヘ被召抱郡奉行ヨリ勘定奉行用人ニ進ミ祿二百石ヲ領ス天明八申年十二月隱居家督忰ヘ相續父子江戸屋敷ニ居住ノ處寛政四子年閏二月二日大學頭樣ニテ被召通候ハ　紀州樣ニテ御用向有之被召抱度段御使御用人山本九平ヲ以テ御所望被仰上候付御承知被成候段御挨拶被仰上候間彼御方ニテ被　仰付次第御請可仕旨被　仰聞候
一寛政四子年閏二月十六日被　召出十人扶持被下置御禮式獨禮被　仰付
一同年三月朔日當分會所ヘ罷出在方之儀ニ付存寄ノ儀ハ奉行村岡八藏ヘ相達差圖請可相勤旨被　仰付
一同年七月廿九日江戸出立勢州ヘ相越三領荒地起返見分其外御用相勤同十一月廿五日白子出立十二月四日江戸歸着
一同五丑年六月朔日江戸表ニテ白子郡奉行助被　仰付御切米二十石ニ御直シ被下御足高三十石被下置
一同七卯年十月二日江戸表ニテ數見角左衞門跡白子郡奉行被　仰付八十石ニ御足高被下
一同十午年正月十九日勢州松坂ニテ海士郡奉行ニ所替被　仰付
一同年五月三日御勘定吟味役取扱御用筋申談相勤右勤ノ内ハ郡奉行ノ勤ハ不仕筈ニ被　仰付

一同月十九日御勘定吟味役被　仰付御加增四十石ニ被成下三百石高ニ御足高被下置

一同年八月廿四日在方元ニ成リ相勤候樣被　仰付

一同十二申年五月十九日紀州口六郡巡在被　仰付同六月十一日若山出立右御用相勤同七月二日歸着

一同年十月十八日御勘定吟味役　御免寄合被　仰付

一十一月廿四日願之通リ江戸住居被　仰付

一文化三寅年三月十四日御勘定組頭被　仰付同日地方精密之義ハ兼テ御存知被遊有之候ヘ共地方ニ應不應モ有之又ハ時ニ取テ用不用モ有之事故當時ハ素業御用ヒ被難被遊候乍併兼テ慷慨之宿志モ達　御聽奇特成義ニ被　思召候付格別ノ思召ヲ以テ先此節御勘定組頭被　仰付候事ニ候年來致熟練候本業之意味ヲ以テ精勤可致旨被　仰付候

一同四卯年七月廿三日御留守居物頭格中奥詰被　仰付

一同八未年八月十三日七十五歲ニテ病死

　實孫庄兵衛清盈跡目三十石大御番格小普請トナリ後修理太夫樣御近習番ニテ文政三辰年十一月病死養子庄左衛門清榮嗣ク

一乞言私記ニ曰ク　矢野庄左衛門御代官ヲ勤メ農事ニ精シ民其新法ヲウラミ逐ントセシ事アリ其元ハ米俵之疏薄ナルハ米ヲ費スノ憂ヒアリトテ俵ノ作リ方ニ念入レシム故ニ民皆怨ミシト然共今ニ至リテ其利ニヨルト言リ兒嶋忠藏ト云フモノ有リ庄左衛門ニ申ハ信セラレテ後行ハバ民ノ怨モアルマジキニト言ヘハ庄左衛門余モ左樣ニハ思ヒシカトモ新ニ大藩ノ招ニ應セシ事ナレバ速カナルノ功ヲ求メシ故其功ヲヤブレリト言ヘリ

同人家政整肅ナリ嘗テ其妻ノ死スル時予往テ弔フ偶縁者ヨリ精進物ヲ送レリ其娘重箱ヲ持テ靈前ニ再拜シ贈リ物ヲ新靈ニス丶ムル禮甚神妙ニシテ先ツ重ノ蓋ヲ取リ一禮シ一々重毎ニ謹テ謙禮シ生ニ事ルカ如クナリシ是ヲ以テ庄左衛門ノ教ヘ嚴ナルラ見ルニ

足ル

初庄左衛門大學様御國ニテ代官勤メシ時初ノ程ハ取沙汰アシカリケレドモ後ニハ歌ヲウタヒ或ハ手拭ヲカムリテ門前ヲ通シ者ナカリシトゾ

按スルニ　是　舜恭公御初政之時ニシテ古来地方民治之職ハ悉ク紀勢ノモノ就任ニテ江戸人ハ自カラ其道ニ疎キノ傾キアリ江戸人ニテ農務殖産之職ニ擧ラレシハ中世堀内彦大夫井田幸次郎ト此庄左衛門アルノミ而シテ庄左衛門ハ他所新参然ルヲ忽チ頭役三百石ニ御登用ハ太平無事因循姑息ノ時ニ當テハ頗ル非常ノ事ニシテ　舜恭公民治ニ御熱心ナリシ程察シ奉ルヘシ然レ共事速成ヲ期シ却テ誤リシハ勢ヒ不得止モノカ文化三年御勘定組頭ニ再任セラレシハ議ノ堀江平藏御政事改革ノ時ナリ

松平長七郎

松平長七郎忠勝　松平内膳正信定七代之孫　櫻井松平左馬允忠頼三男　生國遠江

家譜

慶長十四丙戌年父左馬允忠頼横死ニテ所領沒收サレシ時大叔桑名少將松平隱岐守定勝之養介養子ニナリ勢州ニ罷在候處　南龍院様御續柄之御由緒ヲ以公儀ヘ御達之上駿府ヘ御引取被遊御養介トナリ元和五己未年御國替之時御供ニテ和歌山ヘ罷越三木町御門内ニ於テ屋敷ヲ被下知行千石被下置御禮式寄合組ニ籠リ罷出候由申傳候後年ニ至リ病氣ニ依テ奉願山城醍醐ニ閑居住右之内從弟松平丹波守ヨリ年々五百石ツヽ合力ヲ授候由申傳候

一寛文四年甲辰二月廿九日病死　歳不知

嫡子源兵衛重之明暦元未年被　召出御切米二百石被下置後寄合組高家之列被　仰付家備之義ニ

付出席ノ節上座へ罷出候樣被　仰付元祿十二卯年十二月十二日病死以下代々相續四代目六郎右衞門忠英大番頭千石ニ昇進七代織部庸ハ　照德公御(一本作實)母ノ兄タルヲ以テ　公儀御相續後安政六巳年十二月五日御加增三千石被　仰付文久元酉年二月十六日來ル十八日　實成院樣御引取ノ節御供致シ　御本丸御廣敷へ罷出可申旨被　仰付同月十八日公儀へ被召出三千石被下新御番頭被　仰付諸大夫織部正ト稱ス

一右之通織部　公儀へ被　召出ニ付同人弟鬼四郎(後六郎右衞門又裕吾)忠寛文久元酉年二月十八日　御家へ被召出知行千石不寄合代々高家之列ト可心得旨被　仰付後大御番頭トナリ慶應二寅年長州征討ニ出陣石州路ニテ敗走減祿被　仰付タルヨシニ聞ユ裕吾淫酒放蕩家名殆ト絕ントス

一當家ハ源兵衞重之以下代々高家之列被　仰付タル家柄之譯且元祖長七郎忠勝御續柄之如何ヲ示サン爲左ニ祖先之系統ヲ揭ク

因ニ記ス　勢州桑名郡桑名町相生町住松平祐左衞門ト言者明治廿五年信カ家ニ到リ松平織部家之成行且墓所之事ヲ訪フ其由緒ヲ尋ヌルニ長七郎忠勝ノ二男ヲ孫八郎ト言濱松ヨリ桑名へ移リ桑名侯ノ客分トナリ且扶助ヲ受ケシガ後之ヲ辭シ商ニ歸シ松屋ト號ス家榮幸ニ優渥代々桑名侯ノ用達タリシカ維新後系譜ト墓所等之證ヲ以復姓ヲ願ヒ許可ヲ得以來松平ヲ稱シ記章三ツ葵ヲ用ユ忠勝之長男則孫八郎ノ兄ハ紀州ニ仕へ織部ハ則其家タル事兼テ聞傳ヘアレバ其所在ヲ尋ルナリト言彼レ言フ所能ク此系譜ニ符合セリ忠勝ノ妻ハ大崎玄蕃ノ女ナルヨシ祐左衞門當時專ラ農商ヲ營ミ田數百十町ヲ有シ桑名屈指之富豪ナルヨシ祐左衞門子ヲ家晃ト稱ス

家（一本無 廣）有病故忠頼繼家督
慶長五年七月奥州陣　家康公御出馬之時忠頼供奉同年九月濃州關ヶ原陣　家康公御出馬之節供奉到三州岡崎奉　家康公命守岡崎城關ヶ原御勝利以後尾州犬山城在番相繼金山城勤番本領武州松山一萬石之外於濃州金山一萬五千石拜領之　同六年二月遠州濱松城五萬石幷御城米五千石拜領同八年　家康公御上洛路次渡御濱松城賜吉光御脇指於忠重　同十年　秀忠公御上洛之節路次入御濱松城　同十二年駿府御城普請勤之

慶長十四年九月廿九日逝去貳拾八歳法名淨喜

- 忠重 従五位下大膳大夫 母織田有樂娘
  - 忠樹 従五位下遠江守
- 忠直 従五位下淡路守
  - 忠氏 監物
    - 忠成 左門
- 忠勝 新右衛門尉長七郎 松平隱岐守定勝養子
  - 重之 源兵衛 紀州ニ奉仕 松平六郎右衛門家也
- 宗長 従五位下因幡守
  - 孫八郎 當時松平家晃家 桑名在住
- 忠好 左京進
- 忠利 従五位下壹岐守

家之紋葵　別紋九曜

松平三郎兵衛

松平三郎兵衛忠重 松平大炊助好景三代主殿頭家忠四男 生國三河 深溝松平氏

家　譜

父主殿助家忠 初名 又八郎深溝之城住居天正三乙亥年於吉田町口與武田御合戰之時供奉相働同年

長篠合戰父伊忠一所供奉同年二股之城攻諏訪原小山等城攻之時相働首數討取之同六戊寅年三月
七日（懸）［一本掛］川ニ　權現樣御出馬同九日駿州田中之城ヘ相働外郭攻敗家人佐野次助行家彦十郎敵討
取同八月駿州田中ヘ御働之時分供奉相働同七己卯年三月七日牧野原城番請取同十三日家人等敵
方ヘ働遣男女廿五人生捕牛馬四疋取之同霜月七日遠州瀧堺ヘカマリニ行敵五騎討取之荷物貳拾
駄取之同八年庚辰六月十一日高天神取出之場鹿鼻ヘ御出陣供奉同月十七日高天神根小屋放火ニ
働敵討取家人板倉喜藏討死其外手負數多有之同年七月廿一日呂崎川春ニ陣取苅田之押ヘ被　仰
付同月廿二日小山筋ヘ働當年遠駿御働注進安土信長ヘ家忠爲御使被遣信長對面從信長モ使者下
ル同九辛巳三月廿二日高天神落城刻供奉相勤同日戌刻敵切出石川伯耆（足）［一本是］助衆家忠手ヘ首數百
三十討取之同月廿三日落人山谷搜テ捕之同十壬午年二月甲州滅亡御働供奉同月廿日田中ヘ働同
月廿七日持舟城攻同月廿九日持舟城主朝夷名駿河守城ヲ渡ス家忠駿河守ヲ久野城迄送遣同年三
月五日府中働同年五月五日濱松ヘ出仕本多平八郎爲御使各遲參之處出仕御機嫌候同年七月甲州
御働供奉同廿六日小屋根カマリヲ置自身敵討取同月廿九日敵陣所近苅田働同年九月溯日敵物見
出時酒井忠次一手家忠働同十二甲申年三月十七日羽黑御合戰之時酒井忠次一手ニ供奉犬山筋ヘ
家忠働森庄藏居屋敷押破首十五討取之同年四月九日岩崎筋御働時酒井忠次一手家忠小牧押ヘ被
　仰付同年六月廿八日樂田筋ヘ小牧ヨリ物見ニ出敵出張相戰敵五騎討取馬十五六疋取之家人拾
騎討死同年七月十五日敵物見出小牧ヨリ家人等出相働同年九月溯日樂田ヘ苅田働同月五日又働
同十三乙酉年　權現樣濱松御座之時岡崎御留守居石川伯耆守霜月十三日上方ヘ立退同日亥刻深

溝ニテ聞之岡崎へ懸付伯耆守妻女共早尾州退去岡崎騒動家忠新庄七之助構在番翌日辰刻三州衆
參勤同十六日　權現樣岡崎被爲成家忠諸勢先立懸着御機嫌御褒美候同月十八日岡崎城普請被
仰付諸人抽精候(旨)平松金次郎御使賜同十八庚寅二月小田原御陣供奉同四月四日小田原城早川
口仕寄同六月五日篠莎人數騒動酒井忠次家忠持口夜討在之與騒動家忠罷出見屆　權現樣參夜討
ニテハ無之篠莎之働北方へ懸敵ニテハ無之旨　言上神妙見屆候ト御機嫌候同年八月廿六日武州
忍城賜深尾淸十郎御使來同年九月十一日知行一萬貫御書出賜同十九年辛卯奥州表御出陣之時忍
城在番六月十九日被　仰付文祿元壬辰年正月二日改主殿助本名又八郎同年二月十九日忍城稲松
殿渡下小美川賜慶長五庚子年景勝御陣之時伏見城番被　仰付同年七月二日小美川立同年八月一
日伏見落城之時敵二之丸塀築地迄嶋津家人別所下野名乘テ押込家忠鎗合追崩其後貳參ヶ度働家
忠弓手脇被衝休居ル所ニ亦敵門際迄攻寄此時門開可働雖鑰預者討死故鑰不見家忠近付敵爲防切
腹行年四拾六歳家人松平九七郎嶋田久助大原九郎次郎同長七郎鵜殿藤三郎原田內記三浦右衛門
八松平理助原田淸七郎酒井助大夫宇野久四郎酒井作藏都筑又藏尾崎半兵衛本多才一郎同九三郎
同長八郎横落熊藏酒井猪之助越山甚市郎同喜大夫服部八藏稲吉淸助都合八拾五騎討死
一三郎兵衛忠重元和五年未八月　南龍院樣御入國之節貳番御供內五番組大御番頭御歩行御鐡炮同心
御預于時知行千五百石
一元和八戌年ヨリ紀州地士六拾人之內貳拾五人御預被成候
一南龍院樣御手自御腰物拜領仕御座候　年號月日不知

一寛永貳年丑六月三日病死仕候　歳不知

一大君言行錄ニ曰ク　江戸御參勤之時勢州松坂ヨリ御渡海ト有シニ折節大風大波ニテ御船難被召ト諸人色々申上候得共是非御渡海可被成ト被　仰候時ニ大御番頭松平三郎兵衞罷出色々御諫申上候トイヘドモ御承引ナシ三郎兵衞詮方ナク又申上ルハ御渡海極リ候ハヽ私ハ弓矢八幡腹十文字ニ切リ可申ト申候得バ此段被聞召御渡海ヲ御止メ被成桑名ヘ御廻リ熱田ヘ御渡海被成候扨池鯉鮒ニテ三郎兵衞御迎ニ罷出候儀御覽被成何トテ御先ヘ參候ヤト御尋ナリ三郎兵衞申上候ハ松坂ニテ御渡海ヲ達テ留マイラセ私陸ヲ御供致參候ハヽ三郎兵衞ハ大風大波ヲ恐レ御渡海ヲ奉留候ト人口ニ懸リ可申ト存昨日ノ風雨ニ鯨舟ニテ松坂ヨリ三州吉田ヘ渡リ是マテ御迎ヒ罷出候ト申上候得ハ人々驚感シケル　頼宣卿ニハ兎角之御意モナカリシ後日濟ニ御腰物ヲ御手自三郎兵衞ニ被下御料理其上御手前ニテ御茶ヲ被下候御內意ニハケ樣之事ヲ表立大キニ御譽被成候テハ外之者是ニナラヒ不慮ニ犬死致シ士ヲ殺ス事アルベシトノ御遠慮ナリシトカヤ

忠重總領六郎兵衞重勝父之跡目千五百石無相違被下以下代々相續七代善吉忠鄰七百石ニテ　舜恭公御側御用人勤八代三郎兵衞忠久七百石御供番頭格御小姓頭ニテ文政十二寅年十一月病死養子式部　後善吉　忠昌相續ス

一二代六郎兵衞重勝以下家柄之譯ヲ以テ代々高家之列被　仰付タリ

高家系圖ニ

●信光國（和泉守）─ 親忠公（右京亮）─ 元芳（彌三郎）─ 長藤（太郎左衞門尉　松平外記先祖）

元芳 ─ 忠景（大炊助）─ 忠定（大炊助）─ 好景（大炊助永祿四酉年四月十五日於三州長良討死）─ 伊忠（主殿助天正三乙亥年五月廿一日於三州長篠討死行年三十九歲）─ 家忠（主殿助慶長五庚子年八月朔日於城州伏見討死行年四十六歲）─ 忠利（從五位下主殿頭　肥前島原城主松平主殿頭家寛永九年六月五日病死當時子侍松平忠和）

家忠 ─ 忠貞（長三郎）

─忠一　庄九郎慶長廿年五月七日於大坂討死行年廿六歳
─忠重　三郎兵衛尉　紀州ニ奉仕
─忠政　従五位下兵庫頭

松平內藏允

松平內藏允宣助　久松佐渡守菅原俊勝嫡子松平因幡守康元四男　生國三河

家譜

父因幡守康元儀永祿三年　神君樣ヨリ源姓松平之御稱號ヲ被下置候初ハ參州岡崎之城ヲ御預被遊候元龜三申年遠州味方ヶ原御合戰之節軍功有之候武田勝頼滅亡之節ハ沼津ノ城ヲ相守リ申候夫ヨリ西ノ郡ノ城ヲ御預被遊候天正年中　鈞命ヲ蒙リ尾州床奈部ノ城ヲ攻取申候

其後下總之國關宿之城主トシテ貳萬石被下置候同十九卯年奥州九部御陣之節兵士百五拾騎步率千餘人ヲ卒シテ下總國小山ニ陣取申候處　神君樣其軍兵多キヲ　御覽被遊御感ノ御事ニ候御合戰之節ニ及テ本多平八郎忠勝井伊兵部少輔直政ト先陣ニ列申候御歸陣ノ節關宿之隣鄉ニテ貳萬石被下置候テ都合四万石ニ被　仰付候小田原御合戰ノ後小田原之城ヲ預申候同年奥州合戰之時三狹間ノ城ヲ相守リ申候慶長五子年關ヶ原御陣之節ハ江戶　御城ノ御留主仕罷任候同八卯年八月十四日病死仕候

一寛永十八辛巳年月日不知被　召出御切米貳百石被下置候御役儀不知

一正保三丙戌年月日不知御切米ヲ地方ニ御直五百石被　仰付候

一慶安元戊子年月日不知御加增被下置八百石被　仰付候

一年月日不知御城代被　仰付候

一明曆元乙未年七月三日病死　年齡不詳

宣助嫡子ヲ九郎左衞門初徳之助元暉ト云父跡目知行八百石無相違被下寛文七未十月大番頭千三百石ニ御加增後隱居三代圖書元明父家督千石ヨリ御城代千三百石ニ進ミ元祿十四巳年十二月初テ高家之列被　仰付四代圖書元宣安永五申年十二月松平六郎右衞門ト兩人家之儀ハ格別ノ品ニ付自今高家之上座可仕自今御相伴之節ハ代ル代ル隔番ニ上座可仕旨被　仰付六代九郎左衞門元美ハ八百石御小姓組番頭ニテ文化二丑年三月病死ス

一當家ハ家筋ノ譯ヲ以テ三代圖書元明以下代々高家ノ列被　仰付右家柄之巨細ハ高家系圖ニ詳ナリ今其畧ヲ揭ク

○俊勝　久松佐渡守　初名彌九郎　尾州阿古居之庄ヲ領ス

室　廣忠公御後室　神祖之御母公

康元　松平因幡守　從五位下　初名三郎太郎

神祖之同母弟也

永祿三年三月　神君御十九歲欲攻大高城巡見之時渡御于智多郡之次入御于阿古居館萱堂御附之事其俊勝共趨迎寒暖之外濺淚於往事于時俊勝息男三人三郎太郎源三郎長福是與神君同胞也在座右　神君賞愛之曰我兄

弟鮮矣自今後以此三子可令爲同姓於是即賜松平稱號云々

勝俊 源三郞　松平賜氏

十二歲之時依仰爲質赴甲州天正十一年正月賜駿州久能城

後壹萬貳千石下總多古領主　當時子爵久松勝慈ナリ

定勝 長福　賜松平氏　隱岐守　從四位桑名少將コト
後拾五萬石伊豫松山城主　當時伯爵久松定謨

女子　岡部内膳正妻

忠良 甲斐守——延良 因幡守

女子　菅沼志摩守妻

女子　大須賀出羽守妻 後菅沼織部正妻

女子　福嶋左衞門大夫嫡子八助妻 後津輕越中守妻

女子　田中筑後守妻 後松平將監妻

女子　中村一學妻 後毛利甲斐守妻

備前守　奉仕幕府

圖書　仕于尾州

宣助 內藏允——元暉 九郞左衞門

松平三郎大夫

松平三郎大夫乘勝 信光公ヨリ五代ノ孫松平三郎大夫乘遠二男 松平出雲守乘高二男始内記後五郎兵衛 生國武藏

家　譜

遠祖松平三郎大夫乘清ハ參州大給之城主松平和泉守元祖之二男ニテ三郎大夫乘遠之父ニテ御座候出雲守乘高ハ　神君樣へ奉仕候三郎大夫乘勝ノ父ニテ御座候

一乘勝ハ井伊谷松平三人衆ト被呼候一人ニテ御座候

一元和二丙辰年月日不知　台德院樣へ被　召出高三百石被下置御小姓相勤申候其後年月日不知　南龍院樣へ御附被遊知行三百石被下置候

一同五己未年御國替之節御供仕御國へ罷越申候

一寛文七丁未年月日不知奉願隱居被　仰付爲家督總領武兵衛へ知行三百石無相違被下置候

一同十一辛亥年十一月十日病死仕候年齡不詳

乘勝總領武兵衛乘久以下代々相續五代十郎左衛門四百石寺社奉行ヲ勤六代三郎大夫乘信三百五十石新御番頭格奥詰ニテ天保二卯年八月病死總領出雲乘邦跡目相續ス

一乘勝二男八大夫乘忠延寶二寅年二月　清溪公へ新規被　召出別家ニテ相續松平八大夫家是也

一武兵衛乘久二男新左衛門義乘モ寛文十一亥年被　召出別家松平八輔家是也

間宮助左衛門

間宮助左衛門盛忠　間宮左衛門尉信重養子　實土屋織部盛央二男　始名惣藏　生國相模

家　譜

養祖父豊前守康俊ハ於北條一萬八千貫ヲ領シ總侍大將相勤天正十八寅年小田原落城之節生害仕豆州箱根山中村ニ葬ル豊前守娘　權現樣へ御奉公仕候付右娘儀後年奉願亡父菩提之爲宗閑寺ヲ建立仕石碑ヲ建申候

一養父左衛門尉信重父豊前守ト共ニ北條家ニ仕罷在候處小田原落城以後　權現樣へ被　召出御役儀不知其後養珠院樣御娘ヲ妻ニ被下一子無御座ニ付土屋織部盛央二男ヲ養子ニ仕候卒年不詳

一慶長年中月日不知　權現樣へ被　召出其後年月日不知　南龍院樣へ御附被遊之旨權現樣御直ニ被　仰含於御前養珠院樣ヨリ惣藏ト名御附被下慶長十三戊申年常陸國久慈郡茨城郡之内ニテ御知行百五十石被下置之旨御朱印頂戴于今所持仕候右御朱印寫

常陸國久慈郡之内岡田村之内五十八石二斗九升茨城郡之内北方村之内五十五石七斗四升稻田村之内三十五石九斗九升合百五十石右宛行訖全可領知者也

慶長十三年二月十九日　御　朱　印

間　宮　惣　藏　との

一若年之頃御鷹役相勤大阪御陣中騎馬役ニテ御供仕元和五己未年紀州へ御入國御供仕罷越大番被仰付其後御留守居物頭相勤萬治二戊亥年十一月廿一日病死仕候于時五十五歲

盛忠總領助左衛門幸重元和九亥年部屋住ニテ御鷹役ニ被　召出後盛忠家督百五十石被下以後代

々相續五代一八幸陳五百石新御番頭格ニ昇進以來多ク一八ト稱シ七代一八陣德ハ知行三百五十石町奉行ニテ文久三亥年四月病死總領粂三郎陣善嗣ク

松下助左衛門　松下左五之丞付

家　譜

松下助左衛門氏綱　松下助左衛門尉範久男 初名不知 生國三河

於駿河年月不知　權現樣へ被　召出　南龍院樣へ御附被遊知行三百石被下御代官相勤元和五未年御國替之節紀州へ御供仕其後御役替御留守居物頭相勤寛永十七辰年九月四日病死仕候處總領彥十郎儀部屋住ヨリ被　召出高二百石被下相勤罷在候ニ付分テ家督ハ不被　仰付候

總領彥十郎淸綱部屋住ヨリ六十石大御番ニ被　召出後高三百石御天守番ノ頭ニテ延寶三未年隱居以下代々相續之處氏綱ヨリ四代目彥太郎後彥十郎幼少ニテ家督十五人扶持後三十石新御番之處享保四亥年七月九日不覺悟之品ニヨリ改易被　仰付嫡家斷絕ス

分　家

松下左五之丞建當　彥十郎淸綱二男 生國紀伊

明暦二申年　南龍院樣へ新規被召出御小姓被　仰付後段々御役替御加增高千石大組被　仰付貞享五辰年五月病死

以下代々相續六代左五之丞後主馬興志寛政十午年高二百石御供番タリ

松下太郎助

松下太郎助、父曰太郎助正綱、仕東照公、賜遠江榛原郡邑、五百石、長篠高天神長久手小田原諸役皆有戰功、公賜勳狀及朱幹槍刀鞍諸物賞之、太郎助仕公、賜祿二百石、松下系譜

家　譜

松下太郎助　實名不知　初名不知　松下太郎助正綱實子

父太郎助正綱　權現樣へ奉仕駿州岡部遠州榛原領之內ニテ知行五百石被下置本多豐後守廣孝井伊兵部少輔直之組下ニ罷在參州長篠御合戰之刻供奉鎗下ニ敵一人討取高天神城御攻被遊候節モ城兵河合六之助ヲ鎗付討取信州表御取合之節ハ伏兵ニ罷出候敵之足輕大將妹川彥之助侍五六騎足輕四五十人召連小川ヲ渡堤之上へ乘上來候ヲ鐵炮ヲ發彥之助ヲ打落敵方退散之中ニ壹人彥之助死骸ヲ肩ニ引掛川ヲ渡候故半六（正綱初ノ名）急ニ追駈候處死骸ヲ捨テ退候付其首ヲ取歸候尾州長久手御合戰敵敗軍之刻壹人ヲ追詰鑓ヲ合討取之此時左之臂ト頰ニ疵ヲ被候付　權現樣異名ヲ御付被遊掛川之ホウタント御呼被遊候小田原御陣之節明朝卯之刻ニ可被攻ト依有沙汰味方ノ侍十三人未明ヨリ塀際ニ着相待總勢取掛リ候節半六壹番ニ乘敵一人討取殘黨モ追々乘之候落城後右十三人背軍法之段太閤秀吉立腹之由達　上聞御內意ヲ以テ逼塞仕候其後病氣附候付本多中務大輔忠勝ヨリ眞田伊豆守信之へ預ヶ分ニテ罷在候　卒年不詳

御感狀ヲモ頂戴仕朱柄之御鎗御脇指御鞍ヲモ拜領仕候得共於信州沼田火災之節燒失仕候由申傳候

太郎助眞田河内守信吉手前ニ罷在其後（年月不詳）駿府へ罷越　南龍院様へ被　召出高二百石被下置元和五己未年御國替之節紀州へ御供仕罷越病死仕候年月不詳

總領半六父之家督高百五十石被下大番相勤其後御役替御加増二百石被下勢州松坂御代官相勤延寶八申年病死其子半右衛門（後半六）家督百五十石被　下大番相勤候處亂心ニ付元祿十丑年七月知行差上十八扶持被下嫡家斷絶

分　家

松下長大夫（實名不知）　二代目太郎助二男

承應元辰年　南龍院様小十人ニ被　召出現米二十石三人扶持被下別家ニテ相勤後御役替御加増現米六十石被下御代官相勤正徳二辰年七月病死

以下代々相續六代加兵衛知央病死之處養子常三郎不埒之品有之實家戻シ被　仰付舊家之義ニ付家名御立川上左兵衛二男專兵衛俊周ヲ相續四人扶持獨禮小普請末席被　仰付後奥之番御切米二十石ニ成リ八代長大夫（章一本辛）僖ハ二十石五友之間御廊下詰ニテ慶應二寅年九月病死養子庸太郎周致家ヲ嗣ク

南紀德川史卷之四十九

名臣傳第十

眞鍋貞成 五郎右衞門〇按駿河分限帳在寄合衆之列、祿四千石

眞鍋貞成世仕於和泉淡輪、領三千貫邑、祖父曰内藏助貞行、父曰七五三兵衞貞友、永祿中、以織田信長命移大津、因築城以居焉其所領、北至堺、南至岸和田、貞成初屬中村一氏後屬戸田民部少輔、征韓役、屢有殊功、民部既歿、秀吉擇其遺臣有名者九人、舉之旗下、貞成其一也、（按其八人爲戸田助左衞門、安見右近、戸田左衞門、山中織部、佐藤傳右衞門、戸田左太夫、田嶋兵助、武山太郎左衞門）及關原役竣、去放浪四方、福島正則召而祿之、居十九年、福島氏國除細川忠興、欲以一萬石祿之、不應、後與大崎長行、村上義清共仕公貞成有臣、曰片山太郎兵衞、淺井左兵衞、岸和田源太夫、原田彌兵衞、皆屢有戰功、貞成請割收其祿千石、以祿此四士、乃舉爲公臣、貞成居治不忘亂、在家猶在軍、終身不娶妻、起居飲食與群隷共之、晚號眞入齋宗白、明曆二年十月卅日歿年八十有九、（眞鍋家譜及御家中書上）

豐臣秀吉、與織田信雄爭也、置中村一氏於岸和田城、以備根來雜賀、信雄密命根來雜賀曰、汝等得秀吉發大坂之報、宜乘其虚以擊之、於是根來雜賀相謀分爲兩隊、欲海陸並進以襲大坂、一氏諜而知之、令其部下曰、根來雜賀勁敵也、勿輕戰時貞成年甫十七從一氏在城中、謂一氏曰、賊船甚盛、彼必攻大津矣、予輩室家在大津、請歸爲之計、一氏然之、貞成乃率其衆百卅餘人而往焉、賊果來攻、其衆千余、衆寡不敵皆危懼之、老幼婦女逃保古城、貞成部下、有秋山亦之丞者、強勇能戰、謂貞成曰、善處此際在隊將方寸

耳、貞成曰、爲之如何、秋山曰今日之策、有三焉、盡移妻孥於古城、據城以戰一也、先移妻孥於界浦、突圍走岸和田城二也、提妻子共走界浦三也、貞成曰〔孰爲上策〕（一本孰爲下策）秋山曰、其一爲上其二爲中、其三爲下、貞成曰然則從其上者、秋山曰、果然騈首枕城而死耳、於是貞成躍然而起、拔刀舞曰誓神決死矣、衆視之激厲、既而海兵益迫、貞成自謂、彼衆我寡、爲其所圍則危、不如迎戰、乃進軍海岸、力戰御之、□氏慮孤軍無援、使蜂須賀家政、率二千餘騎援之則貞成既戰、而勝矣、乃共引還岸和田城（横須賀者共覺書及近史餘談）

家譜

眞鍋五郎右衛門貞成（眞鍋七五三兵衛貞友總領　生國和泉　初太郎又主馬太夫又五郎兵衛隱居後眞入齋）

父七五三兵衛貞友は天正四子五月信長公へ被召出泉州大津にて領知三千貫并千人之御扶持方一ヶ月玉藥千斤つゝ被下尤御黑印をも被下候大坂川口船手相勤罷在候處同六寅七月木津川一戰之節討死仕候

一天正六寅年於住吉堀久太郎を以信長公より親七五三兵衛跡無相違泉州大津にて領知三千貫被下所々へ合戰に罷出候

一天正十一未年秀吉公へ罷出同年中村式部少輔手江御附被成候

一天正十二申年泉州岸和田一戰之砌秀吉公より御感狀被下于今所持仕其後天正十三酉年蜂須賀彥右衛門方へ罷越知行三千石給罷在候

一天正十五亥年羽柴左衛門督方に罷〔在〕（一本居）候其後戸田民部少輔方江罷越於伊豫國知行三千貳百石給罷在同十九卯年民部少輔手にて朝鮮國江渡海仕所々にて合戰仕高麗陣へ罷越相働四年目歸朝仕候

一文祿三年年民部少輔方病死に付又々秀吉公へ被　召出伊豫國にて知行三千五百石被下候
一慶長六丑年福島左衛門大夫方へ罷越藝州廣島にて知行四千石餘給罷在候
一元和五未年廣嶋落去仕候付同年九月安藤右京進殿を以て京都へ被召寄本多上野介殿安藤對馬守殿土井大炊頭殿酒井雅樂頭殿より竹中采女正殿を以て　將軍樣より御當家へ被進候付罷出候樣　上意に付同年十月　御家へ被　召出知行四千石被下置武者奉行被　仰付　南龍院樣御手自壽羽御陣羽織〔惣〕一本元ノマヽ々麾拜領仕候
一正保二酉年被下置候知行四千石之内千石差上廣島より召連候家來之内
片山太郎兵衛　淺井五兵衛　岸和田源大夫　原田彌兵衛
右四人之者武功も有之御用立候者に付御召遣被成下候樣奉願候處願之通被　召出知行之儀は五郎右衛門指圖次第所務可仕旨被　仰付候
一明曆二申十月病死仕候　于時八十九歲
貞成男子無之病死より五十年目寶永二酉年に至り外孫三浦勘助二男五郎右衛門貞留を名跡被　仰付知行五百石被下以後代替之節減祿八代五郎右衛門貞好慶應二寅十二月家督貳百五拾石被下虎之間席並たり

眞入齋御年譜

此書文祟敬を用ゆ蓋し家來等の筆記なるべし今原本のまゝにす

一九歳之時　信長公へ　御目見

一十一歳之時泉州ふ御入

一十二歳之時　信長公ゐづちの御馬揃

一十二歳之時泉州がゝの原にての御働有之候

一同年泉州神事能御勤被成候事

一十三之時　信長公京にての御馬揃ふ御出

一十四之時高野合戰に御立大津川にての先陣

一十五之時三千貫之領地三ヶ一被　召上岸和田中村孫平次殿式部殿へ御附にて眞入公も御加勢十六十七以上三年の内度々の合戰にて御座候有增は書付申候

一十七の春の末に式部殿近江の水口へ六萬石にて御越被成候其時眞入公も水口へ御越なされ候事

一其年之暮に式部少輔殿を御見をくて則明年

一十八之年阿州蜂須賀彥右衛門殿へ御出なされ候

一十九之年彥右衛門殿を御暇申請

一二十之年堀野左衛門殿へ御出筑紫之御陣舟手にて薩摩せんだい川まで船にて御越同年之暮左衛門殿を御いとま申請

一二十一之年戶田民部少輔殿へ御出被成民部少輔殿に御人被成候内九州下之條内記故御成敗被仰付候て九州へ御越させて關東御陣所北條殿故御せめの時分伊豆のふら山へ御立被成候天下御奉平に成

申候て唐人被成候由に付七月ゟ山に事済申候ても皆々富士山へ入木抜出し舟抜作り候用意なされは事

一二十二三四まて伊豫ゟ御人被成候て扱

一廿五之春三月ゟ則民部少輔殿御供被成候て高麗へ御越候て則かうらいにて様々色々の様子とも御座候事

一廿六之年高麗にて一手之大將(もくろ)一本も、ろ抜うち取被申候事

一廿七之年からしほ抜御取被成候事總而高麗にて様々色々之事御座候事三年おくりむこゝ少も人におとり不申候事

一廿八民部殿御煩に付則　上意として日本へ御歸民部殿は京にて御果被成候それより淡しかへし又々爲而　上意とかうらいへ御越候

一同年暮に御歸被成候て則大坂にて　太閤様へ被　召出候衆中

安見右近　眞鍋左郎兵衛
山中織部　田島兵助
戸田助左衛門　佐藤傳右衛門
武山太郎左衛門　戸田七左衛門
戸田左大夫　以上九人也

一廿九三十二十一三十二三十六迄に　太閤様之御馬廻に御人被成

一二十三之時大坂川口之御番石田治部少輔方ゟ申付候付　權現樣ゟ御暇被下夫より則福島大夫殿へ御越被成候

一三十三ゟ五十二迄之內大夫殿に御入被成候五十二十二月に紀州樣へ參三十六年罷在八十九之十月晦日に御果被成候當年十八年に罷成候哉あらまし如此候（一本ナシ以上）

元和年中に眞入御國へ被參る委く云は元和六年也

眞鍋眞入公有增御一生之御書付

一眞鍋は元と藤原氏也平家之川原太郎川原次郎を射おろし申候眞鍋ゟて候それより眞入迄は二十七代之由申候平家物語ゟは眞名邊と如此三字に書候由御座候事

一元來は備中之國の古より代々れ人にて御座候備中の國眞鍋島とて于今御座候由

一眞入公ゟ六代以前に泉州之淡輪村へ引越參申候由

一眞入公祖父高岳院道夢齋若き時分は豐後守と申候由此道夢（一本宅齋）より此かたの義はあら／＼しれ申候

一此道夢齋かくれなき大男大力下泉上泉に此人に敵對する者曾て無御座候由

一此道夢（一本宅齋）に男子三人御座候由總領を主馬兵衛殿次男ゟ豐後とやらん申候由三男は名しれ不申候

一女子以上五人御座候由壹人は淡輪殿へ被參候一人はふけ（一本ヤナい）殿一人は（一本ナ上）生殿一人は阿波之志野宮殿へまいられ今一人泉州之內にて候へ共覺不申候

一眞入公は淡輪にて誕生被成候則淡輪のゑれ子と申候所明神氏神ゟて御座候祭は九月九日にて御座

候

一其時分天下我々持にて御座候付而九州四國中國之海邊皆々關守出され申候事

一四國伊豫にては來島（クルシマ）關九州に而は皆々それ／＼の關有之播州にては三木別所殿之關淡路にては菅野平右衛門泉州にては眞鍋關にて御座候然故九州四國より上方へ往來之舟には眞鍋方へ帆別として口前拔出し申候由

一右眞入祖父道夢齋はかくれなき覺の者にて御座候天文年中に大坂天王寺にて畠山と三好合戰之節八百本鑓合申候此時ハ道夢齋八百本之一番鑓致され申候是天王寺社林寺之合戰と申候

一永祿年中に　信長公御意として眞鍋事泉州淡輪村之事餘與ふかく有之間令少口へ出申候樣にとて上泉大津村を上は堺の大小路拔限り下は岸和田拔かきり三千貫之領地被下候只今の知行ハしては貳萬石餘ハても可有之哉當年迄に百十二三年に罷成申候哉

一然故大津に城おしらへ祖父道夢齋は隱居にて總領主馬兵衛殿城主にて居被申候事

上方大津村へ　信長公被罷出候樣ハと被　仰付候時分上方　信長公に御忠節萬々可申上候爲御合力と鐵砲之藥千斤玉千斤被下候とて拜領仕候事右は主馬兵衛殿御拜領之由

一此大津村へ引越被申候時分眞入齋は六つか七つ斗にて可有御座候哉

一此道夢齋時分それより以前天文弘治永祿此間三十年斗之内尤それよりいハしへ泉州にて合戰樣々有之候由夫かれども夫ハと知不申候

一天正四年大坂之城ハ門跡籠り入　信長公へ敵致なし申候門跡之御事なれば中々諸國より加勢仕る

者數萬騎に及べる尤西國方より舟ふての加勢おびゐゝしく有之由紀伊國よりも一向宗之分雜賀藤代和歌山川向中ノ島より一揆共鐵砲千挺合力尤馬乘百騎斗その鐵砲千挺之大將中ノ島的場源四郎さいかゝ孫市木の本横せうし加仁右衞門是三人か千挺之大將として參申候然故紀伊國勢中々强く御座候て大坂かをがい堤天王寺れ諸まん村ふての合戰(一本ナシ)(城)中よりついて出申候に中ミつよく　信長公にも事之外御あぐみ被成候天王寺諸まん村之鑓の事古今無双之强鑓と于今申傳候此城中之者共は皆ミ紀伊國ものふて御座候于今其者共の子孫川向なごに罷在候尤木の本村に多く罷在候

一然處大坂門跡中ミつよく有之落城成かたきゆへに

一泉州眞鍋主馬兵衞を　信長公御賴被成候は大坂川口爲御賴被成候子細は舟手功者に有之餘多家來に能者共多く有之候間御賴被成由　信長公より被　仰出候西國より門跡への加勢大分に候間是爲大坂川口にて眞鍋ふ留申候樣に左候はゝ早々門跡落城たるべきとて天正四年に被仰付候主馬兵衞畏入申候とて御請申上候然處ふ　信長公より當分之御褒美なと御座候由

一然所主馬兵衞殿一門尤家來之衆中打寄談合御座候處何も申候段々尤主馬兵衞殿被存候も堺の住吉の浦より小舟爲殘舟も出しおしらへ置攝西國より寄來申候所へ押寄〱かゝりてさゝへ候はゝ勝利爲得可申候間左樣に可被致とい談合に候處眞人公之伯父に大あら者有之念もなき事其段あしく可有之候とかくに大坂の川口にゐたけをすへ是を大將として皆々小舟ともはそれ〱ふそなへをたて攝西國の加勢舟をとめ可申候由達而申候老人の申事ゆへにこの大坂川口にゐたけ拵をへ申候事皆々同心にて無之候何も其談合に極め則天正四年七月十一日ふ大坂川口にあたけをすへ小舟共

をそれ〲にそなへ待申候處に

一天正四年七月十四日の日西國四國播州方々ゟ門跡加勢之舟數千艘寄かけ申候然處主馬兵衞方より
もこみかへ〲鐵砲うち申候何も働申事誠ふ天地放さけび申候所其日ふしぎの事はつねよりは八
尺海しほたかくさし込常よし原にて御座候所皆々大海のごとくふなり申候それゆへ敵方の舟自由
自在に入廻り〲扱主馬兵衞殿の船を取まわしてうちたて二時斗戰申候それ故またへかたく主馬
兵衞殿も討死いたされつぎ〲の歷々の侍共七八十上下三百餘討死にて候主馬兵衞の首をば伊豫
の來島衆にさ了申候由

一其以後同年八月にいたりて伊豫の九鬼大隅殿に　信長公より被仰付候然る處大隅殿最前主馬兵衞
殿の手立あしく有之品々放見屆申候故全く手立放かへさい前主馬兵衞殿之御申候樣ふ住吉より小
舟にてよせかけ申候て扱西國舟共みと〲く止散申候其時分則道夢齋下知にて大津よりも小舟大
舟共ふ乘出し西國の舟々は須磨あかし泣おさ〲く追討ふいたし則首貳百五六十討取扱主馬兵衞
殿石塔之前に右之首をさらし申候由

一然者眞入公は六七才故則祖父道夢齊眞入公之御後見被成候由

一扱門跡は　信長公へ降參被致則紀伊國の鷺森の御坊へ御のきなされ候由夫より和歌の御坊山に寺
放建御入被成候故于今御坊山と申候由

一扱それより　信長公則紀伊國へ御入被成候て紀伊國の一揆共皆々降參仕候由扱夫より道夢齋萬事
世間を被致候付六七年之内　信長公へ之御忠節中々出頭無限紀伊國へ　信長公之御入被成候時分

も道夢齋御案內被成候由　信長公之御泊々にては道夢公御次之間ふ御入萬々　信長公之御意をうけ給り被申候由

一眞入公九つの時堺の住吉にて　信長公へ始而御禮申上候則御取次は堀久太郎殿にて御座候然者信長公御意被成候は道夢か孫かとたか〲と御意被成候十一月之比ふて御座候御床之上のみかんつるし柿澤山に御座候をとりて遣候へと　御意れ由久太郎殿只二つ取給候所澤山ふ遣候へとて十二三久太郎殿御取被下候處眞入公は其時分次郎殿と申候はかまのつまふてうけられ候へば　信長事の外御機嫌のよしと被申候

一眞入齋十の時則　信長公江州あつちにて御馬揃御座候其時眞入齋も十歲ふて乘申候事

一十二歲之時眞入齋泉州(か)くが原にて目を驚す一廉の働き御座候事

一泉州ふては根來寺ふて大寺を壹ヶ寺二ヶ寺宛賴をかけ罷在候事

一眞入齋事は杉の坊せんゑき坊とて根來の大寺にて御座候此兩寺の手下には人數二千も有之候此兩寺共眞入齋へは味方にて懇にて御座候事

一泉州其時分皆々我々かちにて御座候ゆへ人々に用心仕候事然處泉州侍一代一度宛泉州大明神之神事能を相勤申候眞入齋へも十一歲之時當り則天下之名人とも能仕候かんかう伊兵衛今春伊右衛門其外皆々役者共(見)[一本四人]へ相務申候眞入齊も一日相務被申候泉州用心あしく御座候故眞入齋被官之者幷根來せんしき坊杉れ坊より朱柄の直鑓二百本鐵砲貳百挺金のれしつけさしたる法師武者百人以上自他共の人數二千斗も可有御座候哉此人數共取廻し終日無恙眞入齊能を相務申候事其時分は眞

入齋泉州ニては中々はゞをいたされ候事

一同十二歳之時　信長公京都にて御馬揃御座候是ニも眞入齋罷出乘申候事

一十三のとし　信長公勝頼を御退治の時は信濃の高塔にて御座候是へも十三歳ニて參申候然かれ共信長公之御總領城之介殿御けん江御越にて勝頼をば早々御亡し被成候ゆへ其あとへ眞入公も御越被成候故手には御あひ無御座候事

一眞入齋十四の時　信長公高野山を御せめなされ候　信長公之御一門織田太郎左衛門殿と申候御人大將として紀州名手のはちが嶺と申所陣取高野坊主は大津の上み龍門前と申所を捕手にかまへ中に紀の川流れ申候所向の山より高野法師﨑にて此川をわたせ〳〵とよばゝり申候其時織田太郎左衛門殿以の外の命ゑらすにて有之候ゆへとかくなし大津川江乘込被申候其時眞入齋も乘込被申候然所を是は勿躰なきとて松浦安大夫川毛惣左衛門太郎左衛門殿をおしとめ申候而引返し申候其時其まゝ乘申候はゝ眞入公先陣之由に御座候事

一然者高野合戰之内ニ　信長公京にて明知殿謀叛を御おこしニて　信長公は御父子共ニ御果被成候事

一然故先に眞入齋なとは泉州ニ天下之様子御覽被成候て御入候事

一眞入齋十五之御時天正十一年　太閤様御意として紀州口四郡根來者共もはや天下又々みだれ申候故我々がちに罷成候その時分　權現様と太閤様と御捕合御座候以上三年の内にて御座候　權現様の御方へは信長公之御次男靜心公御一所に御成被成候三河の岡崎ニ　權現様は御入被成候が長久

手之御陣と申候も此時の御事にて御座候然所に　權現樣より紀州の者共幷根來の者共に一揆を起し候へ上方にては參州と御とりあひ御座候下にては泉州より責上り候得は事之外　太閤樣御痛被成候故紀州者ゟ則　權現樣より被　仰付候由

一然を中村孫平次殿を式部少輔殿に被　仰付候て岸和田之城に紀州四郡根來之押に　太閤樣ゟ御置被成候事

一其時分泉侍寺田又右衞門松浦安大夫川毛惣右衞門眞鍋主馬大夫右之衆かと覺申候何も大坂之御城に被　召寄我々持領之內三ヶ二被　召上岸和田式部少輔殿へ御附被成候眞鍋事は能人有之由達上聞三ヶ一被　召上三ヶ二は其儘被下候事

一岸和田へ附申候歷々衆蜂須賀小六殿黑田長政備前之浮田之家老岡野半平此衆中以上岸和田之人數泉衆式部殿之半分右之衆中以上八千雜兵有之由

一一揆之分は以上二万斗有之由

一然は一揆共何茂寄合岸和田へ附城を仕候其城所は

中　村　千石堀　澤　田　中　雀（シャク）善（セン）寺

右五ヶ所は根來下泉紀州四郡より如斯附城仕候事

一右者天正十一年十二年十三年以上三年之內日々夜々時々刻々一揆共と式部少輔殿之間右之加勢衆と戰御座候事

一眞入齋十五十六十七迄ゟて御座候事

一此時眞入齋家來之者共歷々有之事
一多賀井一門之者共多く御座候左吉右衞門七郎左衞門水橋源右衞門同源七郎同治部右衞門不川源大夫同金十郎三吉藤兵衞秋山又之丞片山太郎助此內深井甚右衞門と申者も御座候是は阿州之十河正康にて一手之大將いたし申候正康にては則片山太郎助も傍輩にて罷在候事雜兵ともに眞入齋人數三百都合五百餘も可有御座候か
一扨泉州三年之內之事自是具に書付申候事
一天正十一年之秋の比より紀州口四郡根來下泉一揆おこり申候て岸和田之城中村式部殿被　仰付候此時眞入公は御年十五歲にて御座候
一紀州根來下泉之一揆共以上二万斗も可有之候哉
一同年十月之初泉州何も八持之衆中へ式部少輔殿御申渡有之候皆々敵地江夜討待伏せ思々にいたし可被申候先ふ式部少輔殿より御初め有之とて切坂と申敵地へ式部殿自身夜討を御討被成候而則首數三十討捕被申何もへ御さし被成候御事
一然所眞入齋も同十月の上旬下泉のかわらやと申敵地へ夜討を舟にて討申候事則首十四討捕申候以上二拾人斗乘申候小舟十船程ふて討申候夜一番鳥之時分舟をはまへつけ申候舟の兩方に六尺斗の繩を付磯へ着申候と舟をは其儘沖壹丁計りへ乘出しのき時分は皆々海へとび入〳〵沖中にて舟ゑのり申候樣にいたし申候扨舟より何も上り敵地へ切込きり込以上十四首數討捕申候然者敵ども四五百起り出申候處早々海へ飛入〳〵後繩にとり付舟沖へこぎ出申候故壹人も損し不申皆々うちを

はし申候其内伏山又大夫は小兒の首をとり申候由式部殿是一人之事なり夜討などは敵の迷惑がり申候事第一幷場所へまいり申候印さん有之候へば能候小兒なと討取候はゝいかばかり其父迷惑いたし可申候哉此時分眞人齋家來百五六十も所持仕候事是眞人齋十五之時泉州ふて一番にて候事當地九十六七年になり申候事此時常空にも首一つ御とり被成候由

一同年十一月の初ふ紀州根來者五十斗出申候而合戰有之候岸和田より皆々出申候て早々追崩し申候此時眞人齋家中首五つとり申候多賀井左吉衞門は見事の杉形の鑓をいたし申候此とき常空にも高名なされ候御事

一同年十一月の末又敵五千斗にて出申候岸和田よりも我先〳〵にと打出追崩し總手へ首五十斗取申候眞人齋家中へも首五つ捕申候此時常空ふも首一つ御とり被成候

一天正十二年正月朔日に岸和田の大手之口ふて鐵砲三百挺程ふせ置未明一つ二つそなし時の聲をごつとあげ其まゝ敵引取申候城中よりも皆々出合尤式部少輔殿も出申され候處只朔日の祝儀をおどろかせ候半ため(計)[一本ナシ]ふて早々敵引取申候由式部少輔殿も扨々千萬ふくき事なりとて同正月三日に一揆とも皆々下泉根來よりもはり出て城中よりもみな〳〵出向ひ則岸和田の少し下およぎ川原と申所にて大きなる合戰御座候此時ふ兩陣(杉)[一本ナシ]形の見事成鑓御座候事　則式部殿の御内成合平左衞門神谷平右衞門林門大夫此三人見事の鑓仕候其内式部殿朔日之無念がり候て旗本五百斗殘り跡は總がゝりと被申候て皆々かゝり申候

一其時分眞人齋は澤の城と申候へ敵を追込見事のつよき高名をいたし申候常空も高名なされ候

一根來にてたいまい者と申候は度々の高名をいたし申候法師武者には鑓のしほくびを金にてだひ申候大きなる功之者ふは總柄を皆々金にてだひ申候をたいまいの者と申候此法師出候へばみな〳〵おそれ申候事此時眞入齋此たいまい者をうちとり申候事

一天正十三年二月の初ふ泉の山よせ切坂と申所へ根來者三千斗ふて新城をこしらへ申候此時岸和田皆々罷出追散し申候此時ふも眞入齋首一つ御取なされ候

一同年三月十八日一揆共根來雜賀れ庄不殘大軍にて岸和田へ押寄申候二万餘も可有之と申候扨岸和田には籠城之躰にて持口をわり外搆押こまれさる樣に式部殿之下知にて有之候定て追付一揆之事に候間引取可申候間其時分のき口へ付け候はゝ勝利可有之候由式部殿之下知ふて御座候處岸和田上は堺迄先は味方にて御座候故眞入齊在所大津の事無心元存候て則眞入齋大津に妻子雜兵とも有之に付眞入齋小勢にて在所を見廻に參候所あんのことくに山寄は敵はや廻り扨海上をは淡路の須本官野平右衛門押寄申候平右衛門とは眞鍋と代々海上のあらそひにて中あしく御座候故平右衛門存候は大津眞鍋在所へ押寄是非共妻子等も引さがし可申候由にて數十船にて押寄申候處へ眞鍋まいりかゝり申候事然者眞鍋も中々あぐみ如何せんと存候處家來に皆々歷々の者共有之候眞鍋は是は如何と秋山又之丞とて功之者有之候これへ申入候處又之丞申候は爰は三つふて御座候岸和田へれき申候か壹つ又は界（迄）退き申候か壹つ又は籠城か壹つ三つふて有之候由申候眞入齊十七にて御座候其内にてつよきはいつれと申候處つよたは是にて籠城にて有之と秋山又之丞申候然時眞入齋則金打仕候拙者は是は墓所ふて有之候と申候へは家來之者共十八九人ともふ金強いふし申候そ

れより眞入齋家來上下五百人斗にて籠城いたし申候處海上官野平右衛門人數千斗も可有之候哉平右衛門舟百船はかり波うちきはへつけ申候大方平右衛門人數五六百陸にあがり申候を見すまして眞入齋下知にて内よりつゐて出て波ぎはにてせり合有之候然る處に多賀井七郎左衛門能鑓を仕候片山太郎助見事の高名仕候首とり申候扨何之手もなく平右衛門人數をこと〴〵敷海へ追込〳〵つきちらし申候それより沖にかゝりい申候舟共皆々磯へつけ申候然處へ泉侍松浦安大夫寺田又右衛門後卷に參り岸和田へ早々引取申候此時眞入齋れ御手柄無限候

一同三月廿二日に大合戰有之候此時紀州雜賀幷根來不殘七八千程にて岸和田へ寄參岸和田には先に籠城之用意にて持口〳〵をかためゐ居申候城へ責かゝる樣子もなく我々かちにてうち通り申候式部少輔殿の御下知もなく候へ共若き衆我先〳〵とかけ付其内に式部殿御出にて總かゝりになり候へば皆々追討に成申候其時も眞入公の家中へ首を廿一とり申候尤太郎助も首をとり申候

一同日之晩方に岸和田の上道を敵出申候五六千も可有之候哉先刻の大合戰に一揆共負申候故さやかくと一揆とも了簡いたし申候内岸和田には勝合戰ゆへにみな〳〵追討にいたし第一中村と申敵之城へ過半(追)[一本止]込申候て中村を皆々取卷く衆も有之其外手をふさき申候故岸和田衆或は一里二里の内に打散居申候について式部少輔殿之本陣漸々三百斗有之候式部殿一代之手柄は此時にて御座候然所敵五六千にて參取卷申候式部殿はだうの池と申てはゞ長き池御座候此池をかたとり三百斗にて押むかひ備をたて申され候然る處に敵もきをゐ參申候て池の向に備をたて互ににらみい申候處に式部殿の御内新田勘右衛門と申は弓れ大兵にて御座候此勘右衛門敵方の能武者と見へ申候を二

人弓ふて射たふし申候然者敵事の外色あしくなり申候内扱方々にうち散申候味方共そろ〳〵とあつまり申候岸和田よりも皆々一さんに欠着程なく二千斗になり申候然る處に式部殿御下知ふて總かゝりになり候へは早々追崩し申候而追討になり申候此時眞入齋一番高名被致候片山太郎助も此時高名有之由三月廿二日兩庄之大合戰と申は此時之事にて御座候右兩度共眞入公并太郎助も高名御座候

一泉河内津の國の境に三國の茶屋とて御座候粉河法師に三池坊と申候者柴田久右衛門久六を呼入根來法師加り取出をいふし申候て合戰御座候此時眞入齋家中へ首三つとり申候

一泉牧尾法師寺領を落され無念に存候而(一本、儀)根來法師牧尾へ呼入我儘に仕岸和田へ之諸役不仕候故岸和田より押かけ申候へは根來者出合見事なる鑓御座候片山太郎助一番鑓并に松浦安大夫内淵本半六ふて御座候半六は此手柄ふより淺野但馬殿ゟ三千石にて相濟申候太郎助事半六より二十間も先ふて御座候是人々能々存候太郎助事古人故律義至極之者故全く主か功なとを申立候事不存寄候然故他を望不申そのまゝ眞入齋(一本、に)居申候

一泉州之事先にあら〳〵如此候少宛之事は中々限も無御座候眞入齋同家來之者并片山太郎助も樣々御座候事

一天正十三年酉三月ふ　太閤樣十万騎乃御人數ふて泉州并紀州根來ゟ御發向被爲成候

一一揆共泉州之あきにて鐵砲二千挺程ふてさゝへ申候得共長谷川藤五郎殿中川藤兵衛殿高山右近殿筒井順慶木村常陸守備前浮田中納言殿右之衆中馬を御入皆々こと〳〵く追散し首數餘多捕り申候

然故雀善寺、澤、田中中村四ヶ所の城は皆々明のき申候千石堀事之外やうがいよく御座候故能者共
千四五百人も籠居申候を三好孫七郎殿大將ゐて淺野彈正中川藤兵衛高山右近此衆乘取被申候何も
寄手之衆中は皆々討死之よし孫七郎殿御養父左京大夫殿より御讓之大功之者にも皆々長久手と千
石堀にて討死いたし申候由長久手之明る年故孫七郎殿あつそれ一手際と思召候故七十五人之功之
者とも過半討死仕候由

一眞入齋には其時分は舟手を被　仰付候故海上に罷在候故千石堀にては働無之候

一然所根來者幷雜賀者一さゝへなく皆々にけちり扨舟にて四國へ渡り申候

一紀州之者共にけおくれゐる者共三千斗有之候その者共紀州太田村に古き堤なと有之所それを搆に
して太田村三千斗の人數籠申候城は無之と聞へ申候三間はゝの堤に七八間の堀御座候由と聞へ申
候早々乘取候へと被仰付候はゝ乘取候はんつれとも左候はゝ余程人數そこね可申候間とかくに水
せめに可被成とてさて堤を被仰付候人數十万計にて晝夜十二三日に堤出來仕候扨川上より水を仕
掛申候へは一日一夜に大海の如くになり申候此時江州か（う）かの者の奉行仕候處水もり申候迚廿
人計り御扶持御はなし被成候由

一扨あたけ丸を御入させ被成候以上あるけ十三舟入申候小西攝津守其時分三千石被下舟手をいゝさ
れ申候是と幷眞入齋舟二舟入申候然處に眞入齋へも鐵の如くなる二間はかりも有之くしりとて堤
を掘あけ申候道具を　太閤樣の御前にて五本眞入齋へも被下候扨舟を能々板にてしたみ目くら舟
にいゝし向の堤へつけ申候水を內へ入申候雨のことくに鐵砲打申候得共少も手負も無御座候暫時

の内にこと〳〵く内へ水入申候扨内より降參仕候故御免被成候而大將分之者六十人張付に御かけ
被成候事殘三千斗之者は皆々たすかり申候
一右之通にて泉州三年之内天正十一二三にて紀州迄皆々治り申候扨中村式部少輔殿は江州の水口へ
六万石にて被遣候内々は紀州一國可被遣と思召候へとも此度泉州三年之内はゑかと致さる働無之
一撰大將白銀左介悴銀貳百枚にて敵方へ返し申候事敵地味方地をさくを致させ申候以上三ヶ條の
御さがにて六萬石にて江州水口へ御越被成候事
一それより眞入齋にも則式部殿へ御附け江州の甲賀へ御越被成候事
一其年越中佐々內藏之助御責之時分も眞入齋は式部殿に御附御越被成候しかれ共內藏之助降人に成
申候故何之働も無御座候事
一扨其年のくれに眞入齋式部殿を御はしり被成候然所式部殿より御構つよく御座候扨越前へ御引入
有之候然處を蜂須賀彦右衛門御わびことにて式部殿の御構相調申候而則眞入齋も彦右衛門殿ゟ罷
出申候而扨阿州へ眞入齋も御越有之候事扨一兩年過申候而彦右衛門殿を御出候て
一其後天正十六年眞入齋越前の堀野左衛門尉殿ゟ御へ被成候然處筑紫の御陣にて　太閤樣御立被成
候島津殿を御責被成候事左衛門尉殿も御立に成候得共眞入齋は舟手被申付候故舟にて九州せんだ
い川へまいり申候故陸地之事は眞入公には御存無之事島津殿坊主になり降參いたし申候故別條無
之候
一其年眞入齋は左衛門尉殿をいとま御申御出明る天正十七年に戸田民部殿へ御出有之候事

一天正十七年重而筑紫御陣御座候四國衆不殘中國衆迄被仰付候子細は其年肥後一國を佐々陸奥守に被下候處筑紫に大名共皆々島津方之者にて御座候本知御取上けに成候故みな〳〵申合陸奥守を責申候大勢故陸奥守も肥後を納め兼則肥後をあけのき中國へ引越申候に付而は其徒黨之者共所々に有之を　太閤様より御成敗被仰付候戸田民部少輔殿も肥後のあそ郡十万石程とり申候下之條内記と申者成敗請取申候あそ郡の内兄國と申所に丈夫に小城をかまへ家來之者共二千計持居申候處に民部少輔殿御申候は　太閤様の御前何とそ御わび事可申上候間左様に心得候へと御申たまし扱成敗可被致と被存候處内記其段を推量申候て城を明けのき申候ゆへに下之條與三左衛門と申内記伯父殘居申候民部殿の本陣迄は三里御座候と早々注進御座候それ〳〵皆々欠つけ申候然所眞鍋下家來早々欠付け以上民部殿之御家中廿一首取申候所に眞入齋家中へ十八とり申候

一此時片山太郎助一番乘一番首をとり申候則褒美として胴服一つ八木五石給候是には様々子細御座候事長き故有増にて候扨内記をは後蜂須賀阿波守殿を民部殿御頼御成敗なされ候此時阿州の家來の者共事之外働き御座候事

一天正十八年寅の年小田原御陣にて御座候此時則伊豆のにら山北條美濃守籠居申候所に何も屋々の御衆十三頭被仰付候

一蜂須賀阿波守長曾我部生駒雅樂頭福島左衛門大夫戸田民部少輔長谷川藤五郎木村常陸介前野但馬守高山右近大夫中川藤兵衛森右近筒井伊賀守何茂にら山を右十三頭に被仰付候

一民部少輔殿仕寄場は沼にて御座候付方々より材木を切よせ皆々ばい木にてかの沼をうめかけ申日

斗かゝりとくと埋め申候所を一夜雨のごとくに鐵砲打かけそのばい木の上へあぶらや水はしきにてはしきかけ扨火矢をいかけ候へは皆々やけ立もとのことく／＼に沼に成申候みな／＼あつけに入申候故又々垂而土俵にてうめかけとくと仕寄を附申候よし

一扨民部殿之仕寄場之向に出丸御座候を何とそ民部殿思食にてかの出丸を民部殿御とり被成候事此時に眞入公一番乘被成候事中々難成御座候所に無恙出丸を民部殿御とりなされ候事　此時當家御首尾よく候

一城中にもおたへかね出丸は捨にいたし内にて堀をほり塀をかけ矢きりをいたし丈夫に致申候ゆへ出丸をは取はつし中々内にたまられ不申候故引取申候事

一此にら山の城は北條美濃守籠居申候　太閤様之日本御泰平之打留にて御座候事

一然所に出丸を民部少輔殿御取被成候翌日城中よりやぐらへ上り申候は昨日は扨々能々出丸を御とり被成候左候へは一兩日双方互矢とめをいたし休申度候是式候得共有合申候間進上申候とて返り酒を竹の筒壹尺計に切それへ酒を詰百本やくらよりなけ民部殿へ城中より音物仕候由

一扨その由を民部殿早々　太閤様へ御申上被成候へは左候はゝ此方よりも返し候へ食物にならぬ（ぬ）[一本衍カト朱書]ものをかへし候へと御意の由に付則民部殿よりも生鱈百本わらつとに被成候て御返し候由然者矢倉へ武者壹人あがり久々籠城にて生魚を給不申候に腹中調置申候明日より（互）[一本無]一戰可仕候由申候由此北條美濃守は扱に被成申候事以上雜兵とも五千有之由何も眼黑き男之由

一扨小田原へ御入被成候而北條氏直降參申候へは則御陣中に御觸被成候に日本之人數三年御やすめ

被成候而扨唐入被成候間皆々左樣心得候へと御觸被成候よしそれより民部殿も富士山へ御入候而船板を拵舟以上貳百船御造り之由

一文祿元年正月十五日に伊豫國を出船にて高麗のふさんかいへ民部殿上下尤四國衆も御着被成候然者筑紫衆みな〳〵先手故に城々をせめ人數多く切すて先手衆御通りゆへにその跡を都迄に何のさゝへもなく民部殿など御通り有之事

一高麗三年の内(送一本遣)迎飯米共とりに參申候事萬々壹ヶ月に廿日は具足を着申候事

一諸大將三里五里程宛へたて城を仕り居申候事民部殿も都より奥ゑやくゑゆと申所に城をつくり眞入齋を大將にしてそれに山中織部と申者をさし添長曾我部妻之内三ッ野實次郎兵衞と申者以上三人鐵砲百挺相添城預り居申候然者或時唐人五六万にて取卷き申候處眞入齋も以上三度ついて出被申候家來者見事の鑓致申候片山太郎助一番鑓多賀井七郎左衞門同左吉右衞門以上三人つゐて出唐人七八百ふりきがけ御座候それへ追崩しつきおとし申候事

一眞入齋も二ヶ所手を負被申候家來之者共も皆々大きに手を負申候太郎助も脉所を弓にて射られ申候

一然所小野木縫之介殿奥ゑ御使に御通り被成候とて人數七八百斗御達被成候小野木殿功者にて御座候故後の山へみな〳〵人數御あげ扨ぼうしはた衣等迄も皆々山に立置て人數多き樣に見せ彼申候故唐人後卷と存候而皆々引取申候て眞入齋も一命御たすかりにて御座候事此時皆々眞入齋家來中共大きなる手柄樣々有之候先に片山太郎助大かたならぬはたらきにて御座候

一高麗にて福島大夫殿の御居城を唐人大勢にて責申候處を後巻に民部少輔殿長曾我妻殿まいられ內外より追崩し切そて申候此時高麗七つに分け一道の大將木想と申大將眞人齋討取申候大形ならぬ手柄にて御座候此時に片山太郎助も無類之手からのよし

一高麗にて民部少輔殿之御人數以上三千も御座候三つに分內一番備を其差引下知安見右近眞鍋五郎兵衛兩人に被申付兩人として指引申候事

一日本なこやゟ御下知にて高麗中之惡黨者とも唐嶋と申日本と高麗の間に日本の淡路島ほどの島御座候是をから嶋と申候是へ皆々惡黨者ともはいり居申候則此から島をとり申候樣にと御下知に付而諸大將御談合に而御座候事

一生駒雅樂頭蜂須賀阿波守戸田民部少輔福島左衛門大夫長曾我妻元親加藤左馬之介藤堂佐渡守脇坂中務九鬼大隅守來嶋出雲守(一本重)(官)野平右衛門桑山修理此衆中へ被仰付候何もおもかいと申浦へ出合談合にて御座候

一右唐嶋に居申候唐人先之舟功者にて候日本の(一本ま)(あ)たけ程御座候舟を日本之あみ舟程に廻し申候船のたゝかいにてとり申候事中々おもひもよらぬ事にて御座候事

一扨とり申候に極り申候文祿元年六月廿三日れ一番鳥におもかいの湊を乘出し申候から島へは八里御座候由何も明ほのに唐島に着申候よし

一此時に眞人齋代々舟手にて御座候家來能者餘多有之候然者是非とも一番乘可致とて密談いたし申候尤式部少輔殿も其段被仰付候

一然者おもかいの湊を夜四ツ時分に舟のいかりをあけ候へは水際音いたし申候故中いかりにいたしかいをしづかに落し水音のなき樣にそろ〳〵と舟をおき出し諸舟を押ぬけ申候扨唐嶋より五十丁沖中に舟をそへそれか片山太郎助元來水およき候を得申候故則太郎助海へとび入そろ〳〵とから嶋へおよき着扨東西五十七丁あなたこなたを能々見屆申候然者四方ともはけ山にてなるほとやせたる松所々に有之候よしそれより何方に舟を着能可有之所々を能々見屆申候て又海へとび入り沖の舟へおよき着唐嶋の段々を能々眞入齋申屆候それより舟を押寄から嶋へ着申候扨眞入齋則紋の有之のぼりを山に立かざりをたゐせ待居申候處に夜明かたになり皆々諸大將何も千五百船計にて押よせ唐島十丁計も沖に舟を着居申候就中左衛門大夫殿一人として何も必々そつじに陸へ舟御寄候事御無用なり樣子知かたく有之とて小舟に乘て總勢へ御觸直に被成候よし

一然所から島にはかゝり弁ろほりなと見へ申候是如何唐人はや〳〵(さとり)申候かとて彌皆々諸大將衆御用心有之所に夜明四方あかるく成申候と能々見候へは民部少輔殿御内眞鍋のぼりにて有之候然者眞鍋乘ぬけ申候扨々とて何も諸大將の御舟から嶋へ御着なされ候由

一然者唐嶋諸大將御取被成候一番乘は戶田民部少輔殿の御内にては眞鍋五郎兵衛にて御座候五郎兵衛内にては片山太郎助唐島の一番乘なり

一から島は竪の長之七八里西のとしへ何も陸地をおし見候へは西のもしに唐人番舟二百船もかりかゝり居申候

一扨諸大將衆から島の磯に皆々小屋をかけ御人候然る所へかの二百船はふりれ番舟棒火矢をほん

一高麗にて福島大夫殿の御居城を唐人大勢にて責申候處を後卷に民部少輔殿長曾我妻殿まいられ內外より追崩し切そて申候此時高麗七つに分け一道の大將木想と申大將眞人齋討取申候大形ならぬ手柄にて御座候此時に片山太郎助も無類之手からのよし

一高麗にて民部少輔殿之御人數以上三千も御座候三つに分內一番備を其差引下知安見右近眞鍋五郎兵衞兩人に被申付兩人として指引申候事

一日本なこやゟ御下知にて高麗中之惡黨者とも唐嶋と申日本と高麗の間に日本の淡路島ほどの島御座候是をから嶋と申候是へ皆々惡黨者ともはいり居申候則此から島をとり申候樣にと御下知に付而諸大將御談合に而御座候事

一生駒雅樂頭蜂須賀阿波守戶田民部少輔福島左衞門大夫長曾我妻元親加藤左馬之介藤堂佐渡守脇坂中務九鬼大隅守來嶋出雲守(官)野平右衞門桑山修理此衆中へ被仰付候何もおもかいと申浦へ出合談合にて御座候

一右唐嶋に居申候唐人先之舟功者にて候日本の(あ)たけ程御座候舟を日本之あみ舟程に廻し申候船のたゝかいにてとり申候事中々おもひもよらぬ事にて御座候事

一扨とり申候に極り申候文祿元年六月廿三日ニ一番島におもかいの湊を乘出し申候から島へは八里御座候由何も明ほのに唐島ゟ着申候よし

一此時に眞人齋代々舟手にて御座候家來能者餘多有之候然者是非とも一番乘可致とて密談いたし申候尤式部少輔殿も其段被仰付候

一然者おもかいの湊を夜四ッ時分に舟のいかりをあけ候へは水際音いたし申候故中いかりにいたしかいをしづかに落し水音のなき樣にそろ〳〵と舟をおき出し諸舟を押ぬけ申候扨唐嶋より左十丁沖中に舟をそへそれより片山太郎助元來水およき候を得申候故則太郎助海へとび入そろ〳〵とから嶋へおよき着扨東西五十七丁あなたこなたを能々見屆申候然者四方ともはけ山にてなるほとやせたる松所々に有之候よしそれより何方に舟を着能可有之所々を能々見屆申候て又海へとび入り沖の舟へおよき着唐嶋の段々を能々眞入齋申屆候それより舟を押寄から嶋へ着申候扨眞入齋則紋の有之のぼりを山に立かゞりをたゐせ待居申候處に夜明かたになり皆々諸大將何も千五百船計にて押よせ唐島十丁計も沖に舟を着居申候就中左衛門大夫殿一人として何も必々そつじに陸へ舟御寄候事御無用なり樣子知かたく有之とて小舟に乘て總勢へ御觸直に被成候よし

一然所から島にはかゝり弁乃ほりなと見へ申候是如何唐人はや〳〵(一本ゆどり さとり)申候かとて彌皆々諸大將衆御用心有之所に夜明四方あかるく成申候と能々見候へは民部少輔殿御内眞鍋のぼりにて有之候然者眞鍋乘ぬけ申候扨々とて何も諸大將の御舟から嶋へ御着なされ候由

一然者唐嶋諸大將御取被成候一番乘は戶田民部少輔殿の御内にては眞鍋五郎兵衛にて御座候左郎兵衛内にては片山太郎助唐島の一番乘なり

一から島は竪の長之七八里西のもしへ何も陸地をおし見候へは西のもしに唐人番舟二百船もかゝりかゝり居申候

一扨諸大將衆から島の磯に皆々小屋をかけ御人候然る所へかの二百船はゐりれ番舟棒火矢をほん

〳〵とはなしかけ往來いたし居申候然所へ加藤左馬之介殿之衆磯あそひの樣に致し五六船出し扨唐人の番舟へ切かゝり番舟二船切とり申候由しかれともこの外左馬之介殿御人數そこね歷々れ者とも果申候由左馬之介殿へ此時御感狀出申候

一何も番舟をとり候はんの由御申候へ共生駒雅樂頭殿蜂須賀阿州御申候者日本なごやよりとかく唐島こそとり候へと上意にて有之候番舟とは上意無之間無用之由と御申候よし自然とりそこなひ候へは唐日本之ひけと御申候由に付其通にて左馬之介殿の御とり被成候二船斗のよし民部少輔殿之御事高麗にて大病御煩出候付而　上意として日本へ家來共かへり申候然故左馬之介殿之番舟御取になり候事は日本にて承り候由

一文祿三年三月八日に京都にて民部少輔殿御病死被成候事御法號春林院梅香秋月居士とやらん申候由禪宗にて候

一然所に民部少輔殿に御跡目無之故則家來之者共に士卒とも召連候而則高麗へまいり申候樣にとて上意にて又々何も民部殿之家來參申候漸々其年はかり相勤申候て歸朝仕候

一然者　太閤樣上意として民部少輔事跡目無之不便に　思食候間家來之頭分之者共何茂皆々御直被召出候由にて罷出候其衆中

安見右近　　眞鍋五郎兵衞

山中織部　　田島兵助

戶田助左衞門　　佐藤傳右衞門

武山太郎左衛門　　　　戸田七左衛門
戸田左太夫

以上九人大坂にて御禮申上候則伊豫にて知行被下置候然所に高麗にて三年之内迄迎一度もかけ不申種々のはたらき共御座候へとも少分之事は中々數しれ不申候由

一慶長五年子年石田治部少輔關ヶ原へ取籠申候其時分眞入齋其外民部殿より出申候以上九人之者共并まゝ余人も有之(官)野平右衛門なとも其内にて候大坂之御番丘奉行方申付候然者先は治部少輔にて有之候

一其時眞鍋以上九人之者共寄合談合は此度とかく　權現樣之御利運相極申候何そ一御忠節仕りよく候半とてさて紀州和歌山之御城に桑山法印居被申候法印とは眞入齋挨拶能御座候に付則九人之談合にて眞入齋を使にして和歌山法印方にまいられ申候意趣は

一此度兎角に　權現樣之御勝にて御座候然者大和地之分治部少輔方にて有之候間紀州和歌山の城に法印以上九人之者共人數合二千五六百も可有之候間是にて籠城いたし扨大和地を皆々やきはらひ急度　權現樣へ御忠節可申上候左候はゝ大きなる事に有之候間是非共〳〵とて大坂より眞入齋兩度迄紀州の法印方へ被參候へかれ共法印中々一圓に請合無之候それ故眞入齋尤殘之衆中も無是非打過被申候

一然所に關ヶ原落城以後大坂川口丘奉行より番被申付候衆中尤民部殿方出申候九人も　權現樣より御暇被下夫故天下御直を浪人申候御事然故秀頼公之御馬廻りを罷出申候事

一慶長十九年寅之年大坂御陣大夫殿ハ御事武州江戸に御入候然故御子息備後守殿を十五歳にて被仰付則眞入齋も御供いたしまいられ候片山太郎助も同くともにて候其時分眞入齋家にたのさいたしたる人も無之故太郎助第一之功之者に而御座候事

一十一月中旬に大坂天滿へ參着申候天はに陣場渡り申候故天はへまいり申候仕寄場渡不申候故淀川の筋なから川のわかれを天滿より二里斗上を佐田の宿と申候所をなから川へ水參り天滿川へ(水)不參候樣にとて御普請被　仰付それ故佐田の宿に備後守殿之御人數普請をいたし居申候故手には逢不申候扨御和談に成申候而から大坂の總堀御普請被仰候に付而正月に普請を仕舞二月に廣島へ歸り申候事

一元和元年卯の五月に大坂又御陣とて則五月二日に廣島を總家中備後守殿を大將として出船にて御座候

一然者十里計廣嶋を押出しかはかりと申浦にてたほかゝりを備後守殿なされ候時分尤總勢もその通にて候然る處に眞入齋申出され候ハ承候へは大坂の城中事之外つよく有之候と承候左候はゝ播摩室の湊より兵庫迄之內舟路十八里之內舟五十船とかゝり申候湊無御座候此備後守殿之御人數二万計舟計も七八百船有之候

一兵庫總て攝津國地皆々敵地に成候而それへ乘かゝり候はゝ千万如何之御事に御座候間先に物見之舟にて侍一人可被遣候彌其通に御座候ハゝ備後守殿總勢舟共に四國地へ乘かけ鳴渡をおさし下泉ふけいゝ并淡輪浦へ皆々御舟を着可然候と眞入齋達而御申候へ者家老福島丹州長尾隼人尾關石州

尤之由にて早々先物見を御遣候所に物見之侍とくと見屆歸り申候一圓左樣にて無之候未津ノ國之內大坂斗にて敵中々はり出不申候由申候兵庫の浦いかにも〳〵無事之段申候夫より早々おし出し申候右之段々眞入齋了簡にて御座候

一何も馬舟おそくまいり申候眞入齋も舟たゝれりかへ斗參申候故皆々眞入齊者共步行立にて御座候

一兵庫より四五里參申候兵庫へハ五月六日に着申候則七日之未明より大坂へ皆々大將分斗り馬にて殘は步行にておし申候

一兵庫を四五里參申候と大阪やけふり見へ申候西の宮にて備後守殿の御意として眞入齋に大坂之樣子見申候樣にとて先へ眞入齋ハ物見に參申候尤眞入齋家中共參候

一扨大坂へ日の人あひに眞入齋御越候てさて加藤式部殿の御陣場高麗橋筋へ參り大坂の樣子具に見屆歸候へはなおら川にて備後守殿に行逢ひ扨大坂の品々具に申上候備後守殿之被　仰候ハ秀賴公ハ如何御成候と被仰候へハ眞入齋申上候は秀賴公ハ御切腹被成候と申上られ候

一尾關石見と申家老大之大口者にて御座候後日に眞入へ申候先日物見之時分に眞鍋殿　秀賴公ハ御切腹と御申候がいかにも八日迄御堅固にて御入有之候に眞鍋殿是ハいかに〳〵と石州申され候然時眞入齋石見に申候はそれは石州の軍の法を御存無之故にて御座候天守之二重目へ火かゝり候へは大將之腹切所ハ天守にて御座候大將之御心次第にて御腹御きり不被成候段ハ無是非候物見之者の申候ハ如此に候と眞入齋御申候へハ石州も中々迷惑之樣子にて皆々御かんし候由に候是偏威言之御事御座候

一備後守殿之御陣場ハ天滿にて御座候然者七日之日の入相になゞら川の邊にて皆々寄合談合御座候
其人々ハ

福島丹波　尾關石見
長尾隼人　大崎玄蕃
村上彦右衞門　武藤修理介

此衆中談合にて候加藤式部殿之後に陣取可然候由何も談合極り申候所
一此時眞入齋指出て被申候ハ其段ハ能ニ七御同心に不存候と申候へハ尾關石州眞鍋殿其段ハ如何とに
がり聲にて申候そゐにて眞入齋御申候ハ天滿に御陣取可然由子細ハ加藤式部殿之後せんばへ參候
にゝもそや四ッ過に夜更可申候先以式部少輔殿其外の大名衆之御人數の衆中今晩ハ大坂方何方よ
りか一揆もおこり候はんと心待申候所此備後殿之二万斗之御人數夜中にあなた此方被成候はゝ多
分夜討なとゝ式部殿之衆も存知候はゝ如何樣之御大事にかなり可申候哉又ハ左樣にあなたこなた
被參候はゝ多分は備後守殿之御むほんかと可申候是はいかゝに候
一天滿へ參へ候へハ御家中おくれ／＼に參申候者とも皆々御陣場を天滿と存候故先に道にもまよひ不
申候天滿へ無事に參着申候事
一扨式部殿武藤殿の衆中そや天王寺よりはいぐんの者ともの首をとり申候て皆々手にあひ申樣に被
成候由其あとへ御越候事も如何千万に候本意にて無御座候事
一飯米舟五日も三日も跡よりならでは參ましく候尤馬のそみも今夕より無御座候天滿に御陣取なれ

ハ野邊又は人家にも或ハ麥米なとも澤山にて可有之候(一本納)(殊)小屋道具澤山に御座候旁以天滿に御陣取能可有御座候と眞人齋達而申達候へハ皆々扨々聞事なり尤至極とてそれよりして天滿へ皆々人數押有之其夜中に備後守殿天滿へ御着陣にて御座候事

一又其夜四ツ時分に天滿へ着申候是も眞人齋申候ハ今夕是非共に天王寺の御本陣へ備後守殿早々御越　權現樣へ今夕罷着申候と有之段御申上可然候と達而申候へハ三人之家老尤と同心にて七日之曉に天王寺へ參候而備後守殿御着陣之旨申上候は　兩御所樣にも事之外御機嫌のよしにて夜明時分に備後守殿天滿へ御歸被成候御事

一同五月十三日之比京へ參申候尤備後守殿の御供眞人も參り申候扨それより天下御家來へなり御泰平にて則備後守殿も藝州へ御歸城尤皆々一年は江戸詰一年は國にて御座候大夫殿御父子共左樣にて御座候事

一然者元和五年未六月八日に廣嶋に申來候は大夫殿御身躰御はたし則信濃川中島に四万五千石にて被遣候由申來候

一左かれハ家老物頭不殘寄合以上五十八斗丹波守所へ寄合談合にて御座候此時も眞人齋第一とりへその事申候事

一先以總樣(一本樣被字)申候とかくに大夫殿の御自筆御判不被成候ハヽ御城の事是非渡申間敷候皆々急度籠城可仕と相極り申候事

一扨銘々妻子共をおとし〳〵本丸へ籠申候さて持口〳〵をそれ〳〵に割付請取皆々死覺悟にて御座

候

一上様方以上十萬騎之人數被仰付候四國山陽山陰兩道以上二十ヶ國大將衆被仰付扨藝州廣嶋へまいられそれ〳〵寄手衆陣取御座候事此時皆々組頭衆中何も品々色々有之其段者餘之卷に具に書付申候有増如此御座候あつはれ廣嶋衆中々見事之御事とかくは難筆盡事に候

一然處に江戶大夫殿よりは牧野主馬と申者御使として御越にて御座候少も〳〵慮外申上ましく候掃除以下隨分きれいに致早々御城指上申候樣にとて申來候然故上下とも無相違御城渡申候

一同七月朔日に廣嶋を皆々出船申候此時に眞入公小身には候へ共家來之者壹人もはしり不申候

一尤片山太郞助此時之樣子段々御座候事

一此時ハ太郞兵衞と申候世悴太郞助と申候

一天正十一年より太郞助事眞鍋殿へ參眞入公之御場所有之度に一度も太郞助も欠不申候尤泉州三年之內高麗三年之內筑紫之御陣關東伊豆のにら山皆々眞入公の御手に御逢之時分太郞助事中々一度もはつれ不申候事

一同年九月中比に眞入齋其外大崎玄蕃村上彥右衞門眞鍋五郞右衞門以上三人を紀伊國　中納言樣へ

上意として被遣候由にて京都へ御よび寄本多上野介殿安藤對馬守殿土井大炊之助殿酒井雅樂頭殿より竹中釆女殿を御使として被仰渡候右三人之者共紀州之中納言殿へ被遣候間左樣に心得候へとの御事御座候水野次郞右衞門も其內に而御座候かと覺申候

一此時眞鍋五十二歲大崎か六十二歲村上は五十九歲とやらん申候

一右之通にて眞入公之御一代之御事有增にて御座候泰岩居士の御書置にて御座候はんが御國元に御座候御書置とは是れ中々あらく〳〵敷御座候ゑかれ共先にあれ程に御座候得者能御座候

一此時に眞入公を細川三齋より一万石に附申候

一加州よりも一万石に附申候

一備前之中納言殿よりも一万石附申候度々大名に御成候事候へ共無其儀候

一片山太郎助も加藤左馬之介殿もさはく〳〵御招被成候方々より左様に候へ共古今かさき御人故小身之眞鍋殿を見捨余所へ參候事なり不申候由に而その通に眞鍋殿に罷在候事 （以上眞入齋御年譜ト題スル一書也）一ト年譜

一祖公外記附錄に曰く 御城御普請之節諸大名之陪臣共へ御飯を被下置候節向に鮒魚之燒浸を附有之を眞鍋五郎右衞門は是を給度候へ共誰も給不申故不給作法も有之哉と存側に居候加賀山隼人に耳語候へは此席に諸國之陪臣共大勢集候得共其方と我等に双ふ武功之者有之間敷候高知行取候而も横座に居候而も恐に不足給度候はゝ勝手に可被給と大音に答候故一座興を醒候　將軍にも三度其席に被爲成何も緩々給候樣との上意有之候隼人は細川越中守忠興之家中にて六千石領候

一大人雜話に曰く 眞鍋五郎右衞門は家に在ても只陣營の如く食事する時は臺所に出て家來下々と共に並居つゝ食しぬ且つ飯も常に不精の玄米也汁と杳のもの斗りにて菜なし五節句朔望廿八日抔には赤鰯一つつゝ燒き是を有合の木の葉に盛りて食しけるとはん誠に片時も武の心掛離るゝ事なく知行四千石にして如斯也と（善）カ父語り給ふ ホノマヽ

一紀士雜談に曰く 眞鍋眞入齋十四五才之時初陣に首を取手際好候共夜敵の傍目につきくらかりへ參り兼候由戰場の勇氣と闇夜を恐るゝ筋違候哉と聞たる人の不審なり

一宇佐美竹陰山緖之兜の記に曰く 眞鍋眞入齋（五郎右衞門貞成）の桃形の兜は日根野織部より貰候由桃形の甲にては隨一と何も申候脇立もの は矢篦樫の節高の竹室尺餘り余を角本三寸程黑塗に致し末は竹を見せ其先に一尺程の綟りを付右こよりの先へ丸房を付候故馬を乘立候得者兩の立物の丸房冑の上にて綟を織候樣になり中々見事に御座候由大坂落城の日長柄川の堤を眞入齋乘通候節右兜見事に有之諸人譽申候由右兜定て眞鍋方に可有之候勿論眞入齋御家之武者奉行被　仰付候時分　南龍院樣より被下置候滑革の吼瑁の具足羽織（右）一ト本ニ 桃形の冑二代目五郎右衞門代迄は所持仕候

牧野長虎 兵庫頭

牧野長虎、初稱金彌、父曰主殿、越前人、仕秀康公、食祿三千石、長虎十一歲、與其友有違言、斬之而逃去、寓於熊野祝史家、一日公詣熊野社、長虎拜鹵簿於道傍、公見而奇之、擧爲近侍久之益被寵、嘗從公於江戸、公偶臥病、長虎侍養具至、目不接睫者四旬、衆皆異之、一年紀伊川大溢、長虎自請防之被允、乃急遽馳至、壞屋伐木以防之、長虎時年十七、公愛其遇事剛果、其明年擢爲大番頭、長虎自喜、以爲武士之榮、後累拔擢爲執政食祿六千石

長虎嘗從公於安藤直治家、公嘗聞直治有一愛少年、宴酣命出侍、直治不奉命、公強之不聽、公有不平色、左右皆懼獨長虎進曰、公何不懌、飛彈之不奉命、不足咎也請陳其故、若明日幕府、臨公邸、命使臣出侍、公必不聽也、然則飛彈之方寸、非武士所欽慕乎、臣深有感也、直起擧直治杯飲之、於是公意解、滿座生色、再謦歡而罷

公嘗獵伊勢傷足、使遠藤正次（兵右衞門）遽召竹田慶安於國都、正次以長虎有恩寵、先過長虎家報之而後遣竹田氏、長虎聞之、卽一騎馳赴、從者從後追至、既而正次與慶安共抵橋本驛、驛吏要於道曰、今牧野氏獨騎馳焉、從者追至、使僕報公等曰、宜速至焉、正次大驚、叱咤追及、謂曰、予迎慶安、實出內旨、不可使他人知、特以君有恩寵私告之、若君先予而至、予將獲罪矣、長虎然之、乃使二人先行、而從其後至、長虎常鞍馬以備緩急、

長谷川勘八弟曰勘助、頗有才幹、欲別開家、久而不擧、憤惋出亡、公特命還之、使勘八守之其家、亦不擧、勘助益無聊、既而勘八、聞官將處勘助法乃使出亡、公聞之怒曰、勘八失所守者、是亦宜處法、勘八固分受

法、俟命於家、親戚故舊會議救之、不決、乃相共謀之長虎、長虎曰、公裁失宜、予爲辨之、其夜登城請謁、時公旣就寢、命俟明日、長虎白事急、不可過今夕、公乃出見、長虎曰、聞將處勘八法、臣謂公裁失當、公不懌曰、失所守者、處其罪不亦可乎、長虎曰、若公意何不命隊長守之乎、今使兄守弟、以情考之、是敎之使逃也、勘八不思之、漫然奉命、終使其弟抵法、勘八何面見人、縱公不處法、彼將不能（一本第）止也、是徒失一士、豈不可惜哉、於是公釋然意解、速命勘八出仕如常、初長虎、見、公而論之、公色甚厲、長虎無毫所憚、人畏其抗直、

中川數右衛門敎授砲術、嘗使其二弟子、同仕高取侯、甲某循良善誘人、乙某麤率失人心受業者、皆歸甲某、乙某不平、屢讒之其師、師信之而怒、使人收所嘗授法書以絕之、甲某不服、其人乃還報、師不聽、使再往收之、甲某益不服、其人病之、欲刺而殺之、却爲所殺於是高取侯、使人來報中川氏、使者狂而鬪死、且曰事起於狂、請使爲敵者不償死、時公在江戶、三浦爲時、及長虎留守、長虎聞之怒曰、是決不可聽、夫狂與不狂姑置焉、爲我紀人之敵者、安得無故而宥之、其言又甚慢甲某之首、必可速斬而致、不然予將自往取之、高取侯、不得已、斬其首致之、

長虎、妬堀部佐左衛門功、欲擯斥之、爲加納直恒所排擊、深慙之、必欲擯斥堀部以遂其志、不成遂亡命上京師匿於堀川氏、公使吉見經孝（喜左衛門）蹤而獲之、長虎之亡、欲擾國乘其釁以成其志、於是密報松平信綱以公有異心、信綱怪密報之公、公驚與諸老臣議、光貞公進曰、命屠腹而已、公曰宰相斷允當、唯後患難測、暫宥其死、以俟他日耳、乃詐誘召還之、配於田邊而死

長虎有五子、長曰新藏、次傳藏次太郎、次藤丸、次千代丸、皆被配、藤丸性剛强長大、有膂肉其被配、甫三

歲嘗謂守者曰、汝等勿用嚴衞、予欲破之易々耳、試使視予伎倆、因執其閑木振之、劈歷有聲、守者大懼、百方慰之、藤丸笑曰予既得罪被配　豈敢逃去哉、汝等勿以爲意、嘗怒守者無禮、破閑木出、搏殺守者　逃近江大津、終爲所捕獲、吏卒皆畏藤丸、其就刑股栗而立、死時五十四、在獄中凡五十一年其言語動作皆得機宜、絶不似生長獄中者云　以上皆牧野傳記

按スルニ　牧野兵庫召捕ハ慶安三年十一月ニシテ藩祖同年ノ譜ニ詳ナリ

牧野兵庫頭之事

南龍院樣御取立ありし牧野兵庫頭長虎出者猿樂役者の子と云又公家出とも云說あり其實を能尋るに越前の素姓にて同國藤島の一向宗長命寺の兒姓を勤めし者也子細有て十五才の時紀州熊野新宮の社人方に寓居し有けるか或時　賴宣卿御放鷹の節社人方へ立寄らせ玉ふ時金彌兵庫頭事幼名か容色勝れたるを御覽あり被　召出始ハ禿童に召仕はる才智勝れて伶利なるに依て日々出勤し程なく御秘藏ありて御小姓となり晝夜御側を去らず渥美太郎兵衞友元預りて劔術ハ村田左馬介元柳生但馬守內第二代目か弟子に被仰付三四月程之內但馬守を取立し仁始め御惣領柳生但馬守宗冬厄介寬永六年四千石被　召出御家士の內にも並ふ程の器用也

賴宣卿在江戶の節御不豫の事ありしに四十日程晝夜一睡もせす相勤めゐるを以て益御意に叶ひ御加恩日を追て重く諸士是が爲に手抜拱く或時和歌山紀の川の下八幡堤洪水にて切れたる時牧野金彌十七歲也是を築留可申由を願ふに依て早速に被　仰付急に彼地に至り在家抜壞ち木抜伐て難なく大河抜築留たり公其大氣なることを御感ありて十八才之時に大番頭となる渠も若輩の者ふ大番頭被　仰付候儀武士之名聞難有奉存候迚御辭退も不申上彌器量あるものと御褒美ありて若輩の頭

なれは迚十二組の内より手ふ覺ある者を撰びて金彌ふ御預威勢日々に盛んふして程なく御家老こなり六千石給そり兵庫頭と受領し平生君命の事に於てハ一毫も私せさる我身にかゝる程の事なれハ迚何事にても溜ゐ事ふてハ是なき生質也此兵庫頭紀州孜立退ける予細堀部佐左衛門之罪場の論より起る其大概は堀部佐左衛門（大御番後御供番）御家士の肝煎にて五百石御供番相勤なり御舘にて御供番と云ハ江戸詰の時ハ道中母衣串孜持そる事也是ハ母衣かけて小斥候を勤るに依て也道中の母衣串持せし體殊の外目立ける故一さセ制禁に被　仰付けり其年佐左衛門江戸詰に當りて傍輩と參府せり翌日に母衣串に母衣孜飾り置ける傍輩共見て御制禁の母衣串孜佐左衛門持せたるは謂なしと鑑々中にも惡口ふ鯮すくひにせんとて持せしものならんといふ夫より誰いふとなく佐左衛門鯮すくひと異名していひけるとなり或時大河内杢左衛門か明番を更取ける時佐左衛門歸る迚立しか各ハ我孜鯮そくひと異名せられし奇怪也といひ出し一ッ二ッ言募りしか杢左衛門言譯少し妻手ふなり既ふ言遂へらるへき體なりし時丹羽五郎左衛門といふ相番是ハ御番所へは出ざりしか次にて聞杢左衛門我か相手になるぞと踊出佐左衛門其方は新參者にて古番のものへ相談もなく氣儘なる事孜そるのみならず過言也と還り込る母衣役の者衆ふ母衣孜持せさるか僻言か夫孜何かとは武道に不心掛なるものとたは事也と云五郎左衛門か曰く制禁と被　仰付し上はゑとへ持參そる共出す事ならず御制禁の上は若もの事あらば上の御了簡有るべし我々にならひあるべき也其上に何の武邊手柄もなき身として侍の付合不心懸とは推參也と刀に手を懸んとせし其外相番寄合て御殿也と制して其儀はしつまりけり其比いたつらものゝ狂歌ふ

大河内は頭(ハ)ちふて口廣く味ひわるく尾玆を得えける

其後何となく寄合へ役替して佐左衛門は紀州江歸りけり其比朽木瀨左衛門といふ相番也此ハ朽木兵部が弟也瀨左衛門重病にかゝりし時紀州卿に親類迚も無之新參の獨身のもの故に相番共看病せしか終に瀨左衛門相果けり依て朽木兵部より瀨左衛門相番のかたへ使札抔以始終世話となりたる事謝禮す然るふ此堀部佐左衛門奸侫工のものなる故何かと己か立身の種共心懸て居けるか或時叡山根本中堂修理の節奉行として朽木兵部叡山に居候事を聞濟し翌年江戸詰の節終に叡山一覽不仕候間此度序に立寄度と願抔支配迄申立登山を全く一見れ爲にあらず兵部に近付にならんとの手術也扨叡山にて兵部宿所江至り相番使札之禮を延へ進物を持參面謁抔とげ彼是咄の序に我大坂御陣の節藤堂官内手に付八尾の地藏堂にて小返し抔致し覺も有之候へは何卒目立候御奉公仕度と咄を兵部と舊知の如く語り連て其後ひたすら音信抔通して懇志にしけりその比藤堂宮内城下伊賀の上野より和歌山へ來り小間物抔商ふ者ふ理左衛門といふものあり佐左衛門渠に念比ふなし紀州へ來る時は宿をして心安く手なつけゝる此理左衛門は宮内方へ出入し咄伽をも致そものゆへある時佐左衛門理左衛門へたのみけるは我等ハむかし大坂御陣之節にハ宮内殿手に付て少しの稼も致して當御家へ五百石にて被　召出たれともはか／＼敷日立役にもならず自分に取なしも難致今日迄過候也貴樣わ宮内殿氣に入て居らるゝ事なれば我等噂も執成有て何卒宮内殿より狀を給そる樣に働き玉はるへし其文言ハ其許事以來中絶何方へ被居候事も不存候處紀伊殿へ被　召出候由目出度事に候大坂にてかせき有之候へハ何卒目ふ立候御役儀にもなり申さるゝ樣にと願申事に候と被下候

はゝ年寄頭分の者も承り候はゝ殊の外我等爲になり申事也偏に貴樣の働賴み候よし申けり理左衛門日比懇に預り忝く思ふ折ふしなれハ心安く領掌して伊賀へ歸り右之趣を倶に宮内殿へ語りけれハ心得たりと挨拶ありけり又夫より前に朽木兵部ハたやすく音信しけるゆへ何卒我等儀を紀州役人共へ御挨拶なされ玉るやうにと申送る故兵部より江戸に居被申子息方へ申遣し紀州御城付衆へなりとも登城之節堀部佐左衛門儀大坂御陳之節八尾の地藏堂にて小返しの働ある仁にて候何卒御取立是有樣にと年寄衆へも噺玉る樣にと申されある故に御城詰の者退出して其比江戸詰の家老三浦長門守に語りけるか長州聞て少し斗りのかせき言立るものならい御家には左樣の者斗升てもかる程あるべしとて少しも頓着せず打過けり然るに小間物屋理左衛門紀州へ來る時宮内よりの書狀を持參して佐左衛門へ屆けり佐左衛門不斜悦ひ自分として開封せず組頭の方へ右の封狀持參し宮内殿よりかよふの封狀到來を御國境の城主より書狀の來り候を私に開き申べき樣なし依て持參仕り候といふ組頭是をきゝ念入候御屆尤也我等此狀を披見もいかゝなり我等此狀を預り置年寄衆へ申達すべしとて預り佐左衛門歸りて組頭ハ三浦長門守宅へ至り其段を申述る長門守聞てさらは是へ佐左衛門を呼て開封いたさせ然るべしとて則佐左衛門をよび寄長門守申聞るハ宮内殿よりの狀私に披見なき段念入候是にて開封いたされよといふ佐左衛門封を切りみつから狀を半見て扨もく\かやうの狀とは存せは御斷申候無益の事に御世話かけ申たりと言てくるく\卷て懷にせんとする時に長門守それはいかやうの儀と問ふいや申上るに及ますと答ふ再三長門守尋ける故私身の上の事を申越候といふに於て其狀を見度とてひとつ一覽して是は手前へ預置そとて取納めし故佐左

衞門は歸へ了ける長門守同僚にかたり兵部殿宮內殿より仰越るゝ上ハ實に場を蹈ミたるものなれば組頭の明もあらハ組をも預けて然るべしと內談ありけると也

時ふ牧野兵庫頭ハ武邊の筋といへハ咄しをも聞たふり武氣を好む人なれハ堀部か大坂にての樣子かんはしく思ひ予前へ呼て詳ふ物語をも聞たし出入有之樣にと再三申通するといへとも堀部いふゝ思ひてか來らず或時途中にて行逢しに依て兵庫申けるは何とて我等方へは參らぬそといひける時佐左衞門申は其方へ參りても何も御願ひ申べき樣も無之故參り不申と何の會釋もなく申ける故扨々慮外なるおこり者と甚立腹して別れけり佐左衞門ハいかに方便しても兵庫方へ取入度おもひけれ共以前口論したる丹羽五郎左衞門大河內杢左衞門は兵庫が相口にて常々出入し親しみける程ふ梁等に出會ふ事を厭ひて器量氣なる挨拶しける物と後ふは諸人も察したり兵庫歸宿して右の兩人へ佐左衞門返答を語り扨々ふくき奴也と申ければ兩人もよき幸といよ〳〵佐左衞門を言消すほとに兵庫常ふにらみ居たりけり或時田宮平兵衞方へ浦上新八村上（卿）八かれこれ四五輩夜長廻是なり時に浦上殊の外遲く來りしに付一座待兼居る處へ浦上來る何とておそかりしと問ひければされハ是へ參りかけふ堀部佐左衞門へちよと立寄しに八尾地藏堂の小返しゑたる手柄はなしか出聞さしても立かふく手間取延引仕りたりと語る一座の者其武邊咄はいふやうの事にや咄されよと申を故其小返しの働きを語りさためて首を取り申されたらんと尋候へ共中々の事首をも取ゐる所藤堂和泉守家來伊藤彥助といふもの來て首をうばひ取逃行候御凱陣の後和泉守詮議有て奪取の科ふ依て彥助成敗其弟伊藤吉助ハ兄の科ふよりて改易ふなり候と咄し候と語る時ふ一座ふ村上（卿）

八是於聞て浦上を咎めて其咄一定一言も違ひはなきか重て左樣になきとはいはせぬそ尤其方へかゝる事にてハなし其彥助といひ吉助といふも我等か從弟也兄の彥助ハ平生身持不行跡にて有けるゆへ其科にて切腹云付られたれ共奪首して成敗にあひしふあらず吉助は何の不埒もなく能勤め其儘召仕れしかども兄の切腹したるにおめ〳〵と勤もならず依而自分より暇を願ひ浪人して當時桑名の越中守殿へ勤め居候也武士の奪首ニたる抔といはれて其分には捨置がたしと以の外腹立を浦上聞て佐左衞門が咄ふつけも落しもせぬそ侍の冥理菓か物語は我等證人そといふ又かたはらよりも佐左衞門の不屆もの證據な㔟手柄咄し彥助か死たるを聞て左樣の事いふかなんとゝ口々に詈りその座は興もさめておの〳〵退散を村上(卿)[一本鄕]八ハ夫より村上彥右衞門宅に至り彥右衞門五千石にて番頭なり右之彥助吉助は彥右衞門爲には從弟也仍而(卿)[一本鄕]八來りてニゐ〳〵の趣於語る彥右衞門立腹し其儀は我等方より伊藤吉助に飛脚於立て其由於可申遣とて早々申遣しけり吉助是を聞て武士の上に左樣の事いはれては捨置かたし和泉守役人へ達し右の明於立申度候其間御暇被下候へと願ひ申をに依て浪人して古主和泉守へ至り年寄役人へ達何れそより彥右衞門方へ其譯あかり立て遣され玉はり候へと願ふに尤なる事なり彥助切腹言介浪人のわけ具ふ申遣をべしとて彥助儀ハ不埒有て切腹申付奪首の科と申事ハ跡方もなき事也吉助は其儘勤申儀拂ひなしと申渡といへとも自分より暇於願ひ家於立去り候よし和泉守役人より彥右衞門方へ書簡於出を吉助是於受取て又々飛脚を以て彥右衞門方へ遣しけりよつて彥右衞門(卿)[一本鄕]八申合せて御詮義被成下候樣にと申出たり三浦長門守加納五郎左衞門月番にて是は亦大事也御旗本より口入の佐左衞門事也且栃木兵部藤堂宮

内よりも兼而被申聞たる事もあれは大事に及はぬ樣に吟味仕方もあるへき事と日數を歷たり時ふ牧野兵庫此儀を聞て兼て慮外ものにくしと思ふ矢先てはあり急ふ村上彥右衞門方へ見舞對面して直に件の始終孜聞和泉守殿役人より遣したる狀披見仕度といふ彥右衞門それは御目ふ懸るに不及といへ共達て所望をる故ふ取出して爲見けれれ披見して此狀をは我等預り申とて懷中して立歸る夫は我等證據に仕る書狀にて外へ出候物にてらずと取かへさんとをれとも勢强き兵庫頭か取納し事なれれ耳にも聞入を立歸りけるにそ彥右衞門も力なく打過けり兵庫は立かへりて佐左衞門武邊の上に僞孜いふ事大閤人傑ふもかけて武士の見おらしめにせんと腹立匈りけり其比　台德院殿の御遠忌ふて各々廟參勤番之節兵庫に長門守五郎左衞門出會たり兵庫兩人へ被申けるれ彼武邊の僞りを云ひし大盜人め詮議相濟申たられ見懲しに磔にかける奴にて候と申けれは加納五郎左衞門聞もあへす武道の事片意地ふ不詮義する家老を我等は磔ふかけ申さんと會釋もなく挨拶しける程に兵庫推參也五郎左衞門と脇差に手をかけるを有あふ人々是れ日といひ場所といひ何事ぞと取靜めてけんくわにはならされ共されとも兵庫ますく怒り强く是非ふ堀部孜磔ふかけて見せんといきど孜り直(一本參)(奏)ふ及ふといへとも武道之儀れ隨分吟味强き家なる故明白の輕重孜以て御僉義なさるゝ　賴宣卿なれは兎角具に御僉義可有思召にて御承引なし是に依て兵庫深く憤り何國ともなく出奔せり　賴宣卿の命にて京大坂奈良堺近國の御領私領へ人孜入て御尋あれとも其在所知れにに其比吉見喜太郎（紀州家弓の天下一は此吉見喜太郎か子喜右衞門といふものなり）といふ出頭人器量才覺てある男なりけれれ渠に了簡致し尋見よと御内々にて被　仰付喜太郎畏り夫婦連ふて京都に忍ひ上り妻孜驅(すあひ)維女に拵へ小間物縮おしろ

い古着切類抔あきなわせて公家衆へ出入させ諸色抔安く賣らせけれハ次第に近付も廣くなり攝家方其外にも重寶なるすあひなりとてゑやりける兵庫ハ堀川殿の聟なり（堀川宰相）此內ニ隱し置ゆへ知れ兼候ものならんと喜太郎推察せし故右の通に拵へ堀川殿へ取入ひたと出入けれとも中々左樣のけしきハ聊も外へハ見へさる體なり或時老女かのすあひニ語りけるハ何と十六七計の容義よく取廻しも相應の女奉公人あるましきや田舍ゟ病氣保養の御客あり其伽ニ致度かゝへ申事也賴み申といふ心得候請合立歸り喜太郎ニ告る喜太郎天のあたえと悅ひ紀州の我姪の十六歲にて容儀もよかりし抔急によびのぼせ兵庫が容體氣質年の比委細申含め奉公に出しける何事ニよらす上への忠節なれハ女なからも能其旨抔そんじ相背かずに勤右之通り之處見化し候上ハ欠落すへしと道程も其前ニ見覺させ扨公（家）〔一本家ナシ〕奉公に出したり容儀心ばへ元ゟ申含めたる事なれは萬事心抔付ける處ニ早速召抱られ彼兵庫か側へ仕へけるとなり女側ニ居て考へ察するに一つとして喜太郎か詞ニ違はす是に依て隱に相違なき段抔告知らせける然るニ江戸松平伊豆守（御老中なり）より內意ありけるハ御家士牧野兵庫頭長虎方より　賴宣卿ニハ御隱謀のきさし是あるとの訴人ある事兵庫頭より書通に及ひ夫に付出奔致たるむね也其實否詳ならは爲御心得申上候由兵庫頭より右之趣伊豆守へ差越たる趣賴宣卿御驚有て御嫡子宰相光貞卿へ御相談ありけれハ御詮儀に及はる迄もなく召捕て切腹被　仰付の外有間敷との玉ふ諸老臣詮儀まち〳〵也光貞卿ハ何度も切腹と被仰　賴宣卿御意には宰相何と見ても愼なる心なりとのたまひけるぞ也　賴宣卿彼者抔助け不置時は後の證人なけれは如何樣にもすかして召返してこそ申譯もあれとて伊豆守より內意の由ハ毛頭沙汰なしに可致由御意なり

扨兵庫頭へハ申上候處御承引なき段ハ御心得違なりいかにも尤に思召候より取來六千石其上御加増にて一万石被下置候間罷歸るへしと被　仰遣兵庫頭が曰く難有思召にて御座候得共堀部部佐左衛門か首拔見不申内は罷歸り諸人ふ面を合せ難しと御挨拶申上けれハ堀部ふ切腹被　仰付彼か願にまかせ首拔さしのぼせ一萬石の御墨附被下置從者各其軍役ふ行粧して紀州出立右故牧野兵庫頭長虎堀川殿歸るとひとしく洞の川といふ所へ押込められ其後正雪儀に付兵庫惡心無實之段も被仰開別儀無之候大略實說紀州古老の物語拔記す

一南陽語叢に云く　牧野兵庫頭は熊野御遂中にて破れたるわんほうな藤かつらにて纏ひ路傍に躊躇せしな顔かまへ眼目の光只者に有すと御覽しとめられ直に御召連に被成委細御尋ありしに果して牧野金彌か悴に相違なければ御滿悅被遊毎々器量之程御稱美ふかく遂に諸大夫に迄御取立被成候得共由井正雪一件に御疑かゝり無據御仕置被　仰付世に委細な記せし物あれは爰に錄せす治世ハ姦雄亂世の豪傑ともいふべき者ト評定所倉庫に闕所附立の帳面あり武器は甚夥々たり

一紀士雜談に云く　中川數右衛門（紀州御右筆）鐵砲之上手にて弟子取致候平塚三郎兵衛數右衛門弟子にて鐵砲のゆるし取成和州高取の植村右衛門殿へ二百石にて有付罷在候又浪人もの（名字那須）數右衛門弟子にて家來分になり數右衛門にかゝり居り申候處右平塚事自分の工夫を交へ今程は我流を立弟子取致候樣なる旨數右衛門傳聞大きに怒り候て手前之浪人に申付免狀取戾し來候へと申聞候故高取へ參り逢ひ被申候平塚申候は御腹立御咎め御尤至極に候我流と申にては無之候得共自分を寄取入申品有之候兎角參上候て御斷可申上候御免狀只今御取返し候ては一日も此地に立かたく候此段聞し召分られ候樣にと手をすかし候樣申候に付右浪人一先若山へ歸り申候折節數右衛門何やらん致居申候かふりあふのき何と許狀持參候哉と申候へは段々斷之上にて無餘儀先罷歸り候と一々物語可仕と致候所數右衛門短氣者にてわれめ付其方を遣に何の爲に候哉無甲斐仕合候由叱聲仕候浪人扨々不及是非相心得申候とて兎角をも不申其足にて直に高取へ參り平塚座敷へ出逢候處詞を掛切結ひ申候互に好働候内平塚悴出合父子にて浪人を返り討に切留申候御國御留守にて長門殿兵庫殿御入候平塚切腹之儀及延引其元浪人にてかゝり居申者之事に候間下手人何とそ御容免に品も有之樣にと右衛門佐殿より芦川實休方迄度々被申越候得共兵庫殿中々合點不被致いな事及異脚候江戸へ御伺に不及候事候自分參高取を蹈つぶし可申と例之荒言にて承引無之候其以後如何心得候哉平塚切腹仕候て事濟て何も滯も無之御威光と申候

一牧笛類叢に云く　牧野兵庫頭流罪之時迎さして高田喜八郎竹木茂兵衛的場源四郎同九左衛門さ一緒に被　仰付中途にて（原本一本共落字）向て休息之爲さて謀て山口御殿へ入たり高田喜八郎竹木茂兵衛源四郎は兵庫か駕の兩脇に引そふて御庭へ駕を舁入る九左衛門は警固の爲御門内に殘りぬ兵庫の駕際へ至るさき兼て牒し合せなれは喜八郎御椽へ飛上り書付を出して御意なりさいふ兵庫駕の中なから平服す日高郡李村へ流刑　仰付らるゝ旨高らかに云渡す其時兵庫御情なき御事に候さ言なから脇差をぬかんさする（時）茂兵衛すかさず鐺を返し脇差をもぎ取けり

一長澤伴雄云兵庫頭面相いかふも柔和にて心根飽迄剛强也强力にて唐銅の大火鉢を片手にて持扱ひたるとぞ又晝夜軍學に精心をこらし其比ハ關ヶ原大坂軍抔に場數武功之勇士未た殘り有りけるを毎夜招待して戰場得失之評論なとに心を盡されたりとぞ慶安二庚寅年十一月田邊へ流罪被　仰付安藤家へ御預けふ相成承應元年辰十月十日配所にて死去す

一兵庫頭傳記ふ長男新藏二男傳藏ハ日高郡本川村へ流罪三男太郎藤丸千代丸ハ同郡李村へ流罪せられたり藤丸元祿十二年卯二月圍を破番人李兵衛と云者を殺して大津まで立退けるを召捕同三月朔日切腹被　仰付なり檢使小笠原庄太夫なりと云々

牧野成義

牧野成義稱次郎兵衛、其先出於右馬允定成、曾祖曰、傳大夫某、住三河上加茂照山、東照公命輔西鄉彈正奉之、祖曰彌次兵衛成政、死於某役、父曰彌次兵衛成勝、成義大坂役屬近藤石見守有功後公召祿之、賜三百石、屢轉職增祿至五百石、　牧野系譜

家　譜

牧野次郎兵衛成義　牧野彌次兵衛成勝總領　生國三河

曾祖父傳大夫は牧野右馬允成定三代内匠頭信成次男村越伊豫守直成三代にして三州上加茂同國照山と申所城屋敷にて代々居住西鄉彈正馬寄にて罷在候然處　權現様ゟ彈正後見仕候様にと被仰付候其後三州牧野村之内に而御知行拜領仕候（高不知）其上彈正知行壹万石之内にて　上意を以四百石領地仕年月日不知甲州勢駿河へ相働候付　權現様駿河へ御發向之刻傳太夫城屋敷に御宿陣被遊候由申傳候

一祖父彌次兵衛成政父傳太夫病死後跡式相續仕如父時彈正後見仕被下置候御知行幷彈正方ゟ之知行共所務仕候甲州勢三河へ働之節西鄉彈正手にて加志滿村之内住人達原半兵衛と申柴之母衣武者と鎗合三州須瀨八丁之木繩手にて討死仕候　年齡不詳

一父彌次兵衛成勝父討死後出生仕候付右之城屋敷ハ持傳へ不申候へ共彈正方ゟ之知行無相違所務仕候

一年月日不知西鄉彈正所替之節後見之儀故可附參之處末々家來（一本作暇）之様にも罷（一本作來）可申哉と此段不快存候折節牧野右馬允好身故手前に引越心易罷在候様にと達而申候付總領次郎兵衛成義故彈正方に殘置其外之悴共召連右馬允方へ罷越候

權現様天下御一統之後御鷹野に出御之刻彌次兵衛儀者折々御目見に罷出　台德院様御代にも被爲召難有奉蒙上意候由申傳候

次郎兵衛成義父彌次兵衛彈正と殊之外念比に付罷出申儀難致其儘彈正方に罷在候得共連々斷を申舅戸田惣左衛門儀御旗本に罷出候付此者之知行所へ引込罷在其後大坂御陣之節浪人にて近藤石見

守手に而相働申候

一年月日不知

南龍院様江可被召出との御儀にて　御上洛之節伏見武田にて　御目見仕候處被　召出知行三百石被下大番組被　仰付元和五未年八月御入國御供にて紀州へ罷越後御供番御目付勢州兩役等相勤御加増貳百石被下都合五百石に被　仰付萬治三子年奉願隠居被　仰付總領左近右衛門へ爲家督知行五百石無相違被下置寛文六午年三月廿一日病死仕候（年齢不詳）

以下代々相續八代安之丞成貞百五拾石大御番に而元治元子年十一月隠居弟楠之丞成芳百五拾石無相違相續大御番たり

牧野五左衛門

牧野五左衛門敷知（生國三河牧野　舊記斷絶始祖其他不知）

家　譜

權現様岡崎御在城之節被　召出御徒被　仰付其後於駿河　南龍院様へ御人分ヶ之節右御人數内に而元和五未年御國替之節紀州へ御供仕明暦二申年九月八日病死仕候（于時七十三歳）

悴六太夫知忠新規被　召出御切米拾貳石御徒被　仰付已下代々相續七代恒右衛門善誘拾五石御徒目付に而文政六未年六月病死養子佐吉方英嗣く

牧野齋宮

家譜傳わらされば其詳なるを知りこのたし紀士雜談牧野齋宮とあれとも左之記に據れは或ハ牧齋は是となす哉齊佐は恐らく誤ならん二千石領せしにハ相違なしと雖子孫斷絶にも至りしか委細は知このくし唯記の存する分は揭く

駿河より御附屬姓名帳に　　二千石　　牧　齋

元和御切米假名寄帳に　　高二千石　　牧齊佐

紀士雜談に曰く　牧野齋宮紀州へ被召出二千石也內匠殿弟にて候今の朝比奈惣左衞門屋敷に居申候無双之よき男にゝ諸國に隱れなく　御上洛之時於伏見夕方馬上にゝ通り候へは扨もよき男哉定て紀州の齋宮にて可有之と申候方々より人々出見物致候其後江戸へ御使に參候時於御城御目見仕候節齊宮斗兼て被及聞召候間面を上させ候樣にと　上意にて御覽被遊候由同時代望月權兵衞隨分よき男にて齊宮とならへ候ては少し下卑

丸井三大夫

丸井三大夫吉重　初苗字恒屋

家　譜

父三大夫ハ先祖ゟ代々恒屋之城主にて恒屋と名乘天正年中之兵亂に彼地致落去一生主人を取申間敷との存念にて剃髮仕備前國岡山に立退罷在當國主宇喜多中納言ゟ奉公を數度被進候得共斷を相達候へ者左候はゝ子共之內可被呼出由念比ふ申聞候付兄小十郎と申者は奉公仕らせ申候小十郎無程病死忰無之跡式絶へ申候

吉重始恒屋と名乘豐前小倉浪人に而罷在高麗陣之砌罷越歸陣以後三州苅屋之城主水野日向守に在付其節日向守より苗字を替へ候様にと申聞候付丸井と相改大坂御陣には日向守供いたし相働申候日向守備後福山在城之節同家を立退浪人仕其後紀州へ罷越元和九亥年五月　南龍院様へ被　召出知行三百石被下置同年七月　御上洛に付伏見へ御供仕候尤何御役相勤候哉難相分寛永十九壬午年八月十七日病死仕候

總領三大夫（實名不知）父家督知行貳百石被下大御番被仰付以下代々相續五代文右衛門政農貳百五拾石根來頭に而寛政十一未年七月病死總領主膳政章家残律く

一祖公外記に曰く　（義直卿と御同道に而日光へ御供奉被遊御歸之節御本陣之地へ御綱を入候處鯉鮒夥敷取候付　義直卿へ可被進様にと被仰其御使丸井三大夫に被　仰付三大夫は甚麁相人にて池魚を取候儘之裸身に而魚を手桶に入御旅館へ持行候折節　義直卿御風呂に被爲召候御側之面々見咎何者哉と叱候得ば　紀伊殿之御使丸井三大夫にて候卒爾致間敷と答其分に而相濟候）

的場九左衛門

的場氏之系、出的戸田宿禰、其先有的六郎保詮者、奉仕南朝、爲紀勢兩國七莊地頭、與楠正行、共死於四條繩手、其拜辭於吉野行宮、　帝賜粟田口家則佩刀以勵其志、其後有源左衛門包吉者、仕北條氏康、住駿河駿東郡的場村、因氏的場後復歸紀伊

的場九左衛門爲十人組嘗、從公登城、路逢尾公、避入立談、九左衛門、兩手掩耳進侍、人或笑、爲好異、九左衛門曰、吾兄弟雖親、不保無異心予故不離左右耳、後數年公謂爲使番謂曰、思擢汝久矣、以汝性進故

延至今耳、人皆爲掩耳立侍之賞、　紀士雜談

牧野長虎之被召赴配所、九左衛門奉命迎之路、導入山口驛別館傳命、其聲浪然四徹、長虎從者在門外聞之將蘭入、衛卒閉門防之九左衛門叱曰、何爲閉門、宜速開、開則從者將爭入、九左衛門、瞋眼撫刀曰、兵庫有罪嚴命配之、汝陪臣欲敢抗之、不遜甚矣、有敢寸歩踰閾者、將斬首斬之矣、衆辟易莫敢犯者、　同上

家　譜

的場九左衛門正勝　處自人宿稱末孫、的左京亮保輝八代的源左衛門包吉總領的場源内大夫昌清總領（實二男）的場源四郎昌長總領（實二男）源四郎勝吉總領　生國紀伊

遠祖的左京亮保輝　南帝に奉仕保輝孫紀六左衛門保詮初的六郎　南帝奉仕貞和五己丑年正月楠正行と吉野皇居へ參候節粟田口家則之脇差頂戴仕同年同月於四條縄手正行と共に戰死仕候右脇差于今所持仕候保輝八代源左衛門包吉畠山氏幕下其後北條氏康に随身仕武功御座候付平姓并三鱗形之紋を賜り家の紋に仕候駿河國的場村に暫住居仕候付的氏を的場と改申候後紀州中之島村之舊里に歸病死仕候

一祖父源四郎昌長儀紀州所々にて顯武功本願寺門跡へも味方仕候其後本願寺顯如上人天正十二甲申年八月紀州退去之節信國之刀并黃金時服等賜り候右信國之刀于今所持仕罷在候同年　權現樣秀吉と尾州長久手御合戰之節御味方仕候樣御書頂戴仕軍令を詞り泉州へ出張り中村孫平次と合戰仕候右　權現樣へ御味方仕候儀秀吉憤り可召捕との儀に付大和大納言秀長之家臣桑山修理方に掛込申候秀吉朝鮮征伐之節ハ桑山に屬し朝鮮に罷越相働朝鮮居城之圖并分捕之品所持仕罷在候淺野紀伊守殿紀州入國之節可被召抱と西山伊豫致以被申越候得共辭退仕候付長男源八被呼出

知行五百石賜り藝州へ附罷越候

一父源四郎勝吉儀は次男にて本家相續仕其後寛永元甲子年（月日不知）被召出貳百石御扶（一本助）持被下置山本行相勤候由申傳に御座候得共舊記留欠にて年月等も相（一本分り）知れ不申候

一遠祖之内源左衞門包吉次男的場重右衞門源内大夫昌満長男的場源次郎昌行源四郎昌長三男的場源四郎重長右三人夫々被　召出當時分家に而相續仕罷在候

一正保四丁亥年（月日不知）被　召出十人組被　仰付御切米貳拾石被下置候

一萬治三庚子年八月廿九日十人組頭被　仰付候

一延寶三乙卯年八月十三日御小姓組被　仰付御加増被下置八拾石被　仰付候

一貞享元甲子年二月廿八日久々相勤候付中村四郎左衞門跡御留守居物頭被　仰付候

一同年十二月廿四日病死仕候處嗣子無之嫡家斷絶仕候（年齢不詳）

分家

的場源八包好（源四郎勝吉次男 初源七郎 生國紀伊）

一萬治三庚子年六月廿七日新規被　召出十人組被　仰付御切米廿石三人扶持被下置候

一元祿四辛未年八月廿四日御留守居番被　仰付候

一享保四己亥年十月九日病死仕候（于時九十一歳）

以下代々分家にて相續源八包好より四代九左衞門包亨小十人頭格御納戸頭勤六拾石にて文化十癸酉年七月隱居總領源四郎へ家督四拾石被下寄合被仰付たり

的場源四郎事跡（一本及九左衛門）

許供養は許數三十三取候人々執行候事と申を的場源四郎聞付我等是迄に十四五取候へは今廿程取候而供養申度と思立夫より宮郷邊麥畑之中に隱根來者之往來を見付次第鐵砲にて打取候付不屆之奴速打殺可申と剛氣之者共捕に罷候へ共其逃走事馬にても難追付其上畔に隱事上手にて傍迄行ても得見付不申故小雲雀と異名を付候由依之源四郎一挺之鐵砲にて根來二万之僧俗他行を恐候折柄根來赤井坊藤白被參候節中間六七人召連馬に乘宮郷を通候時源四郎を見付鐵砲を打度は勝手に可打迚雨肌脱に成候付源四郎も其勇氣を感許候間可通と申候依之根來杉坊泉鐵坊より其後禮狀を差越候扨三十六日目に許數（都合〔一本ナシ〕）三十三に相成候付紀三井寺にて致供養候又荒木攝州へ加勢之節紀州雜賀鐵砲千挺之大將に横庄司蟹右衛門中村右衛門九郎的場源四郎三人攝州花隈に籠池田勝三郎と合戰有之候其後源四郎其他紀州一揆張本之者共を成敗可致旨秀吉公より被仰付候得共源四郎は桑山修理大夫へ賴込遠國へ隱候付一命助候其後桑山方大和にて三百石宛行無役にて安樂に暮候其比歟京都に而歌舞妓女を妻に娶り途中手を引合十文字節を爲持異風なる姿にて東山邊を見物之處池田三左衛門小姓衆是を見受源四郎を芝居懸之者と存右之女へ劇言を申候付源四郎は右往左往に退候へ共強て女に劇候故無據十文字之鞘を脱捕者は紀州に隱無的場源四郎にて候御相手に可成と申候へば各迷惑之所へ一老人來色々詫言にて相濟候

越前秀康公より源四郎を千石に抱度間肝煎候樣京都に而眞鍋五郎右衛門へ被仰聞候付早速懸合候へ共千石壹万石にても先主之恩を捨當時子之代に暇を乞候事は得不仕候と斷候付人々其忠誠を感候其後病氣に付堺之安立軒へ行五六十日致藥用候得共驗無之候付京都之醫者にも見せ候樣安立申候付致上京驢庵玄朔に見せ候處安立之見立我等も同意にて候間先々安立之藥を用候樣申に付余醫者共に斷を受彼方是方と馳廻命を惜樣に相見候ては心外之至との趣を申遣堺迄戻候節天下茶屋の前にて乘物より血流出候付附添者共驚戸を開見に致切腹相果候（右祖公外記附錄）

一安藤帶刀か子息飛驒守病死之節　按に寬永十三子年九月なり　賴宣卿は粉川に御座被遊けるが飛驒守が病氣以之外大切のよし注進に付早馬にて馳付させ給ふ粉河より和歌山迄道程凡六里也餘り御馬早く候故御供つゝかす的場源四郎唯一人のみ御供仕りける扨飛驒守か玄關前にて御馬より御下り被遊候に口取者なければ源四郎御馬の口を取る源四郎も馬も共に血の泡を吐けり賴宣卿御覽被遊玄關を御上り被遊候節御刀に御手を懸させ給ひ源四郎をはたと御にらみ被遊只今の樣成供之仕樣か有ものかと大に御呵被遊御上被遊候處最早飛驒守は落入たる由也源四郎おもひけるは如何なる御咎にてケ樣に被仰けるやらん此上如何なるめに逢ふべきと案し煩居たりしか其後何事もなかりしと也

或説に曰く　其後源四郎に呉服を被下置と云總してケ樣に大勢力を操し後最早仕濟したりと心安堵する時は必死するもの故源四郎に別而あやまりはあらされ共態と如此被仰けるとも也（明君感話）

按に　的場家譜に憑るに源四郎と稱する者三名あり而して別記皆實名を不記れは何等か誰々の事跡なるやを識別し難きの感あり依 、家系及時代等に考へ左に略譜を揭け見易からしむ

的場源内大夫昌清
- 總領　源次郎昌行　御家へ被召出分家
- 二男　源四郎昌長　御家へ不仕　越前公ノ召ニ不應　首供養チナス　桑山修理大夫ニ依ル天下茶屋前ニテ興ニ割腹　朝鮮征伐ニ從軍　京都ニテ池田三右衛門家臣ヲ驚ス
  - 長男　源八
  - 二男　源四郎勝吉　本家相續　寛永元子年被召出
    - 總領　九左衛門正勝　正保四年十人組ニ被召出　嗣子ナク家斷絶
    - 三男　源八包好　新規被召出分家
- 三男　源四郎重長　御家へ被召出分家

（此系譜原本ニナシ）

一的場九左衛門十人組相勤候節支配方之申渡を不聞入意地強く候御咎にて閉門被　仰付候

一説に與頭より御番割を廻候處大儀なる勤に打續候を腹立我姓名之下へゆるせと認廻し候故とも申候依之毎日新内土橋邊迄鐵畝魚を釣に出候此邊は兵庫頭ト屋敷へ近候故百姓共見咎候へ共一切不聞入釣居候或日兵庫頭涼所之亭より見受候付呼寄共許當時閉門之處殺生に出候事甚不愼之儀と申候へは成程御尤之御不審に候へとも久々引籠り退屈仕候故此上は早討首になる共切腹なり共埒明候樣御取計可給候此儀を願度存念にて御舘へ推參可仕を憚り此邊へ罷出候はゝ定て得貴意可申と存毎日是迄罷出候と申候得者兵庫頭聞屆尤之事迚即日申上直に御免被遊翌日より致出勤候（祖公外記）

一頼宣卿の頃ひたさ直訴の者有ける程に向後停止之旨法度を出されたり或時鷹野に出給ひし所に侍さ相見へたるもの訴状を竹に挾み直訴いたしける　大納言殿見給ひかの者覺悟極めたる體なるか見て參るへしさて近習の者を遣わさる御側衆の内にて壹人走り行何ものかさ見けれは的場九左衞門さいふ馬廻りの侍なり覺悟極候かさの御意の由なりさ申せは成程覺悟仕候なりさて經帷子を下に着したり其段申上けれは　頼宣卿聞し召て直訴法度を承知致し罷出るからは覺悟なくては叶はぬ事なり能々達すへき手筋なく默止難き事さ見へたり願の品は知られさも何事にてもあれ赦免有さ御申有けり願を是非さ申立る程の覺悟を究めすしていふは愚なる事なり覺悟究むる事は成かたきものなれはこそ其後直訴ゝ者はなかりしさなり

一右の的場九左衞門後には徒頭を勤たり酉の年大火事の節牛藏御門の内にて尾張殿御機嫌何濟て御歸館の所に紀伊殿御出合あり御立なから御物語あり尾張殿は火事羽織立付にて御出あり紀伊殿は羅紗の御小袖を召て立付をはき其上に麻の上下を召れけり尾張殿裝束はいかにさ仰けれは下に着いたし候さ御返答ありしさなり御物語之内に双方之御家來はら〱さ立退て下座いたす所に九左衞門一人尾張殿の御後の方に御側近くうつくまり居たり御立別れの時其方は何さいふそさ御尋ある時的場九左衞門さ申上る紀伊殿何の御言葉もなかりし其後尾張殿紀州え入せらるゝ度々に的場九左衞門は息才に居申候か健氣ものさ御申一本有(或)時は被　召出御逢の時もありけり扨紀伊殿にも紅葉山の下刎橋の御門まで御越あり御目附衆迄御機嫌何ひに是迄御出候儀御入られ度誰そ參られよさひたさ被　仰けれさも與力同心も御門の外に居なから彼是さ周章る計りにて闘入す然る處に彼の九左衞門駈出し公儀の同心一人中に引提紀伊殿の前に連來る是に依て與力同心是はさ驚きける騷き申事にてはなし我等是まて御機嫌何ひに參りし段御目付衆中まて申達候樣にさ仰置れ歸り給ふ引立られし同心は殊の外仰天いたしけるか此御詞にて安堵致しけるよし九左衞門心早く力量も有けるよしなり紀州の古老物語なり(以上明良洪範)

一明暦之大火ふ　御城御類燒あり殿中へ集たる面々あはてさはく中に的場九左門例の落つきにてケ樣の騷動なる中には小便をして氣をおさし付たるかよいさて御椽頬の際に立寄ふみはたかりてたんださやる大膽面々あきれぬものはなかりける(南陽語叢)

一的場一八さいふ人　強力の名あり江戸へ詰に參る時其母いましめて曰汝に力ありさいふさも汝にまさるもの世多かるへしよく心得よさて手拭一筋取出し是をれち切可申哉さいふ木綿糸にてこまかにさしたるものを四つに疊みれち切たり道中にて尾州の人足も力ある人なりけるに登り來たるさ聞て一八自分の駕籠に此腕れちらせ可申さ書付たり尾州の人通り掛りその腕れち可申さて駕籠の側へよる内より腕をさし出すつかんてれちる腕の皮むくれ鼠の赤子の如くなりたりされ共

腕はまからさりしこそ同人江戸の紀尾伊坂にて車を推し力を試みしことありといふ（乙言私記）

按するに　的場九左衞門家に一八と稱する者なし別家之內に而もあらんか武頭要人大力あり江戸詰出立之時其母戒めて爐の火箸をかんぜよりにし之を戻し見るへしと示せし事同人傳にあり或は是と傳へ誤りしか是非知るへからず暫く存して後の考をまつ

一又按するに（一本ニ）淺井駒之助玄香か長保寺夢物語と題し國政を諷諫したる偶言に長保寺參拜之節夢に的場源四郎之亡靈　龍祖之御使也とて顯れ出問答せしよしを綴れり玄香譜に寛文十二子年的場源四郎同前之長保寺へ折々罷越御法事有之節も彼地にて肝煎可申旨被　仰付候とあれば源四郎長保寺へ勤務せしならん故に源四郎を引くものか又若山の古老神野嘉功（元九兵衞と稱す時に九十六歲）より源四郎殉死し御廟の側に石碑を建させられしと老生（嘉功自稱）參拜もせしが別に石碑あるを覺へず此事近頃聞得し也と申越ぬそは源四郎勝吉なるか家譜之傳記留欠にて死歿年月日不明とあり將た源四郎重長なるか重長被召出分家にて相續とあれども家譜今は傳わらず源四郎眞率君を慕ふの切或は其事ありしやははかりかたきも殉死は　龍祖嘗て天下に率先嚴禁あらせられし處爲に深く隱秘を計りしものか玄香は其當時の人特に源四郎を目さしたる亦ゆへなきにもあらさるへし兎に角古老の傳へなれば暫く記して後の識者を待つ夢物語之事は玄香か傳にあり

一明治廿八年四月　我公和歌山に臨ませらる當代的場源三郎（德義學校教員和歌山市鍋尾町に住す）傳來之武器古書類左之數点を電覽に供せり內九左衞門正勝か帶せし大刀は實に非常可驚ものにて其膂力大兵想ひ遣るへく希代之珍刀により其圖を摸さし此末に揭く

粟田口家則作刀　一　先祖的六郎貞和五年於吉野皇居　南帝ヨリ拜賜

信國作刀　一　源四郎昌長天正十二年申八月本願寺顯如上人ヨリ付與

無銘刀　一

大刀　一

神君御書翰　一軸

蓮如上人自筆名號　一軸

達如上人自筆名號　一軸

顯如上人自筆金米借用証文　一軸

朝鮮城ノ圖　一枚　源四郎昌長朝鮮ニ於テ自ラ圖スル處署名アリ

銅金色桃形風鎮　三

銅蟹形同斷　一

化石

右三品ハ蓋シ朝鮮分捕ノモノナルヘシ

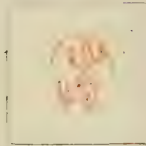
本願寺ヨリ之來翰　一枚

鐵鍔

一本ニ覆輪

フクリ・銅

太刀 惣丈四尺八寸
柄 壱尺貳寸
鞘 三尺六寸
但烏帽子タヽキ
身ノ長三尺五寸
部ヲ漆塗リ
中ゴ 壱尺貳寸五步
奉納太刀一振
名草〇郡志摩社
〇 的場九左衛門尉平正勝

昭和六年八月廿一日印刷
昭和六年八月卅一日發行

南紀德川史 自第四十卷 至第四十九卷

No 365

第五回配本

編輯者　堀内信

和歌山市宇須町三百七十八番地
發行者　山崎順平

和歌山市新堀四丁目三番地
印刷者　福本芳太郎

和歌山市新堀四丁目三番地
印刷所　福本印刷所

和歌山市宇須町三百七十八番地
發行所　南紀德川史刊行會
振替口座大阪四五八五二番